

Symantec NetBackup™ コマ ンドリファレンスガイド

UNIX、Windows および Linux

リリース 7.6



Symantec NetBackup™ コマンドリファレンスガイド

このマニュアルで説明するソフトウェアは、使用許諾契約に基づいて提供され、その内容に同意する場合にのみ使用することができます。

マニュアル バージョン: 7.6

法的通知と登録商標

Copyright © 2013 Symantec Corporation. All rights reserved.

Symantec および **Symantec** ロゴ は、**Symantec Corporation** または同社の米国およびその他の国における関連会社の商標または登録商標です。その他の会社名、製品名は各社の登録商標または商標です。

このシマンテック製品には、サードパーティ(「サードパーティプログラム」)の所有物であることを示す必要があるサードパーティソフトウェアが含まれている場合があります。サードパーティプログラムの一部は、オープンソースまたはフリーソフトウェアライセンスで提供されます。本ソフトウェアに含まれる本使用許諾契約は、オープンソースのフリーソフトウェアライセンスでお客様が有する権利または義務は変更されないものとします。サードパーティプログラムについて詳しくは、この文書のサードパーティの商標登録の付属資料、またはこのシマンテック製品に含まれる **TRIP ReadMe File** を参照してください。

本書に記載する製品は、使用、コピー、頒布、逆コンパイルおよびリバース・エンジニアリングを制限するライセンスに基づいて頒布されています。Symantec Corporation からの書面による許可なく本書を複製することはできません。

Symantec Corporationが提供する技術文書はSymantec Corporationの著作物であり、Symantec Corporationが保有するものです。保証の免責:技術文書は現状有姿のまま提供され、Symantec Corporationはその正確性や使用について何ら保証いたしません。技術文書またはこれに記載される情報はお客様の責任にてご使用ください。本書には、技術的な誤りやその他不正確な点を含んでいる可能性があります。Symantecは事前の通知なく本書を変更する権利を留保します。

ライセンス対象ソフトウェアおよび資料は、FAR 12.212の規定によって商業用コンピュータソフトウェアとみなされ、場合に応じて、FAR 52.227-19「Commercial Computer Licensed Software - Restricted Rights」、DFARS 227.7202「Rights in Commercial Computer Licensed Software or Commercial Computer Licensed Software Documentation」、その後継規制の規定により制限された権利の対象となります。

弊社製品に関して、当資料で明示的に禁止、あるいは否定されていない利用形態およびシステム構成などについて、これを包括的かつ暗黙的に保証するものではありません。また、弊社製品が稼動するシステムの整合性や処理性能に関しても、これを暗黙的に保証するものではありません。

これらの保証がない状況で、弊社製品の導入、稼動、展開した結果として直接的、あるいは間接的に発生した損害等についてこれが補償されることはありません。製品の導入、稼動、展開にあたっては、お客様の利用目的に合致することを事前に十分に検証および確認いただく前提で、計画および準備をお願いします。

目次

第 1 章	概要	8
	NetBackup コマンドについて	8
	複数階層のメニューの操作	9
	NetBackup のコマンドの表記規則	9
	NetBackup Media Manager コマンドの注意事項	10
付録 A	NetBackup コマンド	11
	acsd	19
	add_media_server_on_clients	21
	backupdbtrace	22
	backuptrace	25
	bmrc	27
	bmconfig	30
	bmrepadm	36
	bmrep	39
	bmrs	42
	bmrsrtadm	45
	bp	46
	bpadm	49
	bparchive	50
	bpbackup	56
	bpbackupdb	64
	bpcatarc	65
	bpcatlist	66
	bpcatres	69
	bpcatrm	70
	bpcd	71
	bpchangeprimary	73
	bpclient	77
	bpclimagelist	84
	bpclntcmd	87
	bpclusterutil	90
	bpcompatd	94
	bpconfig	97
	bpdbjobs	107

bpdbm	119
bpdgclone	122
bpdown	124
bpduplicate	125
bperror	134
bpexpdate	143
bpfis	150
bpgetconfig	152
bpgetdebuglog	157
bpimage	158
bpimagelist	163
bpimmedia	172
bpimport	184
bpinst	192
bpkeyfile	199
bpkeyutil	201
bplabel	203
bplist	206
bpmedia	214
bpmedialist	218
bpminlicense	231
bpnbat	234
bpnbaz	242
bpfficorr	257
bpplcatdrinfo	260
bpplclients	264
bppldelete	272
bpplinclude	274
bpplinfo	281
bppllist	296
bpplsched	301
bpplschedrep	318
bpolicynew	327
bpps	336
bpps	340
bprd	341
bprecover	343
bprestore	346
bpschedule	361
bpschedulerep	369
bpsetconfig	376
bpstsinfo	378
bpstuadd	384

bpstudel	394
bpstulist	397
bpsturep	404
bptestbpcd	413
bptestnetconn	417
bptpcinfo	421
bpup	426
bpverify	427
cat_convert	435
cat_export	441
cat_import	444
configurePorts	446
create_nbdb	448
duplicatetrace	451
importtrace	455
jbpSA	459
jnbSA	462
ltid	465
nbauditreport	467
nbcatsync	472
NBCC	475
NBCCR	480
nbcertupdater	482
nbcplogs	486
nbdb_admin	490
nbdb_backup	494
nbdb_move	496
nbdb_ping	498
nbdb_restore	499
nbdb_unload	501
nbdbms_start_server	504
nbdbms_start_stop	505
nbdc	506
nbdecommission	509
nbdelete	511
nbdeployutil	515
nbdevconfig	521
nbdevquery	533
nbdiscover	539
nbdna	543
nbemm	547
nbemmcmd	548
nbevingest	565

nbexecute	571
nbfindfile	573
nbfirescan	577
nbftadm	578
nbftconfig	579
nbgetconfig	589
nbhba	592
nbholdutil	595
nbindexutil	598
nbjm	603
nbkmsutil	604
nboraadm	608
nbpem	612
nbpemreq	614
nbperfchk	618
nbplupgrade	622
nbrb	625
nbrbutil	626
nbgopsc	631
nbreplicate	633
nbrestorevm	636
nbseccmd	647
nbsetconfig	649
nbsnapimport	651
nbsnapreplicate	653
nbstl	655
nbstlutil	663
nbsu	672
nbsvgrp	678
resilient_clients	681
restoretrace	682
stopltid	684
tl4d	685
tl8d	687
tl8cd	691
tldd	695
tlddcd	699
tlhd	703
tlhcd	707
tlmd	711
tpautoconf	714
tpclean	717
tpconfig	720

tpext	737
tpreq	738
tpunmount	741
verifytrace	743
vltadm	747
vltcontainers	749
vlteject	754
vltinject	758
vloffsitemedia	760
vltopmenu	764
vltrun	766
vmadd	771
vmadm	774
vmchange	776
vmcheckxxx	783
vmd	785
vmdelete	788
vmoprcmd	790
vmphyinv	795
vmpool	799
vmquery	802
vmrule	807
vmupdate	810
vnetd	813
vxlogcfg	814
vxlogmgr	822
vxlogview	827
W2KOption	835
索引	838

概要

この章では以下の項目について説明しています。

- [NetBackup コマンドについて](#)
- [複数階層のメニューの操作](#)
- [NetBackup のコマンドの表記規則](#)
- [NetBackup Media Manager コマンドの注意事項](#)

NetBackup コマンドについて

このマニュアルは **NetBackup** のマニュアルページのコマンドをすべて含んでいます。**NetBackup** ライブラリの複数のマニュアルを使用することなく、コマンドの説明を印刷された形で簡単に参照することができます。

このマニュアルは **UNIX** システムに加え、**Windows** システムで実行するコマンドの詳細な情報を含んでいます。**UNIX** システムにのみ関連する情報や **Windows** システムにのみ関連する情報についてはそれぞれ注意書きされています。

各コマンドには、コマンドの主要な機能の簡単な説明、使用方法、および使用方法に表示されている各オプションの説明が記載されています。コマンドによっては、注意、戻り値、例等も含んでいます。

このマニュアルでは、**NetBackup Enterprise Server** および **NetBackup Server** のコマンドについて説明します。多くの場合、コマンドは両方の **NetBackup** 製品で使用できます。ただし、コマンドの部分またはオプションが、一方の製品 (**NetBackup Enterprise Server** など) だけに適用される場合があります。この場合、1 つの **NetBackup** 製品だけに適用される情報であることを示す注意を、該当する情報の説明に示します。

複数階層のメニューの操作

複数階層のメニューを操作する場合、不等号の大なり記号 (>) を使用して連続した操作を示します。次に、> を使用して、一連のメニューでの選択を 1 つの手順に簡略化した例を示します。

```
[スタート]>[プログラム]>[Symantec NetBackup]>[NetBackup Administration Console]
```

これに対応する操作を複数の手順で説明した場合、次のようになります。

- 1 タスクバーの[スタート]をクリックします。
- 2 カーソルを[プログラム]上に移動します。
- 3 カーソルを右に移動して、[Symantec NetBackup]を選択します。
- 4 カーソルを右に移動します。[NetBackup Administration Console]を選択して、クリックします。

NetBackup のコマンドの表記規則

NetBackup に固有のコマンドの説明では、次の表記規則を使用します。

次のコマンドをコマンドプロンプトで実行して、結果を確認してください。

- コマンドラインに `-help (-h)` オプションだけを指定すると、コマンドラインの使用法を示すメッセージが出力されます。次に例を示します。

```
bpclient -help
```

- 角カッコ [] 中のコマンドラインの要素は、必要に応じて指定します。
- 波カッコ { } は、カッコ内のオプションどうしの関連を示します。たとえば、{opt1 [opt2 ... optn]} は、コマンドに opt1 が含まれる場合、このコマンドには opt2 ... optn のオプションが含まれる場合があることを意味します。
- 垂直バー (またはパイプ) (|) は、ユーザーが選択可能な引数の選択肢を示します。たとえば、コマンドが次のような形式である場合、arg1 または arg2 のどちらかを指定します (ただし、両方を指定することはできません)。

```
command [ arg1 | arg2 ]
```

- 斜体は、ユーザー指定による変数を示します。たとえば、次の例では、ユーザーは、`policy`、`schedule` および `filename` を指定します。

```
bpbackup -p policy -s schedule filename
```

- 省略記号 (...) は、前述のパラメータを繰り返すことができることを示します。たとえば、次のようなコマンドがあるとします。

```
bpbackup [-S master_server [,master_server,...]] filename
```

この場合、`-s` オプションに対し、最初のマスターサーバー名は必須です。その後ろに、カンマで区切ってマスターサーバー名を追加することができ、最後にファイル名を付加します。たとえば、次のようになります。

```
bpbackup -S mars,coyote,shark,minnow memofile.doc
```

NetBackup Media Manager コマンドの注意事項

さらに、**Media Manager** はデバイス管理のために使われる次のコマンドのセットをサポートします。**NetBackup Device Manager** サービス (ltid) はこれらのコマンドを必要に応じて開始するか、または停止します。

- `tpreq` および `tpunmount` は、構成されているドライブに対するテープのマウントおよびマウント解除を要求するためのユーザーコマンドです。
- `tpautoconf`、`tpclean`、`tpconfig` および `vmopr cmd` は、デバイス管理用の管理コマンドです。
- `vmadd`、`vmchange`、`vmcheckxxx`、`vmdelete`、`vm pool`、`vmquery`、`vmrule` および `vmupdate` は、メディア管理用の管理コマンドです。

NetBackup コマンド

この付録では以下の項目について説明しています。

- [acsd](#)
- [add_media_server_on_clients](#)
- [backupdbtrace](#)
- [backuptrace](#)
- [bmrc](#)
- [bmrconfig](#)
- [bmrepadm](#)
- [bmrprep](#)
- [bmrs](#)
- [bmsrtadm](#)
- [bp](#)
- [bpadm](#)
- [bparchive](#)
- [bpbackup](#)
- [bpbackupdb](#)
- [bpcatarc](#)
- [bpcatlist](#)
- [bpcatres](#)

- bpcatrm
- bpcd
- bpchangeprimary
- bpclient
- bpclimagelist
- bplntcmd
- bpclusterutil
- bpcompatd
- bpconfig
- bpdjobs
- bpdbm
- bpdgclone
- bpdwn
- bpduplicate
- bperror
- bpexpdate
- bpfis
- bpgetconfig
- bpgetdebuglog
- bpimage
- bpimagelist
- bpimmedia
- bpimport
- bpinst
- bpkeyfile
- bpkeyutil
- bplabel

- `bplist`
- `bpmedia`
- `bpmedialist`
- `bpminlicense`
- `bpnbat`
- `bpnbaz`
- `bpfficorr`
- `bpplcatdrinfo`
- `bpplclients`
- `bppldelete`
- `bpplinclude`
- `bpplinfo`
- `bppllist`
- `bpplsched`
- `bpplschedrep`
- `bppolicynew`
- `bpps`
- `bpps`
- `bprd`
- `bprecover`
- `bprestore`
- `bpschedule`
- `bpschedulerep`
- `bpsetconfig`
- `bpstsinfo`
- `bpstuadd`
- `bpstudel`

- `bpstulist`
- `bpsturep`
- `bptestbpcd`
- `bptestnetconn`
- `btpcinfo`
- `bpup`
- `bpverify`
- `cat_convert`
- `cat_export`
- `cat_import`
- `configurePorts`
- `create_nbdb`
- `duplicatetrace`
- `importtrace`
- `jbpSA`
- `jnbSA`
- `ltid`
- `nbauditreport`
- `nbcatsync`
- `NBCC`
- `NBCCR`
- `nbcertupdater`
- `nbclogs`
- `nbdb_admin`
- `nbdb_backup`
- `nbdb_move`
- `nbdb_ping`

- `nbdb_restore`
- `nbdb_unload`
- `nbdbms_start_server`
- `nbdbms_start_stop`
- `nbdc`
- `nbdecommission`
- `nbdelete`
- `nbdeployutil`
- `nbdevconfig`
- `nbdevquery`
- `nbdiscovers`
- `nbdna`
- `nbemm`
- `nbemmcmd`
- `nbevingest`
- `nbexecute`
- `nbfindfile`
- `nbfirescan`
- `nbftadm`
- `nbftconfig`
- `nbgetconfig`
- `nbhba`
- `nbholdutil`
- `nbindexutil`
- `nbjm`
- `nbkmsutil`
- `nboraadm`

- nbpem
- nbpemreq
- nbperfchk
- nbplupgrade
- nbrb
- nbrbutil
- nbregopsc
- nbreplicate
- nbrestorevm
- nbseccmd
- nbsetconfig
- nbsnapimport
- nbsnapreplicate
- nbstl
- nbstlutil
- nbsu
- nbsvgrp
- resilient_clients
- restoretrace
- stopltid
- tl4d
- tl8d
- tl8cd
- tldd
- tldcd
- tlhd
- tlhcd

- `tlmd`
- `tpautoconf`
- `tpclean`
- `tpconfig`
- `tpext`
- `tpreq`
- `tpunmount`
- `verifytrace`
- `vtadm`
- `vltcontainers`
- `vlteject`
- `vltinject`
- `vloffsitemedia`
- `vltopmenu`
- `vltrun`
- `vmadd`
- `vmadm`
- `vmchange`
- `vmcheckxxx`
- `vmd`
- `vmdelete`
- `vmoprcmd`
- `vmphyinv`
- `vmpool`
- `vmquery`
- `vmrule`
- `vmupdate`

- [vnetd](#)
- [vxlogcfg](#)
- [vxlogmgr](#)
- [vxlogview](#)
- [W2KOption](#)

acsd

acsd – 自動カートリッジシステム (ACS) デーモン (UNIX) またはプロセス (Windows)

概要

acsd [-v]
UNIX システムでは、このコマンドのディレクトリパスは /usr/opensv/volmgr/bin/ です。
Windows システムでは、このコマンドのディレクトリパスは <install_path>%Volmgr%bin% です。

機能説明

acsd は Media Manager と通信し、これによって、自動カートリッジシステム (ACS) で制御されているテープのマウントおよびマウント解除が自動的に実行されます。管理コンソールの [メディアおよびデバイスの管理 (Media and Device Management)] に ACS ロボット内のドライブが表示され、ltid NetBackup Device Manager デーモンまたはサービス (Windows) によって acsd が実行されます。ltid を停止すると、acsd が停止されます。

UNIX システムシステムでは、ltid とは関係なく acsd を起動または停止するには、/usr/opensv/volmgr/bin/vmps コマンドまたはサーバーの ps コマンドを実行することによって、acsd のプロセス ID を識別します。その後、次のコマンドを入力します。

```
kill acsd_pid  
/usr/opensv/volmgr/bin/acsd [-v] &
```

acsd の処理は、ACS ストレージサーバーインターフェースプロセス (acsssi) に要求を送信することによって実行されます。ACS を制御するサーバーとの通信が行われます。

Windows システムでは、acsd は、ACS を制御するサーバーと通信する STK LibAttach サービスに要求を送信します。

接続が確立されると、acsd によって ACS ロボットが稼働状態になり、テープのマウントおよびマウント解除が実行可能になります。接続を確立できない場合、または ACS でエラーが発生した場合、acsd によってロボットが停止状態になります。ロボットが停止している間も、acsd は継続して実行されます。問題が解消されると、ロボットは稼働状態に戻ります。

Media Manager で ACS 番号、LSM 番号、PANEL 番号および DRIVE 番号を使用して、ドライブのアドレス指定および定義を行います。

ACS ロボットのドライブクリーニングは、ACS ライブラリソフトウェアを使用して構成します。クリーニングボリュームを Media Manager を使用して定義することはできません。また、

tpclean コマンドを実行して、ACS ロボットに制御されているドライブに対するクリーニング操作を行うこともできません。

UNIX システムでは、acsd のインターネットサービスポート番号が /etc/services に含まれている必要があります。NIS (ネットワーク情報サービス) を使用する場合、そのホストの /etc/services ファイル内のエントリを、サービス用のマスター NIS サーバーデータベース内に挿入します。この services ファイルで使用するサービスポート番号を上書きするには、/usr/opensv/volmgr/database/ports/acsd ファイルの内容を acsd のサービスポート番号を示す 1 行にして作成します。デフォルトのサービスポート番号は 13702 です。

Windows システムでは、acsd のインターネットサービスポート番号が %SystemRoot%\system32\drivers\etc\services に含まれている必要があります。この services ファイルで使用するサービスポート番号を上書きするには、install_path\Volmgr\database\ports\acsd ファイルの内容を acsd のサービスポート番号を示す 1 行にして作成します。デフォルトのサービスポート番号は 13702 です。

メモ: このコマンドは、NetBackup Enterprise Server だけに適用されます。

オプション

- v このオプションは UNIX システムでのみ使います。syslogd を使用してデバッグ情報がログに書き込まれます。ltid に -v を指定して起動すると、acsd にも -v が指定されて起動されます。

エラー

UNIX システムでは、acsd のコピーが実行中の場合、acsd によってエラーメッセージが戻されます。ACS エラーおよびネットワークエラーは、Media Manager によって syslogd を介してログに書き込まれます。また、稼働状態から停止状態、または停止状態から稼働状態に状態が変化した場合も、ログエントリが追加されます。acsssi は /usr/opensv/volmgr/debug/acsssi ディレクトリのログファイルにログを記録します。

Windows システムでは、ACS エラーおよびネットワークエラーは、Media Manager によって Windows アプリケーションのイベントログに書き込まれます。また、稼働状態から停止状態、または停止状態から稼働状態に状態が変化した場合も、ログエントリが追加されます。

関連項目

p.720 の [tpconfig](#) を参照してください。

add_media_server_on_clients

add_media_server_on_clients – クライアントへのメディアサーバーの追加

概要

add_media_server_on_clients

UNIX システムでは、このコマンドのディレクトリパスは /usr/opensv/netbackup/bin/ です。

Windows システムでは、このコマンドのディレクトリパスは <install_path>%NetBackup%bin% です。

機能説明

NetBackup サーバーから add_media_server_on_clients コマンドを実行すると、サーバーの構成設定のサーバーリストと、認識されているクライアント上のサーバーリストを同期化できます。

add_media_server_on_clients コマンドでは、構成済みのすべてのクライアント (バックアップポリシーで定義されたクライアント) への接続が試行されます。

add_media_server_on_clients を実行すると、接続可能な各クライアントでクライアントの構成設定が更新され、必要に応じてサーバーの構成設定からすべてのサーバーが追加されます。

backupdbtrace

backupdbtrace - bpbbackupdb (イメージカタログのバックアップ) ジョブのデバッグログのトレース

概要

```
backupdbtrace [-server name] [-job_id number] [-start_time hh:mm:ss]
[-end_time hh:mm:ss] mmddyy [mmddyy ...]
```

UNIX システムでは、このコマンドのディレクトリパスは
/usr/opensv/netbackup/bin/admincmd/ です。
Windows システムでは、このコマンドのディレクトリパスは
<install_path>%NetBackup%\bin\admincmd% です。

機能説明

backupdbtrace ユーティリティを実行すると、指定したデータベースのバックアップジョブのデバッグログメッセージが統合され、標準出力に書き込まれます。メッセージは時間順にソートされます。backupdbtrace では、リモートサーバーとクライアント間のタイムゾーンの違いおよびクロックのずれに対する補正が試行されます。

少なくとも、マスターサーバー上の管理者用のデバッグログ、およびメディアサーバー上の bptm と bpbkar のデバッグログを有効にする必要があります。最大の出力結果を得るには、ログの詳細度を **5** に設定します。その後、前述のプロセスに加えて、次のコマンドのデバッグログを有効にします。

- マスターサーバー上の bpdbm
- すべてのサーバー上の bpcd

backupdbtrace は、トレースする bpbbackupdb ジョブを選択するための唯一の条件として -job_id オプションを使用します。-job_id を使用しない場合、backupdbtrace では、日付スタンプ (mmddyy) で指定した日に開始されたすべての **bpbbackupdb** ジョブが選択されます。-start_time および -end_time オプションを使用すると、指定した時間内のデバッグログが検証されます。

backupdbtrace では、エラーメッセージが標準エラーに書き込まれます。

オプション

-server

このオプションでは、bpbbackupdb コマンドを開始するメディアサーバーの名前を指定します。デフォルトは、ローカルのホスト名です。

`-job_id`
このオプションでは、分析する bpbakupdb ジョブのジョブ ID 番号を指定します。デフォルトは、すべてのジョブ ID です。

`-start_time`
このオプションでは、ログの分析を開始する最初のタイムスタンプを指定します。デフォルトは、**00:00:00** です。

`-end_time`
このオプションでは、ログの分析を終了する最後のタイムスタンプを指定します。デフォルトは、**23:59:59** です。

`mmddyy`
このオプションでは、1 つ以上の日付スタンプを指定します。このオプションによって、分析するログファイル名 (UNIX の場合は `log.mmddyy`、Windows の場合は `mmddyy.log`) が識別されます。

出力形式

出力行の形式は次のとおりです。

`<daystamp>.<millisecs>.<program>.<sequence> <computer> <log_line>`

`daystamp`

ログが生成された日 (`yyyymmdd` 形式)。

`millisecs`

ローカルコンピュータで午前 0 時から経過したミリ秒数。

`program`

ログに記録されるプログラムの名前 (たとえば、`BPBKAR`)。

`sequence`

デバッグログファイル内の行番号。

`computer`

NetBackup サーバーまたはクライアントの名前。

`log_line`

デバッグログファイルに表示される行。

例

例 1 - この例では、2009 年 5 月 6 日に実行された、ジョブ ID が 5 の bpbakupdb ジョブのログを分析します。

```
# backupdbtrace -job_id 5 050609
```

例 2 - この例では、2010 年 8 月 5 日および 2011 年 8 月 17 日に実行されたすべての bpbackupdb ジョブのログを分析します。

```
# backupdbtrace 080510 081711
```


backuptrace

backuptrace – NetBackup ジョブのデバッグログの統合

概要

```
backuptrace [-master_server name] [-job_id number] [-birth_time number] [-policy_name name] [-client_name name] [-start_time hh:mm:ss] [-end_time hh:mm:ss] mmdyy [mmdyy...]
```

UNIX システムでは、このコマンドのディレクトリパスは /usr/opensv/netbackup/bin/admincmd/ です。

Windows システムでは、このコマンドのディレクトリパスは <install_path>%NetBackup%bin\admincmd% です。

機能説明

backuptrace ユーティリティは指定した NetBackup ジョブのデバッグログを統合します。指定したバックアップジョブに関連するデバッグログメッセージは、標準出力に書き込まれます。その後、メッセージは時間順にソートされます。backuptrace ユーティリティでは、リモートサーバーとクライアント間のタイムゾーンの違いおよびクロックのずれに対する補正が試行されます。出力は、タイムスタンプ、プログラム名、サーバー名、クライアント名によるソートやグループ化の実行が容易な形式で生成されます。

少なくとも、次のデバッグログを有効にする必要があります。

- マスターサーバー上の nbjm
- メディアサーバー上の bpbrm、bptm および bpdm
- クライアント上の bpbkar

最大の出力結果を得るには、ログの詳細度を5に設定し、前述のプロセスに加えて次のコマンドのデバッグログを有効にします。

- マスターサーバー上の bpdbm および bprd
- すべてのサーバーおよびクライアント上の bpcd

backuptrace ユーティリティは、通常のファイルシステム、データベース拡張機能、代替バックアップ方式のバックアップジョブに対して使用します。

オプション

-master_server name

このオプションでは、マスターサーバー名を指定します。デフォルトは、ローカルのホスト名です。

- job_id number
このオプションでは、分析するバックアップジョブのジョブ ID 番号を指定します。
- birth_time number
このオプションでは、分析するバックアップジョブの生成時刻 (1970 年からの秒数) を指定します。
- policy_name name
このオプションでは、分析するジョブのポリシー名を指定します。
- client_name name
このオプションでは、分析するジョブのクライアント名を指定します。
- start_time hh:mm:ss
このオプションでは、ログの分析を開始する最初のタイムスタンプを指定します。
- end_time hh:mm:ss
このオプションでは、ログの分析を終了する最後のタイムスタンプを指定します。
- mmddyy [mmddyy]
このオプションでは、1 つ以上の日付スタンプを指定します。このオプションによって、分析するログファイル名 (UNIX の場合は `log.mmddyy`、Windows の場合は `mmddyy.log`) が識別されます。

注意事項

Media Manager ログは分析されません。

例

```
/usr/opensv/netbackup/bin/admincmd/backuptrace -job_id 289  
041105 > /tmp/job.log.289
```

```
C:\Program Files\VERITAS\NetBackup\bin\admincmd\backuptrace  
policy weekly_bkups 051205 >/tmp/jobs.weekly_bkups
```

このユーティリティを使用すると、指定された日付に開始されたポリシー `weekly_bkups` のすべてのジョブのログが統合されます。評価するジョブの時間帯を制限するには、`-start_time` および `-end_time` 引数を使用します。

bmr

bmr – Bare Metal Restore サーバーデーモンへの要求の発行

概要

```
bmr -operation change -resource { restoretask | discovertask }  
[-client clientName] -state numericCode -progress numericCode  
bmr -operation complete -resource { restoretask | discovertask }  
[-client clientName] -state numericStateCode  
bmr -operation create -resource log [-client clientName]  
bmr -operation create -resource message [-client clientName] -msg  
messageText  
bmr -operation pull -resource { info | procedure } [-client  
clientName] -source sourceFileName -destination destinationFileName
```

UNIX システムでは、このコマンドのディレクトリパスは /usr/opensv/netbackup/bin/ です。

Windows システムでは、このコマンドのディレクトリパスは
<*install_path*>%NetBackup%bin% です。

機能説明

bmr クライアントプログラムは Bare Metal Restore (BMR) クライアント上で実行され、これによって BMR サーバーデーモンに要求が発行されます。操作およびリソースは引数として指定されます。

リストアするクライアント上の修復環境の外部プロシージャから bmr を開始する場合、次のように bmr コマンドへのパスを指定します。

UNIX システムでは、/usr/opensv/netbackup/bin

Windows システムでは、%SystemDrive%\BMR\NBU\bin

外部プロシージャの初回ブート時は、bmr は、*install_path*%NetBackup%bin に存在します。

オプション

-client *clientName*

このオプションでは、Bare Metal Restore クライアント名を指定します。

UNIX システムでは、CLIENT_NAME がクライアントシステムの

/usr/opensv/netbackup/bp.conf で定義されていれば **-client** は省略可能です。

`-destination destinationFileName`
このオプションでは、pull 操作でローカルホストに作成するファイルのパス名を指定します。

`-msg messageText`
このオプションでは、サーバーのログに追加するテキストメッセージを指定します。

`-operation operationName`
このオプションでは、実行する操作を指定します。

change
complete
create
pull

`-progress numericCode`
このオプションでは、**Bare Metal Restore** で内部的に使用される数値の進捗コードを指定します。

`-resource resourceName`
このオプションでは、操作を実行するリソースを指定します。

discovertask
info
log
message
procedure
restoretask

`-source sourceFileName`
このオプションでは、pull 操作でデータベースから取得するファイル名を指定します。

`-state numericCode`
このオプションでは、**Bare Metal Restore** で内部的に使用される数値の状態コードを指定します。

例

例 1 - 検出タスクの状態を変更する場合

```
# bmrc -operation change -resource discovertask -client clientName  
-state numericCode -progress numericCode
```

例 2 - リストアタスクの状態を変更する場合

```
# bmrc -operation change -resource restoretask -client clientName  
-state numericCode -progress numericCode
```

例 3 - 検出タスクを完了して最終状態コードを設定する場合

```
# bmrc -operation complete -resource discovertask -client clientName  
-status numericStatus
```

例 4 - リストアタスクを完了して最終状態コードを設定する場合

```
# bmrc -operation complete -resource restoretask -client clientName  
-status numericStatus
```

例 5 - サーバーのログをこのコマンドへの標準入力から作成する場合

```
# bmrc -operation create -resource log -client clientName
```

例 6 - サーバーのログに追加するメッセージを作成する場合

```
# bmrc -operation create -resource message -client clientName -msg  
message text
```

例 7 - サーバーからファイルを取り出す場合

```
# bmrc -operation pull -resource info -client clientName -source  
sourceFileName -destination destinationFileName
```

例 8 - サーバーから外部プロシージャを取り出す場合

```
# bmrc -operation pull -resource procedure -client clientName  
-source sourceFileName -destination destinationFileName
```

注意事項

NetBackup のアクセス管理を使用していて、ユーザーのクレデンシャルとコンピュータのクレデンシャルの期限が切れた場合は、リストア準備を行う前にユーザーとコンピュータのクレデンシャルを更新してください。bnpbat -Login コマンドを指定すると、ユーザーのクレデンシャルを更新できます。bnpbat -LoginMachine コマンドを指定すると、コンピュータのクレデンシャルを更新できます。

コマンドラインに -? オプションのみを指定すると、コマンドの使用方の説明が表示されます。

bmrconfig

bmrconfig - 構成設定の変更

概要

```
bmrconfig -help [-resource resourceType [-platform win | hp | aix | solaris | linux] [-manager ldm | lvm | native | sfw | svm | vxvm | zfs] [-operation add | change | clearALL | delete | display | list | map]]
bmrconfig -operation verify -client clientName -configuration configName
bmrconfig -operation initialize -resource disk | network | device | all -client clientName -configuration configName -sourceconfiguration discovered_configName
bmrconfig -operation initialize -resource disk | network | device | all -client clientName -configuration configName -sourceclient source_clientName -sourceconfiguration source_configName
bmrconfig -operation initialize -resource driver -client clientName -configuration configName
bmrconfig -operation add | change | clearALL | delete | display | list | map -resource resourceType [-name resourceName] [-manager ldm | lvm | native | sfw | svm | vxvm] -client clientName -configuration configName [-attributes "key=value" ["key=value" ...]]
```

UNIX システムでは、このコマンドのディレクトリパスは /usr/opensv/netbackup/bin/ です。

Windows システムでは、このコマンドのディレクトリパスは <install_path>%NetBackup%bin% です。

機能説明

bmrconfig コマンドを実行すると、システム、ネットワーク、ボリューム、ドライブ、NetBackup 設定の構成を変更することができます。読み取り専用の現在の構成と検出された構成は変更できません。変更できる構成のコピーを作成する bmrsc コマンドを使います。

オプション

-attributes

このオプションでは、リソースの属性を「名前」と「値」のペアで指定します。名前には英数字の文字列を指定します。値の形式は任意ですが、空白やシェルによって解釈される文字を含む場合は二重引用符で囲んでください。リソースの指定できる属

性について知りたいときは、コマンドラインで、`bmrconfig -operation list -resource resourceType` を実行します。

Solaris ZFS に固有の属性の一部を次に示します。

`-cache`**device** - キャッシュデバイス (使う場合)。

`-copies`**number of copies** - ミラーレイアウトにのみ適用されます。

`-devtype` - 可能なデバイス形式は次のとおりです。

- `concat` - 連結レイアウト
- `mirror` - ミラーレイアウト
- `raidz1` - **raidz1** レイアウト
- `raidz2` - **raidz2** レイアウト
- `raidz3` - **raidz3** レイアウト

`-disk`**disk name** - 使うディスク名。使用される各ディスクのディスク名を指定します。

`-log`**device** - ログデバイス (使う場合)。

`-slice`**slice name** - 使うスライス名。使用される各スライスのスライス名を指定します。

`-spare` - スペアデバイス (使用する場合)。

`-storagepool`**ZFS storage pool name** - ZFS とボリューム操作時に ZFS ストレージプール名を指定します。

`-client` *clientName*

このオプションでは、**NetBackup** クライアント名を指定します。

`-configuration` *configName*

このオプションでは、操作を実行する構成を指定します。

`-force`

このオプションでは、リソースおよび指定されたリソースに依存するすべてのリソースが強制的に削除されます。

`-initialize`

指定されたクライアントで **BMR** 構成を初期化します。

`-manager`

このオプションでは、リソースを制御するボリュームマネージャを指定します。指定できるボリュームマネージャは次のとおりです。

`ldm` - Windows Logical Disk Manager

`lvm` - AIX または HP-UX Logical Volume Manager

`native` - オペレーティングシステムのネイティブボリュームマネージャ

`sfw` - Veritas Storage Foundation for Windows

`svm` - Solaris Volume Manager

`vxxvm` - Veritas Volume Manager

`zfs` - ZFS ボリュームマネージャ

`-name resourceName`

このオプションでは、操作を実行するリソース名を指定します。リソース名として有効な文字は、ボリュームマネージャの種類によって異なります。

`-operation operation_name`

このオプションでは、実行する操作を指定します。各操作は次のとおりです。

`add` - リソースを構成設定に追加します。

`change` - リソースの特定の属性を変更します。

`clearALL` - ディスク以外のすべてのリソースをディスクグループから削除します。

`delete` - リソースを構成設定から削除します。

`display` - リソースに関する詳細情報を出力します。

`help` - 必要なリソースや、任意の属性および値を出力します。

`initialize` - 検出された構成設定から、ハードウェアの構成設定を初期化します。

`list` - 指定されたリソース形式のすべてのインスタンスを出力します。

`map` - リソース (依存するリソースを含む) を元の構成設定から作業中の構成設定にマッピングします。

`verify` - リストアが成功するのに十分なデータが構成設定に含まれているかどうかを検証します。

`-platform win | hp | aix | solaris | linux`

指定されたリソースのプラットフォーム。-help とのみ使用できます。

`-resource resourceType`

このオプションでは、操作を実行するリソース形式を指定します。指定できるリソース形式は次のとおりです。

`all` - すべてのリソース

`accesspath` - Windows アクセスパス

`disk` - 物理ストレージデバイス

`diskgroup` - ディスクの論理グループ

`diskset` - Solaris Volume Manager ディスクセット

driveletter - **Windows** ドライブ文字

esm - バックアップクライアント識別情報

filesystem - **UNIX** と **Windows** のファイルシステム

gateway - ネットワークゲートウェイ

host - ネットワークサーバー

hotfix - **Windows Hotfix**

hot spare pool - **SVM** フェールオーバーで使用するスライスセット

ip - ネットワーク識別情報

license - 製品のライセンスキー

logicaldrive - **Windows** 拡張パーティション (最初の拡張パーティションによって自動的にコンテナが追加されます)

logicalvolume - **AIX** または **HP-UX** 論理ボリューム

metadb - **SVM** データベースレプリカスライス

mountpoint - ボリュームに対するアクセスポイントとなるパス

msd - 大容量記憶装置ドライバ

multidevice - **Linux** マルチデバイス

nativdisk - **Solaris** ネーティブディスクリソース

nativepart - **Solaris** ネーティブパーティションリソース

network - サブネットワーク

nic - ネットワークインターフェースカード

nicpkg - ネットワークインターフェースカードドライバ

partition - **Windows** プライマリパーティション

physical volume - **AIX** または **HP-UX** 物理ボリューム

slice - **Solaris** スライス (ボリュームに相当します)

softpart - **SVM** ソフトパーティション

volume - ディスクまたはディスクグループの論理的な区分

volume group - **AIX** または **HP-UX** ボリュームグループ

zfsfilesystem - **ZFS** ファイルシステム

zfsstoragepool - **ZFS** ストレージプール

zfsvolume - **ZFS** ボリューム

`-sourceconfiguration source_configName`

このオプションでは、構成設定の初期化操作においてソースとなる構成を指定します。

`-sourceclient source_clientName`

このオプションでは、構成設定の初期化操作においてソースとなるクライアントを指定します。ソースクライアントを指定しない場合、検出された構成設定のリストから構成設定が取得されます。

例

例 1 - クライアント **aixp31** の構成で物理ボリュームを一覧表示する場合

```
# bmrconfig -operation list -resource physical volume -configuration  
current -client aixp31
```

例 2 - Solaris でネーティブパーティションをマッピングする場合

```
# bmrconfig -op map -re nativepart -name /dev/dsk/clt0d0p1 -client  
client1 -config config1 -attributes disk=/dev/dsk/clt1d0p0  
percent=50 partid=191 active=true
```

例 3 - クライアント **aixp31** の構成でボリュームグループを一覧表示する場合

```
# bmrconfig -operation list -resource volume group -configuration  
current -client aixp31
```

例 4 - クライアント **aixp31** のボリュームグループの属性を表示する場合

```
# bmrconfig -operation display -resource volume group -configuration  
current -client aixp31 -name rootvg
```

例 5 - クライアント **aixp31** の検出されたハードウェアで新しい構成を初期化する場合

```
# bmrconfig -operation initialize -resource config -configuration  
mynew -client aixp31 -sourceconfiguration discover
```

例 6 - クライアント **aixp31** の構成にボリュームグループを追加する場合

```
# bmrconfig -operation add -configuration mynew -client aixp31  
-resource volume group -name rootvg -attributes physical  
volume=hdisk1
```

例 7 - クライアント **aixp31** のボリュームグループにディスクを追加する場合 (物理ボリュームの完全なリストを指定する必要があります)

```
# bmrconfig -operation modify -configuration my new -client aixp31  
-resource volume group -name rootvg -attributes physical  
volume=hdisk1 physical volume=hdisk0
```

例 8 - クライアント aixp31 のボリュームグループから物理ボリュームを削除する場合

```
# bmrconfig -operation modify -configuration my new -client aixp31  
-resource volume group -name rootvg -attributes physical  
volume=hdisk0
```

例 9 - クライアント aixp31 の元の構成設定からボリュームグループをマッピングする場合

```
# bmrconfig -operation map -configuration my new -client aixp31  
-resource volume group -name rootvg
```

例 10 - UNIX で、次の 3 つのコピーを提供するミラー化されたレイアウトで ZFS ストレージプールのセットアップをマッピングする場合

```
# bmrconfig -operation map -resource zfsstoragepool -client solbox  
-config solconfig -namedatapool -attributes devtype=mirror copies=3  
spare=/dev/dsk/c1t1d0 cache=/dev/dsk/c1t1d1 log=/dev/dsk/c1t1d2  
disk=/dev/dsk/c1t1d3 disk=/dev/dsk/c1t1d4
```

注意事項

NetBackup のアクセス管理を使用していて、ユーザーのクレデンシャルとコンピュータのクレデンシャルの期限が切れた場合は、リストア準備を行う前にユーザーとコンピュータのクレデンシャルを更新してください。bpnbat -Login コマンドを指定すると、ユーザーのクレデンシャルを更新できます。bpnbat -LoginMachine コマンドを指定すると、コンピュータのクレデンシャルを更新できます。

関連項目

p.42 の [bmrconfig](#) を参照してください。

bmrepadm

bmrepadm – 外部プロシージャの管理

概要

```
bmrepadm [-data] -list [pattern]
```

```
bmrepadm [-data] -delete procedureName
```

```
bmrepadm [-data] -extract procedureName
```

```
bmrepadm [-data] -add fileName
```

UNIX システムでは、このコマンドのディレクトリパスは /usr/openv/netbackup/bin/ です。

Windows システムでは、このコマンドのディレクトリパスは <install_path>%NetBackup%bin% です。

機能説明

bmrepadm コマンドを実行すると、データベースの外部プロシージャが一覧表示、追加、抽出または削除されます。bmrepadm コマンドは、BMR のライセンスを取得している NetBackup マスターサーバーにインストールして実行する必要があります。

プロシージャ名 (*procedureName*) は *procedureType.clientOs* か *clientName_procedureType* の形式である必要があります。

procedureType には、次のいずれかの文字列を指定します。

- prediscover
- preformat
- prerestore
- postrestore
- firstboot

clientOs には、次のいずれかの文字列を指定します。

- aix
- hp
- linux
- sol
- win

name には、Bare Metal Restore クライアント名を指定します。

オプション

`-add pathName`

このオプションでは、**pathName** の外部プロシージャがデータベースに追加されます。**pathName** の最後の要素は、すでに使用されている外部の **procedure Name** である必要があります。

`-data`

外部プロシージャの代わりにユーザー指定の任意のデータファイルを操作します。このオプションを指定した場合、引数で指定するプロシージャの名前およびファイルの名前の命名規則は適用されません。データファイルには、すでに使用されている外部プロシージャ名以外の任意の名前を指定できます。

`-delete procedureName`

このオプションでは、**procedureName** の外部プロシージャがデータベースから削除されます。**procedureName** は、すでに使われている外部プロシージャ名である必要があります。

`-extract procedureName`

このオプションでは、外部プロシージャがデータベースから抽出され、現在のディレクトリに書き込まれます。**procedureName** は、すでに使われている外部プロシージャ名である必要があります。

`-list [pattern]`

このオプションでは、エン트리(外部プロシージャまたはユーザー指定のデータファイル)がデータベースに一覧表示されます。**pattern** と一致するエントリのみが一覧表示されます。ただし、**pattern** を指定しない場合は、データベース内のすべてのエントリが一覧表示されます。**procedureName** と一致させるために、**pattern** 内で「*」が使われる場合があります。

注意事項

bmrepadm はクライアント名を検証しません。つまり、実在しないクライアントの外部プロシージャの追加が可能です。

NetBackup のアクセス管理を使っていて、ユーザーのクレデンシヤルとコンピュータのクレデンシヤルの期限が切れた場合は、リストア準備を行う前にユーザーとマシンのクレデンシヤルを更新してください。ユーザーのクレデンシヤルを更新するには `bpnbat -Login` コマンド、コンピュータのクレデンシヤルを更新するには `bpnbat -LoginMachine` コマンドを使います。

コマンドラインに `-?` オプションのみを指定すると、コマンドの使用法の説明が表示されます。

例

例 1 - データファイルを追加する場合

```
# bmrepadm -data -add nameNotMatchingEPname
```

例 2 - データファイルを一覧表示する場合

```
# bmrepadm -data -list
```

例 3 - NetBackup によるリストアフェーズのリストア後、すべての Solaris クライアントに対して実行される外部プロシージャを追加する場合

```
bmrepadm -add <pathname>postrestore.sol
```

例 4 - zanzibar という名前のクライアントでディスクをフォーマットする前に実行される外部プロシージャを追加する場合

```
bmrepadm -add <pathname>zanzibar_preformat
```

bmrprep

bmrprep – リストアまたは検出用のクライアントの準備

概要

```
bmrprep -restore -client clientName -config configurationName -srt srtName [-policy policyName] [-logging] [-runep] [-systemonly] [-import] [-enddate enddate] [-quickformat]
bmrprep -discover -newconfig configurationName -srt srtName [-client clientName -config configurationName] -address clientAddress -default defaultGateway -netmask netmask -mac clientMacAddress -server nbuServerAddress -console consoleDeviceName -architecture architectureName [-gateway serverGateway] [-logging] [-runep]
```

UNIX システムでは、このコマンドのディレクトリパスは /usr/opensv/netbackup/bin/ です。

Windows システムでは、このコマンドのディレクトリパスは <install_path>%NetBackup%bin% です。

機能説明

bmrprep コマンドを実行すると、リストアまたはハードウェア検出処理のための Bare Metal Restore クライアントが準備されます。このコマンドは、NetBackup Bare Metal Restore マスターサーバーでのみ実行します。

オプション

-address *clientAddress*
(UNIX クライアントのみ)このオプションでは、クライアントの IP アドレスをドット付き 10 進表記で指定します。-discover による操作でのみ必要です。ただし、-client および -config オプションを指定した場合は任意です。

-architecture *architectureName*
(UNIX クライアントのみ)このオプションでは、検出するクライアントのアーキテクチャを指定します。-discover による操作でのみ必要です。ただし、-client および -config オプションを指定した場合は任意です。

-client *clientName*
このオプションでは、リストアするクライアント名を指定します。

-config *configurationName*
このオプションでは、使用する構成名を指定します。

-console *consoleDeviceName*

(UNIX クライアントのみ)このオプションでは、検出中に使用するコンソールデバイス名を指定します。-discover による操作でのみ必要です。ただし、-client および -config オプションを指定した場合、またはメディアブートを使用する場合は任意です。

-default *defaultGateway*

(UNIX クライアントのみ)このオプションでは、デフォルトゲートウェイアドレスをドット付き 10 進表記で指定します。-discover による操作でのみ必要です。ただし、-client および -config オプションを指定した場合、またはメディアブートを使用する場合は任意です。

-discover

(UNIX クライアントのみ)このオプションでは、ハードウェアが検出されます。-restore と同時に指定することはできません。

-enddate *enddate*

このオプションでは、特定の時点へのリストアの日時を指定します。

NetBackup コマンドの日時の値に求められる形式は、使用しているロケールによって異なります。/user/opensv/msg/.conf ファイル (UNIX) と *install_path*\%VERITAS%\msg\%LC.CONF ファイル (Windows) はそれぞれのサポート対象ロケールの日時形式などの情報を含んでいます。これらのファイルには、サポートされているロケールおよび書式のリストを追加および変更するための、具体的な方法が含まれています。

システムのロケールについて詳しくは、次を参照してください。『[NetBackup 管理者ガイド Vol. 2](#)』。

-gateway *serverGateway*

(UNIX クライアントのみ)このオプションでは、**NetBackup** サーバーへのゲートウェイをドット付き 10 進表記で指定します。-discover による操作でのみ必要です。

-import

このオプションでは、システム以外のボリュームグループがインポートされます。

このフラグの使用方法について詳しくは、次を参照してください。『[Bare Metal Restore 管理者ガイド](#)』。

-logging

このオプションでは、ログが有効になります。

-mac *clientMacAddress*

(UNIX クライアントのみ)このオプションでは、クライアントの **MAC** アドレスを指定します。-discover による操作でのみ必要です。(例外: IP アドレスが初期プログラムロード (IPL) 中に構成される場合は任意)。また、-client および -config オプションを指定した場合、またはメディアブートを使用する場合は任意となります。

-netmask *netmask*

(UNIX クライアントのみ)このオプションでは、クライアントのサブネットマスクをドット付き 10 進表記で指定します。-discover による操作でのみ必要です。ただし、-client および -config オプションを指定した場合は任意です。

-newconfig *configurationName*

(UNIX クライアントのみ)このオプションでは、検出された構成に名前が付けられません。

-policy *policyName*

このオプションでは、使用するポリシー名を指定します。

-quickformat

(Windows クライアントのみ。)このオプションでは、Windows のパーティションがクイックフォーマットされます。

-restore

通常のリストアを実行します。-discover と同時に指定することはできません。

-runep

このオプションでは、外部プロシージャが実行されます。

-server *nbuServerAddress*

(UNIX クライアントのみ)このオプションでは、NetBackup サーバーアドレスをドット付き 10 進表記で指定します。-discover による操作でのみ必要です。ただし、-client および -config オプションを指定した場合は任意です。

-srt *srtName*

このオプションでは、使用する共有リソースツリー名を指定します。

-systemonly

このオプションでは、システムボリュームグループのみがリストアされます。

このオプションの使用方法について詳しくは、「[クライアントのリストア準備 (Prepare to Restore Client)]ダイアログボックス」を参照してください。『[Bare Metal Restore 管理者ガイド](#)』。

注意事項

NetBackup のアクセス管理を使っていて、ユーザーのクレデンシャルとコンピュータのクレデンシャルの期限が切れた場合は、リストア準備を行う前にユーザーとマシンのクレデンシャルを更新してください。ユーザーのクレデンシャルを更新するには `bnpbat -Login` コマンド、コンピュータのクレデンシャルを更新するには `bnpbat -LoginMachine` コマンドを使います。

コマンドラインに `-?` オプションのみを指定すると、コマンドの使用法の説明が表示されます。

bmrs

bmrs – Bare Metal Restore データベース内のリソースの管理

概要

```
bmrs -operation delete -resource config -name configName -client
clientName -resource client -name clientName -resource package -name
packageName -resource srt -name srtName -resource discovertasklog
-id idvalue -resource restoretasklog -id idvalue
bmrs -operation complete -resource discovertask -client clientName
-status numericStatus -resource restoretask -client clientName -status
numericStatus
bmrs -operation verify -resource srt -name srtName [-client
clientName]
bmrs -operation copy -resource config -name configName -client
clientName -destination newConfigName
bmrs -operation retrieve -resource config -client clientName
-destination newConfigName [-enddate date] [-epochenddate eEndDate]
[-policy policyName]
bmrs -operation import -resource config -path bundlePath [-client
clientName] [-destination newConfigName]
bmrs -operation list -resource resourceName
```

UNIX システムでは、このコマンドのディレクトリパスは `/usr/opensv/netbackup/bin/` です。

Windows システムでは、このコマンドのディレクトリパスは
<*install_path*>%NetBackup%bin% です。

機能説明

bmrs コマンドを実行すると、Bare Metal Restore データベース内のリソースが管理されます。bmrs コマンドは、マスターサーバー上でのみ動作します。

オプション

-client *clientName*

このオプションでは、Bare Metal Restore クライアント名を指定します。

-destination *newConfigName*

このオプションでは、作成する宛先構成名を指定します。

-enddate *date*

このオプションでは、特定の時点のリストア構成の日時を指定します。**-enddate** と **-epochenddate** の両方を指定した場合、**-epochenddate** が優先されます。

NetBackup コマンドの日時の値に求められる形式は、使用しているロケールによって異なります。`/user/openv/msg/.conf` ファイル (UNIX) と `install_path\VERITAS\msg\LC.CONF` ファイル (Windows) はそれぞれのサポート対象ロケールの日時形式などの情報を含んでいます。これらのファイルには、サポートされているロケールおよび書式のリストを追加および変更するための、具体的な方法が含まれています。

システムのロケールについて詳しくは、「**NetBackup** インストールのロケールの指定について」の項を参照してください。『**NetBackup** 管理者ガイド Vol. 2』。

-epochenddate *eEnddate*

このオプションでは、特定の時点のリストア構成の日時を指定します。この日付は **1970 年 1 月 1 日** からの秒数で指定されます。**-enddate** と **-epochenddate** の両方が指定された場合、**-epochenddate** が優先されます。

-id *idvalue*

このオプションでは、この操作で使用するリソースのデータベースレコード ID を指定します。データベースレコード ID は、`discoverTaskLogId` または `restoreTaskLogId` です。

-name *value*

このオプションでは、この操作で使用するリソース名 (`clientName`、`configName`、`packageName` または `srtName`) を指定します。

-operation *operationName*

可能な操作は `complete`、`copy`、`delete`、`import`、`list`、`retrieve`、`verify` です。

-path *bundlePath*

このオプションでは、`bmrsavecfg` コマンドによって作成されるバンドルファイルへのパス名を指定します。

-policy *policyName*

このオプションでは、使用するポリシー名を指定します。

-resource *resourceName*

このオプションでは、操作を実行するリソースを指定します。使用可能なリソースは、指定された操作によって異なります。**-operation list** では、次のリソースがサポートされています。

```
bootserver
client
config
discovertask
```

```
discovertasklog  
package  
restoretask  
restoretasklog  
srt
```

```
-status numericStatus
```

このオプションでは、**Bare Metal Restore** で内部的に使用される数値の完了状態コードを指定します。

例

例 1 - BMR データベース内の構成を一覧表示する場合

```
bmr -operation list -resource config
```

例 2 - 現在の構成 (読み取り専用) をコピーして、クライアント aixp31 で編集可能な新しい構成 (mynew) を作成する場合

```
bmr -operation copy -resource config -name current -client aixp31  
-destination mynew
```

例 3 - クライアント aixp31 の構成 mynew を削除する場合

```
bmr -operation delete -resource config -name mynew -client aixp31
```

例 4 - 共有リソースツリー aixsrt の整合性を検証する場合

```
bmr -operation verify -resource srt -name aixsrt
```

注意事項

NetBackup のアクセス管理を使っていて、ユーザーのクレデンシャルとコンピュータのクレデンシャルの期限が切れた場合は、リストア準備を行う前にユーザーとマシンのクレデンシャルを更新してください。ユーザーのクレデンシャルを更新するには `bpnbat -Login` コマンド、コンピュータのクレデンシャルを更新するには `bpnbat -LoginMachine` コマンドを使います。

コマンドラインに `-?` オプションのみを指定すると、コマンドの使用方法の説明が表示されます。

関連項目

p.27 の [bmr](#) を参照してください。

bmrstadm

bmrstadm – SRT の作成と管理、およびブート CD イメージの作成

概要

bmrstadm

UNIX システムでは、このコマンドのディレクトリパスは /usr/opensv/netbackup/bin/ です。

Windows システムでは、このコマンドのディレクトリパスは <install_path>%NetBackup%\bin% です。

機能説明

UNIX システムでは、bmrstadm コマンドは対話的に共有リソースツリーを管理します。

Windows システムでは、bmrstadm コマンドを実行すると、共有リソースツリーの作成ウィザードが起動されます。

BMR ブートサーバーで bmrstadm を使用する (UNIX) か、または BMR ブートサーバーで共有リソースツリーの作成ウィザードを使用して (Windows)、次の作業を実行します。

- 新しい共有リソースツリーの作成。
- 既存の共有リソースツリーのコピーを含むブート CD イメージの作成。
- 既存の共有リソースツリーへの追加ソフトウェアのインストール。
- 既存の共有リソースツリーの新しい場所へのコピー。
- 既存の共有リソースツリーの削除。
- 利用可能な共有リソースツリーの表示 (UNIX)。
- 共有リソースツリーの排他的な使用の有効化および無効化 (UNIX)。

注意事項

UNIX の場合: NetBackup のアクセス管理を使っていて、ユーザーのクレデンシャルとマシンのクレデンシャルの期限が切れた場合は、リストア準備を行う前にユーザーとマシンのクレデンシャルを更新してください。bpnbat -Login コマンドを指定すると、ユーザーのクレデンシャルを更新できます。bpnbat -LoginMachine コマンドを指定すると、マシンのクレデンシャルを更新できます。

bp

bp – ユーザー用の NetBackup メニューインターフェースの起動

概要

```
bp [-a | -ra | -b | -r | -rr | -o | -ro | -s | -rs | -i | -ri | -k  
| -rk | -rti | -p | -rp | -2 | -r2] [-verbose]  
bp [-b | -a | -r | -ra] [-verbose]
```

The directory path to this command is /usr/opensv/netbackup/bin/

機能説明

このコマンドは UNIX システムでのみ動作します。

bp を実行すると、クライアントのワークステーションから、ファイル、ディレクトリまたは raw パーティションのアーカイブ、バックアップおよびリストアを行うメニューインターフェースが起動されます。このインターフェースは、termcap または terminfo を定義しているすべての文字ベースの端末 (または端末エミュレーションウィンドウ) から実行できます。

操作手順について詳しくは、bp のオンラインヘルプを参照してください。

オプション

起動メニューは、bp コマンドで指定するオプションによって異なります。オプションを指定せずに bp を実行すると、メインメニューでユーティリティが起動されます。ユーティリティをセカンダリメニューで起動するには、次のいずれかのオプションを指定します。

-a このオプションを指定すると、bp が [Archive of Files and Directories] メニューで起動されます。

-ra このオプションを指定すると、bp が [Restore Archives] メニューで起動されます。

-b このオプションを指定すると、bp が [Backup of Files and Directories] メニューで起動されます。

-r このオプションを指定すると、bp が [Restore Backups] メニューで起動されます。

-rr このオプションを指定すると、bp が [Restore Raw Partitions Backups] メニューで起動されます。

-o このオプションを指定すると、bp が [Backup Oracle DB] メニューで起動されます。

- ro
このオプションを指定すると、bp が [Restore Oracle DB] メニューで起動されます。
 - s このオプションを指定すると、bp が [Backup Sybase DB] メニューで起動されます。
 - rs
このオプションを指定すると、bp が [Restore Sybase DB] メニューで起動されます。
 - i このオプションを指定すると、bp が [Backup Informix DB] メニューで起動されます。
 - ri
このオプションを指定すると、bp が [Restore Informix DB] メニューで起動されます。
 - rti
このオプションを指定すると、bp が [Restore True Image Backups] メニューで起動されます。
- 次のオプションは、NetBackup Enterprise Server だけに適用されます。
- p このオプションを指定すると、bp が [Backup SAP DB] メニューで起動されます。
 - rp
このオプションを指定すると、bp が [Restore SAP DB] メニューで起動されます。
 - 2 このオプションを指定すると、bp が [Backup DB2 DB] メニューで起動されます。
 - r2
このオプションを指定すると、bp が [Restore DB2 DB] メニューで起動されます。
 - k このオプションを指定すると、bp が [Backup SQL-BackTrack DB] メニューで起動されます。
 - rk
このオプションを指定すると、bp が [Restore SQL-BackTrack DB] メニューで起動されます。
 - verbose
このオプションを指定すると、応答が詳細モードで表示されます。

ファイル

```
/usr/opensv/netbackup/help/bp/*  
/usr/opensv/netbackup/logs/bp/*  
/usr/opensv/netbackup/bp.conf
```

関連項目

p.50 の [bparchive](#) を参照してください。

p.56 の [bpbackup](#) を参照してください。

p.346 の [bprestore](#) を参照してください。

bpadm

bpadm – 管理者用の NetBackup メニューインターフェースの起動

概要

bpadm

The directory path to this command is /usr/opensv/netbackup/bin/

機能説明

このコマンドは UNIX システムでのみ動作します。

bpadm のユーティリティには、管理者が NetBackup を構成したり、NetBackup の操作を監視したりすることが可能なメニューインターフェースが含まれます。bpadm を実行するには、スーパーユーザー権限が必要です。管理者は、termcap または terminfo を定義しているすべての文字ベースの端末 (または端末エミュレーションウィンドウ) からこのインターフェースを使用できます。

操作方法について詳しくは、『[Symantec NetBackup 管理者ガイド Vol. 1](#)』または bpadm オンラインヘルプを参照してください。

ファイル

```
/usr/opensv/netbackup/help/bpadm/*  
/usr/opensv/netbackup/logs/admin/*  
/usr/opensv/netbackup/bin/initbprd  
/usr/opensv/netbackup/bp.conf
```

関連項目

p.341 の [bprd](#) を参照してください。

bparchive

bparchive – NetBackup サーバーへのファイルのアーカイブ

概要

```
bparchive [-p policy] [-s schedule] [-L progress_log [-en]] [-S  
master_server [,master_server, ...]] [-t policy_type] [-w [hh:mm:ss]]  
[-k "keyword_phrase"] -f listfile | filenames
```

UNIX システムでは、このコマンドのディレクトリパスは /usr/opensv/netbackup/bin/ です。

Windows システムでは、このコマンドのディレクトリパスは
<*install_path*>%NetBackup%bin% です。

機能説明

bparchive を実行すると、コマンドラインまたは -f *listfile* オプションで指定したファイル内に一覧表示されたファイルが処理されます。ファイルパスには、ファイル名またはディレクトリ名を入力できます。ファイルのリストにディレクトリが含まれる場合、そのディレクトリ以下のすべてのファイルおよびサブディレクトリのアーカイブが行われ、コマンドはそのディレクトリから開始されます。

デフォルトでは、bparchive が正常に発行されると、システムプロンプトに戻ります。このコマンドはバックグラウンドで実行され、完了状態はユーザーに直接戻されません。-w オプションを指定すると、bparchive がフォアグラウンドで実行され、指定した時間の経過後に完了状態が戻されるように変更できます。

bparchive を実行すると、進捗ログファイルが作成されている場合、情報メッセージおよびエラーメッセージがこのファイルに書き込まれます。このファイルは、bparchive の実行前に作成しておく必要があります。その後、-L *progress_log* オプションを使用して、このファイルを指定します。bparchive を実行しても、要求したファイルまたはディレクトリのアーカイブが行われない場合、この進捗ログを使用して、エラーの原因を判断することができます。

書き込みを許可してディレクトリを作成した場合、bparchive を実行すると、このディレクトリにデバッグログファイルが作成され、トラブルシューティングに使用できます。

Windows システムでは、<*nbu_dir_path*> は
<*install_path*>%NetBackup%\logs\bparchive% です。

UNIX システムでは、ディレクトリは /usr/opensv/netbackup/logs/bparchive/ です。

USEMAIL = *mail_address* の場合、NetBackup は *mail_address* にアーカイブの完了状態を通知するメールを送信します。管理者以外のユーザーは \$HOME/bp.conf ファ

イルで指定します。管理者は `/usr/opensv/netbackup/bp.conf` ファイルで指定します。このメッセージはアーカイブ処理が完了すると送信されます。

次に、このコマンドに適用される制限事項を示します。

- **UNIX** システムの場合: `bparcive` を実行してファイルのアーカイブを行う場合、そのファイルを削除するために、**root** ユーザーであるか、所有者としてのプライマリグループのメンバーである必要があります。また、このファイルのアクセス権限は読み取り専用にしなさい。読み取り専用の場合、**NetBackup** によってこのファイルは保存されますが、ファイルのアクセス時間 (`utime`) をリセットできないため、ファイルはディスクから削除されません。
- **Windows** システムでは、`bparcive` を実行してファイルのアーカイブを行う場合、ユーザーがファイルを削除する権限を所有している必要があります。また、このファイルのアクセス権限は読み取り専用でないことが必要です。読み取り専用の場合、**NetBackup** によってこのファイルは保存されますが、ディスクからは削除されません。
- **UNIX** システムの場合: リンクである **UNIX** ファイルを指定して `bparcive` を実行すると、リンク先のファイルではなく、そのリンク自身のアーカイブだけが行われます。
- `bparcive` を実行しても、`[.]` または `[..]` ディレクトリエントリのアーカイブは行われません。また、ディスクイメージのバックアップのアーカイブも行われません。

オプション

`-p policy`

このオプションでは、ユーザーアーカイブに使用するポリシー名を指定します。名前を指定しない場合、**NetBackup** サーバーでは、そのクライアントとユーザーアーカイブスケジュールが含まれるポリシーのうち、最初に検出されたポリシーを使用します。

`-s schedule`

このオプションでは、ユーザーアーカイブに使用するスケジュール名を指定します。名前を指定しない場合、**NetBackup** サーバーでは、そのクライアントが使用するポリシー内で最初に検出されたユーザーアーカイブスケジュールが使用されます (`-p` オプションを参照してください。)

`-S master_server`

UNIX システムでは、このオプションは **NetBackup** マスターサーバーの名前を指定します。デフォルトは、`/usr/opensv/netbackup/bp.conf` ファイルの最初の `SERVER` エントリです。

Windows システムでは、このオプションは **NetBackup** マスターサーバーの名前を指定します。デフォルトは、**[NetBackup マシンおよびポリシー形式の指定 (Specify NetBackup Machines and Policy Type)]** ダイアログボックスの **[サーバー (Servers)]** タブで操作対象として指定されているサーバーです。このダイアログボックスを表示するには、クライアント上でバックアップ、アーカイブおよびリストアインターフェース

を起動します。次に[ファイル (File)]メニューから[NetBackup マシンおよびポリシー形式の指定 (Specify NetBackup Machines and Policy Type)]を選択します。

-t *policy_type*

このオプションでは、ポリシー形式に対応する次のいずれかの番号を指定します。**Windows** クライアントのデフォルトは 13 です。その他のすべてのクライアントのデフォルトは 0 です。

0 = Standard

4 = Oracle

6 = Informix-On-BAR

7 = Sybase

10 = NetWare

13 = MS-Windows

14 = OS/2

15 = MS-SQL-Server

16 = MS-Exchange-Server

19 = NDMP

次のポリシー形式は、NetBackup Enterprise Server だけに適用されます。

11 = DataTools-SQL-BackTrack

17 = SAP

18 = DB2

20 = FlashBackup

21 = Split-Mirror

22 = AFS

39 = Enterprise-Vault

-L *progress_log* [-en]

このオプションでは、進捗情報を書き込む既存のファイル名を指定します。

UNIX システムでは、ファイル名は / から始まる必要があります。

たとえば、/home/tlc/proglog などです。

Windows システムの例は c:\proglog です。

デフォルトでは、進捗ログは使用されません。

-en オプションを指定すると、進捗ログが英語で生成されます。ログ名には文字列 [_en]が含まれます。このオプションは、異なるロケールで様々な言語のログが作成される分散環境において有効です。

-w [hh:mm:ss]

このオプションを指定すると、NetBackup はサーバーから完了状態が送信されるまで待機し、その後、システムプロンプトに戻ります。

NetBackup コマンドの日時の値に求められる形式は、使用しているロケールによって異なります。/user/openv/msg/.conf ファイル (UNIX) と install_path¥VERITAS¥msg¥LC.CONF ファイル (Windows) はそれぞれのサポート対象ロケールの日時形式などの情報を含んでいます。これらのファイルには、サポートされているロケールおよび書式のリストを追加および変更するための、具体的な方法が含まれています。

「NetBackup インストールのロケールの指定について」の項を参照してください。
『NetBackup 管理者ガイド Vol. 2』。

必要に応じて、待機時間を時間、分、秒で指定できます。指定可能な最大待機時間は、23:59:59 です。アーカイブが完了する前に待機時間が経過すると、コマンドはタイムアウト状態で終了します。ただし、サーバー上ではアーカイブが完了します。

待機時間を指定せずに -w を使用する場合、または待機時間の値に 0 (ゼロ) を指定する場合、NetBackup は無制限に完了状態を待機します。

-k keyword_phrase

このオプションでは、このアーカイブ操作で作成されるイメージに関連付けるキーワード句を指定します。その後、bprestore で -k オプションを使用して、キーワード句を指定し、イメージのリストアを行うことができます。

キーワード句は、アーカイブのテキスト形式の記述で、128 文字以内で指定します。空白(「 」)およびピリオド(「.」)を含むすべての印字可能な文字列を指定できます。

キーワード句は、二重引用符 ("...") または一重引用符 ('...') で囲んでください。

デフォルトのキーワード句は NULL (空) 文字列です。

-f listfile

このオプションでは、アーカイブを行うファイルのリストを含むファイル名 (listfile) を指定します。このオプションは、filenames オプションの代わりに使用できます。listfile では、各ファイルパスが個別の行に表示されます。

必要なファイルリストの形式は、ファイル名に空白、改行文字、または復帰文字が含まれるかどうかによって異なります。名前に空白、改行文字または復帰文字が含まれないファイルのアーカイブを行うには、次の形式を使用します。

filepath

アーカイブするファイルへのパス。UNIX システムの例は /home、/etc、/var などです。Windows システムの例は c:¥Programs、c:¥documents¥old_memos などです。

名前に空白、改行文字または復帰文字が含まれるファイルのアーカイブを行うには、次の形式を使用します。

```
filepathlen filepath
```

filepath は、アーカイブを行うファイルへのパスです。また、**filepathlen** はファイルパスの文字数です。

アーカイブするファイルへのパス。UNIX システムの例は /home、/etc、/var などです。Windows システムの例は c:¥Programs、c:¥documents¥old_memos などです。

UNIX システムでの例は次のとおりです。

```
5 /home
4 /etc
4 /var
19 /home/abc/test file
```

Windows システムでの例は次のとおりです。

```
11 c:¥Programs
8 c:¥winnt
22 c:¥documents¥old memos
```

filenames

このオプションでは、アーカイブを行う 1 つ以上のファイル名を指定します。このオプションは、**-f** オプションの代わりに使用できます。指定するファイルは、他のすべてのオプションに続いて、最後に指定する必要があります。

例

例 1 - 単一ファイルをアーカイブする場合

UNIX システムの場合: bparchive /usr/user1/file1

Windows システムの場合: bparchive c:¥usr¥user1¥file1

例 2 - archive_list というファイルに一覧表示されたファイルのアーカイブを行う場合

```
bparchive -f archive_list
```

例 3 - キーワード句「Archive My Home Directory 02/02/10」をディレクトリ kwc のアーカイブに関連付け、arch.log という名前の進捗ログを使用する場合

UNIX システムの場合: bparcive -k "Archive My Home Directory 02/02/10"
¥-L/home/kwc/arch.log /home/kwc

Windows システムの場合: bparcive -k "Archive My Home Directory 02/02/10"
¥-L c:¥home¥kwc c:¥home¥kwc¥arch.log

bpbacup

bpbacup – NetBackup サーバーへのファイルのバックアップ

概要

```
bpbacup -f listfile | filenames [-p policy] [-s schedule] [-S  
master_server...] [-t policy_type] [-L progress_log [-en]] [-w  
[hh:mm:ss]] [-k "keyword_phrase"]
```

```
bpbacup -i [-p policy] [-h hostname] [-s schedule] [-S  
master_server...] [-t policy_type] [-instance instance_name] [-L  
progress_log [-en]] [-w [hh:mm:ss]] [-k "keyword_phrase"]
```

```
bpbacup -dssu DSSUname [-S master_server]
```

UNIX システムでは、このコマンドのディレクトリパスは /usr/opensv/netbackup/bin/ です。

Windows システムでは、このコマンドのディレクトリパスは

<install_path>%NetBackup%bin% です。

機能説明

bpbacup コマンドを使うと、クライアントとマスターサーバーでバックアップ処理を開始できます。Oracle ポリシーを使うときは、bpbacup でインスタンスのバックアップを作成できます。

クライアント側:

bpbacup の -f オプションを指定すると、クライアントインターフェースを使用して実行されるバックアップと同等のユーザーバックアップが開始されます。この形式のバックアップは、どの NetBackup クライアントからでも開始が可能で、そのクライアントからファイルのバックアップを行うことができます。

bpbacup を実行すると、コマンドラインで指定したファイルまたは -f listfile オプションで指定したファイル内のファイルが処理されます。ファイルパスにはファイル名またはディレクトリ名を指定できます。指定した中にディレクトリが含まれる場合、bpbacup を実行すると、そのディレクトリ以下のすべてのファイルおよびサブディレクトリのバックアップが行われます。

メモ: 個々のファイルまたはディレクトリの一覧表示に加えて、bpbacup は指示句を使用してバックアップ対象ファイルを示すこともできます。たとえば、bpbacup "/Shadow Copy Components/" または bpbacup "/System State/" です。クライアントは bpbacup -f <listfile> オプションを使って listfile に指示句を入力できます。

マスターサーバー側:

bpbakcup の `-i` オプションを指定すると、クライアントの即時手動バックアップが開始されます。bpbakcup オプションはマスターサーバーの管理者のみが利用できます。これは、NetBackup の管理コンソールから手動バックアップを開始する場合と同じです。`-h` オプションを使用して、ホストを指定します。

進捗ログはクライアントだけに書き込まれます。この形式の bpbakcup はマスターサーバーからだけ実行されるため、`-L` オプションは指定しません。

次に、このコマンドに適用される制限事項を示します。

- bpbakcup を実行してファイルのバックアップを行うには、ファイルの所有者または管理者である必要があります。
- 必要な権限を取得している場合、他のユーザーが所有するファイルおよびディレクトリのバックアップを行うことができます。
- UNIX システムの場合: リンクであるファイルを指定して bpbakcup を実行すると、リンク先のファイルではなく、そのリンク自身のバックアップだけが行われます。
- bpbakcup を実行しても、ディレクトリエントリ[.]または[..]のバックアップは行われません。

デフォルトでは、bpbakcup が正常に発行されると、システムプロンプトに戻ります。このコマンドはバックグラウンドで実行され、完了状態はユーザーに直接戻されません。`-w` オプションを指定すると、コマンドがフォアグラウンドで実行されるように変更できます。指定された時間の経過後は完了状態が戻されます。

bpbakcup コマンドの実行前にファイルを作成し、`-L progress_log` オプションでこのファイルを指定した場合、bpbakcup を実行すると、情報メッセージおよびエラーメッセージが進捗ログファイルに書き込まれます。bpbakcup を実行しても、要求されたファイルまたはディレクトリのバックアップが行われない場合、この進捗ログを使用して、エラーの原因を判断することができます。

メモ: `-L` オプションは、NDMP クライアントではサポートされていません。

すべてのユーザーによる書き込みを許可して次のディレクトリを作成した場合、bpbakcup を実行すると、このディレクトリにデバッグログファイルが作成され、トラブルシューティングに使用できます。

On Windows systems: `install_path¥NetBackup¥logs¥bpbakcup¥`

On UNIX systems: `usr/openv/netbackup/logs/bpbakcup/`

ユーザーが次のように指定した場合、バックアップ処理の完了時に、NetBackup によってバックアップ完了状態を通知するメールが `mail_address` に送信されます。

- `root` 以外のユーザーが `$HOME/bp.conf` ファイルに `USEMAIL = mail_address` を指定する

- root ユーザーが `/usr/opensv/netbackup/bp.conf` ファイルに `USEMAIL = mail_address` を指定する

オプション

`-dssu DSSUname`

このオプションを指定すると、ディスクスレージングストレージユニットに関連付けられたスケジュールがすぐに実行されます。`-i` オプションは暗黙的に指定される動作であるため、指定する必要はありません。

`-f listfile`

このオプションでは、バックアップを行うファイルのリストを含むファイル (*listfile*) を指定します。このオプションは、**filenames** オプションの代わりに使用できますが、`-i` オプションと同時に使用できません。各ファイルは、個別の行に表示されます。

ファイルリストに必要な形式は、ファイル名に空白、改行文字または復帰文字が含まれるかどうかによって異なります。

名前に空白、改行文字または復帰文字が含まれないファイルのバックアップを行うには、次の形式を使用します。

filepath

ここで、**filepath** は、バックアップを行うファイルへのパスです。

UNIX システムでは、`/home`、`/etc`、`/var` などがあります。

Windows システムでは、`c:\Programs`、`c:\winnt`、`c:\documents\old_memos` などがあります。

名前に空白、改行文字または復帰文字が含まれるファイルのバックアップを行うには、次の形式を使用します。

filepathlen filepath

ここで、**filepath** は、バックアップを行うファイルへのパスです。また、**filepathlen** はファイルパスの文字数です。

UNIX システムでの例は次のとおりです。

```
5 /home
4 /etc
4 /var
19 /home/abc/test file
```

Windows システムでの例は次のとおりです。

```
11 c:¥Programs
8 c:¥winnt
22 c:¥documents¥old memos
```

filenames

このオプションでは、バックアップを行う 1 つ以上のファイル名を指定します。このオプションは `-f` オプションの代わりに使用できますが、`-i` オプションと同時に使用できません。すべてのファイルは、他のすべてのオプションに続いて、最後に指定する必要があります。

`-h hostname`

このオプションでは、バックアップを行うクライアントホスト名を指定します。このオプションを指定しない場合、**NetBackup** によって、ポリシーに存在するすべてのクライアントでバックアップが行われます。

`-i`

このオプションを指定すると、即時手動バックアップが開始されます。これは、**NetBackup** の管理コンソールから開始される手動バックアップと同じです。`-i` オプションを使用するには、マスターサーバーの管理者である必要があります。

`-instance instance_name`

このオプションでは、バックアップを作成する **Oracle** インスタンスの名前を指定します。ポリシー形式 (`-t`) は **4 (Oracle)** に設定する必要があります。このオプションを使うときは `-h` オプションを指定する必要があるほか、マスターサーバーの管理者である必要があります。

`-k keyword_phrase`

このオプションでは、このバックアップ操作で作成されるイメージに関連付けるキーワード句を指定します。その後、`bprestore` で `-k` オプションを使用して、キーワード句を指定し、イメージのリストアを行うことができます。

`-i` オプションと `-k` オプションを同時に使用すると、**NetBackup** によって、キーワード句、バックアップポリシーおよびバックアップイメージが関連付けられます。

キーワード句は、バックアップのテキスト形式の記述で、**128** 文字以内で指定します。

UNIX システムでは、空白 (「」) およびピリオド (「`.`」) を含むすべての印字可能な文字列を指定できます。キーワード句は、二重引用符 (「`...`」) または一重引用符 (「`'...'`」) で囲み、**UNIX** シェルとの競合を回避する必要があります。

Windows システムでは、空白 (「」) およびピリオド (「`.`」) を含むすべての印字可能な文字列を指定できます。キーワード句は、二重引用符 (「`...`」) または一重引用符 (「`'...'`」) で囲んでください。

デフォルトのキーワード句は **NULL (空)** 文字列です。

-L *progress_log* [-en]

このオプションでは、進捗情報を書き込むファイル名を指定します。ファイルが存在しない場合、**NetBackup** によってファイルが作成されます。

Windows システムでは `c:\¥proglog` になります。

UNIX システムでは `/home/tlc/proglog` になります。

デフォルトでは、進捗ログは使用されません。

-L オプションは、**NDMP** クライアントではサポートされていません。

-en オプションを指定すると、進捗ログが英語で生成されます。ログ名には文字列 `[_en]` が含まれます。このオプションは、異なるロケールで様々な言語のログが作成される分散環境において有効です。

-p *policy*

このオプションでは、バックアップに使用するポリシー名を指定します。

このオプションを指定しない場合、検出されたクライアントを含む最初のポリシーおよびユーザーバックアップのスケジュールが使用されます。

-p オプションは、即時手動バックアップ (**-i** オプション) に必要です。

-s *schedule*

このオプションでは、バックアップに使用するスケジュール名を指定します。名前を指定しない場合、**NetBackup** サーバーでは、そのクライアントが現在使用しているポリシー内で最初に検出されたユーザーアーカイブスケジュールが使用されます。

-p オプションを参照してください。

-S *master_server* [, *master_server*, ...]

UNIX システムでは、**-s** で **NetBackup** マスターサーバー名を指定します。デフォルトは、`/usr/opensv/netbackup/bp.conf` ファイルで最初に検索された `SERVER` エントリです。

Windows システムでは、**-S** で **NetBackup** マスターサーバー名を指定します。デフォルトは、**[NetBackup マシンおよびポリシー形式の指定 (Specify NetBackup Machines and Policy Type)]** ダイアログボックスの **[サーバー (Servers)]** タブで操作対象として指定されているサーバーです。このダイアログボックスを表示するには、クライアント上でバックアップ、アーカイブおよびリストアインターフェースを起動します。次に **[ファイル (File)]** メニューから **[NetBackup マシンおよびポリシー形式の指定 (Specify NetBackup Machines and Policy Type)]** を選択します。

-t *policy_type*

このオプションでは、ポリシー形式に対応する次のいずれかの番号を指定します。

Windows クライアントのデフォルトは 13、他のすべてのデフォルトは 0 です。

0 = Standard

- 4 = Oracle
- 6 = Informix-On-BAR
- 7 = Sybase
- 8 = MS-SharePoint
- 10 = NetWare
- 13 = MS-Windows
- 14 = OS/2
- 15 = MS-SQL-Server
- 16 = MS-Exchange-Server
- 19 = NDMP

次のポリシー形式は、NetBackup Enterprise Server だけに適用されます。

- 11 = DataTools-SQL-BackTrack
- 17 = SAP
- 18 = DB2
- 20 = FlashBackup
- 21 = Split-Mirror
- 22 = AFS
- 39 = Enterprise-Vault

-w [hh:mm:ss]

このオプションを指定すると、NetBackup はサーバーから完了状態が送信されるまで待機し、その後、システムプロンプトに戻ります。

必要に応じて、待機時間を時間、分、秒で指定できます。指定可能な最大待機時間は、**23:59:59** です。バックアップが完了する前に待機時間が経過すると、コマンドはタイムアウト状態で終了されます。ただし、サーバー上ではバックアップが完了します。

bpbakup -w オプションを指定すると、シェルは戻りコードを待機します。オペレーティングシステムシェルは、1 つの戻りコードのみを戻すことができます。そのため、待機時間を指定せずに -w を使用する場合、または待機時間の値に 0 (ゼロ) を指定している場合、NetBackup は無制限に完了状態で待機します。

-w オプションとともに bpbakup -i を使用して、手動または管理バックアップを開始することができます。この形式のバックアップは、ポリシー属性に基づいているため、複数のジョブの開始が可能です。手動バックアップで複数のジョブを開始した場合、-w オプションは 1 つの戻りコードのみをシェルに戻します。

-w オプションとともに -i オプションを使用して複数のジョブを開始する場合、完了状態が戻される前に、NetBackup はすべてのジョブが完了するまで待機します。ただし、NetBackup によってシェルに戻される状態コードは 1 つのみであるため、状態コードが属するジョブ ID が不明になります。

複数のクライアントによって複数のジョブが実行されていて、[複数のデータストリームを許可する (Allow Multiple Data Streams)]が選択されていない場合、-h オプションを指定して操作を 1 つのクライアントに制限します。ただし、ポリシーに[複数のデータストリームを許可する (Allow Multiple Data Streams)]を選択しても、選択したクライアントに複数のジョブが存在する場合、戻される状態コードは再び不明になります。

例

例 1 - 1 つのファイルのユーザーバックアップが行われます。

UNIX システムの場合: # bpbbackup /usr/user1/file1

Windows システムの場合: # bpbbackup c:\users\user1\file1

例 2 - backup_list というファイルに一覧表示されたファイルのユーザーバックアップが開始されます。

```
# bpbbackup -f backup_list
```

例 3 - cis_co というポリシーの diablo というクライアントホストの即時手動バックアップが(改行せずにすべてを 1 行で)開始されます。このポリシー形式は Standard ポリシーで、hoss というマスターサーバーの構成に存在します。

UNIX の場合: # bpbbackup -p cis_co -i -h diablo -S hoss -t 0

Windows の場合: # bpbbackup -p cis_co -i -h diablo -S hoss -t 0

例 4 - Windows システムの場合: 次のコマンドを実行すると、キーワード句[Backup My Home Directory 01/01/01]がディレクトリ C:\home\kwc のユーザーバックアップに関連付けられます。(コマンドは、改行せずに 1 行で入力します。)

```
# bpbbackup -k "Backup My Home Directory 01/01/01" -L  
c:\home\kwc\bkup.log C:\home\kwc
```

UNIX システムの場合: 次のコマンドを実行すると、キーワード句[Backup Home Dir 01/01/01]がディレクトリ /home/kwc のユーザーバックアップに関連付けられます。(コマンドは改行せずに 1 行で、または継続文字である円記号を使用して入力します。)

```
# bpbbackup -k "Backup Home Dir 01/01/01" -L /home/kwc/bkup.log ¥  
/home/kwc
```

例 5 - キーワード句「Policy Win 01/01/01」が `win_nt_policy` というポリシーの `slater` というクライアントホストの即時手動バックアップに関連付けられます。(コマンドは、改行せずにすべてを 1 行で入力します。)

UNIX の場合: # `bpbkbackup -k "Policy Win 01/01/01" -i -h slater %p win_nt_policy -t 13`

Windows の場合: # `bpbkbackup -k "Policy Win 01/01/01" -i -h slater -p win_nt_policy -t 13`

例6-ora ポリシーを使って、クライアントホスト `hookvm2` の Oracle インスタンス `orac11g` の手動バックアップが行われます。

```
# bpbkbackup -i -p ora -h hookvm2 -t 4 -instance orac11g
```

ファイル

UNIX システムの場合: `$HOME/bp.conf`

`/usr/opensv/netbackup/logs/bpbkbackup/log.mmdyy`

Windows システムの場合: `<install_path>%NetBackup%\logs\bpbkbackup%*.log`

関連項目

- p.50 の [bparchive](#) を参照してください。
- p.206 の [bplist](#) を参照してください。
- p.346 の [bprestore](#) を参照してください。

bpbakupdb

bpbakupdb – ホットカタログバックアップの開始

概要

```
bpbakupdb -p policy_name -s sched_label
```

UNIX システムでは、このコマンドのディレクトリパスは
/usr/opensv/netbackup/bin/admincmd/ です。
Windows システムでは、このコマンドのディレクトリパスは
<install_path>%NetBackup%\bin\admincmd\ です。

機能説明

bpbakupdb は指定のポリシーとスケジュールを使ってホットカタログバックアップを開始します。

「NetBackup インストールのローケルの指定について」の項を参照してください。
『NetBackup 管理者ガイド Vol. 2』。

NetBackup カatalogのバックアップ方法について詳しくは、次を参照してください。
『NetBackup 管理者ガイド Vol. 2』 for more information on how to back up NetBackup catalogs. NetBackup ユーティリティ bprecover を使用すると、bpbakupdb でバックアップされたカタログのリカバリが行われます。

ディザスタリカバリが必要な場合に NetBackup カatalogをリストアする方法について詳しくは、次を参照してください。『NetBackup トラブルシューティングガイド』 for more information on how to restore the NetBackup catalogs if a disaster recovery is required.

オプション

```
-p policy_name -s sched_label
```

-p と -s オプションを指定すると、ポリシーベースのホットカタログバックアップが実行されます。

bpcatarc

bpcatarc – NetBackup カタログのバックアップ

概要

```
bpcatarc [-version] [-remove_dotf]
```

UNIX システムでは、このコマンドのディレクトリパスは /usr/opensv/netbackup/bin/admincmd/ です。

Windows システムでは、このコマンドのディレクトリパスは <install_path>%NetBackup%\bin\admincmd% です。

機能説明

bpcatarc を実行すると、bpcatlist の出力が処理され、選択されたカタログのイメージ .f ファイルがバックアップされます。このバックアップのジョブ ID を使用して、イメージファイルの catarc フィールドが更新されます。

オプション

-version
このオプションを指定すると、bpcatarc のバージョンが表示されます。

-remove_dotf
このオプションを指定すると、アーカイブされたイメージの .f ファイルがすぐに削除されるため、bpcatrm を実行する必要がありません。

関連項目

- p.66 の [bpcatlist](#) を参照してください。
- p.69 の [bpcatres](#) を参照してください。
- p.70 の [bpcatrm](#) を参照してください。

bpcatlist

bpcatlist – NetBackup カタログの選択した部分の表示

概要

```
bpcatlist [-server server_name] [-client client_name] [-since [ctime  
| [-since-days nnn | -since-weeks nnn | -since-months nnn |  
-before-days nnn | -before-weeks nnn | -before-months nnn]] [-before  
[ctime | [-since-days nnn | -since-weeks nnn | -since-months nnn |  
-before-days nnn | -before-weeks nnn | -before-months nnn]] [-date  
ctime] [-policy policy_name] [-sched sched_name] [-id backup_id]  
[-catarc catarc_id] [-version] [-online | -offline]
```

UNIX システムでは、このコマンドのディレクトリパスは

`/usr/opensv/netbackup/bin/admincmd/` です。

Windows システムでは、このコマンドのディレクトリパスは

`<install_path>%NetBackup%\bin\admincmd\` です。

機能説明

bpcatlist は、すべてのカタログアーカイブ操作の起点になります。bpcatlist を使用して、操作対象である NetBackup カタログの特定の部分を選択します。bpcatarc、bpcatres または bpcatrm で選択されるすべての files-file (NetBackup カタログで最大のファイルであり、イメージ .f ファイルと呼ばれる) は、最初に bpcatlist で選択されます。bpcatlist の出力は、実行する操作にパイプを介して渡されます。

オプション

`-server server_name`

このオプションでは、NetBackup サーバー名を指定します。デフォルトでは、**server_name** は、bp.conf ファイルに表示されている最初のサーバー名です。

`-client client_name`

このオプションを指定すると、**client_name** のバックアップイメージのリストが作成されます。デフォルトでは、**client_name** は、bp.conf の CLIENT_NAME または現在のホスト名です。

すべてのクライアントを選択するには、`-client all` を使用します。

`-since [ctime | [-since-days nnn | -since-weeks nnn | -since-months
nnn | -before-days nnn | -before-weeks nnn | -before-months nnn]]`

このオプションを指定すると、**ctime** で指定した時刻 (たとえば、Fri Oct 12 00:00:00 2012) 以降のバックアップイメージが表示されます。

年を指定しない場合、bpcatlist では、デフォルトで現在の年が使用されます。

次のコマンドを実行すると、2012 年 12 月 31 日以降のすべてのイメージが表示されます。

```
bpcatlist -since 2012
```

「例」の項にその他の例を示します。

```
-before [ctime | [-since-days nnn | -since-weeks nnn | -since-months  
nnn | -before-days nnn | -before-weeks nnn | -before-months nnn]]
```

このオプションを指定すると、**ctime** で指定した時刻 (たとえば, Fri Oct 12 00:00:00 2012) 以前のバックアップイメージが表示されます。年を指定しない場合、bpcatlist では、デフォルトで現在の年が使用されます。

```
-date ctime
```

このオプションを指定すると、**ctime** で指定した日付 (たとえば, Fri Oct 12 00:00:00 2012) のバックアップイメージが表示されます。日付を指定しない場合、bpcatlist では、デフォルトで現在の日付が使用されます。

「例」の項にその他の例を示します。

```
-catarc catarc_id
```

このオプションを指定すると、指定した **catarc_id** でアーカイブされた **files-file** が表示されます。次に例を示します。

```
-catarc 1022754972
```

```
-policy policy_name
```

このオプションを指定すると、指定したクライアントの **policy_name** によって作成されたバックアップが表示されます。

```
-sched sched_name
```

このオプションを指定すると、指定したクライアントの **schedule_name** によって作成されたバックアップが表示されます。

```
-id backup_id
```

このオプションを指定すると、指定した **backup_id** のリストが作成されます。

```
-online
```

このオプションを指定すると、オンラインの **files-file** だけが表示されます。

```
-offline
```

このオプションを指定すると、オフラインの **files-file** だけが表示されます。

```
-version
```

このオプションを指定すると、bpcatlist のバージョンが表示されます。

例

表示される日付は、**ctime** (たとえば、Fri Mar 16 00:00:00 2012) の日付形式で指定する必要があります。表示された日付をコピーし、変更することなく指定することができます。

例 1 - 特定の日時のバックアップを表示します。

```
# bpcatlist -date Mon Aug 19 14:16:28 2013
```

例 2 - 現在の年で 2 つの日付を指定し、その間のすべてのバックアップを表示します。年を指定しない場合、デフォルトで現在の年が使われます。

```
# bpcatlist -since Fri Jul 5 00:00:00 -before Mon Aug 2 00:00:00
```

例 3 - 2 カ月前から 3 カ月前の間のバックアップを表示します。

```
# bpcatlist -before-months 2 -since-months 3
```

-since および -before では、次の値を使用して同じ設定を行うことができます。

```
-since-days nnn  
-since-weeks nnn  
-since-months nnn  
-before-days nnn  
-before-weeks nnn  
-before-months nnn
```

たとえば、-since-days 14 と -since-weeks 2 は同じ設定です。

関連項目

p.65 の [bpcatarc](#) を参照してください。

p.69 の [bpcatres](#) を参照してください。

p.70 の [bpcatrm](#) を参照してください。

bpcatres

bpcatres – NetBackup カタログのリストア

概要

```
bpcatres [-version]
```

UNIX システムでは、このコマンドのディレクトリパスは
/usr/opensv/netbackup/bin/admincmd/ です。
Windows システムでは、このコマンドのディレクトリパスは
<install_path>%NetBackup%\bin\admincmd% です。

機能説明

bpcatres を実行すると、bpcatlist の出力が処理され、選択されたカタログのイメージ .f ファイルがリストアされます。

オプション

-version
このオプションを指定すると、bpcatres のバージョンが表示されます。

関連項目

- p.65 の [bpcatarc](#) を参照してください。
- p.66 の [bpcatlist](#) を参照してください。
- p.70 の [bpcatrm](#) を参照してください。

bpcatrm

bpcatrm – NetBackup カタログの削除

概要

```
bpcatrm [-version]
```

UNIX システムでは、このコマンドのディレクトリパスは /usr/opensv/netbackup/bin/admincmd/ です。

Windows システムでは、このコマンドのディレクトリパスは <install_path>%NetBackup%\bin\admincmd\ です。

機能説明

bpcatrm を実行すると、bpcatlist または bpcatarc の出力が処理され、選択されたカタログのイメージ .f ファイルが削除されます。これらのイメージファイルには、有効な catarc ID が存在します。

オプション

-version
このオプションを指定すると、bpcatrm のバージョンが表示されます。

関連項目

- p.65 の [bpcatarc](#) を参照してください。
- p.66 の [bpcatlist](#) を参照してください。
- p.69 の [bpcatres](#) を参照してください。

bpcd

bpcd – NetBackup Client デーモン。NetBackup クライアントおよびサーバーが、NetBackup サーバーからの要求を受け入れられるようにします。

概要

bpcd [-standalone] [-debug] [-portnum *number*] [-keyfile] [-terminate]
UNIX システムでは、このコマンドのディレクトリパスは /usr/opensv/netbackup/bin/ です。

Windows システムでは、このコマンドのディレクトリパスは
<install_path>%NetBackup%bin% です。

機能説明

Windows システムでは、bpcd は通信デーモンです。NetBackup Client Service の bpinetd によって起動されます。UNIX システムでは、通常、bpcd は inetd によって起動されます。

bpcd デーモンが起動されると、NetBackup サーバーからの要求が受け入れられます。要求には次のものがあります。

- バックアップジョブとリストアジョブの開始
- NetBackup 構成パラメータの取得
- NetBackup 構成パラメータの設定

クライアントに NetBackup をインストールするとき、通常、インストール処理では次の場所に bpcd のエントリが追加されます。

- UNIX クライアントの場合: /etc/services と /etc/inetd.conf
- Windows クライアントの場合: %SystemRoot%\system32\drivers\etc\services services エントリは、次のようになります。

```
bpcd 13782/tcp bpcd
```

UNIX システムの inetd.conf エントリは、次のようになります。

```
bpcd stream tcp nowait root /usr/opensv/netbackup/bin/bpcd bpcd
```

オプション

次のオプションは UNIX クライアントでのみ利用可能であり、-standalone オプションがアクティブであることを意味します。

- debug

bpcd の **fork** が回避され、標準入出力およびエラーによって **bpcd** が切断されません。
- keyfile

-keyfile を指定すると、**NetBackup** のパスフレーズを入力するプロンプトが表示されます。このパスフレーズによって、bpcd による **NetBackup** 暗号化鍵ファイルへのアクセスが可能になります。

詳しくは、「鍵ファイルの追加によるセキュリティの向上」を参照してください。
『[NetBackup セキュリティおよび暗号化ガイド](#)』。
- portnum *number*

このオプションでは、bpcd によって要求が待機されるポート番号を指定します。デフォルトは、/etc/services ディレクトリの bpcd エントリです。
- standalone

inetd に **NetBackup** の起動を要求するのではなく、bpcd を継続的に実行させます。-standalone は **NetBackup** を起動するデフォルト条件です。
- terminate

NetBackup Client Service (bpcd) を停止します。

関連項目

- p.77 の [bpclient](#) を参照してください。
- p.199 の [bpkeyfile](#) を参照してください。

bpchangeprimary

bpchangeprimary - バックアップのコピーをプライマリコピーに昇格

概要

```
bpchangeprimary -copy number | -pool volume_pool | -group volume_group  
[-id backup_id] [-M master_server]
```

```
bpchangeprimary -copy number | -pool volume_pool | -group volume_group  
[-sl schedule_name] [-pn policy_name] [-st schedule_type] [-pt  
policy_type] [-cl client_name] [-kw keyword] [-sd date time] [-ed  
date time] [-M master_server]
```

UNIX システムでは、このコマンドのディレクトリパスは

/usr/opensv/netbackup/bin/admincmd/ です。

Windows システムでは、このコマンドのディレクトリパスは

<install_path>%NetBackup%\bin\admincmd\ です。

機能説明

bpchangeprimary コマンドを実行すると、一連のバックアップイメージのコピーをプライマリコピーに変更することができます。コピー番号、ボリュームプールまたはボリュームグループを指定して、プライマリコピーに昇格させるコピーを選択できます。対象のバックアップイメージを識別するために、任意の追加条件を適用することもできます。

バックアップのプライマリコピーとは、リストア処理で使用されるコピーです。プライマリコピーがリストアに使用できることを確認します。たとえば、バックアップコピーの 1 つをオフサイトに送付した場合、オンサイトに残るコピーをプライマリコピーに変更します。

bpchangeprimary コマンドを実行すると、指定した条件に一致するすべてのバックアップが検出され、そのコピー番号がプライマリコピーに更新されます。-copy オプションを使用する場合、指定したコピー番号がプライマリコピーになります。-group オプションまたは -pool オプションを使用すると、指定したボリュームグループまたはボリュームプールに属するすべてのメディア ID が識別されます。次に、それらのメディア上に存在するすべてのコピーがプライマリコピーに変更されます。

オプション

次の 3 つのオプションのいずれか 1 つのみが必要になります。

-copy number

このオプションでは、プライマリコピーに昇格させるバックアップコピーの番号を指定します。

`-pool volume_pool`

このオプションでは、プライマリコピーに昇格させるコピーが存在するメディアが属するボリュームプールを指定します。

`-group volume_group`

このオプションでは、プライマリコピーに昇格させるコピーが存在するメディアが属するボリュームグループを指定します。

次の任意の追加条件を 1 つ以上組み合わせて、プライマリコピーに昇格させるコピーの指定に加えることができます。

`-cl client_name`

このオプションでは、変更するバックアップのクライアント名を指定します。この名前は、NetBackup カタログに表示される名前と一致している必要があります。指定した `-pool`、`-group` または `-copy` オプションに該当するバックアップイメージのコピーがプライマリコピーに昇格します。デフォルトはすべてのクライアントです。

`-sd date time, -ed date time`

このオプションでは、プライマリコピーを変更するバックアップイメージの開始日付 (`-sd`) または終了日付 (`-ed`) を指定します。

NetBackup コマンドの日時の値に求められる形式は、使用しているロケールによって異なります。/user/opensv/msg/.conf ファイル (UNIX) と

install_path¥VERITAS¥msg¥LC.CONF ファイル (Windows) はそれぞれのサポート対象ロケールの日時形式などのデータを含んでいます。これらのファイルには、サポートされているロケールおよび書式のリストを追加および変更するための方法が含まれています。

システムのロケールについて詳しくは、「NetBackup インストールのロケールの指定について」の項を参照してください。『NetBackup 管理者ガイド Vol. 2』。

デフォルトの開始日付は 1970 年 1 月 1 日で、実際にはすべてのイメージが検索されます。`-sd` オプションを指定せずに `bpchangeprimary` を実行した場合、1970 年 1 月 1 日以降に作成されたバックアップのプライマリコピーを変更するかどうかを確認するように求められます。デフォルトの終了日付は、現在の日付です。有効な日時の範囲は、01/01/1970 から 01/19/2038 です。

`-id backup_id`

このオプションでは、プライマリコピーを変更するバックアップイメージのバックアップ ID を指定します。`-id backup_id` によって、指定した `-pool`、`-group` または `-copy` オプションに該当するバックアップイメージのコピーが変更されます。

`-id` を指定すると、`-M` オプションを使って代替マスターサーバーを指定できます。`-pool`、`-group` または `-copy` のいずれかを指定します。

`-kw keyword`

このオプションでは、プライマリコピーを変更するバックアップイメージを識別するときに NetBackup で使用されるキーワード句を指定します。

-M master_server

このオプションでは、変更するバックアップが属するマスターサーバーを指定します。
-M master_server によって、指定した **-pool**、**-group** または **-copy** オプションに該当するバックアップイメージのコピーがプライマリコピーに昇格されます。

このオプションを使用する場合、指定したマスターサーバー上で変更するバックアップイメージは、他のオプションを指定して決定します。サーバーによって、**bpchangeprimary** コマンドを発行するシステムからのアクセスが許可されている必要があります。デフォルトは、**bpchangeprimary** を実行するシステムのマスターサーバーです。

-pn policy_name

このオプションでは、プライマリコピーを変更するバックアップのバックアップポリシー名を指定します。デフォルトはすべてのポリシーです。

-pt policy_type

このオプションでは、プライマリコピーを変更するバックアップのバックアップポリシー形式を指定します。デフォルトはすべてのポリシー形式です。**policy_type** は、次のいずれかの文字列です。

AFS
Auspex-FastBackup
DataStore
DataTools-SQL-BackTrack
DB2
Enterprise-Vault
FlashBackup
FlashBackup-Windows
Informix-On-BAR
LotusNotes
MS-Exchange-Server
MS-Hyper-V
MS-SharePoint
MS-SQL-Server
MS-Windows
NDMP
NetWare
Oracle
OS/2
PureDisk-Export
SAP
Split-Mirror
Standard
Sybase

Vault
VMware

-sl *schedule_name*
このオプションでは、プライマリコピーを変更するバックアップイメージのスケジュール名 (ラベル) を指定します。デフォルトでは、bpchangeprimary ではすべてのスケジュールが使用されます。

-st *schedule_type*
このオプションでは、プライマリコピーを変更するバックアップイメージのスケジュール形式を指定します。デフォルトでは、bpchangeprimary ではすべてのスケジュール形式が使用されます。次に、有効な値を示します。

FULL (完全バックアップ)
INCR (差分増分バックアップ)
CINC (累積増分バックアップ)
UBAK (ユーザーバックアップ)
UARC (ユーザーアーカイブ)
NOT_ARCHIVE (ユーザーアーカイブ以外のすべてのバックアップ)

例

例 1 - ボリュームプール SUN に属するメディア上に存在し、2012 年 8 月 1 日以降に作成されたすべてのコピーをプライマリコピーに昇格します。

```
# bpchangeprimary -pool SUN -sd 08/01/2012
```

例 2 - クライアント oak の、2012 年 1 月 1 日以降に作成されたすべてのバックアップのコピー 2 をプライマリコピーに昇格します。

```
# bpchangeprimary -copy 2 -cl oak -sd 01/01/2012
```

例 3 - バックアップポリシー Offsite によって 2011 年 8 月 1 日以降に作成されたすべてのバックアップのコピー 4 をプライマリコピーに昇格します。

```
# bpchangeprimary -copy 4 -pn Offsite -sd 08/01/2011
```

bpclient

bpclient – マスターサーバー上のクライアントエントリの管理

概要

```
bpclient -All [-M master_server] [-l | -L | -H]
bpclient -client client_name [-M master_server] [-l | -L | -H]
bpclient -client client_name [-M master_server] -add | -update
[-dynamic_address 0|1] [-free_browse 0|1|2] [-list_restore 0|1|2|3]
[-max_jobs [1-99] [-current_host host_name] [[-online] | [-offline
[[-ut] -onlineat time]]] [-WOFB_enabled 0|1] [-WOFB_FIM 0|1]
[-WOFB_usage 0|1] [-WOFB_error 0|1] [-connect_options 0|1|2 0|1|2
0|1|2|3] [-granular_proxy granular_proxy_host] [-client_direct 0|1|2]
[-client_direct_restore 0|1|2]
bpclient -client client_name [-M master_server] -delete
bpclient -client client_name -add_alias alias_name | -delete_alias
alias_name [-M master_server]
bpclient -client client_name -add_all_aliases | -delete_all_aliases
| -list_all_aliases [-M master_server]
UNIX システムでは、このコマンドのディレクトリパスは
/usr/opensv/netbackup/bin/admincmd/ です。
Windows システムでは、このコマンドのディレクトリパスは
<install_path>%NetBackup%\bin\admincmd\ です。
```

機能説明

bpclient コマンドを実行すると、NetBackup サーバーと NetBackup クライアントの接続状態が表示されます。

オプション

-add

このオプションを指定すると、新しいクライアントエントリが追加されます。

-add_alias | -delete_alias alias_name

クライアントエイリアスの新しいエントリを追加するか、または既存のクライアントエイリアスエントリを削除します。

-add_all_aliases | -delete_all_aliases | -list_all_aliases

次のいずれかを実行します。

- `-add_all_aliases` はすべてのクライアントエイリアスの新しいエントリを追加します。
- `-delete_all_aliases` はすべてのエイリアスを削除します。
- `-list_all_aliases` はすべてのエイリアスエントリのリストを出力します。

`-All`

このオプションを指定すると、すべてのクライアントエントリが表示されます。bpclient を実行して明示的に追加したクライアントエントリだけが表示されます。

`-client client_name`

このオプションでは、表示または更新するクライアント名を指定します。

`-client_direct 0 | 1 | 2`

Client Direct はクライアントにデータを転送するのにメディアサーバーの代わりに **OpenStorage** ストレージサーバーを使うことによってバックアップのパフォーマンスを改善します。`-client_direct` オプションの設定によって、クライアントがこの機能を使うかどうか、またいつ使うかが決まります。次の設定を使用できます。

0 = 指定のホストのデータ転送方式として **Client Direct** を使いません。常に通常のデータ転送方式を使用します。この設定は、デフォルトの条件です。

1 = **Client Direct** を優先的に使用する。バックアップの間に識別されたストレージサーバーの **Client Direct** 機能を精査します。精査に合格すれば、**NetBackup** は指定のクライアントで **Client Direct** のデータ転送方式を使います。精査に失敗すれば、通常のデータ転送方式を使用します。

2 = 常に **Client Direct** を使用する。指定のクライアントで **Client Direct** 方式のみの使用を試行します。この方式が何らかの理由で失敗すれば、ジョブは失敗します。他の転送の方式は試みられません。

`-client_direct_restore 0 | 1 | 2`

Client Direct Restore はクライアントにデータをリストアするのにメディアサーバーの代わりに **OpenStorage** ストレージサーバーを使うことによってリストアのパフォーマンスを改善します。`-client_direct` オプションの設定によって、クライアントがこの機能を使うかどうか、またいつ使うかが決まります。次の設定を使用できます。

0 = 指定のホストのデータ転送方式として **Client Direct Restore** を使いません。常に通常のデータ転送方式を使用します。この設定は、デフォルトの条件です。

1 = **Client Direct Restore** を優先的に使用します。このコマンドはリストア中に識別したストレージサーバーの **Client Direct Restore** 機能を精査します。精査に合格すれば、**NetBackup** は指定のクライアントで **Client Direct Restore** のデータ転送方式を使います。精査に失敗すれば、通常のデータ転送方式を使用します。

2 = 常に **Client Direct Restore** を使用します。指定のクライアントで **Client Direct Restore** 方式のみの使用を試行します。この方式が何らかの理由で失敗すれば、ジョブは失敗します。他の転送の方式は試みられません。

`-connect_options 0|1|2 0|1|2 0|1|2|3`

引数の最初のセットは、ポートについて、次のことを表しています。

0 = 予約済みポート: 予約済みのポート番号を使用します。

1 = 予約されていないポート: 予約されていないポート番号を使用して、クライアントの `bpclient` に接続します。このオプションを選択すると、選択したクライアントに対して [予約されていないポートを許可 (**Allow non reserved ports**)] が有効になります。

2 = デフォルトを使用する: これはデフォルトのオプションです。サーバーの `DEFAULT_CONNECT_OPTIONS` 構成エントリで定義された値を使用します。

引数の 2 番目のセットは、`BPCD` のコネクトバックについて、次のことを表しています。

0 = ランダムポート: `NetBackup` は許容範囲からランダムに空きポートを選択して、従来のコネクトバック方法を実行します。

1 = `VNETD` ポート: この方法はコネクトバックが不要です。`Veritas` ネットワークデーモン (`vnetd`) は、サーバー間の通信およびサーバーとクライアント間の通信中の `NetBackup` に関するファイアウォールの効率を拡張するように設計されています。

2 = デフォルトを使用する: デフォルトのオプションです。サーバーの `DEFAULT_CONNECT_OPTIONS` 構成エントリで定義された値を使用します。

引数の 3 番目のセットは、デーモン接続ポートについて、次のことを表しています。

0 = 自動: このオプションは、`VNETD` を使用できる場合は `VNETD` を使用し、使用できない場合はレガシーを使用することを意味しています。

1 = `VNETD` ポートを使用する

2 = レガシーポート番号を使用する

3 = デフォルトを使用する: デフォルトのオプションです。サーバーの `DEFAULT_CONNECT_OPTIONS` 構成エントリで定義された値を使用します。

メモ: `vnetd` をデーモン接続ポートとして使用する場合、`BPCD` でコネクトバックをする設定は適用されません。`vnetd` をデーモン接続ポートとして使用する場合は、ポート設定の値に関係なく、予約されていないポートが常に使用されます。

`-current_hostname host_name`

クライアントの現在のホスト名。このオプションは、`-dynamic_address 1` オプションを使用する場合にだけ有効です。通常は `-current_hostname` の値を入力する必要はありません。通常、クライアントは、マスターサーバーと通信してホスト名と IP アドレスを設定します。

`-delete`

このオプションを指定すると、既存のクライアントエントリが削除されます。

-dynamic_address 0 | 1

0 は、クライアント名がクライアントの有効なホスト名であると想定されます (デフォルト)。

1 は、クライアント名が動的なホスト名 (DHCP など) であると想定されます。

-free_browse 0 | 1 | 2

このオプションを指定すると、イメージ (所有者またはグループ) を表示するときにサーバーによって行われる確認を、ユーザーが回避できます。デフォルトでは、一般ユーザーには **Windows** 上のスケジュールバックアップを表示する権限が与えられません。

0 = 許可

1 = 拒否

2 = 使用

デフォルトでは、クライアントとサーバーの両方が 0 (許可) に設定されています。自由に表示するには、クライアントまたはサーバーのいずれかを 2 (使用) に設定する必要があります。両方とも 1 (拒否) に設定することはできません。

-granular_proxy granular_proxy_host

ソースクライアントの **Windows** の個別プロキシホストを指定します。このオプションは、個別リカバリテクノロジー (GRT) によって有効になるバックアップイメージを複製する場合に使うことができます。

-H

このオプションを指定すると、ホスト固有のクライアント情報が表示されます。

-l

このオプションを指定すると、クライアントの限られた情報が表示されます。

-L

このオプションを指定すると、詳細形式で、クライアントのすべての情報が表示されます。

-list_restore 0 | 1 | 2 | 3

このオプションをサーバー上で指定すると、特定のクライアントからの一覧表示要求およびリストア要求を拒否できます。クライアントデータベースの値は、bp.conf ファイルの設定より優先されます。

0 = 指定なし (デフォルト)

1 = 一覧表示要求とリストア要求の両方の許可

2 = 一覧表示要求だけ許可

3 = 一覧表示要求とリストア要求の両方の拒否

-M *master_server*

このオプションでは、クライアントエントリを含むマスターサーバー名を指定します。デフォルトのマスターサーバーは、ローカル構成の最初のサーバー名です。

-max_jobs [1-99]

このクライアントで同時に動作が許可されるジョブの最大数 (最大 99)。NetBackup 管理コンソールでこの項目を構成できます。項目名は [データストリームの最大数 (Maximum data streams)] です。この GUI を使ってこの機能を実行するには、次のように選択します。[ホストプロパティ (Host Properties)] > [マスターサーバー (Master Servers)] > (マスターサーバー名をダブルクリック) > [クライアント属性 (Client Attributes)]。

-online | offline

クライアントの状態をオンラインまたはオフラインに設定します。

-onlineat *time*

指定された時刻にクライアントの状態をオンラインに設定します。

-update

このオプションを指定すると、既存のクライアントエントリが更新されます。

-ut

時刻を UNIX 時間で指定します。

-WOFB_enabled 0 | 1

0 = *client_name* で指定したクライアントに対して Windows Open File Backup を無効にします。

1 = *client_name* で指定したクライアントに対して Windows Open File Backup を有効にします。

-WOFB_error 0 | 1

0 = エラー発生時にバックアップを中止する。スナップショットの作成後、およびそのスナップショットを使用して、ファイルシステム上の開いた状態のファイルまたは使用中のファイルをバックアップしているときに、スナップショット関連の問題が発生してバックアップが失敗した場合、バックアップを中断するように指定します。

1 = スナップショットを無効にして続行する。バックアップ中にスナップショットが無効になった場合に、バックアップのボリュームスナップショットを破棄するように指定します。バックアップは、Windows Open File Backup を無効にして続行されます。

-WOFB_FIM 0 | 1

0 = Windows Open File Backup のスナップショットプロバイダとして Volume Snapshot Provider (VSP) を使用します。VSP は NetBackup リリース 6.x を使うクライアントでのみサポートされます。NetBackup リリース 7.x を使うクライアントは VSS のみを使います。リリース 7.x のクライアントを実行し、このオプションで VSP を選択した場合、NetBackup は代わりに VSS を自動的に実行します。

1 = Windows Open File Backup のスナップショットプロバイダとして **Microsoft** ボリュームシャドウコピーサービス (VSS) を使用します。

-WOFB_usage 0|1

0 = 各ドライブのスナップショット。各ドライブのスナップショットをとるように指定します。このプロパティを有効にすると、スナップショットの作成およびファイルのバックアップは、ボリュームごとに順次行われます。

1 = グローバルドライブのスナップショット。グローバルドライブのスナップショットをとるように指定します。この場合、バックアップジョブ (複数ストリームのバックアップの場合はストリームグループ) でスナップショットが必要なすべてのボリュームで、スナップショットが一度にとられます。

例

例 1 - クライアント hagar がマスターサーバーのクライアントデータベースにあるかどうかを判別します。

```
# bpclient -client hagar -L
```

例 2 - マスターサーバーのクライアントデータベースに casper を追加します。それはまた casper で最大 **5** つの並列実行ジョブを実行することを可能にします。

```
# bpclient -client casper -add -max_jobs 5
```

例 3 - クライアント ollie に関するすべてのクライアント詳細情報を表示します。

```
# bpclient -client ollie -L
Client Name: ollie
Current Host:
    Hostname: ollie
    IP Address: 0.0.0.0
Dynamic Address:      no
Free Browse:         Allow
List Restore:        Not Specified
Max Jobs This Client: Not Specified
WOFB Enabled:        yes
WOFB FIM:            VSP
WOFB Usage:          Individual Drive Snapshot
WOFB Error Control:  Abort on Error
Client Direct:        Prefer to use client-side deduplication or
                       Prefer to move data direct to storage
Client Direct Restore: Move data via media server
OST Proxy:           Off
```

OST Proxy Server: Unspecified
Connect options: 2 2 3

bpclimagelist

bpclimagelist - クライアントの NetBackup イメージまたはリムーバブルメディアの状態レポートの生成

概要

```
bpclimagelist [-U | -Likelydate] [-Listseconds] [-client client_name]  
[-server server_name] [-BE] [-t FULL | INCR | CINC | UBAK | UARC |  
ANY | NOT_ARCHIVE] [-policy policy_name] [-keyword keyword_phrase]  
[-ct client_type] [-s mm/dd/yyyy HH:MM:SS] [-e mm/dd/yyyy HH:MM:SS]  
UNIX システムでは、このコマンドのディレクトリパスは /usr/opensv/netbackup/bin/ です。
```

Windows システムでは、このコマンドのディレクトリパスは
<*install_path*>%NetBackup%\bin% です。

機能説明

bpclimagelist コマンドはクライアントの NetBackup イメージまたはリムーバブルメディアの状態レポートを生成します。

オプション

- BE
Backup Exec によってバックアップされたイメージのみ表示します。
- client *client_name*
状態レポートが生成されるクライアントを指定します。
- ct *client_type*
指定されたクライアント形式に対してバックアップされるイメージのみ表示します。
client_type は整数として指定します。次に、有効な値を示します。
 - 0 - 標準 (UNIX ファイルシステムのバックアップの標準)
 - 4 - Oracle データベース
 - 6 - Informix データベース
 - 7 - Sybase データベース
 - 8 - Sharepoint
 - 10 - Netware
 - 13 - Windows (Windows ファイルシステムのバックアップの標準)
 - 15 - SQL Server

- 16 - Exchange
- 17 - SAP
- 18 - DB2
- 19 - NDMP
- 20 - FlashBackup
- 21 - 分割ミラー
- 29 - FlashBackup-Windows
- 30 - Vault
- 34 - ディスクステージング
- 35 - NetBackup カタログ
- 39 - Enterprise Vault

-e *mm/dd/yyyy HH:MM:SS*

表示の対象とする終了日時を指定します。後続の `-s` オプションの説明を参照してください。

-keyword *keyword_phrase*

このオプションでは、検索に使用する **NetBackup** のキーワード句を指定します。キーワード句は、事前にイメージに関連付けられているキーワード句に一致している必要があります。

-Likelydate

リストアのために使うバックアップイメージの開始をマーク付けする有用なタイムスタンプを検索します。通常、このタイムスタンプは最新の完全バックアップイメージの時刻です。他の引数なしで、このオプションは **1970年1月1日**以降の秒数(十進法)を戻します。また `-L` を指定することによってより詳しく、わかりやすい情報を手に入れることができます。

-Listseconds

タイムスタンプが秒単位で表示されるように指定します。

-policy *policy_name*

指定のポリシーを使うバックアップイメージをレポートします。デフォルトは、すべてのポリシーです。

-s *mm/dd/yyyy HH:MM:SS*, -e *mm/dd/yyyy HH:MM:SS*

表示の対象とする開始日時 (`-s`) と終了日時 (`-e`) を指定します。

`-s` オプションは、表示の対象とする開始日時を指定します。結果のリストには、指定した日時以降に実行されたバックアップまたはアーカイブ内のファイルだけが表示されます。

NetBackup コマンドの日時の値に求められる形式は、使用しているロケールによって異なります。/user/opensv/msg/.conf ファイル (UNIX) と

install_path¥VERITAS¥msg¥LC.CONF ファイル (Windows) はそれぞれのサポート対象ロケールの日時形式などの情報を含んでいます。これらのファイルには、サポートされているロケールおよび書式のリストを追加および変更するための、具体的な方法が含まれています。

システムのロケールについて詳しくは、「NetBackup インストールのロケールの指定について」の項を参照してください。『NetBackup 管理者ガイド Vol. 2』。

有効な日時の範囲は、01/01/1970 00:00:00 から 01/19/2038 03:14:07 です。デフォルトは、現在の日付の 6 か月前です。

-e オプションは、表示の対象とする終了日時を指定します。結果のリストには、指定した日時以前に実行されたバックアップまたはアーカイブ内のファイルだけが表示されます。開始日時と同じ形式を使用します。デフォルトは、現在の日時です。

-server server_name

このオプションでは、NetBackup サーバー名を指定します。デフォルト値は、bp.conf ファイルに表示されている最初のサーバー名です。

-t

このオプションでは、イメージを選択するためのスケジュール形式を指定します。デフォルトはすべての形式のスケジュールです。有効な値を次に示します。大文字でも小文字でも指定できます。

- FULL (完全バックアップ)
- INCR (差分増分バックアップ)
- CINC (累積増分バックアップ)
- UBAK (ユーザーバックアップ)
- UARC (ユーザーアーカイブ)
- ANY
- NOT_ARCHIVE (ユーザーアーカイブ以外のすべてのバックアップ)

-U

ユーザー表示形式。

bpcIntcmd

bpcIntcmd – NetBackup システムの機能のテストおよび NetBackup クライアント上でのファイバートランスポートサービスの有効化

概要

```
bpcIntcmd [-sv] [-pn] [-self] [-hn hostname] [-server NBU_master]  
[-ip ip_address] [-gethostname] [-is_local_host hostname] [-is_server  
hostname] [-is_media_server hostname] [-is_master_server hostname]  
[-is_emm_server hostname] [-get_local_client_patch_version]  
[-get_local_server_patch_version] [-check_vxss] [-check_vxss_with_host  
hostname] [-get_pbx_port hostname] [-get_remote_host_version hostname]  
[-reverse_name_lookup [allowed | restricted | prohibited]] [-sanclient  
[0 | 1]]
```

UNIX システムでは、このコマンドのディレクトリパスは `/usr/opensv/netbackup/bin/` です。

Windows システムでは、このコマンドのディレクトリパスは
`<install_path>%NetBackup%bin` です。

機能説明

bpcIntcmd コマンドを実行すると、NetBackup システムの機能がテストされ、それに関する情報が表示されます。また、NetBackup クライアント上でファイバートランスポートサービスが有効または無効になります。

オプション

`-check_vxss`

このオプションでは、NBAC がローカルシステムで正しく構成されているかどうかを検証されます。

`-check_vxss_with_host hostname`

このオプションでは、NBAC がリモートホスト *hostname* に接続できるようにローカルシステムで正しく構成されているかどうかを検証されます。

`-clear_host_cache`

NetBackup は DNS ルックアップを最小限に抑えるために、IP アドレスのマッピングにホスト名をキャッシュします。通常、NetBackup の各プロセスは自身のメモリ内キャッシュを持ちます。また、すべてのプロセスはファイルシステムに保存されたキャッシュを共有します。このオプションはファイルシステムの共有キャッシュのすべてのエントリを削除します。

ホスト名か IP アドレスが最近 DNS または他のホストのルックアップサービスで更新された場合、NetBackup のキャッシュは最大 1 時間同期しないことがあります。NetBackup がホスト名変更と同期しているようにするには、NetBackup を停止し、`bpcintcmd -clear_host_cache` を実行してから NetBackup を再起動します。

`-gethostname`

このオプションでは、ローカルシステムで NetBackup が使用しているホスト名が戻されます。

`-get_local_client_patch_version`

ローカルクライアントのパッチソフトウェアのバージョンを戻します。

`-get_local_server_patch_version`

ローカルサーバーのパッチソフトウェアのバージョンを戻します。

`-get_pbx_port hostname`

このオプションでは、**hostname** で認識された PBX ポート番号が表示されます。**hostname** が指定されない場合は、ローカルホストで認識された PBX ポート番号が表示されます。

`-get_remote_host_version hostname`

このオプションでは、**hostname** システム上で実行している NetBackup のバージョンが戻されます。

`-hn hostname`

このオプションでは、**hostname** ホストに関するホスト名、エイリアスおよび IP アドレス情報が戻されます。

`-ip ip_address`

このオプションでは、IP アドレス **ip_address** に関するホスト名、エイリアスおよび IP アドレス情報が戻されます。

`-is_emm_server hostname`

hostname がローカルシステムで EMM サーバーとして動作しているかどうかを検証されます。

`-is_local_host hostname`

このオプションでは、**hostname** がローカルシステムでネットワークインターフェースであるかどうかを検証されます。

`-is_master_server hostname`

このオプションでは、**hostname** がローカルシステムでマスターサーバーであるかどうかを検証されます。

`-is_media_server hostname`

このオプションでは、**hostname** がローカルシステムでメディアサーバーであるかどうかを検証されます。

-is_server *hostname*

このオプションでは、**hostname** がローカルシステムでマスターサーバーであるか、またはメディアサーバーであるかが検証されます。

-pn

このオプションでは、マスターサーバーで認識されているホスト名 (ピアネーム) が戻されます。

-reverse_name_lookup [allowed | restricted | prohibited]

NetBackup が IP からのホスト名の逆引き参照を使うことができるかどうかを指定します。この機能の使用は、許可、禁止または制限できます。

-sanclient [0 | 1]

0 - クライアント側のファイバートランスポート (FT) サービスを無効にします。このコマンドを実行すると、**NetBackup SAN** クライアントが通常のクライアント機能に戻されます。

1 - クライアント側の FT サービスを有効にします。**NetBackup** の通常のクライアントが事実上 **SAN** クライアントになります。

-self

このオプションでは、ローカルシステムに関する情報が戻されます。

-server *NBU_master*

このオプションでは、**NetBackup** マスターサーバーのホスト名情報が戻されます。

-sv

このオプションでは、マスターサーバーの **NetBackup** バージョンが戻されます。

関連項目

p.234 の [bpbnat](#) を参照してください。

bpclusterutil

bpclusterutil - クラスタ内の NetBackup の変更および構成

概要

```
bpclusterutil [-addnode NodeName] [-addSvc ServiceName] [-c] [-ci]
[-delete] [-deleteSvc ServiceName] [-depend ServiceName
DependServiceName] [-disableSvc ServiceName] [-display] [-enableSvc
ServiceName] [-freeze] [-isactive] [-iscluster] [-offline] [-online]
[-np] [-s [NBU | OC]] [-startagent] [-stopagent] [-unfreeze] [-vname]
bpclusterutil -r CLUSTEREDSERVICES servicename | CLUSTERGROUPNAME |
CLUSTERNAME clustername | CLUSTERTYPE [MSCS|VCS] | GLOBDBHOST nodename
| MONITORED_SERVICES servicename | NETBACKUPINSTALLPATH path |
NETBACKUPSHAREDDRIVE drive: | NETBACKUPTYPE [MASTER|MEDIA] |
NETWORKSELECTION network name | NODENAMES nodename | VIRTUALIPADDRESS
ip address | VIRTUALSERVERNAME virtual name | VIRTUALSUBNETMASK subnet
mask
bpclusterutil -rm CLUSTEREDSERVICES servicename | MONITORED_SERVICES
servicename
UNIX システムでは、このコマンドのディレクトリパスは /usr/opensv/netbackup/bin/ です。
Windows システムでは、このコマンドのディレクトリパスは
<install_path>%NetBackup%\bin% です。
```

機能説明

このコマンドはクラスタ内の NetBackup を修正し、構成します。NetBackup マスターサーバーおよびメディアサーバーで使用できます。

Windows では、このコマンドを使用すると、クラスタ構成に使用するレジストリエントリを設定し、クラスタを構成することができます。このコマンドは、ローカルノードのレジストリエントリのみを変更します。

オプション

-addnode *NodeName*

NetBackup グループのすべてのリソースの設定可能な所有者リストにノード名を追加します。このオプションは Windows システムでのみ利用可能です。

-addSvc "*Service Name*"

NetBackup クラスタグループに NetBackup サービスを追加します。

- c
レジストリに指定された値に基づいて、クラスタ内の **NetBackup** を構成し、**NetBackup** グループをオンラインにします。
- ci
レジストリに指定された値に基づいて、クラスタ内の **NetBackup** を構成しますが、**NetBackup** グループをオンラインにしません。
- delete
クラスタ内の **NetBackup** の構成に使用するレジストリエントリを削除します。
- depend "ServiceName" DependServiceName
Service Name のクラスタリソースを **DependServiceName** に依存するように設定します。このオプションは **Windows** システムでのみ利用可能です。
- deleteSvc "ServiceName"
NetBackup クラスタグループから既存の **NetBackup** サービスを削除します。**ServiceName** が二重引用符で囲まれていることを確認します。たとえば、キーマネジメントサービスの場合は "**NetBackup Key Management Service**" となります。
- disableSvc "ServiceName"
クラスタでの **NetBackup** サービスの監視を無効にします。
- display
クラスタ構成に使用されるレジストリエントリを表示します。このオプションは **Windows** システムでのみ利用可能です。
- enableSvc "ServiceName"
NetBackup クラスタグループに追加した **NetBackup** サービスをクラスタで監視できるようにします。
- freeze
NetBackup クラスタグループをフリーズします。このオプションは **UNIX** システムでのみ利用可能です。
- isactive
ノード上の **NetBackup** クラスタグループの状態を表示します。戻りコード **1** は、ノードがアクティブノードであることを示します。戻りコード **0** は、ノードが非アクティブノードであることを示します。
- iscluster
NetBackup のクラスタの状態を表示します。
- np
操作をサイレントモードにします (出力されません)。

-offline

クラスタの NetBackup グループにオフラインコマンドを発行します。

-online

クラスタの NetBackup グループにオンラインコマンドを発行します。

-r

対応する NetBackup クラスタ構成レジストリエントリを、指定した値に設定します。このオプションは Windows システムでのみ利用可能です。

CLUSTEREDSERVICES *servicename*

CLUSTEREDSERVICES レジストリエントリに **servicename** を追加します。一度に 1 つのサービス名のみを入力できます。サービス名を追加するには、コマンドを複数回実行します。サービス名は、サービスのサービス名プロパティと一致する必要があります。

CLUSTERGROUPNAME, CLUSTERNAME *clustername*, CLUSTERTYPE MSCS|VCS,
GLOBDBHOST *nodename*, MONITORED SERVICES *servicename*

MONITORED SERVICES レジストリエントリに **servicename** を追加します。一度に 1 つのサービス名のみを入力できます。サービス名を追加するには、コマンドを複数回実行します。サービス名は、サービスのサービス名プロパティと一致する必要があります。

NETBACKUPINSTALLPATH *path*, NETBACKUPSHAREDDRIVE *drive:*, NETBACKUPTYPE
MASTER|MEDIA, NETWORKSELECTION *network name*, NODENAMES *nodename*

NODENAMES を指定した場合、1 つのノード名のみを入力できます。ノード名を追加するには、コマンドを複数回実行します。

VIRTUALIPADDRESS *ip address*, VIRTUALSERVERNAME *virtual name*,
VIRTUALSUBNETMASK *subnet mask*, -rm

対応する NetBackup クラスタ構成レジストリエントリから値を削除します。

CLUSTEREDSERVICES *servicename*

CLUSTEREDSERVICES レジストリエントリから **servicename** を削除します。一度に 1 つのサービス名のみを入力できます。複数のサービス名を削除するには、コマンドを複数回実行します。サービス名は、サービスのサービス名プロパティと一致する必要があります。

MONITORED SERVICES *servicename*

MONITORED SERVICES レジストリエントリから **servicename** を削除します。一度に 1 つのサービス名のみを入力できます。複数のサービス名を削除するには、コマンドを複数回実行します。サービス名は、サービスのサービス名プロパティと一致する必要があります。

-s [NBU | OC]

クラスタ化されたサーバーの種類を選択します。指定できる値は NBU (NetBackup) と OC (OpsCenter) です。

- sharedpath
クラスタ化されたサーバーの共有パスを表示します。
- startagent
NetBackup VCS エージェントを起動します。
- stopagent
NetBackup VCS エージェントを停止します。
- unfreeze
NetBackup クラスタグループをアンフリーズします。このオプションは UNIX システムでのみ利用可能です。
- vname
NetBackup クラスタグループの仮想名を表示します。このオプションは UNIX システムでのみ利用可能です。

bpcompatd

bpcompatd – NetBackup Compatibility Service の実行

概要

```
bpcompatd [-max_time seconds] [-console] [-debug]
bpcompatd -alive [-debug]
bpcompatd -terminate [-debug]
bpcompatd -bpcd_connect clientname [-debug]
bpcompatd -bpdbm_connect hostname [-debug]
bpcompatd -bpjobd_connect hostname [-debug]
bpcompatd -bprd_connect hostname [-debug]
bpcompatd -robot_connect hostname robot_type [-debug]
bpcompatd -vmd_connect hostname [-debug]
```

UNIX システムでは、このコマンドのディレクトリパスは /usr/opensv/netbackup/bin/ です。

Windows システムでは、このコマンドのディレクトリパスは <install_path>%NetBackup%bin% です。

機能説明

このコマンドは、レガシー NetBackup サービスと通信するために、新しい NetBackup サービスによって内部的に使用されます。

オプション

-alive

このオプションでは、ローカルの bpcompatd デーモンまたはサービスが実行中であるかどうかテストされます。

-bpcd_connect *clientname*

このオプションでは、bpcompatd コマンドを使用して、*clientname* への bpcd 接続がテストされます。

-bpdbm_connect *hostname*

このオプションでは、bpcompatd コマンドを使用して、*hostname* への bpdbm 接続がテストされます。

-bpjobd_connect *hostname*

このオプションでは、bpcompatd コマンドを使用して、*hostname* への bpjobd 接続がテストされます。

-bprd_connect hostname

このオプションでは、bpcompatd コマンドを使用して、**hostname** への bprd 接続がテストされます。

-debug を指定した場合、デバッグログ情報が bpcompatd のデバッグログファイルではなく、標準エラー出力に書き込まれます。

これらのいずれのオプションも指定していない場合、bpcompatd はデーモン (UNIX の場合) またはサービス (Windows の場合) として実行されます。bpcompatd がデーモンまたはサービスとして実行される場合、次のオプションが利用可能になります。

-console

このオプションは、**Windows** にのみ適用できます。通常、bpcompatd はサービスマネージャを使用して実行します。-console オプションを使用して、コマンドラインから bpcompatd サービスを実行できます。

-debug

-debug を指定した場合、デバッグログ情報が bpcompatd のデバッグログファイルではなく、標準エラー出力に書き込まれます。**Windows** の場合、-console オプションが同時に指定されます。**UNIX** システムの場合、bpcompatd サービスはバックグラウンドで実行できません。

-max_time seconds

このオプションでは、ルーチンタスクを実行する前に新しい接続を待機する最大時間 bpcompatd を指定します。**UNIX** システムでは、デフォルトは **60** 秒です。

Windows システムではデフォルトは **1** 秒です。

-robot_connect hostname robot_type

このオプションでは、bpcompatd コマンドを使って、**robot_type** の **hostname** へのロボットデーモン接続がテストされます。

次に、有効なロボット形式を示します。

NONE: 非ロボット

ACS: 自動カートリッジシステム

TL4: 4MM テープライブラリ

TL8: 8MM テープライブラリ

TLD: DLT テープライブラリ

TLH: 1/2 インチテープライブラリ

TLM: マルチメディアテープライブラリ

-terminate

このオプションでは、実行中のローカルの bpcompatd デーモンまたはサービスを終了します。

-vmd_connect *hostname*

このオプションでは、bpcompatd コマンドを使用して、**hostname** への vmd 接続がテストされます。

bpconfig

bpconfig – NetBackup のグローバル構成属性の変更または表示

概要

```
bpconfig [-cd seconds] [-ha hours] [-kl days] [-kt days] [-ma  
[address]] [-sto seconds] [-mj number] [-period hours] [-prep hours]  
[-to seconds] [-max_copies number] [cleanup_int hours] [cleanup_wait  
minutes] [-tries times] [-wi minutes] [-pui minutes] [-v] [-M  
master_server,...]
```

```
bpconfig [-L | -l | -U [-v] [-M master_server,...]]
```

UNIX システムでは、このコマンドのディレクトリパスは

/usr/opensv/netbackup/bin/admincmd/ です。

Windows システムでは、このコマンドのディレクトリパスは

<install_path>%NetBackup%\bin\admincmd\ です。

機能説明

bpconfig を実行すると、NetBackup のグローバル構成属性が変更または表示されます。これらの属性は、すべてのポリシーおよびクライアントの操作に影響します。NetBackup 管理者の電子メールアドレス以外は、属性のデフォルト値はほぼすべてのインストールに適しています。

NetBackup インストールのロケールの指定に関する項を参照してください。『[NetBackup 管理者ガイド Vol. 2](#)』。

属性値の設定の影響については、NetBackup のグローバル属性に関する項を参照してください。『[NetBackup 管理者ガイド Vol. 1](#)』。

次に、bpconfig の 2 つの形式について記述します。

- bpconfig を 1 番目の形式で実行すると、1 つ以上の NetBackup のグローバル構成属性が変更されます。NetBackup のグローバル構成属性を変更するオプションは、コマンドラインに 1 つ以上必要です。
- bpconfig を 2 番目の形式で実行すると、NetBackup のグローバル構成属性の現行の設定が表示されます。詳しくは、「表示形式」を参照してください。

エラーは標準エラー出力 (stderr) に送信されます。コマンドのデバッグログは、現在の日付の NetBackup 管理ログファイルに送信されます。

オプション

`-cd seconds`

このオプションでは、カタログ圧縮の間隔を秒数で指定します。整数を指定した場合、イメージの作成後にこの秒数が経過すると、イメージが圧縮されます。この値は **86400** から **2147472000** の範囲で指定できます。デフォルトは **0** (ゼロ) です。この場合、圧縮は行われません。

イメージを圧縮解除するには `bpimage` コマンドを使います。

`-cleanup_int hours`

このオプションでは、カタログクリーンアップを行わない最小経過時間を時間単位で指定します。デフォルト値は **12** (時間) です。クリーンアップはカタログのバックアップ時には実行できないため、カタログバックアップに長時間を要する大規模な **24 × 7** 環境では、クリーンアップの実行間隔により短い時間 (例: **3** 時間) を設定する必要があります。このオプションの値に関係なく、イメージデータベースは、スケジュールバックアップのセッション終了時に自動的にクリーンアップされます。

このオプションは出力表示に [イメージデータベースクリーンアップ間隔 (Image DB Cleanup Interval)] として表示されます (例を参照)。

`-cleanup_wait minutes`

このオプションでは、イメージデータベースのカタログクリーンアップの実行間隔を分単位で指定します。デフォルト値は **60** 分です。このクリーンアップ待機間隔の間に複数のバックアップが行われた場合、クリーンアップ操作はこの期間に **1** 回だけ開始されます。この値は **0** (ゼロ) から **720** までの範囲で指定できます。

`-ha hours`

このオプションでは、**NetBackup** レポートエントリを選択する場合の時間範囲の開始時刻を指定します。時間範囲の終了時刻は現在の時間です。たとえば、**hours** に **24** を指定して、午前 **10:00** に [バックアップの状態 (Status of Backups)] レポートを要求すると、そのレポートには、昨日の午前 **10:00** から今日の午前 **10:00** までに行われたすべてのバックアップが含まれます。

この値は、一般的なレポートおよびメディアレポートの時間範囲を計算するために使用されます。一般的なレポートには、[バックアップの状態 (Status of Backups)]、[クライアントバックアップ (Client Backups)]、[問題 (Problems)] および [すべてのログエントリ (All Log Entries)] が含まれます。メディアレポートには、[メディアリスト (Media Lists)]、[メディアの概略 (Media Summary)]、[メディアの内容 (Media Contents)]、[メディア上のイメージ (Images on Media)] および [メディアのログ (Media Logs)] が含まれます。

hours には、**1** から **32767** までの正の整数を指定します。デフォルト値は **24** (時間) です。

-kl *days*

このオプションでは、ログを保持する日数を指定します。この数値によって、**NetBackup** マスターサーバーにエラーデータベースおよびデバッグログが保持される期間が決定されます。

NetBackup によって、エラーデータベースから[バックアップの状態 (**Status of Backups**)]レポート、[問題 (**Problems**)]レポート、[すべてのログエントリ (**All Log Entries**)]レポートおよび[メディアのログ (**Media Logs**)]レポートが生成されます。

この値を設定してレポートを保持する期間を制限します。この値は **1** から **32767** までの範囲で指定できます。デフォルトは **28** 日です。値を **0** (ゼロ) に指定すると、ログがオフに設定されます。

メモ: この属性は、リモートメディアサーバーまたはクライアントには影響しません (リモートメディアサーバーは、**NetBackup Enterprise Server** だけに適用されます)。

-kt *days*

このオプションでは、**True Image Recovery (TIR)** データを保持する日数を指定します。この値によって、**TIR** 情報の収集を指定するポリシーの **TIR** 情報が保持される期間が決まります。デフォルトは **1** 日です。値を **0** (ゼロ) に指定すると、**TIR** 情報がオフに設定されます。

-L

このオプションを指定すると、表示形式が詳細になります。詳しくは、「表示形式」を参照してください。

-l

このオプションを指定すると、表示形式が簡易になります。コマンドラインに表示形式オプションが含まれない場合 (bpconfig を入力して、改行する場合など)、このオプションがデフォルトになります。詳しくは、「表示形式」を参照してください。

-M *master_server,...*

グローバル構成属性が存在するマスターサーバー。

-ma [*address*]

このオプションでは、**NetBackup** 管理者の電子メールアドレスを指定します。正常に実行されなかった自動バックアップ、管理者主導の手動バックアップ操作および自動データベースバックアップの通知がこの電子メールアドレスに送信されます。デフォルトは、**NULL** (電子メールアドレスは未指定) です。

アドレスを指定しない場合、[管理者のメールアドレス (**Admin Mail Address**)]の現行の設定が消去されます。電子メール通知は、**NetBackup** 管理者に送信されません。

-max_copies number

バックアップごとの最大コピー数。この値は **2** から **10** までの範囲で指定できます。デフォルト値は **2** です。

-mj number

このオプションでは、クライアントごとの最大ジョブ数を指定します。この数は、クライアントが並列して実行可能なジョブの最大数です。正の整数を指定する必要があります。この値は **1** から **32767** までの範囲で指定できます。デフォルト値は **1** です。

-period hours

このオプションでは、(**-tries** で指定された)バックアップの試行回数に対応する時間間隔を指定します(「**-tries**」を参照)。この間隔 (時間単位で指定) に、クライアント、ポリシーおよびスケジュールによるバックアップジョブが、指定された回数まで試行されます。時間には正の整数を指定する必要があります。この値は **1** から **24** までの範囲で指定できます。デフォルト値は **12** 時間です。

メモ: この属性は、ユーザー主導のバックアップおよびアーカイブには適用されません。

-prep hours

このオプションでは、前処理間隔を指定します。この間隔は、**NetBackup** で自動検出ストリームモードが使用されている場合に、クライアントが新しいソパスを検索するために問い合わせを行う間隔の最小値 (時間) です。

デフォルト値は **4** 時間です。前処理間隔を変更した場合、デフォルトに戻すには **-prep -1** を指定します。bpconfig コマンドラインで、自動検出の前処理間隔に **0** (ゼロ) を指定することによって、前処理がすぐに実行されるように設定できます。最大値は **48** 時間です。

詳しくは、次を参照してください。『[NetBackup 管理者ガイド Vol. 1](#)』。

-pui minutes

ポリシーの更新間隔を指定します。これは、**NetBackup** ポリシーの更新を処理する間隔です。デフォルト値は **10** 分です。この値は **1** から **1440** (分) までの範囲で指定できます。

-sto seconds

このオプションでは、複数ホストメディアのマウントのタイムアウトを指定します。このタイムアウトは、共有メディアがマウントされ、位置設定されて、バックアップおよびリストアを開始できるようになるまで、**NetBackup** が待機する時間の長さ (秒単位) です。共有メディアが他のサーバーによって使用されている場合、このタイムアウトを使用して過剰な待機を回避します。デフォルトは **0** (ゼロ) です。タイムアウトは指定されません (待機時間は無制限です)。

複数ホストのドライブについて詳しくは、次を参照してください。『[NetBackup 管理者ガイド Vol. 1](#)』。

-to seconds

このオプションでは、メディアのマウントのタイムアウトを指定します。このタイムアウトは、要求されたメディアがマウントされ、位置設定されて、バックアップおよびリストアを開始できるようになるまで、**NetBackup** が待機する時間の長さ (秒単位) です。
-to を使用して、メディアのマウントを手動で行う必要がある場合 (たとえば、ロボットメディアがそのロボットまたはサイト外に存在する場合) に、過剰な待機を回避します。

デフォルトは **0** (ゼロ) です。タイムアウトは指定されません (待機時間は無制限です)。**seconds** が **0** でない場合、値の範囲は **1** から **32,767** 秒です。

-tries times

このオプションでは、構成済みの時間中にバックアップを再試行する回数を指定します («**-period**」を参照)。**NetBackup** では、任意のクライアント、ポリシー、スケジュールの組み合わせのバックアップジョブが、指定された回数試行されます。このオプションによって、繰り返しバックアップが失敗した場合の、バックアップの試行回数が制限されます。

メモ: この属性は、ユーザー主導のバックアップおよびアーカイブには適用されません。

-tries の値は **1** から **32767** の範囲で指定できます。デフォルトは **2** 回です。

-tries と **-period** の両方で、デフォルトを使用する場合、**NetBackup** では、バックアップが **12** 時間以内に **2** 回試行されます。

-U

このオプションを指定すると、表示形式がユーザーになります。詳しくは、「表示形式」を参照してください。

-v

このオプションを指定すると、ログの詳細モードが選択されます。このオプションはデバッグログ機能をオンにして実行される場合にだけ有効です。従って、次のディレクトリを定義する必要があります。

UNIX システムの場合: /usr/opensv/netbackup/logs/admin

Windows システムの場合: `install_path¥NetBackup¥logs¥admin`

-wi minutes

このオプションを指定すると、ジョブの再試行の遅延 (**Job Retry Delay**) が設定されます。このオプションでは、**NetBackup** によるジョブの再試行間隔を指定します。デフォルト値は **10** 分です。この値は **1** から **1440** (分) までの範囲で指定できます。

表示形式

bpconfig では、次の異なる 3 つの形式を使用して、NetBackup グローバル構成における属性の現行の値が表示されます。

- ユーザー表示形式 (-U)

コマンドラインに -U が含まれる場合、表示形式はユーザーになります。ユーザー表示形式は、bpadm と NetBackup グラフィカルユーザーインターフェースで使われる形式です。このオプションを指定すると、グローバル属性のリストが 1 行に 1 つの形式で生成されます。各行の形式は「グローバル属性記述子: 値」です。このリストは、グローバル属性の記述子がより明示的なことを除いて、-L 形式に類似しています。ユーザー表示形式の例を次に示します。

```
# bpconfig -U
Admin Mail Address:
Job Retry Delay:           1 minutes
Max Simultaneous Jobs/Client: 1
Backup Tries:              2 time(s) in 12 hour(s)
Keep Error/Debug Logs:    28 days
Max drives this master:    0
Keep TrueImageRecovery Info: 1 days
Compress DB Files:         (not enabled)
Media Mount Timeout:      0 minutes (unlimited)
Display Reports:          24 hours ago
Preprocess Interval:      0 hours
Maximum Backup Copies:    10
Image DB Cleanup Interval: 12 hours
Image DB Cleanup Wait Time: 60 minutes
Policy Update Interval:    10 minutes
```

- 詳細形式 (-L)

コマンドラインに -L が含まれる場合、表示形式は詳細になります。このオプションを指定すると、グローバル属性記述子: 値の形式で、各行に 1 つのグローバル属性が含まれるリストが生成されます。フィールドは次のとおりです。詳細形式の例を次に示します。

```
# bpconfig -L
Mail Admin:                *NULL*
Job Retry Delay:           1 minutes
Max Jobs/Client:           1
Backup Tries:              2 in 12 hours
Keep Logs:                 28 days
Max drives/master:         0
Compress DB Files:         (not enabled)
```

```
Media Int Timeout:      0 minutes (unlimited)
Display Reports:       24 hours ago
Keep TIR Info:        1 days
Prep Interval:        0 hours
Max Backup Copies:    10
DB Clean Interval:    12 hours
DB Clean Wait Time:   60 minutes
Policy Update Interval:10 minutes
```

■ 簡易形式 (-1)

bpconfig コマンドラインに -1 が含まれる場合、またはいずれの表示形式のオプションも含まれない場合、表示形式が短くなり簡易なリストが生成されます。このオプションは、カスタマイズされたレポート形式にリストを再生成するスクリプトまたはプログラムに対して有効です。このリストのレイアウトでは、すべてのグローバル属性の値が 1 行に含まれます。時間単位で表される属性は、属性の後ろのカッコ内に時間単位が表示されます。属性は空白で区切られ、次の順序で表示されます。簡易形式の例を次に示します。

```
# bpconfig -1
*NULL* 1 12 1 2 28 0 0 0 0 1 24 1 0 2 10 60
```

-1 で表示されたフィールドは、次のように解釈されます。

- **NetBackup** 管理者の電子メールアドレスは設定されていません。
- ジョブの再試行の遅延は 1 分です。
- 間隔は 12 時間です。
- クライアントごとの最大並列実行ジョブ数は 1 です。
- 間隔ごとの試行回数は 2 回です。
- ログの保持期間は 28 日です。
- このマスターサーバーの最大ドライブ数は 0 台です。
- カタログ圧縮の間隔は 0 秒です。0 (ゼロ) は圧縮されないことを意味します。
- メディアのマウントのタイムアウトは 0 秒です。0 (ゼロ) は無制限を意味します。
- 複数ホストメディアのマウントのタイムアウトは 0 秒です。0 (ゼロ) は無制限を意味します。
- 後処理のイメージフラグは 1 (即時) です。
- レポートの表示は 24 時間前からです。
- TIR 情報の保持期間は 1 日です。
- 前処理間隔は 0 時間です。

- カタログデータベースのクリーンアップ間隔は 2 時間です。
- カタログデータベースのクリーンアップ待機時間は 10 分です。
- ポリシーの更新間隔は 60 分です。

戻り値

終了状態が 0 (ゼロ) の場合は、コマンドが正常に実行されたことを意味します。終了状態が 0 (ゼロ) 以外の場合は、エラーが発生したことを意味します。

管理ログ機能が有効になっている場合、終了状態は、次のログディレクトリ内の管理日次ログに書き込まれます。

```
Windows: install_path¥NetBackup¥logs¥admin
```

```
UNIX: /usr/opensv/netbackup/logs/admin
```

次の形式が使用されます。

```
bpconfig: EXIT status = exit status
```

エラーが発生した場合、このメッセージの前に診断が表示されます。

例

例 1 - 次の例では、次のコマンドをマスターサーバー kiwi で実行して、マスターサーバー plim のグローバル属性の設定を表示します。

```
# bpconfig -U -M plim
Admin Mail Address:          ichabod@null.null.com
Job Retry Delay:             10 minutes
Max Simultaneous Jobs/Client: 1
Backup Tries:                1 time(s) in 8 hour(s)
Keep Error/Debug Logs:      6 days
Max drives this master:     0
Keep TrueImageRecovery Info: 1 days
Compress DB Files:          (not enabled)
Media Mount Timeout:        30 minutes
Display Reports:            24 hours ago
Preprocess Interval:        0 hours
Maximum Backup Copies:      10
Image DB Cleanup Interval:   12 hours
Image DB Cleanup Wait Time:  60 minutes
Policy Update Interval:     10 minutes
```


例 2 - 次の例では、カタログ圧縮の間隔を **604800** 秒に設定し、**8** 日以上経過したイメージが **NetBackup** によって圧縮されます。

```
# bpconfig -cd 604800
#bpconfig -U
Admin Mail Address:          *NULL*
Job Retry Delay:             10 minutes
Max Simultaneous Jobs/Client: 1
Backup Tries:                2 time(s) in 12 hour(s)
Keep Error/Debug Logs:      28 days
Max drives this master:      0
Keep TrueImageRecovery Info: 2 days
Compress DB Files:           older than 7 day(s)
Media Mount Timeout:         0 minutes (unlimited)
Display Reports:             24 hours ago
Preprocess Interval:         0 hours
Maximum Backup Copies:       10
Image DB Cleanup Interval:   12 hours
Image DB Cleanup Wait Time:  60 minutes
Policy Update Interval:      10 minutes
```

例 3 - 次の例では、メディアのマウントタイムアウトを **1800** 秒に設定します。

```
# bpconfig -to 1800
# bpconfig -U
Admin Mail Address:          sasquatch@wapati.edu
Job Retry Delay:             10 minutes
Max Simultaneous Jobs/Client: 1
Backup Tries:                1 time(s) in 12 hour(s)
Keep Error/Debug Logs:      3 days
Max drives this master:      0
Keep TrueImageRecovery Info: 24 days
Compress Image DB Files:     (not enabled)
Media Mount Timeout:         30 minutes
Display Reports:             24 hours ago
Preprocess Interval:         0 hours
Maximum Backup Copies:       10
Image DB Cleanup Interval:   12 hours
Policy Update Interval:      10 minutes
```

ファイル

UNIX システムの場合:

```
/usr/opensv/netbackup/logs/admin/*  
/usr/opensv/netbackup/db/config/behavior
```

Windows システムの場合:

```
install_path¥NetBackup¥db¥config¥behavior  
install_path¥NetBackup¥logs¥admin¥*
```

関連項目

p.158 の [bpimage](#) を参照してください。

複数ホストのドライブについて詳しくは、次を参照してください。『[NetBackup 管理者ガイド Vol. 1](#)』。

bpdjobs

bpdjobs – NetBackup ジョブデータベースと相互に作用

概要

```
bpdjobs [-report] [-M master_servers] [-ignore_parent_jobs] [ -vault  
| -lvault | -all_columns | -most_columns | -gdm ] [-file pathname]  
[-append] [-noheader] [-mastertime] [-t timestamp] [-jobid  
job1,job2,...jobn] [verbose]  
bpdjobs -summary [-M master_servers] [-ignore_parent_jobs] [ -U |  
-L | -all_columns ] [-file pathname] [-append] [verbose]  
bpdjobs -resume | -suspend | -delete | -cancel | -restart  
job1,job2,...jobn | type=jobtype | type=all [-M master_servers]  
[-quiet] [-reason "string"]  
bpdjobs -cancel_all [-M master_servers] [-reason "string"]  
bpdjobs -clean [-M master_servers] [ -keep_hours hours | -keep_days  
days ] [ -keep_successful_hours hours | -keep_successful_days days  
] [verbose]  
bpdjobs -version  
bpdjobs -change_priority_by [-M master_servers] -priority number  
-jobid job1,job2,...jobn  
bpdjobs -set_priority [-M master_servers] -priority number -jobid  
job1,job2,...jobn  
bpdjobs -fast  
UNIX システムでは、このコマンドのディレクトリパスは  
/usr/opensv/netbackup/bin/admincmd/ です。  
Windows システムでは、このコマンドのディレクトリパスは  
<install_path>%NetBackup%\bin\admincmd\ です。
```

機能説明

bpdjobs は、ジョブデータベースと相互作用します。このコマンドは、スクリプトまたはコマンドライン管理ツールとして有効です。ジョブデータベース全体の出力、データベースの概略の出力、完了したジョブの削除、未完了ジョブの取り消し、古いジョブの削除が実行されます。

bpdjobs の出力をカスタマイズするには、列を定義したエントリ (BPDBJOBS_COLDEFS) を **bp.conf** ファイルに追加します。

bp.conf ファイル、定義の詳細なリスト、BPDBJOBS_COLDEFS エントリについて詳しくは、次を参照してください。『NetBackup 管理者ガイド Vol. 1』

-cancel オプション、-delete オプション、-jobid オプション、-resume オプション、-suspend オプションでは、いずれも **jobtype** をサブオプションとして使用します。**jobtype** には、次のいずれかを入力します。(大文字の部分だけを入力します)。

```
ALL | *
REStore
BACKup
ARChive
VERify
DUPLICATE
IMPort
LABel
ERAsE
VAUlt
TPReq
CLEan
FORmat
INVenTory
QUAlification
DBbackUp | CATalogbackUp
```

オプション

-all_columns

このオプションを指定すると、レポートまたはサマリーのすべての列が表示されます。フィールドの説明は次のとおりです。

フィールド 1 = ジョブ ID

フィールド 2 = ジョブの種類

0 = バックアップ、1 = アーカイブ、2 = リストア、3 = 検証、4 = 複製、5 = フェーズ 1 またはフェーズ 2 のインポート、6 = カタログバックアップ、7 = Vault の複製、8 = テープのラベル作成、9 = テープの消去、10 = テープの要求、11 = テープのクリーニング、12 = テープのフォーマット、13 = ロボットライブラリの物理インベントリの実行、14 = ドライブまたはロボットライブラリの認定テスト、15 = カタログのリカバリ、16 = メディアの内容、17 = イメージのクリーンアップ、18 = LiveUpdate、20 = レプリケーション (自動イメージレプリケーション)、21 = インポート (自動イメージレプリケーション)、22 = スナップショットからのバックアップ、23 = レプリケーション (スナップ)、24 = インポート (スナップ)、25 = アプリケーションの状態のキャプチャ、26 = インデックス作成、27 = インデックスのクリーンアップ、28 = スナップショット、29 = SnapIndex、30 = ActivateInstantRecovery、31 = DeactivateInstantRecovery、32 = ReactivateInstantRecovery、33 = StopInstantRecovery、34 = InstantRecovery

フィールド 3 = ジョブの状態

0 = 投入済みリソースの待機中、1 = 有効、2 = 再投入済みリソースの待機中、3 = 完了、4 = 一時停止、5 = 未完了

フィールド 4 = ジョブ状態コード

フィールド 5 = ジョブのポリシー名

フィールド 6 = ジョブスケジュール名

フィールド 7 = クライアント名

フィールド 8 = ジョブが使うメディアサーバー

フィールド 9 = ジョブの開始日時

フィールド 10 = ジョブの経過時間

フィールド 11 = ジョブの終了日時

フィールド 12 = ジョブが使うストレージユニット

フィールド 13 = 試行回数

フィールド 14 = 操作

0 = テープのマウント、1 = テープの位置設定、2 = NetBackup メディアサーバーへの接続、3 = テープへの書き込み、4 = イメージの選択、5 = イメージの複製、6 = メディアの選択、7 = カタログのバックアップ、8 = テープの取り出しとレポート、10 = テープからの読み込み、11 = 複製、12 = インポート、13 = 検証、14 = リストア、15 = カタログバックアップ、16 = Vault 操作、17 = テープのラベル作成、18 = テープの消去、19 = データベースのクエリー、20 = エクステントの処理、21 = リーダー実行計画の作成、22 = スナップショットの作成、23 = スナップショットの削除、24 = データベースのリカバリ、25 = メディアの内容、26 = ジョブリソースの要求、27 = 親ジョブ、28 = インデックス作成、29 = リモートマスターへの複製、30 = 実行

フィールド 15 = 書き込み済みデータ量 (KB)

フィールド 16 = 書き込み済みファイル数

フィールド 17 = 最終書き込みパス

フィールド 18 = 完了した割合

フィールド 19 = ジョブ PID

フィールド 20 = ジョブを開始するユーザーアカウント (所有者)

フィールド 21 = サブ形式

0 = 即時バックアップ、1 = スケジュール設定済みバックアップ、2 = ユーザーが開始したバックアップまたはアーカイブ、3 = テープのクイック消去、4 = テープの完全消去、5 = データベースバックアップステージング

フィールド 22 = ポリシーの種類

0 = 標準 (UNIX と Linux のクライアント)、4 = Oracle、6 = Informix-On-BAR、7 = Sybase、8 = MS-SharePoint ポータルサーバー、10 = NetWare、11 = DataTools-SQL-BackTrack、13 = Ms-windows、14 = OS/2、15 = MS-SQL-Server、16 = MS-Exchange-Server、17 = SAP、18 = DB2、19 = NDMP、20 = FlashBackup、22 = AFS (ファイルシステム)、25 = Lotus Notes、29 = FlashBackup-Windows、35 = NBU-Catalog、39 = Enterprise_Vault、40 = VMware、41 = MS-Hyper-V

フィールド 23 = スケジュール形式

0 = 完全、1 = 増分、2 = ユーザーバックアップ、3 = ユーザーアーカイブ、4 = 累積増分、5 = tlog (トランザクションログのバックアップ)

フィールド 24 = ポリシー属性に設定されているようにこのジョブに割り当てられたジョブ優先度

フィールド 25 = サーバーグループ名

フィールド 26 = マスターサーバー名

フィールド 27 = 保持レベル

フィールド 28 = 保持期間

フィールド 29 = 圧縮

0 = 無効、1 = 有効

フィールド 30 = 書き込み推定 KB 数

フィールド 31 = 書き込み推定ファイル

フィールド 32 = ファイルリスト数。書き込み済みファイル数

フィールド 33 = 書き込み済みファイルパスのカンマ区切りリスト

フィールド 34 = 試行回数。ジョブ ID の試行回数

フィールド 35 = 試行情報。試行状態の情報のカンマ区切りリスト

trypid = PID の試行、trystunit = ストレージユニット、tryserver = サーバー、trystarted = 試行開始時間、tryelapsed = 経過時間、tryended = 試行終了時間、trystatus = 試行状態コード、trystatusdescription、trystatuscount = 次の trystatuslines のカンマ区切り文字列数、trystatuslines = 試行状態の出力、trybyteswritten = 書き込み済みデータ量 (KB)、tryfileswritten = 書き込み済みファイル数

フィールド 36 = 親ジョブ番号

フィールド 37 = KB/秒 - データ転送速度 (KB/秒)

フィールド 38 = コピー番号

フィールド 39 = ロボット - ジョブに使うロボットライブラリ

フィールド 40 = Vault ID

フィールド 41 = Vault のプロファイル

フィールド 42 = Vault セッション

フィールド 43 = 取り出すテープ数

フィールド 44 = ソースストレージユニット

フィールド 45 = ソースメディアサーバー

フィールド 46 = ソースメディア ID

フィールド 47 = 格納先メディア ID

メディア 48 = ストリーム数

フィールド 49 = 一時停止可能操作: 0 = 一時停止不可、1 = 一時停止可能

フィールド 50 = 再開可能操作: 0 = 再開不可、1 = 再開可能

フィールド 51 = 再起動可能: 0 = 再起動不可、1 = 再起動可能

フィールド 52 = データ移動形式

0 = 標準、1 = IR ディスクのみ、2 = IR ディスクとストレージユニット、3 = 合成、4 = ディスクステージング、5 = スナップショット

フィールド 53 = スナップショット操作: 0 = スナップショット不使用、1 = スナップショット使用

フィールド 54 = バックアップ ID

フィールド 55 = 強制終了可能操作: 0 = 強制終了不可、1 = 強制終了可能

フィールド 56 = ホストの制御。このジョブのアクティブ PID を実行しているホスト

フィールド 57 = オフホスト形式

フィールド 58 = ファイバートランスポートの使用。0 = LAN、1 = FT

フィールド 59 = キューの理由

0 = 不明な理由、1 = メディアが使用中、2 = ドライブが使用中、3 = テープメディアサーバーが非アクティブ、4 = サーバーでロボットライブラリが停止している、5 = 最大ジョブ数がストレージユニットに達した、6 = メディア要求の遅延の終了を待機中、7 = ローカルドライブが停止している、8 = NetBackup が使用中のドライブにメディアがある、9 = 物理ドライブを利用できない、10 = クリーニングメディアを利用できない、11 = ドライブスキャンホストが非アクティブ、12 = ディスクメディアサーバーが非アクティブ、13 = メディアサーバーが現在、マスターサーバーに接続されていない、14 = メディアサーバーがクラスタのアクティブノードではない、15 = ストレージユニットの並列実行ジョブが抑制された、16 = ジョブ履歴でドライブが使用中になっている、17 = ディスクボリュームが一時的に利用できない、18 = 並列実行ディスクボリュームリーダーが最大数に達した、19 = ディスクプールが利用できない、20 = FT パイプが使用中、21 = ディスクボリュームをマウント解除している、22 = ディスクボリュームが使用中、23 = 部分的に使っているボリュームが最大数に達した、24 = 論理ソ

スが上限に達した、**25** = ストレージユニットのドライブが使用中、**26** = 共有テープドライブのスキャンの停止を待機中、**27** = ディスクボリュームのマウントの待機中、**28** = テープのマウントポイントがすでに存在する、**29** = 処理が保留中、**30** = ディスクボリュームの I/O ストリーム数が最大数に達した

フィールド **60** = 次の形式のオプション原因文字列: 原因文字列 (キューに登録するリソース)

フィールド **61** = 重複排除率 (パーセント)

フィールド **62** = アクセラレータの最適化

フィールド **63** = インスタンスのデータベース名

このコマンドの出力は、バックアップジョブごとに 1 行で構成されます。出力の各行は、次の形式のカンマで区切られたリストです。

```
jobid,jobtype,state,status,policy,schedule,client
server,started,elapsed,ended,stunit,tries,operation,kbytes,
files,pathlastwritten,percent,jobpid,owner,subtype,policytype,
schedulingtype,priority,group,masterserver,retentionlevel
,retentionperiod,compression,kbytestobewritten,filestobe
written,filelistcount,[files],trycount,[trypid,trystunit,
tryserver,trystarted,tryelapsed,tryended,trystatus,trys
tatusdescription,trystatuscount,trystatuslines,trybytes
written,tryfileswritten],parentjob,kbpersec,copy,robot,
vault,profile,session,ejecttapes,srcstunit,srcserver,src
media,dstmedia,stream,suspendable,resumable,restartable,
datamovement,snapshot,backupid,killable,controllinghost,
offhosttype,ftusage,queureason,reasonstring,dedupratio,
acceleratorOptimization,instancedbname
```

次に例を示します。

```
213,0,3,0,hansel-itc,f,hansel,hansel,1368467705,0000000099,
1368467804,hansel-hcart-robot-tld-0,1,,448,451,,100,122,root,
0,0,0,0,root,gamefunvm2,2,2,0,,1,/nbbbackup,1,122,hansel-hcart
-robot-tld-0,hansel,1368467706,0000000098,1368467804,0,the
requested operation was successfully completed,17,05/13/2013
12:55:05 - requesting resource hansel-hcart-robot-tld-0,05/13
/2013 12:55:05 - requesting resource gamefunvm2.NBU_CLIENT.
MAXJOBS.hansel,05/13/2013 12:55:05 - requesting resource
gamefunvm2.NBU_POLICY.MAXJOBS.hansel-itc,05/13/2013 12:55:06 -
granted resource gamefunvm2.NBU_CLIENT.MAXJOBS.hansel,05/13/2013
12:55:06 - granted resource gamefunvm2.NBU_POLICY.MAXJOBS.hansel
-itc,05/13/2013 12:55:06 - granted resource AP6001,05/13/2013
12:55:06 - granted resource SEAGATE.ULTRIUM06242-XXX.000,05/13/2013
```



```
12:55:06 - granted resource hansel-hcart-robot-t1d-0,05/13/2013
12:55:07 - started process bpbrm (122),05/13/2013 12:55:08 -
connecting,05/13/2013 12:55:08 - connected; connect time:
000:00:00,05/13/2013 12:55:11 - mounting AP6001,05/13/2013 12:56:15
- mounted; mount time: 000:01:04,05/13/2013 12:56:24 - positioning
AP6001 to file 1,05/13/2013 12:56:30 - positioned; position time:
000:00:06,05/13/2013 12:56:30 - begin writing,05/13/2013 12:56:43 -
end writing; write time: 000:00:13,448,451,211,14000,2,,,,,,,,,
AP6001,0,,,,1,0,0,hansel_1368467706,,,,0,0, , ,
```

-all_columns の出力の解釈方法については、「例 1」を参照してください。

-append

このオプションを指定すると、-file オプションによって指定されるファイルに出力が追加されます。-file オプションを指定しない場合、出力は標準出力 (stdout) に送信されます。

-cancel job1,job2,...jobn |type=jobtype|type=all

このオプションを指定して bpdjobs を実行すると、アクティビティモニターに状態コード **150** で表示される実行中のジョブが取り消されます。次に例を示します。

```
bpdjobs -cancel 11328
bpdjobs -cancel 11328,11329,11330
```

指定可能な **jobtype** の値は、「機能説明」の項を参照してください。

-cancel_all

このオプションを指定して bpdjobs を実行すると、アクティビティモニターに状態コード **150** で表示される未完了のジョブがすべて取り消されます。次に例を示します。

```
bpdjobs -cancel_all
```

-change_priority_by [-M master_servers] -priority number -jobid job1,job2,...jobn

指定したジョブの優先度を変更します。

-clean

このオプションを指定して bpdjobs を実行すると、指定された時間より古い完了済みジョブが削除されます。-keep_hours、-keep_days、-keep_successful_hours または -keep_successful_days パラメータと同時に使用して、保持期間を指定します。次に例を示します。

```
bpdjobs -clean -keep_hours 30
```

`-delete job1,job2,...jobn |type=jobtype|type=all`

このオプションを指定すると、アクティビティモニターに表示されている完了済みのジョブが削除されます。1 つのコマンドで複数のジョブ ID を削除できます。次に例を示します。

```
bpdjobs -delete 11328,11329,11330
```

このオプションは次のいずれかを削除します。

- `job1,job2,...jobn` で指定したジョブ
- `jobtype` で指定したすべての適格なジョブ
- `type=all` を指定した場合、すべての適格なジョブ

指定可能な `jobtype` の値は、「機能説明」の項を参照してください。

`-fast`

bpjobd からジョブメタデータを取り込みますが、try ファイルと files ファイルはファイルシステムから直接読み込まれます。このオプションは bpdjobs がリモートホスト (マスターではないホスト) から開始される場合、無視されます。

`-file pathname`

このオプションでは、bpdjobs の出力が書き込まれるファイルを指定します。`-file` オプションを指定しない場合、出力は標準出力 (stdout) に送信されます。

`-gdm`

`-most_columns` を指定した場合よりも少ない情報がレポートに表示されます。

`-ignore_parent_jobs`

`-report` および `-summary` オプションの親ジョブが無視されます。

`-jobid job1,job2,...jobn |type=jobtype|type=all`

複数のジョブ ID に関するレポートが表示されます。

指定可能な `jobtype` の値は、「機能説明」の項を参照してください。

`-keep_days days`

このオプションを `-clean` オプションと同時に使用して、完了済みのジョブを bpdjobs で保持する日数を指定します。デフォルトは 3 日です。

`-keep_hours hours`

このオプションを `-clean` オプションと同時に使用して、完了済みのジョブを bpdjobs で保持する時間数を指定します。デフォルトは 72 時間です。

`-keep_successful_days days`

このオプションを `-clean` オプションと同時に使用して、正常に完了したジョブを bpdjobs で保持する日数を指定します。デフォルトは 3 日です。

この値は、`-keep_days` より小さい数である必要があります。

`-keep_successful_hours hours`

このオプションを `-clean` オプションと同時に使用して、正常に完了したジョブを `bpdjobs` で保持する時間数を指定します。デフォルトは **72** 時間です。

この値は、`-keep_hours` の値より小さい値を指定する必要があります。

`-L`

このオプションを指定すると、詳細形式でレポートが表示されます。

`-lvault`

このオプションを指定すると、**Vault** ジョブに固有の追加の列が表示されます。

`-M master_servers`

このオプションは、複数のマスターサーバーが存在する環境に適用されます。`-M` オプションを指定すると、特定のマスターサーバーに対するジョブの要約、ジョブ **ID** の削除、ジョブ **ID** の取り消しおよび実行中のすべてのジョブ **ID** の取り消しが行われます。

`-mastertime`

デフォルトでは、`bpdjobs` を実行すると、ローカルクロックを基準にして開始時間または終了時間が変換されます。**10** 分前に開始されたジョブは、マスターサーバーとのタイムゾーンの違いおよびクロックのずれに関係なく **10** 分前に開始されたように表示されます。しかし、このオプションを指定するとこの変換が回避され、管理クライアント間で時間の値の一貫性が保たれます。

`-most_columns`

`-all_columns` と同様に動作しますが、ファイルリストまたは前回の試行で取得した情報は出力しません。`-most_columns` は、`-all_columns` に比べて非常に高速です。

`-noheader`

このオプションを指定すると、ヘッダーが出力されません。

`-quiet`

このオプションを指定すると、再度実行、一時停止、削除、取り消しが行われたジョブ数のレポートが取り消されます。

`-reason "string"`

このコマンド処理を実行している理由を示します。入力する理由の文字列は監査レポートに取得され、表示されます。文字列は二重引用符 ("...") によって囲む必要があります、**512** 文字を超えることができません。それはハイフンの文字 (-) から始まり単一の引用符 (!) を含む場合がありません。

`-report`

このオプションを指定すると、アクティビティモニターに格納されたデータのレポートが提供されます。`bpdjobs` にオプションを指定しない場合、`-report` がデフォルトのオプションです。

`-restart job1,job2,...jobn |type=jobtype|type=all`

このオプションを指定すると、**jobtype** で指定したジョブが再度実行されます。このオプションではバックアップがサポートされており、**jobtype** として **BACkup** という語を入力することによって、ジョブを再度実行できます。

`-resume job1,job2,...jobn |type=jobtype|type=all`

このオプションを指定すると、**job1,job2,...jobn** で指定したジョブ、**jobtype** で指定したすべての適格なチェックポイントが設定されているバックアップまたはリストアジョブ、または **type=all** を指定した場合のすべての適格なジョブが再開されます。

指定可能な **jobtype** の値は、「機能説明」の項を参照してください。

`-set_priority [-M master_servers] -priority number -jobid
job1,job2,...jobn`

指定したジョブの優先度を、指定した優先度に設定します。

`-summary [-U | -L | -all_columns]`

このオプションを指定すると、サマリー行が `NBU/jobs` に格納されたすべてのジョブの標準出力 (`stdout`) に出力されます。パラメータ `-U` および `-L` を指定して、コマンドの出力を形式化します。`-file` オプションを使用して、任意のディレクトリまたはファイルに出力を書き込みます。次に例を示します。

```
bpdjobs -summary -U -file /tmp/summary.out
```

`-suspend job1,job2,...jobn |type=jobtype|type=all`

このオプションを指定すると、**job1,job2,...jobn** で指定したジョブ、**jobtype** で指定したすべての適格なチェックポイントが設定されているバックアップまたはリストアジョブ、または **type=all** を指定した場合のすべての適格なジョブが一時停止されます。

指定可能な **jobtype** の値は、「機能説明」の項を参照してください。

`-t timestamp`

指定したタイムスタンプより前に完了したジョブレコードをフェッチします。タイムスタンプは次の形式で指定されます。

```
mm/dd/yyyy HH:MM:SS
```

NetBackup コマンドの日時の値に求められる形式は、使用しているロケールによって異なります。`/user/opensv/msg/.conf` ファイル (**UNIX**) と

`install_path\VERITAS\msg\LC.CONF` ファイル (**Windows**) はそれぞれのサポート対象ロケールの日時形式などの情報を含んでいます。これらのファイルには、サポートされているロケールおよび書式のリストを追加および変更するための、具体的な方法が含まれています。

システムのロケールについて詳しくは、「**NetBackup** インストールのロケールの指定について」の項を参照してください。『**NetBackup 管理者ガイド Vol. 2**』。

-U

このオプションを指定すると、ユーザー形式でレポートが表示されます。

NetBackup-Java レポートアプリケーションなどの **NetBackup** レポート生成ツールでは、このレポート形式が使用されます。

-vault

このオプションを指定すると、**Vault** ジョブに固有の追加の列が表示されます。

-verbose

このオプションを指定して `bpdjobs` を実行すると、次のディレクトリ(存在する場合)内のデバッグログに追加情報が記録されます。

UNIX システムの場合:

```
/usr/opensv/netbackup/logs/bpdjobs/*
```

Windows システムの場合: `install_path¥NetBackup¥logs¥bpdjobs¥*`

-version

このオプションを指定すると、バージョン文字列が出力され、停止します。その他のすべてのスイッチは無視されます。

例

例 1: `-all_columns` による出力を解読して、正常終了したバックアップジョブの中から、最初の試行時には正常終了していないバックアップジョブの開始時間を生成するロジックの例を示します。

フィールド 9 = **start time** (ジョブが最初にキューに投入された時間)

このフィールドで示される時間はあまり意味を持ちませんが、ジョブがキューに投入された時間を知ることができます。

フィールド 32 までのフィールドの数はすべて固定です。フィールド 32 には `filelist` フィールドに表示されるエントリの数が示されます。

フィールド 32 = **filelistcount** (`filelist` に表示されているファイルの数)

この値をフィールド 33 の値に足すと、試行回数を示すフィールドが何番目になるかわかります。

フィールド 33 + **filelistcount** = `trycount`

試行が 1 回しか行われない場合は、次のように計算して開始時刻を決定します。

フィールド 33 + **filelistcount** + 4 = [1 回目の] `trystarted`

試行回数が 2 回の場合は、もっと先の方にある試行状態のフィールドが必要です。最初に、試行状態フィールドのエントリ数を計算します。

フィールド 33 + **filelistcount** + 9 = `trystatuscount`

次に、2 回目の試行の開始時間を得るには、次のように計算します。

フィールド **33 + filelistcount + 9 + trystatuscount + 6 = [2 回目の]trystarted**

bpdmb

bpdmb – NetBackup Database Manager デーモンの実行

概要

```
bpdmb [consistency [-move]] [converti2] [ctime timestamp] [-terminate]
[-alive] [-verbose -logqueries -wakeup minutes]
```

UNIX システムでは、このコマンドのディレクトリパスは /usr/opensv/netbackup/bin/ です。

Windows システムでは、このコマンドのディレクトリパスは <install_path>%NetBackup%bin% です。

機能説明

bpdmb は、NetBackup 内部データベース (カタログ) に関連する問い合わせに回答します。bpdmb は、NetBackup コマンドおよびユーティリティが正常に動作するために実行する必要があります。このデーモンはマスターサーバーだけで実行され、管理者だけが起動することができます。NetBackup の Request デーモン (bprd)、または次のスクリプトが bpdmb を開始します。

UNIX の場合: /usr/opensv/netbackup/bin/initbpdmb

Windows の場合: install_path%NetBackup%bin%initbpdmb

bpdmb が開始されると、次の処理がリストにある順序で実行されます。

- 開始したことを示すメッセージがログに記録され、他のインスタンスが実行されていないことが確認されます。他のプロセスが存在する場合、そのプログラムは終了します。
- bpdmb では、services ファイルでサービス名 bpdmb およびプロトコル名 tcp のエントリを確認することによって、bpdmb のポート番号が決定されます。次に例を示します。

```
bpdmb 13721/tcp
```

- bpdmb によって、bprd と NetBackup 管理ユーティリティからの問い合わせへの応答が開始されます。子プロセスが作成され、各問い合わせに回答します。

オプション

-alive

このオプションを指定すると、問い合わせが bpdmb に送信され、bpdmb サービスが実行されているかどうか判断されます。

-consistency [0-2]

このオプションを指定すると、カタログの一貫性チェックが実行されます。一貫性のレベルは次の **3** つです。

0 - NetBackup イメージデータベースのクイックチェック (デフォルト)

1 - デフォルトのチェックよりも多くのチェックを実行

2 - 最も詳細な一貫性チェック。レベル **0** と **1** のチェックに加えて、このレベルはイメージに記載されるメディアが存在するかどうかにもチェックします。(つまり、メディアサーバーのデータベースを相互参照します。) **NetBackup** の大規模なインストールでは、この処理は他のチェックよりも長時間を要します。

-converti2

このオプションを指定すると、各クライアントのタイムスタンプサブディレクトリのない古いディレクトリ名スキームを使用して作成された古いカタログが、新しいスキームに変換されます。この操作は慎重に行ってください。また、有効なカタログバックアップを手元に用意しておいてカタログをすぐに取り替えるようにしてください。

-ctime timestamp

このオプションを指定すると、**UNIX** タイムスタンプが読みやすい形式に変換されます。

-logqueries

このオプションを指定すると、bpdbm によってそれぞれの bpdbm 問い合わせが tmp ディレクトリの BPDBMqueries ファイルに記録されます。各問い合わせのエントリは、次の形式でログの開始部分にあります。

```
date_stamp process_id query type
```

もう **1** つは次の形式で問い合わせの終了部分に対応します。

```
date_stamp process_id query type status status
```

ここで、**date_stamp** は **10** 桁の整数、**process_id** は問い合わせを実行するプロセスの識別子、**type** は問い合わせの種類を識別する整数、**status** は問い合わせによって戻される状態です。

-terminate

このオプションを指定すると、bpdbm が終了します。現在実行中のすべての子プロセスは、タスクが完了するまで実行し続けます。

-verbose -logqueries

このオプションを指定すると、詳細レベル **0** で実行するように **bp.conf** で構成されている場合は bpdbm が詳細レベル **1** で動作し、bpdbm のログディレクトリとログファイルが作成されます。

`-wakeup minutes`

このオプションを指定すると、ポートでの初期接続を確立するときに bpdbm によって使用されるデフォルトのタイムアウト間隔 (分単位) が上書きされます。UNIX システムでのみ使われます。

ファイル

UNIX システムの場合:

```
/usr/opensv/netbackup/db/*  
/usr/opensv/netbackup/bp.conf  
/usr/opensv/netbackup/logs/bpdbm/*  
/usr/opensv/netbackup/bin/initbpdbm
```

Windows システムの場合:

```
install_path¥NetBackup¥db¥*  
install_path¥NetBackup¥logs¥bpdbm¥*
```

関連項目

p.49 の [bpadm](#) を参照してください。

p.341 の [bprd](#) を参照してください。

bpdgclone

bpdgclone – Volume Manager (VxVM) ボリュームのクローンの作成または削除

概要

```
bpdgclone [-c] -g disk_group -n volume [-d  
primary_disk,secondary_disk:primary_disk_2,secondary_disk_2:  
primary_disk_n,secondary_disk_n] [-f output_location] [-v] [-h]
```

The directory path to this command is /usr/opensv/netbackup/bin/

機能説明

このコマンドは UNIX システムでのみ動作します。

アレイ固有のスナップショット方式を使うバックアップの場合、bpdgclone によって、ボリュームのミラーイメージが含まれるディスクの一時ディスクグループ (クローン) が作成されます。アレイ固有のスナップショット方式 (EMC TimeFinder、Hitachi ShadowImage、HP BusinessCopy) では、Volume Manager ボリューム上にクライアントのデータが構成されます。bpdgclone では、Volume Manager での名前の競合を回避するために、一時ディスクグループに client_name_diskgroup_name_clone という名前が付けられます。バックアップが完了すると、ディスクグループのクローンは NetBackup によって削除されます。

通常の操作では、NetBackup は bpdgclone コマンドを必要に応じて呼び出します。管理者がこのコマンドを実行する必要はありません。システム障害によって NetBackup によるクローンの削除が行われない場合は、bpdgclone コマンドに -c オプションを指定してクローンを削除します。次に、ミラーディスクをプライマリディスクと再同期化します。

メモ: バックアップが完了してもクローンが削除されない場合、それ以降のクライアントデータのバックアップは行われません。クローンの削除については、「例」を参照してください。

オプション

- g このオプションでは、ターゲットディスクグループの名前を指定します。
- n このオプションでは、ターゲットボリュームの名前を指定します。
- d このオプションを指定すると、プライマリディスクおよびセカンダリディスクが表示されます。このリストでは、ディスクの対 (プライマリディスクおよびセカンダリディスク) がカンマで区切られて表示されます。ターゲットボリュームに複数のプライマリディスクが存在する場合、追加のデバイスの対がコロン (:) で区切られて表示されます。

- c このオプションを指定すると、ディスクグループおよびボリュームのクローンが削除されます。クローンが削除された後で、プライマリディスクとセカンダリディスクを再同期化する必要があります。
- h このオプションを指定すると、コマンドの使用方法が出力されます。
- v このオプションを指定すると、詳細モードが設定されます。
- f このオプションでは、出力ファイルを指定します。このファイルには、ターゲットボリュームが構成されているプライマリディスクのパス名のリストが含まれます。このオプションを使用して、ターゲットボリュームが構成されているプライマリディスクを検出します。

注意事項

次は bpdgclone コマンド使う場合の注意事項です。

- クローンを使用するスナップショットバックアップの実行中は、このクローンを削除しないでください。システム障害がない場合は、バックアップの完了時に **NetBackup** によってクローンが削除されます。
- 削除されなかったディスククローンを bpdgclone コマンドを使用して削除する場合、ミラーディスクをプライマリディスクと再同期化する必要があります。
- **NetBackup** によって bpdgclone が実行されてクローンが作成される前に、セカンダリディスクがプライマリディスクから分割されます。

例

クローンを削除する例を次に示します。

```
/usr/opensv/netbackup/bin/bpdgclone -g wil_test -n vol01 -c
```

wil_test は、ディスクグループの名前です。この名前に基づいてクローンの名前が付けられます。実際のクローンの名前は clone_wil_test_clone になります。

詳しくは、『[Symantec NetBackup Snapshot Client 管理者ガイド](#)』の「トラブルシューティング」の章を参照してください。

bpdwn

bpdwn – Windows システム上の NetBackup サービスの停止

概要

```
bpdwn [-S|v] [-f] [-c] [-d] [-m] [-n] [-s] [-r]
```

このコマンドのディレクトリパスは `<install_path>%NetBackup%bin` です。

機能説明

このコマンドは Windows システムでのみ動作します。

bpdwn コマンドを実行すると、NetBackup データベース、Media Manager、クライアント、ロボット制御デーモンなどのコンポーネントに関連する NetBackup サービスが停止されます。このコマンドを実行しても、プロセスは停止されません。

bpup コマンドは NetBackup サービスを開始します。

オプション

- s サイレントモード。停止状況および確認を求めるプロンプトは表示されません。
- v 詳細モードを選択すると、詳細な停止状況が表示されます。
- f このオプションを指定すると、確認を求めるプロンプトが表示されずに、NetBackup サービスが強制的に停止されます。
- c クライアントを停止します。
- d NetBackup データベースを停止します。
- m Media Manager を停止します。
- n NetBackup サーバーを停止します。NetBackup クライアントは停止しません。
- s サーバー (NetBackup および Media Manager) を停止します。
- r ロボット制御デーモンを停止します。

bpduplicate

bpduplicate – NetBackup によって作成されたバックアップのコピーを作成

概要

```
bpduplicate -npc new_primary_copy -backupid backup_id [-local]
[-client name]
bpduplicate [-number_copies number] [-dstunit
destination_storage_unit_label [,copy2,...] [-dp
destination_volume_pool_name [,copy2,...] [-p | -pb | -PD | -PM]
[-Bidfile file_name] [-v] [-local] [-client name] [-st sched_type]
[-sl sched_label] [-L output_file [-en]] [-shost source_host] [-policy
name] [-s date] [-e date] [-pt policy_type] [-hoursago hours] [[-cn
copy_number] | [-primary]] [-M master_server] [-altreadhost hostname]
[-backupid backup_id] [-id media_id] [-rl
retention_level[,rl-copy2,...]] [-fail_on_error 0|1[,...,0|1]] [-mpx]
[-priority number] [-set_primary copy_index] [-bc_only]
[-granular_proxy hostname] [-owner media_[,share_group_copy2,...]]
UNIX システムでは、このコマンドのディレクトリパスは
/usr/opensv/netbackup/bin/admincmd/ です。
Windows システムでは、このコマンドのディレクトリパスは
<install_path>%NetBackup%\bin\admincmd% です。
```

機能説明

bpduplicate を実行すると、作成するバックアップのコピーを取得できます。また、bpduplicate で、プライマリコピーを変更し、複製されたバックアップからのリストアを行うこともできます。プライマリコピーは、リストア要求を満たすために使用される最初の元となるコピーです。

-mpx オプションを使用すると、多重化複製を作成できます。詳しくは、-mpx オプションの説明を参照してください。

複製されたバックアップの有効期限は、元のバックアップとは異なります。最初、コピーの有効期限は元のバックアップの有効期限に設定されています。コピーまたは元のバックアップの有効期限は、bpexpire を使用して変更できます。

bpduplicate を使用して、期限が切れていないバックアップのコピーを最大 10 個作成できます。

オプション

`-altreadhost hostname`

このオプションでは、メディアを読み込む代替ホストを指定します。デフォルトの状態では、`bpduplicate` を実行すると、バックアップを行ったホストからソースメディアが読み込まれます。

`-backupid backup_id`

このオプションでは、複製する 1 つのバックアップのバックアップ ID、またはプライマリコピーを変更するバックアップ ID を指定します。

`-bc_only`

個別の情報をカタログ化します (つまり、カタログのみを構築します)。このオプションを実行すると、イメージの別のコピーを作成する必要がなくなり、将来の参照またはリストア操作のパフォーマンスを改善できます。

`-Bidfile file_name`

このオプションの **file_name** では、複製するバックアップ ID のリストを含むファイル名を指定します。ファイル内で 1 行に 1 つのバックアップ ID が指定されます。このパラメータを指定すると、他の選択条件は無視されます。

また、NetBackup GUI がこのパラメータを共通で使うため、**file_name** は CLI (コマンドラインインターフェース) の実行中に削除されます。GUI では、コマンドラインインターフェースの完了時に `-Bidfile` オプションで使用された一時ファイルが削除されることを前提としています。ユーザーはコマンドラインインターフェースで直接このオプションを使用することができますが、この場合でも、ファイルは削除されます。

`-client name`

このオプションでは、元のバックアップを生成したクライアント名を指定します。これは、複製するバックアップの検索条件として使用されます。デフォルトはすべてのクライアントです。

`-client` を `-npc` オプションと同時に指定してプライマリコピーを変更すると、NetBackup によって、クライアントに属するバックアップ ID が最初に検索されます。この検索は、クライアント名が変更された場合に有効です。

`-cn copy_number|-primary`

このオプションでは、複製のコピー番号を指定します。有効な値は、1 から 10 です。デフォルトは 1 です。

`-primary` はプライマリコピーを検索するか、または複製することを意味します。

`-dp destination_volume_pool_name [,copy2,...]`

このオプションでは、複製のボリュームプールを指定します。NetBackup では、複製コピーに選択されたメディア ID が、元のバックアップが存在するメディア ID と異なることは検証されません。そのため、元のバックアップのメディア ID が存在するもの

とは異なるボリュームプールを指定し、デッドロックの可能性を回避します。デフォルトのプール名は、**NB_duplicates** です。

プールは、指定したコピーごとに指定します。

`-dstunit destination_storage_unit_label [,copy2,...]`

このオプションでは、宛先ストレージユニットを指定します。このパラメータは、バックアップを複製するために必要です。このオプションを指定して、複製するバックアップをプレビュー (`-p`、`-pb`、`-PM` または `-PD` オプション) したり、プライマリコピーを変更 (`-npc` オプション) したりしないでください。このオプションには、デフォルトが存在しません。

ストレージユニットは、指定したコピーごとに指定します。

`-e date, -s date`

このオプションでは、複製するすべてのバックアップが含まれる日時の範囲の終了日時 (`-e`) および開始日時 (`-s`) を指定します。デフォルトの終了日付は、現在の日時です。デフォルトの開始日時は、現在の日時の **24** 時間前です。

NetBackup コマンドの日時の値に求められる形式は、使用しているロケールによって異なります。/user/openv/msg/.conf ファイル (**UNIX**) と

`install_path\VERITAS\msg\LC.CONF` ファイル (**Windows**) はそれぞれのサポート対象ロケールの日時形式などの情報を含んでいます。これらのファイルには、サポートされているロケールおよび書式のリストを追加および変更するための、具体的な方法が含まれています。

システムのロケールについて詳しくは、「**NetBackup** インストールのロケールの指定について」の項を参照してください。『**NetBackup 管理者ガイド Vol. 2**』。

`-fail_on_error 0|1[,0|1,...,0|1]`

このオプションでは、コピーが失敗した場合、他の複製を失敗とするかどうかを指定します。ここでは、次のとおりです。

0 (ゼロ) - 他のコピーを失敗にしません

1 - 他のコピーを失敗にします

プールは、指定したコピーごとに指定します。

`-granular_proxy`

複製操作の定義済みの **Exchange** 個別リストア用プロキシホストを上書きします。このホストはテープへの複製の場合、個別の情報をカタログ化します。デフォルトでは、定義済みの **Exchange** 個別リストア用プロキシホストはバックアップの元の **Exchange** クライアントです。バックアップクライアントのクライアントホストの [**Exchange**] プロパティでプロキシホストを構成できます。

-hoursago *hours*

このオプションでは、現在の時刻より何時間前までのバックアップが検索されるかを指定します。このオプションは、**-s** オプションと同時に使用しないでください。デフォルトは、現在の日付の午前 0 時です。

-id *media_id*

このオプションを指定すると、指定したメディア ID 上に存在する、複製するバックアップのイメージカタログが検索されます。元のバックアップが異なるメディア ID 間でフラグメント化されている場合、指定したメディア ID 上に存在するバックアップだけが **NetBackup** によって複製されます。メディアをまたがったバックアップは複製されませんが、またがったメディア ID 上の他のバックアップは複製されません。

-L *output_file* [-en]

このオプションでは、進捗情報を書き込むファイル名を指定します。デフォルトでは、進捗ファイルは使用されません。

-en オプションを指定すると、ログが英語で生成されます。ログ名には文字列 [**_en**] が含まれます。このオプションは、異なるロケールで様々な言語のログが作成される分散環境において有効です。

-local

-local を使用せずに (デフォルト) **bpduplicate** をマスターサーバー以外のホストから実行する場合、**bpduplicate** によってマスターサーバー上のコマンドのリモートコピーが開始されます。リモートコピーでは、アクティビティモニターからコマンドを終了できます。

このオプションを使用すると、マスターサーバー上のリモートコピーの作成が回避されます。また、**bpduplicate** は開始されたホストからだけ実行されます。

-local オプションを使用すると、**bpduplicate** をアクティビティモニターから取り消すことはできません。

-M *master_server*

このオプションでは、メディア ID を含むメディアカタログを管理するマスターサーバーを指定します。このオプションを指定しない場合、デフォルトは次のいずれかになります。

NetBackup Server では、リモートメディアサーバーを持たない 1 つのマスターサーバーだけがサポートされます。そのため、この場合のデフォルトは常に、コマンドを実行する **NetBackup Server** のマスターサーバーです。

NetBackup Enterprise Server では、このコマンドがマスターサーバーで実行される場合、そのサーバーがデフォルトです。コマンドをマスターサーバーではなくメディアサーバー上で実行する場合、そのメディアサーバーのマスターサーバーがデフォルトです。

-mpx

このオプションを指定すると、多重化されたバックアップを複製する場合、NetBackup によって宛先メディア上に多重化されたバックアップが作成されます。これによって、多重化されたバックアップを複製する時間が短縮されます。

多重化複製は次の操作ではサポートされません。

- 多重化されていないバックアップ
- ディスク形式のストレージユニットからのバックアップ
- ディスク形式のストレージユニットへのバックアップ
- FlashBackup または NDMP バックアップ

複製中に前述のカテゴリのバックアップが検出されると、NetBackup では、最初にそのバックアップが複製され、多重化されていない複製が使用されます。次に、多重化複製を使用して、多重化されたバックアップが複製されます。

多重化グループ内のすべてのバックアップが複製されない場合、複製された多重化グループのフラグメントのレイアウトが異なります。(多重化グループとは、1つの多重化セッション中に一緒に多重化された一連のバックアップです。)

このオプションを指定しない場合、すべてのバックアップは、多重化されていない複製を使用して複製されます。

多重操作について詳しくは、次を参照してください。『NetBackup 管理者ガイド Vol. 1』。

-npc *new_primary_copy*

このオプションを指定すると、プライマリコピーを変更できます。1 から 10 の値を指定できます。-backupid オプションは、このオプションと同時に指定する必要があります。

-number_copies *number*

このオプションでは、作成するコピーの数を指定します。インラインテープコピーオプションまたは NetBackup Vault の拡張機能がインストールされていない場合、1 しか設定できません。デフォルトは 1 です。

このオプションは、次のとおり -dstunit、-dp、-fail_on_error および -r1 と同時に使用します。

```
-number_copies 2 -dstunit stunit-copy1, stunit-copy2  
-number_copies 2 -dp pool1, pool2
```

-owner *media_share_group* [, *share_group_copy2, ...*]

このオプションでは、複製の共有グループを指定します。共有グループは、指定したコピーごとに指定します。

-p

このオプションを指定すると、オプションの設定に従って、複製するバックアップがレビューされます。ただし、複製は実行されません。メディア ID、サーバー名、複製の対象にならないバックアップ (および対象にならない理由) および複製するバックアップについての情報が表示されます。

-pb

このオプションを指定すると、複製がレビューされます。ただし、複製は実行されません。-p オプションに類似していますが、バックアップについての情報は表示されません。

-PD

このオプションは、-PM オプションと同じです。ただし、バックアップが (新しい方から古い方へ) 日時でソートされて表示されます。

-PM

このオプションを指定すると、オプションの設定に従って複製するバックアップの情報が表示されます。ただし、複製は実行されません。この形式では、まず複製できないバックアップ ID およびその理由 (バックアップにはすでに 2 つのコピーが存在しているなど) が表示されます。バックアップの日時、ポリシー、スケジュール、バックアップ ID、ホスト、メディア ID またはパス、コピー番号、およびそのコピーがプライマリコピーかどうかなど、バックアップについての情報が表示されます。

1 =プライマリコピー

0 =プライマリコピー以外

-policy name

このオプションを指定すると、指定したポリシー内で、複製するバックアップが検索されます。デフォルトはすべてのポリシーです。

-priority number

このオプションを指定すると、ディスクステージングの複製よりも低いまたは高い優先度で実行するようにバックアップポリシーが設定されます。

-pt policy_type

このオプションを指定すると、指定したポリシー形式で作成されたバックアップが検索されます。デフォルトは、すべてのポリシー形式です。

policy_type は、次のいずれかの文字列です。

AFS

Auspex-FastBackup

DataStore

DataTools-SQL-BackTrack

DB2

Enterprise-Vault

FlashBackup

FlashBackup-Windows
Informix-On-BAR
LotusNotes
MS-Exchange-Server
MS-Hyper-V
MS-SharePoint
MS-SQL-Server
MS-Windows
NDMP
NetWare
Oracle
OS/2
PureDisk-Export
SAP
Split-Mirror
Standard
Sybase
Vault
VMware

`-rl retention_level[,rl-copy2,...]`

このオプションでは、各コピーの保持レベルを指定します。

保持レベルを指定しない場合、元のコピーの有効期限が各コピーに対して使用されます。保持期間が指定されている場合、コピーに対する有効期限は、バックアップの日付に保持期間を足した値になります。

たとえば、2012年5月14日にバックアップが作成され、保持期間が1週間である場合、新しいコピーの有効期限は2012年5月21日になります。

値が-1の場合、元のコピーの有効期限がそのコピーに対して使用されます。

`-set_primary copy_index`

このオプションを指定すると、新しいコピーがプライマリコピーになります。

copy_index には、次のいずれかを指定します。

0 = プライマリコピーを変更しません (デフォルト)。

1 = 1番目の新しいコピーがプライマリコピーになります。

2 = 2番目の新しいコピーがプライマリコピーになります。

3 = 3番目の新しいコピーがプライマリコピーになります。以降も同様です。

copy_index には、`-number_copies` の値を超えない値を指定する必要があります。

プライマリコピーにするために指定したコピーが失敗し、他のコピーが正常に行われた場合、プライマリコピーは現行の値から変更されません。

-shost *source_host*

このオプションを指定すると、指定したバックアップサーバー上に作成されたバックアップだけが複製の対象になります。デフォルトでは、バックアップサーバーに関係なく、すべてのバックアップが対象となります。

-sl *sched_label*

このオプションを指定すると、指定したスケジュールによって作成されたバックアップが、複製するバックアップとして検索されます。デフォルトはすべてのスケジュールです。

-st *sched_type*

このオプションを指定すると、指定したスケジュール形式によって作成されたバックアップが、複製するバックアップとして検索されます。デフォルトはすべての形式のスケジュールです。

次に、有効な値を示します。

FULL (完全バックアップ)

INCR (差分増分バックアップ)

CINC (累積増分バックアップ)

UBAK (ユーザーバックアップ)

UARC (ユーザーアーカイブ)

NOT_ARCHIVE (ユーザーアーカイブ以外のすべてのバックアップ)

-v

このオプションを指定すると、詳細モードが選択されます。このオプションを指定すると、デバッグログまたは進捗ログに、より詳細な情報が書き込まれます。

例

例 1 - コピー番号 1 のバックアップを一覧表示します。表示されるバックアップは、2013 年 7 月 1 日から 2013 年 8 月 1 日の間に作成され、stdpol というポリシーによって実行されたバックアップです。

```
# bpduplicate -PM -cn 1 -policy stdpol -s 07/01/13 -e 08/01/13
```

例 2 - tmp ディレクトリ内のファイル bidfile に一覧表示されたバックアップのコピー番号 1 を複製します。宛先ストレージユニットは unit1 で、宛先プールは dup_pool です。進捗情報は、bpdup.ls に書き込まれます。次のコマンドは改行せずに 1 行で、または継続文字であるバックスラッシュを使用して入力します。

```
On UNIX systems: # bpduplicate -dstunit unit1 -Bidfile  
/tmp/bidfile -L /tmp/bpdup.ls -dp dup_pool -cn 1
```

```
On Windows systems: # bpduplicate -dstunit unit1 -Bidfile  
C:¥tmp¥bidfile -L C:¥tmp¥bpdup.ls -dp dup_pool -cn 1
```

例 3 - 例 2 と同様に複製が行われますが、多重化されたバックアップは、多重化複製を選択したときに複製されず。次のコマンドは改行せずに 1 行で、または継続文字であるバックスラッシュを使用して入力します。

```
On UNIX systems: # bpduplicate -dstunit unit1 -Bidfile  
/tmp/bidfile -mpx -L /tmp/bpdup.ls -dp dup_pool -cn 1
```

```
On Windows systems: # bpduplicate -dstunit unit1 -Bidfile  
C:¥tmp¥bidfile -mpx -L C:¥tmp¥bpdup.ls -dp dup_pool -cn 1
```

ファイル

UNIX システムの場合:

```
/usr/opensv/netbackup/logs/admin/*  
/usr/opensv/netbackup/db/images/*
```

Windows システムの場合:

```
install_path¥NetBackup¥db¥images¥*  
install_path¥NetBackup¥logs¥admin¥*
```

関連項目

p.633 の [nbreplicate](#) を参照してください。

bpperor

bpperor – NetBackup の状態およびトラブルシューティング情報、または NetBackup エラーカタログのエントリの表示

概要

```
bpperor {-S | -statuscode status_code} [-r | -recommendation] [[-p
Unx | NTx] | [-platform Unx | NTx]] [-v]
bpperor [-all | -problems | -media | tape] {-backstat [-by_statcode]}
[-L | -l | -U] [-columns ncols] [-d date | -hoursago hours] [-e date]
[-client client_name] [-server server_name] [-jobid job_id] [-M
master_server,...] [-v]
bpperor [-s {severity[+]}|severity ...] [-t type ...] [-dt disk_type]
[-L | -l | -U] [-columns ncols] [-d date | -hoursago hours] [-e date]
[-client client_name] [-server server_name] [-jobid job_id] [-M
master_server,...] [-v]
```

UNIX システムでは、このコマンドのディレクトリパスは

/usr/opensv/netbackup/bin/admincmd/ です。

Windows システムでは、このコマンドのディレクトリパスは

<install_path>%NetBackup%\bin\admincmd\ です。

機能説明

bpperor を実行すると、(アクティビティモニターまたはレポートアプリケーション内の) オンライントラブルシュータと同じソースまたは NetBackup エラーカタログのいずれかからの情報が表示されます。bpperor には、次の種類の表示があります。

- 状態コードに対応するメッセージの表示: 必要に応じて、問題のトラブルシューティングについての推奨事項を表示することもできます。この場合、表示結果は、ローカルシステムのオンライントラブルシュータと同じソースから出力されます。
- コマンドラインオプションを満たすエラーカタログエントリの表示: たとえば、bpperor を実行して、前日以前の問題があるすべてのエントリを表示できます。
- 特定のメッセージの重大度およびメッセージの形式に対応するエラーカタログエントリの表示

表示について詳しくは、「表示形式」を参照してください。

bpperor を実行すると、このコマンドのデバッグログの情報が次のディレクトリに書き込まれます。

Windows システムの場合: install_path%\NetBackup%\logs\admin

UNIX システムの場合: /usr/opensv/netbackup/logs/admin

このディレクトリ内の情報は、トラブルシューティングに使用できます。

bpperor の出力は、標準出力に出力されます。

オプション

`-all, -backstat [-by_statcode], -media, -problems`

これらのオプションでは、表示するログメッセージの種類および重大度を指定します。デフォルトの種類、重大度は **ALL** です。

`-all` の場合: 種類および重大度は **ALL** です。このオプションおよび `-u` を指定して bpperor を実行すると、[すべてのログエントリ (**All Log Entries**)]レポートが生成されます。

`-backstat` の場合: 種類は **BACKSTAT**、重大度は **ALL** です。`-by_statcode` を指定すると、一意の状態コードに対してそれぞれ 1 つのエントリが表示されます。エントリの 1 行目には、状態コードおよび対応するメッセージテキストが含まれます。エントリの 2 行目には、この状態コードが発生したクライアントのリストが含まれます。`-by_statcode` は、コマンドラインに `-backstat` と `-u` の両方が含まれる場合にだけ有効です。このオプションおよび `-u` を指定して bpperor を実行すると、[バックアップの状態 (**Status of Backups**)]レポートが生成されます。

`-media` の場合: 形式は **MEDIADEV**、重大度は **ALL** です。このオプションおよび `-u` を指定して bpperor を実行すると、[メディアのログ (**Media Logs**)]レポートが生成されます。

`-problems` の場合: 種類は **ALL**、重大度は **WARNING**、**ERROR** および **CRITICAL** の組み合わせとなります。このオプションおよび `-u` を指定して bpperor を実行すると、[問題 (**Problems**)]レポートが生成されます。

`-client client_name`

このオプションでは、**NetBackup** クライアント名を指定します。この名前は、**NetBackup** カタログに表示される名前と一致している必要があります。デフォルトでは、bpperor を実行すると、すべてのクライアントが検索されます。

`-columns ncols`

`-L` および `-u` レポートの場合、`-columns` を指定すると、行の最大長におおよその上限が設定されます。また、bpperor を実行しても、長さがちょうど `ncols` 文字の行が生成されるわけではありません。

`-columns` は、`-l` レポートには適用されません。

`ncols` には **40** 以上を指定する必要があります。デフォルトは **80** です。

`-d date, -e date`

これらのオプションでは、表示の対象とする開始日時から終了日時の範囲を指定します。

-d では、表示の対象とする開始日時 (任意) を指定します。結果のリストには、指定した日時以降に実行されたバックアップまたはアーカイブ内のイメージだけが表示されます。有効な日時の範囲は、01/01/1970 00:00:00 から 01/19/2038 03:14:07 です。デフォルトは、現在の日時の 24 時間前です。

-e では、表示の対象とする終了日時 (任意) を指定します。結果のリストには、指定した日時以前に実行されたバックアップまたはアーカイブ内のファイルだけが表示されます。開始日時と同じ形式を使用します。デフォルトは、現在の日時です。終了日時は、開始日時以降にする必要があります。

NetBackup コマンドの日時の値に求められる形式は、使用しているロケールによって異なります。/user/opensv/msg/.conf ファイル (UNIX) と

install_path¥VERITAS¥msg¥LC.CONF ファイル (Windows) はそれぞれのサポート対象ロケールの日時形式などの情報を含んでいます。これらのファイルには、サポートされているロケールおよび書式のリストを追加および変更するための、具体的な方法が含まれています。

システムのロケールについて詳しくは、NetBackup インストールのロケールの指定に関する項を参照してください。『NetBackup 管理者ガイド Vol. 2』。

次は -d と -e オプションの一般的な形式です。

```
[ -d mm/dd/yyyy hh:mm:ss | -hoursago hours ]
[ -e mm/dd/yyyy hh:mm:ss ]
```

-dt *disk_type*

このオプションでは、ディスク形式を指定できます。*disk_type* の有効な値を次に示します。

0: すべて

1: BasicDisk

3: SnapVault

6: DiskPool

-hoursago *hours*

このオプションでは、開始時刻を *hours* 時間前に指定します。これは、開始時刻 (-d) を現在の時刻からのマイナス時間で指定することと同じです。*hours* は整数です。デフォルトは 24 です。これは、開始時刻が現在の時刻の 24 時間前であることを意味します。

-jobid *job_id*

このオプションでは、NetBackup のジョブ ID を指定します。デフォルトでは、bperrot を実行すると、すべてのジョブ ID が検索されます。

-L

このオプションを指定すると、詳細形式でレポートが表示されます。

-l

このオプションを指定すると、簡易形式でレポートが表示されます。このレポートにより、簡易なリストが作成されます。このオプションは、カスタマイズされたレポート形式にリストを再生成するスクリプトまたはプログラムに対して有効です。このオプションはデフォルトの表示形式です。

-M *master_server*,...

このオプションでは、カンマで区切られた 1 つ以上のホスト名のリストを指定します。このオプションを指定すると、一覧表示されている各マスターサーバーでこのコマンドが実行されます。マスターサーバーでは、コマンドを発行するシステムからのアクセスが許可されている必要があります。マスターサーバーにエラーが発生した場合、その時点でリスト内の処理が停止します。デフォルトは、コマンドが入力されるシステムのマスターサーバーです。

-p *Unx | NTx*, -platform *Unx | NTx*

このオプションを指定すると、プラットフォーム (**UNIX** または **Windows**) の指定した状態コードのメッセージが表示されます。デフォルトでは、bpererror を実行するプラットフォームのメッセージが表示されます。このオプションを使用する場合、-s または -statuscode オプションを指定する必要があります。

-r | -recommendation

[『NetBackup 状態コードリファレンスガイド』](#)で指定した状態コードの推奨操作を参照します。デフォルトでは、推奨操作は表示されません。このオプションを使用する場合、-s または -statuscode オプションを指定する必要があります。

-S *status_code*, -statuscode *status_code*

このオプションを指定すると、状態コードに対応するメッセージが表示されます。このオプションには、デフォルト設定は存在しません。

-s *severity*, -s *severity*+

このオプションでは、表示するログメッセージの重大度を指定します。定義済みの値は、ALL、DEBUG、INFO、WARNING、ERROR および CRITICAL です。

重大度は 2 通りの方法で指定できます。最初の方法では、1 つ以上の重大度の値を指定します。たとえば、"-s INFO ERROR" は重大度 INFO または重大度 ERROR のどちらかのメッセージを表示します。リスト内の要素は、空白で区切る必要があります。2 番目の方法では、ある重大度の値に + を追加して、その重大度以上であることを示します。たとえば、-s WARNING+ を指定すると、重大度の値 WARNING、ERROR および CRITICAL のメッセージが表示されます。

デフォルトは ALL です。重大度の値は大文字でも小文字でも指定できます。

-server *server_name*

このオプションでは、NetBackup サーバー名を指定します。この名前は、NetBackup カタログに表示される名前と一致する必要があります。表示は、このサーバーに対して記録されるメッセージに制限されます。これは、その他の bpererror オプション

の条件も満たします。たとえば、`-server plim` および `-hoursago 2` を `bpcerror` のオプションとして使用する場合、表示する内容には、2時間前から `plim` に対して記録されたメッセージが含まれます。

サーバー名は、ログメッセージに記録されたサーバー名と一致している必要があります。たとえば、サーバー名が `plim.null.com` としてログに記録されている場合、`-server plim` を指定してもログは表示されませんが、`-server plim.null.com` を指定するとログが表示されます。

問い合わせは、ローカルマスターサーバーまたは `-M` で指定したマスターサーバー上に存在するエラーカタログに対して発行されます。マスターサーバーでは、`bpcerror` を実行するシステムからのアクセスが許可されている必要があります。

デフォルトでは、マスターサーバーが認識するすべてのメディアサーバーに対するログメッセージが表示されます。

-t type

このオプションでは、表示するログメッセージの種類を指定します。定義済みの値は、`ALL`、`BACKSTAT`、`MEDIADEV`、`GENERAL`、`BACKUP`、`ARCHIVE`、`RETRIEVE` および `SECURITY` です。デフォルトは `ALL` です。種類の値は、大文字でも小文字でも指定できます。1つ以上の値のリストとして入力します。たとえば、`-t BACKSTAT MEDIADEV` を指定すると、`BACKSTAT` または `MEDIADEV` のどちらかの種類のメッセージが表示されます。リスト内の要素は、空白で区切る必要があります。

-U

このオプションを指定すると、ユーザー形式でレポートが表示されます。**NetBackup-Java** レポートアプリケーションなどの **NetBackup** レポート生成ツールでは、このレポートを使用します。

-v

詳細モード。このオプションを指定して `bpcerror` を実行すると、デバッグに使用するための追加情報がログに書き込まれます。この情報は、**NetBackup** 管理の日次デバッグログに記録されます。`-v` は、**NetBackup** でデバッグログが有効になっている場合 (`install_path¥NetBackup¥logs¥admin` または `/usr/opensv/netbackup/logs/admin` ディレクトリが定義されている場合) にだけ有効です。デフォルトは詳細ではありません。

表示形式

次は `bpcerror` コマンドの表示形式です。

■ 状態コードの表示 (例: `bpcerror -S status_code`)

`bpcerror` を実行すると、ローカルシステム上の **NetBackup** オンライントラブルシュータに対して、状態コードに対応するメッセージの問い合わせが発行されます。`bpcerror` では、メッセージテキストが 1 行に表示され、次の行に説明が表示されます。

-r オプションを指定して bpcerror を実行すると、状態コードに対応するトラブルシューティングの推奨事項の問い合わせも発行されます。bpcerror では、状態メッセージに続いて、推奨事項が 1 つ以上の行で表示されます。

- エラーカタログの表示 (例: bpcerror -all; bpcerror -s severity)
bpcerror を実行すると、ローカルマスターサーバー上または -M オプションのリスト内のマスターサーバー上の **NetBackup** エラーカタログに対して問い合わせが発行されます。表示は、マスターサーバー上のエラーカタログの問い合わせ結果で構成されます。結果は、すべての bpcerror オプションを満たすカタログエントリだけです。たとえば、bpcerror コマンドラインにクライアント、開始時刻、終了時刻のオプションが含まれているとします。その場合、bpcerror を実行すると、そのクライアントの開始時刻から終了時刻までの間に実行されたジョブだけが通知されます。
エラーカタログから個別のメッセージエントリを表示する場合、詳細 (-L)、ユーザー (-U) または簡易 (-l) 形式で表示することができます。表示が状態コードによって分類される場合、ユーザー (-U) 以外の形式で表示することはできません。これらの各形式の表示内容は、次のとおりです。
- エラーカタログの表示、個別のメッセージエントリ、詳細形式 (たとえば、bpcerror -media -L)。このレポートでは、次の内容がログエントリごとに複数の行で生成されます。
フィールド 1: 日付と時刻 - 1970 年 1 月 1 日からの秒数
フィールド 2: **NetBackup** バージョン - 使用中の **NetBackup** バージョン
フィールド 3: エラーの種類 - エラーのメディア数値識別子
フィールド 4: ログエントリ形式 - 2 = デバッグ、4 = 情報、8 = 警告、16 = エラー、32 = 重要
フィールド 5: サーバー - サーバー名
フィールド 6: ジョブ ID
フィールド 7: グループジョブ ID
フィールド 8: 未使用
フィールド 9: **NetBackup** プロセス - ログを記録する **NetBackup** プロセス名
フィールド 10: クライアント名
フィールド 11: ポリシー名
フィールド 12: スケジュールの種類 - バックアップで実行するスケジュールの種類
0 = 完全 (FULL)、1 = 増分 (INCR)、2 = 累積増分 (CINC)、3 = ユーザーバックアップ (UBAK)、4 = ユーザーアーカイブ (UARC)
フィールド 13: 終了ステータス - バックアップが完了したときの状態
- エラーカタログの表示、個別のメッセージエントリ、ユーザー形式 (たとえば、bpcerror -media -U)。ユーザー形式では、ヘッダー行に列名が表示され、次の内容がログエントリごとに 1 行以上で表示されます。
1 行目: 日時
サーバー

クライアント

テキスト (必要に応じて、ログメッセージの先頭が前の行から継続されます)

- エラーカタログの表示、個別のメッセージエントリ、簡易形式 (たとえば、`bpcerror -media -l`)。簡易形式では、次の内容がログエントリごとに 1 行ずつ表示されます。

1 行目: 時間 (内部システムの表示)

NetBackup エラーデータベースログエントリのバージョン

形式コード (10 進数)

重大度コード (10 進数)

サーバー

ジョブ ID

ジョブグループ ID

未使用のフィールド

クライアント

プロセス名

テキスト (切り捨てなしのログメッセージテキスト全体)
- 状態コードが分類するエラーカタログが表示されます。この表示では、その状態コードのすべてのログエントリが表示される代わりに、一意の各状態コードだけが通知されます (たとえば、`bpcerror -backstat -by_statcode -U`)。このオプションによって、状態コードごとに複数の行が生成されます。次に、その内容を示します。

1 行目: 状態コード

テキスト (必要に応じて、ログメッセージテキストの先頭が前の行から継続されます)

2 行目: この状態が発生したクライアントのリスト

例

例 1 - NetBackup Encryption パッケージがインストールされていないために失敗したジョブのエラーを表示します。状態コード **9** は、この失敗に対する **NetBackup** の状態コードです。2 回目に `bpcerror` を実行すると、**NetBackup** の状態コード **9** に対する推奨操作が表示されます。

```
# bpcerror -d 12/23/2012 16:00:00 -e 12/23/2012 17:00:00 -t backstat
-U
STATUS CLIENT      POLICY    SCHED     SERVER    TIME COMPLETED
9      plim      dhcrypt   user      plim      12/23/2012 16:38:09
an extension package is needed, but was not installed
# bpcerror -S 9 -r
an extension package is needed, but was not installed
A NetBackup extension product is required in order to perform the
requested operation.
Install the required extension product.
```

例 2 - この 24 時間以内に発生した問題をユーザー形式で通知します。

```
# bpcerror -U -problems
      TIME                SERVER CLIENT - TEXT
11/23/2012 16:07:39 raisins - no storage units configured
11/23/2012 16:07:39 raisins - scheduler exiting - failed reading
storage unit database information (217)
11/23/2012 16:17:38 raisins - no storage units configured
11/23/2012 16:17:38 raisins - scheduler exiting - failed reading
storage unit database information (217)
11/23/2012 18:11:03 raisins nut bpcd on nut exited with status 59:
access to the client was not allowed
11/23/2012? 18:11:20 raisins - WARNING: NetBackup database backup is
currently disabled
```

例 3 - この 24 時間以内に実行された、種類が backstat のジョブの状態を表示します。
-by_statcode オプションを指定すると、状態コードごとに表示が編成されます。

chive、gava、raisins の各クライアントで 1 つ以上のジョブが正常に完了したことが表示されます (状態コードは 0 (ゼロ) です)。さらに、クライアント nut が、マスターサーバーまたはメディアサーバーからのアクセスを許可しなかったため、nut の 1 つ以上のジョブが失敗したことも表示されます。(状態コードは 59 です)。

```
# bpcerror -U -backstat -by_statcode
      0  the requested operation was successfully completed
      chive gava raisins
      59  access to the client was not allowed
      nut
```

例 4 - ある特定のユーザージョブの結果を識別して、取得します。最初に、0 (ゼロ) 以外のジョブ ID のログエントリを表示します。次に、特定のジョブに対するユーザー形式の通知を実行します。

```
# bpcerror -hoursago 2012 -L | grep 'S:' | egrep 'J¥:[1-9]'
12/21/2012 17:24:14 V1 S:plim C:plim J:1 (U:0,0)
12/23/2012 16:31:04 V1 S:plim C:plim J:1 (U:0,0)
12/23/2012 16:38:04 V1 S:plim C:plim J:3 (U:0,0)
# bpcerror -d 1/7/2007 -jobid 34 -U
      TIME                SERVER CLIENT - TEXT
01/07/2012 13:12:31 plim plim started backup job for client plim,
policy jdhcrypt, schedule user on storage unit jdhcrypt
01/07/2012 13:12:40 plim plim successfully wrote backup id
plim_0947272350,copy 1, fragment 1, 32 Kbytes at 11.057 Kbytes/sec
01/07/2012 13:12:41 plim plim CLIENT plim POLICY jdhcrypt SCHED user
EXIT STATUS 0 (the requested operation was successfully completed)
```

例 5 - 2000 時間前からのエラーカタログ内のメディアエントリを表示します。

```
bpperor -hoursago 2000 -media -U
      TIME          SERVER CLIENT - TEXT
12/23/2012 16:31:04 plim plim Media Manager terminated during mount
of media id A00000, possible media mount timeout
12/24/2012 04:31:20 plim - media id A00000 removed from Media
Manager database (manual deassign)
```

例 6 - 24 時間以内にバックアップが行われた合計バイト数をレポートして合計します。

```
bpperor -all -hoursago 24 | grep "successfully wrote backup id | awk
'{bytes= bytes + $20} END {print "backed up",bytes," Kbytes of
data"}'
backed up 64 Kbytes of data
up",bytes," Kbytes of data")'
```

bpexupdate

bpexupdate - イメージカタログ内のバックアップおよびメディアカタログ内のメディアの有効期限を変更

概要

```
bpexupdate -m media_id -d date | 0 | infinity [-host name] [-force]
[-nodelete] [-notimmediate] [-force_not_complete] [-M
master_server,...]
bpexupdate -deassignempty [-m media_id] [-force] [-M master_server,...]
bpexupdate -backupid backup_id -d date | 0 | infinity [-client name]
[-copy number] [-force] [-nodelete] [-notimmediate]
[-force_not_complete] [-do_not_follow_dependee] [-M master_server,...]
bpexupdate -recalculate [-backupid backup_id] [-copy number] [-d date
| 0 | infinity] [-client name] [-policy name] [-ret retention_level]
[-sched type] [-M master_server,...]
bpexupdate -stype server_type [-dp disk_pool_name [-dv disk_volume]]
[-nodelete] [-notimmediate] [-force_not_complete] [-M
master_server,...]
UNIX システムでは、このコマンドのディレクトリパスは
/usr/opensv/netbackup/bin/admincmd/ です。
Windows システムでは、このコマンドのディレクトリパスは
<install_path>%NetBackup%\bin\admincmd% です。
```

機能説明

NetBackup はバックアップイメージおよびメディア情報が含まれる内部データベースであるカタログを管理します。イメージカタログ内のイメージレコードには、有効期限が記録されています。メディアカタログ内のメディア ID にも、有効期限が記録されています。有効期限とは、NetBackup によってバックアップまたはメディア ID のレコードが、対応するカタログから削除される日時です。

bpexupdate を実行すると、NetBackup イメージカタログ内のバックアップの有効期限を変更できます。また、このコマンドを使用して、NetBackup メディアカタログ内のリムーバブルメディアの有効期限を変更することもできます。有効期限を 0 (ゼロ) に設定して bpexupdate を実行すると、イメージカタログのバックアップまたはメディアカタログのメディアはすぐに期限切れになります。NetBackup メディアカタログからメディア ID が削除されると、Enterprise Media Manager データベースからも削除されます。メディア ID は、メディアの以前の状態 (凍結、一時停止など) に関係なく削除されます。

有効期限の変更は、メディア ID 単位または個別のバックアップ ID 単位で実行できます。メディア ID の有効期限を変更すると、メディア上のすべてのバックアップの有効期限も変更されます。bpexptime には、次のオプションも指摘できます。

- 有効なバックアップが含まれないメディアをメディアカタログから削除する。
- 構成または指定された保持レベルに基づいて有効期限を再計算する。

このコマンドは、すべての認可済みユーザーが実行できます。

NetBackup による認可について詳しくは、次を参照してください。『[NetBackup セキュリティおよび暗号化ガイド](#)』。

操作

コマンドの操作を次に示します。

-backupid

1 つのバックアップの有効期限を変更します。日付が 0 (ゼロ) の場合、バックアップは、イメージカタログから削除されます。バックアップがリムーバブルメディアに存在し、-d で指定した有効期限が現在のメディア ID の有効期限を越える日時の場合、メディアカタログの有効期限も変更されます。-copy オプションを使用しないかぎり、バックアップのすべてのコピーが変更されます。-copy オプションを指定すると、指定したコピーだけが変更されます。

-deassignempty

有効なバックアップが含まれないリムーバブルメディアをカタログ上で検索します。メディアカタログからメディアを削除し、Media Manager カatalogのメディア ID を削除します。これによって、メディアの再利用が可能になります。メディアレポートの NetBackup イメージを使用すると、有効なバックアップが含まれない割り当て済みのメディアが存在するかどうかを判断できます。

デフォルトでは、依存イメージが期限切れになると対象の従属イメージも期限切れになります。-do_not_follow_dependee でこの動作を強制変更すると、イメージの有効期限が従属イメージに影響しません。

-force_not_complete

デフォルトでは、SLP 処理が進行中の場合は SLP 管理対象イメージまたはそのコピーは期限切れにできません。-force_not_complete オプションはこの制限を強制変更し、SLP が完了していてもイメージを期限切れにします。イメージの SLP の後続処理を終了すると、他のイメージのコピーも期限切れになることがあります。

-m

有効期限を変更するか、またはメディアカタログ内のメディア ID および NetBackup カatalog内の関連付けられたバックアップを削除します。個別の有効期限は、バックアップの各コピーのイメージカタログ内で管理されます。この形式を使用すると、メディア上のコピーの有効期限だけが影響を受けます。有効期限に 0 (ゼロ) を指定

してメディアカタログからメディア ID を削除すると、そのメディア ID は Enterprise Media Manager データベースからも削除されます。

-recalculate

バックアップの有効期限を、指定した保持レベルに基づいて変更できます。また、新しい有効期限を指定することもできます。保持レベルに従って有効期限を変更する場合、新しい日付はバックアップの作成日に保持レベルの値を加えた値に基づきます。1 つのバックアップ、または特定のクライアント、ポリシーまたはスケジュールのすべてのバックアップに対して、有効期限を変更できます。

バックアップがリムーバブルメディアに存在し、コマンドで指定した有効期限が現在の有効期限を越える日時の場合、メディアカタログの有効期限も変更されます。

-stype server_type

このオプションでは、ストレージサーバー形式を識別する文字列を指定します。**server_type** の値は次のいずれかから指定できます。

- シマンテック社が提供するストレージ。指定可能な値は、AdvancedDisk と PureDisk です。
- サードパーティのディスクアプライアンス。ベンダーから **server_type** の文字列が提供されます。
- クラウドストレージ。有効な値は amazon、att、nirvanix、rackspace などです。これらの値には **_crypt** 接尾辞 (amazon_crypt など) を含めることもできます。

ストレージサーバーの形式では大文字と小文字が区別されます。

オプション

-client name

このオプションでは、-backupid および -recalculate 操作のクライアント名を指定します。

backupid 操作の場合、このオプションを指定すると、指定したクライアントのバックアップ ID が NetBackup によって最初に検索されます。このオプションは、クライアント名が変更された場合に有効です。

recalculate の場合、このオプションを指定すると、指定したすべてのクライアントバックアップの保持レベルに基づいて、有効期限が再計算されます。

-copy number

このオプションでは、有効期限を期限切れにするか、または有効期限を変更するコピー番号を指定します。これは、-backupid および -recalculate オプションと同時に指定する場合だけ有効です。有効な値は、1 から 10 です。

プライマリコピーの期限が切れた場合、もう 1 つのコピーがプライマリコピーになります。このオプションを指定しない場合、バックアップの両方のコピーに有効期限が反映されます。

-d *date*

このオプションでは、有効期限を指定します。**date** には次のいずれかを指定できます。

- **mm/dd/yy hh:mm:ss**
- 0 - バックアップまたはメディアがすぐに期限切れになります
- **infinity** - バックアップが期限切れになることはありません

NetBackup コマンドの日時の値に求められる形式は、使用しているロケールによって異なります。/user/openv/msg/.conf ファイル (UNIX) と *install_path*¥VERITAS¥msg¥LC.CONF ファイル (Windows) はそれぞれのサポート対象ロケールの日時形式などの情報を含んでいます。これらのファイルには、サポートされているロケールおよび書式のリストを追加および変更するための、具体的な方法が含まれています。

システムのロケールについて詳しくは、NetBackup インストールのロケールの指定に関する項を参照してください。『[NetBackup 管理者ガイド Vol. 2](#)』。

-deassignempty

メディアに有効なバックアップが含まれなくなると、メディアカタログのリムーバブルメディアが期限切れになります。また、Media Manager カatalogのメディア ID の割り当ても解除されます。

-dp *disk_pool_name* -dv *disk_volume*

このオプションでは、ディスクプールと、必要に応じて、有効期限が設定されている操作を実行するディスクボリュームを指定します。

-force

bpexpdate を実行すると、指定した操作が開始される前に、問い合わせが発行されます。このオプションを指定して bpexpdate コマンドを実行すると、ユーザーを問い合わせることなく操作が実行されます。

-host *name*

メモ: NetBackup Server では、サーバーが 1 台 (マスターサーバー) だけであるため、このオプションは不要です。このオプションを使用する場合、サーバーのホスト名を指定します。

このオプションでは、メディアが割り当てられているサーバーのホスト名を指定します。このオプションは、マスターサーバーにリモートメディアサーバーがあり、

bpexupdate を実行するサーバーでボリュームが書き込まれていない場合にのみ、`-m media_id` オプションとともに使う必要があります。

たとえば、`whale` というマスターサーバーと、`eel` というメディアサーバーが存在すると想定します。次に示すコマンドを `whale` 上で実行して、メディア ID `BU0001` をメディアカタログから削除し、さらにすべての関連するバックアップをイメージカタログから手動で削除します。

```
bpexupdate -m BU0001 -d 0 -host eel
```

NetBackup の [メディアリスト (Media Lists)] レポートを使用すると、ボリュームが存在するサーバーのメディアカタログを判断できます。

`-m media_id`

このオプションでは、有効期限の変更によって影響を受けるメディア ID を指定します。メディア ID 上のバックアップの有効期限も変更されます。`-d` オプションは、このオプションと同時に指定する必要があります。

このオプションは、`-deassignempty` オプションを指定して、この特定のメディア ID 上に有効なバックアップが存在するかどうかを確認するためにも使用できます。この場合、`-d` オプションを含めないでください。

メディア ID は、6 文字以下で指定し、NetBackup メディアカタログに含める必要があります。

`-M master_server [, ...]`

このオプションでは、メディア ID を含むメディアカタログを管理するマスターサーバーを指定します。このオプションを指定しない場合、デフォルトは次のいずれかになります。NetBackup Server の場合:

NetBackup Server では、リモートメディアサーバーを持たない 1 つのマスターサーバーだけがサポートされます。そのため、この場合のデフォルトは常に、コマンドを実行するマスターサーバーです。

NetBackup Enterprise Server の場合:

コマンドをマスターサーバー上で実行する場合、そのサーバーがデフォルトです。コマンドをマスターサーバーではなくメディアサーバー上で実行する場合、そのメディアサーバーのマスターサーバーがデフォルトです。

`-nodelete`

このオプションを指定すると、バックアップはイメージカタログから削除されますが、ディスクストレージからは削除されません。ディスクグループをマスターサーバーからデポートし、そのディスクグループを別のマスターサーバーにインポートする場合、このオプションを使用します。

`-notimmediate`

このオプションを指定すると、ディスク上のイメージが期限切れになった後、bpexupdate による `nbdelete` コマンドの呼び出しが行われません。一度に多数のイメージを削

除する場合、`-notimmediate` を使用すると、`nbdelete` 処理で複数のジョブが作成されることによって発生するオーバーヘッドを回避できます。`nbdelete` コマンドは後で実行できます。

`-policy name`

このオプションでは、ポリシー名を指定します。これは、`-recalculate` オプションと同時に指定する場合に有効です。ポリシー名を指定した場合、このポリシーで作成されたすべてのバックアップの保持レベルに基づいて、有効期限が再計算されます。

`-recalculate`

このオプションを指定すると、保持レベルに基づいてバックアップの有効期限が再計算されます。また、新しい有効期限を指定することもできます。1 つのバックアップ、または特定のクライアント名、ポリシー名またはスケジュール形式のすべてのバックアップの有効期限を変更する他のオプションを含めることができます。このオプションは、`-d` または `-ret` オプションのいずれかと同時に指定する必要があります。

`-ret retention_level`

このオプションでは、有効期限を再計算するときに使用する保持レベルを指定します。これは、`-recalculate` オプションと同時に指定する場合に有効です。レベルの範囲は **0** から **24** です。新しい有効期限はバックアップの作成日にこの保持レベルを加えた値です。このオプションに `-backupid` か `-policy` を指定します。

`-sched type`

このオプションでは、スケジュール形式を指定します。これは、`-recalculate` オプションと同時に指定する場合に有効です。形式を指定すると、このスケジュール形式で作成されたすべてのバックアップの保持レベルに基づいて、有効期限が再計算されます。形式は、次のように数値で入力します。

- 0 = 完全バックアップ
- 1 = 差分増分バックアップ
- 2 = ユーザーバックアップ
- 3 = ユーザーアーカイブ
- 4 = 累積増分

`-policy` オプションは、`-sched` と同時に指定する必要があります。

注意事項

いくつかのオプションでは、大規模な環境において、バックアップを完了するまでに長時間かかる場合があります。変更によってバックアップまたはメディアの期限が切れた場合、その変更は取り消すことができません。このコマンドを実行してエラーが発生した場合、バックアップのインポートや、以前のバージョンのカタログのリカバリを行う必要があります。

例

例 1 - マスターサーバー上で次のコマンドを実行すると、メディアカタログからメディア ID BU0002 が削除されます。Media Manager カatalogのメディア ID の割り当てが解除されます。また、イメージカタログ内の関連付けられたイメージレコードも期限切れになります。

```
# bpexupdate -m BU0002 -d 0
```

例 2 - backupid が eel_0904219764 のコピー 2 の有効期限が変更されます。バックアップのコピー 1 の有効期限は変更されません。

```
# bpexupdate -backupid eel_0904219764 -d 12/20/2012 08:00:00 -copy 2
```

例 3 - イメージカタログからバックアップが削除されます。-copy オプションを指定していないため、すべてのコピーが削除されます。

```
# bpexupdate -backupid eel_0904219764 -d 0
```

例 4 - ホスト cat のメディアカタログ内に、割り当てられていても、有効なバックアップを含まないメディアが存在するかどうかを確認できます。コマンドはカタログからそのようなメディアを削除し、Media Manager のカタログの割り当てから解除します。

```
# bpexupdate -deassignempty -host cat
```

例 5 - 日付 10/31/2012 に対してバックアップ ID 1234 の有効期限を計算し直します。

```
# bpexupdate -recalculate -backupid 1234 -d 10/31/10
```

例 6 - 保持レベルに基づいてバックアップ ID 1234 の有効期限を計算し直します。新しい保持レベルは 4 で、2 か月です (デフォルト値)。バックアップ ID 1234 は 2 か月で期限切れになるようにスケジュールされています。

```
# bpexupdate -recalculate -backupid 1234 -ret 4
```

ファイル

UNIX システムの場合:

```
/usr/opensv/netbackup/logs/admin/*  
/usr/opensv/netbackup/db/media/*  
/usr/opensv/netbackup/db/images/*
```

Windows システムの場合:

```
install_path¥NetBackup¥logs¥admin¥*  
install_path¥NetBackup¥db¥media¥*  
install_path¥NetBackup¥db¥images¥*
```

bpfis

bpfis – スナップショットの作成または削除、あるいは既存のスナップショットに関する情報の照会

概要

```
bpfis delete [-force] -id id -copy copynum
```

```
bpfis query [-fq] [-id id -copy copynum]
```

UNIX システムでは、このコマンドのディレクトリパスは /usr/opensv/netbackup/bin/ です。

Windows システムでは、このコマンドのディレクトリパスは <install_path>%NetBackup%bin% です。

機能説明

bpfis コマンドを実行すると、クライアントシステム (ファイルシステムまたはボリューム) のスナップショットの削除または問い合わせ (検出) を実行できます。

メモ: テープまたは他のメディアにイメージを格納するには、別のバックアップジョブを実行する必要があります。

システムのロケールについて詳しくは『NetBackup 管理者ガイド Vol. 2』で「NetBackup インストールのロケールの指定」を参照してください。

bpfis の使用に関する詳細な例と手順は、次を参照してください。『NetBackup Snapshot Client 管理者ガイド』。

このコマンドを実行するには、管理者権限が必要です。

オプション

-copy copynum

コピー番号を識別します。問い合わせ機能とともに使用すると、-copy はスナップショットの指定したコピー番号に関する詳細な情報を表示します。削除機能とともに使用すると、-copy は削除するスナップショットのコピー番号を指定します。

delete

-id で識別されるスナップショットを削除します。

-force

削除操作を強制します。

-fq
特定のスナップショットについての詳細な説明と情報を含む完全な問い合わせを生成します。

-id
元のファイルシステム (スナップショットソース) のパスとスナップショットファイルシステムのパスが戻されます。デフォルトの ID は、イメージが作成された日時を示すタイムスタンプです。

bpfis delete の場合、このオプションでは、削除されるスナップショットの ID を指定します。

bpfis query の場合、このオプションでは、情報を戻すスナップショットの ID を指定します。

問い合わせ (query)

クライアントシステムの指定したスナップショットに関する詳細情報を取得します。

例

例 1 - ローカルホスト上の特定のスナップショットに関する情報を取得します。スナップショットソースのパス (**UNIX**の場合: /mnt/ufscn) とスナップショットファイルシステムのパス (**UNIX**の場合: /tmp/_vrts_frzn_img_26808/mnt/ufscn) が出力されます。

```
# bpfis query -id 1034037338
INF - BACKUP START 26838
INF - Frozen image host : ricochet
INF - Frozen image owner: GENERIC
INF - Time created      : Mon Oct  7 19:35:38 2011
INF - REMAP FILE BACKUP /mnt/ufscn USING (UNIX systems)
INF - REMAP FILE BACKUP E: USING <GUID> (Windows systems)
/tmp/_vrts_frzn_img_26808/mnt/ufscn (UNIX systems)
OPTIONS:ALT_PATH_PREFIX=/tmp/_vrts_frzn_img_26808,FITYPE=MIRROR,
MNTPOINT=/mnt/ufscn,FSTYPE=ufs (UNIX systems)
MNTPOINT=E:¥,FSTYPE=NTFS (Windows systems)
INF - EXIT STATUS 0: the requested operation was successfully completed
```

例 2 - ローカルホスト上のスナップショットを削除します。

```
# bpfis delete -id 1034037338
INF - BACKUP START 26839
INF - EXIT STATUS 0: the requested operation was successfully
completed
```

bpgetconfig

bpgetconfig - 構成情報を取得

概要

```
bpgetconfig -M master [-x | -X | -d | -D] [config_item ...]
bpgetconfig [-u | -h] [-x | -X | -d | -D] [config_item ...]
bpgetconfig -g server [-L | -U | -l] [-c] [-A]
bpgetconfig -s server [-L | -U | -l] [-c] [-A]
bpgetconfig -i | -e filenameclient [policy [schedule]]
```

UNIX システムでは、このコマンドのディレクトリパスは

/usr/opensv/netbackup/bin/admincmd/ です。

Windows システムでは、このコマンドのディレクトリパスは

<install_path>%NetBackup%bin\admincmd% です。

機能説明

bpgetconfig は、単独のプログラムとして、または backuptrace および restoretrace コマンドのヘルパープログラムとして使用できます。このコマンドによって構成情報を取得することができます。このコマンドは、すべての **NetBackup** サーバープラットフォームで使用できます。このコマンドを使用すると、指定したサーバーの構成情報を様々な形式で表示できます。

また、bpgetconfig は、-g か -s オプションを使用することで指定のホストサーバーから一般的なホスト情報を取り込みます。

このコマンドを実行するには、管理者権限が必要です。

オプション

-A

利用可能なすべてのシステム情報を表示します。-A オプションは -g または -s オプションとのみ使用できます。

-c

-g か -s オプションの出力に 1 行ごとに追記される暗号を表示します。-c オプションは -g または -s オプションとのみ使用できます。

-D | -d

-D オプションは、構成のエントリ名、角カッコで囲んだ既存の構成値、およびカッコで囲んだデフォルトの構成値のリストを戻します。この操作はローカルまたはリモートで実行できます。**NetBackup** が同一のバージョンのリモートマシンをインストールさ

れます。-D オプションと -d オプションは、-M、-h、-u の各オプションと組み合わせることができます。

すべての構成項目の完全な表示の一部分を次に示します。

```
...
REQUEST_DELIVERY_TIMEOUT      [300]          (300)
DISABLE_SCSI_RESERVE          [NO]           (NO)
Time_Overlap                   [60]           (60)
Buffer_Size                     [16]           (16)
Use_Archive_Bit                [YES]          (YES)
Perform_Default_Search         [YES]          (YES)
Accumulate_Files               [NO]           (NO)
...
```

-d オプションは、-d が構成のデフォルトから変更したエントリのみを表示することを除き、-D オプションのように機能します。次に表示例を示します。

```
...
PEM_VERBOSE                    [-1]           (0)
JM_VERBOSE                     [-1]           (0)
RB_VERBOSE                     [-1]           (0)
CONNECT_OPTIONS                [**configured**]  ()
Exclude                        [**configured**]  ()
Browser                        [host1.min.symc.com]  ()
AUTHENTICATION_DOMAIN         [**not configured**]  ()
VXSS_NETWORK                  [**not configured**]  ()
PREFERRED_NETWORK             [**not configured**]  ()
...
```

-e *filename server [class [schedule]]*

exclude_list ファイルを *server* から取得し、そのファイルを *filename* で指定した場所に書き込みます。*policy* 修飾子と *schedule* 修飾子を使うと、*exclude_list.policy* ファイルと *exclude_list.policy.schedule* を取得できます。エクスクルードリストのファイルはバックアップから除外されます。

このオプションは、UNIX だけに適用されます。

-g *server*

このオプションでは、次の一般的な Backup Exec 情報および NetBackup 情報を表示するホストサーバー (*server*) を指定します。

- マスターまたはクライアント
- NetBackup クライアントのプラットフォーム
- NetBackup クライアントのプロトコルレベル

- 製品の種類 (Backup Exec がインストールされている場合は「Backup Exec」、それ以外の場合は「NetBackup」)
- バージョン名 (Backup Exec がインストールされている場合は Backup Exec のバージョン名、それ以外の場合は NetBackup のバージョン名)
- バージョン番号 (Backup Exec がインストールされている場合は Backup Exec のバージョン番号、それ以外の場合は NetBackup のバージョン番号)
- NetBackup のバイナリがインストールされているディレクトリ (Backup Exec がインストールされている場合は NULL)
- ホストサーバーにインストールされている OS

-h

このオプションを指定すると、デフォルトのローカルホスト構成が表示されます。

-i *filename server [class [schedule]]*

include_list ファイルを *server* から取得し、そのファイルを *filename* で指定した場所に書き込みます。 *class* (ポリシー) 修飾子と *schedule* 修飾子を使うと、*include_list.class* ファイルと *include_list.class.schedule* を取得できます。インクルードリストのファイルはエクスクルードリストの例外です。したがって、これらのファイルはバックアップ操作に含まれます。

このオプションは、UNIX だけに適用されます。

-L

このオプションを指定すると、ユーザー用の詳細なリストが表示されます。-L オプションは -g または -s オプションとのみ使用できます。

-l

このオプションを指定すると、マシン用の簡易なリストが表示されます。-l オプションは -g または -s オプションとのみ使用できます。

-M *master*

このオプションでは、ホスト構成を表示するマスターサーバー (*master*) を指定します。

-s *server*

bpgetconfig が次のフィールド情報を出力するホストサーバー (*server*) を選択します。

- フィールド 1 = サーバーの種類 (マスター、メディア、クライアント)
- フィールド 2 = 指定したサーバーの OS の種類
- フィールド 3 = NetBackup クライアントのプロトコルレベル
- フィールド 4 = NetBackup の製品の種類 (NetBackup など)
- フィールド 5 = NetBackup のバージョン名 (7.5 など)

- フィールド 6 = NetBackup のバージョン番号 (750000 など)
- フィールド 7 = サーバー上の NetBackup の bin を示すインストールパス
- フィールド 8 = ホストサーバーにインストールされている OS

-t

階層情報を 1 行に 1 つずつ **-s** オプションの出力に追加して表示します。-t オプションは **-g** オプションまたは **-s** オプションと一緒にのみ使用できます。

-U

このオプションを指定すると、ユーザー用の簡易なリストが表示されます (デフォルト)。-U オプションは **-g** または **-s** オプションとのみ使用できます。

-u

このオプションを指定すると、現在のユーザー構成が表示されます。

-X

このオプションを指定すると、デフォルトですべての構成項目が表示されます。-x オプションと **-X** オプションは、**-m**、**-h**、**-u** の各オプションと組み合わせることができます。コマンドラインに 1 つ以上の構成項目を指定した場合、**-x** オプションおよび **-X** オプションは無効になります。

config_item を指定すると、指定した構成項目に表示されます。

-x

このオプションを指定すると、構成内に明示的に表示されていない項目が除外されます。

例

例 1 - **bp.conf** ファイルから **VERSIONINFO** オプションの設定を取り込みます。

```
# bpgetconfig VERSIONINFO
VERSIONINFO = "SunOS" "5.9" "Unknown" "NetBackup" "7.0" 700000
```

例 2 - すべての利用可能なシステム情報を取り込み、ユーザー用の詳細なリストを表示します。

```
# bpgetconfig -s hagar -A -L
Client/Master = Master
NetBackup Client Platform = Solaris9
NetBackup Client Protocol Level = 7.5
Product = NetBackup
Version Name = 7.5
Version Number = 750000
NetBackup Installation Path = /usr/opensv/netbackup/bin
```

```
Client OS/Release = SunOS 5.9  
Cipher =  
Patch Level = 7.0
```

例 3 - UNIX システムで、ファイル `exclude_list` をクライアント `sun01` から取り込み、そのファイルをディレクトリ `/usr/opensv/netbackup/lists` の `sun01_exclude_list` に書き込みます。

```
# bpgetconfig -e /usr/opensv/netbackup/lists/sun01_exclude_list sun01
```

関連項目

- p.376 の [bpsetconfig](#) を参照してください。
- p.589 の [nbgetconfig](#) を参照してください。
- p.649 の [nbsetconfig](#) を参照してください。

bpgetdebuglog

bpgetdebuglog - backuptrace と restoretrace のヘルパープログラムを実行します。デバッグログファイルを出力します。単独のプログラムとして使用することもできます。

概要

```
bpgetdebuglog remote_machine [remote_program mmdyy]
```

UNIX システムでは、このコマンドのディレクトリパスは

/usr/opensv/netbackup/bin/admincmd/ です。

Windows システムでは、このコマンドのディレクトリパスは

<install_path>%NetBackup%bin\admincmd% です。

機能説明

3つの引数をすべて指定して bpgetdebuglog を実行すると、指定したデバッグログファイルの内容が標準出力に出力されます。**remote_machine** だけを指定して bpgetdebuglog を実行すると、ローカルコンピュータとリモートマシン間のクロックのずれの秒数が標準出力に出力されます。正の数は、ローカルコンピュータがリモートマシンより進んでいることを示します。負の数は、リモートマシンがローカルコンピュータより進んでいることを示します。

bpgetdebuglog コマンドを backuptrace と restoretrace で使用するには、指定されたディレクトリ (形式を参照) にこのコマンドが存在する必要があります。

このコマンドを実行するには、管理者権限が必要です。

オプション

remote_machine

このオプションでは、リモートサーバーの名前を指定します。

remote_program

このオプションでは、リモートサーバー上のデバッグログディレクトリの名前を指定します。

mmdyy

このオプションでは、読み込まれるログファイル (UNIX では log.mmdyy、Windows では mmdyy.log) を識別するために使われる日付スタンプを指定します。

例

```
# bpgetdebuglog peony bpcd 071207  
# bpgetdebuglog peony
```

bpimage

bpimage - データベースに保存されているイメージに対する機能の実行

概要

```
bpimage -[de]compress [-allclients | -client name] [-M
master_server,...]
bpimage -npc copy # -backupid backupid [-client name] [-M
master_server,...]
bpimage -newserver newserver_name [-oldserver oldserver_name] [-id
id]
bpimage -deletecopy # -backupid backupid [-M master_server,...]
bpimage -testlock # -backupid backupid [-M master_server,...]
bpimage -prunetir [-allclients | -client name] -cleanup
[-notimmediate] [-M master_server,...]
bpimage -cleanup_image_change_log [-M master_server,...]
bpimage -gendrreport -backupid backupid [-M master_server,...]
bpimage -index index_number -client name [-M master_server,...]
bpimage -wff path_bytes -backupid backupid [-client name] [-M
master_server,...]
bpimage -update [-secinfo 0|1 | -rfile 0|1 | -filesysonly 0|1 |
-numfiles number | -keyword keyword_phrase | -objdesc string] [-client
name -policy name -t type -d mm/dd/yyyy HH:MM:SS] [-id id] [-M
master_server,...]
```

UNIX システムでは、このコマンドのディレクトリパスは

/usr/opensv/netbackup/bin/admincmd です。

Windows システムでは、このコマンドへのディレクトリパスは

<install_path>%NetBackup%\bin\admincmd% です。

機能説明

このコマンドを実行すると、データベースに格納されているイメージに対して様々な機能を実行できます。実行できる機能には、次のものがあります。

- 格納されているイメージの圧縮または解凍。
- データベースからの既存のイメージの削除。
- イメージに対するロック機能のテスト。
- クライアントのインデックス付け。

オプション

次のオプションを指定すると、レポート対象として選択するイメージまたはメディアを決定する条件が表示されます。イメージに対するこれらのオプションの説明は、コンテキストがメディアレポートを参照する場合、メディアに置き換えることができます。

-allclients

すでにシステム上にバックアップされているすべての **NetBackup** クライアントが選択されます。

-backupid backup_id

このオプションでは、適用可能なイメージの検索に使用するバックアップ ID を指定します。

-client name

このオプションでは、指定した機能を実行するバックアップまたはアーカイブの検索に使うクライアント名を指定します。bpimage で検索するクライアント名は大文字と小文字が区別されません。たとえば、client、cLiEnT、CLIENT のいずれを指定してもイメージが表示されます。デフォルトでは、bpimage を実行すると、すべてのクライアントのイメージが検索されます。

-cleanup_image_change_log

現在のマスターサーバーでのイメージの変更をクリーンアップし、必要に応じて、-M オプションで指定された他のマスターサーバーでのイメージの変更をクリーンアップします。

-cleanup

このオプションを指定すると、期限切れになったイメージが削除され、圧縮するようにスケジュールされているイメージが圧縮され、指定したイメージから TIR 情報が削除されます。

メモ: このオプションを実行すると、ユーザーは、スケジューラによって定期的に行われるのと同じタスクを手動で実行できます。スケジューラによって実行されるまで待ちきれない場合は、このコマンドを使用してタスクを実行することができます。

-d date

これらのオプションでは、表示の対象とする開始日時から終了日時の範囲を指定します。

-d では、表示の対象とする開始日時を指定します。リストには、指定した日時以降に実行されたバックアップまたはアーカイブ内のイメージだけが表示されます。

NetBackup コマンドの日時の値に求められる形式は、使用しているロケールによって異なります。/user/opensv/msg/.conf ファイル (**UNIX**) と install_path¥VERITAS¥msg¥LC.CONF ファイル (**Windows**) はそれぞれのサポート対象ロケールの日時形式などの情報を含んでいます。これらのファイルには、サ

ポートされているロケールおよび書式のリストを追加および変更するための、具体的な方法が含まれています。

システムのロケールについて詳しくは、NetBackup インストールのロケールの指定に関する項を参照してください。『NetBackup 管理者ガイド Vol. 2』。

有効な日時の範囲は、01/01/1970 00:00:00 から 01/19/2038 03:14:07 です。デフォルトは、現在の日付の午前 0 時です。

-[de]compress

指定したクライアントまたはすべてのクライアントを圧縮または圧縮解除します。

-deletecopy #

このオプションを指定すると、コピー番号 (#) および *backup_id* によって指定されたイメージが削除されます。

-filesysonly 0|1

1 に設定すると、ローカルファイルシステムの間い合わせのみに bpimage を制限します。

-gendrreport

指定された *backup_id* に対してディザスタリカバリレポートを生成します。

-id *id*

-**newserver** コマンドと使われる場合はメディア ID を指定し、-update コマンドと使われる場合はバックアップ ID を指定します。

-index *n*

このオプションを指定すると、データベースにインデックスが付けられます。*n* 変数はインデックスレベルであり、その範囲は 1 から 9 です。9 の値を指定すると、最適なインデックスが作成されます。このオプションは、ASCII だけに適用されます。

-notimmediate

このオプションを指定すると、ディスク上のイメージが期限切れになった後、bpexpdate による nbdelete コマンドの呼び出しが行われません。一度に多数のイメージを削除する場合、-notimmediate を使用すると、nbdelete 処理で複数のジョブが作成されることによって発生するオーバーヘッドを回避できます。nbdelete コマンドは後で実行できます。

-keyword "*keyword_phrase*"

このオプションでは、検索に使用する NetBackup のキーワード句を指定します。キーワード句は、事前にイメージに関連付けられているキーワード句に一致している必要があります。

-objdesc *string*

このオプションでは、-update コマンドの実行時の Informix クライアント形式のオブジェクト記述文字列を指定します。

`-newserver name | -oldserver name`

このオプションでは、**NetBackup** サーバーの元の名前または新しい名前を指定します。

`-npc copy #`

このオプションを指定すると、指定したイメージが、イメージのコピー番号に基づいてプライマリイメージとして設定されます。

`-numfiles number`

このオプションでは、`-update` コマンドの実行時のファイル数を指定します。

`-M master_server,...`

このオプションでは、代替マスターサーバーのリストを指定します。このリストは、カンマで区切られたホスト名のリストです。リストの各マスターサーバーが `bpimage` コマンドを実行します。マスターサーバーでエラーが発生した場合、その時点で処理が停止します。

レポートは、このリスト内のすべてのマスターサーバーから戻される情報で構成されます。`bpimage` コマンドを実行すると、各マスターサーバーに対して問い合わせが発行されます。マスターサーバーによって、イメージカタログのイメージまたはメディアの情報が戻されます。各マスターサーバーによって、`bpimage` コマンドを発行するシステムからのアクセスが許可されている必要があります。

デフォルトは、`bpimage` コマンドを実行しているシステムのマスターサーバーです。

`-policy name`

このオプションを指定すると、指定したポリシー内で、インポートするバックアップが検索されます。デフォルトはすべてのポリシーです。

`-prunetir`

このオプションを指定すると、指定したクライアントから **True Image Restore (TIR)** 情報が削除されます。デフォルトはすべてのクライアントです。

`-rfile 0|1`

`-update` コマンドで指定するとリストアファイルが使用されます。

`-secinfo 0|1`

NetWare クライアント形式に関する拡張セキュリティ情報が使用されます。

`-t type`

このオプションでは、ポリシー形式を指定します。デフォルトでは、`bpimage` コマンドを実行すると、すべてのポリシー形式が検索されます。**type** には、次のいずれかの文字列を指定します。

Informix-On-BAR
MS-Exchange-Server
MS-SQL-Server
MS-Windows

NetWare
Oracle
OS/2
Standard
Sybase
NDMP

次のポリシー形式は、**NetBackup Enterprise Server** だけに適用されます。

AFS
DataTools-SQL-BackTrack
DB2
FlashBackup
SAP
Split-Mirror

`-update`

このコマンドを実行すると、選択したパラメータに基づいてイメージが更新されます。

`-wff path bytes`

このコマンドを実行すると、`-backupID` で指定したバックアップの **files-file** (イメージの `.f` ファイル) が書き込まれます。

bpimagelist

bpimagelist – NetBackup イメージまたはリムーバブルメディアの状態レポートの生成

概要

```
bpimagelist [-media] [-l | -L | -U | -idonly] [-tape] [-d date] [-e date] [-hoursago hours] [-keyword "keyword phrase"] [-client client_name] [-server server_name] [-backupid backup_id] [-option INCLUDE_PRE_IMPORT | INCLUDE_TIR | LIST_COMPLETE_COPIES | LIST_OLD_TO_NEW | ONLY_PRE_IMPORT | ONLY_TIR] [-policy policy_name] [-pt policy_type] [-rl retention_level] [-sl sched_label] [-st sched_type] [-class_id class_guid] [-stl_complete] [-stl_incomplete] [-stl_name storage_lifecycle_name] [-M master_server,...] [-inter-domain] [-v]
```

```
bpimagelist -changelog [-L | -json | -json_compact] [-min_changelog_keykey] [-d mm/dd/yyyy HH:MM:SS] [-e mm/dd/yyyy HH:MM:SS] [-new_images] [-updated_images] [-deleted_images]
```

UNIX システムでは、このコマンドのディレクトリパスは

`/usr/opensv/netbackup/bin/admincmd` です。

Windows システムでは、このコマンドへのディレクトリパスは

`<install_path>%NetBackup%\bin\admincmd` です。

機能説明

bpimagelist はコマンドオプションから送信される属性と一致するカタログイメージカリムーバブルメディアについて報告するために指定の形式を使います。-media オプションがコマンドラインにある場合、bpimagelist はリムーバブルメディアについて報告します。そうでなければ、カタログイメージについて報告します。

bpimagelist -changelog オプションを指定すると、イメージ変更ログのレコードがレポートされます。新しいイメージ、更新されたイメージ、削除されたイメージのいずれかだけを表示するようにレポートをフィルタ処理できます。

このコマンドのデバッグログの情報は次のディレクトリに書き込まれます。

On UNIX systems: `/usr/opensv/netbackup/logs/admin`

On Windows systems: `install_path%\NetBackup%\logs\admin`

このディレクトリ内の情報は、トラブルシューティングに使用できます。

bpimagelist の出力は、標準出力に出力されます。

このコマンドは、認可済みユーザーが実行できます。

NetBackup による認可について詳しくは、次を参照してください。『[NetBackup セキュリティおよび暗号化ガイド](#)』。

オプション

bpimagelist のオプションは次のとおりです。

`-backupid backup_id`

このオプションでは、適用可能なイメージの検索に使用するバックアップ ID を指定します (イメージの表示だけに適用されます)。

`-changelog`

イメージ変更ログのレコードがレポートされます。

`-class_id class_guid`

このオプションでは、イメージの選択に使用するクラス識別子を指定します。識別子は、GUID (グローバル一意識別子) を表します。bpimagelist コマンドを使用すると、指定したクラス識別子を持つイメージだけがレポートされます。

`-client client_name`

このオプションでは、表示するバックアップまたはアーカイブの検索に使用するクライアント名を指定します。bpimagelist で検索するクライアント名は大文字と小文字が区別されません。たとえば、client、cLiEnT、CLIENT のいずれを指定してもイメージが表示されます。デフォルトでは、bpimagelist を実行すると、すべてのクライアントが検索されます。

`-d mm/dd/yy hh:mm:ss, -e mm/dd/yy hh:mm:ss`

これらのオプションでは、表示の対象とする開始日時から終了日時の範囲を指定します。これらの値をコマンドラインで指定しなかった場合のデフォルト値は次のとおりです。

- `-d` デフォルトは、現在の日付の午前 0 時です。
- `-e` デフォルトは、現在の日時です。

開始日時と終了日時の完全な形式は次のとおりです。

`-d` では、表示の対象とする開始日時を指定します。出力リストには、指定した日時以降に実行されたバックアップまたはアーカイブ内のイメージ (`-changelog` オプションを指定した場合は変更ログのデータ) だけが表示されます。

`-e` では、表示の対象とする終了日時を指定します。出力リストには、指定した日時以前に実行されたバックアップまたはアーカイブ内のファイル (`-changelog` オプションを指定した場合は変更ログのデータ) だけが表示されます。開始日時と同じ形式を使用します。

有効な日時の範囲は、01/01/1970 00:00:00 から 01/19/2038 03:14:07 です。

NetBackup コマンドの日時の値に求められる形式は、使用しているロケールによって異なります。/user/openv/msg/.conf ファイル (UNIX) と

install_path¥VERITAS¥msg¥LC.CONF ファイル (Windows) はそれぞれのサポート対象ロケールの日時形式などの情報を含んでいます。これらのファイルには、サポートされているロケールおよび書式のリストを追加および変更するための、具体的な方法が含まれています。

システムのロケールについて詳しくは、NetBackup インストールのロケールの指定に関する項を参照してください。『NetBackup 管理者ガイド Vol. 2』。

-hoursago hours

このオプションを指定すると、指定する時間までに書き込まれたイメージが含まれます。このオプションは、開始時刻 (-d) を現在の時刻からのマイナスの時間で指定することと同じです。hours には 1 以上を指定する必要があります。

-idonly

このオプションを指定すると、省略されたリストが生成されます。イメージを表示する場合、リストには各イメージの作成時間、バックアップ ID およびスケジュール形式が含まれます。たとえば、表示の条件が時間の範囲である場合、イメージのリストには、この時間の範囲内に作成されたイメージごとに、そのイメージの作成時間、バックアップ ID およびスケジュール形式だけが含まれます。

メディアリストを表示する場合、リストには適切なメディア ID だけが含まれます。たとえば、表示の条件が時間の範囲である場合、リストにはこの時間の範囲内に書き込まれたメディア ID だけが含まれます。

次のオプションを指定すると、レポート対象として選択するイメージまたはメディアを決定する条件が表示されます。イメージに対するこれらのオプションの説明は、メディアレポートの場合は、メディアに置き換えることができます。

-inter-domain

ターゲットでインポートを保留しているレプリケートイメージとソースからレプリケートしたイメージのプレースホルダのコピーを表示します。

-json

json 形式で複数行にわたってデータを出力します。

-json_compact

json 形式で 1 行にデータを出力します。

-keyword "keyword_phrase"

このオプションでは、検索に使用する NetBackup のキーワード句を指定します。キーワード句は、事前にイメージに関連付けられているキーワード句に一致している必要があります。たとえば、bpbackup または bparchive コマンドに -k オプションを指定すると、イメージの作成時に、イメージにキーワードが関連付けられます。

-L

このオプションを指定すると、詳細形式でレポートが生成されます。たとえば、メディアリストレポートの場合、レポートには **attribute = value** の組み合わせで各メディア ID の情報が表示されます。密度の値は、説明および番号の両方で表示されます。デフォルトの状態は詳細形式です。

-l

このオプションを指定すると、レポートが簡易形式で生成され、簡易なリストが作成されます。このオプションは、カスタマイズされたレポート形式にリストを再生成するスクリプトまたはプログラムに対して有効です。

-M master_server,...

このオプションでは、1 台以上の代替マスターサーバーのリストを指定します。このリストは、カンマで区切られたホスト名のリストです。このオプションを指定すると、一覧表示されている各マスターサーバーで bpimagelist が実行されます。マスターサーバーでエラーが発生した場合、その時点で処理が停止します。

レポートは、このリスト内のすべてのマスターサーバーから戻された情報で構成されます。bpimagelist コマンドを実行すると、各マスターサーバーに対して問い合わせが発行されます。マスターサーバーによって、イメージカタログのイメージまたはメディアの情報が戻されます。各マスターサーバーによって、bpimagelist コマンドを発行するシステムからのアクセスが許可されている必要があります。

デフォルトは、bpimagelist を実行するシステムのマスターサーバーです。

-media

このオプションを指定すると、一連の条件に基づくリムーバブルメディアのレポートが表示されます。コマンドラインに -media を指定しない場合、メディアではなくイメージのレポートが出力されます。

-min_changelog_key key

指定したキー以降のログのレコードを出力します。変更ログのエントリのキーの値は、新しいものほど大きくなります。

[-new_images] [-updated_images] [-deleted_images]

変更ログのレポートを新しいイメージ、更新されたイメージ、削除されたイメージのいずれかだけに限定します。デフォルトの状態では、変更ログのすべてのイメージがレポートされます。

-option option_name,...

このオプションでは、表示するイメージの 1 つ以上の検索条件を指定します。

option_name には、次のいずれかの文字列を使用します。大文字でも小文字でも指定できます。

- INCLUDE_PRE_IMPORT: インポートのフェーズ 1 が完了したイメージがレポートされます。

- INCLUDE_TIR: True Image Recovery のバックアップによって作成されたイメージがレポートされます。
- LIST_COMPLETE_COPIES - 実行中の複製コピーのフラグメントはレポートされません。
- LIST_OLD_TO_NEW - 古い日付のイメージから順にレポートされます。
- ONLY_PRE_IMPORT: インポートのフェーズ 1 が完了したイメージだけがレポートされます。
- ONLY_TIR: True Image Recovery のバックアップによって作成されたイメージだけがレポートされます。

デフォルトでは、選択されたイメージに制限はありません。

`-policy name`

このオプションを指定すると、指定したポリシー内で、インポートするバックアップが検索されます。デフォルトはすべてのポリシーです。

`-pt policy_type`

このオプションでは、ポリシー形式を指定します。デフォルトでは、bpimagelist を実行すると、すべてのポリシー形式が検索されます。

policy_type は、次のいずれかの文字列です。

AFS
DataStore
DataTools-SQL-BackTrack
DB2
Enterprise-Vault
FlashBackup
FlashBackup-Windows
Informix-On-BAR
LotusNotes
MS-Exchange-Server
MS-Hyper-V
MS-SharePoint
MS-SQL-Server
MS-Windows
NDMP
NetWare
Oracle
OS/2
PureDisk-Export
SAP
Split-Mirror

Standard
Sybase
Vault
VMware

`-rl retention_level`

このオプションでは、**retention_level** を指定します。**retention_level** には、0 から 24 の整数を指定します。デフォルトでは、bpimagelist を実行すると、すべての保持レベルが検索されます。

`-server server_name`

このオプションでは、**NetBackup** サーバー名または ALL を指定します。`-server` にサーバー名を指定する場合、レポートには、そのサーバーに存在するイメージまたはメディアだけが表示されます。イメージは、bpimagelist で指定したその他の基準も満たします。たとえば、`-hoursago 2` を指定すると、メディアには、2 時間以内に作成されたイメージが含まれます。

問い合わせは、ローカルマスターサーバー上に存在するイメージカタログに対して発行されます。マスターサーバーでは、bpimagelist を実行するシステムからのアクセスが許可されている必要があります。

デフォルトでは、ローカルマスターサーバー上に存在するイメージカタログ内のすべてのメディアがレポートに表示されます。これは、`-server ALL` を指定することと同じです。

`-sl sched_label`

このオプションでは、イメージを選択するためのスケジュールのラベルを指定します。デフォルトはすべてのスケジュールです。

`-st sched_type`

このオプションでは、イメージを選択するためのスケジュール形式を指定します。デフォルトはすべての形式のスケジュールです。次に、有効な値を示します。

- FULL (完全バックアップ)
- INCR (差分増分バックアップ)
- CINC (累積増分バックアップ)
- UBAK (ユーザーバックアップ)
- UARC (ユーザーアーカイブ)
- NOT_ARCHIVE (ユーザーアーカイブ以外のすべてのバックアップ)

`-stl_complete`

このオプションを指定すると、ストレージライフサイクルが完了したイメージだけがレポートされます。このオプションを `stl_incomplete` オプションと同時に使用することはできません。

-stl_incomplete

このオプションを指定すると、ストレージライフサイクルが完了していないイメージだけがレポートされます。このオプションを `stl_complete` オプションと同時に使用することはできません。

-stl_name storage_lifecycle_name

このオプションでは、イメージを選択するときに使用するストレージライフサイクル名を指定します。指定したストレージライフサイクル名のイメージだけが選択されます。

-tape

このオプションを指定すると、リムーバブルメディアまたはテープベースのメディア上に 1 つ以上のフラグメントが存在するイメージだけがリストに表示されます。これらのイメージ内のディスクベースのフラグメントは無視されます。テープおよびディスクの両方のフラグメントがイメージに存在する場合、このオプションを指定すると、テープベースのフラグメントだけが表示されます。

-U

このオプションを指定すると、ユーザー形式でレポートが生成されます。レポートは形式化されます。レポートには列タイトルが表示されたバナーが含まれます。また、状態は番号ではなく説明で表示されます。

-v

このオプションを指定すると、詳細モードが選択されます。このオプションを指定して `bpimagelist` を実行すると、デバッグに使用するための追加情報がログに書き込まれます。追加情報は **NetBackup** 管理の日次デバッグログに記録されます。このオプションは、デバッグログ機能が有効になっている場合、つまり次のディレクトリが定義されている場合にだけ有効です。

UNIX システムの場合: `/usr/openv/netbackup/logs/admin`

Windows システムの場合: `install_path¥NetBackup¥logs¥admin`

例

例 1 - サーバーで利用可能な各メディア ID において、バックアップイメージが指定した時間内の最後に書き込まれた時刻が表示されます。

```
# bpimagelist -media -d 01/05/2012 18:00:46 -e 01/06/2012 23:59:59
```

```
-U
```

Media ID	Last Written	Server
IBM000	01/06/2012 01:06	hatt
AEK800	01/06/2012 03:01	hatt
C0015	01/06/2012 02:01	hatt
143191	01/05/2012 23:00	hatt

例 2 - 今日書き込まれたすべてのイメージが表示されます。

```
# bpimagelist -U
Backed Up      Expires      Files      KB C Sched Type      Policy
-----
01/27/2012 01:08 02/03/2012  1122  202624 N Full Backup  3590Grau
01/27/2012 01:01 02/03/2012  1122  202624 N Full Backup  IBM35pol
01/27/2012 03:01 02/03/2012   531 1055104 N Full Backup  DELLpol
01/27/2012 02:01 02/03/2012   961  31776 N Full Backup  QUALpol
01/27/2012 01:08 02/03/2012  2063  603328 N Full Backup  IBM35pol
01/27/2012 01:01 02/03/2012  2063  603328 N Full Backup  3590Grau
```

例 3 - 今日書き込まれてストレージライフサイクルが完全に処理されていない、すべてのイメージが一覧表示されます。

```
# bpimagelist -U -stl_incomplete -idonly
Time:      12/6/2011 1:03:46 PM  ID: escape_1323198226      FULL (0)
Time:      12/6/2011 12:48:22 PM  ID: gordito19_1323197302   INCR (1)
Time:      12/6/2011 1:02:42 PM  ID: louiseb18vm1_1323198162 FULL (0)
Time:      12/6/2011 1:03:28 PM  ID: monterrey_1323198208   FULL (0)
Time:      12/6/2011 1:03:10 PM  ID: oprahb114vm3_1323198190 FULL (0)
Time:      12/6/2011 1:03:11 PM  ID: oprahb114vm4_1323198191 FULL (0)
Time:      12/6/2011 1:03:12 PM  ID: oprahb115vm3_1323198192 FULL (0)
Time:      12/6/2011 1:03:17 PM  ID: oprahb115vm4_1323198197 FULL (0)
Time:      12/6/2011 1:02:22 PM  ID: oprahb18vm5_1323198142 FULL (0)
Time:      12/6/2011 1:02:41 PM  ID: thelmabl1vm1_1323198161 FULL (0)
Time:      12/6/2011 1:02:54 PM  ID: thelmabl1vm2_1323198174 FULL (0)
Time:      12/6/2011 1:03:01 PM  ID: thelmabl2vm1_1323198181 FULL (0)
```

例 4 - pem_tort ポリシーに対して今日書き込まれたすべての不完全なイメージが一覧表示されます。

```
# bpimagelist -U -stl_incomplete -policy pem_torture
Backed Up      Expires      Files      KB C Sched Type      Policy
-----
12/06/2011 13:03 12/12/2011   86   1632 N Full Backup  ... pem_tort
12/06/2011 13:02 12/12/2011   12  12512 N Full Backup  ... pem_tort
12/06/2011 13:03 12/12/2011    5    32 N Full Backup  ... pem_tort
12/06/2011 13:03 12/12/2011  3742  95936 N Full Backup  ... pem_tort
12/06/2011 13:03 12/12/2011  3762  95936 N Full Backup  ... pem_tort
12/06/2011 13:03 12/12/2011    8    64 N Full Backup  ... pem_tort
12/06/2011 13:03 12/12/2011    9    32 N Full Backup  ... pem_tort
12/06/2011 13:02 12/12/2011  5041 223104 N Full Backup  ... pem_tort
12/06/2011 13:02 12/12/2011    6    32 N Full Backup  ... pem_tort
```

```
12/06/2011 13:02 12/12/2011 3559 95808 N Full Backup ... pem_tort
12/06/2011 13:03 12/12/2011 5 32 N Full Backup ... pem_tort
```

例 5 - 変更ログの 2012 年 5 月 2 日以降に追加されたエントリと更新されたエントリが一覧表示されます。

```
# bpimagelist -changelog -new_images -updated_images -d 05/02/2012 10:18:00
-json
Image Change Log Key: 2
Backup ID: jumpmanvm2_1335967123
Client Type: Standard (0)
Image Change Log Oper. Id: Updated (2)
Image Change Log Time: Wed 02 May 2012 10:39:09 AM CDT (1335973149)
```

ファイル

UNIX システムの場合:

```
/usr/opensv/netbackup/logs/admin/log.mmdyy
/usr/opensv/netbackup/db/images
```

Windows システムの場合:

```
install_path¥NetBackup¥logs¥admin¥log.mmdyyinstall_path¥NetBackup¥db¥images
```

関連項目

- p.50 の [bparchive](#) を参照してください。
- p.56 の [bpbackup](#) を参照してください。
- p.346 の [bprestore](#) を参照してください。

bpimmedia

bpimmedia - メディア上の NetBackup イメージに関する情報の表示

概要

```
bpimmedia [-disk_stu storage_unit_label | [-dt disk_type | -stype
server_type [-dp disk_pool_name [-dv disk_volume]] [-legacy]] [-l
| -L] [-disk | -tape] [-policy policy_name] [-client client_name]
[-d date time] [-e date time] [-mediaid media_id | path_name] [-mtype
image_type] [-option option_name] [-rl retlevel] [-sl sched_label]
[-t sched_type] [-M master_server...] [-verbose]
bpimmedia -spanpools [-cn copy_number] [-mediaid media_id] [-U]
UNIX システムでは、このコマンドのディレクトリパスは
/usr/opensv/netbackup/bin/admincmd/ です。
Windows システムでは、このコマンドのディレクトリパスは
<install_path>%NetBackup%bin\admincmd% です。
```

機能説明

bpimmedia は NetBackup のイメージカタログを問い合わせ、イメージについて次の 2 つの形式のレポートを生成します。

- メディア上のイメージのレポート
- スパンプールのレポート

bpimmedia を 1 番目の形式で実行すると、一連の NetBackup イメージがメディア上のイメージのレポートに表示されます。このレポートには、NetBackup のイメージカタログに記録されるメディアの内容のリストが表示されます。

このレポートは、すべての形式のメディア (ディスクを含む) に対して生成可能です。クライアント、メディア ID、パスなどに従って、レポートの内容をフィルタリングします。

Images-on-Media レポートのフィールドについて詳しくは、次の NetBackup レポートに関する項を参照してください。『[NetBackup 管理者ガイド Vol. 2](#)』。

このレポートには、NetBackup カタログのバックアップに使用するメディアの情報は表示されません。

一部のオプション (-dt、-dp、-dv、-stype) では、SAN ディスクストレージ上に存在するイメージだけがレポートされ、他のディスク上に存在するイメージはレポートされません。他のオプションおよび出力形式は、以前と同様に機能します。

-spanpools を指定して bpimmedia を 2 番目の形式で実行すると、複数のボリュームにまたがるイメージの関連するディスク ID プールが表示されます。出力には、クラスタ内

のメディアサーバーごとに、スパンイメージを含むメディア ID が表示されます。bpimmedia の `-spanpools` 形式は、そのボリュームを管理している NetBackup マスターサーバー上で実行する必要があります。

スパンイメージについて詳しくは、次のスパンメディアに関する項を参照してください。『[NetBackup 管理者ガイド Vol. 2](#)』。

リムーバブルメディアだけが処理されます。

bpimmedia のエラーメッセージは、標準エラー出力 (stderr) に送信されます。また、bpimmedia のデバッグログは、現在の日付の NetBackup 管理ログファイルに送信されます。

このコマンドは、認可済みユーザーが実行できます。

NetBackup による認可については、次を参照してください。『[NetBackup セキュリティおよび暗号化ガイド](#)』。

オプション

`client client_name`

このオプションでは、クライアント名を指定します。この名前は、NetBackup カタログに表示される名前と一致している必要があります。デフォルトでは、bpimmedia を実行すると、すべてのクライアントが検索されます。

`-cn copy_number`

このオプションでは、バックアップ ID のコピー番号 (1 または 2) を指定します。デフォルトはコピー 1 です。このオプションは、`-spanpools` と組み合わせただけ使用できます。

`-d date time, -e date time`

これらのオプションでは、表示の対象とする開始日時から終了日時の範囲を指定します。

`-d` では、表示の対象とする開始日時を指定します。出力リストには、指定した日時以降に実行されたバックアップまたはアーカイブ内のイメージだけが表示されます。

`-e` では、表示の対象とする終了日時を指定します。出力リストには、指定した日時以前に実行されたバックアップまたはアーカイブ内のファイルだけが表示されます。開始日時と同じ形式を使用します。デフォルトは、現在の日時です。

有効な日時の範囲は、01/01/1970 00:00:00 から 01/19/2038 03:14:07 です。デフォルトは、現在の日付の午前 0 時です。

NetBackup コマンドの日時の値に求められる形式は、使用しているロケールによって異なります。/user/openv/msg/.conf ファイル (UNIX) と

install_path¥VERITAS¥msg¥LC.CONF ファイル (Windows) はそれぞれのサポート対象ロケールの日時形式などの情報を含んでいます。これらのファイルには、サ

ポートされているロケールおよび書式のリストを追加および変更するための、具体的な方法が含まれています。

システムのロケールについて詳しくは、**NetBackup** インストールのロケールの指定に関する項を参照してください。『**NetBackup 管理者ガイド Vol. 2**』。

-dp *disk_pool_name*

このオプションを指定すると、指定したディスクプール上のイメージだけが表示されます。

-dt *disk_type*

このオプションでは、ディスクストレージの形式を指定します。有効なオプションを次に示します。

1: BasicDisk

3: SnapVault

このオプションは、**OpenStorage** ディスク形式には適用されません。

-dv *disk_volume*

このオプションを指定すると、指定したディスクボリューム上のイメージだけが表示されます。入力値は **BasicDisk** のパスです。

-L

このオプションを指定すると、表示形式が詳細になります。

表示形式に関する後続のセクションを参照してください。

-l

このオプションを指定すると、表示形式が簡易になります。コマンドラインに表示形式オプションが含まれない場合 (bpimmedia を入力して、改行する場合など)、簡易がデフォルトになります。

表示形式に関する後続のセクションを参照してください。

-legacy

このオプションを指定すると、新しいデータがレガシー形式でフォーマットされます。

-M *master_server,...*

このオプションでは、代替マスターサーバーのリストを指定します。このリストは、カンマで区切られたホスト名のリストです。このオプションを指定すると、一覧表示されている各マスターサーバーでコマンドが実行されます。マスターサーバーでは、コマンドを発行するシステムからのアクセスが許可されている必要があります。マスターサーバーにエラーが発生した場合、その時点でリスト内の処理が停止します。デフォルトは、コマンドが入力されるシステムのマスターサーバーです。

`-mediaid media_id | pathname`

この ID には、メディア ID または絶対パス名を指定します。メディア ID の場合、1 文字から 6 文字の文字列を指定します。パス名の場合、ディスクストレージユニットのファイルシステムの絶対パス名を指定します。

`-mediaid` オプションを指定すると、メディア上のイメージのレポートには、このメディア ID またはパス名に格納されたイメージだけが表示されます。デフォルトでは、レポートにはすべてのメディア ID およびパス名に格納されたイメージが表示されます。

スパンプールのレポート (`-spanpools`) の場合、`-mediaid` オプションにはメディア ID だけを指定できます。`-spanpools` オプションを指定する場合、`-mediaid` の指定を省略すると、bpimmedia ではまたがったすべてのプール内のすべてのメディアが表示されます。

`-mtype image_type`

このオプションでは、イメージ形式を指定します。定義済みの値とその説明を次に示します。

- 0 = 通常のバックアップ (スケジュールバックアップまたはユーザー主導バックアップ)
- 1 = インポート前のバックアップ (フェーズ 1 が完了)
- 2 = インポート済みのバックアップ

`-option option_name`

このオプションでは、表示するイメージの検索条件を指定します。option_name には、次のいずれかかの文字列を使用します。大文字でも小文字でも指定できます。

- INCLUDE_PRE_IMPORT: インポートのフェーズ 1 が完了したイメージが含まれます。
- ONLY_PRE_IMPORT: インポートのフェーズ 1 が完了したイメージだけを含まれます。

デフォルトは、INCLUDE_PRE_IMPORT です。

`-policy policy_name`

指定のポリシー名を用いるイメージの有無を検索します。デフォルトでは、bpimmedia を実行すると、すべてのポリシーのイメージが検索されます。

`-rl retlevel`

このオプションでは、保持レベルを指定します。retention_level には、0 から 24 の整数を指定します。デフォルトでは、bpimmedia を実行すると、すべての保持レベルが検索されます。

`-sl sched_label`

指定のスケジュールのラベルを持つイメージの有無を検索します。デフォルトでは、bpimmedia を実行すると、すべてのスケジュールラベルのイメージが検索されます。

-spanpools

このオプションを指定して bpimmedia を実行すると、スパンプールのレポートが作成されます。デフォルト(-spanpools がコマンドラインにない)はメディア上のイメージのレポートを作成することです。

-stype server_type

このオプションでは、ストレージサーバー形式を識別する文字列を指定します。**server_type** の値は次のいずれかから指定できます。

- シマンテック社が提供するストレージ。指定可能な値は、AdvancedDisk と PureDisk です。
- サードパーティのディスクアプライアンス。ベンダーから **server_type** の文字列が提供されます。
- クラウドストレージ。有効な値は amazon、att、nirvanix、rackspace などです。これらの値には **_crypt** 接尾辞 (amazon_crypt など) を含めることもできます。

ストレージサーバーの形式では大文字と小文字が区別されます。

-t sched_type

このオプションでは、イメージを選択するためのスケジュール形式を指定します。デフォルトはすべての形式のスケジュールです。有効な値を次に示します。大文字でも小文字でも指定できます。

- FULL (完全バックアップ)
- INCR (差分増分バックアップ)
- CINC (累積増分バックアップ)
- UBAK (ユーザーバックアップ)
- UARC (ユーザーアーカイブ)

-tape

このオプションを指定すると、リムーバブルメディアまたはテープベースのメディア上に 1 つ以上のフラグメントが存在するイメージだけがメディア上のイメージのレポートに表示されます。これらのイメージ内のディスクベースのフラグメントは無視されます。テープおよびディスクの両方のフラグメントがイメージに存在する場合、このオプションを指定すると、テープベースのフラグメントだけが表示されます。

-U

このオプションを指定すると、表示形式がユーザーになります。このオプションは、-spanpools オプションと組み合わせた場合にだけ使用できます。

表示形式に関する後続のセクションを参照してください。

-verbose

このオプションを指定すると、ログの詳細モードが選択されます。このオプションは、デバッグログ機能が有効になっている場合、つまり次のディレクトリが定義されている場合にだけ有効です。

UNIX システムの場合: /usr/opensv/netbackup/logs/admin

Windows システムの場合: *install_path*¥NetBackup¥logs¥admin

表示形式

メディア上のイメージのレポート

メディア上のイメージのレポートは、簡易 (-l) (デフォルト) および詳細 (-L) の 2 つの形式で表示されます。

bpimmedia の出力を処理して使うには、-l オプションを使います。-L または -u オプションを指定して bpimmedia を実行すると、[バックアップ ID (Backup-ID)]、[ポリシー (Policy)]、[ホスト (Host)] 列の出力が切り捨てられる場合があります。-L または -u オプションは、メディア上の NetBackup イメージを読みやすい形式ですばやく表示する場合に有効です。

次に、メディア上のイメージのレポートの詳細表示形式 (-L) と簡易表示形式 (-l) を示します。

■ 詳細表示形式 (-L)

コマンドラインに -L が含まれる場合、表示形式は詳細になります。それには、各バックアップイメージの複数行のエントリが含まれます。イメージのフラグメントの数を *n* とすると、1 つのエントリに対する行の数は *n*+1 個です。エントリのフィールドについては後述の項を参照してください。エントリの最初の行には、[バックアップ ID (Backup-ID)] から [有効期限 (Expires)] までのフィールドが含まれます。イメージの各フラグメントには、[コピー (Copy)] から [メディア ID (MediaID)] までのフィールドが含まれます。レポートのヘッダー行は 2 行です。最初のヘッダー行には、各エントリの 1 行目のフィールド名が表示されます。2 番目のヘッダー行には、フラグメントの情報を含む行のフィールド名が表示されます。

コピー番号およびプライマリコピーについて詳しくは、bpduplicate コマンドのページを参照してください。

-L 形式のフィールドおよびその意味は次のとおりです。

1 行目

バックアップ ID (Backup-ID): このイメージが生成されたバックアップの一意的識別子。

ポリシー (Policy): ポリシー名 (長い場合は切り捨てられます)。

形式 (Type): スケジュール形式 (完全など)。

RL: 保持レベル (0 から 24)。

ファイル数 (Files): バックアップ内のファイル数。

C: 圧縮 (Y または N)。

E: 暗号化 (Y または N)。

T: イメージ形式。

R: 通常 (スケジュールバックアップまたはユーザー主導バックアップ)。

P: インポート前のバックアップ (フェーズ 1 が完了)。

I: インポート済みのバックアップ。

PC: プライマリコピー (1 または 2)。リストア時に NetBackup によって選択されるバックアップのコピーを指定します。

有効期限 (Expires): 最初のコピーの有効期限。後述のフラグメントの [有効期限 (Expires)] フィールドに表示されます。

2 行目 n+1

コピー (Copy): このフラグメントのコピー番号。

フラグメント (Frag): フラグメント番号、または True Image Restore (TIR) フラグメントの IDX。

KB: フラグメントのサイズ (KB)。この値には、バックアップ間のテープヘッダーのサイズは含まれません。多重化されたバックアップでは、フラグメントサイズが 0 (ゼロ) になる場合があります。

形式 (Type): メディア形式 (リムーバブルメディアの場合は Rmed、その他の場合は Disk)。**密度 (Density):** バックアップが生成されたリムーバブルメディアの密度。Fnum: ファイル番号 (このリムーバブルメディアの n 番目のバックアップ)。**ホスト (Host):** このイメージが含まれているカタログを持つサーバー。**DWO: Device Written On** (バックアップが書き込まれたデバイス)。**DWO** は、Media Manager で構成されたドライブのインデックスと一致します (リムーバブルメディアだけに適用されます)。

MPX: コピーが多重化されているかどうかを示すフラグ (Y または N) (フラグメント番号が 1 の場合だけに適用されます)。

有効期限 (Expires): このコピーの有効期限 (フラグメント番号が 1 の場合だけに適用されます)。

メディア ID (MediaID): メディア ID、またはイメージが格納されている位置の絶対パス。

次に、詳細表示形式の例を示します。

```
bpimmedia -L -policy regr1_gava -t FULL
Backup-ID      Policy      Type  RL  Files  C  E  T  PC  Expires
Copy Frag  KB Type Density FNum      Host DWO MPX Expires MediaID
-----
gava_0949949902 r1_guav FULL  3   25  N  N  R  1  12:58 03/09/2012
  1   1   256 RMed dlt  13   0  plim 0   Y  12:58 03/09/2012 A00002
```

■ 簡易表示形式 (-1)

bpconfig コマンドラインに -1 が含まれる場合、またはいずれの表示形式のオプションも含まれない場合、表示形式が短くなり簡易なリストが生成されます。このオプションは、カスタマイズされたレポート形式にリストを再生成するスクリプトまたはプログラム

に対して有効です。-1 表示形式には、各バックアップイメージの複数行のエントリが含まれます。イメージのフラグメントの数を n とすると、エントリごとの行の数は $n+1$ 個です。エントリのレイアウトは最初の行に表示され、イメージの情報が含まれます。2 行目には、イメージの各フラグメントの情報が含まれます。属性は空白で区切られ、次の順序で表示されます。

-1 形式のフィールドは次のとおりです。

フィールド 1 = クライアント。イメージのクライアント名

フィールド 2 = バージョン。クライアントの NetBackup バージョン

フィールド 3 = イメージのキーワード。バックアップイメージのキーワード

フィールド 4 = ポリシー名。イメージを作成したポリシー名

フィールド 5 = ポリシーの種類。0 = 標準、4 = Oracle、8 = Sybase、9 = MS-SharePoint

フィールド 6 = スケジュール - バックアップを作成するために実行するスケジュール名

フィールド 7 = スケジュールの種類。0 = 完全、1 = 差分増分、2 = ユーザー主導バックアップ、3 = ユーザー主導アーカイブ、4 = 累積増分

フィールド 8 = 保持レベル (0 から 24)

フィールド 9 = イメージのファイル数

フィールド 10 = 1970 年 1 月 1 日からのイメージの有効期限 (秒)。0 (ゼロ) という値は進行中のイメージか失敗したイメージを示します。

0 = 1 週間、4 MM カートリッジメディア

1 = 2 週間、8 MM カートリッジメディア

2 = 3 週間、8 MM カートリッジメディア 2

3 = 1 カ月間、8 MM カートリッジメディア 3

4 = 2 カ月間、DLT カートリッジメディア

5 = 3 カ月間、DLT2 カートリッジメディア

6 = 6 カ月間、DLT3 カートリッジメディア

7 = 9 カ月間、DTF カートリッジメディア

8 = 1 年間、1/2 インチカートリッジメディア

9 から 24 = 無限、1/2 インチカートリッジ 2 メディア

フィールド 11 = 圧縮。0 = 圧縮を使用、1 = 圧縮を不使用

フィールド 12 = 暗号化

フィールド 13 = 保持。0 = イメージを保持しない、1 = イメージを保持する

フィールド 14 = インデックス作成の状態

フラグメント

フィールド 1 = コピー番号

フィールド 2 = フラグメント番号

フィールド 3 = フラグメントサイズ (KB)

フィールド 7 = ファイル番号

フィールド 8 = メディア。イメージを格納するメディア

フィールド 9 = イメージ用メディアサーバー
 フィールド 10 = ブロックサイズ (KB)
 フィールド 11 = オフセット
 フィールド 12 = フラグメントを作成した時間 (1970 年 1 月 1 日からの秒数)
 フィールド 13 = イメージを書き込んだデバイス番号
 フィールド 16 = 1970 年 1 月 1 日からのイメージの有効期限 (秒)。0 (ゼロ) という値は進行中のイメージか失敗したイメージを示します。
 フィールド 17 = 多重化。0 = 多重化を不使用、1 = 多重化を使用
 フィールド 18 = 保持レベル
 0 = 1 週間、4 MM カートリッジメディア
 1 = 2 週間、8 MM カートリッジメディア
 2 = 3 週間、8 MM カートリッジメディア 2
 3 = 1 カ月間、8 MM カートリッジメディア 3
 4 = 2 カ月間、DLT カートリッジメディア
 5 = 3 カ月間、DLT2 カートリッジメディア
 6 = 6 カ月間、DLT3 カートリッジメディア
 7 = 9 カ月間、DTF カートリッジメディア
 8 = 1 年間、1/2 インチカートリッジメディア
 9 から 24 = 無限、1/2 インチカートリッジ 2 メディア
 フィールド 20 = 保持。0 = フラグメントを保持しない、1 = フラグメントを保持する
 次に、簡易表示形式の例を示します。

```
# bpimmedia -l -policy regr1_gava -t FULL
IMAGE gava 3 gava_0949949902 regr1_gava 0 full 0 3 25 952628302 0 0
FRAG 1 1 10256 512 2 13 13 A00002 plim 65536 0 949616279 0 0 *NULL* 952628302 1
```

スパンプールのレポート

スパンプールのレポートは、ユーザー (-u) および簡易 (デフォルト) の 2 つの形式で表示されます。両方の形式で各サーバーのサーバー名とプールデータが表示されます。またがったバックアップイメージを共有するメディアの各プールのメディア ID が表示されます。コマンドラインに -mediaid が含まれる場合、そのメディア ID に関連するサーバープールおよびディスクプールだけが表示されます。

bpimmedia の出力を処理して使用する場合は、-l オプションを指定することをお勧めします。-u または -L オプションを指定して bpimmedia を実行すると、[バックアップ ID (Backup-ID)]、[ポリシー (Policy)]、[ホスト (Host)] 列の出力が切り捨てられる場合があります。-u または -L オプションは、メディア上の NetBackup イメージを読みやすい形式ですばやく表示する場合に有効です。

ユーザー (-u) 表示形式では、次のとおり表示されます。

```
# bpimmedia -spanpools -U
Related media pools containing spanned backup images, server plim:
Pool:
```


例 3 - マスターサーバー gava 上に存在するイメージカタログ内のすべてのバックアップを詳細形式で表示します。

```
# bpimmedia -L -M gava
```

```
Backup-ID          Policy          Type  RL  Files  C  E  T  PC  Expires
Copy Frag         KB Type Density FNum  Off      Host      DWO MPX Expires  MediaID
-----
gava_0949599942    test-policy    FULL  1   15      N  N  R  1   11:45 02/17/2011
 1  1          224 Disk -      -      -      gava      -    N   11:45 02/17/2011
/var/qatest/storage_unit//gava_0949599942_C1_F1
```

例 4 - メディア ID CB7514 上のバックアップを詳細形式で表示します。

```
# bpimmedia -L -mediaid CB7514
```

```
Backup-ID          Policy          Type  RL  Files  C  E  T  PC  Expires
Copy Frag         KB Type Density FNum  Off      Host      DWO MPX Expires  MediaID
-----
toaster1_0929679294  tort_policy    FULL  3   5898      N  N  R  1   23:14 07/18/2012
 1  IDX          839 RMed dlt    4      0      almond      6
 1  1          27154 RMed dlt    3      0      almond      6  23:14 07/18/2012  CB7514

toaster1_0929653085  NDMP_policy    FULL  3   5909      N  N  R  1   15:58 07/18/2012
 1  IDX          844 RMed dlt    2      0      almond      3
 1  1          9136 RMed dlt    1      0      almond      3  15:58 07/18/2012  CB7514
```

戻り値

終了状態が 0 (ゼロ) の場合は、コマンドが正常に実行されたことを意味します。

終了状態が 0 (ゼロ) 以外の場合は、エラーが発生したことを意味します。

管理ログ機能が有効になっている場合、終了状態は、次のログディレクトリ内の管理日次ログに書き込まれます。

```
UNIX systems: /usr/opensv/netbackup/logs/admin
```

```
Windows systems: install_path¥NetBackup¥logs¥admin
```

次の形式が使用されます。

```
bpimmedia: EXIT status = exit status
```

エラーが発生した場合、このメッセージの前に診断が表示されます。

ファイル

UNIX システムの場合:

```
/usr/opensv/netbackup/logs/admin/*  
/usr/opensv/netbackup/db/images
```

Windows システムの場合:

```
install_path¥NetBackup¥logs¥admin¥*  
install_path¥NetBackup¥db¥images
```

関連項目

- p.64 の [bpbackupdb](#) を参照してください。
- p.125 の [bpduplicate](#) を参照してください。
- p.184 の [bpimport](#) を参照してください。

bpimport

bpimport – 期限が切れた NetBackup および Backup Exec のバックアップのインポート、または他の NetBackup サーバーや Backup Exec サーバーから NetBackup および Backup Exec のバックアップをインポート

概要

```
bpimport -create_db_info -id media_id or path | -stype server_type
[-dp disk_pool_name [-dv disk_volume]] [-server name] [-L output_file
[-en]] [-passwd] [-local] [-nh ndmp_host [-mst media_subtype]]
bpimport -drfile -id media_id or path | -stype server_type [-dp
disk_pool_name [-dv disk_volume]] -drfile_dest dir_name_on_master
[-client name] [-server name] [-L output_file [-en]] [-passwd]
[-priority number]
bpimport [-l] [-p] [-pb] [-PD] [-PM] [-v] [-local] [-client name]
[-M master_server] [-Bidfile file_name] [-st sched_type] [-sl
sched_label] [-L output_file [-en]] [-policy name] [-s startdate]
[-e enddate] [-pt policy_type] [-hoursago hours] [-cn copy_number]
[-backupid backup_id] [[-id media_id | path] | -stype server_type]]
[-dp disk_pool_name [-dv disk_volume]] [-priority number]
[-from_replica]
```

UNIX システムでは、このコマンドのディレクトリパスは

/usr/opensv/netbackup/bin/admincmd/ です。

Windows システムでは、このコマンドのディレクトリパスは

<install_path>%NetBackup%bin\admincmd% です。

機能説明

bpimport を実行すると、バックアップをインポートできます。このコマンドは、期限切れのバックアップ、または他の NetBackup サーバーからのバックアップをインポートする場合に有効です。

インポート操作は、次の 2 つのフェーズで構成されています。

- フェーズ 1 は、「形式」の項に示す 1 番目のコマンド形式 (-create_db_info オプション) で実行します。この手順では、指定したメディア上のバックアップに対するカタログエントリが再作成されます。
- フェーズ 2 は、「形式」の項に示す 2 番目のコマンド形式で実行します。この手順では、バックアップがメディアからインポートされます。

インポートされたバックアップの有効期限は、現在の日付に保持期間を加えた値になります。たとえば、**2012 年 11 月 14 日**にインポートされたバックアップの保持レベルが **1 週間**である場合、そのバックアップの新しい有効期限は **2012 年 11 月 21 日**になります。

バックアップのインポートは、バックアップのすべてのコピーが期限切れになった場合だけ実行できます。

バックアップをインポートする方法について詳しくは、次を参照してください。『[NetBackup 管理者ガイド Vol. 1](#)』。

オプション

`-backupid backup_id`

このオプションでは、インポートする **1 つ**のバックアップのバックアップ ID を指定します。

`-Bidfile file_name`

file_name には、インポートするバックアップ ID のリストを含むファイル名を指定します。ファイル内で **1 行に 1 つ**のバックアップ ID が指定されます。このオプションを含めると、他の選択条件は無視されます。

`-Bidfile` パラメータで指定したファイルは、コマンドラインインターフェース (CLI) の実行中に **NetBackup** によって削除されます。このファイルが削除されるのは、**NetBackup GUI** でこのパラメータが共通で使用されているためです。GUI では、コマンドラインインターフェースの完了時に `-Bidfile` オプションで使用された一時ファイルが削除されることを前提としています。ユーザーはコマンドラインインターフェースで直接このオプションを使用することができますが、この場合でも、ファイルは削除されます。

`-client name`

このオプションでは、バックアップを行ったクライアントのホスト名を指定します。デフォルトはすべてのクライアントです。

`-cn copy_number`

このオプションでは、インポートするバックアップの元のコピー番号を指定します。有効な値は、**1 から 10** です。デフォルトはすべてのコピーです。

`-create_db_info`

このオプションを指定すると、指定したメディア上のバックアップに対するカタログエントリが再作成されます。すでにカタログ内に存在するバックアップはスキップされます。このオプションでは、インポートの対象となるバックアップの情報だけが作成されます。インポート操作は実行されません。バックアップをインポートする前に、このオプションを指定して `bpimport` を実行しておく必要があります。

`-dp disk_pool_name [-dv disk_volume]`

このオプションを指定すると、指定したディスクプール上のイメージだけがインポートされます。必要に応じて、指定したディスクボリューム上のイメージだけにインポートを制限できます。`disk_volume` 引数は **BasicDisk** のパスです。

このオプションには、オプション `-stype` が必要です。

`-e enddate, -s startdate`

これらのオプションでは、インポートするすべてのバックアップの開始日時から終了日時の範囲を指定します。

`-s` では、表示の対象とする開始日時を指定します。出力リストには、指定した日時以降に実行されたバックアップまたはアーカイブ内のイメージだけが表示されます。デフォルトの開始日付は、現在の日時の **24** 時間前です。

`-e` では、表示の対象とする終了日時を指定します。出力リストには、指定した日時以前に実行されたバックアップまたはアーカイブ内のファイルだけが表示されます。開始日時と同じ形式を使用します。デフォルトは、現在の日時です。

有効な日時の範囲は、**01/01/1970 00:00:00** から **01/19/2038 03:14:07** です。デフォルトは、現在の日付の午前 **0** 時です。

NetBackup コマンドの日時の値に求められる形式は、使用しているロケールによって異なります。`/user/openv/msg/.conf` ファイル (**UNIX**) と

`install_path¥VERITAS¥msg¥LC.CONF` ファイル (**Windows**) はそれぞれのサポート対象ロケールの日時形式などの情報を含んでいます。これらのファイルには、サポートされているロケールおよび書式のリストを追加および変更するための、具体的な方法が含まれています。

システムのロケールについて詳しくは、**NetBackup** インストールのロケールの指定に関する項を参照してください。『**NetBackup 管理者ガイド Vol. 2**』。

次に、`-bpimport` の `-help` 使用説明の一部を示します。これは、`-s` オプションおよび `-e` オプションの説明です。

`-s mm/dd/yy [hh[:mm[:ss]]] -e mm/dd/yy [hh[:mm[:ss]]]`

`-from_replica`

自動インポートが可能であるイメージのみをスキャンし、ストレージライフサイクルポリシーの自動インポートワークリストにそれらのイメージを配置します。このオプションはインポートのフェーズ **1** の一部です。

`-hoursago hours`

このオプションでは、現在の時刻より何時間前までのバックアップが検索されるかを指定します。このオプションは、`-s` オプションと同時に使用しないでください。デフォルトは、現在の日付の午前 **0** 時です。

-id *media_id* | *path*

ディスクメディアの場合: インポートするバックアップが存在するストレージディレクトリへの *path* を指定します。

テープメディアの場合: 手順 1 (-create_db_info) の場合、このオプションでは、インポートするバックアップが含まれるメディア ID を指定します。このオプションは、-create_db_info オプションと同時に使用する必要があります。

手順 2 の場合、このオプションでは、バックアップをインポートする特定のメディア ID を指定します。デフォルトは、インポート操作の手順 1 で処理されるすべてのメディア ID です。

手順 1 で処理されないメディア ID で始まるバックアップ ID はインポートされません (バックアップは完了しません)。

-L *output_file* [-en]

このオプションでは、進捗情報を書き込むファイル名を指定します。デフォルトでは、進捗ファイルは使用されません。

-en オプションを指定すると、ログが英語で生成されます。ログ名には文字列 [*_en*] が含まれます。このオプションは、異なるロケールで様々な言語のログが作成される分散環境において有効です。

-l

このオプションを指定すると、インポートされた各ファイルが表示された進捗ログが出力されます。

-local

マスターサーバー以外のホストが bpimport を開始し、-local が使用されない場合 (デフォルト) は、bpimport がマスターサーバー上でコマンドのリモートコピーを開始します。リモートコピーでは、アクティビティモニターからコマンドを終了できません。

-local を使用すると、マスターサーバー上のリモートコピーの作成が回避されます。また、bpimport は開始されたホストからだけ実行されます。-local オプションを指定すると、bpimport をアクティビティモニターから取り消すことができません。

-M *master_server*

メモ: NetBackup Server では、サーバーは 1 台 (マスターサーバー) だけであるため、このオプションは不要です。オプションを指定する場合、コマンドを実行する NetBackup マスターサーバーを指定します。

このオプションでは、メディア ID を含むメディアカタログを管理するマスターサーバーを指定します。このオプションを指定しない場合、デフォルトは次のいずれかになります。

コマンドをマスターサーバー上で実行する場合、そのサーバーがデフォルトです。コマンドをマスターサーバーではなくメディアサーバー上で実行する場合、そのメディアサーバーのマスターサーバーがデフォルトです。

-p

このオプションを指定すると、オプションの設定に従ってインポートするバックアップがプレビューされます。ただし、インポートは実行されません。メディア ID、サーバー名およびインポートするバックアップの情報が表示されます。

-passwd

Backup Exec のテープ読み込みオプションとともに使われると、パスワードで保護された **Backup Exec** メディアをカタログ化します。bpimport はパスワードを求めるメッセージを表示し、メディアのパスワードとそれを比較します。パスワードが一致した場合、ジョブが処理されます。パスワードが一致しない場合、ジョブが行われません。

Backup Exec メディアがインポートされ、パスワードで保護されているときのみ -passwd を使ってください。このメディアは **Windows** メディアサーバーでのみインポートできます。

-pb

このオプションを指定すると、インポートするバックアップがプレビューされます。ただし、インポートは実行されません。-p オプションに類似していますが、バックアップは表示されません。

-PD

このオプションは、-PM オプションと同じです。ただし、バックアップが (新しい方から古い方へ) 日時でソートされます。

-PM

このオプションを指定すると、オプションの設定に従ってインポートするバックアップの情報が表示されます。ただし、インポートは実行されません。バックアップの日時、ポリシー、スケジュール、バックアップ ID、ホストおよびメディア ID が表示されます。

-policy name

このオプションを指定すると、指定したポリシー内で、インポートするバックアップが検索されます。デフォルトはすべてのポリシーです。

-priority number

デフォルトのジョブの優先度を上書きするインポートジョブの新しい優先度を指定します。

-pt policy_type

このオプションを指定すると、指定したポリシー形式で作成されたバックアップが検索されます。デフォルトは、すべてのポリシー形式です。

policy_type は、次のいずれかの文字列です。

AFS
Auspex-FastBackup
DataStore
DataTools-SQL-BackTrack
DB2
Enterprise-Vault
FlashBackup
FlashBackup-Windows
Informix-On-BAR
LotusNotes
MS-Exchange-Server
MS-Hyper-V
MS-SharePoint
MS-SQL-Server
MS-Windows
NDMP
NetWare
Oracle
OS/2
PureDisk-Export
SAP
Split-Mirror
Standard
Sybase
Vault
VMware

`-server name`

このオプションでは、メディアサーバー名を指定します。このサーバーのボリュームデータベースには、インポートするバックアップが含まれるメディア ID のレコードが存在する必要があります。デフォルトは、コマンドが実行されるメディアサーバーです。

メモ: NetBackup Server では、サーバーは 1 台 (マスターサーバー) だけです。NetBackup Server を使用する場合、マスターサーバー名を指定します。

`-sl sched_label`

このオプションを指定すると、指定したスケジュールによって作成されたバックアップが、インポートするバックアップとして検索されます。デフォルトはすべてのスケジュールです。

`-st sched_type`

このオプションを指定すると、指定したスケジュール形式によって作成されたバックアップが、インポートするバックアップとして検索されます。デフォルトはすべての形式のスケジュールです。

次に、有効な値を示します。

FULL (完全バックアップ)

INCR (差分増分バックアップ)

CINC (累積増分バックアップ)

UBAK (ユーザーバックアップ)

UARC (ユーザーアーカイブ)

NOT_ARCHIVE (ユーザーアーカイブ以外のすべてのバックアップ)

`-stype server_type`

このオプションでは、ストレージサーバー形式を識別する文字列を指定します。

server_type の値は次のいずれかから指定できます。

- シマンテック社が提供するストレージ。指定可能な値は、AdvancedDisk と PureDisk です。
- サードパーティのディスクアプライアンス。ベンダーから **server_type** の文字列が提供されます。
- クラウドストレージ。有効な値は amazon、att、nirvanix、rackspace などです。これらの値には `_crypt` 接尾辞 (amazon_crypt など) を含めることもできます。

ストレージサーバーの形式では大文字と小文字が区別されます。

`-v`

デバッグログと進捗ログに詳細が表示されます。

例

例 1 - メディア ID A0000 上のバックアップのカタログ情報がすべて 1 行で作成されます。メディアホストのホスト名は cat です。進捗ファイルは、tmp ディレクトリにある bpimport.ls です。

UNIX システムの場合: # bpimport -create_db_info -id A0000 -server cat
-L /tmp/bpimport.ls

Windows システムの場合: # bpimport -create_db_info -id A0000 -server
cat -L %tmp%\bpimport.ls

例 2 - インポートの対象となるバックアップの情報がすべて 1 行で表示されます。2012 年 11 月 1 日から 2012 年 11 月 10 日までに作成されたバックアップが表示されます。このコマンドを実行する前に、`-create_db_info` オプションを指定して `bpimport` コマンドを実行しておく必要があります。

```
# bpimport -PM -s 11/01/2012 -e 11/10/2012
```

例 3 - `images` ファイルに指定されたバックアップがインポートされます。進捗情報は、`bpimport.ls` ファイルに書き込まれます。

UNIX システムの場合: # `bpimport -Bidfile /tmp/import/image -L /tmp/bpimport.ls`

Windows システムの場合: # `bpimport -Bidfile %tmp%import%image -L %tmp%bpimport.ls`

ファイル

UNIX システムの場合:

```
/usr/opensv/netbackup/logs/admin/*  
/usr/opensv/netbackup/db/images/*
```

Windows システムの場合:

```
install_path%NetBackup%logs%admin%*  
install_path%NetBackup%db%images%*
```

bpinst

bpinst – NetBackup レガシー暗号化の構成

概要

```
bpinst -LEGACY_CRYPT [-crypt_option option] [-crypt_strength strength]
[-passphrase_prompt | -passphrase_stdin] [-verbose] [ [-policy_encrypt
0 | 1] -policy_names] name1 [name2 ... nameN]
```

UNIX システムでは、このコマンドのディレクトリパスは /usr/opensv/netbackup/bin/ です。

Windows システムでは、このコマンドのディレクトリパスは
<install_path>%NetBackup%bin% です。

機能説明

NetBackup Encryption は、バックアップおよびアーカイブのファイルレベルでの暗号化を提供します。

-LEGACY_CRYPT: レガシー暗号化方式。以前に使用していた暗号化の強度 (40 ビット DES および 56 ビット DES) を選択できます。

-LEGACY_CRYPT オプションを指定して bpinst コマンドを実行すると、暗号化をサポートできる NetBackup クライアントにレガシーの NetBackup Encryption が構成されます。マスターサーバーのホスト上にインストールされたクライアントに対して、暗号化を構成することもできます。

マスターサーバーで bpinst -LEGACY_CRYPT を起動して、クライアントに NetBackup Encryption を構成します。1 回の起動で、クライアントおよびマスターサーバーの両方で必要な構成の変更が行われます。

メモ: クライアントで、NetBackup 構成オプションが DISALLOW_SERVER_FILE_WRITES に設定されていないことを確認してください。このオプションを設定すると、サーバーはクライアントにソフトウェアを構成することができません。

オプション

-LEGACY_CRYPT

このオプションは、40 ビットまたは 56 ビットの DES 暗号化を使用する場合に必要です。DES 暗号化を構成するには、このオプションを最初に指定して bpinst のコマンドを使用します。指定する順序は重要です。このオプションは省略できません。

-crypt_option option

このオプションを指定すると、NetBackup クライアントで、CRYPT_OPTION 構成エントリが構成されます。-crypt_option を指定しない場合、クライアントでは暗号化されたバックアップまたは暗号化されないバックアップのいずれかが許可されます (ALLOWED を参照)。

option に指定可能な値は、次のとおりです。

DENIED | denied | -1

クライアントが暗号化されたバックアップを許可しないように設定します。サーバーが暗号化されたバックアップを要求すると、エラーであると判断されます。このオプションは、暗号化用に構成されていないクライアントのデフォルトです。

ALLOWED | allowed | 0

クライアントが、暗号化されたバックアップまたは暗号化されていないバックアップを許可するように設定します。ALLOWED は、デフォルトの条件です。

REQUIRED | required | 1

クライアントが暗号化されたバックアップを要求するように設定します。サーバーが暗号化されないバックアップを要求すると、エラーであると判断されます。

-crypt_strength strength

このオプションを指定すると、NetBackup クライアントで、CRYPT_STRENGTH 構成エントリが構成されます。このオプションを指定しない場合、クライアントの CRYPT_STRENGTH 構成エントリは変更されないままです。

strength に指定可能な値は、次のとおりです。

DES_40 | des_40 | 40

40 ビット DES 暗号化を指定します。この値は、暗号化用に構成されていないクライアントのデフォルトです。

DES_56 | des_56 | 56

56 ビット DES 暗号化を指定します。

-passphrase_prompt | -passphrase_stdin

メモ: パスフレーズを控えておくようにしてください。鍵ファイルが破損または消失した場合、鍵ファイルを再生成するためにパスフレーズが必要になります。正しい鍵ファイルがないと、暗号化されたバックアップをリストアすることはできません。

NetBackup では、パスフレーズを使用して各クライアントの鍵ファイルに格納するデータを作成します。**NetBackup** では、鍵ファイルのデータを使用して、バックアップデータの暗号化および復号化に必要な暗号化鍵を作成します。このオプションは、`-LEGACY_CRYPT` オプションだけに適用されます。

`-passphrase_prompt` オプションでは、パスフレーズを入力するプロンプトが表示されます。パスフレーズを入力しても、実際のパスフレーズは表示されません。

`-passphrase_stdin` オプションは、標準入力からパスフレーズを読み込みます。パスフレーズは **2** 回入力する必要があります。これは、パスフレーズが表示されてしまうため、`-passphrase_prompt` オプションよりセキュリティの低いオプションです。ただし、シェルスクリプトで `bpinst -LEGACY_CRYPT` を実行する場合よりも便利な場合があります。

NetBackup では、`bpinst -LEGACY_CRYPT` コマンドで指定するすべてのクライアントに対してパスフレーズを使用します。クライアントごとにパスフレーズを区切る場合は、クライアントごとに個別の `bpinst -LEGACY_CRYPT` コマンドを入力します。

パスフレーズを指定すると、`bpinst -LEGACY_CRYPT` によってクライアントで鍵ファイルが作成または更新されます。パスフレーズから生成された暗号化鍵は、後続のバックアップに使用されます。古い暗号化鍵は、以前のバックアップをリストアするために鍵ファイルに保存されます。

`-passphrase_prompt` または `-passphrase_stdin` オプションのいずれかを指定しないと、クライアントの鍵ファイルは変更されないままです。

`-verbose`

このオプションを指定すると、各クライアントの現在の暗号化構成および各クライアントでのインストールおよび再構成の情報が出力されます。

`-policy_encrypt 0 | 1`

このオプションでは、**NetBackup** ポリシーに暗号化ポリシー属性を設定します。

`-policy_names` オプションを指定した場合だけ `-policy_encrypt` を指定できません。指定可能な値は、次のとおりです。

0: 暗号化属性の設定を解除 (または設定されていない状態のままに) し、サーバーが、このポリシーのクライアントに暗号化を要求しないようにします。この設定は、暗号化用に構成されていないポリシーのデフォルトです。

1: 暗号化属性を設定し、サーバーがこのポリシーのクライアントに暗号化を要求するようにします。

このオプションを指定しないと、ポリシーの暗号化属性は変更されないままです。

`-policy_names`

このオプションでは、**NetBackup** ポリシー名を指定します。

-policy_names オプションを指定すると、bpinst -LEGACY_CRYPT によって、指定した各ポリシーのすべてのクライアントが構成されます。-policy_names オプションを省略すると、名前は **NetBackup** クライアント名であると判断されます。

name1 [name2 ... nameN]

1つ以上の **NetBackup** クライアントまたはポリシー名を指定します。どちらを指定したかということは、-policy_names オプションの指定の有無によって異なります。-policy_names オプションを省略すると、名前は **NetBackup** クライアント名であると判断されます。

注意事項

次の注意事項は、-LEGACY_CRYPT オプションに適用されます。

- **NetBackup** をクラスタ環境で実行している場合、クライアントへの構成データのプッシュインストールを実行できるのは、アクティブノードからだけです。
- クラスタ内にあるクライアントに構成をプッシュインストールする場合は、クライアントリストに仮想名ではなく個々のノードのホスト名を指定します。
- クライアントからの暗号化されたファイルのリストアが終了したら、作成された鍵ファイルの削除またはファイル名の変更を行います。元の鍵ファイルを元の場所または元の名前に戻します。鍵ファイルを元の場所または元の名前に戻さないと、暗号化されたバックアップをリストアできない場合があります。
- 既存の **40** ビットまたは **56** ビットの暗号化ライセンスキーは、アップグレードで有効です。
- bpinst -LEGACY_CRYPT によってネットワーク経由でクライアントに送信されるパズフレーズは、個別に定義された **NetBackup 40** ビット DES 鍵によって暗号化されます。
- 各 **NetBackup** クライアントの鍵ファイルは、個別に定義された **NetBackup DES** 鍵で暗号化されます。鍵が **40** ビットか **56** ビットかは、クライアントの構成方法によって異なります。鍵ファイルへのアクセスは、クライアントコンピュータの管理者だけに制限します。**UNIX** クライアントの場合、鍵ファイルの所有者が **root** ユーザー、アクセス権モード設定が **600** となる必要があります。鍵ファイルを **NFS** を介してエクスポートすることはできません。
- クラスタ内のすべてのノードで同じ鍵ファイルを使用する必要があります。
- パズフレーズを控えておいてください。ディザスタリカバリが必要な場合、bpinst -LEGACY_CRYPT を実行してクライアント上で鍵ファイルを再作成することが必要となる場合があります。たとえば、orca という名前の **NetBackup** クライアントが暗号化されたバックアップの実行中に、orca のファイルが消失する障害が発生したとします。このような場合、バックアップをリストアするために、クライアントの暗号化を再インストールおよび構成する必要があります。

オペレーティングシステムと NetBackup をリストアする方法については、次を参照してください。『NetBackup トラブルシューティングガイド』。

暗号化を使用する場合にディザスタリカバリを提供する方法 (orbit という名前のクライアント)

- 1 orbit のオペレーティングシステムを再インストールします。
- 2 orbit の NetBackup クライアントソフトウェアを再インストールおよび構成します。
- 3 次のコマンドを使用して、orbit の暗号化を再インストールし、構成します。

```
# bpinst -LEGACY_CRYPT -crypt_option allowed
```
- 4 次のコマンドを使用して、パズフレーズを作成するために bpinst -LEGACY_CRYPT を起動します。

```
# bpinst -LEGACY_CRYPT -passphrase_prompt orbit
Enter new NetBackup pass phrase: *****
Re-enter new NetBackup pass phrase: *****
```

orbit で使用するパズフレーズを入力します。
- 5 次のように入力して、orbit で使用される後続の各パズフレーズに、bpinst -LEGACY_CRYPT を起動します。

```
# bpinst -LEGACY_CRYPT -passphrase_prompt orbit
Enter new NetBackup pass phrase: *****
Re-enter new NetBackup pass phrase: *****
```
- 6 バックアップファイルを orbit にリストアします。

例

例 1 - policy40 という名前のポリシーの UNIX クライアントに 1 行の 40 ビット DES 暗号化が構成されます。

```
# bpinst -LEGACY_CRYPT -crypt_option allowed -crypt_strength des_40
-policy_encrypt 1 -policy_names policy40
```

-policy_encrypt オプションを使用して、ポリシーに暗号化属性を設定します。
NetBackup 管理ユーティリティを使用して、暗号化属性を設定することもできます。

例 2 - -passphrase_prompt オプションを使用して、policy40 という名前のポリシーに含まれるすべてのクライアントのパズフレーズが作成されます。

```
# bpinst -LEGACY_CRYPT -passphrase_prompt -policy_names policy40
Enter new NetBackup pass phrase: *****
Re-enter new NetBackup pass phrase: *****
```

例 3 - **strong** という名前の NetBackup クライアントで 56 ビット DES 暗号化を使用する必要があることがすべて 1 行で指定されます。

```
# bpinst -LEGACY_CRYPT -crypt_option required -crypt_strength des_56
strong
```

例 4 - **strong** という名前のクライアントの構成が一覧表示されます。

```
# bpinst -LEGACY_CRYPT -verbose strong
```

```
BPCD protocol version 7.0.0 on client strong
40-bit library version is 3.1.0.40 on client strong
56-bit library version is 3.1.0.56 on client strong
BPCD platform is redhat for client strong
Current configuration entries are:
CRYPT_KEYFILE = /usr/opensv/netbackup/keyfile
CRYPT_LIBPATH = /usr/opensv/lib
CRYPT_OPTION = required
CRYPT_STRENGTH = des-56
V_PATH_SHARE = /usr/opensv/share
No update of NetBackup configuration required for client strong
No update of NetBackup pass phrase required for client strong
```

ファイル

次は UNIX システムで使われるファイルです。

- UNIX サーバーのコマンド
`/usr/opensv/netbackup/bin/bpinst`
- UNIX クライアントの 40 ビット DES および 56 ビット DES の暗号化ライブラリ
`/usr/opensv/lib/libvdes*.*`
- UNIX クライアントの 40 ビット DES および 56 ビット DES の暗号化鍵ファイル
`/usr/opensv/netbackup/keyfile`
- UNIX クライアントの 40 ビット DES および 56 ビット DES の暗号化鍵ファイルユーティリティ

```
/usr/opensv/netbackup/bin/bpkeyfile
```

- UNIX クライアントの 128 ビットおよび 256 ビット OpenSSL 暗号の暗号化鍵ファイルユーティリティ

```
/usr/opensv/netbackup/bin/bpkeyutil  
/usr/opensv/share/ciphers.txt
```

次は Windows システムで使われるファイルです。

- Windows サーバーコマンド

```
install_path¥NetBackup¥bin¥bpinst.exe
```

- Windows クライアントの暗号化鍵ファイル

```
install_path¥NetBackup¥var¥keyfile.dat
```

- Windows クライアントの暗号化ライブラリ

```
install_path¥bin¥libvdes*.dll
```

- Windows クライアントの暗号化鍵ファイルユーティリティ

```
install_path¥bin¥bpkeyfile.exe  
install_path¥share¥ciphers.txt
```

bpkeyfile

bpkeyfile – NetBackup 標準暗号化で使用されるレガシー鍵ファイルユーティリティの実行

概要

```
bpkeyfile [-stdin] [-change_key_file_pass_phrase]
[-change_netbackup_pass_phrase] [-display] key_file_path
```

UNIX システムでは、このコマンドのディレクトリパスは
/usr/opensv/netbackup/bin/admincmd/ です。
Windows システムでは、このコマンドのディレクトリパスは
<install_path>%NetBackup%bin\admincmd% です。

機能説明

bpkeyfile によって、DES 暗号化鍵を生成する情報が含まれるファイルを作成または更新します。情報は、指定した NetBackup フレーズに基づいて生成されます。鍵ファイルを暗号化するための鍵ファイルのパスフレーズを指定します。

NetBackup クライアントソフトウェアは、鍵ファイルの情報から計算された暗号化鍵を使用して、バックアップ中にファイルを暗号化し、リストア中にファイルを復号化します。

ファイルが存在する場合、現在の鍵ファイルのパスフレーズを入力するプロンプトが表示されます。

-change_key_file_pass_phrase を指定すると、新しい鍵ファイルのパスフレーズを入力するプロンプトが表示されます。空のパスフレーズを入力すると、鍵ファイルの標準パスフレーズが使用されます。

鍵ファイルの標準のパスフレーズを使用すると、bpcd が自動的に実行されます。自分の鍵ファイルパスフレーズを使う場合は、-keyfile 引数を指定して bpcd を開始します。

-keyfile 引数を指定して bpcd を起動する方法については、次を参照してください。『[NetBackup セキュリティおよび暗号化ガイド](#)』。

オプション

-stdin

標準入力からパスフレーズを読み込みます。デフォルトでは、bpkeyfile は端末ウィンドウで入力を求めるプロンプトからパスフレーズを読み込みます。

-change_key_file_pass_phrase (または -ckfpp)

このオプションを指定すると、鍵ファイルを暗号化するために使用されるパスフレーズが変更されます。

`-change_netbackup_pass_phrase` (または `-cnpp`)

このオプションを指定すると、NetBackup バックアップおよびアーカイブをこのクライアントで暗号化するために使用されるパスフレーズが変更されます。

`-display`

鍵ファイルの情報を表示します。

`key_file_path`

このオプションには、bpkeyfile によって作成または更新される鍵ファイルのパスを指定します。

注意事項

NetBackup によって使用されるパスフレーズの長さは、0 文字から 63 文字です。システム間の互換性の問題を回避するために、パスフレーズの文字を空白文字 (コード 32) からチルダ文字 (コード 126) までの印字可能な ASCII 文字に制限します。

レガシー暗号化では、bpkeyfile コマンドが使用されます。

ファイル

クライアントの暗号化鍵ファイル。

UNIX システムの場合: `/usr/opensv/netbackup/keyfile`

Windows システムの場合: `install_path¥NetBackup¥bin¥keyfile.dat`

bpkeyutil

bpkeyutil – NetBackup 標準暗号化で使用される鍵ファイルユーティリティの実行

概要

```
bpkeyutil [-stdin | -insert | -delete] [-display] [-clients  
client_name1[,client_name2,...]] [-M server]
```

UNIX システムでは、このコマンドのディレクトリパスは

/usr/opensv/netbackup/bin/admincmd/ です。

Windows システムでは、このコマンドのディレクトリパスは

<install_path>%NetBackup%bin\admincmd% です。

機能説明

bpkeyutil コマンドを実行すると、暗号化および復号化に使用される鍵が含まれる鍵ファイルが更新されます。鍵は、指定した NetBackup パスフレーズに基づいて生成されます。鍵ファイルは鍵を使用して暗号化されます。NetBackup クライアントソフトウェアは、鍵ファイルの暗号化鍵を使用して、バックアップ中にファイルを暗号化し、リストア中にファイルを復号化します。

オプション

-stdin

標準入力からパスフレーズを読み込みます。デフォルトでは、bpkeyutil は端末ウィンドウで入力を求めるプロンプトからパスフレーズを読み込みます。

-insert

このオプションを指定すると、NetBackup バックアップおよびアーカイブをこのクライアントで暗号化するための新しい NetBackup パスフレーズが、鍵ファイルに挿入されます。

-delete

このオプションを指定すると、既存のパスフレーズが鍵ファイルから削除されます。

-display

鍵ファイルの情報を表示します。

-clients client_name1[,client_name2,...,client_namen]

このオプションでは、鍵ファイルが存在するクライアント名を指定します。デフォルトは、ローカルクライアントです。複数のクライアント名をカンマで区切って指定することもできます。この引数は、NetBackup 管理者だけが使用できます。

-M *server*

このオプションでは、クライアントのマスターサーバー名を指定します。デフォルトは、ローカルクライアント構成で定義されたマスターサーバーです。この引数は、指定したマスターサーバーの **NetBackup** 管理者だけが使用できます。

注意事項

bpkeyutil コマンドを使うときには、次のことに注意してください。

- 標準暗号化では、bpkeyutil コマンドが使用されます。
- クラスタ内のすべてのノードで同じ鍵ファイルを使用する必要があります。

ファイル

クライアントの暗号化鍵ファイル。

UNIX システムの場合: /usr/opensv/var/keyfile.dat

Windows システムの場合: *install_path*\NetBackup\var\keyfile.dat

bplabel

bplabel – テープメディアへの NetBackup ラベルの書き込み

概要

```
bplabel -m media_id -d density [-o] [-p volume_pool_name] [-n  
drive_name | -u device_number] [-host media_server] [-erase [-l]]  
[-priority number]
```

UNIX システムでは、このコマンドのディレクトリパスは

/usr/opensv/netbackup/bin/admincmd/ です。

Windows システムでは、このコマンドのディレクトリパスは

<install_path>%NetBackup%bin¥admincmd¥ です。

機能説明

bplabel を実行すると、指定したメディアに NetBackup ラベルが書き込まれます。ラベル付けは、NetBackup カタログバックアップまたは NetBackup 以外のアプリケーションで最後に使用されたメディアに対してだけ必要です。このコマンドを実行すると、ボリュームデータベース内で割り当てられていないメディアを消去し、ラベル付けできます。また、特定のメディア ID を割り当てることもできます。bplabel を正常に実行するには、NetBackup Device Manager デーモンまたはサービス (ltid) が実行中である必要があります。-u オプションを指定して bplabel を実行しないかぎり、NetBackup Device Monitor を使用して、ドライブを手動で割り当てる必要があります。

注意: メディアに、要求されたバックアップが含まれていないことを確認します。メディアが再度ラベル付けされた後は、そのメディア上に存在したバックアップのリストアを行うことができません。

このコマンドは、すべての認可済みユーザーが実行できます。

NetBackup による認可について詳しくは、次を参照してください。『[NetBackup セキュリティおよび暗号化ガイド](#)』。

次に、このコマンドの使用に関する注意事項を示します。

- -m オプションおよび -d オプションが必要です。
- メディア ID が NetBackup ボリュームプール内に存在しない場合、-p オプションが必要です。
- メディア上に存在するデータ形式が認識されていて、-o オプションが指定されていない場合、bplabel を実行すると、上書きの確認を求めるプロンプトが表示されます。

データ形式の認識は、可変長メディアの最初のブロックが、**32 KB** 以下である場合だけ動作します。

- `bplabel` は、テープだけに使用します。

このコマンドを実行するには、管理者権限が必要です。

オプション

`-d density`

このオプションでは、メディアがマウントされるテープドライブの密度を指定します。このオプションは必須です。テープのマウント要求は、`-d` オプションの要件を満たすドライブ上で実行する必要があります。

メモ: 密度を入力するときは、大文字を使用しないでください。密度の指定に不適切な構文を使用すると、コマンドが失敗し、[無効な密度/ドライブ形式 (**Invalid Density/Drive Type**)]メッセージが表示される可能性があります。

有効な密度の指定は次のとおりです。

4mm(**4MM** カートリッジ)

8mm(**8MM** カートリッジ)

dlt(**DLT** カートリッジ)

hcart(**1/2** インチカートリッジ)

qscsi(**1/4** インチカートリッジ)

`-erase [-1]`

このオプションを指定すると、メディアが消去されます。デフォルトは高速消去です。`-1` オプションを指定した場合、メディアに対して完全消去が行われます。ドライブ形式によっては、完全消去の操作には非常に時間がかかることがあります。

`-host media_server`

media_server には、ドライブが接続されているホストを指定します。このドライブは、メディアのマウントに使用されます。デフォルトでは、このオプションを使用しない場合、コマンドはローカルシステム上で実行されます。

`-m media_id`

このオプションでは、メディア ID としてテープラベルに書き込まれた外部メディア ID を指定します。このオプションは必須です。メディア ID は、大文字でも小文字でも入力できます。外部メディア ID は、常に内部で大文字に変換されます。メディア ID には、**6** 文字以下の英数字を指定する必要があります。

- n *drive_name*

drive_name で指定するスタンドアロンドライブを無条件で割り当てます。ドライブにはメディアが含まれ、準備ができていする必要があります。このオプションを指定すると、手動で割り当て操作を行う必要がありません。ドライブ名は、Media Manager 構成から取得できます。
- o
このオプションを指定すると、選択したメディア ID が無条件で上書きされます。このオプションを指定しない場合、bplabel を実行すると、次のいずれかの条件に適合するメディアの上書き許可を求めるプロンプトが表示されます。
NetBackup のメディアヘッダーが含まれている。
NetBackup カタログバックアップのメディアである。
形式が、TAR、CPIO、DBR、AOS/VS または ANSI である。
- p *volume_pool_name*

Enterprise Media Manager データベース内に定義されているメディア ID が、**NetBackup** ボリュームプール内に存在しない場合、このオプションを指定する必要があります。

volume_pool_name には、正確なプールを指定する必要があります。
- priority *number*

デフォルトのジョブの優先度を上書きするラベルジョブの新しい優先度 (**number**) を指定します。
- u *device_number*

device_number で指定するスタンドアロンドライブを無条件で割り当てます。ドライブにはメディアが含まれ、準備ができてい必要があります。このオプションを指定すると、手動で割り当て操作を行う必要がありません。ドライブの番号は、Media Manager 構成から取得できます。

注意事項

tpconfig -d、tpconfig -l、vmoprcmd では、長いドライブ名が切り捨てられる場合があります。完全なドライブ名を取得するには、tpconfig -dl を使用します。

関連項目

p.465 の **ltid** を参照してください。

p.774 の **vmadm** を参照してください。

bplist

bplist – NetBackup サーバーにバックアップおよびアーカイブされたファイルの表示

概要

```
bplist [-A | -B] [-C client] [-S master_server] [-k policy] [-t policy_type] [-F] [-R [n]] [-b | -c | -u] [-l] [-r] [-X] [-flops options] [-Listseconds] [-T] [-unix_files] [-nt_files] [-s date] [-e date] [-I] [-PI] [-keyword keyword_phrase] [filename] [-Listpolicy]
```

UNIX システムでは、このコマンドのディレクトリパスは /usr/opensv/netbackup/bin/ です。

Windows システムでは、このコマンドのディレクトリパスは <install_path>%NetBackup%bin% です。

機能説明

bplist コマンドを実行すると、指定したオプションに従って、以前にアーカイブまたはバックアップされたファイルのリストが表示されます。リストに含めるファイルやディレクトリ、および時間を選択することができます。ディレクトリは、指定した階層まで再帰的に表示されます。bplist では、ユーザーが読み込み権限を取得しているファイルだけが表示されます。ファイルが表示されるのは、管理者アカウントによってユーザーバックアップが実行された場合だけです。

また、指定したファイルパス内のすべてのディレクトリに対する読み込み権限を取得しているか、そのディレクトリを所有している必要があります。他のクライアントによってバックアップまたはアーカイブされたファイルを表示できます。ただし、NetBackup 管理者によってその権限が付与されている必要があります。

すべてのユーザーによる書き込みを許可して次のディレクトリを作成した場合、bplist を実行すると、このディレクトリにデバッグログファイルが作成され、トラブルシューティングに使用できます。

UNIX systems: usr/opensv/netbackup/logs/bplist/

Windows systems: install_path%NetBackup%logs%bplist%

オプション

-A | -B

このオプションでは、リストを、アーカイブから作成するか (-A)、バックアップから作成するか (-B) を指定します。デフォルトは -B です。

-b | -c | -u

このオプションでは、-l オプションで出力に使用される代替日時を指定します。

-b を指定すると、各ファイルをバックアップした日時が表示されます。

-c を指定すると、各ファイルの **inode** を最後に変更した日時 (**UNIX** システム) または最後に作成した日時 (**Windows** システム) が表示されます。

-u を指定すると、各ファイルに最後にアクセスした日時が表示されます。

デフォルトでは、各ファイルを最後に変更した日時が表示されます。

-C *client*

このオプションでは、表示するバックアップまたはアーカイブの検索に使用するクライアント名を指定します。この名前は、**NetBackup** 構成ファイルに表示される名前と一致している必要があります。デフォルトは現在のクライアント名です。

-F

このオプションを指定すると、リストの出力で、シンボリックリンク (**UNIX** クライアントだけに適用) の後には **@** が付き、実行ファイルの後には ***** が付きます。

filename

このオプションでは、表示するファイルまたはディレクトリを指定します。すべてのファイルまたはディレクトリは、他のすべてのオプションに続いて、最後に指定する必要があります。パスを指定しない場合、現在作業中のディレクトリがデフォルトになります。

Windows システムでは、ドライブ文字に大文字を使います。次に例を示します。

```
C:¥NetBackup¥log1
```

ディレクトリに -R オプションを指定しない場合、次のようにパスに後続するセパレータを指定する必要があります。

```
UNIX システムの場合: bplist -l "/home/user1/*"
```

```
Windows システムの場合: bplist -l "D:¥WS_FTP.LOG¥*"
```

メタ文字のアスタリスク (*) を使用する場合、コマンドを正常に実行するにはファイル名を引用符で囲みます。

-flops *options*

このオプションを指定すると、**Backup Exec** ファイル、または **Backup Exec** ファイルと **NetBackup** ファイルの両方が表示されます。デフォルト (-flops を指定しない) では、**NetBackup** ファイルだけが表示されます。

Backup Exec ファイルのみを表示する場合、次のとおり指定します。

```
-flops 524288
```

Backup Exec ファイルおよび **NetBackup** ファイルを表示する場合、次のとおり指定します。

`-flops 1048576`

-I

大文字と小文字の区別がない検索を指定します。大文字と小文字の区別は名前を比較するとき考慮されません (たとえば、**Cat** は **cat** と一致します)。

-k *policy*

このオプションでは、リストの生成時に検索するポリシーを指定します。このオプションを指定しない場合、すべてのポリシーが検索されます。

-keyword *keyword_phrase*

このオプションでは、ファイルのリストア元のバックアップまたはアーカイブを検索するときに **NetBackup** で使用されるキーワード句を指定します。キーワード句は、以前 `bpbbackup` または `bparcarchive` の `-k` オプションでバックアップまたはアーカイブに関連付けられた句と一致している必要があります。

このオプションを、他のリストアオプションの代わりに、または他のオプションと同時に指定すると、バックアップおよびアーカイブのリストアが簡単になります。次のメタ文字を使用して、句の中のキーワードまたはキーワードの一部を一致させることができます。

* は、任意の文字数の文字列に一致します。

? は、任意の 1 文字に一致します。

[] は、この角カッコの中で連続する文字の 1 つに一致します。

[-] は、この [-] で区切られた範囲の文字の 1 つに一致します。

キーワード句は、最大 **128** 文字で指定できます。空白 (「 」) およびピリオド (「.」) を含むすべての印字可能な文字列を指定できます。

キーワード句は、二重引用符 ("...") または一重引用符 ('...') で囲む必要があります。

デフォルトのキーワード句は **NULL** (空) 文字列です。

メモ: ポリシー形式 **DB2**、**Informix-On-BAR**、**Oracle**、**SAP**、**MS-SQL-Server**、**Sybase** を使用した場合は、キーワード句が無視されます。

-1

Windows システムでは、`-1` を指定すると、ファイルの詳細が表示されます。

UNIX システムでは、`-1` を指定すると、ファイルの詳細 (各ファイルに指定されたモード、所有者、グループ、サイズ (バイト単位)、最終更新日時) が詳細形式で表示されます (「例」を参照)。リストには、各ファイルのモードが **10** 文字で表示されます。この

文字は、標準の **UNIX** のファイル権限を表します。先頭の文字は、次のいずれかです。

d(ディレクトリを表します)

l (リンクを表します)

m(Veritas Storage Migrator for UNIX または Veritas Data Lifecycle Manager によって移行されたファイルを表します)

- (ファイルを表します)

次に続く 9 文字は、3 つの権限のセットを 3 文字で 1 セットとして表します。最初のセットは、所有者の権限を表します。次のセットはユーザーグループの権限を、最後のセットはその他すべてのユーザーの権限を表します。各セットでは、次のとおり、読み込み、書き込みおよび実行権限を表します。

r = ファイルは読み込み可能です。

w = ファイルは書き込み可能です。

x = ファイルは実行可能です。

x = 権限が付与されていません。

-Listpolicy

このオプションを指定すると、スケジュール形式およびポリシー名がコマンド出力で示されます。

-Listseconds

このオプションでは、-l オプションを指定する場合のタイムスタンプを秒単位で指定します。

-nt_files

このオプションを指定すると、ファイルおよびディレクトリが **Windows** 形式で表示されます。このオプションは、**Windows** だけに適用されます。例: C:\¥users¥test

-PI

このオプションを指定すると、パスに依存せずに検索されます。この場合、**NetBackup** では、指定したファイルまたはディレクトリがパスに関係なく検索されます。たとえば、test という名前のファイルが、次に示す 3 つのディレクトリ内に存在するとします。test を検索すると、ファイルの 3 つのインスタンスがすべて検出されます。

UNIX システムの場合:

```
/tmp/junk/test  
/abc/123/xxx/test  
/abc/123/xxx/yyy/zzz/test
```

Windows システムの場合:

```
¥tmp¥junk¥test
¥abc¥123¥xxx¥test
¥abc¥123¥xxx¥yyy¥zzz¥test
```

-r

Windows システムでは、`-r` を指定すると、バックアップされたディスクイメージが表示されます。デフォルトでは、ファイルシステムが表示されます。

UNIX システムでは、`-r` を指定すると、バックアップされた **raw** パーティションが表示されます。デフォルトでは、ファイルシステムが表示されます。

-R [n]

このオプションを指定すると、*n* 番目の階層まで、サブディレクトリが再帰的に表示されます。*n* のデフォルトは **999** です。

-s date, -e date

表示の対象とする開始日時 (`-s`) と終了日時 (`-e`) を指定します。

`-s` では、表示の対象とする開始日時を指定します。結果のリストには、指定した日時以降に実行されたバックアップまたはアーカイブ内のファイルだけが表示されます。

NetBackup コマンドの日時の値に求められる形式は、使用しているロケールによって異なります。`/usr/opensv/msg/.conf` ファイル (**UNIX**) と `install_path¥VERITAS¥msg¥LC.CONF` ファイル (**Windows**) はそれぞれのサポート対象ロケールの日時形式などの情報を含んでいます。これらのファイルには、サポートされているロケールおよび書式のリストを追加および変更するための、具体的な方法が含まれています。

システムのロケールについて詳しくは、**NetBackup** インストールのロケールの指定に関する項を参照してください。『**NetBackup 管理者ガイド Vol. 2**』。

有効な日時の範囲は、**01/01/1970 00:00:00** から **01/19/2038 03:14:07** です。デフォルトは、現在の日付の **6** か月前です。

`-e` では、表示の対象とする終了日時を指定します。結果のリストには、指定した日時以前に実行されたバックアップまたはアーカイブ内のファイルだけが表示されます。開始日時と同じ形式を使用します。デフォルトは、現在の日時です。

メモ: `-x` オプションが `-s` または `-e` オプションとともに指定されている場合、時間は **10** 桁の **UNIX** 時刻に変更されます。

-S master_server

UNIX システムの場合: `-s` では、**NetBackup** サーバー名を指定します。デフォルトは、`/usr/opensv/netbackup/bp.conf` ファイルの最初の **SERVER** エントリです。

Windows システムの場合: `-s` では、NetBackup サーバー名を指定します。デフォルトは、[NetBackup マシンおよびポリシー形式の指定 (Specify NetBackup Machines and Policy Type)]ダイアログボックスの[サーバー (Servers)]タブで操作対象として指定されているサーバーです。このダイアログボックスを表示するには、クライアント上でバックアップ、アーカイブおよびリストアインターフェースを起動します。次に[ファイル (File)]メニューから[NetBackup マシンおよびポリシー形式の指定 (Specify NetBackup Machines and Policy Type)]を選択します。

`-t policy_type`

このオプションでは、ポリシー形式に対応する次のいずれかの番号を指定します。デフォルトでは、Windows クライアントが 13、その他のすべてのクライアントが 0 になります。

- 0 = Standard
- 4 = Oracle
- 6 = Informix-On-BAR
- 7 = Sybase
- 8 = MS-SharePoint
- 10 = NetWare
- 11 = DataTools-SQL-BackTrack
- 13 = MS-Windows
- 14 = OS/2
- 15 = MS-SQL-Server
- 16 = MS-Exchange-Server
- 17 = SAP
- 18 = DB2
- 19 = NDMP
- 20 = FlashBackup
- 21 = Split-Mirror
- 22 = AFS
- 25 = Lotus Notes
- 29 = FlashBackup-Windows
- 35 = NBU-Catalog
- 39 = Enterprise-Vault

40 = VMware

41 = MS-Hyper-V

-T

このオプションを指定すると、True Image Backup のディレクトリが表示されます。デフォルトでは、True Image Backup 以外が表示されます。

メモ: 合成完全バックアップに TIR 情報は使用されますが、合成完全バックアップの TIR 情報は表示されません。

-unix_files

このオプションを指定すると、ファイルおよびディレクトリが UNIX 形式で表示されます。このオプションは、UNIX だけに適用されます。例: /C/users/test

-X

バックアップイメージのタイムスタンプを UNIX 時刻形式で表示します。-x のフラグは -s フラグまたは -e フラグで予測される入力を、読みやすい時刻形式から 10 桁の UNIX 時刻に変更します。

例

例 1 - /home/usr1 (UNIX) または D:\¥WS_RTP.LOG (Windows) でバックアップされたファイルを詳細形式で再帰的に表示します。

UNIX システムの場合:

```
# bplist -l -R /home/usr1
lrwxrwxrwx  usr1;usr@  eng;None  0  Apr 28 12:25 /home/usr1/dirlink
drwxr-xr-x  usr1;usr@  eng;None  0  Apr 04 07:48 /home/usr1/testdir
drwxr-x---  usr1;usr@  eng;None  0  Apr 04 07:49 /home/usr1/dir
-rwxr----- usr1;usr@  eng;None 1002 Apr 02 09:59 /home/usr1/dir/file
lrwxrwxrwx  usr1;usr@  eng;None  0  Apr 04 07:49 /home/usr1/dir/link
```

Windows システムの場合:

```
# bplist -l -R D:\¥WS_FTP.LOG
-rwx----- bjm;usr@    bjm;None  64  Oct 10 2012 D:\¥WS_FTP.LOG
-rwx----- bjm;usr@    bjm;None  64  Oct 10 2012 D:\¥WS_FTP.LOG
-rwx----- bjm;usr@    bjm;None  64  Oct 10 2012 D:\¥WS_FTP.LOG
```

例 2 - バックアップされたファイルのうち、キーワード句 "MyHomeDirectory" のすべてまたは一部と関連するファイルを表示します。

```
UNIX: # bplist -keyword "*MyHomeDirectory*" -l /home/kwc/
```

```
Windows: # bplist -keyword "*MyHomeDirectory*" -l C:¥home¥kwc¥
```

例 3 - アーカイブされたファイルのうち、キーワード句 "MyHomeDirectory" のすべてまたは一部と関連するファイルを表示します。

```
UNIX: # bplist -A -keyword "*MyHomeDirectory*" -l /home/kwc/
```

```
Windows: # bplist -A -keyword "*MyHomeDirectory*" -l C:¥home¥kwc¥
```

例 4 - Windows クライアントから Windows マスターサーバーの bplist の出力を詳細形式で再帰的に表示します。次のコマンドを入力して、Windows クライアント **slater** のドライブ **D** にバックアップされたファイルのうち、キーワード句 "Win NT" のすべてまたは一部と関連するファイルを表示します。

```
# bplist -keyword "*Win NT*" -C slater -R -l C:¥client_data_2
```

```
drwx----- root;usr@ root;None 0 Aug 28 17 C:¥client_data_2¥  
-rwx----- root;usr@ root;None 40 Aug 05 24 C:¥client_data_2¥ewr.txt  
drwx----- root;usr@ root;None 0 Aug 28 17 C:¥client_data_2¥  
-rwx----- root;usr@ root;None 40 Aug 05 24 C:¥client_data_2¥ewr.txt
```

Windows イメージのユーザー列 (root;usr@) には、ファイルをバックアップしたユーザーと owner@domain がセミコロンで区切られて表示されます。Windows イメージのグループ列 (root;None) では、ファイルをバックアップしたグループと group@domain がセミコロンで区切られています。

ファイル

UNIX システムの場合: /usr/opensv/netbackup/logs/bplist/log.mmdyy

Windows システムの場合: install_path¥NetBackup¥logs¥bplist¥*.log

関連項目

p.50 の [bparchive](#) を参照してください。

p.56 の [bpbackup](#) を参照してください。

p.346 の [bprestore](#) を参照してください。

bpmedia

bpmedia – NetBackup メディアの凍結、解凍、一時停止、一時停止解除

概要

```
bpmedia -freeze | -unfreeze | -suspend | -unsuspend -m media_id [-h host] [-v]
```

```
bpmedia -movedb -m media_id -newserver newservername [-newsvr_group groupname] [-oldserver oldservername] [-v]
```

```
bpmedia -movedb -allvolumes -newserver newservername -oldserver oldservername [-v]
```

UNIX システムでは、このコマンドのディレクトリパスは

/usr/opensv/netbackup/bin/admincmd/ です。

Windows システムでは、このコマンドのディレクトリパスは

<install_path>%NetBackup%\bin\admincmd\ です。

機能説明

bpmedia コマンドを実行すると、次の処理を行うことができます。

- **NetBackup** テープメディアの凍結、解凍、一時停止、一時停止解除。つまり、メディアに対する今後のバックアップまたはアーカイブの指定を許可または禁止することができます。このコマンドは **Media Manager** によって管理されるメディアだけに適用されます。
- このオプションを指定すると、メディアカタログのエントリを、マスターサーバーおよびメディアサーバーのクラスタ内で、あるサーバーから他のサーバーへ移動できます。
- 異なるメディアサーバーにテープメディアの所有権を移動します。1つのサーバー名 (oldservername) を参照するすべてのメディアのデータベースおよびイメージのレコードが、別のサーバー名 (newservername) を参照するように変更します。

メモ: 特定のメディアまたはハードウェアのエラーによって、**NetBackup** で自動的にメディアが一時停止されるか、または凍結されることがあります。この場合、**NetBackup** の[問題 (Problems)]レポートにエラーの原因が書き込まれます。必要に応じて、bpmedia -unfreeze または -unsuspend オプションを指定して、一時停止解除または解凍できます。

このコマンドは、すべての認可済みユーザーが実行できます。**NetBackup** による認可について詳しくは、次を参照してください。『**NetBackup セキュリティおよび暗号化ガイド**』。

オプション

-freeze

このオプションを指定すると、指定したメディアが凍結されます。有効な NetBackup メディアが凍結された場合、NetBackup によって、そのメディアへのバックアップおよびアーカイブは行われません。メディア上に存在する期限が切れていないすべてのイメージは、継続してリストアに使用できます。NetBackup では、凍結されたメディアは NetBackup メディアカタログから削除されません。また、期限が切れた場合も NetBackup ボリュームプールから割り当て解除されません。

-unfreeze

このオプションを指定すると、指定したメディアが解凍されます。このオプションによって、-freeze オプションによる操作を解除し、メディアの期限が切れていない場合は再度バックアップまたはアーカイブに使用することができます。メディアが解凍されている間に期限が切れた場合、そのメディアは NetBackup ボリュームプールからすぐに割り当て解除されます。

-suspend

このオプションを指定すると、指定したメディアが一時停止されます。この操作は -freeze オプションによる操作と同じですが、メディアの期限が切れた場合、そのメディアは NetBackup ボリュームプールからすぐに割り当て解除されます。

-unsuspend

このオプションを指定すると、指定したメディアの一時停止が解除されます。このオプションによって、-suspend オプションによる操作を解除し、メディアを再度バックアップまたはアーカイブに使用することができます。

`-movedb -newserver newservername [-newsrv_group groupname] [-oldserver oldservername]`

メモ: -movedb オプションは、NetBackup サーバーでは使用できません。

このオプションを指定すると、メディアカタログのエントリを、マスターサーバーおよびメディアサーバーのクラスタ内で、あるサーバーから他のサーバーへ移動できます。このコマンドを実行すると、指定されたメディア ID のメディアカタログのエントリが **oldservername** から **newservername** に移動されます。エントリの移動を反映するように NetBackup イメージカタログが更新されます。移動後、**newservername** はメディアに対するアクセス権を取得していると見なすことができます。

-newserver newservername では、エントリの移動先のホスト名を指定します。

-newsrv_group groupname では、そのメディアを割り当てる新しいサーバーグループの名前を指定します。

-oldserver *oldservername* では、移動されるカタログエントリが現在存在するホスト名を指定します。*oldservername* オプションを指定しない場合、このコマンドが実行されているシステムが移動元のサーバーになります。

-movedb オプションは、マスターサーバーおよびそのメディアサーバーでロボットライブラリが共有され、そのロボット内のすべてのメディアへのアクセス権を取得している場合に最も有効です。少なくとも、すべての **NetBackup** サーバーで同じ **Enterprise Media Manager** データベースが使用されている必要があります。同じデータベースが使用されている場合、属性および割り当ての状態を保持したままで、メディアを 1 つのロボットライブラリから別のロボットライブラリに移動できます。

-movedb -allvolumes -newserver *newservername* -oldserver *oldservername*
1 つのメディアサーバー (*oldservername*) に割り当てられているすべてのメディアを別のメディアサーバー (*newservername*) に移動します。この操作は EMM データベースで実行され、メディアの *lastwritehost* を *newservername* に変更します。共有グループに属するメディアの場合に次の条件が該当します。*lastwritehost* が *oldservername* に設定された場合、*newservername* は共有グループに属する必要があり、*lastwritehost* は *newservername* に変更されます。

最初の手順が正常に実行されると、このオプションはイメージデータベース内のすべてのフラグメントのメディアサーバー名を *oldservername* から *newhostname* に変更します。この操作には、コマンドがイメージデータベース全体を走査する必要があるため、長い時間がかかる場合があります。

メモ: -movedb オプションは、**NetBackup** サーバーでは使用できません。

-m *media_id*

このオプションでは、操作が必要なメディア ID を指定します。メディア ID は、6 文字以下で指定し、**NetBackup** メディアカタログに含める必要があります。

-h *host*

このオプションでは、メディアカタログが存在するサーバーのホスト名を指定します。このオプションは、bpmedia を実行したサーバーにボリュームが書き込まれていない場合だけ必要です。この場合、メディア ID は、他のサーバー上の **NetBackup** メディアカタログに存在します。bpmedia コマンドで、そのサーバー名を指定する必要があります。

たとえば、whale というマスターサーバーと、eel というメディアサーバーが存在すると想定します。whale 上で、次のように bpmedia コマンドを実行して、eel のメディアカタログ内に存在するメディア ID BU0001 を一時停止します。

```
bpmedia -suspend -m BU0001 -h eel
```


メディアカタログ内にボリュームが存在するホストを判断するには、**NetBackup** の [メディアリスト (**Media Lists**)] レポートを使用します。

-v

このオプションを指定すると、詳細モードが選択されます。このオプションは、デバッグログ機能を有効にして **NetBackup** が実行されている場合、つまり次のディレクトリが存在する場合にだけ有効です。

UNIX: /usr/opensv/netbackup/logs/admin

Windows: *install_path*¥NetBackup¥logs¥admin

例

HOSTM というマスターサーバーのメディアサーバーが、**HOSTS1** および **HOSTS2** であると想定します。このコマンドを実行すると、メディア ID **DLT001** のメディアカタログのエントリが **HOSTS1** から **HOSTS2** に移動され、**NetBackup** イメージカタログが更新されます。次のコマンドは、マスターサーバー **HOSTM** で実行します:

```
# bpmmedia -movedb -m DLT001 -newserver HOSTS2 -oldserver HOSTS1
```

ファイル

UNIX システムの場合:

```
/usr/opensv/netbackup/logs/admin/*  
/usr/opensv/netbackup/db/media/*
```

Windows システムの場合:

```
install_path¥NetBackup¥logs¥admin¥*.log  
install_path¥NetBackup¥db¥media¥*.log
```

bpmédialist

bpmédialist – NetBackup テープメディアの状態の表示

概要

```
bpmédialist [-m list] [-U | -l | -L] [-m media_id] [-rl ret_level]
[-d density] [-p pool_name] [-json] [-h host_name | -M
master_server,...] [-owner host_name | group_name] [-v]
bpmédialist -summary [-U | -L] [-brief] [-p pool_name] [-h host_name
| -M master_server,...] [-owner host_name | group_name] [-v]
bpmédialist -m contents -m media_id [-U | -l | -L] [-d density] [-h
host_name | -M master_server,...] [-owner host_name | group_name]
[-v] [-priority number]
bpmédialist -count -rt robot_type -rn robot_number [-d density] [-U
| -l] [-h host_name | -M master_server] [-v]
UNIX システムでは、このコマンドのディレクトリパスは
/usr/opensv/netbackup/bin/admincmd/ です。
Windows システムでは、このコマンドのディレクトリパスは
<install_path>%NetBackup%bin%admincmd% です。
```

機能説明

bpmédialist を実行すると、1 つ以上の NetBackup メディアカタログに対して問い合わせが発行され、NetBackup メディアの状態を表すレポートが生成されます。このコマンドは、認可済みユーザーが実行できます。

NetBackup による認可については、次を参照してください。『[NetBackup セキュリティおよび暗号化ガイド](#)』。

bpmédialist では、メディアリスト、メディアの概略、メディアの内容、メディア件数のいずれかのレポートが表示されます。

メディアリストレポート

メディアリスト (-m list) レポートには、NetBackup メディアカタログ内の 1 つまたはすべてのボリュームの情報が表示されます。このレポートは、ディスクストレージユニットには適用されません。レポートには、レポート内のボリュームごとに、そのボリュームのメディア ID、メディアサーバーおよびその他の属性が表示されます。これは、デフォルトのレポート形式です。

-U オプションを指定すると、状態フィールドにテキストが英語で表示されます。このオプションを指定しない場合、状態は 16 進の整数として表示されます。数字の意味は次のと

おりです。任意の、またはすべてのフラグが設定できます。ここで表示されている設定以外では、状態はレポートされません。

0x2000 以上: メディアにはいくつかの暗号化されたイメージが含まれています。

0x1000 以上: メディアは Backup Exec によって使われます。

0x800 以上: このテープは WORM (Write Once Read Many) です。

0x400 以上: 代替サーバーのリストアのために使われます。

0x200 以上: 多重化が TRUE です。

0x080 以上: インポート済みが TRUE です。

0x040 以上: 複数の保持レベルが TRUE です。

状態を表す下位 1 桁を解釈するには、次に示す値と順に比較します。

0x008 以上: 空きがありません。

0x004 以上: レポートされません。

0x002 以上: 一時停止しています。

0x001: 凍結しています。

0x000: 有効です。

レポートされた状態は、下位桁の状態に上位桁の状態が組み合わされたものです。たとえば、状態値が 0x040 の場合、メディア ID の状態は有効で、複数の保持レベルが設定されています。

-1 オプションを指定すると、レポートが簡易形式で生成されます。レポートでは、各メディア ID が 1 行ずつ表示されます。各行のフィールドについては、後述の説明を参照してください。

次のフィールドの中で、その項で説明されていないフィールドは、NetBackup によって内部的に使用されます。

- media id
- パートナー ID (Partner ID)
- version
- 密度
- 割り当てられた時刻 (Allocated Time)
- 最終書き込み時刻 (Last Written Time)
- 有効期限 (Expiration Time)
- 最終読み込み時刻 (Last Read Time)
- KB (KBytes)

- イメージ数 (Images)
- 有効なイメージ数 (Valid Images) (期限が切れていないイメージ)
- 保持レベル (retention level)
- volume pool
- リストア数 (Number of Restores)
- 状態 (Status) (前述を参照)
- ヘッダーサイズ (Header Size)
- セクタサイズ (Sector Size)
- 最終オフセット (Last Offset)
- 予約済み (reserved)
- psize
- 予約済み (reserved)
- (4 つの予約済みフィールド)

メディアの概略レポート

メディアの概略レポートには、サーバーごとに、有効期限に従ってグループ分けされた有効および無効なメディアが表示されます。このレポートには、メディアの有効期限、保持レベルごとのメディア数および各メディア ID の状態が表示されます。

メディアの内容レポート

メディアの内容レポートには、メディアから直接読み込まれたメディアの内容が表示されます。レポートには、ある 1 つのメディア ID 上のバックアップ ID が表示されます。個々のファイルは表示されません。このレポートは、ディスクストレージユニットには適用されません。Ctrl+C を押してこのコマンドの実行を中断すると、要求されたメディアがマウントまたは配置されていない場合、中断した後もしばらくそのストレージユニットが使用中となる場合があります。レポート内の各エントリは、ストレージユニットの該当する領域が読み込まれたことを表します。

メディアの内容レポートの -l 形式では、各バックアップ ID が 1 行ずつ表示され、各行には次に示すフィールドが含まれます。

詳しくは、次のメディアの内容レポートに関する項を参照してください。『[NetBackup 管理者ガイド Vol. 2](#)』。

次のフィールドの中で、その項で説明されていないフィールドは、NetBackup によって内部的に使用されます。

- バージョン (version) (1 は DB バックアップイメージを表し、2 は通常のバックアップイメージを表します)
- バックアップ識別子 (Backup ID)
- 作成時刻 (Creation Time)
- 有効期限時刻 (Expiration Time)
- 保持レベル (Retention level)
- フラグメント番号 (Fragment Number)
- ファイル番号 (File Number)
- ブロックサイズ (Block Size) (バイト単位)
- 状態 (Status)
- メディア ID (Media ID)
- サイズ (Size)
- 予約済み (Reserved)
- data_start
- 予約済み (Reserved)
- クライアント形式 (Client Type) *
- コピー番号 (Copy Number) *
- スケジュール形式 (Schedule Type) *
- フラグ (Flags) *
- opt_extra
- mpx_headers
- res1
- ポリシー名 (Policy name) *
- スケジュール名 (Schedule Name) *

* が付いているフィールドは、バージョンが 2 の場合だけ有効です。

メディア件数レポート

メディア件数レポートには、指定したすべての条件と一致する起動状態のデバイスの件数が表示されます。このレポートで必須の条件は、ロボット形式およびロボット番号です。-v 形式では、起動状態のデバイスのタイトルおよび数 ($rt(m) = value$) が表示されます。-l 形式では、値だけが表示されます。

オプション

レポートの種類オプション

bpmédialist では、4 つの種類レポートのいずれかが表示されます。コマンドライン上のオプションでは、表示されるレポートの種類を指定します。レポートの種類に指定可能なオプションは次のとおりです。

-mlist

このオプションを指定すると、メディアリストレポート(デフォルトのレポート形式)が生成されます。

-summary

このオプションを指定すると、メディアの概略レポートが生成されます。

-mcontents

このオプションを指定すると、メディアの内容レポートが生成されます。

-count

このオプションを指定すると、メディア件数レポートが生成されます。このレポートには、メディアの属性 ALLOW_MULT_RET_PER_MEDIA、およびその値 (0 (許可しない) または 1 (許可する)) が表示されます。

bpmédialist では、レポートを複数の形式のいずれかで表示できます。レポート形式に指定可能なオプションは次のとおりです。

-brief

このオプションを指定すると、簡易なレポートが生成されます。このオプションはメディアの概略レポートにだけ有効です。デフォルトでは、完全なレポートが表示されます。このレポートには、有効なメディアおよび無効なメディアの詳細が含まれ、各メディア ID の状態がこのカテゴリ内で表示されます。

-U

このオプションを指定すると、ユーザー形式(デフォルトのレポートモード)でレポートが表示されます。レポートには列タイトルが表示されたバナーが含まれます。レポートの形式はより詳細になります。

-L

このオプションを指定すると、詳細形式でレポートが表示されます。この形式では、最も詳細な情報が含まれるレポートが生成されます。たとえば、メディアリストレポートの場合、レポートには `keyword = value` の組み合わせで各メディア ID の属性が表示されます。この属性は、1 行に 1 つずつ表示されます。値は、数値および文章で表示されます。

-l

このオプションを指定すると、簡易形式でレポートが表示されます。この形式では、簡易なレポートが生成されます。このオプションは、カスタマイズされたレポート形式にリストを再生成するスクリプトまたはプログラムに対して有効です。

bpmédialist で使用するその他のオプションを次に示します。

-d *density*

このオプションを指定すると、指定した密度のメディアがレポートされます。コマンドラインでロボット形式を指定すると、密度の値はそのロボット形式によって決まります。指定可能な密度の種類は次のとおりです。

4mm: **4MM** カートリッジ

8mm: **8MM** カートリッジ

dlt: **DLT** カートリッジ

qscsi: **1/4** インチカートリッジ

メモ: 次の密度は、NetBackup Enterprise Server だけにサポートされます。

dlt2: **DLT** カートリッジ 2

dlt3: **DLT** カートリッジ 3

dtf: **DTF** カートリッジ

hcart: **1/2** インチカートリッジ

hcart2: **1/2** インチカートリッジ 2

hcart3: **1/3** インチカートリッジ 2

-h *host_name*

レポートするメディアを含んでいるホストの名前。期限切れのメディアの内容リストを収集するには **-M** の代わりに **-h** を使います。

NDMP ホストからメディアのレコードを抽出するには、**NDMP** サーバーホスト名に **NetBackup** ではなく **NDMP** のホスト名を使います。**NCMP** のホスト名は、マスターサーバーのドメインに関連付けられている **NDMP** ストレージユニットまたは **NDMP** のサーバーの種類としての **EMM** (または関連付けられている **EMM** のエイリアス名) で定義されます。

-json

単一行で **json** (**JavaScript Object Notation**) 形式で出力を表示します。

-m *media_id*

このオプションを指定すると、指定したメディア ID だけがレポートされます。このオプションは、メディアの内容レポートに必要です。

メディアリストレポートでは、このオプションの指定は任意です。デフォルト条件では、すべてのメディア ID がレポートに含まれます。メディア ID は、大文字でも小文字でも指定できます。メディア ID は、6 文字以下で指定し、**NetBackup** メディアカタログに含める (**NetBackup** のボリュームプールに割り当てられている) 必要があります。

`-owner host_name | group_name`

このオプションでは、メディアリストの所有者を指定します。所有者には、ホストまたはサーバーグループを指定できます。

メモ: NetBackup Server では、サーバーは 1 台 (マスターサーバー) だけです。したがって、`host_name` オプションを指定する場合は、このマスターサーバー名を指定します。

このオプションの `host_name` では、ホスト名または文字列 ALL を指定します。

`host_name` にホスト名を指定すると、問い合わせは、システム上のこのホストに存在するメディアカタログに対して発行されます。`-mcontents` および `-count` のオプションには、このオプションは 1 つだけ指定できます。`-mlist` および `-summary` のオプションでは、このオプションは複数指定できます。デフォルトでは、リムーバブルメディアのストレージユニットのセット内に存在するすべてのサーバーが対象となります。

`host_name` で指定したシステムでは、`bpmedialist` が実行されているシステムからのアクセスが許可されている必要があります。`host_name` オプションには、ローカル以外のマスターサーバーのメディアサーバーを指定できます。デフォルトは、ローカルクラスタのマスターサーバーです。

ローカル以外のマスターサーバーのメディアサーバーでは、`-h host_name オプションを指定した bpmedialist の実行と -M master_server オプションを指定した bpmedialist の実行を比較した場合、-h オプションを指定した場合の方がメディアカタログの問い合わせが先に完了します。この応答時間の違いは、-M オプションで指定したマスターサーバーがリモートに配置され、-h オプションで指定したメディアサーバーがローカルに配置されている場合、大きくなります。`

`host_name` に ALL を指定すると、問い合わせは、ローカルのマスターサーバーおよびそのメディアサーバーに対して発行されます。

このオプションの `group_name` では、サーバーグループ名、または文字列 ALL を指定します。`group_name` にサーバーグループ名を指定した場合、問い合わせに対して、そのサーバーグループが所有するメディアが返されます。`group_name` に ALL を指定した場合、問い合わせに対して、すべてのサーバーグループが所有するメディアが返されます。

`-M master_server,...`

このオプションでは、代替マスターサーバーのリストを指定します。このリストは、コマンドで区切られたホスト名のリストです。このオプションを指定すると、一覧表示されている各マスターサーバーで `bpmedialist` が実行されます。マスターサーバーでエラーが発生した場合、その時点でレポート処理が停止します。

レポートは、このリスト内のすべてのマスターサーバーから戻された情報で構成されます。`bpmedialist` コマンドを実行すると、各マスターサーバーに対して問い合わせ

せが発行されます。リストに示される各マスターサーバーでは、bpmcdialist を発行するシステムからのアクセスが許可されている必要があります。

-mcontents (メディアの内容レポート)だけを指定すると、マスターサーバーはメディアカタログからメディアの情報を返します。メディアの情報には、マスターサーバーおよびそのメディアサーバーの情報が含まれます (ただし、リモートメディアサーバーをサポートしない NetBackup サーバーは除きます)。たとえば -m のリスト内に存在するマスターサーバーの 1 つのメディアサーバーにメディア ID が存在する場合、マスターサーバーによってこのメディアサーバーからメディアの情報が取り出され bpmcdialist が実行されているシステムに戻されます。この場合、マスターサーバーおよびメディアサーバーの両方で、bpmcdialist を発行するシステムからのアクセスが許可されている必要があります。

デフォルトは、bpmcdialist を実行するサーバーのマスターサーバーです。

メモ: NetBackup Server では、マスターサーバーだけサポートされています。したがって、この場合のデフォルトは常に bpmcdialist を実行する NetBackup Server のマスターサーバーとなります。

-p *pool_name*

このオプションを指定すると、指定したボリュームプールに属するメディア ID がレポートされます。デフォルトはすべてのボリュームプールです。

-priority *number*

デフォルトのジョブの優先度を上書きするメディアの内容ジョブ (メディアの内容レポート用) の新しい優先度 (*number*) を指定します。

-rl *retention_level*

このオプションを指定すると、指定した保持レベルを使用するメディアがレポートされます。指定した保持レベルによって、バックアップおよびアーカイブが保持される期間が決まります。*retention_level* には、0 から 24 の整数を指定します (デフォルトのレベルは 1)。

インストール時に設定された保持レベルの値と、対応する保持期間を次に示します。サイト側で、保持レベルに対応する保持期間が再構成されている可能性があります。

0	1 週間
1	2 週間
2	3 週間
3	1 か月
4	2 か月

5	3 か月
6	6 か月
7	9 か月
8	1 年
9 - 24	無制限

`-rn robot_number`

このオプションを指定すると、指定したロボット番号を使用するロボットがレポートされます。このオプションは、`-count` オプションを指定する場合は必須です。ロボット番号は、[メディアおよびデバイスの管理 (Media and Device Management)]から取得できます。

この番号の使用規則については、次を参照してください。『[NetBackup 管理者ガイド Vol. 2](#)』。

`-rt robot_type`

このオプションを指定すると、指定した形式のロボットがレポートされます。このオプションは、`-count` オプションを指定する場合は必須です。非ロボットの (スタンドアロンの) デバイスでは、**NONE** を選択します。次に、有効なロボット形式を示します。

TL4: **4MM** テープライブラリ

TL8: **8MM** テープライブラリ

TLD: **DLT** テープライブラリ

NONE: 非ロボット

次のロボット形式は、**NetBackup Enterprise Server** だけに適用されます。

ACS: 自動カートリッジシステム

TLH: **1/2** インチテープライブラリ

TLM: マルチメディアテープライブラリ

`-v` このオプションを指定すると、詳細モードが選択されます。このオプションを指定して `bpmédialist` を実行すると、デバッグに使用するための追加情報がログに書き込まれます。追加情報は **NetBackup** 管理の日次デバッグログに記録されます。このオプションは、**NetBackup** でデバッグログ機能が有効になっている場合、つまり次のディレクトリが定義されている場合にだけ有効です。

For UNIX systems: `/usr/openv/netbackup/logs/admin`

For Windows systems: `install_path¥NetBackup¥logs¥admin`

例

例 1 - ローカルシステムのマスターサーバーおよびメディアサーバーで定義された、すべてのメディア ID のメディアレポートが生成されます。

メモ: NetBackup Server の場合、リモートメディアサーバーがサポートされないため、マスターサーバーのメディア ID だけがレポートに含まれます。

```
# bpmédialist

Server Host = hatt

id      rl  images  allocated  last updated  density  kbytes  restores
      vimages  expiration  last read      <----- STATUS ----->
-----
143191  0   28     12/03/2012 23:02  12/22/2012 23:00    dlt     736288    1
      7     12/29/2012 23:00  12/09/2012 10:59
144280  0   9      11/25/2012 11:06  12/01/2012 23:03    dlt     290304    0
      0     12/08/2012 23:03      N/A      EXPIRED  FROZEN
AEK800  0   22     12/06/2012 03:05  12/23/2012 03:01    dlt     23213184  0
      7     12/30/2012 03:01  12/09/2012 10:48
C0015  0   28     11/26/2012 02:09  12/23/2012 02:01    dlt     896448    0
      7     12/30/2012 02:01      N/A
IBM001  0   16     12/16/2012 01:01  12/23/2012 01:07    dlt     6447360   0
      14    12/30/2012 01:07      N/A
L00103  0   20     12/07/2012 08:33  12/23/2012 01:07    dlt     7657728   0
      9     12/30/2012 01:07      N/A
L00104  0   9      12/11/2012 01:09  12/21/2012 01:04    dlt     5429504   0
      5     12/28/2012 01:04      N/A
```

例 2 - ロボット形式が TLD、ロボット番号が 0 (ゼロ) のメディア件数レポートが生成されま
す。

```
# bpmédialist -count -rt TLD -rn 0
      ALLOW_MULT_RET_PER_MEDIA 0
      Number of UP devices for TLD(0) = 2
```

例 3 - メディア ID AEK802 のメディアの内容レポートが生成されます。レポートの一部を次に示します。

```
# bpmédialist -mcontents -m AEK802
media id = AEK802, allocated 01/08/2007 03:10, retention level = 0
```

```
File number 1
Backup id = hat_0915786605
Creation date = 01/08/2007 03:10
Expiration date = 01/15/2007 03:10

Retention level = 0
Copy number = 1
Fragment number = 2
Block size (in bytes) = 65536
```

```
File number 2
Backup id = hat_0915809009
Creation date = 01/08/2007 09:23
Expiration date = 01/15/2007 09:23
Retention level = 0
Copy number = 1
Fragment number = 1
Block size (in bytes) = 65536
```

例 4 - マスターサーバー hatt および duo のメディアリストレポートが生成されます。bpmédialist はマスターサーバー buff 上で実行されます。

```
# bpmédialist -M hatt,duo
```

```
Server Host = hatt
```

id	rl	images	allocated	last updated	density	kbytes	restores
		vimages	expiration	last read	<----- STATUS ----->		
143191	0	51	12/03/2008 23:02	01/11/2009 23:04	dlt	1436686	2
		9	01/18/2009 23:04	01/08/2009 10:26			
144280	0	9	11/25/2008 11:06	12/01/2008 23:03	dlt	290304	0
		0	12/08/2008 23:03	01/12/2009 16:10	EXPIRED	FROZEN	
AEK800	0	38	12/06/2008 03:05	01/08/2009 03:10	dlt	3922200024	0
		3	01/15/2009 03:10	12/09/2008 10:48	FULL		

```
AEK802  0      6  01/08/2009 03:10 01/12/2009 03:05    dlt    6140544      0
          6  01/19/2009 03:05 01/12/2009 16:12

C0015   0      48 11/26/2008 02:09 01/12/2009 02:11    dlt    1531968      0
          7  01/19/2009 02:11      N/A

IBM000  0      19 01/01/2009 01:09 01/12/2009 02:05    dlt    8284224      0
          13 01/19/2009 02:05 01/09/2009 05:41
```

Server Host = duo

```
  id      rl  images  allocated      last updated      density      kbytes  restores
          vimages  expiration      last read          <----- STATUS ----->
-----
A00004   0      0  11/16/2009 05:31      N/A              4mm          0          0
          0          N/A              N/A              FROZEN

DLT210   1      5  12/09/2008 06:10 01/08/2009 06:04    dlt          2560          0
          2  01/22/2009 06:04      N/A

DLT215   0     124 12/08/2008 14:57 01/12/2009 08:07    dlt    9788072          4
          28 01/19/2009 08:07 12/31/2008 15:42
```

例 5 - 2 つのホストのうちのどちらかに指定したメディア ID が構成されているかが表示されます。ホスト hatt のメディアカタログ内には **A00004** は構成されていません。したがって、要求されたメディア ID が **NetBackup** メディアカタログまたは **Enterprise Media Manager** データベース内で検索されなかったことが表示されます。

ホスト duo には、**A00004** が構成されているため、このホストでは **A00004** のメディアリストレポートが生成されます (コマンドは、改行せずにすべてを 1 行で入力します)。

```
# bpmedialist -mlist -h hatt -h duo -m A00004
```

```
requested media id was not found in NB media database and/or MM volume database
```

Server Host = duo

```
  id      rl  images  allocated      last updated      density      kbytes  restores
          vimages  expiration      last read          <----- STATUS ----->
-----
A00004   0      0  11/16/2009 05:31      N/A              4mm          0          0
          0          N/A              N/A              FROZEN
```

ファイル

UNIX システムの場合: `/usr/opensv/netbackup/logs/admin/*`

Windows システムの場合: `install_path¥NetBackup¥logs¥admin¥*`

bpmlicense

bpmlicense – NetBackup ライセンスファイルの管理

概要

```
bpmlicense [-path license_key_file | -M server] [-debug] [-verbose]
[-list_keys] [-nb_features | -sm_features]
bpmlicense [-path license_key_file | -M server] [-debug] [-verbose]
-find_keys | -delete_keys | -add_keys keystring1 .. keystringn
bpmlicense -nb_ufile fid [-debug] [-verbose]
```

UNIX システムでは、このコマンドのディレクトリパスは

/usr/opensv/netbackup/bin/admincmd/ です。

Windows システムでは、このコマンドのディレクトリパスは

<install_path>%NetBackup%bin\admincmd% です。

機能説明

bpmlicense ユーティリティを実行すると、NetBackup ライセンスファイルを管理できます。NetBackup ライセンスを管理する方法として、NetBackup 管理コンソールの[ヘルプ (Help)]>[ライセンスキー (License Keys)]パネルの使用をお勧めします。UNIX サーバーでは、NetBackup のライセンスを管理するために get_license_key ユーティリティを使うことができます。この操作をこのコマンドよりお勧めします。

このコマンドは、すべての認可済みユーザーが実行できます。

NetBackup による認可について詳しくは、次を参照してください。『[NetBackup セキュリティおよび暗号化ガイド](#)』。

オプション

```
-add_keys | -delete_keys | -find_keys keystring1 .. keystringn
```

これらのオプションを指定すると、指定した 1 つ以上の *keystring* が、NetBackup ライセンスファイルに対して検索、表示、追加または削除されます。

```
-debug
```

このオプションを指定すると、標準エラーの詳細情報が表示されます。

```
-list_keys
```

このオプションを指定すると、NetBackup ライセンスファイルのキーが一覧表示されます。

- `-M server`
このオプションを指定すると、指定した **NetBackup server** の標準 **NetBackup** ライセンスファイルが使用されます。
- `-nb_features`
このオプションを指定すると、実行中の **NetBackup** の機能 ID だけが一覧表示されます (`-verbose` オプションを同時に指定すると、有効なキーも表示されます)。
- `-nb_ufid fid`
このオプションを指定すると、特定の機能 ID のライセンス情報が表示されます。容量ベースの機能の場合、**VALUE** フィールドに、その機能に対するすべての有効なライセンスキーで許可される容量の合計が示されます。
- `-sm_features`
このオプションを指定すると、実行中の **Storage Migrator** の機能 ID だけが一覧表示されます (`-verbose` オプションを同時に指定すると、有効なキーも表示されず)。
- `-path license_key_file`
このオプションを指定すると、ローカルシステム上の指定した **license_key_file** が使用されます。デフォルトは、標準 **NetBackup** ライセンスファイルです。
- `-verbose`
このオプションを指定すると、標準出力の追加情報が表示されます。このオプションは、`-nb_ufid` オプションと組み合わせると無視されます。

例

例 1 - 機能 78、**OpenStorage Disk Option** に関するライセンス情報が表示されます。

```
# bpmlicense -nb_ufid 78
0x05000000;PRID=6 (NetBackup Enterprise Server);FID=78 (OpenStorage
Disk Option);SERIAL=0;VALUE=10; DEXPIRE=2007/07/31 01:00:00 0 (Not
expired); UXDEXPIRE=1185861600 0 (Not expired);
UKEY=OENP-24NJ-PTJT-PPPP-PC6N-PPPP-PNPP-PPPP-POC6
```

例 2 - 次の例では、管理者は、有効な **PureDisk** ライセンスがインストールされているかどうかについての情報を必要としています。

```
# ./bpmlicense -verbose
OENC-CPP9-3ZUP-DO83-6PWB-8K4O-SKS7-774C-PPP6
OHNW-PPX2-PCDV-UPGP-PZUZ-NCZP-RXXO-GO49-G777-GOP
file version      = 0x05000000
time added       = 0x46388201 Wed May 02 07:20:17 2007
hostname         = hagar
product ID       = 6 NetBackup Enterprise Server
```



```
serial number = 0
key version   = 0x05000000
count         = 0
server platform = 0 Any platform
client platform = 0 Any platform
server tier    = 10 NetBackup Enterprise Server
client tier    = 0 No tier
license type   = 4 Not for resale
OEM ID        = 16 Unknown OEM: 16
Expiration     = Not expired Tue Jul 31 01:00:00 2007
Time Left     = 84 Days
Firm Expiration = Not expired Tue Jul 31 01:00:00 2007
Feature ID    = 87 PureDisk Storage Upgrade +
Feature ID    = 86 PureDisk Remote Office +
Feature ID    = 85 PureDisk Option +
Feature ID    = 84 SAN Client +
Feature ID    = 83 PureDisk MS Exchange Agent +
```

bpnbat

bpnbat – NetBackup 内部からの認証作業の実行

概要

```
bpnbat [-AddDomain | -RemoveDomain] Private_Domain
bpnbat [-AddMachine]
bpnbat [-AddUser | -RemoveUser] Name Private_Domain
bpnbat -Execute [-cf credential_file] command
bpnbat -GetBrokerCert Broker_Name Broker_Port
bpnbat -Login [-Info answer_file] [-cf credential_file]
bpnbat -LoginMachine
bpnbat -Logout [-cf credential_file]
bpnbat -RemoveBrokerCert server.name.com
bpnbat -ShowBrokerCerts
bpnbat -ShowMachines
bpnbat -Version
bpnbat -WhoAmI [-cf credential_file] [-Verify]
```

UNIX システムでは、このコマンドのディレクトリパスは /usr/opensv/netbackup/bin/ です。

Windows システムでは、このコマンドのディレクトリパスは <install_path>%NetBackup%bin% です。

機能説明

bpnbat は、Symantec Product Authentication and Authorization Service を使用できるようにするためのツールです。

このサービスには次の 2 つの独立した機能があります。

- 認証 - 個人を識別する
- 認可 - ユーザーが実行可能な内容を確認する

bpnbat を使用すると、NetBackup 内部からユーザーが認証作業を実行できるようになります。

パスワードが必要なコマンドでは、パスワードが他の人に推測されないように、入力されたパスワードまたはアスタリスクはエコー表示されません。

NetBackup アクセス制御を使用するには、ユーザーのホームディレクトリが正しく設定されている必要があります。

次のコマンドオプションを実行するには、管理者権限が必要です。-AddDomain, -RemoveDomain, -AddMachine, -AddUser, -RemoveUser, -LoginMachine, -ShowMachines。

オプション

`[-AddDomain | -RemoveDomain] Private_Domain`

これらのオプションを指定すると、認証サーバー上でローカルに作業している管理者は、Veritas プライベートドメインデータベース内部からドメインを追加または削除できます。これらのドメインには、どのオペレーティングシステムからもアクセスできません。これらのオプションは、Symantec Product Authentication and Authorization Service 内部だけで意味を持ちます。これらは、集中化された認可システム (PDC/AD や NIS ドメインなど) を利用できない場所で使用します。

`-AddMachine`

プライベートの Symantec Product Authentication にマシンを登録します。識別情報はプライベートドメインである `NBU_Machines@<at.server.name>` に保存されます。認証ブローカー上でこのオプションを指定して、コマンドを実行します (`root +ab`)。

`[-AddUser | -RemoveUser] Private_Domain`

これらのオプションを指定すると、認証サーバー上でローカルに作業している管理者は、Veritas プライベートドメインデータベース内部のドメインからユーザーを追加または削除できます。これらのアカウントは、Symantec Product Authentication and Authorization Service 内部だけで意味を持ちます。集中化された認可システム (PDC/AD や NIS ドメインなど) が利用できない場合に使用します。

`-Execute [-cf credential_file] command`

`-cf` でディスクからクレデンシャルファイルを読み込んで、指定したコマンドを実行します。

`-GetBrokerCert`

このオプションを指定すると、ブローカーに対する認証を行うことなくブローカー証明書が取得されます。

`-Login [-Info answer_file] [-cf credential_file]`

このオプションを指定すると、システムに対して自分自身が識別されます。オプションなしでこのコマンドを実行すると、認証するために名前、パスワード、ドメイン、認証形式およびサーバーを入力するプロンプトが表示されます。名前、パスワード、ドメインおよびドメイン形式を組み合わせることによって、企業規模のネットワーク内部で一意的識別情報が作成されます。ブローカーと初めて通信する場合は、そのブローカーを信頼し、認証するかどうか尋ねられます。信頼していないブローカーを使用することはできません。

-Info オプションを指定すると、**answer_file** から名前、パスワードおよびドメイン情報を取得し、**credential_file** (指定されている場合) またはデフォルトの場所に証明書を配置できます。応答テキストファイルを作成できます。これにより、ログオンのユーザー名とパスワードを手動で入力する必要がなくなります。

警告: ユーザー名とパスワードをテキストファイルに保存すると、セキュリティの問題が発生する可能性があります。認証されていないユーザーがこのテキストファイルへの読み込み権限を取得すると、**Symantec Product Authentication and Authorization Service** のユーザー名とパスワードを入手し、bpbat コマンドを使用して手動で認証することができます。認証されていないユーザーが応答テキストファイルにアクセスできないようにしてください。

応答ファイルは次の 4 つの行を含む必要があります。

```
<domain type>
<domain>
<username>
<password>
```

<domain type> には、次のいずれかの値を指定します。

```
NIS
NIS+
NT
vx
unixpwd
```

応答ファイルを使用する場合は、適切な **AUTHENTICATION_DOMAIN** がサーバーに構成されていることを確認してください。次を参照してください。『[NetBackup セキュリティおよび暗号化ガイド](#)』。

-LoginMachine

このオプションを指定すると、**Veritas Security Services** プライベートドメインである **NBU_Machines@<at.server.name>** 内でアカウントを使用しているマシンを識別できます。**NetBackup** メディアサーバー、マスターサーバーおよびクライアント上でこのオプションを指定して、コマンドを実行します。このオプションは、認証ブローカーにユーザーとしてログインするのと同じです。

-Logout [-cf credential_file]

このオプションを指定すると、ユーザーが処理を続行するときに再度ログインするために必要な現在のユーザークレデンシャルが無効になります。-cf オプションを指定しない場合は、デフォルトの場所に格納されているクレデンシャルが期限切れになります。-cf オプションには実際のクレデンシャルファイルを指定します。このオプ

ションを使用すると、期限切れにするクレデンシアルをユーザーが明示的に指定できます。

`-RemoveBrokerCert server.name.com`

このオプションを指定すると、**root** ユーザー (管理者) を除くすべてのユーザーに対して指定した認証ブローカーが信頼できると見なされなくなります。このコマンドを実行すると、ユーザーが信頼しなくなったブローカーを削除できます。たとえば、認証ブローカーが社内の別の部門に移動した場合に実行します。

`-ShowBrokerCerts`

このオプションを指定すると、ユーザーが現在信頼しているすべてのブローカーが表示されます。**NetBackup** では、表示されるすべてのブローカーは、送信された認証要求の処理に関して信頼されています。

`-ShowMachines`

このオプションを指定すると、`-AddMachine` オプションを使用して **Veritas Security Services** プライベートデータベースのコンピュータドメインに追加されたすべてのコンピュータが表示されます。また、**DNS** によってコンピュータ名が正しく解決されているかどうか也表示されます。認証ブローカー上でこのオプションを指定して、コマンドを実行します (**root +ab**)。

`-Version`

このオプションを指定すると、実行可能ファイルのバージョンが取得されます。

`-WhoAmI [-cf credential_file] [-Verify]`

このオプションを指定すると、**Symantec Product Authentication and Authorization Service** 内部で現在使用している識別情報が表示されます。次の情報が表示されます。

- 名前
- ドメイン
- クレデンシアルを発行した認証ブローカー
- 証明書の有効期限
- クレデンシアルの作成時に使用されたドメイン形式

例

例 1 - ユーザーは `-Login` とデフォルトのポート番号を使用して **test.domain.veritas.com** という名前の認証ブローカーに接続します (これは認証処理を処理するサーバーです)。**NIS** アカウントが使われています。したがって、ユーザー名およびパスワードの他に、**NIS** アカウントに関連付けられたドメイン名を入力します。

```
# bpbnt -Login
Authentication Broker: test.domain.veritas.com
```

```
Authentication port[ Enter = default]:
Authentication type (NIS, NISPLUS, WINDOWS, vx, unixpwd): NIS
Domain: domain.veritas.com
Name: username
Password:
You do not currently trust the server: test.domain.veritas.com, do
you wish to trust it? (y/n): y
Operation completed successfully.
```

例 2 - `--WhoAmI` オプションを指定すると、**Symantec Product Authentication and Authorization Service** 内部で現在使用している識別情報が検証されます。

```
# bpbat --WhoAmI
Name: user name
Domain: domain.veritas.com
Issued by: /CN=broker/OU=root@eek.min.veritas.com/O=vx
Expiry Date: Oct 27 20:57:43 2009 GMT
Authentication method: NIS
Operation completed successfully.
```

例 3 - コンピュータの識別情報のリストにコンピュータを追加します。

```
# bpbat --AddMachine
Machine Name: auto.domain.veritas.com
Password:
Operation completed successfully.
```

次に、コンピュータの識別情報のリストを示します。

```
# bpbat --ShowMachines
auto.domain.veritas.com
Operation completed successfully
```

それから、コンピュータから指定した認証ブローカーにログインします。

```
# bpbat --LoginMachine
Does this machine use Dynamic Host Configuration Protocol (DHCP)?
(y/n) n
Authentication Broker: test.domain.veritas.com
Authentication port[ Enter = default]:
Name: auto.domain.veritas.com
Password:
Operation completed successfully.
```

コンピュータから指定した認証ブローカーへのログイン時に問題が発生した場合:

ユーザーが複数 NIC 構成を使用している場合、または入力したブローカー名が不正な場合、2 番目のプロンプトが表示されます。これによって、適切なブローカー名を再度入力することができます。次の例では、sleemanNB がプライベート NIC 名であると想定します。Symantec Product Authentication and Authorization Service で認証ドメインの作成に使用されるパブリック NIC 名は、sleeman.min.veritas.com です。

-loginmachine コマンドの実行に失敗した場合、ユーザーは、認証ブローカーの明示的なプライマリホスト名を入力するように求められます。(コマンドの失敗には、無効なコンピュータ名、不適切なパスワード、不正なブローカー名などがあります。) 次の例を参照してください。

```
# bpbat -LoginMachine
Does this machine use Dynamic Host Configuration Protocol (DHCP)?
(y/n) n
Authentication Broker: sleemanNB
Authentication port[ Enter = default]:
Machine Name: challenger
Password:
Primary host name of broker: sleeman.min.veritas.com
Operation completed successfully.
```

例 4 - このオプションを指定すると、ブローカーに対する認証を行うことなくブローカー証明書が取得されます。このコマンドでは、ブローカー (**test.domain.veritas.com**) およびポート (デフォルトの **0**) を想定しています。

```
# bpbat -GetBrokerCert test.domain.veritas.com 0
Operation completed successfully.
```

例 5 - ユーザーが現在信頼しているすべてのブローカーが表示されます。

```
# bpbat -ShowBrokerCerts
Name: root
Domain: root@test.domain.veritas.com
Issued by: /CN=root/OU=root@test.domain.veritas.com/O=vx
Expiry Date: Jun 12 20:45:19 2006 GMT
Authentication method: Symantec Private Security

Name: root
Domain: root@auto.domain.veritas.com
Issued by: /CN=root/OU=root@auto.domain.veritas.com/O=vx
Expiry Date: Feb 17 19:05:39 2006 GMT
Authentication method: Symantec Private Security
Operation completed successfully.
```

例 6 - `-RemoveBrokerCert` オプションを指定すると、ユーザーが信頼しなくなったブローカーが削除されます。たとえば、認証ブローカーが社内の別の部門に移動した場合などに実行します。

```
# bpbnt -RemoveBrokerCert test.domain.veritas.com
Operation completed successfully.
```

ユーザーは、`-ShowBrokerCerts` オプションを使用して現在の証明書を表示できます。以前に削除された証明書は、表示されなくなります。

例 7 - 自動化されたコマンド (`cron` など) にログオン情報を指定するために応答ファイルを使う方法を示します。

UNIX の場合: **UNIX NIS** ドメイン名は `location.example.com` です。このドメインのユーザー名は `bgrable` であり、パスワードは `hello456` です。 `bpbnt -login` の対応する応答ファイルは次の 4 つの行を含む必要があります。

```
NIS
location.example.com
bgrable
hello456
```

応答ファイルが `/docs` にあり、`login.txt` という名前の場合、 `bpbnt` コマンドは次のように実行します。

```
# bpbnt -login -info /docs/vslogin.txt
```

`bpbnt -login` コマンドの実行後、 `bpbakup` などのコマンドは認証エラーなしで実行できます。

Windows の場合: **Windows** のドメイン名は `corporate` です。このドメインのユーザー名は `jsmith` であり、ユーザーパスワードは `hello123` です。 `bpbnt -login` の対応する応答ファイルは次の 4 つの行を含む必要があります。

```
NT
corporate
jsmith
hello123
```

応答ファイルが `/docs` にあり、`login.txt` という名前の場合、 `bpbnt` コマンドは次のように実行します。

```
# bpbnt -login -info c:¥docs¥vslogin.txt
```

`bpbnt -login` コマンドの実行後、 `bpbakup` などのコマンドは認証エラーなしで実行できます。

関連項目

p.242 の [bpbaz](#) を参照してください。

bpnbaz

bpnbaz – NetBackup 内部からの認可管理作業の実行

概要

```
bpnbaz -[AddGroup | DelGroup] Group_Name [-M server] [-Server
server1.domain.com] [-CredFile Credential]
bpnbaz -[AddPerms | DelPerms] Permission_1[,Permission_2,...] -Group
Group_Name -Object Object [-M server] [-Server server1.domain.com]
[-CredFileCredential]
bpnbaz -[AddPolicy | DelPolicy] Policy_Name [-M server] [-Server
server1.domain.com] [-CredFile Credential]
bpnbaz -[AddUser | DelUser]
Group_NameDomain_Type:Domain_Name:User_Name [-OSGroup] [-M server]
[-Server server1.domain.com] [-CredFile Credential]
bpnbaz -[AllowAuthorization | DisallowAuthorization] Machine_Name
[-M server] [-Server server1.domain.com]
bpnbaz -CheckUpgrade [-Server server1.domain.com]
bpnbaz -Configureauth
bpnbaz -GetConfiguredHosts [target.server.com [-out file] | -all
[-out file] | [-file progress_file]
bpnbaz -GetDomainInfosFromAuthBroker [target.server.com [-out file]
| [-file progress_file]
bpnbaz -ListGroupMembers Group_Name [-M server] [-Server
server1.domain.com] [-CredFile Credential]
bpnbaz -[ListPerms | ListMainObjects | ListGroups | ListPolicyObjects
| ShowAuthorizers] [-M server] [-Server server1.domain.com] [-CredFile
Credential]
bpnbaz -SetupAT [-fsa [Domain_Type:Domain_Name:User_Name]
bpnbaz -SetupAuthBroker [target.server.com [-out file] | -file
progress_file]
bpnbaz -SetupClient [client.server.com] [-out file] | -all [-images]
[-out file] | [-file progress_file] [-dryrun] [-disable]
bpnbaz -SetupIndexServer [indexserver.server.com [-out file] | -all
[-out file] | -file progress_file ] [-pass password] [-dryrun]
[-disable]
bpnbaz -SetupMaster [-fsa [Domain_Type:Domain_Name:User_Name]
bpnbaz -SetupMedia [media.server.com [-out file] | -all [-out file]
| -file progress_file] [-dryrun] [-disable]
```

```
bpbaz -SetupSecurity NBU.Master.Server.com [-M server] [-Server  
server1.domain.com]  
bpbaz -UnconfigureAuthBroker [target.server.com [-out file] | -file  
progress_file]  
bpbaz -UnhookSharedSecSvcsWithPBX [target.server.com [-out file] |  
-file progress_file]  
bpbaz -Upgrade [-Silent] [-Server server1.domain.com]
```

UNIX システムでは、このコマンドのディレクトリパスは

/usr/opensv/netbackup/bin/admincmd/ です。

Windows システムでは、このコマンドのディレクトリパスは

<install_path>%NetBackup%\bin\admincmd\ です。

機能説明

bpbaz は、**NetBackup Product Authentication and Authorization Service** の認可機能にアクセスするために **NetBackup** で使用されるコマンドです。認可では、オブジェクトに対する権限が確認されます。このコマンドを実行すると、次の処理を行うことができます。

- `-AddGroup` を指定すると **Az** グループが作成され、`-DelGroup` を指定すると **Az** グループが削除されます。`-DelGroup` を指定すると、認可エンジンから **Az** グループを削除した場合に、グループのすべてのメンバーが削除されます。この操作は取り消すことができません。グループを削除すると、そのグループのメンバーに付与されている権限が無効になります。

メモ: 認可 (**Az**) グループとは、OS グループおよび OS ユーザーを配置できる認可エンジン内のコレクションです。ユーザーを **Az** グループに追加する場合、そのグループに関連付けられた権利および権限をユーザーに付与します。

- `-AddPerms` を指定すると、個々のポリシーに与えられた役割に必要な指定された権限がメイン **NetBackup** リソースオブジェクトに追加され、`-DelPerms` を指定すると、その権限が削除されます。
アクセス権については、次を参照してください。『[NetBackup 管理者ガイド Vol. 1](#)』。
- `-AddPolicy` を指定すると、メイン **NetBackup** リソースオブジェクトにポリシーが追加され、`-DelPolicy` を指定すると、ポリシーが削除されます。
- `-AddUser` を指定すると、個々のポリシーの権限がメイン **NetBackup** リソースオブジェクト追加され、`-DelUser` を指定すると、権限が削除されます。
- `-AllowAuthorization` を指定すると、認証の確認を実行できるコンピュータが指定され、`-DisallowAuthorization` を指定すると、認証の確認を実行できないコン

コンピュータが指定されます。セキュリティ管理者は、認可データベースを検証して認可の確認を行うことができるサーバー (マスターまたはメディア) を指定する必要があります。

- `-CheckUpgrade` を指定すると、指定のサーバーに既存の認可情報のアップグレードが必要かどうか判断されます。必要な場合、このオプションは **61** を戻します。このオプションは **NetBackup** のインストーラでのみ使われます。
- `-Configureauth` は、認証ブローカーを設定します。
ドメイン名の情報を間違えると、認証ブローカーと **NetBackup** アクセス制御を設定できません。この問題を解決するには、このコマンドを使って認証ブローカーを設定します。
- `-GetConfiguredHosts` は、ホストの **NBAC** 状態を取得します。このコマンドには、`-all` または `target.server.com` オプションが必須です。
- `-GetDomainInfosFromAuthBroker` は、認証ブローカーからブローカーのドメインマップを要求します。
- `-ListGroupMembers` は、**Group_Name** で定義した特定のグループに関連付けられたグループメンバーを表示します。
- `-ListGroups` を指定すると、定義されたグループが表示されます
- `-ListMainObjects` を指定すると、各メイン **NetBackup** オブジェクトに対する現在の権限がグループごとに表示されます。これは情報を表示するためであり、オブジェクトに対する権限の変更内容を検証する場合に使用できます。このオプションを指定すると、認可システム内部での各グループの権限が表示されます。
- `-ListPerms` は **NetBackup** のリソースとポリシーの現在の権限をリストし、データベース内の特定のオブジェクトまたはオブジェクト形式に適用可能なすべての権限を示します。このオプションによって、ユーザーは認可に関するカスタマイズを容易に行うことができます。
- `-ListPolicyObjects` は指定したポリシーに関連付けられているすべてのオブジェクトかオブジェクトの集合を表示します。
- `-SetupAT` を指定すると、クラスタ化されたマスター環境にあるすべてのノードのクレデンシャルが生成されます。このコマンドは**NetBackup**のインストールまたはアップグレード後に実行します。
- `-SetupAuthBroker` は **NBAC** を使うように認証ブローカーを設定します。
- `-SetupClient` を指定すると、クライアントで **NBAC** が設定されます。`bpbaz`
`-SetupMaster` が正常に完了された後で実行します。これはマスターサーバーから実行できます。このコマンドは、マスターサーバーとターゲットクライアントシステムが接続されていることを想定しています。
デフォルトでは、**NBAC** メッセージは `SetupClient.nbac` と呼ばれるローカルディレクトリのファイルに記録されます。このファイルの形式の例は次のとおりです。

```
client1.server.com  
#client2.server.com #SUCCESS (0) @(07/16/10 12:09:29)  
client3.server.com #INTERNAL_ERROR(68) @(07/16/10 12:09:39)
```

- 1 行目は `client1.server.com` とまったく通信されていないことを示します。
- 第 2 行は `client2.server.com` と正常に通信されたことを示します。正常に通信されると (先頭の # で) コメントアウトされ、複数回通信されることはありません。
- 第 3 行は `client3.server.com` と通信されたが、エラーが起きたことを示します。エラーは、対応方法に関する推奨事項とともにコマンドラインに出力されます。ログに示されているエラー番号が問題を示している場合もあります。
- `-SetupIndexServer` は、NBAC を使うように検索機能のインデックスサーバーを設定します。bpbaz `-SetupMaster` が正常に完了された後で実行します。これはマスターサーバーから実行できます。マスターサーバーとインデックスサーバー間の接続が必要です。
`-SetupMaster` を指定すると、NBU_Security Admin グループに root/管理者がデフォルトで追加されます。初めて `-SetupMaster` を `-fsa` オプションとともに使うときに、最初のセキュリティ管理者メンバーを NBU_Security Admin グループに追加します。`-fsa` オプションなしで `-Setupmaster` を使って NBAC をすでに構成している場合は、`-AddUser` オプションを使ってメンバーを追加します。
- `-SetupMaster` を指定すると、NBAC を使用するようにマスターサーバーが設定されます。bpbaz `-SetupMaster` コマンドはユーザーの引数を含んでいません。現在のオペレーティングシステムのユーザー ID のパスワードを求めるプロンプトが表示されます。認可サーバーと認証ブローカーはマスターサーバーにインストールされ、実行されている必要があります。
`-SetupMaster` を指定すると、NBU_Security Admin グループに root/管理者がデフォルトで追加されます。初めて `-SetupMaster` を `-fsa` オプションと共に使ったときに、セキュリティ管理者の最初のメンバーが NBU_Security Admin グループに追加されます。`-fsa` オプションなしで `-Setupmaster` を使って NBAC をすでに構成している場合は、`-AddUser` オプションを使ってメンバーを追加します。
- `-SetupMedia` を指定すると、NBAC を使用するようにメディアサーバーが設定されます。NetBackup 管理者グループのメンバーは bpbaz `-SetupMaster` が正常に完了された後 bpbaz `-SetupMedia` コマンドを実行できます。このコマンドはマスターサーバーから実行できます。マスターサーバーとターゲットのメディアサーバーシステム間の接続が必要です。
デフォルトでは、NBAC メッセージは `SetupClient.nbac` と呼ばれるローカルディレクトリのファイルに記録されます。ファイル形式の例で、`SetupClient` の説明を参照してください。
- `-SetupSecurity` を指定すると、初期セキュリティ情報が設定されます。`-SetupSecurity` は Az サーバーのルートとして実行される必要があります。

- `-ShowAuthorizers` を指定すると、認可の確認を実行できるコンピュータが表示されます。
- `-UnconfigureAuthBroker` は、認証ブローカーから設定を削除します。
- `-UnhookSharedSecSvcsWithPBX` は、MSCS 環境の PBX から共有の認証と認可サービスの接続を解除します。
- `-Upgrade` は、認可オブジェクトを追加することによって NetBackup の操作スキーマを修正します。さらに、このオプションはこれらの新しいオブジェクトのデフォルトの権限でデフォルトのユーザーアカウントをアップグレードします。NBU_Security Admin 権限を持たなければなりません。

NBAC と `bpnbaz` コマンドの使用について詳しくは、次を参照してください。『[NetBackup セキュリティおよび暗号化ガイド](#)』。

このコマンド、およびこのコマンドに関連付けられたオプションを実行するには、NetBackup セキュリティ管理者グループ (NBU_Security Administration) のメンバーである必要があります。ただし、`SetupSecurity` を実行する場合は例外となります。

このコマンドを実行する認可サーバーで管理者権限が必要です。

`bpnbaz` を実行する場合は、マスターサーバーと Az サーバーが同じコンピュータであることが前提となります。

メモ: NetBackup アクセス制御を使用するには、ユーザーのホームディレクトリが正しく設定されている必要があります。

オプション

`-all`

すべてのストレージユニットまたはポリシーをスキャンし、ポリシーで見つかった関連一意ホスト名をすべて収集します。ソートされた順序でスキャンできます。結果は進捗ファイルに書き込まれます。

`client.server.com`

1 台のターゲットホストの名前を指定します。NBAC で使用する単一の追加ホストを追加するにはこのオプションを使用します。

`-CredFile Credential`

このオプションでは、デフォルトの場所ではなく、取得する Symantec Product Authentication and Authorization Service クレデンシャルが格納されているファイル名 (*Credential*) を指定します。

`-disable`

対象のホストの NBAC (USE_VXSS = PROHIBITED) を無効にします。

Group_Name

このオプションを指定すると、操作の実行対象にする認可グループが識別されます。
NetBackup では、ユーザーグループのネストは許可されません。

Domain_Type: Domain_Name: User_Name

Domain_Type 変数は、ユーザーまたはグループが属するドメインです。**User_Name** 変数では、**NetBackup** 管理者を指定する適用可能なユーザーまたはグループ名を定義します。

-dryrun

メディアサーバー名のリストが生成され、ログにリストが書き込まれます。このオプションは **client.server.com** または **media.server.com** で機能しますが、**-all** オプションとともに使用することを目的としています。

250 を超える多数のクライアントがある場合は、**-SetupClient** 操作でドライランを実行し、マスターサーバーで確認できるすべてのクライアントを表示します。

-file progress_file

進捗ログ用に異なるファイル名を指定します。**-file** を使用すると、入力ファイルと出力ファイルが同じになり、コマンドを変更しないで複数回実行できます。すべてのクライアントがオンラインで利用可能になるまで進捗ファイルに複数回フィードバックを行うことによって、進捗ファイルを繰り返し使用します。

-fsa

NetBackup 管理者として特定の OS ユーザーをプロビジョニングします。現在の OS のユーザー ID のパスワードを求められます。

Group_Name

<認証形式>:<ドメイン形式>:<ユーザー名> という形式で一意的なエンタープライズアカウント名を作成してユーザーを追加します。

この変数でサポートされる認証形式は、次のとおりです。

- **Nis**: ネットワーク情報サービス
- **NISPLUS**: ネットワーク情報サービスプラス
- **Unixpwd**: 認証サーバー上の **UNIX** パスワードファイル
- **WINDOWS**: プライマリドメインコントローラまたは **Active Directory**
- **Vx: Veritas** プライベートデータベース。

-images

-images はすべてのイメージで一意的なホスト名を検索します。**-dryrun** オプションを含めないかぎり、このオプションを大規模なカタログとともにには使わないでください。このオプションはイメージカタログに含まれているすべての一意的クライアントを検出します。古いカタログは、多数の廃止されたホスト、名前を変更されたホスト、新しい

マスターに移動されたホストを含むことがあります。このコマンドでアクセスできないホストとの通信を試行するとランタイムが大幅に増加する場合があります。

-M server

このオプションでは、マスターサーバー名を指定します。このサーバー名には、ローカルホストとは異なる名前を指定できます。

Machine_Name

認証の確認の実行を許可または拒否するコンピュータを指定します。セキュリティ管理者は、どのマスターサーバーまたはメディアサーバーが認可データベースを検証して認可の確認を実行できるのかを指定する必要があります。

media.server.com

1 台のターゲットホストの名前を指定します。**NBAC** で使用する単一の追加ホストを追加するにはこのオプションを使用します。

-Object Object

このオプションを指定すると、指定したオブジェクトまたはオブジェクトの集合へのアクセスを制御できます。

-OSGroup

このオプションを指定すると、ネイティブオペレーティングシステムで設定され、単一のエンティティとして扱われる、名前付きの認証プリンシパルコレクションを定義できます。認証グループまたは **OS** グループのすべてのメンバーは、同じ認証ドメインに属しています。

-out file

カスタム出力ファイル名を指定します。デフォルトでは、出力は `SetupMedia.nbac` ファイルに書き込まれます。このオプションは、**-all** オプションとともに使用します。

Permission_1[,Permission_2,...]

指定したオブジェクトまたはポリシーに与えられた役割に必要な権限。

policy_name

メイン **NetBackup** リソースオブジェクトからのポリシー名を指定します。

-Server server1.domain.com

このオプションでは、使用中の **Az** サーバーを指定します。現在、**Az** サーバーと **NetBackup** マスターサーバーは同じシステム上に存在することが前提となります。

指定のサーバーに既存の認可情報のアップグレードが必要かどうかを判断します。必要な場合、このオプションは「**61**」を戻します。このオプションは **NetBackup** のインストーラでのみ使われます。

-Silent

グループの権限をシステムの新しいオブジェクトのアカウントに自動的に拡張するアップグレード操作を指示します。このオプションは変更されることがないデフォルトグループに対してのみ有効です。


```
target.server.com
```

1 台のターゲットホストの名前を指定します。1 つのホストの **NBAC** の状態を見つけるには、このオプションを使用します。このオプションでは、ConfiguredHosts.nbac ファイルのホストの状態が取得されます。

例

例 1: **Az** グループの作成と表示。

Az グループとは、他の **OS** グループおよび **OS** ユーザーが配置された認可エンジン内部の集合です。この集合は、データベース内部のオブジェクトに権限が適用される場合に使用される構築ブロックです。ユーザーを **Az** グループに追加する場合、そのグループに関連付けられたすべての権利および権限をユーザーに付与します。ユーザーが複数のグループに属する場合、そのユーザーの有効な権限は、ユーザーが属する各グループの適用可能な権限の論理和です。次の例に、既存の **Az** グループを作成および表示する方法を示します:

```
# bpnbaz -AddGroup "New Group 1" -server test.domain.veritas.com
Operation completed successfully.
# bpnbaz -ListGroup -server test.domain.veritas.com
Administrators
Operatorsroo
Security Administrators
Resource Management Applications
Applications
New Group 1
NBU_Unknown
NBU_User
NBU_Operator
NBU_Media Device Operator
NBU_Admin
NBU_Executive
NBU_Security Admin
NBU_Database Agent Operator
NBU_Database Agent Administrator
Operation completed successfully.
```

例 2: **Az** グループの削除。

認可エンジンから **Az** グループを削除すると、グループのすべてのメンバーが削除されます。この操作は取り消すことができません。グループを削除すると、そのグループのメンバーに付与されている権限が無効になります。したがって、グループを削除した場合の影響を慎重に考慮してください。

```
# bpbaz -DelGroup "New Group 1" -server test.domain.veritas.com
Operation completed successfully.
# bpbaz -ListGroup -server test.domain.veritas.com
Administrators
Operators
Security Administrators
Resource Management Applications
Applications
NBU_Unknown
NBU_User
NBU_Operator
NBU_Media Device Operator
NBU_Admin
NBU_Executive
NBU_Security Admin
NBU_Database Agent Operator
NBU_Database Agent Administrator
Operation completed successfully.
```

例 3: Az グループからのユーザーの追加または削除 (およびグループメンバーの表示)

ユーザーを追加するには、次の形式で一意的なエンタープライズ名を作成します。<認証形式>:<ユーザーまたはグループが属するドメイン>:<ユーザーまたはグループの名前>
次に、サポート対象の認証形式を示します。

- **Nis:** ネットワーク情報サービス
- **NisPlus:** ネットワーク情報サービスプラス
- **Unixpwd:** 認証サーバー上の UNIX パスワードファイル
- **WINDOWS:** プライマリドメインコントローラまたは Active Directory
- **Vx: Veritas** プライベートデータベース

```
# bpbaz -AddUser NBU_Operator
nis:domain.veritas.com:ssosa -server test.domain.veritas.com
Operation completed successfully.
# bpbaz -ListGroupMembers
NBU_Operator -server test.domain.veritas.com
=====
Type: User
Domain Type: nis
Domain:domain.veritas.com
Name: jdimaggio
=====
Type: User
```

```
Domain Type: nis
Domain:domain.veritas.com
Name: ssosa
Operation completed successfully.
# bpbaz -DelUser NBU_Operator
nis:domain.veritas.com:ssosa -server test.domain.veritas.com
Operation completed successfully.
# bpbaz -ListGroupMembers
NBU_Operator -server test.domain.veritas.com
=====
Type: User
Domain Type: nis
Domain:domain.veritas.com
Name: jdimaggio
Operation completed successfully.
```

例 4: 適用可能な権限の表示

-ListPerms オプションを指定すると、データベース内部の特定のオブジェクトまたはオブジェクト形式に対して、適用可能なすべての権限が表示されます。この情報によって、ユーザーは認可に関するカスタマイズを容易に行うことができます。

```
# bpbaz -ListPerms -server
test.domain.veritas.com
    Object Type: Unknown
Browse
Object Type: Media
    Browse
    Read
    New
    Delete
    Eject
    . . .
    Restart
    Synchronize
Object Type: PolicyGroup
    Browse
    Read
    New
    Delete
    Activate
    Deactivate
    Backup
Operation completed successfully.
```

例 5: メインオブジェクトの表示

-ListMainObjects オプションを指定すると、各メイン **NetBackup** オブジェクトに対する現在の権限がグループごとに表示されます。これは情報を表示するためであり、オブジェクトに対する権限の変更内容を検証する場合に使用できます。このオプションを指定すると、認可システム内部での各グループの権限が表示されます。

```
# bpbaz -ListMainObjects -server
test.domain.veritas.com
. . .
NBU_RES_Policy:
  Role: NBU_User
    Unknown
  Role: NBU_Media Device Operator
    Browse
    Read
  Role: NBU_Executive
    Read
    Browse
  Role: NBU_Database Agent Operator
    Unknown
    Role: NBU_Unknown
  Unknown
  Role: NBU_Operator
    Browse
    Read
  Role: NBU_Admin
    Browse
    New
    Activate
    Backup
    Read
    Delete
    Deactivate
  Role: NBU_Security Admin
    Unknown
  Role: NBU_Database Agent Administrator
    Unknown
  Role: Administrators
    Unknown
  Role: Operators
    Unknown
  Role: Applications
    Unknown
```

```
Role: NBU_Security Admin
    Unknown
. . .
NBU_RES_Job:
    Role: NBU_Media Device Operator
        Browse
        Suspend
        Cancel
        Read
        Resume
        Delete
    Role: NBU_Executive
        Browse
        Read
    Role: NBU_Database Agent Operator
        Unknown
    Role: NBU_User
        Unknown
    Role: NBU_Unknown
        Unknown
    Role: NBU_Operator
        Browse
        Suspend
        Cancel
        Read
        Resume
        Delete
    Role: NBU_Admin
        Browse
        Delete
        Resume
        Read
        Suspend
        Cancel
    Role: NBU_Security Admin
        Unknown
    Role: NBU_Database Agent Administrator
        Unknown
    Role: Administrators
        Unknown
    Role: Operators
        Unknown
    Role: Applications
```

```
Unknown
Role: NBU_Security Admin
Unknown
. . .
Operation completed successfully.
```

例 6: オブジェクトまたはポリシーの権限の追加と削除

このオプションを指定すると、特定のグループのオブジェクトからすべての権限が削除されます。このオプションを指定すると、特定の役割に指定された権限が、対象となるオブジェクトまたはポリシーに追加されます。

```
# bpbaz -AddPerms Browse,Read,
New,Delete -Group TestGroup1 -Object NBU_RES_Job -server
test.domain.veritas.com
Operation completed successfully.
# bpbaz -ListMainObjects -server
test.domain.veritas.com
NBU_RES_Unknown:
    Role: NBU_User
. . .
NBU_RES_Job:
    Role: NBU_Media Device Operator
        Browse
        Suspend
        Cancel
        Read
        Resume
        Delete
    Role: NBU_Executive
        Browse
        Read
    Role: NBU_Database Agent Operator
        Unknown
    Role: TestGroup1
        Read
        Delete
        New
        Browse
    Role: NBU_User
        Unknown
    Role: NBU_Unknown
        Unknown
    Role: NBU_Operator
```

```
    Browse
    Suspend
    Cancel
    Read
    Resume
    Delete
Role: NBU_Admin
    Browse
    Delete
    Resume
    Read
    Suspend
    Cancel
Role: NBU_Security Admin
    Unknown
Role: NBU_Database Agent Administrator
    Unknown
Role: Administrators
    Unknown
Role: Operators
    Unknown
Role: Applications
    Unknown
Role: NBU_Security Admin
    Unknown
NBU_RES_Service:
    Role: NBU_Unknown
. . .
Operation completed successfully.
# bpbaz -DelPerms -Group
TestGroup1 -Object NBU_RES_Policy -server test.domain.veritas.com
Operation completed successfully.
```

例 7: 認可の確認を実行できるサーバーの指定

この例では、認可の確認を実行できるサーバーを表示することもできます。また、サーバーによる認可の確認の実行の禁止も行います。サーバーによる認可の確認の実行の禁止も行います。

-AllowAuthorization オプションでは、認可の確認を実行できるコンピュータを指定します。セキュリティ管理者は、認可データベースを検証して認可の確認を行うことができるサーバー (マスターまたはメディア) を指定する必要があります。次の各例に、コンピュータによる認可の実行を許可する方法、禁止する方法を示します。

```
# bpbaz -AllowAuthorization
butterball.domain.veritas.com -server test.domain.veritas.com
Operation completed successfully.

# bpbaz -ShowAuthorizers -server
test.domain.veritas.com
=====
Type: User
Domain Type: vx
Domain:NBU_Machines@test.domain.veritas.com
Name: butterball.domain.veritas.com
Operation completed successfully.
# bpbaz --DisallowAuthorization
butterball.domain.veritas.com -server test.domain.veritas.com
Operation completed successfully.
# bpbaz -ShowAuthorizers -server
test.domain.veritas.com
Operation completed successfully.
```

例 8: 初期セキュリティブートストラップの設定

-SetupSecurity オプションは、Az サーバーで root ユーザーで実行する必要があります。ユーザーは、最初の NetBackup セキュリティ管理者のログオン情報を入力する必要があります。

メモ: Az サーバーがインストールされているシステム上の root ユーザーは、常にセキュリティ管理者になります。

```
# bpbaz -SetupSecurity
test.domain.veritas.com -server test.domain.veritas.com
Authentication Broker: test.domain.veritas.com
Authentication port[ Enter = default]:
Domain: domain.veritas.com
Name: ssosa
Password: Authentication type (NIS, NISplus, WINDOWS, vx, unixpwd:
NIS
Operation completed successfully.
```

関連項目

p.234 の [bpbat](#) を参照してください。

bpficorr

bpficorr - 指定したクライアントの NetBackup カタログに存在するスナップショットの情報の表示、および存在しないスナップショットのカタログエントリの削除

概要

```
bpficorr [-media] [-hoursago hours] [-policy policy_name] -client
client_name
bpficorr -rotation -policy policy_name -client client_name -fim
fim_args
bpficorr -delete_snapshot -fragment_id fragment_id -client
client_name [-cnum copy_number] [-ctype MIRROR | NON_MIRROR]
bpficorr -report -clientlist snapshot_client_list_file
```

UNIX システムでは、このコマンドのディレクトリパスは

/usr/opensv/netbackup/bin/admincmd/ です。

Windows システムでは、このコマンドのディレクトリパスは

<install_path>%NetBackup%bin\admincmd% です。

機能説明

bpficorr を実行すると、指定したクライアントの NetBackup カタログに存在するスナップショットが表示されます。**-media** オプションを指定しない場合、bpficorr では、カタログ情報とクライアント上の実際の情報が比較されます。対応するスナップショットがクライアント上に存在しないカタログのエントリはすべて削除されます。このオプションは、クライアント上のスナップショットのファイルの名前が変更されたり、削除されている場合に有効です。

メモ: スナップショットは、NetBackup によって管理されます。スナップショットの名前を変更したり、削除しないでください。変更または削除した場合、データをリストアできなくなります。

bpficorr の出力は、標準出力に出力されます。

このコマンドを実行するには、

管理者権限が必要です。

オプション

- client *client_name*
このオプションは、必須です。このオプションを指定すると、NetBackup によって、指定したクライアントの NetBackup カタログに存在するスナップショットの情報が表示されます。この名前は、NetBackup カタログに表示される名前と一致している必要があります。デフォルトでは、bpficorr を実行すると、すべてのクライアントが検索されます。
- clientlist *snapshot_client_list_file*
- cnum *copy_number*
- ctype MIRROR | NON-MIRROR
- delete_snapshot
- fim *fim_args*
- fragment_id *fragment_id*
- hoursago *hours*
このオプションを指定すると、*n* 時間前 (1 時間以上前) までに書き込まれたイメージが含まれます。デフォルトはすべてのイメージです。
- media
このオプションを指定すると、-client オプションで指定したクライアントの NetBackup カタログに存在するすべてのスナップショットのエントリが表示されます。このリストには、バックアップ ID と各バックアップ ID のメディアの説明が含まれます。
メディアの説明について詳しくは、次を参照してください。『[NetBackup 管理者ガイド Vol. 2](#)』。
- policy *policy_name*
このオプションを指定すると、NetBackup によって、指定したクライアントのポリシーの NetBackup カタログに存在するスナップショットの情報が表示されます。デフォルトは、-client オプションで指定したクライアントが含まれるすべてのポリシーです。
- report
- ローテーション

注意事項

bpficorr は /usr/opensv/netbackup/logs/admin ディレクトリ (UNIX システム) または <install_path>%NetBackup%\logs\admin ディレクトリ (Windows システム) にアクティビティログ情報を書き込みます。このディレクトリ内の情報は、トラブルシューティングに使用できます。

例

例 1 - NetBackup カタログをクライアントの実際のスナップショットと再同期化します。

```
# bpficorr -client lupine
```

例 2 - lupine というクライアントのカタログに存在しているスナップショットを表示します。

```
# bpficorr -media -client lupine
```

次に出力例を示します。

```
Listing frozen image info from NBU catalog
```

```
-----  
backup_id          created          name  
-----  
1 lupine_1034167036 Wed Oct  9 07:37:16 2002  
1 vxvm:32:vxfs:/V1fs:/dev/vx/dsk/oradg/PFI-V1_1034167036  
2 lupine_1033995680 Mon Oct  7 08:01:20 2002  
1vxfs_pfi:34:vxfs:/ora8:VX+NBU+PFI+ORA+2002.10.07.08h01m20s  
3 lupine_1033880459 Sun Oct  6 00:00:59 2002  
1 vxfs_pfi:34:vxfs:/V1fs:VX+NBU+PFI+FS+2002.10.06.00h00m59s
```

bplcatdrinfo

bplcatdrinfo - ディザスタリカバリポリシーのリスト、変更、または設定

概要

```
bplincludepolicy_name [-v] [-M master_server,...] -L | -l [-  
generation]  
bplcatdrinfopolicy_name -set | -modify [-v] [-M master_server,...]  
[-generation generation] [-reason "string"] [-e email] -p path [-u  
user] [-pwd password] [-cp critical_policy_name1critical_policy_name2  
...]
```

UNIX システムでは、このコマンドのディレクトリパスは

/usr/opensv/netbackup/bin/admincmd/ です。

Windows システムでは、このコマンドのディレクトリパスは

<install_path>%NetBackup%bin\admincmd% です。

機能説明

bplcatdrinfo コマンドは、NBU-Catalog 型のポリシー向けのディザスタリカバリポリシーおよびクリティカルポリシーの情報をリスト、設定、および変更します。

このコマンドは、認可済みユーザーが開始できます。

NetBackup による認可について詳しくは、次を参照してください。『[NetBackup セキュリティおよび暗号化ガイド](#)』。

オプション

-cp critical_policy_name1 ...

クリティカルポリシーとして追加する必要があるポリシー名をリストします。

-e email

カタログバックアップ終了時にディザスタリカバリ情報が送信される電子メールアドレスを指定します。

-generation generation

このオプションを指定すると、コマンドがポリシーの特定の世代またはバージョンに対して機能することが確認されます。世代の値は、ポリシーが保存されるたびに大きくなります。bplinfo または bpllist を使用すると、現在の世代の値を表示できます。世代が指定されない場合は、コマンドは現在のバージョンに対して実行されます。

- L
このオプションを指定すると、リストが詳細形式で表示されます。次の例を参照してください。
- l
このオプションを指定すると、表示形式が簡易になり、簡易なリストが作成されます。これは、**raw** 出力モードとも呼ばれます。次の例を参照してください。
- M *master_server,...*
このオプションでは、代替マスターサーバーのリストを指定します。このオプションは、カンマで区切られたホスト名のリストで構成されます。このオプションを指定すると、一覧表示されている各マスターサーバーで bplcatdrinfo が実行されます。リストに示される各マスターサーバーでは、bplcatdrinfo を発行するシステムからのアクセスが許可されている必要があります。マスターサーバーでエラーが発生した場合、その時点で処理が停止します。

bplclients によってリストが生成される場合、そのリストは、このリスト内のすべてのマスターサーバーから戻された情報で構成されます。

bplclients によって、後述のとおりクライアントが追加、削除または変更された場合、その変更はリスト内のすべてのマスターサーバーに反映されます。
- modify
カタログポリシーで指定されたフィールドのみを更新します。指定されていないフィールドは変更されません。
- p *path*
カタログバックアップ実行時にディザスタリカバリ情報が保存されるディスクパスを指定します。
- policy_name*
ディザスタリカバリ情報を設定、変更、またはリストするポリシーの名前を指定します。
- pwd *password*
パス (-p) へのアクセスに必要なパスワードを指定します。-u オプションはユーザー ID を指定します。
- reason "*string*"
このコマンド処理を選択する理由を示します。理由の文字列は監査レポートに取得されて表示されます。この文字列は二重引用符 ("...") で囲んでください。文字列が 512 文字を超えないようにしてください。それはハイフンの文字 (-) から始まり単一の引用符 (!) を含む場合がありません。
- set
カタログポリシーの指定されたフィールドの更新を変更します。指定されていないフィールドは消去されます。

-U
このオプションを指定すると、リストがユーザー形式で表示されます。この出力形式は -L とまったく同じです。

-u *user*
パス (-p) にアクセスするためにパスワード (-pwd) と共に使用するユーザー ID です。

-v
このオプションを指定すると、詳細モードが選択されます。このオプションを指定して bplcatdrinfo を実行すると、デバッグに使用するための追加情報がログに書き込まれます。追加情報は NetBackup 管理の 日次デバッグログに記録されます。このオプションは、デバッグログ機能が有効になっている場合、つまり次のディレクトリが定義されている場合にだけ有効です。

UNIX systems: /usr/opensv/netbackup/logs/admin

Windows systems: *install_path*\NetBackup\logs\admin

例

NBU-Catalog ポリシー catpol 向けのディザスタリカバリ情報のパス、ユーザー名、パスワード、電子メール、および 4 つのクリティカルポリシーを設定します。次に詳細形式 (-L) および簡易形式 (-l) で catpol のカタログディザスタリカバリの構成をリストします。

```
# bplcatdrinfo catpol -set -e test@symantec.com -p /drx
-u test -pwd passwd -cp pol1 pol2 pol3 pol4

# bplcatdrinfo catpol -L
Catalog Disaster Recovery Configuration:
  Email Address:   test@symantec.com
  Disk Path:      /drx
  User Name:      test
  Pass Word:      xxxx
Critical policy:
  pol1
  pol2
  pol3
  pol4

# bplcatdrinfo catpol -l
DR_EMAIL test@symantec.com
DR_PATH /drx
DR_MEDIA_ID *NULL*
DR_DENSITY 0
```

```
DR_USER_NAME test  
DR_PASSWORD 1  
DR_CRITICAL_POLICY pol1 pol2 pol3 pol4
```

関連項目

- p.274 の [bpplinclude](#) を参照してください。
- p.281 の [bpplinfo](#) を参照してください。
- p.296 の [bppllist](#) を参照してください。
- p.327 の [bppolicynew](#) を参照してください。

bplclients

bplclients – NetBackup ポリシー内のクライアントの管理

概要

```
bplclients
bplclientspolicy_name | -allunique [-pt policy_type] [-L | -l | -U
| -noheader] [-M master_server,...] [-v]
bplclientspolicy_name -add host_name hardware_os [-priority priority]
[disable_meta_indexing] [-M master_server,...] [-v] [-generation
generation] [-reason "string"]
bplclientspolicy_name -delete host_name ... [-M master_server,...]
[-v] [-generation generation] [-disable_meta_indexing] [-reason
"string"]
bplclientspolicy_name -modify host_name [-hardware hardware] [-os
os] [-priority priority] [-M master_server,...] [-v] [-generation
generation] [-disable_meta_indexing] [-reason "string"]
bplclientspolicy_name -rename old_client_name new_client_name [-os
os] [-priority priority] [-hardware hardware] [-generation generation]
[-disable_meta_indexing] [-reason "string"]
UNIX システムでは、このコマンドのディレクトリパスは
/usr/opensv/netbackup/bin/admincmd/ です。
Windows システムでは、このコマンドのディレクトリパスは
<install_path>%NetBackup%\bin\admincmd\ です。
```

機能説明

bplclients によって、次のいずれかの操作が実行されます。

- クライアントのリストを生成します。
- 新しいクライアントをポリシーに追加します。
- ポリシーから、クライアントのリストを削除します。
- ポリシー内の既存のクライアントを変更します。

-add、-delete および -modify オプションを指定して bplclients を実行すると、クライアント変更の要求が NetBackup に送信された後、すぐにシステムプロンプトに戻ります。変更が正常に終了したかどうかを判断するには、bplclients を再度実行して、更新されたクライアント情報を表示します。

リストのオプションを使用する場合、リストはクライアント名のアルファベット順で表示されず、クライアントのエントリは、それぞれ 1 行で表示されます。また、このエントリは各クライアントに 1 つ存在します。

このコマンドは、認可済みユーザーが開始できます。

NetBackup による認可について詳しくは、次を参照してください。『[NetBackup セキュリティおよび暗号化ガイド](#)』。

オプション

bplclients には、2 つの形式があります。使用する bplclients の形式により、bplclients で使用するオプションが決定されます。

bplclients の 1 番目の形式では、オプションは指定されず、すべてのポリシーのクライアント情報を含むリストが生成されます。

bplclients の 2 番目の形式では、すべてのポリシーまたはある 1 つのポリシーのクライアント情報を含むリストが生成されます。この形式に適用されるオプションを次に示します。

`-add host_name hardware os [priority]`

このオプションを指定すると、クライアントがポリシーに追加されます。ローカルシステムにすでに最大数のクライアントが定義されている場合、エラーが戻されます。インストール時のデフォルトのクライアントの最大数は、NetBackup Enterprise Server で無制限、NetBackup Server で 4 です。ホスト名、ハードウェア、オペレーティングシステムを指定します。現在、-priority オプションは実装されていません。

`-delete host_name ...`

このオプションを指定すると、ポリシーから 1 つ以上のクライアントが削除されます。一度の操作で、最大 20 のクライアントを削除できます。クライアントは、ホスト名をカンマで区切った形式のリストとして表示されます。

`-disable_meta_indexing`

このオプションを指定すると、ポリシーから 1 つ以上のクライアントが削除されます。一度の操作で、最大 20 のクライアントを削除できます。クライアントは、ホスト名をカンマで区切った形式のリストとして表示されます。

`-generation generation`

このオプションを指定すると、コマンドがポリシーの特定の世代またはバージョンに対して機能することが確認されます。世代の値は、ポリシーが保存されるたびに大きくなります。bplinfo または bpllist を使用すると、現在の世代の値を表示できます。世代が指定されない場合は、コマンドは現在のバージョンに対して実行されます。

-hardware hardware

このオプションでは、クライアントのハードウェアを指定します。バックアップポリシーの管理ユーティリティのクライアントにポリシーを追加するために使用するダイアログボックスで、ハードウェア形式の 1 つを選択します。

-L

このオプションを指定すると、リストが詳細形式で表示されます。リストの最初の 2 行のヘッダーは表示されません。このヘッダーは、それぞれのクライアントの行に埋め込まれています。各クライアントの行には、次のフィールドが含まれます。

クライアント/HW/OS/優先度 (ヘッダー)

クライアント名 (Client Name)

ハードウェア形式 (Hardware type)

オペレーティングシステム (Operating system)

優先度 (Priority)

その他の 4 つのフィールドは無視できます。これらのフィールドは、未使用であるかまたは内部処理に使用されます。

-l

このオプションを指定すると、表示形式が簡易になり、簡易なリストが作成されます。これは、**raw** 出力モードとも呼ばれます。リストの最初の 2 行のヘッダーは表示されません。このヘッダーは、それぞれのクライアントの行に埋め込まれています。リストは次のフィールドから成ります。

フィールド 1 = クライアント名

フィールド 2 = ハードウェア。クライアントのオペレーティングシステムの種類。例: **Linux**

フィールド 3 = クライアントのオペレーティングシステム名。例: **RedHat**

フィールド 4 = 優先度。指定したポリシーでのクライアントの優先度。

フィールド 5 = メタインデックス付けの無効化。0 = メタインデックス作成を無効化しない、1 = メタインデックス作成を無効化する

フィールド 6 から 8 は使いません。

このオプションは、カスタマイズされたレポート形式にリストを再生成するスクリプトまたはプログラムに対して有効です。

-M master_server,...

このオプションでは、代替マスターサーバーのリストを指定します。このオプションは、カンマで区切られたホスト名のリストで構成されます。このオプションを指定すると、一覧表示されている各マスターサーバーで bplclients が実行されます。リストに示される各マスターサーバーでは、bplclients を発行するシステムからのアクセ

スが許可されている必要があります。マスターサーバーでエラーが発生した場合、その時点で処理が停止します。

bpbclients によってリストが生成される場合、そのリストは、このリスト内のすべてのマスターサーバーから戻された情報で構成されます。

bpbclients によって、後述のとおりクライアントが追加、削除または変更された場合、その変更はリスト内のすべてのマスターサーバーに反映されます。

`-modify host_name ...`

このオプションを指定すると、ポリシー内のクライアントの属性が変更されます。変更可能なクライアントは、事前にポリシーに追加されているクライアントです。クライアント名に続く属性値は、このクライアントに前に設定された同等の属性値を置換します。1 つ以上のクライアントの属性を変更する必要があります。現在、`-priority` は実装されていません。

`-noheader`

このオプションを指定すると、リストにヘッダーが含まれません。リストには、各クライアントが 1 行で表示され、ハードウェア、オペレーティングシステムおよびクライアント名が表示されます。

`-os os`

このオプションでは、クライアントに異なるオペレーティングシステムを指定します。バックアップポリシーの管理ユーティリティのクライアントにポリシーを追加するために使用するダイアログボックスで、オペレーティングシステムの 1 つを選択します。ハードウェアオプションおよびオペレーティングシステムオプションに指定した値は、有効な組み合わせとして構成されている必要があります。

`policy_name | -allunique [-pt policy_type]`

policy_name には、ポリシー名を指定します。そのポリシーのクライアント情報だけが表示されます。

`-allunique` で `-pt policy_type` を指定しない場合、マスターサーバー上の NetBackup に定義されたすべてのポリシーのクライアント情報が表示されます。

`-allunique -pt policy_type` で、**policy_type** に特定のポリシー形式 (Sybase など) を指定した場合、コマンドを実行すると、その形式のポリシーに属するクライアント情報だけが表示されます。

コマンドラインに **policy_type** オプションと `-allunique` オプションのいずれも指定しない場合、すべてのポリシーのクライアント情報が表示されます。このオプションを使う場合は、コマンドラインで最初に指定する必要があります。

`-pt policy_type`

このオプションでは、次のいずれかの文字列を指定して、ポリシー形式を指定します (デフォルトは **Standard** です)。

AFS
DataStore
DataTools-SQL-BackTrack
DB2
Enterprise-Vault
FlashBackup
Informix-On-BAR
Lotus-Notes
MS-Exchange-Server
MS-Hyper-V
MS-SharePoint
MS-SQL-Server
MS-Windows
NBU-Catalog
NDMP
NetWare
Oracle
OS/2
PureDisk-Export
SAP
Split-Mirror
Standard
Sybase
Vault
VMware

-priority *priority*
実装されていません。

policy_name
このオプションでは、クライアントを含むポリシーを指定します。このオプションを指定する場合、コマンドラインの最初に指定する必要があります。

-reason "*string*"
このコマンド処理を選択する理由を示します。理由の文字列は監査レポートに取得されて表示されます。この文字列は二重引用符 ("...") で囲んでください。文字列が **512** 文字を超えないようにしてください。それはハイフンの文字 (-) から始まり単一の引用符 (') を含む場合がありません。

-rename *old_client_name new_client_name*
old_client_name オプションでは現行のクライアント名、*new_client_name* オプションでは新しいクライアント名を指定します。

-U

このオプションを指定すると、リストがユーザー形式で表示されます。リストには、各クライアントが 1 行で表示され、ハードウェア、オペレーティングシステムおよびクライアント名が表示されます。デフォルトの形式では、リストの最初の部分に 2 行のヘッダーが含まれます。

-v

このオプションを指定すると、詳細モードが選択されます。このオプションを指定して `bplclients` を実行すると、デバッグに使用するための追加情報がログに書き込まれます。追加情報は **NetBackup** 管理の日次デバッグログに記録されます。このオプションは、デバッグログ機能が有効になっている場合、つまり次のディレクトリが定義されている場合にだけ有効です。

```
UNIX systems: /usr/opensv/netbackup/logs/admin
```

```
Windows systems: install_path¥NetBackup¥logs¥admin
```

このオプションを指定する場合、コマンドラインで、`-add`、`-delete` または `-modify` オプションより前に指定する必要があります。

例

例 1 - マスターサーバー上でコマンドを実行中に、マスターサーバーに認識されているクライアントを表示します。

```
# bplclients
Hardware      OS              Client
-----
Novell        Novell 6.5      marge
Windows-x64   Windows2008     marmot
HP9000-800    HP-UX 11.23     squash
```

このコマンドをクライアント `hatt` 上で実行しても、同じ結果が得られます。

例 2 - ポリシー `onepolicy` に定義されたクライアントを表示します。

```
# bplclients onepolicy
Hardware      OS              Client
-----
Solaris       Solaris10       jeckle
RS6000        AIX5            streaky
HP9000-800    HP-UX 11.31     shark
```

例 3 - マスターサーバー `serv1` と `serv2` 上のポリシー `twopolicy` に、クライアント `marmot` を追加します。lynx のハードウェアは **HP9000**、オペレーティングシステムは **HP-UX 11.23** です。デフォルトの優先度が使われます。

```
# bplclients twopolicy -M serv1,serv2 -add lynx HP9000 HP-UX 11.23
```

例 4 - マスターサーバー **serv1** および **serv2** 上のポリシー **twopolicy** から、クライアント **marmot** および **vole** を削除します。

```
# bplclients twopolicy -M serv1,serv2 -delete marmot vole
```

例 5 - マスターサーバー **hatt** 上でコマンドを実行中に、マスターサーバー **beaver** 上のポリシー **BackTrack** のクライアント情報を表示します。

```
# bplclients BackTrack -M beaver
Hardware          OS                      Client
-----
Solaris           Solaris10              saturn
```

例 6 - **my_policy** という名前のポリシーに、1 つのクライアントが定義されていると想定します。クライアント名は **pear**、オペレーティングシステムは **Solaris 10**、ハードウェアは **Solaris** です。

```
# bplclients my_policy -rename pear apple -os MacOS -hardware Mac
```

このコマンドを実行すると、**my_policy** 内のクライアント **pear** の名前が **apple** に変更されます。また、オペレーティングシステムも **Solaris** から **MacOS** へ、ハードウェアも **Solaris** から **Macintosh** へ変更されます。

戻り値

終了状態が **0** (ゼロ) の場合は、コマンドが正常に実行されたことを意味します。

終了状態が **0** (ゼロ) 以外の場合は、エラーが発生したことを意味します。

管理ログ機能が有効になっている場合、終了状態は、次のログディレクトリ内の管理日次ログに書き込まれます。

UNIX システムの場合: `/usr/opensv/netbackup/logs/admin`

Windows システムの場合: `install_path¥NetBackup¥logs¥admin`

次の形式が使用されます。

```
bplclients: EXIT status = exit status
```

エラーが発生した場合、このメッセージの前に診断が表示されます。

ファイル

UNIX システムの場合:

```
/usr/opensv/NetBackup/logs/admin/*  
/usr/opensv/NetBackup/db/policy/policy_name/clients
```

Windows システムの場合:

```
install_path¥NetBackup¥logs¥admin¥*  
install_path¥NetBackup¥db¥policy¥policy_name¥clients
```

関連項目

p.281 の [bpblicinfo](#) を参照してください。

bpldelete

bpldelete – NetBackup データベースからポリシーを削除

概要

```
bpldelete polycyname [-verbose] [-M master_server,...] [-generation generation] [-reason "string"]
```

UNIX システムでは、このコマンドのディレクトリパスは

/usr/opensv/netbackup/bin/admincmd/ です。

Windows システムでは、このコマンドのディレクトリパスは

<*install_path*>%NetBackup%bin%admincmd% です。

機能説明

bpldelete を実行すると、NetBackup データベースからポリシーが削除されます。

このコマンドは、すべての認可済みユーザーが実行できます。

NetBackup による認可について詳しくは、次を参照してください。『[NetBackup セキュリティおよび暗号化ガイド](#)』。

オプション

-generation *generation*

このオプションを指定すると、コマンドがポリシーの特定の世代またはバージョンに対して機能することが確認されます。世代の値は、ポリシーが保存されるたびに大きくなります。bplinfo または bpllist を使用すると、現在の世代の値を表示できます。世代が示されない場合は、コマンドは現在のバージョンに対して実行されません。

-M *master_server,...*

このオプションを指定すると、特定のマスターサーバーからポリシー情報が削除されます。たとえば、マスターサーバー Saturn からポリシー MWF_PM を削除するには、次のように入力します。

```
bpldelete MWF_PM -M Saturn
```

polycyname

NetBackup データベースから削除するポリシーを指定します。

-reason "*string*"

このコマンド処理を選択する理由を示します。入力する理由の文字列は取得され、監査レポートに表示されます。この文字列は二重引用符 ("...") で囲んでください。

文字列が **512** 文字を超えないようにしてください。それはハイフンの文字 (-) から始まり単一の引用符 (!) を含む場合がありません。

-verbose

このオプションを指定すると、ログの詳細モードが選択されます。

bpplinclude

bpplinclude – NetBackup ポリシーによって自動バックアップが行われたファイルのリストの管理

概要

```
bpplincludepolicy_name [-v] [-M master_server,...] -L | -l  
[-generation generation]  
bpplincludepolicy_name [-v] [-M master_server,...] [-generation  
generation] -add pathname... | -add -f filename | -addtoquery  
query_string... -addtoquery -f filename | -delete pathname... |  
-delete -f filename | -deletefromquery query_string... |  
-deletefromquery -f filename | -modify old_pathname new_pathname...  
[-reason "string"]
```

UNIX システムでは、このコマンドのディレクトリパスは

/usr/opensv/netbackup/bin/admincmd/ です。

Windows システムでは、このコマンドのディレクトリパスは

<install_path>%NetBackup%\bin\admincmd\ です。

機能説明

bpplinclude を実行すると、NetBackup ポリシーのポリシーのファイルリストを管理できます。このポリシーのファイルリストには、NetBackup によってポリシーの自動バックアップが実行されたときにバックアップされたファイルが含まれます。ユーザーバックアップまたはユーザーアーカイブの場合、ユーザーが操作を開始するときにファイルを選択するため、このポリシーのファイルリストは適用されません。

bpplinclude では、次のいずれかの操作が実行されます。

- ポリシーのファイルリストにパス名を追加します。
- ポリシーのファイルリストからパス名を削除します。
- ポリシーのファイルリスト内のパス名を変更します。
- ポリシー用のファイルリストを表示します。

-add、-delete および -modify オプションの指定には、パス名のリストを含めます。パス名のリストは、bpplinclude コマンドラインの最後に指定する必要があります。このパス名には、ファイルシステムのルートから目的の場所への絶対パスを指定する必要があります。

クライアント形式別の絶対パス名の構文については、次を参照してください。『NetBackup 管理者ガイド Vol. 1』。

パスの最後の部分には、ファイル名、ディレクトリ名またはワイルドカードを指定できます。パス名は、引用符で囲むことができます。パス名に特殊文字が含まれる場合、またはパス名をワイルドカードで指定した場合は、引用符で囲みます。

ファイルパスの規則では、入力したディレクトリまたはファイルが存在するかどうかは検証されません。**NetBackup** では、検出されたファイルだけがバックアップされるため、すべてのクライアント上に、リスト内のすべてのエントリが存在する必要はありません。

データベース拡張機能の場合、入力エントリがスクリプトになります。**NetBackup** では、これらのスクリプトがバックアップの実行中に実行されます。詳しくは、拡張機能製品に付属する **NetBackup** のマニュアルを参照してください。

特定のポリシー属性 ([複数のデータストリームを許可する (**Allow Multiple Data Streams**) など) およびその拡張機能製品 (**NetBackup for NDMP** など) では、ポリシーのファイルリストに追加されたエントリは、パス名でなく指示句である場合があります。

次を参照してください。『**NetBackup 管理者ガイド Vol. 1**』または、拡張製品用 **NetBackup** ガイドを参照してください。

-l オプションおよび -L オプションを指定すると、ポリシーのファイルリストとほぼ同じ内容の表示が生成されます。

bpplinclude のエラーメッセージは、標準エラー出力 (stderr) に送信されます。また、bpplinclude のデバッグログは、現在の日付の **NetBackup** 管理ログファイルに送信されます。

このコマンドは、認可済みユーザーが開始できます。

NetBackup による認可について詳しくは、次を参照してください。『**NetBackup セキュリティおよび暗号化ガイド**』。

オプション

-add *pathname* ...

このオプションを指定すると、ポリシーのファイルリストに、指定したパス名が追加されます。パス名には、ディレクトリ、ファイル名、スクリプトまたは指示句を指定できます。

パス名に、空白 (" ") やワイルドカードなどの特殊文字が含まれる場合、パス名を引用符 ("") で囲む必要があります。2つのパス名を区切るには、カンマではなく空白を使用します。bpplinclude では、カンマはパス名の一部であると解釈され、カンマで区切られた複数のパス名が、カンマが埋め込まれた 1つのパス名に連結されます。このコマンドでは、構文またはパス名の存在が検証されません。

-add -f *filename*

このオプションを指定すると、ポリシーのファイルリストに、**filename** で指定したファイルがすべて追加されます。

`-addtoquery query_string...`

指定したクエリー文字列をポリシーのクエリー規則の最後に追加します。存在しない場合はクエリーを作成します。引用符 (") はバックスラッシュ (\) を使ってエスケープする必要があります。

詳細と例については、次を参照してください。『[NetBackup for VMware ガイド](#)』。

`-addtoquery -f filename`

指定したファイルからクエリー規則にエンTRIESを追加します。存在しない場合はクエリーを作成します。ファイルにある引用符 (") はエスケープする必要はありません。

詳細と例については、次を参照してください。『[NetBackup for VMware ガイド](#)』。

`-delete pathname`

このオプションを指定すると、ポリシーのファイルリストから、指定したパス名が削除されます。パス名のリストの構文については、`-add` オプションを参照してください。ポリシーのファイルリストからパス名を削除しても、そのパス名に対するすべてのバックアップまたはアーカイブのリカバリを実行できます。このオプションを指定する場合、コマンドラインの最後に指定する必要があります。

`-delete -f filename`

ポリシーのファイルリストから、**filename** に指定したファイルを削除します。

`-deletefromquery query_string...`

ポリシーのクエリー規則から指定したクエリー文字列を削除します。

詳細と例については、次を参照してください。『[NetBackup for VMware ガイド](#)』。

`-deletefromquery -f filename`

クエリー規則からファイルエンTRIESを削除します。

詳細と例については、次を参照してください。『[NetBackup for VMware ガイド](#)』。

`-generation generation`

このオプションを指定すると、コマンドがポリシーの特定の世代またはバージョンに対して機能することが確認されます。世代の値は、ポリシーが保存されるたびに大きくなります。bplinfo または bpllist を使用すると、現在の世代の値を表示できます。世代が示されない場合は、コマンドは現在のバージョンに対して実行されます。

`-L`

このオプションを指定すると、ポリシーのファイルリストの内容が詳細形式で表示されます。

`-l`

このオプションを指定すると、ポリシーのファイルリストの内容が簡易形式で表示されます。

メモ: `-l` と `-L` の表示は類似しています。

`-modify {old_path_name new_path_name}`

このオプションを指定すると、ポリシーのファイルリスト内のエントリが変更されます。値は、パス名の対 (`{old_path_name new_path_name}`) のリストとして指定します。ポリシーのファイルリスト内で、それぞれの対のパス名が `old_path_name` から `new_path_name` に置換されます。**old_path_name** と一致するリストのエントリが存在しない場合、**new_path_name** で指定した名前はポリシーのファイルリストに追加されません。パス名の構文については、「`-add path_name`」を参照してください。リストのエントリを区切るには、パス名の対内およびパス名とパス名の間のいずれにも、空白を使用します。このオプションを指定する場合、コマンドラインの最後に指定する必要があります。

`-M master_server,...`

このオプションでは、マスターサーバーのリストを指定します。このリストは、カンマで区切られたホスト名のリストです。このオプションを指定すると、一覧表示されている各マスターサーバーでコマンドが実行されます。マスターサーバーでは、コマンドを発行するシステムからのアクセスが許可されている必要があります。マスターサーバーにエラーが発生した場合、その時点でリスト内の処理が停止します。デフォルトは、コマンドが入力されるシステムのマスターサーバーです。

`policy_name`

ポリシーのファイルリストを設定するポリシーを指定します。

`-reason "string"`

このコマンド処理を選択する理由を示します。入力する理由の文字列は取得され、監査レポートに表示されます。この文字列は二重引用符 ("`...`") で囲んでください。文字列が **512** 文字を超えないようにしてください。それはハイフンの文字 (`-`) から始まり単一の引用符 (`'`) を含む場合があります。

`-v`

このオプションを指定すると、ログの詳細モードが選択されます。このオプションは、デバッグログ機能が有効になっている場合、つまり次のディレクトリが定義されている場合にだけ有効です。

UNIX systems: `/usr/opensv/netbackup/logs/admin`

Windows systems: `install_path¥NetBackup¥logs¥admin`

例

例 1- 別のマスターサーバー `kiwi` でバックアップを実行中に、マスターサーバー `plim` 上のポリシー `oprdoc_policy` のポリシーファイルリストを表示します。

```
# bpplinclude oprdoc_policy -L -M plim
```

```
Include: /oprdoc (UNIX systems)

Include: c:¥oprdoc (Windows systems)
```

例 2 - ワイルドカードのエントリを 1 つ含むパス名の追加と削除を行い、bpplinclude がどのようにワイルドカードを解釈するかを示します。

```
UNIX systems:
# bpplinclude mkbpolicy -add /yap /y*
# bpplinclude mkbpolicy -L
    Include: yap
    Include: /y*
# bpplinclude mkbpolicy -delete /y*
# bpplinclude mkbpolicy -L
    Include: /yap

Windows systems:
# bpplinclude mkbpolicy -add C:¥yap C:¥y*
# bpplinclude mkbpolicy -L
    Include: C:¥yap
    Include: C:¥y*/y*
# bpplinclude mkbpolicy -delete C:¥y*
# bpplinclude mkbpolicy -L
    Include: C:¥yap
```

メモ: -delete にワイルドカードエントリ y* を指定しても、bpplinclude では yap と y* の両方を削除することとは解釈されません。mkbpolicy のインクルードリストからは、y* だけが削除されます。このワイルドカードの解釈は、実際のバックアップで NetBackup によってバックアップを作成するファイルが選択されるときに実行されます。

例 3 - ポリシーのポリシーファイルリストに 2 つのエントリを追加し、その後それらのエントリを変更します。

```
UNIX systems:
# bpplinclude mkbpolicy -add "/ima file" "/ura file"
# bpplinclude mkbpolicy -L
    Include: /ima file
    Include: /ura file
bpplinclude mkbpolicy -modify "/ima file" "/ima file 2" "/ura file"
"/ura file 2"
bpplinclude mkbpolicy -L
    Include: /ima file 2
    Include: /ura file 2
```

```
Windows systems:
# bpplinclude mkbpolicy -add "C:¥ima file" "C:¥ura file"
# bpplinclude mkbpolicy -L
    Include: C:¥ima file
    Include: C:¥ura file
# bpplinclude mkbpolicy -modify "C:¥ima file" "C:¥ima file 2"
"C:¥ura file" "C:¥ura file 2"
# bpplinclude mkbpolicy -L
    Include: C:¥ima file 2
    Include: C:¥ura file 2
```

例 4 - ポリシー rc (UNIX クライアント) のポリシーファイルリストに raw パーティションを追加します。デバイスへのフルパス名を使用します (コマンドは、改行せずにすべてを 1 行で入力します)。

```
bpplinclude rc -add /devices/sbus@2,0/dma@2,81000/esp@2,80000/
sd@6,0:h,raw
```

UNIX raw パーティションについて詳しくは、次を参照してください。『[NetBackup 管理者ガイド Vol. 1](#)』。

例 5 - ポリシー mkb_policy のポリシーファイルリストを表示します。

```
# bpplinclude mkb_policy -l

UNIX systems:
    INCLUDE /etc/services
    INCLUDE /etc/aliases
    INCLUDE /usr/bin

Windows systems:
    INCLUDE C:¥services
    INCLUDE C:¥aliases
    INCLUDE C:¥Programs
```

例 6 - ポリシー 1 のクエリー規則の値リストに vm17 を追加します。

```
# bpplinclude policy1 -addtoquery ,¥"vm17¥"
```

例 7 - ポリシーからクエリーを削除します。

```
# bpplinclude policy1 -deletefromquery -f qfile1
```

ファイル

UNIX システムの場合:

```
/usr/opensv/netbackup/logs/admin/*  
/usr/opensv/netbackup/db/policy/policy_name/includes
```

Windows システムの場合:

```
install_path%NetBackup%logs%admin%*  
install_path%NetBackup%dv%policy%policy_name%includes
```

関連項目

- p.264 の [bpplclients](#) を参照してください。
- p.281 の [bpplinfo](#) を参照してください。
- p.361 の [bpschedule](#) を参照してください。
- p.272 の [bppldelete](#) を参照してください。
- p.296 の [bppllist](#) を参照してください。

bpplinfo

bpplinfo – NetBackup のポリシーの属性の管理または表示

概要

```
bpplinfo policy_name -L | -l | -U [-v] [-M master_server,...]
bpplinfo policy_name -set | -modify [-v] [-M master_server,...]
[-reason "string"] [-generation generation] [-active | -inactive]
[-pt policy_type] [-job_subtype sub_type] [-ut] [-ef effective_time]
[-residence label] [-pool label] [-priority number] [-rfile flag]
[-blkincr flag] [-multiple_streams flag] [-keyword "keyword phrase"]
[-encrypt flag] [-collect_tir_info value] [-compress flag] [-crossmp
flag] [-follownfs flag] [-policyjobs max_jobs] [-chkpt flag]
[-chkpt_intrvl interval] [-collect_bmr_info flag]
[-application_consistent flag] [-sg server_group | *ANY* | *NONE*]
[-data_class class | *NULL*] [-res_is_stl 0 | 1]
[-granular_restore_info 0 | 1] [-ignore_client_direct 0 | 1]
[-use_accelerator 0 | 1] [-application_discovery 0 | 1]
[-discovery_lifetime seconds] [-ASC_apps_attr
(exchange:,truncatelog=1 | exchange:,mssql:,sharepoint:)]
[-enable_meta_indexing (0 | 1) "index_server_name"] [-optimized_backup
0 | 1] [-ExchangeSource (0-2) [-Exchange2010Server server,... ]
UNIX システムでは、このコマンドのディレクトリパスは
/usr/opensv/netbackup/bin/admincmd/ です。
Windows システムでは、このコマンドのディレクトリパスは
<install_path>%NetBackup%bin¥admincmd¥ です。
```

機能説明

bpplinfo を実行すると、NetBackup ポリシーの属性値を初期化、変更または表示できます。このコマンドは、認可済みユーザーが開始できます。

NetBackup による認可については、次を参照してください。『[NetBackup セキュリティおよび暗号化ガイド](#)』。

bpplinfo には、2 つの形式があります。bpplinfo と同時に指定するオプションは、この bpplinfo で使用する形式によって異なります。

bpplinfo を 1 番目の形式で実行すると、ポリシー情報が表示されます。-L、-l、-U オプションは違った方法でポリシー情報をリストします。

bpplinfo の第 2 形式はポリシー属性を初期化するか、または修正します。

- `-set` を指定すると、ポリシーの属性がデフォルトの値に初期化 (または再初期化) されます。ただし、同じコマンドラインで指定した属性はその対象となりません。
- `-modify` は現在のコマンドラインで指定されたポリシー属性を修正します。現在のコマンドラインのポリシー属性の残りは変わらずに残ります。

警告: ポリシー属性を修正するには、`-modify` オプションを使ってください。このオプションはコマンドラインで指定する属性のみ影響します。コマンドラインで指定されているものを除いて、デフォルト値にすべての属性をリセットする `-set` オプションをどのように使うかに注意してください。1 つまたは 2 つの属性を変更するために `-set` を使うと、指定されていない属性を誤ってデフォルト値に戻す可能性があります。

オプション

`policy_name -L | -l | -U`

このオプションを指定すると、指定したポリシーの情報が表示されます。このオプションは必須です。

`-L` を指定すると、表示形式が詳細になり、`policy_attribute:value` の形式で、各行に 1 つのポリシー属性が表示されます。値は、数値および名前の両方の形式で指定できます。リストのフィールドに含まれる属性は次のとおりです。

ポリシー形式 (Policy Type)

生成 (Generation)

有効 (Active)

NFS マウントをたどる (Follow NFS Mounts) (NetBackup Enterprise Server だけに適用されます。)

クロスマウントポイント (Cross Mount Points)

クライアントでの圧縮 (Client Compress)

TIR 情報の収集 (Collect TIR Info)

ポリシーの優先度 (Policy Priority)

拡張セキュリティ情報 (Ext Security Info)

raw 形式のファイルのリストア (File Restore Raw)

クライアントでの暗号化 (Client Encrypt)

最大ジョブ数/ポリシー (Max Jobs/Policy)

複数のデータストリーム (Mult. Data Stream)

スナップショット方式 (Snapshot Method)

スナップショット方式の引数 (Snapshot Method Arguments)

オフホストバックアップを実行する (Perform offhost backup)

バックアップコピー (Backup Copy)

データムーバーの使用 (Use data mover)

データムーバーの形式 (Data mover type)

代替クライアントの使用 (Use alternate client)

代替クライアント名 (Alternate Client Name)

仮想マシンの使用 (Use Virtual Machine)

Hyper-V サーバー (Hyper-V Server)

インスタントリカバリの有効化 (Enable Instant Recovery)

ディザスタリカバリ (Disaster Recovery)

BMR 情報の収集 (Collect BMR Info)

最大フラグメントサイズ (Max Frag Size)

チェックポイントから再開 (Checkpoint Restart)

位置情報 (Residence)

ボリュームプール (Volume pool)

共有グループ (Share Group)

データの分類 (Data Classification)

位置情報はストレージライフサイクルポリシー (Residence is Storage Lifecycle Policy)

個別リストア (Granular Restore)

生成 (Generation)

-1 を指定すると、表示形式が簡易になり、簡易なリストが生成されます。このオプションは、カスタマイズされたレポート形式にリストを再生成するスクリプトまたはプログラムに対して有効です。簡易形式のリストには、指定したポリシーに対する次の情報が含まれます。

1 行目: "INFO"、client_type、follow_nfs_mounts、client_compress、priority、proxy_client、client_encrypt、disaster recovery、max_jobs_per_policy、cross_mount_points、max_frag_size、active、collect_tir_info、block_incr、ext_sec_info、i_f_r_f_r、streaming、frozen_image、backup_copy、effective_date、policy ID、number_of_copies、checkpoint、chkpt_interval、policy_info_unused1、pfi_enabled、offhost_backup、use_alt_client、use_data_mover、data_mover_type、collect_bmr_info、res_is_ss、granular_restore_info、job_subtype

2 行目: "KEY"、キーワード

3 行目: "BCMD"、バックアップコマンド

4 行目: "RCMD"、リストアコマンド

5 行目: "RES"、位置情報

6 行目: "POOL"、プール

7 行目: "FOE"、未使用のフィールド

-u を指定すると、表示形式がユーザーになり、*policy_attribute: value* の形式で、各行に 1 つのポリシー属性が表示されます。このリストは -L のリストに類似していますが、含まれるフィールドの数が少なくなります。

-v

このオプションを指定すると、詳細モードが選択されます。このオプションを指定して bpplinfo を実行すると、デバッグに使用するための追加情報がログに書き込まれます。追加情報は NetBackup 管理の日次デバッグログに記録されます。このオプションは、NetBackup でデバッグログ機能が有効になっている場合、つまり次のディレクトリが定義されている場合にだけ有効です。

```
UNIX systems: /usr/opensv/netbackup/logs/admin
```

```
Windows systems: install_path¥NetBackup¥logs¥admin
```

-M master_server,...

このオプションでは、代替マスターサーバーのリストを指定します。このリストは、カンマで区切られたホスト名のリストです。このオプションを指定すると、一覧表示されている各マスターサーバーで bpplinfo が実行されます。リストに示される各マスターサーバーでは、bpplinfo を発行するシステムからのアクセスが許可されている必要があります。マスターサーバーでエラーが発生した場合、その時点で処理が停止します。

bpplinfo の表示形式では、レポートは、リスト内のすべてのマスターサーバーから戻された情報で構成されます。bpplinfo を実行すると、これらの各マスターサーバーに対して問い合わせが発行されます。マスターサーバーからは、ポリシーカタログの情報が戻されます。

bpplinfo のポリシー定義形式では、ポリシーはリスト内の各マスターサーバーで作成または変更されます。

デフォルトでは、bpplinfo を実行するシステムのマスターサーバーです。

bpplinfo を 2 番目の形式で実行すると、ポリシーの属性値が初期化または変更されません。この形式に適用されるオプションを次に示します。

メモ: すべてのオプションが、すべてのポリシー形式に適用されるわけではありません。たとえば、ポリシー形式が **MS-Windows** の場合、bplinfo で指定可能なオプションは `-compress` と `-crossmp` です。bplinfo が終了すると、**0 (ゼロ)** の状態に戻されます。ただし、**NetBackup** では、**MS-Windows** ポリシー形式のポリシーは、オプションが設定されていないものとして処理されます。

`-active` | `-inactive`

このオプションを指定すると、ポリシーが有効または無効に設定されます。ポリシーが有効な場合、**NetBackup** ではすべての自動スケジュールが実行され、ユーザー主導のバックアップまたはアーカイブも行うことができますようになります。自動バックアップを実行するには、ポリシーを有効にする必要があります (デフォルト)。

ポリシーが無効な場合、**NetBackup** ではすべての自動スケジュールが実行されません。また、ユーザー主導スケジュールも使用できません。このオプションは、ポリシーを一時的に無効にして、スケジュールの使用を禁止する場合に有効です。

`-application_consistent flag`

flag=1 を指定すると、保持するハードウェアスナップショットを作成する前に仮想マシンが静止されます。**flag=0** を指定すると (デフォルトの状態)、ハードウェアスナップショットの作成時に仮想マシンが静止されません。

`-application_discovery 0` | `1`

vCloud Director のポリシーを作成するときにバックアップ対象の仮想マシンが **VMware** ポリシーで自動的に選択されるようにします。

`-ASC_apps_attr (exchange:;truncatelogs=1 | exchange:;mssql:;sharepoint:)`

Exchange、**SQL**、**SharePoint** について、データベースデータのファイルレベルのリカバリを有効にします。**truncatelogs=1** を指定するとログの切り捨てが有効になり (**Exchange** と **SQL** のみ)、**truncatelogs=0** を指定するとログの切り捨てが無効になります (**Exchange**、**SQL**、**SharePoint**)。

このオプションを使う方法の例を次にいくつか示します。

Exchange のファイルリカバリを有効にする: `-ASC_apps_attr exchange:`

Exchange、**SQL**、**SharePoint** のファイルリカバリを有効にする: `-ASC_apps_attr exchange:;mssql:;sharepoint:`

SQL のリカバリでログの切り捨てを有効にする: `-ASC_apps_attr mssql;;truncatelogs=1`

Exchange ではログの切り捨てを有効に、**SQL** ではログの切り捨てを無効にする (最後のコロンに注意): `-ASC_apps_attr exchange:;truncatelogs=1,mssql:`

Exchange と **SQL** の両方でログの切り捨てを有効にする: `-ASC_apps_attr exchange:;truncatelogs=1,mssql;;truncatelogs=1`

-blkincr *flag*

メモ: このオプションは、NetBackup Enterprise Server を実行中であり、かつ BLI (Block Level Incremental) をサポートする Veritas NetBackup for Oracle がインストールされている場合だけに適用されます。

0 (無効) または 1 (有効)。このポリシーに含まれるクライアントの BLI バックアップが実行されます。

1 を指定すると、BLI バックアップが実行されます。

0 (ゼロ) を指定すると、BLI バックアップが無効化されます。

-chkpt [1|0]

ポリシーの「チェックポイントから再開」機能を有効または無効にします。1 を指定すると、「チェックポイントから再開」機能は有効になります。0 を指定すると、「チェックポイントから再開」機能は無効になります。デフォルトは 0 (ゼロ) です。

-chkpt_intrvl *interval*

ポリシーのチェックポイントの間隔を設定します。変数 *interval* には、チェックポイントの間隔を分単位で指定します。デフォルトの間隔は 15 分です。間隔の範囲は、5 分から 180 分です。「チェックポイントから再開」機能が有効でない場合は、このパラメータは影響しません。

-collect_tir_info *value*

このオプションを指定すると、True Image Recovery (TIR) 情報が収集されます。NetBackup では、TIR を使用して、定期的な完全バックアップまたは増分バックアップの時点で正確にディレクトリのリストアを行うことができます。選択したバックアップの実行前に削除されたファイルはリストアされません。この属性を有効にすると、NetBackup では追加情報の収集が開始されます。追加情報の収集は、ポリシーに対する次の完全バックアップまたは増分バックアップから開始されます。

0 (ゼロ) を指定すると、NetBackup によって TIR 情報の記録が残されません。

1 を指定すると、NetBackup によって TIR 情報が収集されます。

2 を指定すると、NetBackup によって TIR 情報が収集され、クライアントのファイルがトラッキングされます。

-collect_bmr_info *flag*

このオプションを指定すると、Bare Metal Restore 情報が収集されます。

flag が 0 の場合、Bare Metal Restore 情報は収集されません。

flag が 1 の場合、Bare Metal Restore 情報が収集されます。

-collect_bmr_info が 1 に設定されていて、かつ Bare Metal Restore のライセンスを取得していないか、ポリシー形式が Standard または MS-Windows ではない場合、bpplinfo は失敗します。

-collect_bmr_info が 1 に設定されていても、ポリシーが移動検出機能を使用した True Image Restore 情報を収集しない場合、Bare Metal Restore は増分バックアップを無視して最後の完全バックアップからファイルをリストアします。

-compress flag

ファイルを圧縮するかどうかを指定します。1 (有効) に設定すると、クライアントソフトウェアによって、選択したファイルが圧縮された状態でメディアに格納されます。圧縮を実行すると、バックアップファイルのサイズが小さくなりストレージメディアが少なくなくて済みますが、バックアップの合計時間が長くなる可能性があります。0 (無効) に設定すると、ファイルは圧縮されない状態でメディアに格納されます (デフォルトの状態)。VxFS 圧縮には依存しないことに注意してください。

このオプションの指定は、ストレージユニットで有効なハードウェアの圧縮には影響しません。

-crossmp flag

0 (無効) または 1 (有効)。バックアップで、クロスマウントポイントをサポートするかどうかを指定します。

1 を指定すると、ファイルシステムに関係なく、選択したパス内のすべてのファイルおよびディレクトリが NetBackup によってバックアップまたはアーカイブされます。

0 (ゼロ) を指定すると、選択したファイルパスと同じファイルシステム上に存在するファイルおよびディレクトリだけが、NetBackup によってバックアップまたはアーカイブされます (デフォルト)。

この属性は、ポリシー属性の [NFS をたどる (Follow NFS)] に影響し、NetBackup Enterprise Server だけに適用されます。

クロスマウントポイント属性について詳しくは、次を参照してください。『NetBackup 管理者ガイド Vol. 1』。

-data_class class

このオプションでは、データの分類 (gold、platinum など) を指定します。

-disaster 0|1

このオプションを指定すると、Intelligent Disaster Recovery に必要な情報が収集されます。この属性は、Windows クライアントのバックアップを行う場合だけに適用されます。

0 (ゼロ) = ディザスタリカバリを許可しません (デフォルト)。

1 = ディザスタリカバリを許可します。

-discovery_lifetime *seconds*

VM の選択の問い合わせを再利用する期間を秒数で指定します。

-ef *effective time*

ポリシーが有効になる日時を指定します。

-enable_meta_indexing 0 | 1 "*index_server_name*"

NetBackup の検索機能でインデックス機能を有効 (1) にするか無効 (0) にするかを指定します。インデックスサーバーの名前は二重引用符 ("") で囲む必要があります。

-encrypt *flag*

ファイルを暗号化するかどうかを指定します。*flag* に 1 を設定すると、暗号化が有効になります。

-Exchange2010Server *server,...*

Exchange 2010 を使う場合に、優先バックアップソースとして使う DAG 内の 1 台以上のサーバーを指定します。優先サーバーリストは、-ExchangeSource が 1 の場合は必須です (データベースにアクティブコピーしかない場合は除く)。

-ExchangeSource が 2 の場合は無視され、-ExchangeSource が 0 の場合は省略可能です。

-ExchangeSource 0-2

Exchange 2010 データベース可用性グループ (DAG) または Exchange 2007 レプリケーションバックアップ (LCR または CCR) に使用するデータベースのバックアップソースを示します。デフォルトは 0 (ゼロ) です。このオプションの可能な値 (0-3) は次のとおりです。

- 0 - データベースのパッシブコピーまたはパッシブノードのバックアップを作成します。パッシブコピーを利用できない場合は、アクティブコピーまたはアクティブノードのバックアップを作成します。Exchange 2010 DAG の場合、優先サーバーリストも構成することができます。
- 1 - データベースのパッシブコピーまたはパッシブノードのバックアップを作成します。データベースにパッシブコピーがない場合、アクティブサーバーで (アクティブサーバーでのみ) バックアップされます。Exchange 2010 DAG の場合、優先サーバーリストも構成する必要があります。データベースにアクティブコピーしかない場合は優先サーバーリストは必要ありません。
- 2 - データベースのアクティブコピーまたはアクティブノードのバックアップを作成します。Exchange 2010 の場合、優先サーバーリストは無視されます。

-follownfs *flag*

メモ: このオプションは、NetBackup Enterprise Server だけに適用されます。

0 (無効) または 1 (有効)。NFS マウントポイントのトラッキングを行うかどうかを指定します。MS-Windows および OS/2 のポリシー形式では、このフラグを設定すると、ポリシーの[NFSをたどる (Follow NFS)]属性の代わりに[ネットワークドライブのバックアップ (Backup Network Drives)]属性が設定されます。

1 を指定する場合、NetBackup では、NFS マウントされたファイルが検出されると、すべてのファイルのバックアップまたはアーカイブが行われます。

0 (ゼロ) を指定する場合、NetBackup では、NFS マウントされたファイルが検出されても、そのファイルのバックアップまたはアーカイブは行われません (デフォルト)。

この属性を指定した場合の動作は、[クロスマウントポイント (Cross Mount Points)]属性の設定によって異なります。

クロスマウントポイント属性について詳しくは、次を参照してください。『NetBackup 管理者ガイド Vol. 1』。

`-granular_restore_info flag`

データベースバックアップイメージ内に存在する個々のオブジェクトをリストアする個別リカバリ属性を有効にするか無効にするかを指定します。この属性は MS-Exchange_Server、MS-SharePoint、MS-Windows (Active Directory 用) で利用できます。

1 を指定すると、個別リストア情報が表示されます。

0 (ゼロ) を指定すると、個別リストア情報は表示されません。

個別リストアについて詳しくは、次を参照してください。『NetBackup 管理者ガイド Vol. 1』。

`-ignore_client_direct 0 | 1`

クライアント側の重複排除を有効 (1) にするか無効 (2) にするかを指定します。

`-job_subtype DUPLICATE | LIVEUPDATE`

このオプションを指定すると、Duplicate 機能または LiveUpdate 機能の一般的なポリシーが表示されます。デフォルトでは、これらの 2 つの機能のポリシーは表示されません。

`-keyword "keyword phrase"`

このオプションの値は、このポリシーを使用して作成されたすべてのバックアップに関連付けられます。キーワード句を使用すると、関連したポリシーにリンクできます。また、リストアの実行中にキーワード句を使用すると、関連するキーワード句を持つバックアップだけが検索されます。

`-M master_server,...`

前述の説明を参照してください。

`-multiple_streams flag`

0 (無効) または 1 (有効)。複数のデータストリームを許可する。。

1 を指定すると、複数のデータストリームが許可されます。

0 (ゼロ) を指定すると、複数のデータストリームが無効化されます。

`-optimized_backup 0 | 1`

Microsoft Windows オペレーティングシステムの一部のバージョンで提供される重複排除データのバックアップを有効にします。クライアントで重複排除されたファイルシステムが構成されていれば、**NetBackup** は重複排除されたデータをバックアップします。クライアントで重複排除が設定されていない場合やサポートされていない場合は、通常のファイルバックアップが実行されます。

`policy_name -set | -modify`

このオプションを指定すると、指定したポリシーの属性が初期化または変更されます。このオプションは必須です。

`-set` を指定すると、ポリシーの属性がデフォルトの値に初期化 (または再初期化) されます。ただし、同じコマンドラインでオプションとして指定した属性はその対象となりません。

`-modify` を指定すると、ポリシーの属性が変更されます。現在のコマンドラインで、オプションとして明示的に指定されていない属性の値は変更されません。

`-policyjobs max_jobs`

このオプションでは、ポリシーが **NetBackup** で許される並列実行ジョブの最大数を指定します (管理インターフェースの [ポリシーごとのジョブ数を制限する (Limit jobs per policy)] の設定に対応しています)。`max_jobs` の値は常に 0 以上に設定する必要があります。

デフォルトの設定、または `-policyjobs` オプションに 0 (ゼロ) を指定した場合、`bplinfo` では `max_jobs` の値を無制限に相当する値に設定します。ジョブの最大数は、**NetBackup Server** では 8、**NetBackup Enterprise Server** では 999 です。

`-pool label`

このオプションでは、ポリシーに対するボリュームプールを指定します。デフォルトは **NetBackup** です。このボリュームプールは、ポリシーのストレージユニットに対するボリュームプールに含まれている必要があります。この属性は、ディスクストレージユニットがポリシーの位置情報であるかどうかとは関連しません。ポリシーのストレージユニットが [任意 (Any available)] である場合 (位置情報は、`bplinfo` で表示されます)、すべてのストレージユニットのボリュームプールを選択できます。[*NULL*] を指定すると、ボリュームプールは **NetBackup** に設定されます。構成済みのボリュームプールを表示するには、次のコマンドを実行します。

```
UNIX systems: /usr/opensv/volmgr/bin/vmpool -listall
```

```
Windows systems: install_path%Volmgr%bin%vmpool -listall
```

`-priority number`

このオプションを指定すると、このポリシーの優先度が他のポリシーとの関連によって指定されます。優先度には、0 (ゼロ) 以上の値を指定します。この値によって、ポリシーの実行順序が決まります。値が大きいほど、そのポリシーは先に実行されます。デフォルトは 0 (ゼロ) であり、優先度が最も低いことを表します。

`-pt policy_type`

このオプションでは、次のいずれかの文字列を指定して、ポリシー形式を指定します (デフォルトは **Standard** です)。

AFS
DataStore
DataTools-SQL-BackTrack
DB2
Enterprise-Vault
FlashBackup
Informix-On-BAR
Lotus-Notes
MS-Exchange-Server
MS-Hyper-V
MS-SharePoint
MS-SQL-Server
MS-Windows
NBU-Catalog
NDMP
NetWare
Oracle
OS/2
PureDisk-Export
SAP
Split-Mirror
Standard
Sybase
Vault
VMware

`-reason "string"`

このコマンド処理を選択する理由を示します。入力する理由の文字列は取得され、監査レポートに表示されます。この文字列は二重引用符 ("...") で囲ってください。文字列が 512 文字を超えないようにしてください。それはハイフンの文字 (-) から始まり単一の引用符 (!) を含む場合がありません。

-res_is_stl 0 | 1

ストレージユニットの名前とストレージライフサイクルポリシーの名前が同じ場合にのみ、このフラグを指定します。他のすべての場合で、このフラグは無視されます。指定可能な値は次のとおりです。

0 - 位置情報は非ストレージライフサイクルポリシーです

1 - 位置情報はストレージライフサイクルポリシーです

-residence label

このオプションでは、このスケジュールに従って作成されたバックアップの格納に使用されるストレージユニットのラベルを指定します。デフォルトは[任意 (Any_available)]です。この値を設定すると、ポリシーで、属性[オンデマンドのみ (On Demand Only)]が No に設定されているすべてのストレージユニットを使用できます。ポリシーで、特定のストレージユニットを使用する場合、または目的のストレージユニットの属性[オンデマンドのみ (On Demand Only)]が Yes に設定されている場合は、そのストレージユニットを指定します。[*NULL*]を指定すると、スケジュールの位置情報は[任意 (Any_available)]に設定 (または再設定) されます。ポリシーの位置情報によって、そのポリシーのスケジュールに対する位置情報が決まります。ただし、個々のスケジュールにおいて[ポリシーストレージユニットを上書きする (Override policy storage unit)]の設定で位置情報を指定している場合は除きます。bpstulist を実行すると、定義済みのストレージユニットの設定が表示されます。

-rfile flag

0 (無効) または 1 (有効)。

1 を指定すると、[raw パーティションから個々のファイルをリストア (Individual file restore from raw)]が許可されます。

0 (ゼロ) を指定すると、[raw パーティションから個々のファイルをリストア (Individual file restore from raw)]が無効化されます。

FlashBackup のポリシーでは、この属性は常に有効になっているため、このオプションは無視されます。

メモ: Snapshot Client は、NetBackup Enterprise Server が実行中で、かつ別ライセンス製品のオプションがインストールされている場合だけに利用可能です。

-sg [server_group | *ANY* | *NONE*]

このオプションでは、スケジュールのサーバーグループを指定します。スケジュールがディスクストレージユニット上にある場合は、このオプションは指定しないでください。*NONE* を指定した場合、このポリシーによって書き込まれたメディアは、書き込み先のメディアサーバーによって所有されます。*ANY* を指定した場合、EMM によってメディアの所有者が選択されます。デフォルト値は、*ANY* です。それ以外の値を選択した場合、メディアは指定した共有グループによって所有されます。各コ

ピーに対して共有グループを指定して、構成された共有グループを表示します。次のコマンドを入力します。

```
UNIX systems:
/usr/opensv/netbackup/bin/admincmd/nbsvrgrp -list -summary
```

```
Windows systems:
install_path¥NetBackup¥bin¥admincmd¥nbsvrgrp -list -summary
```

```
-use_accelerator 0 | 1
```

クライアント側の変更検出技術を利用して完全バックアップを高速化する NetBackup アクセラレータを使うかどうかを指定します。

1 を指定すると、NetBackup アクセラレータが有効になります。

0 を指定すると、NetBackup アクセラレータが無効になります。

NetBackup アクセラレータについて詳しくは、次を参照してください。『[NetBackup 管理者ガイド Vol. 1](#)』。

```
-ut
```

-ut の後に任意の日時の引数を指定すると、標準の時刻形式ではなく、UNIX 時刻として受け入れられます。-ut オプションは、主に Java に使用されます。

例

メモ: 次の例の[NFS マウントをたどる (Follow NFS Mounts)]の項目は、NetBackup Enterprise Server だけに適用されます。

例 1 - ポリシー tstpolicy のストレージユニットを tstunit に設定し、結果を表示します。

```
# bpplinfo tstpolicy -modify -residence tstunit
# bpplinfo tstpolicy -L
Policy Type:          Standard (0)
Active:               no
Effective:            no
Follow NFS Mounts:   no
Cross Mount Points:  no
Client Compress:     no
Collect TIR Info:    no
Policy Priority:      0
Ext Security Info:   no
File Restore Raw:    no
Client Encrypt:      no
```

```
Max Jobs/Policy:      8
Mult. Data Streams:  1
Block Level Incremental: no
Perform Snapshot Backup: no
Backup Copy:          0
Date Mover Type:     2
Use Alternate Client: no
Alternate Client Name: (none)
Enable Instant Recovery: no
Disaster Recovery:   0
Collect BMR Info:    no
Max Frag Size:       0 MB (1048576 MB)
Checkpoint Restart: no
Residence:           tstunit
Volume Pool:         NetBackup
```

例 2 - その他のポリシー属性を変更せずに **test1** という名前のポリシーを有効にして、次のコマンドを入力します。

```
# bpplinfo test1 -modify -active
```

例 3 - **tstpolicy** の属性をデフォルトの値に戻し、次のようにコマンドを実行します。

```
# bpplinfo tstpolicy -set
# bpplinfo tstpolicy -L
Policy Type:          Standard (0)
Active:              yes
Follow NFS Mounts:   no
Cross Mount Points:  no
Client Compress:     no
Collect TIR Info:    no
Policy Priority:     0
Ext Security Info:   no
File Restore Raw:    no
Client Encrypt:      no
Multiple Streams:    0
Disaster Recovery:   0
Max Jobs/Policy:     8
Disaster Recovery:   0
Collect BMR Info:    no
Max Frag Size:       0 MB (1048576 MB)
Residence:           -
Volume Pool:         NetBackup
```

例 4 - ポリシー **mkbpolicy** の簡易形式のリストを表示します。

```
# bplinfo mkbpolicy -l
INFO 0 0 0 0 *NULL* 0 0 99 0 0 0 0 0 0 0 *NULL* 1
KEY my temp directory
BCMD *NULL*
RCMD *NULL*
RES mkbunit *NULL* *NULL* *NULL* *NULL* *NULL* *NULL* *NULL* *NULL*
POOL NetBackup *NULL* *NULL* *NULL* *NULL* *NULL* *NULL* *NULL* *NULL*
FOE 0 0 0 0 0 0 0 0 0 0
```

ファイル

UNIX システムの場合:

```
/usr/opensv/netbackup/logs/admin/*
/usr/opensv/netbackup/db/policy/policy_name/info
```

Windows システムの場合:

```
install_path\NetBackup\logs\admin/*
install_path\NetBackup\db\policy\policy_name\info
```

bplist

bplist - ポリシー情報の表示

概要

```
bplist [policyname] [-L | -l | -U] [-allpolicies] [-inventory] [-M  
master_server,...] [-hwos] [-byclient client] [-keyword "keyword  
phrase"] [-verbose] [generation -generation]
```

UNIX システムでは、このコマンドのディレクトリパスは

/usr/opensv/netbackup/bin/admincmd/ です。

Windows システムでは、このコマンドのディレクトリパスは

<install_path>%NetBackup%bin\admincmd% です。

機能説明

bplist を実行すると、NetBackup データベース内のポリシーが表示されます。

このコマンドは、すべての認可済みユーザーが実行できます。

NetBackup による認可について詳しくは、次を参照してください。『[NetBackup セキュリティおよび暗号化ガイド](#)』。

オプション

-allpolicies

このオプションを指定すると、すべてのポリシーが表示されます。

-hwos

このオプションを指定すると、使用可能なハードウェアおよびオペレーティングシステムが表示されます。

-L

このオプションを指定すると、完全な (詳細形式の) リストが表示されます。

-l

このオプションを指定すると、情報が raw 出力モードで表示されます。

-M master_server,...

このオプションを指定すると、指定した 1 つ以上のマスターサーバーのポリシー情報が表示されます。

-U

情報がユーザーリストモードで表示されます。このリストは、詳細形式のリストに類似していますが、エントリが少なくなります。

-byclient *client*

このオプションを指定すると、指定したクライアントを含むすべてのポリシーの情報が表示されます。

-inventory

このオプションを指定すると、現在の NetBackup ポリシーのインベントリが作成されて、以前に作成されたインベントリと比較されます。/usr/opensv/netbackup に touch ファイル LOG_CLASS_QUERIES を作成して、ポリシーへの変更を記録することができます。

変更は /usr/opensv/netbackup/logs/PolicyQueries.log. に記録されます。ログファイルの管理 (定期的な切り捨てなど) はユーザーが行います。

-keyword "*keyword phrase*"

このオプションの値は、このポリシーを使用して作成されたすべてのバックアップに関連付けられます。キーワード句を使用すると、関連したポリシーにリンクできます。また、リストの実行中にキーワード句を使用すると、関連するキーワード句を持つバックアップだけが検索されます。

policyname

このオプションを指定すると、NetBackup データベース内の特定のポリシーの情報が表示されます。

次に、bppllist *policyname* コマンドの出力に含まれるフィールドについて説明します。

CLASS

- フィールド 1 - ポリシー名
- フィールド 2 - 名前 (内部)
- フィールド 3 - オプション
- フィールド 4 - プロトコルのバージョン
- フィールド 5 - GMT からのタイムゾーンオフセット
- フィールド 6 - 監査理由

INFO

- フィールド 1 - ポリシーの種類
0 = 標準 (UNIX と Linux のクライアント)、1 = プロキシ、4 = Oracle、6 = Informix-On-BAR、7 = Sybase、8 = MS-SharePoint ポータルサーバー、10 = NetWare、11 = DataTools-SQL-BackTrack、13 = MS-Windows、14 = OS/2、15 = MS-SQL-Server、16 = MS-Exchange-Server、17 = SAP、18 = DB2、19 = NDMP、20 = FlashBackup、21 = Splitmirror、22 = AFS (ファイルシステム)、25 = Lotus Notes、29 = FlashBackup-Windows、35 =

NBU-Catalog、36 = 汎用、38 = PureDisk エクスポート、39 = Enterprise_Vault、40 = VMware、41 = MS-Hyper-V

- フィールド 2 - NFS マウントをたどる。0 = いいえ、1 = はい
- フィールド 3 - クライアントでの圧縮。0 = いいえ、1 = はい
- フィールド 4 - ジョブの優先度。有効な値は 0 から 99999 までです。
- フィールド 5 - プロキシクライアント
- フィールド 6 - クライアントでの暗号化。0 = いいえ、1 = はい
- フィールド 7 - ディザスタリカバリ。カタログで DR ファイルを使うオプション。0 = いいえ、1 = はい
- フィールド 8 - 1 クライアントあたりの最大ジョブ数。有効な値は 0 から 999 までです。
- フィールド 9 - クロスマウントポイント。0 = いいえ、1 = はい
- フィールド 10 - 最大フラグメントサイズ (非推奨)
- フィールド 11 - アクティブ。ポリシーをアクティブにするかどうかを指定する。0 = いいえ、1 = はい
- フィールド 12 - TIR (True Image Restore) 情報の収集。0 = TIR 情報を収集しない、1 = 移動検出を行わずに TIR 情報を収集する、2 = 移動検出を行って TIR 情報を収集する
- フィールド 13 - Block Level Incremental バックアップの有効化。0 = いいえ、1 = はい
- フィールド 14 - NetWare の拡張セキュリティ情報
- フィールド 15 - raw から個々のファイルをリストア
- フィールド 16 - ストリーミング
- フィールド 17 - Frozen Image (内部使用)
- フィールド 18 - バックアップコピー (内部使用)
- フィールド 19 - ポリシーを有効にする日付
- フィールド 20 - クラスID
- フィールド 21 - 作成するバックアップコピー数。有効な値は 1 から 4 までです。
- フィールド 22 - チェックポイントの有効化。0 = いいえ、1 = はい
- フィールド 23 - チェックポイントの間隔
- フィールド 24 - 未使用
- フィールド 25 - インスタントリカバリの有効化。0 = いいえ、1 = はい

- フィールド 26 - オフホストバックアップの実行。0 = いいえ、1 = はい
- フィールド 27 - バックアップ作成での代替クライアントの使用を有効化。0 = いいえ、1 = はい
- フィールド 28 - データムーバーの有効化。0 = いいえ、1 = はい
- フィールド 29 - データムーバーの形式
1 = 不明なデータムーバー形式、2 = サードパーティコピー、3 = メディアサーバーコピー、5 = ネットワーク接続ストレージ、6 = NDMP
- フィールド 30 - BMR (Bare Metal Restore) 情報の収集。0 = いいえ、1 = はい
- フィールド 31 - 位置情報でのストレージサービス (ライフサイクル) の使用。0 = いいえ、1 = はい
- フィールド 32 - 個別リストアの有効化。0 = いいえ、1 = はい
- フィールド 33 - ジョブのサブ形式 (内部)
- フィールド 34 - 仮想マシンの使用。0 = 仮想マシンは使わない、1 = VMware、2 = Hyper-V、3 = VxVI
- フィールド 35 - クライアント側の重複排除設定を無視する。0 = いいえ、1 = はい
- フィールド 36 - Exchange データベースのバックアップ元の有効化。文字列の出力
- フィールド 37 - メタインデックス付けの有効化。0 = いいえ、1 = はい
- フィールド 38 - NetBackup アクセラレータの使用。0 = いいえ、1 = はい
- フィールド 39 - 個別リストアの有効化。0 = いいえ、1 = はい
- フィールド 40 - 検出の有効期間。アプリケーション検出を有効にする時間 (秒)
- フィールド 41 - 高速バックアップの有効化。0 = いいえ、1 = はい

KEY

- フィールド 1 - ポリシーのキーワード句 (文字列)

RES

- フィールド 1 - 位置情報またはストレージユニット、各コピーに 1 つ

POOL

- フィールド 1 - ボリュームプール名、各コピーに 1 つ

FOE

- フィールド 1 - エラーによる失敗。0 = 続行、1 = すべてのコピー処理に失敗

SHAREGROUP

- フィールド 1 -メディア共有グループ (メディア所有者)、各コピーに 1 つの値ペア

DATACLASSIFICATION

- フィールド 1 -ポリシーデータの分類。プラチナ = 最大の分類、ゴールド = 2 番目に最大、シルバー = 3 番目に最大、ブロンズ = 最小ランク

HYPERVSERVER

- Hyper-V サーバーのポリシーであることを示す

-verbose

このオプションを指定すると、ログの詳細モードが選択されます。

bppsched

bppsched – NetBackup スケジュールの追加、削除または表示

概要

```
bppsched [-v] [-M master_server,...] [-L | -l | -U] [-label  
sched_label] [[SLP_Internal_Policy] -slpwindow]  
bppschedpolicy_name [-v] [-M master_server,...] -delete  
sched_label,... [-generation generation] [-reason "string"]  
[[SLP_Internal_Policy] -slpwindow]  
bppschedpolicy_name [-v] [-M master_server,...] -deleteall  
[-generation generation] [-reason "string"] [[SLP_Internal_Policy]  
-slpwindow]]  
bppschedpolicy_name [-v] [-M master_server,...] -add sched_label  
[-st sched_type] [-freq frequency] [-mpxmax mpx_factor]  
[-number_copies number] [-synthetic 0|1] [-pfi_fast_recovery 0|1]  
[-rl retention_level [,rl_copy,...]] [-residence storage_unit_label  
[,stunit_copy,...]] [-pool volume_pool_label [,pool_copy,...]]  
[-res_is_stl 0|1] [-fail_on_error 0|1[,0|1,...,0|1]] [-sg share_group  
[,share_copy,...] [-window start duration] [-cal 0|1|2] [-ut] [-incl  
mm/dd/yyyy] [-excl mm/dd/yyyy] [-weekday day_name week [day_name  
week]...] [-dayomonth 1-31 [1-31]... | 1] [-xweekday day_name week  
[day_name week]...] [-xdayomonth 1-31 [1-31]... | 1] [-generation  
generation] [-reason "string"] [[SLP_Internal_Policy] -slpwindow]  
UNIX システムでは、このコマンドのディレクトリパスは  
/usr/opensv/netbackup/bin/admincmd/ です。  
Windows システムでは、このコマンドのディレクトリパスは  
<install_path>%NetBackup%\bin\admincmd\ です。
```

機能説明

bppsched によって、次のいずれかの操作が実行されます。

- 新しいスケジュールをポリシーに追加します。
- ポリシーから、1 つ以上のスケジュールを削除します。
- ポリシー内の 1 つまたはすべてのスケジュールを表示します。

-add および -delete オプションを指定して bppsched を実行すると、スケジュールの変更要求が NetBackup に送信された後、すぐにシステムプロンプトに戻ります。変更が正常に行われたことを判断するには、bppsched を再度実行して、更新されたスケジュール情報を表示します。

-slpwindow オプションを指定すると、時間帯に基づくストレージライフサイクルポリシー (SLP) のスケジュールを設定できます。サポートされるのは開始時刻と終了時刻だけです。事前定義済みのポリシー名 **SLP_Internal_Policy** を使い、スケジュール形式は **UBAK** (ユーザーバックアップ) にする必要があります。

表示オプションを指定して、-m オプションを指定する場合でも、各スケジュールに、1 つのエントリが表示されます。-l 形式は、各スケジュールの次の情報を表示します。

SCHED (スケジュール)

フィールド 1 - 指定したポリシーのスケジュール名

フィールド 2 - スケジュールのバックアップ形式。0 = 完全スケジュール、1 = 差分増分スケジュール、2 = 累積増分スケジュール、3 = ユーザーバックアップスケジュール、4 = ユーザーアーカイブスケジュール

フィールド 3 - 実行する多重化コピー数。有効な値は 1 から 32 までです。

フィールド 4 - スケジュールの頻度 (秒)。有効な値は 1 から 2147040000 (3550 週)。

フィールド 5 - スケジュールの保持レベル。保持レベルはユーザーが編集可能。有効な値は 0 から 24 までです。デフォルト値と保持レベルの詳細なリストは、下の `-r1 retention_level` オプションの説明を参照してください。

フィールド 6 - `u_wind/o/d`。今後の使用に備えて予約

フィールド 7 から 8 - 今後の使用に備えて予約

フィールド 9 - 代替読み込みサーバー

フィールド 10 - 最大フラグメントサイズ (MB)

フィールド 11 - カレンダー。0 = 間隔ベースのスケジュール、1 = 再試行なしのカレンダーベースのスケジュール、2 = 再試行ありのカレンダーベースのスケジュール

フィールド 12 - バックアップに設定したコピー数。有効な値は 2 から 4 までです。

フィールド 13 - 各コピーの設定エラーによる失敗

フィールド 14 - 合成バックアップ。0 = いいえ、1 = はい

フィールド 15 - PFI 高速リカバリの有効化。0 = いいえ、1 = はい

フィールド 16 - 移行ジョブの優先度

フィールド 17 - 位置情報にストレージサービス (ライフサイクル) を使用。0 = いいえ、1 = はい

フィールド 18 - スケジュールのインデックス付けの有効化。0 = いいえ、1 = はい

フィールド 19 - チェックサムの変更検出の有効化。0 = いいえ、1 = はい

SCHEDCALENDAR

- スケジュールの種類がカレンダーの場合には、このフィールドは実行日後に再試行が可能かどうかを示します。0 = いいえ、1 = はい

SCHEDCALEDATES

- 起点時間でカレンダー日付を除外します。
例: 06/04/2013、06/07/2013、06/18/2013 の日付 (すべて 05:00:00 GMT) を除外する場合は、次のように表示されます。

```
SCHEDCALEDATES 1346734800 1346994000 1347944400
```

SCHEDCALDAYOWEEK

- 曜日形式でカレンダー曜日を含めます。曜日は 1 から 7 (日曜日は 1)、週は月の週数です。
例: 日曜日、1 週目;火曜日、1 週目;水曜日、4 週目を含める場合は、次のように表示されます。

```
SCHEDCALDAYOFWEEK 1,1;3,1;4,4
```

SCHEDCALEDATES

- 起点時間でカレンダー日付を除外します。例: 09/04/2012、09/07/2012、09/18/2012 の日付 (すべて 05:00:00 GMT) を除外する場合は、次のように表示されます。

```
SCHEDCALEDATES 1346734800 1346994000 1347944400
```

SHAREGROUP

- フィールド 1 -メディア共有グループ (メディア所有者)、各コピーに 1 つの値ペア

DATACLASSIFICATION

- フィールド 1 -ポリシーデータの分類。プラチナ = 最大の分類、ゴールド = 2 番目に最大、シルバー = 3 番目に最大、ブロンズ = 最小ランク

SCHEDWIN

- 開始時刻、継続期間形式の 7 つのペア。曜日ごとの時間帯の開始時刻と期間を示します。開始日は日曜日です。Start 値は午前 0 時からの秒数です。Duration は開始後に経過した秒数です。

SCHEDRES

- 位置情報またはストレージユニット、各コピーの値ペア (storage_unit storage_unit)。例: 2 つのコピーを指定します。次のように、コピー 1 は stu_msdp_myhost1 になり、コピー 2 は stu_advdisk_myhost2 になります。

```
SCHEDRES stu_msdp_myhost1 stu_advdisk_myhost2 *NULL* *NULL* *NULL* *NULL*
```

SCHEDPOOL

- プール、各コピーの値ペア (`volume_pool_name volume_pool_name`)。例: 2 つのコピーを指定します。コピー 1 は NetBackup プールになり、コピー 2 は `MediaPool_1` プールになります。

```
SCHEDRES NetBackup MediaPool_1 *NULL* *NULL* *NULL* *NULL* *NULL* *NULL*
```

SCHEDRL

- スケジュールの保持レベル。保持レベルはユーザーが編集可能。有効な値は 0 から 24 までです。デフォルト値と保持レベルの詳しいリストは、下の `-r1 retention_level` オプションの説明を参照してください。

SCHEDFOE

- エラーによる失敗。各コピーの値ペア。0 = 続行、1 = すべてのコピー処理に失敗

SCHEDSG

- 共有グループ (メディアの所有者)、各コピーの値ペア。例: コピーを定義します。1 つ目のコピーには共有グループは存在せず (NONE)、2 つ目のコピーには共有グループがあります (ANY)。

```
SCHEDSG *NONE* *ANY* *NULL* *NULL* *NULL* *NULL* *NULL* *NULL*
```

-M オプションを指定して `bppsched` を実行すると、指定されているマスターサーバーごとに操作が実行されます。たとえば、`bppsched` を実行してスケジュールを追加する場合、-M で指定された各マスターサーバー上のポリシーに `bppsched` によってスケジュールが追加されます。-M オプションを一覧表示要求に対して指定する場合、リストは、-M オプションで指定したリストのすべてのマスターサーバーから返される情報で構成されます。このコマンドがいずれかのマスターサーバーで失敗した場合、その時点で動作は停止します。

既存の NetBackup スケジュールを変更するには、NetBackup の `bppschedrep` を使用します。

このコマンドは、認可済みユーザーが開始できます。

NetBackup による認可については詳しくは、次を参照してください。『[NetBackup セキュリティおよび暗号化ガイド](#)』。

オプション

次に示すオプションは、`bppsched` のすべての形式で共通です。

`policy_name`

このオプションでは、スケジュールを含むポリシー名を指定します。このコマンドの実行前にポリシーが存在している必要があります。このオプションは必須です。また、コマンドラインの最初に指定する必要があります。

-M *master_server,...*

このオプションでは、代替マスターサーバーのリストを指定します。このリストは、カンマで区切られたホスト名のリストです。このオプションを指定すると、リストで指定されている各マスターサーバーで bppsched が実行されます。リストに示される各マスターサーバーでは、bppsched を発行するシステムからのアクセスが許可されている必要があります。

このオプションを指定すると、指定されている各マスターサーバーでコマンドが実行されます。マスターサーバーでエラーが発生した場合、その時点で処理が停止します。

bppsched によってリストが生成される場合、そのリストは、このリスト内のすべてのマスターサーバーから戻された情報で構成されます。

bppsched を実行してスケジュールを追加するか、または削除すると、このリスト内のすべてのマスターサーバーに変更が反映されます。

-v

このオプションを指定すると、詳細モードが選択されます。このオプションを指定して bppsched を実行すると、デバッグに使用するための追加情報がログに書き込まれます。追加情報は **NetBackup** 管理デバッグログに記録されます。このオプションは、**NetBackup** でデバッグログ機能が有効になっている場合、つまり次のディレクトリが定義されている場合にだけ有効です。

```
Windows systems: install_path\NetBackup\logs\admin
```

```
UNIX systems: /usr/opensv/netbackup/logs/admin
```

その他のオプションは、bppsched の形式によって異なります。bppsched を 1 番目の形式で実行すると、指定したポリシーにスケジュールが追加されます。次に、bppsched のこの形式に適用されるオプションを示します。

-add *sched_label* [*suboptions*]

このオプションを指定すると、指定したポリシーに 1 つのスケジュールが追加されます。

-add オプションのサブオプションについては、後述の説明を参照してください。これらは、追加するスケジュールの属性です。

スケジュールとその属性について詳しくは、次を参照してください。『**NetBackup** 管理者ガイド Vol. 1』。

-cal 0 | 1 | 2

このオプションでは、bppsched でカレンダーを基準としたスケジュールを指定するか、または間隔を基準としたスケジュールを指定するかを選択します。

0 (ゼロ) = 間隔を基準としたスケジュール

1 = 実行日以後に再試行しない、カレンダーを基準としたスケジュール

2 = 実行日以後に再試行する、カレンダーを基準としたスケジュール

`-dayomonth 1-31 [1-31]... | 1`

このオプションでは、毎月スケジュールを実行する日を指定します。月の日数が**28**、**29**、**30**または**31**日のどれであるかにかかわらず、毎月の月末日にスケジュールを実行するには、**1** (小文字の **L**) を入力します。

たとえば、毎月**14**日と**28**日にポリシーのバックアップを実行するには、次のコマンドを入力します。

`-dayomonth 14 28`

毎月の月末日に実行するには、次のコマンドを入力します。

`-dayomonth 1`

`-excl mm/dd/yyyy`

このオプションを指定すると、指定した日が除外されます。

`-fail_on_error 0|1[,0|1,...,0|1]`

このオプションでは、**1**つのコピーが失敗した場合、他のすべてのコピーを失敗にするかどうかを指定します。パラメータを指定しない場合、すべてのコピーに対して**0** (ゼロ) がデフォルトとなります。値は、コピーごとに指定します。

0 (ゼロ) = 他のコピーを失敗にしません

1 = 他のコピーを失敗にします

`-freq frequency`

このオプションでは、バックアップを行う間隔を決定します。このスケジュールに従って開始されるバックアップ間隔を秒数で指定します。省略した場合は、デフォルト値**604800** (1 週間の秒数) が設定されます。

`-generation generation`

このオプションを指定すると、コマンドがポリシーの特定の世代またはバージョンに対して機能することが確認されます。世代の値は、ポリシーが保存されるたびに大きくなります。bppsinfo または bppslist を使用すると、現在の世代の値を表示できます。世代が示されない場合は、コマンドは現在のバージョンに対して実行されます。

`-incl mm/dd/yyyy`

このオプションを指定すると、指定した日だけが含まれます。

`-mpxmax mpx_factor`

このオプションでは、このスケジュールで **NetBackup** によって任意の **1** 台のドライブに対して行われる多重化ジョブの最大数を指定します。mpx_factor には **NetBackup Server** では **1** から **8**、**NetBackup Enterprise Server** では **1** から **32**

の範囲の整数を指定します。値が **1** の場合、このスケジュールのバックアップが多
重化されないことを示します。デフォルトでは、多重化されません。

`-number_copies number`

このオプションでは、並列実行バックアップコピーの数を指定します。最小値は **1** で
す。最大値は **4** または [バックアップコピーの最大数 (Maximum Backup Copies)]
グローバルパラメータの小さい方の値です。デフォルトは **1** です。

`-pfi_fast_recovery 0|1`

このオプションを指定すると、インスタントリカバリ用にスナップショットを保持する機
能を有効にできます。デフォルト値 **0** (ゼロ) では、この機能は無効です。値に **1**
を指定すると、機能が有効になります。

`-pool volume_pool_label[,pool-copy,...]`

このオプションでは、ボリュームプールの名前を指定します。この選択は、ポリシーレ
ベルのボリュームプールより優先されます。[*NULL*]を入力すると、ポリシーレベル
で指定するボリュームプールが **NetBackup** によって使用されます。デフォルトでは、
ポリシーレベルで指定するボリュームプールが使用されます。ボリュームプールのラ
ベルは、**None** に指定できません。スケジュールレベルまたはポリシーレベルでボ
リュームプールを指定しない場合、**NetBackup** では、**NetBackup** のデフォルト値が
使用されます。

`-number_copies` に **1** より大きい値を指定する場合、コピーごとにプールを指定し
ます。ストレージユニットがディスクの場合、そのコピーに対して[*NULL]を入力しま
す。

`-reason "string"`

このコマンド処理を選択する理由を示します。入力する理由の文字列は取得され、
監査レポートに表示されます。この文字列は二重引用符 ("...") で囲んでください。
文字列が **512** 文字を超えないようにしてください。それはハイフンの文字 (-) から始
まり単一の引用符 (') を含む場合がありません。

`-res_is_stl`

このオプションを指定すると、ストレージユニット内のデータがストレージライフサイク
ルに設定されます。

`-residence storage_unit_label[,stunit-copy,...]`

このオプションでは、バックアップイメージの場所を指定するストレージユニット名を
指定します。値が[*NULL*]の場合、ポリシーレベルで指定するストレージユニットが
NetBackup によって使用されます。デフォルトでは、ポリシーレベルで指定するス
トレージユニットが **NetBackup** によって使用されます。スケジュールレベルまたはポ
リシーレベルでストレージユニットを指定しない場合、**NetBackup** では、次に利用可
能なストレージユニットが使用されます。

`-number_copies` に **1** より大きい値を指定する場合、コピーごとに位置情報を指定
します。

`-rl retention_level[,rl-copy,...]`

指定した保持レベルによって、バックアップおよびアーカイブが保持される期間が決まります。`retention_level` には 0 から 24 の整数を指定します。デフォルトの保持レベルは、1 です。有効な保持レベルおよびそれに対応するデフォルトの保持期間については、後述の説明を参照してください。

`-number_copies` に 1 より大きい値を指定する場合、コピーごとに保持レベルを指定します。

注意: 各レベルに対応する保持期間は、NetBackup 管理インターフェースを使用して変更できます。したがって、ユーザー構成では、各レベルに対してここに示す値と異なる値が使用されている場合があります。このコマンドを実行して変更を行う前に、NetBackup 管理インターフェースを使用して実際の保持期間を決定します。

これを行わない場合、バックアップが予定より前に期限切れになり、データが失われる可能性があります。

0	1 週間
1	2 週間
2	3 週間
3	1 か月
4	2 か月
5	3 か月
6	6 か月
7	9 か月
8	1 年
9 - 24	無制限

`-sg share_group [,share_copy,...]`

このオプションでは、スケジュールの共有グループを指定します。スケジュールがディスクストレージユニット上にある場合は、このオプションは指定しないでください。

NONE を指定した場合、このポリシーによって書き込まれたメディアは、書き込み先のメディアサーバーによって所有されます。***ANY*** を指定した場合、EMM によってメディアの所有者が選択されます。デフォルト値は、***ANY*** です。それ以外の値を選択した場合、メディアは指定した共有グループによって所有されます。各コピーに対して共有グループを指定して、構成された共有グループを表示します。次のように入力します。

UNIX systems:

```
/usr/opensv/netbackup/bin/admincmd/nbsvgrp -list -summary
```

Windows systems: `install_path\NetBackup\bin\admincmd\nbsvgrp`
`-list -summary`

[SLP_Internal_Policy] -slpwindow

SLP_internal_policy に時間帯を追加、削除、表示します。次の 2 つの方法でこの処理を実行できます。

- `bppsched -slpwindow`
- `bppsched SLP_Internal_Policy -slpwindow`

コマンド

-st *sched_type*

このオプションでは、スケジュール形式を指定します。デフォルトのスケジュール形式は **FULL** です。次に、この属性に対する有効な値およびその説明を示します。

FULL (完全バックアップ)

INCR (差分増分バックアップ)

CINC (累積増分バックアップ)

UBAK (ユーザーバックアップ)

UARC (ユーザーアーカイブ)

-synthetic 0|1

このオプションを指定すると、実行するスケジュールを決定できます。値に **0** (ゼロ) を指定すると、スケジュールは (合成バックアップではない) 通常のバックアップスケジュールになります。(0 がデフォルトです。) 値に **1** を指定すると、スケジュールは合成バックアップスケジュールになります。

-ut

-ut の後に任意の日時の引数を指定すると、標準の時刻形式ではなく、**UNIX** 時刻として受け入れられます。-ut オプションは、主に **Java** に使用されます。

-weekday *day_name week [day_name week]...*

このオプションでは、スケジュールの実行日として曜日および週を指定します。

- **day_name** には、**Sunday**、**Monday**、**Tuesday**、**Wednesday**、**Thursday**、**Friday** または **Saturday** を指定します。
- **week** には、月の何週目であるかを指定します。週は日曜日から土曜日までです。有効な値は **1** から **5** までです。

たとえば、毎週日曜日に実行するようにポリシーで指定するには、次のコマンドを入力します。

```
-weekday Sunday 1 Sunday 2 Sunday 3 Sunday 4 Sunday 5
```

```
-window start duration
```

このオプションでは、このスケジュールのバックアップが NetBackup で実行可能な期間を指定します。すべての曜日で同じ時間帯が表示されます。

start には、このスケジュールのバックアップ処理時間帯の始めの時刻を指定します。これは午前 0 時からの秒数です。0 から 86399 (1 日は 86400 秒) の整数で指定します。

duration には、継続する処理時間の長さを指定します。時間単位は秒です。この単位には、負でない整数を指定します。

```
-xdayomonth 1-31 [1-31]... | 1
```

このオプションでは、スケジュールの実行日から除外する日付を指定します。月の最終日を指定するには 1 (小文字の L) を使います。

たとえば、14 日と 15 日には実行しないようにポリシーで指定するには、次のコマンドを入力します。

```
-xdayomonth 14 15
```

```
-xweekday day_name week [day_name week]...
```

このオプションでは、スケジュールの実行日から除外する曜日と週を指定します。

- **day_name** には、Sunday、Monday、Tuesday、Wednesday、Thursday、Friday または Saturday を指定します。
- **week** には、月の何週目であるかを指定します。
- 月の最後の週を指定するには 1 を使います。週は日曜日から月曜日までです。有効な値は 1 から 5 までです。

たとえば、第 1 月曜日と第 3 月曜日には実行しないようにポリシーで指定するには、次のコマンドを入力します。

```
-xweekday Monday 1 Monday 3
```

bppsched を 2 番目の形式で実行すると、指定したポリシーから 1 つ以上のスケジュールが削除されます。次に、bppsched のこの形式に適用されるオプションを示します。

```
-delete sched_label
```

このオプションを指定すると、指定したポリシーから、指定したスケジュールが削除されます。**sched_label** リストの要素は、空白で区切ります。リストには、最大で 25 のラベルを指定できます。

bppsched を 3 番目の形式で実行すると、指定したポリシーからすべてのスケジュールが削除されます。次に、bppsched のこの形式に適用されるオプションを示します。

-deleteall

このオプションを指定すると、指定したポリシーからすべてのスケジュールが削除されます。

bppsched を 4 番目の形式で実行すると、指定したポリシーのスケジュールの情報を含むリストが生成されます。次に、bppsched のこの形式に適用されるオプションを示します。

-l

このオプションを指定すると、表示形式が簡易になります (デフォルトの表示形式)。このオプションでは、スケジュールのすべての属性を含む簡易なリストが生成されます。リストでは、各スケジュールが 1 行に表示されます。ほぼすべての属性値は、数値で表示されます。このオプションは、カスタマイズされたレポート形式にリストを再生成するスクリプトまたはプログラムに対して有効です。

-L

このオプションを指定すると、表示形式が詳細になります。このリストには、スケジュールのすべての属性が含まれています。いくつかの属性値は、数値ではなく、説明で表されます。

-label sched_label

このオプションを指定すると、指定したポリシー内のスケジュールの属性が表示されます。デフォルトでは、指定したポリシーのすべてのスケジュール情報が表示されます。

-U

このオプションを指定すると、表示形式がユーザーになります。このリストは、詳細形式のリストに類似していますが、エントリが少なくなります。ほぼすべての属性値は、数値ではなく、説明で表されます。

例

例 1 - ポリシー `tstpolicy` 内のスケジュール `user` の情報を 2 つの方法で表示します。1 つ目は、詳細形式で表示する方法です。2 つ目は、ユーザー形式で表示する方法です。詳細形式での表示よりもエントリが少なくなります。

```
# bppsched tstpolicy -L -label user
Schedule:          user
Type:              UBAK (2)
Frequency:         1 day(s) (86400 seconds)
Retention Level:  0 (1 week)
u-wind/o/d:       0 0
Incr Type:         DELTA (0)
Incr Depends:     (none defined)
Max Frag Size:    0 MB (1048576 MB)
```

```

Maximum MPX: 1
Number copies:1
Fail on Error:0
Residence:      (specific storage unit not required)
Volume Pool:    (same as policy volume pool)
Daily Windows:
Day             Open             Close             W-Open           W-Close
Sunday         000:00:00    024:00:00    000:00:00    024:00:00
Monday         000:00:00    024:00:00    024:00:00    048:00:00
Tuesday        000:00:00    024:00:00    048:00:00    072:00:00
Wednesday      000:00:00    024:00:00    072:00:00    096:00:00
Thursday       000:00:00    024:00:00    096:00:00    120:00:00
Friday         000:00:00    024:00:00    120:00:00    144:00:00
Saturday       000:00:00    024:00:00    144:00:00    168:00:00

# bppsched tstpolicy -U -label user
Schedule:      user
Type:          User Backup
Retention Level: 0 (1 week)
Maximum MPX:   1
Number copies:1
Fail on Error:0
Residence:      (specific storage unit not required)
Volume Pool:    (same as policy volume pool)
Daily Windows:
Sunday         00:00:00 --> Sunday    24:00:00
Monday         00:00:00 --> Monday    24:00:00
Tuesday        00:00:00 --> Tuesday   24:00:00
Wednesday      00:00:00 --> Wednesday 24:00:00
Thursday       00:00:00 --> Thursday  24:00:00
Friday         00:00:00 --> Friday    24:00:00
Saturday       00:00:00 --> Saturday  24:00:00

```

例 2 - システム hatt 上でコマンドを実行中に、ポリシー tstpolicy 内の full というスケジュールの情報を、マスターサーバー beaver 上に定義したとおりに表示します。

```

# bppsched tstpolicy -M beaver -L -label full
Schedule:      full
Type:          FULL (0)
Frequency:     0+ day(s) (14400 seconds)
Retention Level: 0 (1 week)
u-wind/o/d:    0 0
Incr Type:     DELTA (0)
Incr Depends:  (none defined)

```



```

Max Frag Size:  0 MB (1048576 MB)
Maximum MPX:    1
  Number copies:1
  Fail on Error:0
  Residence:     (specific storage unit not required)
Volume Pool:    (same as policy volume pool)
Daily Windows:
Day            Open           Close           W-Open         W-Close
Sunday         000:00:00      024:00:00      000:00:00      024:00:00
Monday         000:00:00      024:00:00      024:00:00      048:00:00
Tuesday        000:00:00      024:00:00      048:00:00      072:00:00
Wednesday     000:00:00      024:00:00      072:00:00      096:00:00
Thursday       000:00:00      024:00:00      096:00:00      120:00:00
Friday         000:00:00      024:00:00      120:00:00      144:00:00
Saturday       000:00:00      024:00:00      144:00:00      168:00:00

```

例 3 - beaver 上のポリシー tstpolicy に新しいスケジュール full_2 を追加し、新しいスケジュールを詳細形式 (-L) で表示します。これらのコマンドは、システム hatt 上で実行します。

```

# bpllsched tstpolicy -M beaver -add full_2
# bpllsched tstpolicy -M beaver -label full_2 -L
Schedule:          full_2
Type:              FULL (0)
Frequency:         7 day(s) (604800 seconds)
Retention Level:  1 (2 weeks)
u-wind/o/d:        0 0
Incr Type:         DELTA (0)
Incr Depends:     (none defined)
Max Frag Size:    0 MB (1048576 MB)
Maximum MPX:      1
  Number copies:1
  Fail on Error:0
  Residence:       (specific storage unit not required)
Volume Pool:      (same as policy volume pool)
Daily Windows:
Day            Open           Close           W-Open         W-Close
Sunday         000:00:00      000:00:00
Monday         000:00:00      000:00:00
Tuesday        000:00:00      000:00:00
Wednesday     000:00:00      000:00:00
Thursday       000:00:00      000:00:00
Friday         000:00:00      000:00:00
Saturday       000:00:00      000:00:00

```

例 4 - 指定したスケジュールをポリシー tstpolicy から削除します。

```
# bpplsched tstpolicy -delete full_3 user user_2 user_3
```

例 5 - ポリシー tstpolicy のスケジュール情報を表示します。

```
# bpplsched tstpolicy -L
Schedule:          full
Type:              FULL (0)
Frequency:         1 day(s) (86400 seconds)
Retention Level:  0 (1 week)
u-wind/o/d:       0 0
Incr Type:        DELTA (0)
Incr Depends:     (none defined)
Max Frag Size:    0 MB (1048576 MB)
Maximum MPX:      1
  Number copies:1
  Fail on Error:0
  Residence:       (specific storage unit not required)
Volume Pool:      (same as policy volume pool)
Daily Windows:
Day      Open      Close      W-Open      W-Close
Sunday   000:00:00  024:00:00  000:00:00  024:00:00
Monday   000:00:00  024:00:00  024:00:00  048:00:00
Tuesday  000:00:00  024:00:00  048:00:00  072:00:00
Wednesday 000:00:00  024:00:00  072:00:00  096:00:00
Thursday 000:00:00  024:00:00  096:00:00  120:00:00
Friday   000:00:00  024:00:00  120:00:00  144:00:00
Saturday 000:00:00  024:00:00  144:00:00  168:00:00

Schedule:          user
Type:              UBAK (2)
Frequency:         1 day(s) (86400 seconds)
Retention Level:  0 (1 week)
u-wind/o/d:       0 0
Incr Type:        DELTA (0)
Incr Depends:     (none defined)
Max Frag Size:    0 MB (1048576 MB)
Maximum MPX:      1
  Number copies:1
  Fail on Error:0
  Residence:       (specific storage unit not required)
Volume Pool:      (same as policy volume pool)
Daily Windows:
```

Day	Open	Close	W-Open	W-Close
Sunday	000:00:00	024:00:00	000:00:00	024:00:00
Monday	000:00:00	024:00:00	024:00:00	048:00:00
Tuesday	000:00:00	024:00:00	048:00:00	072:00:00
Wednesday	000:00:00	024:00:00	072:00:00	096:00:00
Thursday	000:00:00	024:00:00	096:00:00	120:00:00
Friday	000:00:00	024:00:00	120:00:00	144:00:00
Saturday	000:00:00	024:00:00	144:00:00	168:00:00

例 6- 午後 11 時から午前 0 時の時間帯に新しいスケジュール full を追加します。2 番目の bppsched を実行すると、スケジュール full の情報が表示されます。

```
# bppsched elevenpm -add full -window 82800 3600
bppsched elevenpm -U -label full
Schedule:          FULL (0)
Type:              Full Backup
Frequency:         every 7 days (604800 seconds)
Retention Level:  1 (2 weeks)
Maximum MPX:      1
  Number copies:  1
  Fail on Error:  0
  Residence:      (specific storage unit not required)
Volume Pool:      (same as policy volume pool)
Daily Windows:
  Sunday  23:00:00 --> Sunday  24:00:00
  Monday  23:00:00 --> Monday  24:00:00
  Tuesday 23:00:00 --> Tuesday 24:00:00
  Wednesday 23:00:00 --> Wednesday 24:00:00
  Thursday 23:00:00 --> Thursday 24:00:00
  Friday  23:00:00 --> Friday  24:00:00
  Saturday 23:00:00 --> Saturday 24:00:00
```

例 7 - 午前 6 時から午前 10 時の時間帯に dup_tape1 という SLP スケジュールを追加します。事前定義済みのポリシー名 SLP_internal_policy と UBAK スケジュール形式を使います。この時間帯にはプロパティはありません。

```
# bppsched SLP_internal_policy -add dup_tape1 -window 21600 14400
-st UBAK -slpwindow
```

例 8 - システムに作成した SLP ウィンドウを表示します。出力は 2 つのスケジュールの属性をすべて表示します。

```
# bppsched -slpwindow -L
Schedule:          Default_24x7_Window
```

```

Type:                UBAK (2)
Frequency:           7 day(s) (604800 seconds)
Excluded Dates-----
    No specific exclude dates entered
    No exclude days of week entered
Retention Level:     0 (1 hour)
u-wind/o/d:          0 0
Incr Type:           DELTA (0)
Alt Read Host:       (none defined)
Max Frag Size:       0 MB
PFI Recovery:        0
Maximum MPX:         1
Number Copies:       1
Fail on Error:       0
Residence:           (specific storage unit not required)
Volume Pool:         (same as policy volume pool)
Server Group:        (same as specified for policy)
Residence is Storage Lifecycle Policy:      0
Schedule indexing:   0
Daily Windows:
  Day      Open      Close      W-Open      W-Close
  Sunday   000:00:00  024:00:00  000:00:00  024:00:00
  Monday   000:00:00  024:00:00  024:00:00  048:00:00
  Tuesday  000:00:00  024:00:00  048:00:00  072:00:00
  Wednesday 000:00:00  024:00:00  072:00:00  096:00:00
  Thursday 000:00:00  024:00:00  096:00:00  120:00:00
  Friday   000:00:00  024:00:00  120:00:00  144:00:00
  Saturday 000:00:00  024:00:00  144:00:00  168:00:00

```

```

Schedule:            Overnight
Type:                UBAK (2)
Frequency:           7 day(s) (604800 seconds)
Excluded Dates-----
    No specific exclude dates entered
    No exclude days of week entered
Retention Level:     0 (1 hour)
u-wind/o/d:          0 0
Incr Type:           DELTA (0)
Alt Read Host:       (none defined)
Max Frag Size:       0 MB
PFI Recovery:        0
Maximum MPX:         1
Number Copies:       1

```

```
Fail on Error:          0
Residence:              (specific storage unit not required)
Volume Pool:            (same as policy volume pool)
Server Group:           (same as specified for policy)
Residence is Storage Lifecycle Policy:      0
Schedule indexing:     0
Daily Windows:
  Day      Open      Close      W-Open      W-Close
  Sunday   020:00:00  030:00:00  020:00:00  030:00:00
  Monday   020:00:00  030:00:00  044:00:00  054:00:00
  Tuesday  020:00:00  030:00:00  068:00:00  078:00:00
  Wednesday 020:00:00  030:00:00  092:00:00  102:00:00
  Thursday 020:00:00  030:00:00  116:00:00  126:00:00
  Friday   020:00:00  030:00:00  140:00:00  150:00:00
  Saturday 020:00:00  030:00:00  164:00:00  174:00:00  006:00:00
```

ファイル

UNIX システムの場合:

```
/usr/opensv/netbackup/logs/admin/*
/usr/opensv/netbackup/db/policy/policy_name/schedule
```

Windows システムの場合:

```
install_path\NetBackup\logs\admin\*
install_path\NetBackup\db\policy\policy_name\schedule
```

関連項目

p.318 の [bpllschedrep](#) を参照してください。

bppschedrep

bppschedrep – NetBackup スケジュールの属性の変更

概要

```

bppschedreppolicy_name sched_label [ -M master_server,... ] [-v]
[-generation generation] [-st sched_type] [-freq backup_frequency]
[-mpxmax mpx_factor] [-cal 0|1|2] [-incl mm/dd/yyyy] [-excl
mm/dd/yyyy] [-delincl mm/dd/yyyy] [-delexcl mm/dd/yyyy] [-weekday
day_name week [day_name week]...] [-dayomonth 1-31 [1-31]... | 1]
[-xweekday day_name week [day_name week]...] [-xdayomonth 1-31
[1-31]... | 1] [-deldayomonth 1-31 [1-31]... | 1] [-delweekday
day_name week [day_name week]...] [-ci] [-ce] [-cw] [-cd]
[-number_copies number] [-rl retention_level[,rl-copy2,...]]
[-fail_on_error 0|1[,0|1,...,0|1]] [-residence storage_unit_label
[,stunit_copy2,...]] [-pool volume_pool_label [,pool_copy2,...]] [-sg
share_group [,share_copy2,...]] [-(0..6) start duration] [-res_is_stl
0 | 1] [-reason "string"] [-slpwindow]

```

UNIX システムでは、このコマンドのディレクトリパスは
/usr/opensv/netbackup/bin/admincmd/ です。

Windows システムでは、このコマンドのディレクトリパスは
<install_path>%NetBackup%\bin\admincmd\ です。

機能説明

bppschedrep を実行すると、定義済みのポリシーに対する NetBackup スケジュールの属性を変更できます。このコマンドを実行する場合、bppschedrep で指定したスケジュールおよびポリシーが存在している必要があります。-M オプションを指定して bppschedrep を実行すると、指定されている各マスターサーバーのスケジュールが変更されます。

-slpwindow オプションを指定すると、時間帯に基づくストレージライフサイクルポリシー (SLP) のスケジュールを設定できます。サポートされるのは開始時刻と終了時刻だけです。事前定義済みのポリシー名 SLP_Internal_Policy を使い、スケジュール形式は UBAK (ユーザーバックアップ) にする必要があります。

このコマンドは、すべての認可済みユーザーが実行できます。

NetBackup による認可について詳しくは、次を参照してください。『NetBackup セキュリティおよび暗号化ガイド』。

オプション

- (0..6) start duration

このオプションでは、このスケジュールのバックアップが **NetBackup** で実行可能な時間帯を指定します。この時間帯は、指定した曜日に適用します。0 (ゼロ) が日曜日、1 が月曜日、のように対応します。

start には、このスケジュールのバックアップ処理時間帯の始めの時刻を指定します。これは午前 0 時からの秒数です。0 から 86400 (1 日の秒数) の整数で指定します。

duration には、継続する処理時間の長さを指定します。時間単位は秒です。この単位には、負でない整数を指定します。

-cal 0|1|2

このオプションでは、bpplschedrep でカレンダーを基準としたスケジュールを指定するか、または間隔を基準としたスケジュールを指定するかを選択します。

0 (ゼロ) = 間隔を基準としたスケジュール

1 = 実行日以後に再試行しない、カレンダーを基準としたスケジュール

2 = 実行日以後に再試行する、カレンダーを基準としたスケジュール

-dayomonth 1-31 [1-31]... | 1

このオプションでは、毎月スケジュールを実行する日を指定します。月の日数が 28、29、30 または 31 日のどれであるかにかかわらず、毎月の月末日にスケジュールを実行するには、l (小文字の L) を入力します。

たとえば、毎月 14 日と 28 日にポリシーのバックアップを実行するには、次のコマンドを入力します。

```
-dayomonth 14 28
```

毎月の月末日に実行するには、次のコマンドを入力します。

```
-dayomonth l
```

-deldayomonth 1-31 [1-31]... | 1

このオプションでは、毎月実行日として除外する日を指定します。月の日数が 28、29、30 または 31 日のどれであるかにかかわらず、毎月の月末日をスケジュールから除外するには、l (小文字の L) を入力します。このコマンドでは、-dayomonth コマンドを使用して追加された日付のみ削除できます。

たとえば、毎月の実行日として指定していた 20 日と 21 日をスケジュールから除外するには、次のコマンドを入力します。

```
-deldayomonth 20 21
```

`-delweekday day_name week [day_name week]...`

このオプションでは、スケジュールの実行日から除外する曜日および週を指定します。このコマンドでは、`-weekday` コマンドを使用して追加された日付のみ削除できます。

- **day_name** には、**Sunday**、**Monday**、**Tuesday**、**Wednesday**、**Thursday**、**Friday** または **Saturday** を指定します。
- **week** には、月の何週目であるかを指定します。週は日曜日から土曜日までです。有効な値は **1** から **5** までです。

たとえば、実行日として指定していた第 2 月曜日を除外するには、次のコマンドを入力します。

```
-delweekday Monday 2
```

`-excl mm/dd/yyyy`

このオプションを指定すると、指定した日が除外されます。

`-delincl mm/dd/yyyy`

このオプションを指定すると、指定した除外日が削除されます。このコマンドでは、`-incl` コマンドを使用して追加された日付のみ削除できます。

`-delexcl mm/dd/yyyy`

このオプションを指定すると、指定した除外日が削除されます。

`-ci`

このオプションを指定すると、設定したすべての実行日がクリアされます。

`-ce`

このオプションを指定すると、設定したすべての除外日がクリアされます。

`-cw`

このオプションを指定すると、設定したすべての週/曜日指定がクリアされます。

`-cd`

このオプションを指定すると、設定したすべての日付指定 (毎月スケジュールを実行する日) がクリアされます。

`-fail_on_error 0|1[,0|1,...,0|1]`

このオプションでは、**1**つのコピーが失敗した場合、他のすべてのコピーを失敗にするかどうかを指定します。パラメータを指定しない場合、すべてのコピーに対して **0** (ゼロ) がデフォルトとなります。値は、コピーごとに指定します。

0 (ゼロ) - 他のコピーを失敗にしません

1 - 他のコピーを失敗にします

-freq *backup_frequency*

このオプションでバックアップ間隔を指定すると、このスケジュールで正常に完了したクライアント自動バックアップの間隔を制御できます。ユーザーはバックアップ処理時間帯中にいつでもバックアップまたはアーカイブを行うことができるため、間隔はユーザースケジュールには適用されません。この値は正の整数で指定し、このスケジュールで正常に完了した自動バックアップの間隔の秒数を表します。

-help

コマンドラインに、この **-help** オプションだけを指定すると、コマンドラインの使用方法を示すメッセージが出力されます。

-generation *generation*

このオプションを指定すると、コマンドがポリシーの特定の世代またはバージョンに対して機能することが確認されます。世代の値は、ポリシーが保存されるたびに大きくなります。bpplinfo または bpspllist を使用すると、現在の世代の値を表示できます。世代が示されない場合は、コマンドは現在のバージョンに対して実行されません。

-incl *mm/dd/yyyy*

このオプションを指定すると、指定した日だけが含まれます。

-M *master_server,...*

このオプションでは、代替マスターサーバーのリストを指定します。このリストは、カンマで区切られたホスト名のリストです。このオプションを指定すると、一覧表示されている各マスターサーバーで bppschedrep が実行されます。リストに示される各マスターサーバーでは、bppschedrep を発行するシステムからのアクセスが許可されている必要があります。マスターサーバーでエラーが発生した場合、その時点で処理が停止します。

指定されているすべてのマスターサーバーで、スケジュールの属性が変更されます。

-mpxmax *mpx_factor*

このオプションでは、スケジュールの最大多重化因数を指定します。多重化を実行すると、1 つ以上のクライアントからある 1 台のドライブへ複数のバックアップが並列して送信されます。

多重化因数は、NetBackup Server で 1 から 8、NetBackup Enterprise Server で 1 から 32 の範囲で指定できます。値が 1 の場合、多重化されないことを示します。値が 1 より大きい場合、NetBackup によって宛先メディアに多重化されたイメージが作成されます。この多重化因数には、ストレージユニットの多重化因数以下を指定する必要があります。

多重化について詳しくは、次を参照してください。『NetBackup 管理者ガイド Vol. 1』。

`-number_copies number`

このオプションでは、並列実行バックアップコピーの数を指定します。最小値は1です。最大値は4または[バックアップコピーの最大数 (Maximum Backup Copies)]グローバルパラメータの小さい方の値です。デフォルトは1です。

`policy_name`

このオプションでは、スケジュールを含むポリシー名を指定します。このポリシーは事前に作成済みです。

`-pool volume_pool_label [,pool-copy2,...]`

このオプションでは、スケジュールのボリュームプールを指定します。ディスクストレージユニットがスケジュールの位置情報である場合、このオプションは指定しないでください。[*NULL*]を指定した場合、このスケジュールを含むポリシーのボリュームプールがスケジュールのボリュームプールになります。

プールはコピーごとに指定します。

構成済みのボリュームプールを表示するには、次のコマンドを実行します。

```
UNIX systems: /usr/opensv/volmgr/bin/vmpool -listall
```

```
Windows systems: install_path¥Volmgr¥bin¥vmpool -listall
```

`-reason "string"`

このコマンド処理を選択する理由を示します。入力する理由の文字列は取得され、監査レポートに表示されます。この文字列は二重引用符 ("...") で囲んでください。文字列が512文字を超えないようにしてください。それはハイフンの文字 (-) から始まり単一の引用符 (') を含む場合がありません。

`-res_is_stl 0 | 1`

ストレージユニットの名前とストレージライフサイクルポリシーの名前が同じ場合にのみ、このフラグを指定します。他のすべての場合で、このフラグは無視されます。指定可能な値は次のとおりです。

0 - 位置情報は非ストレージライフサイクルポリシーです

1 - 位置情報はストレージライフサイクルポリシーです

`-residence storage_unit_label[,stunit-copy2,...]`

このオプションでは、このスケジュールに従って作成されたバックアップの格納に使用されるストレージユニットのラベルを指定します。[*NULL*]を指定した場合、このスケジュールを含むポリシーの位置情報がスケジュールの位置情報のデフォルトになります。位置情報の値がストレージユニットのラベルである場合、スケジュールの位置情報がストレージユニットになり、ポリシーの位置情報より優先されます。

ストレージユニットはコピーごとに指定します。

bpstulist を実行すると、定義済みのストレージユニットの設定が表示されます。

`-rl retention_level[,rl-copy2,...]`

このオプションでは、スケジュールを使用して作成されたバックアップが **NetBackup** によって保持される期間を指定します。有効な保持レベルおよびそれに対応するデフォルトについては、後述の説明を参照してください。

保持レベルはコピーごとに指定します。

注意: 各レベルに対応する保持期間は、**NetBackup** 管理インターフェースを使用して変更できます。したがって、ユーザー構成では、各レベルに対してここに示す値と異なる値が使用されている場合があります。このコマンドを実行して変更を行う前に、**NetBackup** 管理インターフェースを使用して実際の保持期間を決定します。

これを行わない場合、バックアップが予定より前に期限切れになり、データが失われる可能性があります。

0	1 週間
1	2 週間
2	3 週間
3	1 か月
4	2 か月
5	3 か月
6	6 か月
7	9 か月
8	1 年
9 - 24	無制限

バックアップの情報は、指定された期間 **NetBackup** によって保持されます。期間が終了すると、**NetBackup** によってバックアップの情報が削除されます。情報が削除されたバックアップのファイルはリストアできません。ボリューム上のすべてのバックアップが期限切れになると、ボリュームを再度割り当てることができます。

`sched_label`

このオプションでは、変更するスケジュール名を指定します。このスケジュールは事前に作成済みです。

`-sg share_group [,share_copy2,...]`

このオプションでは、スケジュールの共有グループを指定します。スケジュールがディスクストレージユニット上にある場合は、このオプションは指定しないでください。

NONE を指定した場合、このポリシーによって書き込まれたメディアは、書き込み先のメディアサーバーによって所有されます。***ANY*** を指定した場合、**EMM** によってメディアの所有者が選択されます。デフォルト値は、***ANY*** です。それ以外の値を選択した場合、メディアは指定した共有グループによって所有されます。各コピーに対して共有グループを指定して、構成された共有グループを表示します。次のように入力します。

```
UNIX systems: /usr/opensv/netbackup/bin/admincmd/nbsvrgrp
             -list -summary
```

```
Windows systems: install_path¥NetBackup¥bin¥admincmd¥nbsvrgrp
                -list -summary
```

-slpwindow

SLP_internal_policy の時間帯を追加または削除します。

-st *sched_type*

このオプションでは、このスケジュールで実行されるバックアップ形式を指定します。スケジュール形式は、自動カテゴリまたはユーザーカテゴリに分類されます。自動スケジュールでは、このポリシーで **NetBackup** スケジューラがバックアップを開始できる範囲の時間帯で時間帯が定義されます。

ユーザースケジュールでは、ユーザーがバックアップまたはアーカイブを開始できる時間帯で時間帯が定義されます。

次に、スケジュール形式として指定可能な値を示します。

FULL	(完全バックアップ)
INCR	(差分増分バックアップ)
CINC	(累積増分バックアップ)
UBAK	(ユーザーバックアップ)
UARC	(ユーザーアーカイブ)

-weekday *day_name week [day_name week]...*

このオプションでは、スケジュールの実行日として曜日と週を指定します。

- **day_name** には、**Sunday**、**Monday**、**Tuesday**、**Wednesday**、**Thursday**、**Friday** または **Saturday** を指定します。
- **week** には、月の何週目であるかを指定します。週は日曜日から土曜日までです。有効な値は **1** から **5** までです。

たとえば、毎週日曜日に実行するようにポリシーで指定するには、次のコマンドを入力します。

```
-weekday Sunday 1 Sunday 2 Sunday 3 Sunday 4 Sunday 5
```

-v

このオプションを指定すると、詳細モードが選択されます。このオプションを指定して `bppschedrep` を実行すると、デバッグに使用するための追加情報がログに書き込まれます。追加情報は **NetBackup** 管理の日次デバッグログに記録されます。このオプションは、**NetBackup** でデバッグログ機能が有効になっている場合、つまり次のディレクトリが定義されている場合にだけ有効です。

```
UNIX systems: /usr/opensv/netbackup/logs/admin
```

```
Windows systems: install_path¥NetBackup¥logs¥admin
```

```
-xdayomonth 1-31 [1-31]... | 1
```

このオプションでは、スケジュールの実行日から除外する日付を指定します。月の最終日を指定するには `1` (小文字の `L`) を使います。

たとえば、6日にバックアップを実行しないようにポリシーで指定するには、次のコマンドを入力します。

```
-xdayomonth 6
```

```
-xweekday day_name week [day_name week]...
```

このオプションでは、スケジュールの実行日から除外する曜日と週を指定します。

- `day_name` には、**Sunday**、**Monday**、**Tuesday**、**Wednesday**、**Thursday**、**Friday** または **Saturday** を指定します。
- `week` には、月の何週目であるかを指定します。
- 月の最後の週を指定するには `1` を使います。週は日曜日から月曜日までです。有効な値は `1` から `5` までです。

たとえば、第3月曜日と第3水曜日には実行しないようにポリシーで指定するには、次のコマンドを入力します。

```
-xweekday Monday 3 Wednesday 3
```

例

例 1 - スケジュールの間隔を設定します。

```
# bppschedrep mkbpolicy incr -freq 604800
```

これによって、ポリシー `mkbpolicy` のスケジュール `incr` で実行される自動バックアップの間隔が 1 週間に設定されます。

例 2 - 毎週土曜日および日曜日に、ポリシー `mkbpolicy` のスケジュール `full` の開始時刻を、午後 11 時ではなく午後 10 時に設定します。また、時間帯を 1 時間ではなく 2 時

間に設定します。bppschedrep を実行して、時間帯をリセットし、bppsched を実行して、新しいスケジュールの値を表示します。

```
# bppschedrep newpolicy full -0 79200 7200 -6 79200 7200
# bppsched newpolicy -U -label full
Schedule:          full
Type:              Full Backup
Frequency:         every 7 days
Retention Level:  1 (2 weeks)
Maximum MPX:      1
Residence:         (specific storage unit not required)
Volume Pool:      (same as policy volume pool)
Daily Windows:
  Sunday  22:00:00  -->  Sunday  24:00:00
  Monday  23:00:00  -->  Monday  24:00:00
  Tuesday 23:00:00  -->  Tuesday  24:00:00
  Wednesday 23:00:00 -->  Wednesday 24:00:00
  Thursday 23:00:00 -->  Thursday  24:00:00
  Friday   23:00:00 -->  Friday    24:00:00
  Saturday 22:00:00 -->  Saturday  24:00:00
```

例 3 - SLP スケジュール dup_tape1 の時間帯を午前 6 時から午前 10 時までに変更します。事前定義済みのポリシー名 SLP_internal_policy と UBAK スケジュール形式を使います。この時間帯にはプロパティはありません。

```
# bppschedrep SLP_internal_policy -add dup_tape1 -window 21600 14400
-st UBAK -slpwindow
```

ファイル

UNIX システムの場合:

```
/usr/opensv/netbackup/logs/admin/*
/usr/opensv/netbackup/db/policy/policy_name/schedule
```

Windows システムの場合:

```
install_path\NetBackup\logs\admin\*
install_path\NetBackup\db\policy\policy_name\schedule
```

関連項目

p.301 の [bppsched](#) を参照してください。

bppolicynew

bppolicynew – NetBackup ポリシーの作成、コピーまたは名前の変更

概要

```
bppolicynewpolicy_name [-verbose] [-M master_server,...] [-reason "string"]  
bppolicynewpolicy_name -sameas existing_policy_name [-verbose] [-M master_server,...] [-reason "string"]  
bppolicynewexisting_policy_name -renameto policy_name [-verbose] [-M master_server,...] [-reason "string"]
```

UNIX システムでは、このコマンドのディレクトリパスは /usr/opensv/netbackup/bin/admincmd/ です。

Windows システムでは、このコマンドのディレクトリパスは <install_path>%NetBackup%bin%admincmd% です。

機能説明

bppolicynew によって、NetBackup ポリシーで次のいずれかの操作が実行されます。

- デフォルトの属性値を使用して新しいポリシーを作成します。
- 既存のポリシーと同じ属性を使用して新しいポリシーを作成します。
- 既存のポリシー名を変更します。

-sameas または -renameto を同時に指定せずに bppolicynew を実行した場合、デフォルトの属性値を使用して新しい NetBackup ポリシーが作成されます。-M オプションを指定した場合、各マスターサーバーのポリシーの定義に使用されるデフォルトが、マスターサーバーのデフォルトになります。

bppolicynew を実行すると、新しいポリシーを NetBackup データベースに追加することによってポリシーのコピーが取られます。新しいポリシーのクライアント、ファイル、スケジュールおよび属性は、既存のポリシーと同じです。bppolicynew を実行した場合、既存のポリシーと同じ名前を持つポリシーのコピーは作成されません。

bppolicynew を実行してポリシー名を変更すると、ポリシーに対する既存のイメージの関連付けが失われます。これは、名前が変更されたポリシーに対するイメージのリストに、ポリシー名が変更される前に作成されたイメージが含まれないことを意味します。このコマンドを実行しても、ポリシー名は既存のポリシーと同じ名前に変更されません。

bpplinfo を実行すると、ポリシー属性のデフォルトが新しい値に置き換えられます。bpplclients、bpplinclude および bpplsched を実行すると、ポリシーのクライアント、バックアップファイルおよびスケジュールが定義されます。自動バックアップを実行する前

に、ポリシーには 1 つ以上のクライアント、1 つのファイルの指定および 1 つの自動スケジュールが必要です。

bppolicynew のエラーメッセージは、標準エラー出力 (stderr) に送信されます。また、bppolicynew のデバッグログは、現在の日付の NetBackup 管理ログファイルに送信されます。

このコマンドは、認可済みユーザーが開始できます。

NetBackup による認可について詳しくは、次を参照してください。『[NetBackup セキュリティおよび暗号化ガイド](#)』。

ポリシーについて詳しくは、次を参照してください。『[NetBackup 管理者ガイド Vol. 1](#)』。

オプション

policy_name

bppolicynew によって作成される NetBackup ポリシー名、または bppolicynew によって変更される既存のポリシー名を指定します。このオプションには、デフォルト値は存在しません。

このポリシー名は、既存のすべてのポリシー名と異なる必要があります。数値、アルファベット、プラス、マイナス、アンダースコアおよびピリオドを使用して構成します。マイナスは、文字の先頭に使用できません。また、文字と文字の間に空白を入れないでください。

existing_policy_name

bppolicynew の実行時にすでに存在していた NetBackup ポリシー名を指定します。このオプションには、デフォルト値が存在しません。

-renameto

このオプションを指定すると、既存のポリシー名が新しいポリシー名に変更されます。

-sameas

このオプションを指定すると、既存のポリシーから属性をコピーして、新しいポリシーが作成されます。

-help

コマンドラインの使用法を示すメッセージを出力します。

-M *master_server,...*

このオプションでは、カンマで区切られたマスターサーバーのホスト名のリストを指定します。このオプションを指定すると、一覧表示されている各マスターサーバーでコマンドが実行されます。サーバーでは、コマンドを発行したシステムからのアクセスが許可されている必要があります。エラーが発生した場合、その時点でリスト内の処理が停止します。デフォルトは、コマンドが入力されるシステムのマスターサーバーです。

`-reason "string"`

このコマンド処理を選択する理由を示します。入力する理由の文字列は取得され、監査レポートに表示されます。この文字列は二重引用符 ("...") で囲んでください。文字列が 512 文字を超えないようにしてください。それはハイフンの文字 (-) から始まり単一の引用符 (') を含む場合があります。

`-verbose`

このオプションを指定すると、ログの詳細モードが選択されます。このオプションは、デバッグログ機能が有効になっている場合、つまり次のディレクトリが定義されている場合にだけ有効です。

UNIX systems: /usr/opensv/netbackup/logs/admin

Windows systems: *install_path*¥NetBackup¥logs¥admin

`policy_name`

bppolicynew によって作成される **NetBackup** ポリシー名、または bppolicynew によって変更される既存のポリシー名を指定します。このオプションには、デフォルト値は存在しません。

このポリシー名は、既存のすべてのポリシー名と異なる必要があります。数値、アルファベット、プラス、マイナス、アンダースコアおよびピリオドを使用して構成します。マイナスは、文字の先頭に使用できません。また、文字と文字の間に空白を入れないでください。

`existing_policy_name`

bppolicynew の実行時にすでに存在していた **NetBackup** ポリシー名を指定します。このオプションには、デフォルト値が存在しません。

`-renameto`

このオプションを指定すると、既存のポリシー名が新しいポリシー名に変更されます。

`-sameas`

このオプションを指定すると、既存のポリシーから属性をコピーして、新しいポリシーが作成されます。

`-help`

コマンドラインの使用法を示すメッセージを出力します。

`-M master_server,...`

このオプションでは、カンマで区切られたマスターサーバーのホスト名のリストを指定します。このオプションを指定すると、一覧表示されている各マスターサーバーでコマンドが実行されます。サーバーでは、コマンドを発行したシステムからのアクセスが許可されている必要があります。エラーが発生した場合、その時点でリスト内の処理が停止します。デフォルトは、コマンドが入力されるシステムのマスターサーバーです。

-verbose

このオプションを指定すると、ログの詳細モードが選択されます。このオプションは、デバッグログ機能が有効になっている場合、つまり次のディレクトリが定義されている場合にだけ有効です。

```
UNIX systems: /usr/opensv/netbackup/logs/admin
```

```
Windows systems: install_path¥NetBackup¥logs¥admin
```

例

この例の[NFS マウントをたどる (Follow NFS Mounts)]の項目は、NetBackup Enterprise Server だけに適用されることに注意してください。

例 1 - マスターサーバー *plim* でデフォルトの属性値を使用したポリシーを作成します。

```
# bppolicynew ishkabibble -M plim
```

```
# bpllist ishkabibble -U -M plim
```

```
-----
Policy Name:          ishkabibble
Policy Type:          Standard
Active:               yes
Client Compress:      no
Follow NFS Mounts:   no
Cross Mount Points:  no
Collect TIR info:     no
Block Incremental:   no
Mult. Data Streams:  no
Client Encrypt:       no
Policy Priority:      0
Max Jobs/Policy:     99
Disaster Recovery:    0
Residence:            (specific storage unit not required)
Volume Pool:          NetBackup
Keyword:              (none specified)

Clients:              (none defined)

Include:              (none defined)

Schedule:             (none defined)
```

例 2 - 既存のポリシー *mypolicy* から新しいポリシー *mypolicy_copy* を作成します。bpllist で、*mypolicy_copy* の属性が *mypolicy* と同じであることを示します。簡易な表示のため、ここでは多くのスケジュール情報が省略されています。

```
# bppolicynew mypolicy_copy -sameas mypolicy
# bppllist mypolicy_copy -U
-----
Policy Name:          mypolicy_copy
Policy Type:          Standard
Active:               yes
Client Compress:      no
Follow NFS Mounts:   no
Cross Mount Points:  no
Collect TIR info:    no
Block Incremental:   no
Mult. Data Streams:  no
Client Encrypt:       no
Policy Priority:      0
Max Jobs/Policy:     99
Disaster Recovery:   0
Residence:            myunit
Volume Pool:          NetBackup
Keyword:              (none specified)

HW/OS/Client: Linux          RedHat          zippity

Include: /tmp/my

Schedule:             full
Type:                 Full Backup
Frequency:             every 7 days
Maximum MPX:          1
Retention Level: 0 (1 week)
Residence:             (specific storage unit not required)
Volume Pool:           (same as policy volume pool)
Daily Windows:
    Sunday 00:00:00 --> Sunday 08:00:00
    Monday 00:00:00 --> Monday 08:00:00
    Tuesday 00:00:00 --> Tuesday 08:00:00
    Wednesday 00:00:00 --> Wednesday 08:00:00
    Thursday 00:00:00 --> Thursday 08:00:00
    Friday 00:00:00 --> Friday 08:00:00
    Saturday 00:00:00 --> Saturday 08:00:00

Schedule:             incr
Type:                 Differential Incremental Backup
```

```
# bppolicynew mypolicy_copy -sameas mypolicy
# bppllist mypolicy -U
-----
Policy Name:          mypolicy
Policy Type:         Standard
Active:              yes
Client Compress:     no
Follow NFS Mounts:  no
Cross Mount Points: no
Collect TIR info:   no
Block Incremental:  no
Mult. Data Streams: no
Client Encrypt:      no
Policy Priority:     0
Max Jobs/Policy:    99
Disaster Recovery:  0
Residence:           myunit
Volume Pool:         NetBackup
Keyword:             (none specified)

HW/OS/Client: Linux          RedHat          zippity

Include: /tmp/my

Schedule:            full
Type:                Full Backup
Frequency:           every 7 days
Maximum MPX:        1
Retention Level:    0 (1 week)
Residence:           (specific storage unit not required)
Volume Pool:         (same as policy volume pool)
Daily Windows:
    Sunday  00:00:00 --> Sunday  08:00:00
    Monday  00:00:00 --> Monday  08:00:00
    Tuesday 00:00:00 --> Tuesday 08:00:00
    Wednesday 00:00:00 --> Wednesday 08:00:00
    Thursday 00:00:00 --> Thursday 08:00:00
    Friday  00:00:00 --> Friday  08:00:00
    Saturday 00:00:00 --> Saturday 08:00:00

Schedule:            incr
Type:                Differential Incremental Backup
```

```
# bppllist mypolicy_copy -U
```

```
-----  
Policy Name:          mypolicy_copy  
Policy Type:          Standard  
Active:               yes  
Client Compress:      no  
Follow NFS Mounts:   no  
Cross Mount Points:  no  
Collect TIR info:    no  
Block Incremental:   no  
Mult. Data Streams:  no  
Client Encrypt:       no  
Policy Priority:      0  
Max Jobs/Policy:     99  
Disaster Recovery:   0  
Residence:            myunit  
Volume Pool:          NetBackup  
Keyword:              (none specified)  
  
HW/OS/Client: Linux      RedHat      zippity  
  
Include: /tmp/my  
  
Schedule:            full  
Type:                Full Backup  
Frequency:           every 7 days  
Maximum MPX:         1  
Retention Level: 0 (1 week)  
Residence:           (specific storage unit not required)  
Volume Pool:         (same as policy volume pool)  
Daily Windows:  
    Sunday 00:00:00 --> Sunday 08:00:00  
    Monday 00:00:00 --> Monday 08:00:00  
    Tuesday 00:00:00 --> Tuesday 08:00:00  
    Wednesday 00:00:00 --> Wednesday 08:00:00  
    Thursday 00:00:00 --> Thursday 08:00:00  
    Friday 00:00:00 --> Friday 08:00:00  
    Saturday 00:00:00 --> Saturday 08:00:00  
  
Schedule:            incr  
Type:                Differential Incremental Backup
```

例 3 - ポリシー名を `policy_old` から `policy_new` に変更します。 `bppllist` を実行すると、名前の変更前および変更後に、NetBackup 構成データベースに存在するポリシーが表示されます。

```
bppllist
  mypolicy
  policy_old
  test
bppolicynew policy_old -renameto policy_new
bppllist
  mypolicy
  policy_new
  test
```

戻り値

終了状態が 0 (ゼロ) の場合は、コマンドが正常に実行されたことを意味します。

終了状態が 0 (ゼロ) 以外の場合は、エラーが発生したことを意味します。

管理ログ機能が有効になっている場合、終了状態は、 `bppllist` によって次のログディレクトリ内の管理日次ログに書き込まれます。

```
UNIX systems: /usr/opensv/netbackup/logs/admin
```

```
Windows systems: install_path¥NetBackup¥logs¥admin
```

次の形式が使用されます。

```
bppolicynew: EXIT status = exit status
```

エラーが発生した場合、このメッセージの前に診断が表示されます。

ファイル

UNIX システムの場合:

```
/usr/opensv/netbackup/logs/admin/*
/usr/opensv/netbackup/db/policy/policy_name
```

Windows システムの場合:

```
install_path¥NetBackup¥logs¥admin¥*
install_path¥NetBackup¥db¥policy¥policy_name
```

関連項目

- p.264 の [bpplclients](#) を参照してください。
- p.281 の [bpplinfo](#) を参照してください。
- p.301 の [bpplsched](#) を参照してください。
- p.272 の [bppldelete](#) を参照してください。
- p.296 の [bppllist](#) を参照してください。

bpps

bpps - 各プロセスのすべての情報と統計の表示

概要

```
bpps [-l | -s | -S] [-t sample_time[m]] [-i | -x process_group] ...  
[host_name] ...
```

```
<install_path>%NetBackup%bin\bpps -? [process_group ...]
```

このコマンドのディレクトリパスは <install_path>%NetBackup%bin% です。

機能説明

このコマンドは **Windows** システムでのみ動作します。

bpps コマンドを実行すると、システム上で実行されている、**NetBackup** 関連のすべてのプロセス情報が表示されます。このコマンドによって、特定のプロセスグループを表示できます。また、プロセスを表示する前にサンプル時間を秒 (またはミリ秒) 単位で指定できます。

メモ: bpps によって使用されるコマンドオプションは、**UNIX** の bpps コマンドによって使用されるオプションと関係ありません。

オプション

-?

このオプションを指定すると、ヘルプ画面が表示されます。**process_group** を指定すると、プロセスのリストが表示されます。**-i** オプションまたは **-x** オプションで **process_group** を指定して、表示に含めたり除外したりすることができます。

-l

このオプションを指定すると、詳細形式のリストが出力されます。

-s

このオプションを指定すると、簡易形式のリストが出力されます (デフォルト)。

-S

このオプションを指定すると、ヘッダー情報 (ホスト名、日付などの列ヘッダー) を含まない簡易形式のリストが出力されます。

-t sample_time[m]

このオプションでは、サンプル時間 (デフォルトは **1** 秒) を指定します。サンプル時間は秒単位で指定しますが、末尾に **m** を付けるとミリ秒単位で指定できます。

- i *process_group*
このオプションを指定すると、リスト (デフォルトは、NB_ALL) に特定のプロセスグループを含めることができます。
- x *process_group*
このオプションを指定すると、リストから特定のプロセスグループを除外することができます。
- host_name*
このオプションでは、プロセスグループ情報のリストを表示するホストコンピュータの名前を指定します。

注意事項

次に、有効なすべてのプロセスグループのリストと、それぞれの簡単な説明を示します。

- MM_ALL
すべての **Media Manager** プロセス。
- MM_CLIS
Media Manager のコマンドラインプログラム。
- MM_CORE
Media Manager のコアプロセス。
- MM_GUIIS
Media Manager の GUI プログラム。
- MM_SERVICES
Media Manager のサービス。
- MM_UIS
Media Manager のユーザーインターフェースプログラム。
- MM_WORKERS
Media Manager のワーカープロセス。
- NB_ALL
NetBackup、**Media Manager** および **Advanced Reporter** のすべてのプロセス。
- NB_ALL_CLIS
NetBackup および **Media Manager** のすべてのコマンドラインプログラム。
- NB_ALL_CORE
NetBackup、**Media Manager** および **Advanced Reporter** のすべてのコアプロセス。
- NB_ALL_GUIIS
NetBackup および **Media Manager** のすべての GUI プログラム。

NB_ALL_SERVICES

NetBackup および **Media Manager** のすべてのサービス。

NB_ALL_UIS

NetBackup および **Media Manager** のすべてのユーザーインターフェースプログラム。

NB_ALL_WORKERS

NetBackup および **Media Manager** のすべてのワーカープロセス。

NB_CLIENT_ALL

すべての **NetBackup** クライアントプロセス。

NB_CLIENT_CLIS

NetBackup クライアントのコマンドラインプログラム。

NB_CLIENT_CORE

NetBackup クライアントのコアプロセス。

NB_CLIENT_GUI

NetBackup クライアントの GUI プログラム。

NB_CLIENT_SERVICES

NetBackup Client Service。

NB_CLIENT_UIS

NetBackup クライアントユーザーインターフェースプログラム。

NB_CLIENT_WORKERS

NetBackup クライアントのワーカープロセス。

NB_SERVER_ALL

すべての **NetBackup** サーバープロセス。

NB_SERVER_CLIS

NetBackup サーバーのコマンドラインプログラム。

NB_SERVER_CORE

NetBackup サーバーのコアプロセス。

NB_SERVER_GUI

NetBackup サーバーの GUI プログラム。

NB_SERVER_SERVICES

NetBackup サーバーサービス。

NB_SERVER_UIS

NetBackup サーバーのユーザーインターフェースプログラム。

NB_SERVER_WORKERS	NetBackup サーバーのワーカプロセス。
NBDB_SERVICES	NetBackup Database サービス。
NBDB_CLIS	NetBackup データベースのコマンドラインプログラム。
NBDB_ALL	すべての NetBackup Database プロセス。
VLT_CORE	Vault のコアプロセス。
VLT_GUI	Vault の GUI プログラム。
VLT_CLIS	Vault のコマンドラインプログラム。
VLT_UIS	Vault のユーザーインターフェースプログラム。
VLT_ALL	すべての Vault プロセス。
OTHER_PROCESSES	NB_ALL に含まれていないすべてのプロセス。

ファイル

`install_path¥NetBackup¥bin¥bp.conf`

bpps

bpps - システム上で実行されているプロセス情報の表示

概要

```
bpps [-a | -x]
```

The directory path to this command is /usr/opensv/netbackup/bin/

機能説明

このコマンドは **UNIX** システムでのみ動作します。

bpps コマンドを実行すると、システム上で実行されている、**NetBackup** 関連のすべてのプロセス情報が表示されます。

メモ: bpps によって使用されるコマンドオプションは、**Windows** の bpps コマンドによって使用されるオプションと関係ありません。

オプション

- a このオプションを指定すると、**Media Manager** プロセスがリストに含まれます。
- x このオプションを指定すると、**Media Manager** プロセス、および **pbx_exchange** などの拡張共有プロセスがリストに含まれます。

bprd

bprd – NetBackup Request デーモンの起動

概要

bprd [-verbose]

The directory path to this command is /usr/opensv/netbackup/bin/

機能説明

このコマンドは UNIX システムでのみ動作します。

bprd は、自動クライアントバックアップの開始、ファイルのリストアおよびユーザーバックアップやユーザーアーカイブのクライアント要求の応答をする役割をします。bprd は、マスターサーバー上だけで実行され、管理者だけが起動できます。

bprd を起動すると、次の手順が示されている順序で実行されます。

- 端末から実行すると、デーモンによって次の操作が実行されます。
 - デーモンが起動されていることを示すメッセージがログに書き込まれます。
 - bpdbm (NetBackup Database Manager) が起動されます。
 - 他の bprd のインスタンスが実行中でないことが検証されます。bprd の他のインスタンスが検出された場合、そのプログラムは終了されます。
- プログラムによって NetBackup 構成ファイルの属性が読み込まれ、古いエラーログファイルおよびデバッグログファイルが再利用されます。デバッグログおよびエラーログは、毎日再利用されます。
- bprd では、services ファイルでサービス名 bprd およびプロトコル名 tcp のエントリを確認することによって、bprd のポート番号が決定されます。たとえば、

```
bprd 13720/tcp
```

- ポートへのバインド後、プログラムは、自動クライアントバックアップのスケジュール、クライアントコンピュータからのファイルのリストア、ユーザーバックアップまたはユーザーアーカイブの要求の受け入れ、およびサーバーからの管理要求の受け入れを実行します。

bprd を終了するには、bprdreq -terminate を実行します。bprd を終了しても、bpdbm は終了されません。

オプション

-verbose

このオプションを指定して bprd を実行すると、デバッグに使用するための追加情報が日次デバッグログに書き込まれます。

ファイル

```
/usr/opensv/netbackup/db/*  
/usr/opensv/netbackup/bp.conf  
/usr/opensv/netbackup/logs/bprd/*  
/usr/opensv/netbackup/bin/initbprd  
/usr/opensv/netbackup/bin/initbpbdbm
```

関連項目

p.49 の [bpadm](#) を参照してください。

p.119 の [bpbdbm](#) を参照してください。

bprecover

bprecover – 選択された NetBackup 関連のカタログのリカバリ

概要

```
bprecover -wizard [-copy number]
bprecover -r -nbdb [-priority number] [-copy number] [-L output_file]
```

UNIX システムでは、このコマンドのディレクトリパスは
/usr/opensv/netbackup/bin/admincmd/ です。
Windows システムでは、このコマンドのディレクトリパスは
<install_path>%NetBackup%\bin\admincmd% です。

機能説明

bprecover コマンドを実行すると、NetBackup カatalogのリストアを行う NetBackup ユーティリティが開始されます。次に記載された手順で、バックアップしたカタログをリカバリします。『NetBackup 管理者ガイド Vol. 1』。bprecover は、カタログがディスク上で破損した場合だけに実行します。

bprecover には 3 つのモードがあります。

- -wizard はリカバリウィザードの使用によって NetBackup カatalog全体かカatalogイメージと構成ファイルをリカバリすることを可能にします。
- NBDB リカバリ (-r -nbdb) は NetBackup リレーショナルデータベースと BMR データベース (BMR が構成されている場合) をリカバリすることを可能にします。

Windows では、NetBackup カatalogバックアップはレジストリエントリをバックアップしません。NetBackup を再インストールする場合に、インストール時にメディアサーバー名を指定しないと、マスターサーバーはメディアサーバーを認識しません。bprecover コマンドはメディアサーバー、関連するストレージサーバー、ディスクプールを返します。これらのエントリがレジストリにないため、バックアップに失敗します。したがって、再インストール時にメディアサーバー名を指定するか、再インストール後に手動で、レジストリにメディアサーバー名を追加する必要があります。

このコマンドを実行するには、管理者権限が必要です。

オプション

-copy number

リカバリ操作のために使われるカatalogバックアップイメージのコピーの番号を指定します。このオプションはカatalogバックアップイメージのプライマリコピー以外のコピーからリストアします。

- `-L output_file`
指定済みの出力ファイルにリカバリの結果を報告します。
- `-nbdb`
カタログリカバリの実行中、このオプションを `-r` オプションと組み合わせて使用すると、NetBackup リレーショナルデータベース (NBDB) および BMR データベース (BMRDB) (BMR が構成されている場合) がリカバリされ、再同期化されます。
カタログのリカバリ手順については、次を参照してください。『[NetBackup トラブルシューティングガイド](#)』。
- `-priority number`
`-nbdb` でこのオプションを指定すると、NetBackup リレーショナルデータベースがリカバリされます。
- `-r`
指定済みのポリシー名からイメージをリカバリします。
- `-wizard`
このオプションを指定すると、リカバリウィザードと同じ機能をコマンドラインから実行できます。たとえば、ユーザーはカタログのディザスタリカバリファイルにフルパス名を指定するか、または NetBackup カタログ全体をリカバリできます。ウィザードによってカタログのディザスタリカバリファイルの指定を求められます。
`-copy` オプションはコピーの番号を選択することを可能にします。

メモ: オペレータは、リカバリされるマスターサーバーにローカルにログオンしなければなりません。

例

例 1 - NetBackup カタログ全体かカタログイメージと構成ファイルをリカバリします。Windows では、一連の画面に従ってリカバリ処理を行います。UNIX では、一連のプロンプトに従ってリカバリ処理を行います。

```
# bprecover -wizard
```

『[NetBackup トラブルシューティングガイド](#)』のディザスタリカバリ情報では、リカバリ処理の各手順を説明しています。

例 2 - NetBackup リレーショナルデータベースをリカバリし、`recovery.rpt` ファイルにリカバリの結果を報告します。

```
# bprecover -r -nbdb -L recovery.rpt
```


エラー

リカバリ操作中にエラーが発生した場合、**NetBackup** は `stderr` (UNIX システム) または **MS-DOS** コマンドウィンドウ (Windows システムで `bprecover` コマンドを実行する場合) のいずれかにエラーメッセージを書き込みます。

また、デバッグログは次のディレクトリパスに蓄積されます。

Windows の場合: `<install_path>%NetBackup%logs\admin`

UNIX の場合: `/usr/opensv/netbackup/logs/admin`

関連項目

ディザスタリカバリの情報は、『[NetBackup トラブルシューティングガイド](#)』を参照してください。

bprestore

bprestore – NetBackup サーバーからのファイルのリストア

概要

```
bprestore [-A | -B | -rb] [-K] [-l | -H | -y] [-r] [-T] [-L  
progress_log [-en]] [-R rename_file] [-C client] [-D client] [-S  
master_server] [-disk_media_server media_server] [-t policy_type] [-p  
policy] [-k "keyword_phrase"] [-cm] [-drs] [-md] [-dd] [-td temp_dir]  
[-s date] [-e date] [-F file_options] [-spsredir_server hostname]  
[-spscurver] [-spsignorelock] [-spspreserveiis] [-spsrestoresecurity]  
[-spsverkeep [0 | 1 | 2]] [-vhd_fn VHD_filename] [-vhd_type 0 | 1]  
[-vhd_dsize VHD_disk_size] [-vhd_dof 0 | 1] -BR portal_name |  
teamsite_name | Exchange_2010_redirected_path] [-copy copy_number]  
[-granular_restore] [-priority number] [-w [hh:mm:ss]]  
[-ev_migrated_data] -f listfile | filenames [-print_jobid]  
[-optimized_backup 0 | 1]
```

UNIX システムでは、このコマンドのディレクトリパスは /usr/opensv/netbackup/bin/ です。

Windows システムでは、このコマンドのディレクトリパスは
<install_path>%NetBackup%bin% です。

機能説明

bprestore を実行すると、1つのバックアップ済みまたはアーカイブ済みファイル、または一連のファイルのリストアすることができます。リストア先のディレクトリを指定することもできます。ディレクトリ名を含める場合、bprestore を実行すると、そのディレクトリのすべてのファイルおよびサブディレクトリのリストアが行われます。感嘆符 (!) をファイルパスまたはディレクトリパスの前に付けることによって、すでにリストアに含まれているファイルまたはディレクトリのパスをエクスクルードできます (NDMP リストアには適用されません)。たとえば、エクスクルード機能はディレクトリの一部をリストアからエクスクルードする場合に有効です。

メモ: ポリシー、スケジュール形式または日付範囲を指定しない場合、bprestore は、最新の完全バックアップイメージを使用して開始されます。この処理では、すべての後続の増分および差分バックアップイメージが対象に含まれます。ファイルの最新のコピーは、これらのイメージからリストアされます。

デフォルトでは、bprestore が正常に発行されると、システムプロンプトに戻ります。このコマンドはバックグラウンドで実行され、完了状態はユーザーに直接戻されません。-w オ

ブションを指定すると、bprestore がフォアグラウンドで実行され、指定された時間の経過後に完了状態が戻されるように変更できます。

bprestore を実行すると、指定した期間内で最新のバックアップからファイルがリストアされます。ただし、True Image Restore は除きます。(-T オプションの説明を参照してください。)

bprestore を実行すると、-K オプションを指定しないかぎり、ローカルクライアントディスク上にすでに存在するすべての同じ名前のファイルが上書きされます。また、他のクライアントにバックアップまたはアーカイブされたファイルのリストアも行行うことができます (-c オプション)。他のクライアントからのリストアには、NetBackup 管理者の許可が必要です。

bprestore の実行前に進捗ログファイルを作成し、-L *progress_log* オプションでそのファイルを指定した場合、bprestore を実行すると、情報メッセージおよびエラーメッセージがそのファイルに書き込まれます。bprestore を実行しても、要求されたファイルまたはディレクトリのリストアが失敗した場合、この進捗ログを使用して、エラーの原因を判断することができます。

すべてのユーザーによる書き込みを許可し

て、/usr/opensv/netbackup/logs/bprestore (UNIX システム) または *install_path*¥NetBackup¥logs¥bprestore (Windows システム) というディレクトリを作成した場合、bprestore を実行すると、このディレクトリにデバッグログファイルが作成されます。

UNIX システムの場合、root 以外のユーザーが USEMAIL = *mail_address* を \$HOME/bp.conf ファイルに指定すると、NetBackup によってリストア完了状態を通知するメールが *mail_address* に送信されます。このメッセージは、リストア処理が完了すると送信されます。

bprestore に適用される制限事項を次に示します。

- ユーザー自身または他のユーザーが所有するファイルやディレクトリのリストアを行うには、読み込み権限が必要です。他のユーザーのファイルを元の場所にリストアするには、そのユーザーのディレクトリおよびファイルに対する書き込み権限が必要です。
- オペレーティングシステムによって、1 つの bprestore コマンドラインで指定可能なファイルおよびディレクトリの数が制限されます。この制限が問題となる場合、-f オプションを指定してファイルのリストアを行います。

bpulist を実行すると、バックアップまたはアーカイブ済みのファイルとディレクトリの情報が表示されます。

メモ: Solaris システムで bprestore を使って直接カタログファイルをリストアする場合は、パス /opt/opensv/netbackup/bin/bprestore を使います。

オプション

-A | -B | -rb

アーカイブ (-A)、バックアップ (-B)、またはスナップショットのロールバック (-rb) からデータをリストアすることを指定します。デフォルトは -B です。

メモ: ロールバック (-rb) 動作は常にコピー 1 から生じます。コピー 1 が期限切れの場合は、ロールバックできません。

-BR *portal_name* | *teamsite_name* | *Exchange_2010_redirected_path*

選択したポータルまたはチームサイトが **SharePoint** フェームでリダイレクトされる場所として、ポータル名、チームサイト名、または **Exchange 2010** によってリダイレクトされるパス名を指定します。リダイレクトされるポータルまたはチームサイトは、`http://portalname` または `http://teamsitename` として指定する必要があります。また、サイトがフェーム内にすでに存在している必要があります。

-C *client*

このオプションでは、ファイルのリストア元のバックアップまたはアーカイブの検索に使用するクライアント名を指定します。この名前は、**NetBackup** カタログに表示される名前と一致している必要があります。デフォルトは現在のクライアント名です。

メモ: 宛先クライアントのデフォルトは、ソースクライアントではありません。-D *client* オプションの説明を参照してください。

-cm

このオプションを指定すると、リストア操作によって、すべてのログファイルを再生して、すべての未完了のトランザクションをロールバックすることが可能になります。このオプションは、最新のバックアップがリストア対象に含まれている場合に使用します。このオプションを選択しない場合、データベースは中間的な状態のままであり、使用できません。

-copy *copy_number*

このオプションでは、リストア元のコピー番号を指定します。プライマリコピーとは異なるコピーからリストアできます。たとえば、-copy 3 を実行すると、コピー番号 **3** のファイルまたはファイルリストがリストアされます。

また、グローバルレベル (すべてのリストア操作) でリストア元のコピーを指定することもできます。コピー番号をファイル `ALT_RESTORE_COPY_NUMBER` に入力します。

詳しくは、**NetBackup** のバックアップ、アーカイブおよびリストアに関するオンラインヘルプの特定のバックアップコピーからのリストアに関する項を参照してください。

-D client

このオプションでは、宛先クライアントを指定します。デフォルトは現在のクライアント名です。

UNIX システムでは、マスターサーバーの **root** ユーザーはこのオプションを使って次のことができます。-c オプションで指定したクライアント以外のコンピュータに、リストアされるファイルの宛先を指定します。

Windows システムでは、マスターサーバーの管理者はこのオプションを使用して次のことができます。-c オプションで指定したクライアント以外のコンピュータに、リストアされるファイルの宛先を指定します。

-disk_media_server media_server

リストア操作に使用するディスクメディアサーバーを識別します。デフォルトのサーバーは現在使われているサーバーです。

-drs

このオプションを指定すると、アクセス制御属性をリストアせずにファイルがリストアされます。デフォルトでは、アクセス制御属性は、ファイルおよびディレクトリのデータとともにリストアされます。-drs オプションは、**NetBackup** 管理者だけが使用できます。

-ev_migrated_data

Enterprise Vault から移行済みデータをリストアします。bprestore

-ev_migrated_data は **Enterprise Vault** 以外のソースからの移行済みデータのリストアをサポートしません。必要に応じて他の bprestore パラメータを使います。

次の例では **NDMP** ポリシー形式を使って **Vault1** からマスターサーバー **ms1** に移行済みデータをリストアします。リストアするファイルはファイル **restorefiles** に一覧表示されます。

```
# bprestore -S ms1 -C Vault1 -t 19 -ev_migrated_data restorefiles
```

-f listfile

このオプションでは、リストアを行うファイルのリストを含むファイル (**listfile**) を指定します。このオプションは、**filenames** オプションの代わりに使用できます。**listfile** では、各ファイルパスを個別の行に指定する必要があります。

ファイルリストに必要な形式は、ファイル名に空白または改行が含まれるかどうかによって異なります。

名前に空白または改行が含まれないファイルのリストアを行うには、次の形式を使用します。

```
filepath
```

ここで、**filepath** は、リストアを行うファイルへのパスです。次に例を示します。

メモ: Windows システムでは、ドライブ文字に大文字を使用します。例:

C:¥NetBackup¥Log1。

UNIX システムの場合:

```
/home  
/etc  
/var
```

Windows システムの場合:

```
C:¥programs  
C:¥winnt  
C:¥documents¥old_memos
```

名前に空白または改行が含まれるファイルのリストアを行うには、次の形式を使用します。

```
filepathlen filepath  
filepathlen filepath start_date_time end_date_time  
filepathlen filepath -s datetime -e datetime
```

filepath は、リストアを行うファイルへのパスです。

filepathlen は、ファイルパス内の合計文字数です。

start_date_time および **end_date_time** は、10 進数で表された 01/01/1970 00:00:00 以降の秒数です。

datetime は、コマンドライン (**mm/dd/yy [hh[:mm[:ss]]]**) と同じです。このコマンドでは、**listfile** の行によって上書きされないかぎり、コマンドラインで指定した開始日時および終了日時が使用されます。日時は、行ごとに異なる場合があります。

NetBackup コマンドの日時の値に求められる形式は、使用しているロケールによって異なります。/user/openv/msg/.conf ファイル (UNIX) と

install_path¥VERITAS¥msg¥LC.CONF ファイル (Windows) はそれぞれのサポート対象ロケールの日時形式などの情報を含んでいます。これらのファイルには、サポートされているロケールおよび書式のリストを追加および変更するための、具体的な方法が含まれています。

NetBackup インストールのロケールの指定に関する項を参照してください。
『NetBackup 管理者ガイド Vol. 2』。

すでにリストアに含まれているファイルまたはディレクトリのパスをエクスクードするには、感嘆符 (!) をファイルパスまたはディレクトリパスの前に付けます。このエクスクード方法は、NDMP リストアや FlashBackup ではサポートされません。

filepathlen filepath の使用例を次に示します。

UNIX システムの場合:

```
5 /home
4 /etc
4 /var
19 /home/abc/test file
12 !/etc/passwd
```

Windows システムの場合:

```
11 C:¥programs
8 C:¥winnt
22 C:¥documents¥old memos
17 !C:¥programs¥test
```

-f *filenames*

このオプションでは、リストアを行う 1 つ以上のファイル名を指定します。このオプションは、**-f** オプションの代わりに使用できます。

ファイルは、コマンドラインの他のすべてのオプションの後に指定する必要があります。絶対ファイルパスを使う必要があります。

すでにリストアに含まれているファイルまたはディレクトリのパスをエクスクルードするには、感嘆符 (!) をファイルパスまたはディレクトリパスの前に付けます。ただし、**NDMP** リストアではサポートされません。

Windows システムでは、ドライブ文字に大文字を使用します。例:

```
C:¥NetBackup¥Log1。
```

-F *file_options*

このオプションを指定すると、**Backup Exec** ファイルだけ、または **Backup Exec** ファイルと **NetBackup** ファイルの両方のリストアが行われます。デフォルト (**-F** を指定しない) では、**NetBackup** ファイルだけのリストアが行われます。

Backup Exec ファイルだけのリストアを行う場合、次のように指定します。

```
-F 524288
```

Backup Exec ファイルおよび **NetBackup** ファイルのリストアを行う場合、次のように指定します。

```
-F 1048576
```

```
-K
```

このオプションを指定して **bprestore** を実行すると、既存のファイルと同じ名前のファイルのリストアを行うときに、既存のファイルが上書きされずに保持されます。デフォルトでは、既存のファイルが上書きされます。

-granular_restore

Active Directory のオブジェクトと属性のリストアを有効にします。このオプションを指定しなくてもリストアは動作しますが、バックアップは個別リストアを生成できません。

-J

指定すると、ボリューム上のより新しいスナップショットが失われることがあります。このオプションはロールバックリストア (**-rb**) オプションとのみ併用できます。

-K

このオプションを指定して **bprestore** を実行すると、既存のファイルと同じ名前のファイルのリストアを行うときに、既存のファイルが上書きされずに保持されます。デフォルト条件では、既存のファイルが上書きされます。

-K にロールバック(**-rb**) オプションを付けると、ロールバック前の検証が実行されません。スナップショットの作成後にボリュームに追加されるファイルが失われる可能性があります。

-k "keyword_phrase"

このオプションでは、ファイルのリストア元のバックアップまたはアーカイブを検索するときに **NetBackup** で使用されるキーワード句を指定します。キーワード句は、以前 **bpbackup** または **bparchive** の **-k** オプションでバックアップまたはアーカイブに関連付けられた句と一致している必要があります。

このオプションを、他のリストアオプションの代わりに、または他のオプションと同時に指定すると、バックアップおよびアーカイブのリストアが簡単になります。次のメタ文字を使用すると、句の中のキーワードまたはキーワードの一部を一致させる作業が簡単になります。

* は、任意の文字数の文字列に一致します。

? 文字は任意の 1 文字に一致します。

[] は、この角カッコの中で連続する文字の 1 つに一致します。

[-] は、この[-]で区切られた範囲の文字の 1 つに一致します。

キーワード句は、最大 **128** 文字で指定できます。空白 (" ") およびピリオド (".") を含むすべての印字可能な文字列を指定できます。

キーワード句は、二重引用符 ("...") または一重引用符 ('...') で囲む必要があります。

デフォルトのキーワード句は **NULL** (空) 文字列です。

-L progress_log [-en]

このオプションでは、進捗情報を書き込む既存のファイル名を指定します。次に例を示します。

UNIX システムの場合: /home/tlc/proglog

Windows システムの場合: c:\¥proglog

デフォルトでは、進捗ログは使用されません。

-en オプションを指定すると、ログエントリが英語で生成されます。ログ名には文字列[_en]が含まれます。このオプションは、異なるロケールで様々な言語のログが作成される分散環境において有効です。

-l | -H | -y

メモ: -l | -H | -y オプションは、UNIX ファイルを UNIX システムにリストアする場合だけに適用されます。

-l を指定すると、ファイル名を変更する場合と同様に -R *rename_file* オプションを指定して、UNIX リンクのターゲット名を変更できます。

-H を指定すると、ファイル名を変更する場合と同様に -R *rename_file* オプションを指定して、UNIX ハードリンク名を変更できます。ソフトリンクは変更されません。

-y を指定すると、ファイル名を変更する場合と同様に -R *rename_file* オプションを指定して、UNIX ソフトリンク名を変更できます。ハードリンクは変更されません。

「例 5」を参照してください。

-M

監視対象のクライアントジョブを有効にします。

-md

このオプションを指定すると、ユーザーが使用できるように、データベースのマウントが行われます。このオプションは、[リストア後の完了後にコミットする (Commit after restore completes)]を選択した場合にだけ使用できます。

-optimized_backup 0 | 1

リストア処理を最適化バックアップから行うかどうかを指定します。

-p *policy*

このオプションでは、バックアップまたはアーカイブが行われるポリシーを指定します。

-print_jobid

bprestore コマンドで開始するリストア ジョブのジョブ ID を stdout に出力します。

-r

このオプションを指定すると、ファイルシステムの代わりに raw パーティション (UNIX システム) またはディスクイメージ (Windows システム) のリストアが行われます。

-R *rename_file*

このオプションでは、代替パスへのリストアのために名前を変更するファイル名を指定します。

たとえば、`bprestore -R /C/renamefile /C/origfile`

ここで、`/C/rename_file` はファイル名の変更が記述されているファイルの名前、`/C/origfile` は変更前のファイル名です。パス名は絶対パスを入力する必要があります。

ファイル名の変更を記述するファイルのエントリには、次の形式を使用します。

```
change backup_filepath to restore_filepath
```

ファイルパスは `/` (スラッシュ) で始まる必要があります。

一致した最初の `backup_filepath` が `restore_filepath` の文字列に置き換えられます。

デフォルトでは、元のパスを使用してリストアが行われます。

UNIX システムの場合: たとえば、名前を `/usr/fred` から `/usr/fred2` に変更するには、次のエントリを指定します。

```
change /usr/fred to /usr/fred2
```

Windows システムの場合: たとえば、名前を `C:\users\fred` から `C:\users\fred2` に変更するには、次のエントリを指定します。

```
change /C/users/fred to /C/users/fred2
```

ドライブ文字にはすべて大文字を使い、エントリの末尾には改行を入力します。

Windows クライアントへのリストアを行う場合、次の方法を使用して、ファイル名の変更を記述するファイルのエントリを指定することもできます。(この方法は、**Windows** 以外のクライアントには使用しないでください。)

```
rename bulength backup_filepath reslength  
restore_filepath
```

ここで示された文字列については、次のとおりです。

bulength は、バックアップパス内の **ASCII** 文字数です。

reslength は、リストアパス内の **ASCII** 文字数です。

一致した最初の `backup_filepath` が `restore_filepath` の文字列に置き換えられます。

たとえば、名前を `C:\fred.txt` から `C:\fred2.txt` に変更するには、次のエントリを指定します。

```
rename 11 /C/fred.txt 12 /C/fred2.txt
```

(エントリの末尾には改行を入力します。)

-s date, -e date

これらのオプションでは、表示の対象とする開始日時から終了日時の範囲を指定します。bprestore を実行すると、指定した開始日時から終了日時の範囲でバックアップまたはアーカイブが行われたファイルだけがリストアされます。

-s では、リストア処理時間帯の開始日時を指定します。bprestore を実行すると、指定した日時以降にバックアップまたはアーカイブが行われたファイルだけがリストアされます。

メモ: 複数ストリームのイメージをリストアするには、目的のファイルを含んでいた前回のバックアップ時のファイルの変更時刻を取得するために、最初に `bplist -l` を実行します。bprestore コマンドを実行するとき `-s` としてその日付を指定します。複数のデータストリームを使ってバックアップされたファイルの開始日も終了日も指定しない場合は、エラーが発生することがあります。

NetBackup コマンドの日時の値に求められる形式は、使用しているロケールによって異なります。/user/openv/msg/.conf ファイル (UNIX) と

install_path¥VERITAS¥msg¥LC.CONF ファイル (Windows) はそれぞれのサポート対象ロケールの日時形式などの情報を含んでいます。これらのファイルには、サポートされているロケールおよび書式のリストを追加および変更するための、具体的な方法が含まれています。

使用しているシステムについて詳細情報を参照できます。

NetBackup インストールのロケールの指定に関する項を参照してください。
『NetBackup 管理者ガイド Vol. 2』。

有効な日付の範囲は、01/01/1970 00:00:00 から 01/19/2038 03:14:07 です。デフォルトの開始日付は、01/01/1970 00:00:00 です。

デフォルトでは、最新のイメージが戻されます。完全バックアップが存在する場合は、最新の完全バックアップのイメージがリストアされます。完全バックアップが存在しない場合は、最新の増分またはユーザー主導バックアップがリストアされます。

-e では、リストア処理時間帯の終了日時を指定します。bprestore を実行すると、指定された日時以前にバックアップまたはアーカイブが行われたファイルだけがリストアされます。開始日時と同じ形式を使用します。

True Image Restore を行わないかぎり (-T オプションの説明を参照)、最終バックアップ日時は正確でなくてもかまいません。bprestore を実行すると、指定した日時にバックアップが行われたファイルがリストアされます。または、終了日時の前に最後にバックアップが行われたファイルがリストアされます。デフォルトは、現在の日時です。

-S master_server

このオプションでは、NetBackup サーバー名を指定します。

UNIX システムでは、デフォルトは /usr/opensv/netbackup/bp.conf ファイルで最初に検索されたサーバーです。

Windows システムでは、デフォルトは、[NetBackup マシンおよびポリシー形式の指定 (Specify NetBackup Machines and Policy Type)]ダイアログボックスの[サーバー (Servers)]タブで操作対象として指定されているサーバーです。このダイアログボックスを表示するには、クライアント上でバックアップ、アーカイブおよびリストアインターフェースを起動します。次に[ファイル (File)]メニューから[NetBackup マシンおよびポリシー形式の指定 (Specify NetBackup Machines and Policy Type)]を選択します。

-spscurver

SharePoint 操作では、-spscurver は項目の最新バージョンのみリストアします。

-spignorelock

SharePoint 操作では、-spignorelock は SharePoint ファームトポロジリーが設定されている場合、そのトポロジリー上のロックを解除します。

-spspreserveiis

SharePoint 操作では、-spspreserveiis は既存の Internet Information Services (IIS) の Web サイトとアプリケーションのプールを保持します。

-spsredir_server hostname

SharePoint 操作の場合、このオプションは、SharePoint ファームでリダイレクトされるポータルまたはチームサイトが存在する Web サーバーを指定します。リダイレクトされる Web サーバーは、*hostname* として指定する必要があります。

-spsrestoresecurity

SharePoint 操作では、-spsrestoresecurity はリストア操作にセキュリティ情報を含めます。

-spsverkeep 0 | 1 | 2

SharePoint 操作では、-spsverkeep はバージョン管理がリストア先で有効な場合に指定します。

-t policy_type

このオプションでは、ポリシー形式に対応する次のいずれかの番号を指定します。デフォルトでは、Windows クライアントが 13、その他のすべてのクライアントが 0 になります。

0 = Standard

8 = MS-SharePoint

10 = NetWare

13 = MS-Windows

14 = OS/2

16 = MS-Exchange-Server
19 = NDMP
20 = FlashBackup
21 = Split-Mirror
22 = AFS
25 = Lotus-Notes
29 = FlashBackup-Windows
30 = Vault
35 = NBU-Catalog
38 = PureDisk-Export
39 = Enterprise-Vault
40 = VMware
41 = MS-Hyper-V

-T

このオプションでは、**True Image Restore** を指定します。この場合、最新の **True Image Backup** に存在するファイルおよびディレクトリだけのリストアが行われます。このオプションは、**True Image Backup** が行われた場合だけ有効です。このオプションを指定しない場合、削除済みのものであっても、指定した条件を満たすすべてのファイルおよびディレクトリがリストアされます。

-T オプションを指定する場合、要求されたイメージを一意に識別できることが必要となります。一意に識別できるようにするには、-e オプションを秒単位まで指定します。
-s オプション (指定されている場合) は無視されます。-l オプションおよび
-Listseconds オプションを指定して bplist を実行すると、イメージの情報を秒単位まで取得できます。

-td *temp_dir*

このオプションでは、データベースがリストアされるまで、関連するログファイルおよびパッチファイルを保持する場所を指定します。ストレージグループをリストアする場合は、各ストレージグループに対して *temp_dir* 内にサブディレクトリが作成されます。各ストレージグループのログファイルおよびパッチファイルは、対応するサブディレクトリに保存されます。

UNIX システムでは、デフォルトの場所は /temp です。

Windows システムでは、デフォルトの場所は C:¥temp です。

`-vhd_dof 0 | 1`
Hyper-V 操作では、`-vhd_dof` はエラーで削除するかどうかを指定します。指定可能な値は **1** (エラーで削除) と **0** (エラーで削除しない) です。

`-vhd_dsize VHD_disk_size`
Hyper-V 操作では、`-vhd_dsize` はリカバリする VHD ファイルのサイズを指定します。

`- vhd_fn VHD_filename`
Hyper-V 操作では、`-vhd_fn` はリカバリする VHD ファイルの名前を指定します。

`-vhd_type 0 | 1`
Hyper-V 操作では、`-vhd_type` は VHD ファイルの種類を指定します。このオプションに指定可能な値は次のとおりです。

- 1 - 容量固定。
- 2 - 容量可変。

`-w [hh:mm:ss]`
このオプションを指定すると、NetBackup はサーバーから完了状態が送信されるまで待機し、その後、システムプロンプトに戻ります。

NetBackup コマンドの日時の値に求められる形式は、使用しているロケールによって異なります。`/user/opensv/msg/.conf` ファイル (UNIX) と `install_path\VERITAS\msg\LC.CONF` ファイル (Windows) はそれぞれのサポート対象ロケールの日時形式などの情報を含んでいます。これらのファイルには、サポートされているロケールおよび書式のリストを追加および変更するための、具体的な方法が含まれています。

使用しているシステムについて詳細情報を参照できます。

NetBackup インストールのロケールの指定に関する項を参照してください。
『[NetBackup 管理者ガイド Vol. 2](#)』。

必要に応じて、待機時間を時間、分、秒で指定できます。指定可能な最大の待機時間は、**23:59:59** です。リストアが完了する前に待機時間が経過すると、コマンドはタイムアウト状態で終了します。ただし、サーバー上ではリストアが完了します。

0 (ゼロ) を指定した場合または時間を指定しない場合、完了状態が無期限に待機されます。

例

例 1 - 04/01/2010 06:00:00 から 04/10/2010 18:00:00 の間に実行された `file1` のバックアップからファイルのリストアを行います。次のように入力します。

```
UNIX systems:  
# bprestore -s 04/01/2010 06:00:00 -e 04/10/2010 18:00:00 /usr/user1/file1
```

```
Windows systems:
# bprestore -s 04/01/2010 06:00:00 -e 04/10/2010 18:00:00 C:¥user1¥file1
```

例 2 - 最新のバックアップを使用して、restore_list というファイルに一覧表示されたファイルのリストアを行います。次のように入力します。

```
UNIX systems: # bprestore -f restore_list
```

```
Windows systems: # bprestore -f c:¥restore_list
```

例 3

UNIX システムの場合:

「My Home Directory」を含むキーワード句と関連付けられたバックアップからディレクトリ /home/kwc のリストアを行います。/home/kwc/bkup.log という名前の進捗ログを使用します。次のコマンドを、改行せずに 1 行で入力します。

```
# bprestore -k "*My Home Directory*" -L /home/kwc/bkup.log /home/kwc
```

Windows システムの場合:

「My Home Directory」を含むキーワード句と関連付けられたバックアップからディレクトリ C:¥kwc のリストアを行います。d:¥kwc¥bkup.log という名前の進捗ログを使用します。次のコマンドを、改行せずに 1 行で入力します。

```
# bprestore -k "*My Home Directory*" -L d:¥kwc¥bkup.log C:¥kwc
```

例 4 - 「My Home Dir」を含むキーワード句と関連付けられたバックアップから Windows クライアント slater の D ドライブのリストアを行います。bkup.log という名前の進捗ログを使用します。次のコマンドは改行せずに 1 行で、または継続文字であるバックslashを使用して入力します。

```
UNIX systems: # bprestore -k "*My Home Dir*" -C slater
-D slater -t 13 -L /home/kwc/bkup.log /D
```

```
Windows systems: # bprestore -k "*My Home Dir*" -C slater -D slater
-t 13 -L c:¥kwc¥bkup.log D:¥
```

例 5 - UNIX クライアント上に、/home/kwc/rename というファイルが存在し、その中に次のような行が含まれると想定します。

```
change /home/kwc/linkback to /home/kwc/linkback_alt
```

このクライアントで /home/kwc/linkback というハードリンクのリストアを代替パス /home/kwc/linkback_alt へ行うには、次のコマンドを実行します。

```
# bprestore -H -R /home/kwc/rename /home/kwc/linkback
```

例 6 - ファイル user1 のバックアップからファイルをリストアすることを想定します。

バックアップは 04/01/12 06:00:00 から 04/10/12 18:00:00 の間に実行されました。また、拡張子 .pdf を含むファイルのうち、final_doc.pdf 以外のすべてのファイルをエクスクルードするとします。この操作を実行するには、次のように (改行せずにすべてを 1 行で) 実行します。

```
UNIX systems: # bprestore -s 04/01/12 06:00:00 -e 04/10/12 ¥  
18:00:00 /home/user1 !/home/user1/*.pdf /home/user1/final_doc.pdf
```

```
Windows systems: # bprestore -s 04/01/12 06:00:00 -e 04/10/12 18:00:00  
C:¥user1¥ !C:¥user1¥*.pdf C:¥user1¥final_doc.pdf
```

ファイル

UNIX システムの場合:

```
$HOME/bp.conf  
/usr/opensv/netbackup/logs/bprestore/log.mmdyy
```

Windows システムの場合:

```
install_path¥NetBackup¥logs¥bprestore¥*.log
```

関連項目

p.50 の [bparchive](#) を参照してください。

p.206 の [bplist](#) を参照してください。

bpschedule

bpschedule - ディスクステージングストレージユニット (DSSU) スケジュールの追加、削除または表示

概要

```
bpschedule [-v] [-M master_server,...] -add sched_label [-freq
frequency] [-stage_priority number] [-altreadhost hostname]
[-number_copies number] [-residence storage_unit_label
[,stunit-copy2,...]] [-pool volume_pool_label [,pool-copy2,...]]
[-fail_on_error 0|1[,0|1,...0|1]] [-window start_duration]] [-cal
0|1|2] [-ut] [-incl mm/dd/yyyy] [-excl mm/dd/yyyy] [-weekday day_name
week [day_name week]...] [-dayomonth 1-31 [1-31]... | 1] [-xweekday
day_name week [day_name week]...] [-xdayomonth 1-31 [1-31]... | 1]
bpschedule [-v] [-M master_server,...] -delete sched_label...
bpschedule [-v] [-M master_server,...] -deleteall
bpschedule [-v] [-M master_server,...] [-L | -l | -U] [-label
sched_label]
```

UNIX システムでは、このコマンドのディレクトリパスは

/usr/opensv/netbackup/bin/admincmd/ です。

Windows システムでは、このコマンドのディレクトリパスは

<install_path>%NetBackup%bin\admincmd% です。

機能説明

bpschedule を実行すると、次の操作が実行されます。

- 新しいディスクステージングストレージユニット (DSSU) スケジュールの追加。
- 1 つ以上の DSSU スケジュールの削除。
- すべての DSSU スケジュールの削除。
- 1 つまたはすべての DSSU スケジュールの表示 (デフォルトはすべての DSSU スケジュールの表示)。

-add および -delete オプションを指定して bpschedule を実行すると、スケジュールの変更要求が NetBackup に送信された後、すぐにシステムプロンプトに戻ります。変更が正常に行われたことを確認するには、bpschedule を再度実行して、更新されたスケジュール情報を表示します。

表示オプションでは、-M オプションを指定した場合でも、各スケジュールに、1 つのエントリが表示されます。-l 形式では、各スケジュールの情報が複数行で表示されます。-l

形式では、名前でその属性が識別されません。次に例を示します (名前が記述されていない場合、NetBackup で内部的に使用するために予約されています)。

- 1 行目: SCHED、スケジュール名、形式、max_mpx、間隔、保持レベル、u_wind/o/d、2つの内部属性、最大フラグメントサイズ、カレンダー、コピー数、エラーによる失敗。u_wind/o/d は、将来使用するために予約されたフィールドであることに注意してください。-L 表示内の u_wind エントリも、将来の使用のために予約されています。
- 2 行目: SCHEDWIN、開始時刻、期間形式の 7 つの対。日ごとに時間帯の開始時刻および期間が示されます。週は日曜日から始まります。
- 3 行目: SCHEDRES、位置情報 (各コピーの値)。
- 4 行目: SCHEDPOOL、プール (各コピーの値)。
- 5 行目: SCHEDRL、保持レベル (各コピーの値)。
- 6 行目: SCHEDFOE、エラーによる失敗 (各コピーの値)。

-M オプションを指定して bpschedule を実行すると、指定されているマスターサーバーごとに操作が実行されます。たとえば、bpschedule を実行してスケジュールを追加する場合、-M で指定された各マスターサーバー上のポリシーにスケジュールが追加されます。-M オプションを一覧表示要求に対して指定する場合、リストは、-M オプションで指定したリストのすべてのマスターサーバーから返される情報で構成されます。このコマンドがいずれかのマスターサーバーで失敗した場合、その時点で動作は停止します。

既存の NetBackup スケジュールを変更するには、NetBackup の bpschedulerep を実行します。

このコマンドは、すべての認可済みユーザーが実行できます。

NetBackup による認可については詳しくは、次を参照してください。『NetBackup セキュリティおよび暗号化ガイド』。

オプション

次に示すオプションは、bpschedule のすべての形式で共通です。

`-M master_server,...`

このオプションでは、代替マスターサーバーのリストを指定します。このリストは、カンマで区切られたホスト名のリストです。このオプションを指定すると、リストで指定されている各マスターサーバーで bpschedule が実行されます。リストに示される各マスターサーバーでは、bpschedule を発行するシステムからのアクセスが許可されている必要があります。

このオプションを指定すると、指定されている各マスターサーバーでコマンドが実行されます。マスターサーバーでエラーが発生した場合、その時点で処理が停止します。

bpschedule によってリストが生成される場合、そのリストは、このリスト内のすべてのマスターサーバーから戻された情報で構成されます。

bpschedule を実行してスケジュールを追加するか、または削除すると、このリスト内のすべてのマスターサーバーに変更が反映されます。

-v

bpschedule によってデバッグに使用するための追加情報がログに書き込まれる詳細モードが選択されます。追加情報は **NetBackup** 管理デバッグログに記録されます。このオプションは、**NetBackup** でデバッグログ機能が有効になっている場合、つまり次のディレクトリが定義されている場合にだけ有効です。

```
UNIX systems: /usr/opensv/netbackup/logs/admin
```

```
Windows systems: install_path¥NetBackup¥logs¥admin
```

その他のオプションは、bpschedule の形式によって異なります。bpschedule を 1 番目の形式で実行すると、指定したストレージユニット名にスケジュールが追加されます。次に、bpschedule のこの形式に適用されるオプションを示します。

-add sched_label [suboptions]

このオプションを指定すると、指定したストレージユニット名に 1 つのスケジュールが追加されます。次に、-add オプションのサブオプションの説明を示します。これらは、追加するスケジュールの属性です。

スケジュールとその属性について詳しくは、次を参照してください。『[NetBackup 管理者ガイド Vol. 2](#)』。

-cal 0|1|2

このオプションでは、bpschedule でカレンダーを基準としたスケジュールを指定するか、または間隔を基準としたスケジュールを指定するかを選択します。

0 (ゼロ) = 間隔を基準としたスケジュール

1 = 実行日以後に再試行しない、カレンダーを基準としたスケジュール

2 = 実行日以後に再試行する、カレンダーを基準としたスケジュール

-dayomonth 1-31 [1-31]... | 1

このオプションでは、毎月スケジュールを実行する日を指定します。月の日数が **28**、**29**、**30** または **31** 日のどれであるかにかかわらず、毎月の月末日にスケジュールを実行するには、**1** (小文字の **L**) を入力します。

たとえば、毎月 **14** 日と **28** 日にポリシーのバックアップを実行するには、次のコマンドを入力します。

```
-dayomonth 14 28
```

毎月の月末日に実行するには、次のコマンドを入力します。

- `-dayomonth 1`
- `-excl mm/dd/yyyy`
このオプションを指定すると、指定した日が除外されます。
- `-fail_on_error 0|1[,0|1,...,0|1]`
このオプションでは、1つのコピーが失敗した場合、他のすべてのコピーを失敗にするかどうかを指定します。パラメータを指定しない場合、すべてのコピーに対して0(ゼロ)がデフォルトとなります。値は、コピーごとに指定します。
- 0(ゼロ) = 他のコピーを失敗にしません
1 = 他のコピーを失敗にします
- `-freq frequency`
このオプションでは、バックアップを行う間隔を決定します。このスケジュールに従って開始されるバックアップ間隔を秒数で指定します。このオプションの有効範囲は、0から2419200(4週間の秒数)です。この値を省略した場合は、デフォルト値604800(1週間の秒数)が設定されます。
- `-incl mm/dd/yyyy`
このオプションを指定すると、指定した日だけが含まれます。
- `-number_copies number`
このオプションでは、並列実行バックアップコピーの数を指定します。最小値は1です。最大値は4または[バックアップコピーの最大数(Maximum Backup Copies)]グローバルパラメータの小さい方の値です。デフォルトは1です。
- `-pool volume_pool_label [,pool-copy2,...]`
このオプションでは、ボリュームプールの名前を指定します。この選択は、ポリシーレベルのボリュームプールより優先されます。値が[*NULL*]の場合、ポリシーレベルで指定するボリュームプールがNetBackupによって使用されます。デフォルトでは、ポリシーレベルで指定するボリュームプールが使用されます。ボリュームプールのラベルは、Noneに指定できません。スケジュールレベルまたはポリシーレベルでボリュームプールを指定しない場合、NetBackupでは、NetBackupのデフォルト値が使用されます。
- `-number_copies`に1より大きい値を指定する場合、コピーごとにプールを指定します。
- `-residence storage_unit_label[,stunit-copy2,...]`
このオプションでは、バックアップイメージの場所を指定するストレージユニット名を指定します。値が[*NULL*]の場合、ポリシーレベルで指定するストレージユニットがNetBackupによって使用されます。デフォルトでは、ポリシーレベルで指定するストレージユニットがNetBackupによって使用されます。スケジュールレベルまたはポリシーレベルでストレージユニットを指定しない場合、NetBackupでは、次に利用可能なストレージユニットが使用されます。

-number_copies に 1 より大きい値を指定する場合、コピーごとに位置情報を指定します。

-stage_priority number

このオプションでは、ストレージユニットがストレージユニットグループで選択される順序を指定します。

1 = ストレージユニットグループダイアログボックスに表示される順序でストレージユニットを使用します (デフォルト)。

2 = 使用されていない期間が最も長いストレージユニットを使用します。(ストレージユニットは順番に使用されます。)

3 = 停止していない使用可能なストレージユニットのうち、リストの最初のストレージユニットを使用します。ストレージユニットがビジー状態の場合、ポリシーは書き込みを待機します。

-altreadhost hostname

このオプションでは、異なるメディアサーバーによって最初に書き込まれたバックアップイメージを読み込むために使用するサーバーを指定します。

-ut

-ut の後に任意の日時の引数を指定すると、標準の時刻形式ではなく、UNIX 時刻として受け入れられます。-ut オプションは、主に **Java** に使用されます。

-weekday day_name week [day_name week]...

このオプションでは、スケジュールの実行日として曜日および週を指定します。

- **day_name** には、**Sunday**、**Monday**、**Tuesday**、**Wednesday**、**Thursday**、**Friday** または **Saturday** を指定します。
- **week** には、月の何週目であるかを指定します。週は日曜日から土曜日までです。有効な値は **1** から **5** までです。

たとえば、毎週日曜日に実行するようにポリシーで指定するには、次のコマンドを入力します。

```
-weekday Sunday 1 Sunday 2 Sunday 3 Sunday 4 Sunday 5
```

-window start_duration

このオプションでは、このスケジュールのバックアップが **NetBackup** で実行可能な期間を指定します。すべての曜日で同じ時間帯が表示されます。

start には、このスケジュールのバックアップ処理時間帯の始めの時刻を指定します。これは午前 **0** 時からの秒数です。**0** から **86399** (**1** 日は **86400** 秒) の整数で指定します。

duration には、継続する処理時間の長さを指定します。時間単位は秒です。ここには、負でない整数を指定します。

```
-xdayomonth 1-31 [1-31]... | 1
```

このオプションでは、スケジュールの実行日から除外する日付を指定します。月の最終日を指定するには `1` (小文字の `L`) を使います。

たとえば、**14** 日と **15** 日には実行しないようにポリシーで指定するには、次のコマンドを入力します。

```
-xdayomonth 14 15
```

```
-xweekday day_name week [day_name week]...
```

このオプションでは、スケジュールの実行日から除外する曜日と週を指定します。

- **day_name** には、**Sunday**、**Monday**、**Tuesday**、**Wednesday**、**Thursday**、**Friday** または **Saturday** を指定します。
- **week** には、月の何週目であるかを指定します。
- 月の最後の週を指定するには `1` を使います。週は日曜日から月曜日までです。有効な値は **1** から **5** までです。

たとえば、**第 1** 月曜日と**第 3** 月曜日には実行しないようにポリシーで指定するには、次のコマンドを入力します。

```
-xweekday Monday 1 Monday 3
```

`bpschedule` を **2** 番目の形式で実行すると、指定したポリシーから **1** つ以上のスケジュールが削除されます。次に、`bpschedule` のこの形式に適用されるオプションを示します。

```
-delete sched_label
```

このオプションを指定すると、指定したポリシーから、指定されたスケジュールが削除されます。**sched_label** のリストの要素は、空白で区切る必要があります。リストには、最大で **25** のラベルを指定できます。

`bpschedule` を **3** 番目の形式で実行すると、指定したポリシーからすべてのスケジュールが削除されます。次に、`bpschedule` のこの形式に適用されるオプションを示します。

```
-deleteall
```

このオプションを指定すると、指定したポリシーからすべてのスケジュールが削除されます。

`bpschedule` を **4** 番目の形式で実行すると、指定したポリシーのスケジュールの情報を含むリストが生成されます。次に、`bpschedule` のこの形式に適用されるオプションを示します。

```
-l
```

このオプションを指定すると、表示形式が簡易になります。これはデフォルトの表示形式です。このオプションでは、スケジュールのすべての属性を含む簡易なリストが生成されます。リストでは、各スケジュールが **1** 行に表示されます。ほぼすべての属

性値は、数値で表示されます。このオプションは、カスタマイズされたレポート形式にリストを再生成するスクリプトまたはプログラムに対して有効です。

-L

このオプションを指定すると、表示形式が詳細になります。このリストには、スケジュールのすべての属性が含まれています。いくつかの属性値は、数値ではなく、説明で表されます。

-label *sched_label*

このオプションを指定すると、指定したポリシー内のスケジュールの属性が表示されます。デフォルトでは、指定したポリシーのすべてのスケジュール情報が表示されます。

-U このオプションを指定すると、表示形式がユーザーになります。このリストは、詳細形式のリストに類似していますが、エントリが少なくなります。ほぼすべての属性値は、数値ではなく、説明で表されます。

例

スケジュール *test* の情報を詳細形式で表示します。

```
# bpschedule -L -label test
Schedule:          test
  Type:             FULL (0)
  Frequency:        7day(s) (604800 seconds)
  Retention Level:  1(2 weeks)
  u-wind/o/d:       0 0
  Incr Type:         DELTA (0)
  Incr Depends:     (none defined)
  Max Frag Size:    0 MB (1048576 MB)
  Maximum MPX:      1
  Number copies:    1
  Fail on Error:    0
  Residence:         (specific storage unit not required)
  Volume Pool:      (same as policy volume pool)
  Daily Windows:
    Day      Open      Close      W-Open      W-Close
  Sunday    000:00:00  000:00:00
  Monday    000:00:00  000:00:00
  Tuesday   000:00:00  000:00:00
  Wednesday 000:00:00  000:00:00
  Thursday  000:00:00  000:00:00
  Friday    000:00:00  000:00:00
  Saturday  000:00:00  000:00:00
```

ファイル

UNIX システムの場合:

```
/usr/opensv/netbackup/logs/admin/*  
/usr/opensv/netbackup/db/sched/schedule name
```

Windows システムの場合:

```
install_path\NetBackup\logs\admin\*  
install_path\NetBackup\db\sched\schedule name
```

関連項目

p.369 の [bpschedulerep](#) を参照してください。

bpschedulerep

bpschedulerep - ディスクステージングストレージユニット (DSSU) スケジュールの属性の変更

概要

```
bpschedulerepsched_label [ -M master_server, ... ] [-v] [-freq  
backup_frequency] [-stage_priority number] [-altreadhost hostname]  
[-cal 0|1|2] [-incl mm/dd/yyyy] [-excl mm/dd/yyyy] [-delincl  
mm/dd/yyyy] [-delexcl mm/dd/yyyy] [-weekday day_name week [day_name  
week]...] [-dayomonth 1-31 [1-31]... | 1] [-xweekday day_name week  
[day_name week]...] [-xdayomonth 1-31 [1-31]... | 1] [-deldayomonth  
1-31 [1-31]... | 1] [-delweekday day_name week [day_name week]...]  
[-ci] [-ce] [-cw] [-cd] [-number_copies number] [-fail_on_error  
0|1[,0|1, ..., 0|1]] [-residence storage_unit_label [,stunit-copy2, ...]]  
[-pool volume_pool_label [,pool-copy2, ...]] [-(0..6) start duration]  
UNIX システムでは、このコマンドのディレクトリパスは  
/usr/opensv/netbackup/bin/admincmd/ です。  
Windows システムでは、このコマンドのディレクトリパスは  
<install_path>%NetBackup%\bin\admincmd\ です。
```

機能説明

bpschedulerep を実行すると、NetBackup ディスクステージングストレージユニット (DSSU) スケジュールの属性が変更されます。このコマンドを実行する場合、bpschedulerep で指定したスケジュールが存在している必要があります。-M オプションを指定して bpschedulerep を実行すると、指定されている各マスターサーバーのスケジュールが変更されます。

このコマンドは、すべての認可済みユーザーが実行できます。

NetBackup による認可について詳しくは、次を参照してください。『NetBackup セキュリティおよび暗号化ガイド』。

オプション

-(0..6) start duration

このオプションでは、このスケジュールのバックアップが NetBackup で実行可能な時間帯を指定します。この時間帯は、指定した曜日に適用します。0 (ゼロ) が日曜日、1 が月曜日、のように対応します。

start には、このスケジュールのバックアップ処理時間帯の始めの時刻を指定します。これは午前 0 時からの秒数です。0 から 86400 (1 日の秒数) の整数で指定します。

duration には、継続する処理時間の長さを指定します。時間単位は秒です。ここには、負でない整数を指定します。

`-cal 0|1|2`

このオプションでは、bpschedulerep でカレンダーを基準としたスケジュールを指定するか、または間隔を基準としたスケジュールを指定するかを選択します。

0 (ゼロ) = 間隔を基準としたスケジュール

1 = 実行日以後に再試行しない、カレンダーを基準としたスケジュール

2 = 実行日以後に再試行する、カレンダーを基準としたスケジュール

`-dayomonth 1-31 [1-31]... | 1`

このオプションでは、毎月スケジュールを実行する日を指定します。月の日数が 28、29、30 または 31 日のどれであるかにかかわらず、毎月の月末日にスケジュールを実行するには、l (小文字の L) を入力します。

たとえば、毎月 14 日と 28 日にポリシーのバックアップを実行するには、次のコマンドを入力します。

`-dayomonth 14 28`

毎月の月末日に実行するには、次のコマンドを入力します。

`-dayomonth l`

`-deldayomonth 1-31 [1-31]... | 1`

このオプションでは、毎月実行日として除外する日を指定します。月の日数が 28、29、30 または 31 日のどれであるかにかかわらず、毎月の月末日をスケジュールから除外するには、l (小文字の L) を入力します。このコマンドでは、-dayomonth コマンドを使用して追加された日付のみ削除できます。

たとえば、毎月の実行日として指定していた 20 日と 21 日をスケジュールから除外するには、次のコマンドを入力します。

`-deldayomonth 20 21`

`-delweekday day_name week [day_name week]...`

このオプションでは、スケジュールの実行日から除外する曜日および週を指定します。このコマンドでは、-weekday コマンドを使用して追加された日付のみ削除できます。

- **day_name** には、Sunday、Monday、Tuesday、Wednesday、Thursday、Friday または Saturday を指定します。

- **week** には、月の何週目であるかを指定します。週は日曜日から土曜日までです。有効な値は **1** から **5** までです。

たとえば、実行日として指定していた第 2 月曜日を除外するには、次のコマンドを入力します。

```
-delweekday Monday 2
```

```
-excl mm/dd/yyyy
```

このオプションを指定すると、指定した日が除外されます。

```
-delincl mm/dd/yyyy
```

このオプションを指定すると、指定した除外日が削除されます。

```
-delexcl mm/dd/yyyy
```

このオプションを指定すると、指定した除外日が削除されます。

```
-ci
```

このオプションを指定すると、設定したすべての実行日がクリアされます。

```
-ce
```

このオプションを指定すると、設定したすべての除外日がクリアされます。

```
-cw
```

このオプションを指定すると、設定したすべての週/曜日指定がクリアされます。

```
-cd
```

このオプションを指定すると、設定したすべての日付指定 (毎月スケジュールを実行する日) がクリアされます。

```
-fail_on_error 0|1[,0|1,...,0|1]
```

このオプションでは、**1** つのコピーが失敗した場合、他のすべてのコピーを失敗にするかどうかを指定します。パラメータを指定しない場合、すべてのコピーに対して **0** (ゼロ) がデフォルトとなります。値は、コピーごとに指定します。

0 (ゼロ) = 他のコピーを失敗にしません

1 = 他のコピーを失敗にします

```
-freq backup_frequency
```

このスケジュールに基づくクライアントの正常な自動バックアップの間隔を指定します。ユーザーはバックアップ処理時間帯中にいつでもバックアップまたはアーカイブを行うことができるため、間隔はユーザースケジュールには適用されません。この値は正の整数で指定し、このスケジュールで正常に完了した自動バックアップの間隔の秒数を表します。

```
-help
```

コマンドラインの使用法を示すメッセージを出力します。

`-incl mm/dd/yyyy`

このオプションを指定すると、指定した日だけが含まれます。

`-M master_server,...`

このオプションでは、代替マスターサーバーのリストを指定します。このリストは、カンマで区切られたホスト名のリストです。このオプションを指定すると、一覧表示されている各マスターサーバーでbpschedulerepが実行されます。リストに示される各マスターサーバーでは、bpschedulerepを発行するシステムからのアクセスが許可されている必要があります。マスターサーバーでエラーが発生した場合、その時点で処理が停止します。

指定されているすべてのマスターサーバーで、スケジュールの属性が変更されます。

`-number_copies number`

このオプションでは、並列実行バックアップコピーの数を指定します。最小値は1です。最大値は4または[バックアップコピーの最大数 (Maximum Backup Copies)] グローバルパラメータの小さい方の値です。デフォルトは1です。

`-pool volume_pool_label [,pool-copy2,...]`

このオプションでは、スケジュールのボリュームプールを指定します。ディスクストレージユニットがスケジュールの位置情報である場合、このオプションは指定しないでください。[*NULL*]を指定した場合、このスケジュールを含むポリシーのボリュームプールがスケジュールのボリュームプールになります。

プールはコピーごとに指定します。

構成済みのボリュームプールを表示するには、次のコマンドを実行します。

On UNIX systems: `/usr/opensv/volmgr/bin/vmpool -listall`

On Windows systems: `install_path¥Volmgr¥bin¥vmpool -listall`

`-residence storage_unit_label[,stunit-copy2,...]`

このオプションでは、このスケジュールに従って作成されたバックアップの格納に使用されるストレージユニットのラベルを指定します。[*NULL*]を指定した場合、このスケジュールを含むポリシーの位置情報がスケジュールの位置情報のデフォルトになります。位置情報の値がストレージユニットのラベルである場合、スケジュールの位置情報がストレージユニットになり、ポリシーの位置情報より優先されます。

ストレージユニットはコピーごとに指定します。

bpstulist を実行すると、定義済みのストレージユニットの設定が表示されます。

`-stage priority number`

このオプションでは、ストレージユニットがストレージユニットグループで選択される順序を指定します。

1 = ストレージユニットグループダイアログボックスに表示される順序でストレージユニットを使用します (デフォルト)。

2 = 使用されていない期間が最も長いストレージユニットを使用します。(ストレージユニットは順番に使用されます。)

3 = 停止していない使用可能なストレージユニットのうち、リストの最初のストレージユニットを使用します。ストレージユニットがビジー状態の場合、ポリシーは書き込みを待機します。

`-altreadhost hostname`

このオプションでは、異なるメディアサーバーによって最初に書き込まれたバックアップイメージを読み込むために使用するサーバーを指定します。

`sched_label`

このオプションでは、以前に作成したスケジュールの変更する名前を指定します。

`-weekday day_name week [day_name week]...`

このオプションでは、スケジュールの実行日として曜日と週を指定します。

- **day_name** には、**Sunday**、**Monday**、**Tuesday**、**Wednesday**、**Thursday**、**Friday** または **Saturday** を指定します。
- **week** には、月の何週目であるかを指定します。週は日曜日から土曜日までです。有効な値は **1** から **5** までです。

たとえば、毎週日曜日に実行するようにポリシーで指定するには、次のコマンドを入力します。

```
-weekday Sunday 1 Sunday 2 Sunday 3 Sunday 4 Sunday 5
```

`-v`

このオプションを指定すると、詳細モードが選択されます。このオプションを指定して `bpschedulerep` を実行すると、デバッグに使用するための追加情報がログに書き込まれます。追加情報は **NetBackup** 管理の日次デバッグログに記録されます。このオプションは、**NetBackup** でデバッグログ機能が有効になっている場合、つまり次のディレクトリが定義されている場合にだけ有効です。

```
UNIX systems: /usr/opensv/netbackup/logs/admin
```

```
Windows systems: install_path¥NetBackup¥logs¥admin
```

`-xdayomonth 1-31 [1-31]... | 1`

このオプションでは、スケジュールの実行日から除外する日付を指定します。月の最終日を指定するには **1** (小文字の **L**) を使います。

たとえば、**6** 日にバックアップを実行しないようにポリシーで指定するには、次のコマンドを入力します。

```
-xdayomonth 6
```

```
-xweekday day_name week [day_name week]...
```

このオプションでは、スケジュールの実行日から除外する曜日と週を指定します。

- **day_name** には、**Sunday**、**Monday**、**Tuesday**、**Wednesday**、**Thursday**、**Friday** または **Saturday** を指定します。
- **week** には、月の何週目であるかを指定します。
- 月の最後の週を指定するには 1 を使います。週は日曜日から月曜日までです。有効な値は 1 から 5 までです。

たとえば、第 3 月曜日と第 3 水曜日には実行しないようにポリシーで指定するには、次のコマンドを入力します。

```
-xweekday Monday 3 Wednesday 3
```

例

例 1 - 次の例では、**test** という名前のスケジュールの属性が変更されます。

```
# bpschedulerep test -cal 2
```

変更後に `bpschedule -label test` を実行すると、次の出力が表示されます。

```
SCHED test 0 1 604800 1 0 0 0 *NULL* 0 2 0 0 0
SCHEDWIN 0 0 0 0 0 0 0 0 0 0 0 0 0 0 0
SCHEDRES *NULL* *NULL* *NULL* *NULL* *NULL* *NULL* *NULL* *NULL*
SCHEDPOOL *NULL* *NULL* *NULL* *NULL* *NULL* *NULL* *NULL* *NULL*
SCHEDRL 1 1 1 1 1 1 1 1
SCHEDFOE 0 0 0 0 0 0 0 0
```

例 2 - 毎週土曜日および日曜日に、スケジュール **test** の開始時刻を、午後 11 時ではなく午後 10 時に設定します。また、時間帯を 1 時間ではなく 2 時間に設定します。`bpschedulerep` を実行して、時間帯をリセットし、`bpschedule` を実行して、新しいスケジュールの値を表示します。

```
# bpschedulerep test -0 79200 7200 -6 79200 7200
bpschedule -U -label test
Schedule:          test
Type:              Full Backup
Frequency:         every 7 days
Retention Level:  1 (2 weeks)
Maximum MPX:      1
Residence:         (specific storage unit not required)
Volume Pool:       (same as policy volume pool)
Daily Windows:
    Sunday         22:00:00 --> Sunday         24:00:00
```

Monday	23:00:00	-->	Monday	24:00:00
Tuesday	23:00:00	-->	Tuesday	24:00:00
Wednesday	23:00:00	-->	Wednesday	24:00:00
Thursday	23:00:00	-->	Thursday	24:00:00
Friday	23:00:00	-->	Friday	24:00:00
Saturday	22:00:00	-->	Saturday	24:00:00

ファイル

UNIX システムの場合:

```
/usr/opensv/netbackup/logs/admin/*  
/usr/opensv/netbackup/db/sched/schedule name
```

Windows システムの場合:

```
install_path%NetBackup%logs%admin%*  
install_path%NetBackup%db%sched%schedule name
```

関連項目

p.361 の [bpschedule](#) を参照してください。

bpsetconfig

bpsetconfig – NetBackup の構成の更新

概要

```
bpsetconfig [-h host] [-u user] [filename,...] [-r "reason"]
```

UNIX のみ: bpsetconfig -i | -e filename [-c class [-s schedule]]

UNIX システムでは、このコマンドのディレクトリパスは
/usr/opensv/netbackup/bin/admincmd/ です。

Windows システムでは、このコマンドのディレクトリパスは
<install_path>%NetBackup%bin\admincmd% です。

機能説明

bpsetconfig コマンドは、単独のプログラムとして、または backuptrace および restoretrace コマンドのヘルパープログラムとして使用します。このコマンドによって構成を更新することができます。このコマンドは、すべての NetBackup サーバープラットフォームで使用できます。

このコマンドを実行するには、管理者権限が必要です。

オプション

```
-e filename [-c class [-s schedule]]
```

クライアント client 上の /usr/opensv/netbackup/exclude_list に exclude_list ファイルを書き込みます。class (ポリシー) 修飾子と schedule 修飾子は exclude_list.class ファイルと exclude_list.class.schedule の書き込みを許可します。エクスクルードリストのファイルはバックアップから除外されます。

このオプションは、UNIX だけに適用されます。

```
filename,...
```

更新内容を表示するファイルを指定します。このファイルを指定しない場合は、標準の入力内容が表示されます。

```
-h host
```

構成の更新対象となるサーバーまたはクライアントのホスト名を指定します。

```
-i filename [-c class [-s schedule]]
```

クライアント class 上の /usr/opensv/netbackup/include_list に include_list ファイルを書き込みます。class (ポリシー) 修飾子と schedule 修飾子は include_list.class ファイルと include_list.class.schedule の書き込みを許可します。インクルードリス

トのファイルはエクスクルードリストの例外です。したがって、それらのファイルはバックアップ操作に含まれます。

このオプションは、**UNIX** だけに適用されます。

-r "reason"

このコマンド処理を選択する理由を示します。入力する理由の文字列は取得され、監査レポートに表示されます。この文字列は二重引用符 ("...") で囲んでください。文字列が **512** 文字を超えないようにしてください。それはハイフンの文字 (-) から始まり単一の引用符 (!) を含む場合があります。

-u user

構成の更新対象となるユーザーを指定します。

例

例 1 - 異なるシステムで **NetBackup** 構成を設定します。

```
bpsetconfig -h orange.colors.org
SERVER = yellow.colors.org
SERVER = orange.colors.org
```

<ctl-D>

<ctl-Z>

システム orange.colors.org 上の **NetBackup** 構成が、後続の指定したサーバーに設定されます。つまり、yellow.colors.org がクライアント orange.colors.org のマスターサーバーになります。

```
SERVER = yellow.colors.org
SERVER = orange.colors.org
```

例 2 - クライアント sun01 上の /usr/opensv/netbackup/excl_list.fullb にファイル /usr/opensv/netbackup/lists/sun01_excl_list.fullb を書き込みます。

```
# bpsetconfig -e /usr/opensv/netbackup/lists/sun01_excl_list.fullb /
-h sun01 -c fullbck
```

関連項目

p.152 の [bpgetconfig](#) を参照してください。

p.589 の [nbgetconfig](#) を参照してください。

p.649 の [nbsetconfig](#) を参照してください。

bpstsinfo

bpstsinfo - ストレージサーバー、LSU、イメージおよびプラグインの情報の表示

概要

```
bpstsinfo -comparedbandstu | -cdas -servername | -sn server_name |  
-storage_server storage_server -serverprefix server_prefix | -stype  
server_type [-lsuname lsu_name],... -oldservervolume  
old_sts_server:old_volume [-oldservervolume old_sts_server:old_volume  
...] [-remote remote_server...]  
bpstsinfo -deleteimage | -di -servername | -sn server_name  
-serverprefix server_prefix -lsuname lsu_name -imagenam image_name  
-imagedate image_date [-remote remote_server...]  
bpstsinfo -deleteimagegroup | -dig -servername | -sn server_name |  
-storage_server storage_server -serverprefix server_prefix -lsuname  
lsu_name -imagenam image_name -imagedate image_date [-remote  
remote_server...]  
bpstsinfo -diskpaceinfo | -dsi -stype storage_type  
bpstsinfo -imagegroupelist | -igl [-servername | -sn server_name]  
[-serverprefix server_prefix] [-lsuname lsu_name,...] [-imagenam  
image_name] [[-imagedatestart image_date] [-imagedateend image date]]  
[-imagetype STS_FULL_ONLY | STS_INCR_ONLY ] [-remote remote_server...]  
bpstsinfo -imageinfo | -ii [-servername | -sn server_name]  
[-serverprefix server_prefix] [-lsuname lsu_name,...] [-imagenam  
image_name] [-imagedate image_date] [[-imagedatestart image_date]  
[-imagedateend image date]] [-imagetype STS_FULL_ONLY | STS_INCR_ONLY]  
[-remote remote_server...]  
bpstsinfo -lsuinfo | -li [-servername | -sn server_name]  
[-serverprefix server_prefix] [-lsuname lsu_name,...]  
[-filteronimagemodetype [ STS_SA_IMAGE | STS_SA_OPAQUEF |  
STS_SA_CLEARF] [-remote remote_server...]  
bpstsinfo -plugininfo | -pi [-serverprefix server_prefix] [-stype  
server_type] [-remote remote_server...]  
bpstsinfo -servercap | -sc [-stype server_type] -storage_server  
storage_server [-remote remote_server...]  
bpstsinfo -serverinfo | -si [-servername | -sn server_name]  
[-serverprefix server_prefix] [-remote remote_server...]  
UNIX システムでは、このコマンドのディレクトリパスは  
/usr/opensv/netbackup/bin/admincmd/ です。
```

Windows システムでは、このコマンドのディレクトリパスは
<install_path>%NetBackup%bin%admincmd% です。

機能説明

bpstsinfo コマンドを実行すると、プラグイン、ストレージサーバー、論理ストレージユニット (LSU)、およびディスク上に存在するイメージの属性が表示されます。また、このコマンドを実行すると、古いサーバーおよびボリュームのイメージと、現在のサーバーおよびボリュームのイメージが比較されます。イメージグループのすべてのイメージ ID が表示されて、指定されたイメージが削除されます。コマンドのデバッグログは、現在の日付の **NetBackup** 管理ログファイルに送信されます。このコマンドのすべてのエラーは標準エラー出力 (stderr) に送信されます。

このコマンドは、認可済みユーザーだけが実行できます。

NetBackup による認可について詳しくは、次を参照してください。『[NetBackup セキュリティおよび暗号化ガイド](#)』。

オプション

1 つのコマンドラインに指定できるオプションは、次のうちの 1 つのみです。

-comparedbandstu | -cdas

このオプションを指定すると、カタログ内のイメージ情報と、ストレージサーバーの物理メディアにあるイメージ情報が比較されます。-comparedbandstu は、指定した以前の **OpenStorage** サーバーとボリュームを現在の **OpenStorage** サーバーとボリュームと比較します。

-deleteimage | -di

このオプションを指定すると、指定したイメージが削除されます。

-deleteimagegroup | -dig

このオプションを指定すると、指定したイメージグループが削除されます。

-diskspaceinfo | -dsi

このオプションを指定すると、指定されたディスク形式の集合領域が出力されます。

-imagegroupulist | -igl

このオプションを指定すると、指定したイメージまたはイメージグループの形式に関連するイメージ ID がすべて出力されます。

-imageinfo | -ii

このオプションを指定すると、イメージ情報が出力されます。

-lsuinfo | -li

このオプションを指定すると、LSU 情報が出力されます。

`-plugininfo | -pi`

このオプションを指定すると、システム上の内部および外部プラグインのプラグイン情報が出力されます。サブオプションを指定しないで `-plugininfo` を実行すると、すべてのプラグインが出力されます。`-serverprefix` と組み合わせて使用すると、指定された接頭辞を持つプラグインだけに出力が制限されます。`-stype` を使用すると、指定されたストレージサーバー形式のプラグインだけに出力が制限されます。

`-serverinfo | -si`

このオプションを指定すると、ストレージサーバー情報が出力されます。

`-servercap | -sc`

このオプションを指定すると、ストレージサーバー機能が出力されます。

サブオプション

`-filteronimagemodetype [STS_SA_IMAGE | STS_SA_OPAQUEF | STS_SA_CLEARF]`

このオプションを指定すると、システムで出力される LSU が、指定されたイメージモード形式に制限されます。

`-imagedate image_date`

このオプションでは、1 つのイメージを指定します。指定可能な形式は、次のとおりです。

03/08/2009 09:41:22

1110296416

このオプションは、`-imageinfo` とのみ併用できます。`-imagedatestart` または `-imagedateend` とは併用できません。

`-imagedateend image_date`

任意のフィルタ引数です。デフォルトでは、すべてのイメージが使用されます。`image_date` と同等か、より新しいイメージに制限するには、**MM/DD/YYYY HH:MM:SS** を指定します。

`-imagedatestart image_date`

任意のフィルタ引数です。デフォルトでは、すべてのイメージが使用されます。`image_date` と同等か、より新しいイメージに制限するには、**MM/DD/YYYY HH:MM:SS** を指定します。

`-imagenamename image_name`

任意のフィルタ引数です。デフォルトでは、すべてのイメージが使用されます。一致するイメージのみに制限するには、**image_name** を指定します。

`-imagetype STS_FULL_ONLY | STS_INCR_ONLY`

任意のフィルタ引数です。デフォルトでは、完全イメージと増分イメージの両方が使用されます。**STS_FULL_ONLY** または **STS_INCR_ONLY** により、完全バックアップまたは増分バックアップからのイメージだけに制限されます。

`-lsuname lsu_name,...`

任意のフィルタ引数です。デフォルトでは、すべての **LSU** が使用されます。指定される各 `-lsuname` に対して **1** つの **LSU** に制限するには、`lsu_name` を指定します。

`-remote remote_server...`

このオプションでは、ディスク情報を問い合わせるリモートサーバーの名称を指定します。このリモートサーバーが、`bpstsinfo` コマンドが実行されるホストの代わりに `bpstsinfo` 操作を実行します。複数のリモートサーバー (`-remote` ごとに **1** つ) を指定できます。

`-servername server_name`

このオプションでは、**STS** サーバーのホスト名を指定します。`-servername` を指定しない場合、ローカルホストのホスト名が使用されます。

`-serverprefix server_prefix`

このオプションを指定すると、サーバー接頭辞が `server_prefix` で指定したものに制限されます。任意のフィルタ引数です。デフォルトでは、すべてのサーバーの接頭辞が使用されます。このオプションは、`-serverinfo`、`-lsuinfo`、および `-imageinfo` と併用できます。有効な接頭辞を次に示します。

- `ntap`:
- `STSBasicDisk`:
- `PureDisk`:

`-stype server_type`

このオプションでは、ストレージサーバー形式を識別する文字列を指定します。`server_type` の値は次のいずれかから指定できます。

- シマンテック社が提供するストレージ。指定可能な値は、`AdvancedDisk` と `PureDisk` です。
- サードパーティのディスクアプライアンス。ベンダーから `server_type` の文字列が提供されます。
- クラウドストレージ。有効な値は `amazon`、`att`、`nirvanix`、`rackspace` などです。これらの値には `_crypt` 接尾辞 (`amazon_crypt` など) を含めることもできます。

ストレージサーバーの形式では大文字と小文字が区別されます。

`-diskspaceinfo` オプションで `-stype` を使うと、集合領域を表示するディスク形式を指定できます。出力の表示例を次に示します。

```
Disktype: AdvancedDisk TotalCapacity: 100000000 TotalUsed:
10000000
```

ライセンスは *TotalCapacity* および *TotalUsed* の値に基づきます。

例

例 1 - ストレージサーバー **apricot** 上の `lsu SnapMirrorA1` の属性を表示します。

```
# bpstsinfo -lsuinfo -serverprefix "ntap:" -servername apricot /
-lsuname /vol/dsul
```

LsuInfo:

```
Server Name: ntapdfm
LSU Name: SnapMirrorA1
Allocation: STS_LSU_AT_STATIC
Storage: STS_LSU_ST_NONE
Description:
Configuration:
Media: (STS_LSUF_DISK | STS_LSUF_REP_ENABLED)
Save As: (STS_SA_SNAPSHOT | STS_SA_MIRROR)
Replication Sources: 1 ( simdisk:ntapdfm:SnapVaultA )
Replication Targets: 0 ( )
Maximum Transfer: 0
Block Size: 4096
Allocation Size: 0
Size: 171798691840
Bytes Used: 8895016960
Physical Bytes Used: 0
Resident Images: 0
```

例 2 - ストレージサーバー **sig32** のすべての機能を表示します。

```
# bpstsinfo -sc -stype Network_MWS -storage_server sig32
Network_MWS:sig32
STS_SRVC_ASYNC_WAIT
STS_SRVC_CLAIM
STS_SRVC_CLOSE_IMAGE
STS_SRVC_CLOSE_IMAGE_LIST
STS_SRVC_CLOSE_LSU_LIST
STS_SRVC_CLOSE_SERVER
STS_SRVC_COPY_IMAGE
...
STS_SRVC_NAMED_ASYNC_ROLLBACK_SNAP
```

```
STS_SRVC_NAMED_ASYNC_VALIDATE_SNAP_BYNAME  
STS_SRVC_NAMED_ASYNC_WAIT_SNAP  
STS_SRVC_OPEN_SNAP_LIST  
STS_SRVC_VALIDATE_ROLLBACK  
STS_SRVC_VALIDATE_SNAP_BYNAME
```

関連項目

- p.384 の [bpstuadd](#) を参照してください。
- p.394 の [bpstudel](#) を参照してください。
- p.397 の [bpstulist](#) を参照してください。
- p.404 の [bpsturep](#) を参照してください。

bpstuadd

bpstuadd – NetBackup ストレージユニットまたはストレージグループの作成

概要

```
bpstuadd -label storage_unit_label -path path_name [-dt disk_type]
| -dp disk_pool [-dt disk_type] | -density density_type [-rt
robot_type -rn robot_number] [-host host_name] [-cj max_jobs] [-odo
on_demand_only_flag] [-flags flags] [-cf clearfiles] [-tt
transfer_throttle] [-hwm high_water_mark] [-lwm low_water_mark] [-okrt
ok_on_root] [-mfs max_fragment_size] [-maxmpx mpx_factor] [-nh
NDMP_attach_host] [-nodevhost] [-verbose] [-hostlist host_name...]
[-M master_server,...] [-reason "string"]
bpstuadd -group storage_unit_group storage_unit_label,... [-sm
selection_method]
```

UNIX システムでは、このコマンドのディレクトリパスは

/usr/opensv/netbackup/bin/admincmd/ です。

Windows システムでは、このコマンドのディレクトリパスは

<install_path>%NetBackup%\bin\admincmd% です。

機能説明

bpstuadd コマンドを実行すると、NetBackup ストレージユニットまたはストレージユニットグループが作成されます。1 つのストレージユニットを作成する場合、新しいストレージユニットのラベルおよび -density オプション、-path オプションまたは -dp オプションのいずれかが指定されていることを確認します。NetBackup 構成で許可されている最大数のストレージユニットがマスターサーバーですでに作成されている場合、bpstuadd コマンドを実行してもストレージユニットは作成できません。bpstuadd では、既存のストレージユニットと同じ宛先メディアを指定するストレージユニットは作成されません。

メモ: このコマンドを実行しても、ディスクストレージユニット (DSU) またはテープストレージユニットをディスクステージングストレージユニット (DSSU) に変更することはできません。また、DSSU を DSU またはテープストレージユニットに変更することもできません。

NetBackup には、いくつかの形式のストレージユニットがあります。ストレージユニット形式によって、NetBackup のデータ格納方法は異なります。bpstuadd コマンドラインのオプションによって、次のいずれかの形式が判断されます。

- ディスク. 格納の宛先は、ディスクのファイルシステムのディレクトリまたはディスクプール (あるいはその両方) です。

- ディスクステージング:ディスクステージングストレージユニット (DSSU) では、DSSU から最終的な宛先ストレージユニットへ、イメージが自動的に (または定期的) に移動されます。
- Media Manager. 格納の宛先は、Media Manager によって管理されるテープデバイスです。
- NDMP. NDMP は、Media Manager によって制御されるストレージユニットです。NetBackup の NDMP オプションがインストールされている必要があります。このコマンドの説明では、Media Manager ストレージユニット形式に関する記述は、特に指定されていないかぎり、NDMP ストレージユニット形式にも適用されます。NDMP ストレージユニットのメディアは、常に NDMP ホストに直接接続され、他の NetBackup クライアントのデータ格納には使用できません。NDMP ストレージユニットを定義するには、bpstuadd コマンドをマスターサーバーで実行します。

NDMP ストレージユニットの追加方法について詳しくは、次を参照してください。

『NetBackup for NDMP 管理者ガイド』。

エラーは標準エラー出力 (stderr) に送信されます。コマンドのデバッグログは、現在の日付の NetBackup 管理ログファイルに送信されます。

ストレージユニットについて詳しくは、次を参照してください。『NetBackup 管理者ガイド Vol. 2』。

このコマンドは、認可済みユーザーだけが実行できます。

NetBackup による認可について詳しくは、次を参照してください。『NetBackup セキュリティおよび暗号化ガイド』。

オプション

-cf *clearfiles*

NBU メディアがバックアップデータに対してデータ変換操作を実行することを可能にします。通常、OpenStorage プラグインは使用ディスク領域の総量を削減するブロックレベルの重複排除操作を実行するためにメタデータを使います。この値は OST ディスクプールを使用して構成されたディスクストレージユニットにのみ有効です。

clearfiles 変数には、次のいずれかの値を指定できます。

- 0 - すべてのデータ変換操作を無効にします。
- 1 - 詳細な変換操作を有効にします。メタデータはバックアップ済みであるファイルの属性すべてを記述します。これらのファイルは透明なファイルと呼ばれます。
- 2 - 簡単な変換操作を有効にします。メタデータは、バックアップ済みのファイルの名前、サイズ、バイトオフセットの場所のみを識別します。それらは不透明なファイルと呼ばれます。

-cj *max_jobs*

このオプションでは、このストレージユニットで許可されている最大並列実行ジョブ数を指定します。**max_jobs** は、負でない整数です。適切な値は、複数のバックアップ処理を問題なく実行するサーバーの性能およびストレージメディアで利用可能な領域によって異なります。

クライアントあたりの最大ジョブ数について詳しくは、次を参照してください。
『[NetBackup 管理者ガイド Vol. 1](#)』。

max_jobs オプションを 0 (ゼロ) に設定すると、ジョブをスケジュールする際にこのストレージユニットは選択されません。デフォルトは 1 です。

-density *density_type*

このオプションでは、メディアの密度の種類を指定します。このオプションを指定すると、ストレージユニット形式は **Media Manager** になります。このオプションには、デフォルトは存在しません。コマンドラインには、**-density**、**-path** または **-dp** のいずれかを指定する必要があります。コマンドラインでロボット形式を指定すると、密度の値はそのロボット形式によって決まります。**-density**、**-path** および **-dp** オプションは単独でのみ使用できます。

density_type の有効な値は次のとおりです。

d1t: DLT カートリッジ

d1t2: DLT 代替カートリッジ

8mm: 8MM カートリッジ

4mm: 4MM カートリッジ

qscsi: 1/4 インチカートリッジ

メモ: NetBackup では、NetBackup Enterprise Server 上で次の密度がサポートされます。

hcart: 1/2 インチカートリッジ

hcart2: 1/2 インチ代替カートリッジ

dtf: DTF カートリッジ

-dp *disk_pool*

このオプションでは、このストレージユニットのデータストレージ領域であるディスクプールの名前を指定します。ディスクプールがすでに存在している必要があります。

-dt *disk_type*

このオプションでは、ディスク形式を指定できます。**disk_type** の有効な値を次に示します。

1: BasicDisk

3: SnapVault

6: DiskPool

-flags *flags*

このオプションでは、ステージングストレージユニットにするストレージユニットを指定します。このオプションでは、クイックリストアが可能です。**flags**の有効な値は**NONE**および**STAGE_DATA**です。現在は、ディスクストレージユニットの場合にのみ有効です。

-group *storage_unit_group storage_unit_label...*

このオプションでは、ストレージユニットグループを追加して、グループ名およびグループを構成するストレージユニットを指定します。複数のストレージユニットをストレージユニットグループに追加するには、名前を空白で区切ります。ストレージユニットグループのラベルの最大長は、**128**文字です。

-host *host_name*

このオプションでは、ストレージユニットに関連付けられた**1**つの特定のメディアサーバーを指定します。ストレージから読み込みまたは書き込みを行うシステムとして選択できるのは、このメディアサーバーだけです。デフォルトは、ローカルシステムのホスト名です。

メモ: NetBackup Server では、リモートメディアサーバーはサポートされません。

ホストには、**NetBackup** マスターサーバーまたはリモートメディアサーバー (リモートメディアサーバーを構成する場合) を選択する必要があります。ホスト名には、すべての **NetBackup** サーバーおよびクライアントに認識されるサーバーのネットワーク名を指定する必要があります。

host_name が有効なネットワーク名であり、事前に **NetBackup** で構成されていない場合、**host_name** は **NetBackup** 構成にメディアサーバーとして追加されます。**UNIX** では、このサーバーは **bp.conf** ファイルに **SERVER** エントリとして表示されます。**Windows** では、[ホストプロパティ (Host Properties)] で [サーバー (Servers)] リストのサーバーを指定します。**host_name** が有効なネットワーク名でない場合、手動でこれを構成する必要があります。

-hostlist *host_name...*

このオプションでは、ストレージへのアクセス権があるメディアサーバーのサブセットを指定します。複数のメディアサーバーでディスクプールを共有する場合、このオプションを使用します。**1**つのメディアサーバーセットを、一連のポリシーおよびクライアントを処理するための専用サーバーとして使用するとします。このとき、他のポリシーおよびクライアントを処理する (または複製ジョブなどの特定の役割に使用するため)、別のメディアサーバーセットが必要になります。

-hwm *high_water_mark*

このオプションでは、ディスクストレージユニットが空きなしと見なされる割合を指定します。このオプションは、ユーザーが構成可能なしきい値です。高水準点の有効な範囲は **0** から **100 (%)** です。デフォルト設定は **98 (%)** です。高水準点に到達した場合、NetBackup は次のように対処します。

- ジョブを実行し、すべての容量が使用された場合、DSU は[空きなし(Full)]と見なされます。ストレージユニットグループ内のストレージユニットを選択する場合、メディアおよびデバイスの選択 (MDS) によって、新しいジョブは、使用済み容量が高水準点の値を超えるストレージユニットには割り当てられません。代わりに、グループ内の他のストレージユニットが検索され、ジョブが割り当てられます。
- ジョブの実行中に、ステージング属性が設定され、すべての容量が使用された場合、ステージングによってイメージが期限切れとなり、DSU の領域が解放されます。この操作によって、より多くのバックアップデータに対応できます。

-label *storage_unit_label*

このオプションでは、ストレージユニット名を指定します。-group を使用しない場合、このオプションは必須です。ストレージユニットのラベルの最大長は、**128** 文字です。

-lwm *low_water_mark*

このオプションは、ユーザーが構成可能なしきい値で、ディスクステージングを実行するディスクストレージユニットによって使用されます。低水準点の有効な範囲は **0** から **100 (%)** です。デフォルト設定は **80 (%)** です。

高水準点に到達した場合は、次のいずれかを実行します。

- 低水準点に到達するまで、イメージを他のストレージユニットに移行する。
- 低水準点に到達するまで、ステージングが設定された最も古いイメージのディスクイメージを期限切れにしてディスク領域を解放する。

多くのデータを保存する場合は、高水準点と近くなるように低水準点を設定します。

-M *master_server,...*

このオプションでは、マスターサーバーのリストを指定します。このリストは、カンマで区切られたホスト名のリストです。このオプションを指定すると、一覧表示されている各マスターサーバーでコマンドが実行されます。サーバーでは、コマンドを発行するシステムからのアクセスが許可されている必要があります。マスターサーバーでエラーが発生した場合、その時点で処理が停止します。デフォルトは、コマンドが入力されるシステムのマスターサーバーです。

-maxmpx *mpx_factor*

このオプションでは、最大多重化因数を指定します。多重化を実行すると、1 つ以上のクライアントからある **1** 台のドライブへ複数のバックアップが並列して送信されます。

多重化 (MPX) について詳しくは、次を参照してください。『[NetBackup 管理者ガイド Vol. 1](#)』。

多重化因数の範囲は、1 から 32 です。デフォルト値の 1 は多重化が行われないことを示します。値が 1 より大きい場合、NetBackup では、宛先メディアに多重化されたイメージを作成できます。ライセンスによって、ローカルでの NetBackup のインストールに効果的な部分が 1 から 32 の範囲で判断されます。

`-mfs max_fragment_size`

このオプションでは、NetBackup イメージのフラグメントの最大サイズ (MB) を指定します。NetBackup では、最大フラグメントサイズ 1,000,000 MB (1 TB) がサポートされます。

リムーバブルメディアの場合、この値は 0 (ゼロ)、または、50 (MB) から 1,048,576 (MB) (1024 GB) の任意の整数です。デフォルト値は 0 (ゼロ) で、最大値の 1,048,576 MB を表します。

ディスクストレージユニットの場合、この値は 20 MB から 512,000 MB (512 GB) です。デフォルト値は 512,000 MB です。

`-nh NDMP_attach_host`

NDMP サーバーのホスト名を指定します。このオプションを指定すると、ストレージユニット形式が NDMP に設定されます。デフォルトは NDMP サーバー以外のサーバーです。

`-nodevhost`

このオプションを指定すると、このストレージユニットにはメディアサーバーが関連付けられません。データの移動 (バックアップ、複製、リストアなど) で使用するストレージにアクセス可能な任意のメディアサーバーを選択できます。

`-odo on_demand_only_flag`

このオプションを指定すると、On-Demand-Only フラグによって NetBackup で使用されるストレージユニットの条件が制御されます。

- ストレージユニットを要求するポリシーまたはスケジュールだけでストレージユニットを利用可能にするには、フラグを 1 (有効) に設定します。
- すべてのポリシーまたはスケジュールでストレージユニットを利用可能にするには、フラグを 0 (無効) に設定します。

ストレージユニット形式がディスクである場合、デフォルトは 1 です。ストレージユニットは、明示的に要求された場合だけ NetBackup によって使用されます。そうでない場合、デフォルトは 0 (ゼロ) です。

DSSU はオンデマンドのみ (On Demand Only) です。DSSU はバックアップの対象として明示的に指定する必要があります。

-okrt ok_on_root

このフラグが設定されていない場合、ルートファイルシステムで、バックアップおよびディレクトリの作成は行われません。**ok_on_root** フラグが設定されている場合、通常、バックアップおよびディレクトリの作成が行われます。

このフラグのデフォルト値は0 (ゼロ) です。パスがルートファイルシステム上にある場合に、ディスクストレージユニット (**BasicDisk**) に対してバックアップおよびディレクトリの作成は行われません。

-path path_name

このオプションでは、このストレージユニットのデータストレージ領域であるディスクファイルシステムのパスを絶対パス名で指定します。このオプションを指定すると、ストレージユニット形式はディスクになります。このオプションには、デフォルトは存在しません。コマンドラインには、**-path**、**-dp** または **-density** のいずれかを指定する必要があります。**-density**、**-path** および **-dp** オプションは単独でのみ使用できます。

通常、このオプションを指定するときは **On-Demand-Only** フラグを有効にします (「-odo」を参照)。これを有効にしない場合、特定のストレージユニットを要求しない **NetBackup** ポリシーが存在する場合に、ディスクファイルシステム **path_name** の空きがなくなる可能性があります。この操作によって、システムに重大な問題が発生する場合があります。たとえば、システムスワップ領域が同じファイルシステム上に存在する場合、新しいプロセスが失敗する場合があります。

-reason "string"

このコマンド処理を選択する理由を示します。入力する理由の文字列は取得され、監査レポートに表示されます。この文字列は二重引用符 ("...") で囲んでください。文字列が 512 文字を超えないようにしてください。それはハイフンの文字 (-) から始まり単一の引用符 (!) を含む場合がありません。

-rn robot_number

このオプションでは、ストレージユニットのロボット番号を指定します。0 (ゼロ) 以上を指定する必要があります。ロボット番号は、管理コンソールの [メディアおよびデバイスの管理 (**Media and Device Management**)] から取得できます。**-rt** オプションを指定しないかぎり、このオプションは無視されます。このオプションには、デフォルトは存在しません。

ロボット番号の使用に関する規則について詳しくは、次を参照してください。

『**NetBackup 管理者ガイド Vol. 2**』。

-rt robot_type

このオプションでは、ストレージユニットのロボット形式を指定します。非ロボットの (スタンドアロンの) デバイスでは、**NONE** を選択するか、このオプションを省略します。デフォルト値は **NONE** (非ロボット) です。密度にはそのロボット形式に適した値を指定する必要があります。

このオプションを NONE 以外の値に設定する場合、**-rm** オプションが必要です。次に、指定可能なロボット形式のコードを示します。

NONE: 非ロボット

TL0: DLT テープライブラリ

ACS: 自動カートリッジシステム

TL8: 8MM テープライブラリ

TL4: 4MM テープライブラリ

TLH: 1/2 インチテープライブラリ

TLM: マルチメディアテープライブラリ

`-sm selection_method`

このオプションでは、ストレージユニットグループの選択方法を選択します。このオプションは、ストレージユニットグループにだけ有効です。**selection_method** に指定可能な値は、次のとおりです。

優先度 = 1 (デフォルト)

選択されていない期間 = 2

フェールオーバー = 3

負荷分散 = 4

オプション 1: 優先度では、リスト内の最初のストレージユニットが選択され、ユニットが停止または空きなしの状態になるか、その最大並列実行ジョブ設定に到達するまで使われます。その後、利用可能なユニットが見つかるまで、リスト内の次のストレージユニットが順に検索されます。

オプション 2: 選択されていない期間では、選択されていない期間が最も長いストレージユニットが選択されます。

オプション 3: フェールオーバーは、優先度と同じですが、最大並列実行ジョブ数に到達した場合に、MDS はジョブをキューに投入し、最初のストレージユニットを待機します。MDS がリスト内の次のストレージユニットに移動するのは、最初のユニットが停止または空きなしの場合だけです。

オプション 4: 負荷分散。Capacity Management ライセンスキーがインストールされている場合、ユーザーがこのオプションを選択すると、メディアデバイスの選択 (MDS) によってジョブの負荷が分散されます。ジョブの負荷分散では、メディアサーバーが次の条件に一致しているかどうかを考慮されます。

- 推定されるジョブサイズに対応できる十分なディスクボリュームの空き領域がある。
- 別のジョブに対応できる十分な CPU リソースとメモリリソースがある。

- 同じクラスまたはランクの他のメディアサーバーと比較して、推定されるジョブサイズが最小量のデータが処理されている。

ユーザーが **Capacity Management** ライセンスキーを持っていない場合は、負荷分散ではなくオプション 2 (使用されていない期間が最も長いストレージユニット) に戻されます。

-tt transfer_throttle

転送スロットル設定は、**SnapVault** ストレージユニットでのみ表示されます。

この設定は、**SnapVault** データ転送の最大帯域幅を示します。デフォルト設定の 0 (ゼロ) は無制限の帯域幅を示し、データ転送は最大ネットワーク帯域幅で行われます。(範囲は、0 (デフォルト) から 9999999 です。)

-verbose

このオプションを指定すると、ログの詳細モードが選択されます。このオプションは、デバッグログ機能が有効になっている場合、つまり次のディレクトリが定義されている場合にだけ有効です。

UNIX systems: /usr/opensv/netbackup/logs/admin

Windows systems: install_path¥NetBackup¥logs¥admin

例

例 1 - hatunit という新しいストレージユニットを作成します。ストレージユニット形式は、ディスクです。

ストレージユニットのパスは、/tmp/hatdisk です。

ストレージユニットのパスは、C:¥tmp¥hatdisk です。

```
# bpstuadd -label hatunit -path /tmp/hatdisk -verbose
```

```
# bpstuadd -label hatunit -path C:¥tmp¥hatdisk -verbose
```

```
<2>bpstuadd: INITIATING: NetBackup 7.5 created: 0
```

```
<2>bpstuadd: EXIT status = 0.
```

例 2 - NetBackup で事前に構成されていない **UNIX** サーバーを使用して、ストレージユニットを作成します。

メモ: 次の例では、リモートメディアサーバーが参照されるため、**NetBackup Enterprise Server** だけに適用されます。**NetBackup Server** では、マスターサーバーだけがサポートされ、リモートメディアサーバーはサポートされません。

```
# bpstuadd -label parrot_stu -host parrot -density dlt -rt TLD -rn 2
```


リモートメディアサーバー **parrot** が、bp.conf ファイルに追加されます。

また、**NetBackup** および **Media Manager** を **parrot** にインストールして、マスターサーバーで `add_media_server_on_clients` 実行可能ファイルを実行する必要があります。

```
% grep parrot /usr/opensv/netbackup/bp.conf
SERVER = parrot
```

戻り値

終了状態が **0** (ゼロ) の場合は、コマンドが正常に実行されたことを意味します。

終了状態が **0** (ゼロ) 以外の場合は、エラーが発生したことを意味します。

管理ログ機能が有効になっている場合、終了状態は、bpstuadd によって次のログディレクトリ内の管理日次ログに書き込まれます。

```
UNIX systems: /usr/opensv/netbackup/logs/admin
```

```
Windows systems: install_path¥NetBackup¥logs¥admin
```

次の形式が使用されます。

```
# bpstuaddnew: EXIT status = exit status
```

エラーが発生した場合、このメッセージの前に診断が表示されます。

ファイル

```
UNIX systems: /usr/opensv/netbackup/logs/admin/*
```

```
Windows systems: install_path¥NetBackup¥logs¥admin¥*
```

EMM データベース

関連項目

p.378 の [bpstinfo](#) を参照してください。

p.394 の [bpstudel](#) を参照してください。

p.397 の [bpstulist](#) を参照してください。

p.404 の [bpsturep](#) を参照してください。

bpstudel

bpstudel – NetBackup ストレージユニットまたはストレージユニットグループの削除

概要

```
bpstudel -label storage_unit_label [-verbose] [-M master_server  
[,...]] [-reason "string"]
```

```
bpstudel -group storage_unit_group [-M master_server [,...]]
```

UNIX システムでは、このコマンドのディレクトリパスは

/usr/opensv/netbackup/bin/admincmd/ です。

Windows システムでは、このコマンドのディレクトリパスは

<install_path>%NetBackup%bin\admincmd% です。

機能説明

bpstudel コマンドを実行すると、NetBackup ストレージユニットまたはストレージユニットグループが削除されます。コマンドには、ストレージユニットのラベル名またはストレージユニットグループのグループ名のいずれかを含める必要があります。両方を指定することはできません。

bpstudel を実行して、ストレージユニットを削除することはできません。たとえば、ストレージユニットのラベルを間違えて入力した場合、bpstudel を実行してもエラーメッセージは戻されません。bpstulist を実行すると、ストレージユニットが削除されたことを確認できます。

エラーは標準エラー出力 (stderr) に送信されます。コマンドのデバッグログは、現在の日付の NetBackup 管理ログファイルに送信されます。

ストレージユニットについて詳しくは、次を参照してください。『NetBackup 管理者ガイド Vol. 2』。

このコマンドは、すべての認可済みユーザーが実行できます。

NetBackup による認可について詳しくは、次を参照してください。『NetBackup セキュリティおよび暗号化ガイド』。

オプション

```
-label storage_unit_label
```

このオプションでは、ストレージユニット名を指定します。このオプションは必須です。ストレージユニットのラベルの最大長は、128 文字です。

`-group storage_unit_group`
このオプションでは、削除するストレージユニットグループ名を指定します。このオプションを指定すると、指定したストレージユニットグループが削除されます。

`-M master_server [,...]`
このオプションを指定すると、一覧表示されている各マスターサーバーでこのコマンドが実行されます。このリストは、カンマで区切られたマスターサーバーのリストです。マスターサーバーでは、コマンドを発行したシステムからのアクセスが許可されている必要があります。マスターサーバーでエラーが発生した場合、その時点で処理が停止します。デフォルトは、コマンドが入力されるシステムのマスターサーバーです。

`-reason "string"`
このコマンド処理を選択する理由を示します。入力する理由の文字列は取得され、監査レポートに表示されます。この文字列は二重引用符 ("...") で囲ってください。文字列が 512 文字を超えないようにしてください。それはハイフンの文字 (-) から始まり単一の引用符 (!) を含む場合がありません。

`-verbose`
このオプションを指定すると、ログの詳細モードが選択されます。このモードは、デバッグログ機能が有効になっている場合、つまり次のディレクトリが定義されている場合にだけ有効です。

```
UNIX systems: /usr/opensv/netbackup/logs/admin

Windows systems: install_path¥NetBackup¥logs¥admin
```

例

次の例では、`tst.dsk` というストレージユニットが削除され、削除の前後に存在していたストレージユニットが表示されます。

```
# bpstulist

UNIX systems:
stuunit 0 mango 0 -1 -1 1 0 /tmp/stuunit 1 1 2000 *NULL*
tst.dsk 0 mango 0 -1 -1 3 0 /hsm3/dsk 1 1 2000 *NULL*

Windows systems:
stuunit 0 mango 0 -1 -1 1 0 C:¥tmp¥stuunit 1 1 2000 *NULL*
tst.dsk 0 mango 0 -1 -1 3 0 C:¥hsm3¥dsk/ 1 1 2000 *NULL*

# bpstudel -label tst.dsk

# bpstulist
```

```
UNIX systems:  
stuunit 0 mango 0 -1 -1 1 0 /tmp/stuunit 1 1 2000 *NULL*  
  
Windows systems:  
stuunit 0 mango 0 -1 -1 1 0 C:¥tmp¥stuunit 1 1 2000 *NULL*
```

ファイル

```
UNIX systems: /usr/opensv/netbackup/logs/admin/*  
Windows systems: install_path¥NetBackup¥logs¥admin¥*
```

関連項目

- p.378 の [bpstsinfo](#) を参照してください。
- p.384 の [bpstuadd](#) を参照してください。
- p.397 の [bpstulist](#) を参照してください。
- p.404 の [bpsturep](#) を参照してください。

bpstulist

bpstulist – NetBackup ストレージユニットまたはストレージユニットグループの表示

概要

```
bpstulist -label storage_unit_label [,...] [-L | -l | -U |  
-show_available | -lsa ] [ -g | -go ] [-verbose] [-M master_server  
[,...]] [-reason "string"]  
bpstulist -group storage_unit_group [-verbose] [-M master_server  
[,...]]
```

UNIX システムでは、このコマンドのディレクトリパスは

/usr/opensv/netbackup/bin/admincmd/ です。

Windows システムでは、このコマンドのディレクトリパスは

<install_path>%NetBackup%bin\admincmd% です。

機能説明

bpstulist コマンドを実行すると、NetBackup ストレージユニットまたはストレージユニットグループの属性が表示されます。ストレージラベル名またはストレージユニットグループ名を指定しない場合、bpstulist を実行すると、すべての NetBackup ストレージユニットまたはストレージユニットグループの属性が表示されます。また、このコマンドでは、ストレージユニットのラベルをカンマで区切って複数指定すると各ストレージユニットの情報を表示します。-show_available および -lsa フラグを指定すると、特定のストレージユニットのすべての構成済みメディアサーバーを一覧表示することができます。

エラーは標準エラー出力 (stderr) に送信されます。コマンドのデバッグログは、現在の日付の NetBackup 管理ログファイルに送信されます。

ストレージユニットについて詳しくは、次を参照してください。『[NetBackup 管理者ガイド Vol. 1](#)』。

このコマンドは、すべての認可済みユーザーが実行できます。

NetBackup による認可について詳しくは、次を参照してください。『[NetBackup セキュリティおよび暗号化ガイド](#)』。

オプション

表示形式のオプションを次に示します。

- L このオプションを指定すると、表示形式が詳細になります。このオプションを指定すると、**storage-unit attribute: value** の形式で、各行に 1 つのストレージユニット属性が含まれるリストが生成されます。属性値によっては、解釈済みの形式と raw 形

式の両方で表示される場合もあります。たとえば、ロボット形式のエントリは TL4 (7) (7 は TL4 ロボットに対する NetBackup の内部的な値) となる場合があります。

ディスクストレージユニットの場合、各ストレージユニットに対して次の属性が詳細形式で表示されます。

- ラベル (Label)
- ストレージユニット形式 (Storage Unit Type) (ディスク (0) など)
- メディアのサブ形式 (Media Subtype) (BasicDisk (1) など)
- ホスト接続 (Host Connection)
- 並列実行ジョブ (Concurrent Jobs)
- オンデマンドのみ (On Demand Only)
- 最大 MPX (Max MPX)
- 最大フラグメントサイズ (Max Fragment Size)
- ブロック共有 (Block sharing)
- ルートの使用 (Ok On Root)
- ディスクプール (Disk Pool)
- スナップショット (Snapshots)
- レプリケーションプライマリ (Replication Primary)
- レプリケーションソース (Replication Source)
- レプリケーションターゲット (Replication Target)
- ミラー (Mirror)

各 DiskPool ディスクストレージユニットに対して次の属性が詳細形式で表示されます。

- ラベル (Label)
- ストレージユニット形式 (Storage Unit Type)
- メディアのサブ形式 (Media Subtype) (DiskPool (6))
- ホスト接続 (Host Connection) (1 行に 1 つのホスト)
- 並列実行ジョブ (Concurrent Jobs)
- オンデマンドのみ (On Demand Only)
- 最大フラグメントサイズ (Max Fragment Size)
- 最大 MPX (Max MPX)
- ブロック共有 (Block sharing)

- ファイルシステムエクスポート (File System Export)

各 Media Manager ストレージユニットに対して次の属性が詳細形式で表示され
ます。

- ラベル (Label)
 - ストレージユニット形式 (Storage Unit Type) (テープ (0) など)
 - ホスト接続 (Host Connection)
 - 並列実行ジョブ (Concurrent Jobs)
 - オンデマンドのみ (On Demand Only)
 - ロボット形式 (Robot Type)
 - 最大フラグメントサイズ (Max Fragment Size)
 - 最大 MPX/ドライブ (Max MPX/drive)
- 1 このオプションを指定すると、表示形式が簡易になり、簡易なリストが作成されます。
このオプションは、カスタマイズされたレポート形式にリストを再生成するスクリプトま
たはプログラムに対して有効です。このオプションはデフォルトの表示形式です。
- 1 行に、ストレージユニットの情報と raw 形式で表示されるすべての属性値が含ま
れます。次に、この行のフィールドを示します。
- ラベル
 - ストレージユニット形式
 - ホスト
 - 密度
 - 並列実行ジョブ
 - 初期 MPX
 - パス
 - オンデマンドのみ
 - 最大 MPX
 - 最大フラグメントサイズ
 - NDMP 接続ホスト
 - スロットル (SnapVault のみ)
 - サブ形式
 - ディスクフラグ
 - 高水準点
 - 低水準点

- ルートの使用
- ディスプール
- ホストリスト (1 つ以上をカンマ区切りで表示)
- U このオプションを指定すると、表示形式がユーザーになります。このオプションを指定すると、**storage-unit attribute: value** の形式で、各行に 1 つのストレージユニット属性が含まれるリストが生成されます。属性値は、解釈済みの形式で表示されます。たとえば、ロボット形式値は、7 ではなく TL4 になります。

ディスクストレージユニットの場合、各ストレージユニットに対して次の属性がユーザー形式で表示されます。

- ラベル (Label)
- ストレージユニット形式 (Storage Unit Type) (ストレージユニットの形式)
- ストレージユニットのサブ形式 (Storage Unit Subtype)
- ホスト接続 (Host Connection)
- 並列実行ジョブ (Concurrent Jobs)
- オンデマンドのみ (On Demand Only)
- 最大 MPX (Max MPX)
- パス (Path)
- 最大フラグメントサイズ (Max Fragment Size)
- ステージデータ (Stage data)
- 高水準点 (High Water Mark)
- ルートの使用 (Ok On Root)

DiskPool ディスクストレージユニットの場合、各ストレージユニットに対して次の属性がユーザー形式で表示されます。

- ラベル (Label)
- ストレージユニット形式 (Storage Unit Type)
- ホスト接続 (Host Connection) (1 行に 1 つのホスト)
- 並列実行ジョブ (Concurrent Jobs)
- オンデマンドのみ (On Demand Only)
- 最大フラグメントサイズ (Max Fragment Size)
- 最大 MPX (Max MPX)
- DiskPool

Media Manager ストレージユニットの場合、各ストレージユニットに対して次の属性がユーザー形式で表示されます。

- ラベル (Label)
 - ストレージユニット形式 (Storage Unit Type)
 - ストレージユニットのサブ形式 (Storage Unit Subtype)
 - ホスト接続 (Host Connection)
 - 並列実行ジョブ (Concurrent Jobs)
 - オンデマンドのみ (On Demand Only)
 - 最大 MPX/ドライブ (Max MPX/drive)
 - ロボット形式 (Robot Type)
 - 最大フラグメントサイズ (Max Fragment Size)
- g このオプションを指定すると、ストレージユニットのリストの表示形式にストレージユニットグループが含まれます。このオプションを指定すると、**group_name:**
group_members の形式で、各行に 1 つのストレージユニットグループが含まれる表示が生成されます。また、このオプションを指定すると、ストレージユニットグループリストの先頭に選択方式の値が含まれます。
- go
このオプションを指定すると、ストレージユニットのリストの表示形式にストレージユニットグループ情報のみが含まれます。
- label storage_unit_label1 [,storage_unit_label2...]
このオプションでは、ストレージユニット名を指定します。このリストは、カンマで区切られたストレージユニットのラベルのリストです。このオプションを指定しない場合、すべてのストレージユニットが表示されます。ストレージユニットのラベルの最大長は、**128** 文字です。
- group storage_unit_group
このオプションでは、すべての定義済みストレージユニットおよびストレージユニットグループのリストを指定します。ストレージユニットのリストでは、表示形式が簡易になり、簡易なリストが生成されます。ストレージユニットグループの表示形式は、**group_name: group_members** です。
- lsa
このオプションでは、メディアサーバーリストの利用可能なメディアサーバーを含むデータベース内に存在するすべてのストレージユニットが一覧表示されます。
- M master_server1 [,master_server2...]
このオプションでは、カンマで区切られたマスターサーバーのリストを指定します。このオプションを指定すると、一覧表示されている各マスターサーバーでコマンドが実行されます。マスターサーバーでは、コマンドを発行したシステムからのアクセスが

許可されている必要があります。マスターサーバーにエラーが発生した場合、その時点でリスト内の処理が停止します。デフォルトは、コマンドが入力されるシステムのマスターサーバーです。

-reason "string"

このコマンド処理を選択する理由を示します。入力する理由の文字列は取得され、監査レポートに表示されます。この文字列は二重引用符 ("...") で囲ってください。文字列が 512 文字を超えないようにしてください。それはハイフンの文字 (-) から始まり単一の引用符 (') を含む場合がありません。

-show_available

このオプションでは、メディアサーバーリストの利用可能なメディアサーバーを含むデータベース内に存在するすべてのストレージユニットが一覧表示されます。

-verbose

このオプションを指定すると、ログの詳細モードが選択されます。このモードは、デバッグログ機能が有効になっている場合、つまり次のディレクトリが定義されている場合にだけ有効です。

```
UNIX systems: /usr/opensv/netbackup/logs/admin
```

```
Windows systems: install_path¥NetBackup¥logs¥admin
```

例

例 1 - `-U` 表示オプションを指定して、マスターサーバー **apricot** で定義済みのストレージユニットを表示します。

```
# bpstulist -U -M apricot

Label:                redtest
Storage Unit Type:    Disk
Host Connection:      apricot
Concurrent Jobs:      1
On Demand Only:       yes
Max MPX:              4
Max Fragment Size:    512000 MB
Block Sharing:        yes
OK On Root:           no
Disk Pool:            simSnapVaultA
Snapshots:            yes
Replication Primary:  no
Replication Source:   yes
Replication Target:   yes
Mirror:               no
```

例 2 - 次の `bptuadd` コマンドを実行して通常のディスクステージングストレージユニットを作成した場合の出力例を示します。

```
# bptuadd -label apple -path /tmp/apple -flags STAGE_DATA
```

簡易出力の場合:

```
apple 0 felix.min.veritas.com 0 -1 -1 1 0 "/tmp/apple" 1 1 2000
*NULL* 0 1 0 98 80 1 apple felix.min.veritas.com
```

詳細出力の場合:

```
Label:                apple
Media Type:           Disk (0)
Host Connection:     felix.min.veritas.com
Concurrent Jobs:     1
On Demand Only:      yes
Path:                "/tmp/apple"
Robot Type:           (not robotic)
Max Fragment Size:   512000
Max MPX:              1
Stage data:          no
Block Sharing:       no
File System Export:  no
High Water Mark:     98
Low Water Mark:      80
OK On Root:          no
```

ファイル

```
UNIX systems: /usr/openv/netbackup/logs/admin/*
```

```
Windows systems: install_path¥NetBackup¥logs¥admin¥*
```

EMM データベース

関連項目

p.378 の [bptstinfo](#) を参照してください。

p.384 の [bptuadd](#) を参照してください。

p.394 の [bptstudel](#) を参照してください。

p.404 の [bptsturep](#) を参照してください。

bpsturep

bpsturep – 選択された NetBackup ストレージユニットの属性の置換

概要

```
bpsturep -label storage_unit_label [-verbose] [-host host_name |  
-nodevhost] [-path path_name | -dp disk_pool | -density density [-rt  
robot_type -rn robot_number] [-nh NDMP_attach_host] [-cj max_jobs]  
[-odo on_demand_only_flag] [-mfs max_fragment_size] [-maxmpx  
mpx_factor] [-cf clearfiles] [-flags flags] [-tt transfer_throttle]  
[-hwm high_water_mark] [-lwm low_water_mark] [-okrt ok_on_root]  
[[-addhost | -delhost] host_name [host_name]] [-hostlist host_name  
[host_name]] [-M master_server [,...]]  
bpsturep -group storage_unit_group [-addstu | -delstu]  
storage_unit_label [-M master_server [,...]] [-sm selection_method]  
UNIX システムでは、このコマンドのディレクトリパスは  
/usr/opensv/netbackup/bin/admincmd/ です。  
Windows システムでは、このコマンドのディレクトリパスは  
<install_path>%NetBackup%bin¥admincmd¥ です。
```

機能説明

bpsturep コマンドを実行すると、NetBackup カタログで選択されたストレージユニットまたはストレージユニットグループの属性を置換することによって、既存の NetBackup ストレージユニットが変更されます。コマンドラインには、ストレージユニットのラベル名またはストレージユニットグループのグループ名のいずれかを含める必要があります。ラベル名またはグループ名は、bpsturep によって唯一変更できないストレージユニット属性です。

メモ: このコマンドを実行しても、ディスクストレージユニット (DSU) またはテープストレージユニットをディスクステージングストレージユニット (DSSU) に変更することはできません。また、DSSU を DSU またはテープストレージユニットに変更することもできません。

bpsturep コマンドは、安易に使用しないでください。ストレージユニットまたはストレージユニットグループに対する変更は、既存の属性に適合する必要があります。特に次の属性について、変更後の属性の組み合わせが有効であることを確認してください。

robot_typerobot_numberdensity_typemax_fragment_sizepath_typeNDMP_attach_host

これらの属性を変更する最も安全な方法は、各属性に対して bpsturep を 1 回実行し、置き換えることです。

bpsturep を実行すると、指定した属性が変更されたストレージユニットを修正することによって変更が行われます。bpsturep を実行した後で bpstulist を実行して、目的の変更が実際に適用されたかどうかを判断します。

エラーは標準エラー出力 (stderr) に送信されます。コマンドのデバッグログは、現在の日付の NetBackup 管理ログファイルに送信されます。

ストレージユニットについて詳しくは、次を参照してください。『[NetBackup 管理者ガイド Vol. 1](#)』。

このコマンドは、すべての認可済みユーザーが実行できます。

NetBackup による認可について詳しくは、次を参照してください。『[NetBackup セキュリティおよび暗号化ガイド](#)』。

オプション

-cf *clearfiles*

NBU メディアがバックアップデータに対してデータ変換操作を実行することを可能にします。通常、OpenStorage プラグインは使用ディスク領域の総量を削減するブロックレベルの重複排除操作を実行するためにメタデータを使います。この値は OST ディスクプールを使用して構成されたディスクストレージユニットにのみ有効です。

clearfiles 変数には、次のいずれかの値を指定できます。

- 0 - すべてのデータ変換操作を無効にします。
- 1 - 詳細な変換操作を有効にします。メタデータはバックアップ済みであるファイルの属性すべてを記述します。これらのファイルは透明なファイルと呼ばれます。
- 2 - 簡単な変換操作を有効にします。メタデータは、バックアップ済みのファイルの名前、サイズ、バイトオフセットの場所のみを識別します。それらは不透明なファイルと呼ばれます。

-cj *max_jobs*

このオプションでは、このストレージユニットで許可されている最大並列実行ジョブ数を指定します。max_jobs は、負でない整数です。適切な値は、複数のバックアップ処理を問題なく実行するサーバーの性能およびストレージメディアで利用可能な領域によって異なります。

ポリシーあたりの最大ジョブ数について詳しくは、次を参照してください。『[NetBackup 管理者ガイド Vol. 1](#)』。

0 (ゼロ) は、ジョブがスケジュールされているときはこのストレージユニットが選択されないことを意味します。デフォルトは 1 です。

-density *density_type*

このオプションを指定すると、ストレージユニット形式は Media Manager になります。このオプションには、デフォルトが存在しません。コマンドラインにロボット形式が含ま

れる場合、密度の値はそのロボット形式によって決まります。-density、-path および -dp オプションは単独でのみ使用できます。

次に、有効な密度の種類を示します。

d1t: DLT カートリッジ
d1t2: DLT 代替カートリッジ
8mm: 8MM カートリッジ
4mm: 4MM カートリッジ
qscsi: 1/4 インチカートリッジ

メモ: 次の密度は、NetBackup Enterprise Server だけに適用されます。

hcart: 1/2 インチカートリッジ
hcart2: 1/2 インチ代替カートリッジ
dtf: DTF カートリッジ

-dp *disk_pool*

このオプションでは、このストレージユニットのデータストレージ領域であるディスクプールの名前を指定します。このオプションは、ディスク形式が 6 (DiskPool) の場合だけに使用できます。ディスクプールがすでに存在している必要があります。

-dt *disk_type*

このオプションでは、ディスク形式を指定できます。*disk_type* の有効な値を次に示します。

1: BasicDisk
3: SnapVault
6: DiskPool

-flags *flags*

このオプションでは、ステージングストレージユニットにするストレージユニットを指定します。このオプションでは、クイックリストアが可能です。*flags* の有効な値は NONE および STAGE_DATA です。現在は、ディスクストレージユニットの場合にのみ有効です。

-group *storage_unit_group*

このオプションでは、ストレージユニットグループ名を指定します。このグループは、bpsturep がメンバーを追加または削除するストレージユニットです。ストレージユニットをグループに追加するには、-addstu *storage_unit* を指定します。ストレージユニットをグループから削除するには、-delstu *storage_unit* を指定します。

-host *host_name*

メモ: NetBackup Server では、リモートメディアサーバーはサポートされません。

このオプションでは、宛先メディアの接続先の NetBackup ホストを指定します。デフォルトは、ローカルシステムのホスト名です。

ホストには、NetBackup マスターサーバーまたはメディアサーバー (メディアサーバーを構成する場合) を選択する必要があります。ホスト名には、すべての NetBackup サーバーおよびクライアントに認識されるサーバーのネットワーク名を指定する必要があります。

host_name が有効なネットワーク名であり、事前に構成されていない場合、*host_name* は NetBackup 構成にメディアサーバーとして追加されます。この値は、UNIX では bp.conf に表示され、Windows ではサーバーの NetBackup 構成ウィンドウに表示されます。*host_name* が有効なネットワーク名でない場合、手動でこれを構成する必要があります。

-hwm *high_water_mark*

このオプションは、ユーザーが構成可能なしきい値です。高水準点のデフォルト設定は、98% です。高水準点に到達した場合、NetBackup は次のように対処します。

- ジョブを開始し、すべての容量が使用された場合、DSU は [空きなし (Full)] と見なされます。ストレージユニットグループ内の複数のストレージユニットを選択する場合、メディアおよびデバイスの選択 (MDS) によって、新しいジョブは、高水準点以上のユニットには割り当てられません。グループ内の他のストレージユニットが検索され、ジョブが割り当てられます。

- ジョブの実行中に、ステージング属性が設定され、すべての容量が使用された場合、ステージングによってイメージが期限切れとなり、DSU の領域が解放されます。この操作によって、より多くのバックアップデータに対応できます。

-label *storage_unit_label*

このオプションでは、ストレージユニット名を指定します。このユニットは、bpsturep によって属性が置き換えられたストレージユニットです。このオプションは必須です。ストレージユニットのラベルの最大長は、128 文字です。

-lwm *low_water_mark*

このオプションはユーザーが構成可能なしきい値です。ディスクステージングを実行するディスクストレージユニットによって使用されます。低水準点のデフォルト設定は、80% です。

高水準点に到達した場合、次のいずれかを実行する必要があります。

- 低水準点に到達するまで、イメージを他のストレージユニットに移行する。

- 低水準点に到達するまで、ステージングが設定された最も古いイメージのディスクイメージを期限切れにしてディスク領域を解放する。

メモ: 多くの利用可能なデータを保存する場合は、高水準点と近くなるように低水準点を設定してください。また、低水準点は高水準点より低い値である必要があります。これらに同じ値を設定することはできません。

`-mfs max_fragment_size`

このオプションでは、**NetBackup** イメージのフラグメントの最大サイズ (MB) を指定します。**NetBackup** では、最大フラグメントサイズ 1,000,000 MB (1 TB) がサポートされます。

Media Manager ストレージユニットの場合、この値は 0 (ゼロ)、または 50 MB から 1,048,576 MB (1024 GB) の任意の整数です。デフォルト値 0 (ゼロ) は、使用可能な最大値 1024 GB を指定することと同じです。

ディスクストレージユニットの場合、この値の範囲は 20 MB から 2000 MB (2 GB) です。デフォルト値は 524288 (512 GB) です。

`-maxmpx mpx_factor`

このオプションでは、最大多重化因数を指定します。多重化を実行すると、1つ以上のクライアントからある 1 台のドライブへ複数のバックアップが並列して送信されます。

多重化 (MPX) について詳しくは、次を参照してください。『[NetBackup 管理者ガイド Vol. 1](#)』。

多重化因数の範囲は、1 から 32 です。1 は多重化が行われなことを示します。値が 1 より大きい場合、**NetBackup** では、宛先メディアに多重化されたイメージを作成できます。ローカル **NetBackup** インストールでのライセンス取得方法によって、多重化因数を 1 から 32 の範囲全体に割り当てることができない場合があります。デフォルトは 1 です。

`-M master_server [, ...]`

このオプションでは、マスターサーバーのリストを指定します。このリストは、カンマで区切られたホスト名のリストです。このオプションを指定すると、一覧表示されている各マスターサーバーでコマンドが実行されます。マスターサーバーでは、コマンドを発行したシステムからのアクセスが許可されている必要があります。マスターサーバーにエラーが発生した場合、その時点でリスト内の処理が停止します。デフォルトは、コマンドが入力されるシステムのマスターサーバーです。

`-nh NDMP_attach_host`

NDMP サーバーのホスト名を指定します。このオプションを指定すると、ストレージユニット形式が **NDMP** に設定されます。デフォルトは **NDMP** サーバー以外のサーバーです。

`-nodevhost`

このオプションを指定すると、このストレージユニットにはメディアサーバーが関連付けられません。

-odo *on_demand_only_flag*

on-demand-only フラグを指定すると、明示的にストレージユニットを要求 (デマンド) するバックアップだけにストレージユニットの使用を許可するかどうかを制御できます。

ストレージユニットを要求するポリシーまたはスケジュールだけでストレージユニットを利用可能にするには、フラグを **1** (有効) に設定します。

すべてのポリシーまたはスケジュールでストレージユニットを利用可能にするには、フラグを **0** (無効) に設定します。

ストレージユニット形式がディスクである場合、デフォルトは **1** です。ストレージユニットは、明示的に要求された場合だけ **NetBackup** によって使用されます。そうでない場合、デフォルトは **0** (ゼロ) です。

-okrt *ok_on_root*

このフラグが設定されていない場合、ルートファイルシステムで、バックアップおよびディレクトリの作成は行われません。**ok_on_root** フラグが設定されている場合、通常、バックアップおよびディレクトリの作成が行われます。

このフラグのデフォルト値は **0** (ゼロ) です。パスがルートファイルシステム上にある場合に、ディスクストレージユニット (**BasicDisk**) に対してバックアップおよびディレクトリの作成は行われません。

UNIX システムでは、ルートは「/」です。

Windows の場合、ルートファイルシステムは **Windows** システムディレクトリなどが存在するシステムドライブです。

-path *path_name*

このオプションでは、このストレージユニットのデータストレージ領域であるディスクファイルシステムのパスを絶対パス名で指定します。このオプションを指定すると、ストレージユニット形式は**ディスク**になります。このオプションには、デフォルトが存在しません。-density、-path および -dp オプションは単独でのみ使用できます。

通常、このオプションを指定するときは **on-demand-only** フラグを有効にします (「-odo」を参照)。これを有効にしない場合、特定のストレージユニットを要求しない **NetBackup** ポリシーが存在する場合に、ディスクファイルシステム **path_name** の空きがなくなる可能性があります。この操作によって、システムに重大な問題が発生する場合があります。たとえば、システムスワップ領域が同じファイルシステム上に存在する場合、新しいプロセスが失敗する場合があります。

パス名がディスクステージングストレージユニット (**DSSU**) として定義されている場合は、このオプションを使用して、異なる **DSSU** にパス名を変更します。このオプションを使用して、異なる形式のストレージユニットに **DSSU** を変更することはできません。

-rn robot_number

このオプションでは、ストレージユニットのロボット番号を指定します。ロボット番号には、0 (ゼロ) 以上を指定する必要があります。ロボット番号は、管理コンソールの[メディアおよびデバイスの管理 (Media and Device Management)]から取得できます。-rt オプションを指定しないかぎり、このオプションは無視されます。このオプションには、デフォルトが存在しません。

ロボット番号の使用に関する規則について詳しくは、次を参照してください。
『NetBackup 管理者ガイド Vol. 2』。

-rt robot_type

このオプションでは、ストレージユニットのロボット形式を指定します。非ロボットの(スタンドアロンの)デバイスでは、NONE を選択するか、このオプションを省略します。デフォルト値は NONE (非ロボット) です。密度にはそのロボット形式に適した値を指定する必要があります。

このオプションを NONE 以外の値に設定する場合、-rn オプションが必要です。

次に、指定可能なロボット形式のコードを示します。

NONE: 非ロボット

TL0: DLT テープライブラリ

ACS: 自動カートリッジシステム

TL8: 8MM テープライブラリ

TLH: 1/2 インチテープライブラリ

TLM: マルチメディアテープライブラリ

-sm selection_method

このオプションでは、ストレージユニットグループの選択方法を選択します。このオプションは、ストレージユニットグループにだけ有効です。指定可能な値は、次のとおりです。

Prioritized = 1 (DEFAULT)

Least Recently Selected = 2

Failover = 3

負荷分散 = 4 (Capacity Management ライセンスキーがインストールされている場合に表示されます)

オプション 1: 優先度は、デフォルトの条件です。リスト内の最初のストレージユニットが選択され、ユニットが停止または空きなしの状態になるか、その最大並列実行ジョブ設定に到達するまで使用されます。その後、利用可能なユニットが見つかるまで、リスト内の次のストレージユニットが順に検索されます。

オプション 2: 選択されていない期間では、選択されていない期間が最も長いストレージユニットが選択されます。

オプション 3: フェールオーバーは、優先度と同じですが、最大並列実行ジョブ数に到達した場合に、MDS はジョブをキューに投入し、最初のストレージユニットを待機します。MDS がリスト内の次のストレージユニットに移動するのは、最初のユニットが停止または空きなしの場合だけです。

オプション 4: 負荷分散。このオプションを表示するには、**Capacity Management** ライセンスキーがインストールされている必要があります。このオプションを選択した場合、メディアデバイスの選択 (MDS) によるジョブの負荷分散では、メディアサーバーが次の条件に一致しているかどうかを考慮されます。

- 推定されるジョブサイズに対応できる十分なディスクボリュームの空き領域がある。
- 別のジョブに対応できる十分な CPU リソースとメモリリソースがある。
- 同じクラスまたはランクの他のメディアサーバーと比較して、推定されるジョブサイズが最小量のデータが処理されている。

ライセンスが期限切れになると、負荷分散はオプション 2 の動作に戻されます。使用されていない期間が最も長いストレージユニットが選択されます。

-tt *transfer_throttle*

転送スロットル設定は、**SnapVault** ストレージユニットでのみ表示されます。

この設定は、**SnapVault** データ転送の最大帯域幅を示します。デフォルト設定の 0 (ゼロ) は無制限の帯域幅を示し、データ転送は最大ネットワーク帯域幅で行われます。(範囲は、0 (デフォルト) から 9999999 です。)

-verbose

このオプションを指定すると、ログの詳細モードが選択されます。このモードは、デバッグログ機能が有効になっている場合、つまり次のディレクトリが定義されている場合にだけ有効です。

UNIX systems: /usr/opensv/netbackup/logs/admin

Windows systems: *install_path*%NetBackup%logs%admin

例

UNIX システムの場合:

ディスクストレージユニット *mkbunit* のパスを変更します。パスは、/tmp/mkbunit から /tmp/mkbunit2 に変更されます。

```
# bpstulist
```

```
mkbunit 0 beaver 0 -1 -1 1 0 /tmp/mkbunit 1 1 2000 *NULL*
```

```
# bpsturep -label mkbunit -path /tmp/mkbunit2
# bpstulist
mkbunit 0 beaver 0 -1 -1 1 0 /tmp/mkbunit2 1 1 2000 *NULL*
```

Windows システムの場合:

ディスクストレージユニット *mkbunit* のパスを変更します。パスは、C:¥tmp¥mkbunit から C:¥tmp¥mkbunit2 に変更されます。

```
# bpstulist
mkbunit 0 beaver 0 -1 -1 1 0 C:¥tmp¥mkbunit 1 1 2000 *NULL*
# bpsturep -label mkbunit -path C:¥tmp¥mkbunit2
# bpstulist
mkbunit 0 beaver 0 -1 -1 1 0 C:¥tmp¥mkbunit2/ 1 1 2000 *NULL*
```

ファイル

UNIX systems: /usr/opensv/netbackup/logs/admin/*

Windows システムの場合: *install_path¥NetBackup¥logs¥admin¥**

EMM データベース

関連項目

- p.378 の [bpstsinfo](#) を参照してください。
- p.384 の [bpstuadd](#) を参照してください。
- p.394 の [bpstudel](#) を参照してください。
- p.397 の [bpstulist](#) を参照してください。

bptestbpcd

bptestbpcd - bpcd 接続のテストおよび接続オプションの確認

概要

```
bptestbpcd [-host hostname] [-client client_name] [-M server]
[-connect_options 0|1|2 0|1|2 0|1|2|3] [-connect_timeout seconds]
[-wait_to_close seconds] [-verbose]
```

UNIX システムでは、このコマンドのディレクトリパスは

/usr/opensv/netbackup/bin/admincmd/ です。

Windows システムでは、このコマンドのディレクトリパスは

<install_path>%NetBackup%\bin\admincmd% です。

機能説明

bptestbpcd コマンドを実行すると、NetBackup サーバーから別の NetBackup システムの bpcd デーモンへの接続の確立が試行されます。成功すると、確立されているソケットに関する情報がレポートされます。

出力の最初の行は、有効な接続オプションを表す 3 桁の数字で構成されます。

- 最初の桁は、予約済みのポートが使用されている場合は 0、予約されていないポートが使用されている場合は 1 と示されます。
- 2 番目の数字は、レガシー (ランダムポート) コールバックが使用されている場合は 0、vnetd コールバックが使用されている場合は 1 と示されます。
- 3 番目の桁は、接続が PBX または vnetd ポート番号で開始されている場合は 1 と示されます。接続がレガシー bpcd ポート番号で開始されている場合は 2 と示されます。

残りの行には、NetBackup サーバー IP アドレスとポート番号、接続の方向、bpcd IP アドレスとポート番号が表示されます。

オプション

```
-connect_options 0|1|2 0|1|2|3 0|1|2|3
```

最初の設定値は、ホストやクライアントの bpcd に接続するときに使う接続元ポートの種類を示します。従来のコールバック方式を使う場合には、この設定にインバウンド接続を応答準備するサーバーポートの種類を指定します。

0 = 予約済みのポート番号を使用します。

1 = 予約されていないポート番号を使用します。

2 = サーバーの `DEFAULT_CONNECT_OPTIONS` 構成エントリで定義された値を使用します。

2 番目の設定値は、クライアントへの接続に使用する `bpcd` コールバック方式を示します。

0 = 従来のコールバック方式を使用します。

1 = `vnetd` 非コールバック方式を使用します。

2 = サーバーの `DEFAULT_CONNECT_OPTIONS` 構成エントリで定義された値を使用します。

3 番目の設定値は、ホストやクライアントに接続するときに使う接続方法を示します。

0 = `PBX` ポート (1556) を使用してホストやクライアントに接続します。接続できない場合は、`vnetd` ポート (13724) を使用して接続します。それでも接続できない場合は、デーモンポート (13782) を使用して接続します。

1 = `PBX` ポート (1556) を使用してホストやクライアントに接続します。接続できない場合は、`vnetd` ポート (13724) を使用して接続します。それでも接続できない場合、接続試行は失敗します。

2 = デーモンポート (13782) を使用してホストやクライアントに接続します。

3 = サーバーの `DEFAULT_CONNECT_OPTIONS` 構成エントリで定義された値を使用します。

`-connect_options` を `-client` に指定しないと、`clientname` のクライアント属性に設定した `CONNECT_OPTIONS` が使用されます。それ以外の場合は、`clientname` の `CONNECT_OPTIONS` が使用されます。`CONNECT_OPTIONS` も使用されない場合は、`DEFAULT_CONNECT_OPTIONS` が使用されます。

`-client client_name`

このオプションでは、接続するシステムのクライアント名を指定します。これにより、多重化バックアップの `NetBackup` クライアントに接続するときに通常使用する `bpcd` 接続と同じレガシー接続を作成します。`-host` および `-client` のいずれも指定しない場合は、ローカルシステムのホスト名が使用されます。

`-connect_timeout seconds`

サーバーからホストやクライアントへの接続試行が失敗するまで待機する秒数を指定します。指定しない場合のデフォルトは、接続を試みるサーバーに設定された `CLIENT_CONNECT_TIMEOUT` となります。

`-host hostname`

接続先システムのホスト名を指定します。通常、`host_name` には、`NetBackup` サーバーのホスト名を指定します。これにより、`NetBackup` サーバーに接続するときに通常使用する `bpcd` 接続と同じレガシー接続を作成します。`-host` および `-client` のいずれも指定しない場合は、ローカルシステムのホスト名が使用されます。

-M server

ターゲットホストやクライアントへの接続を開始する **NetBackup** サーバーのホスト名を指定します。このオプションを指定しない場合は、ローカルホストから接続します。指定した場合には、ローカルホストは指定したサーバーの `bpcd` に接続し、指定したサーバーからターゲットホストやクライアントの `bpcd` に接続します。

-wait_to_close seconds

ターゲットホストやクライアントの `bpcd` への接続を閉じる前に、サーバーが待機する秒数を指定します。デフォルトは **0** (待機なし) です。

-verbose

ターゲットホストやクライアントの `bpcd` に接続した後に、リモートホストから主要な設定情報を要求し、表示します。この情報には、オペレーティングシステム、**NetBackup** のバージョン、接続サーバーのホスト名、クライアント名、マスターサーバー、ピアネームが含まれます。

例

例 1 - レガシー接続オプションを使用して、ローカルシステムからサーバー **fred** への接続を試行します。

```
# bptestbpcd -host fred -connect_options 0 0 2
0 0 2
10.0.0.32:748 -> 10.0.0.59:13782
10.0.0.32:983 <- 10.0.0.59:635
```

例 2 - デーモンポートと非コールバック方式を使って、クライアントとして **wilma** ホストに接続するようにサーバー **fred** に要求します。接続が成功すると、**wilma** の主な設定を表示します。

```
$ bptestbpcd -M fred -client wilma -connect_options 1 1 2 -verbose
1 1 2
10.0.0.59:36207 -> 10.0.0.104:13782
10.0.0.59:1556 <- 10.0.0.104:32829
PEER_NAME = fred
HOST_NAME = wilma
CLIENT_NAME = wilma
VERSION = 0x07100000
PLATFORM = solaris10
PATCH_VERSION = 7.1.0.0
SERVER_PATCH_VERSION = 7.1.0.0
MASTER_SERVER = wilma
EMM_SERVER = wilma
```

```
NB_MACHINE_TYPE = MASTER_SERVER  
10.0.0.59:1556 <- 10.0.0.104:32830
```


bptestnetconn

bptestnetconn – 各種の構成と接続のテストおよび分析

概要

```
bptestnetconn [-v] -h | -b | -l
bptestnetconn [-v] [-i | -frap] [-s | -H hostname]
bptestnetconn [-v] [-c[service_name] [-o time_value] [-t time_value]]
[ -H hostname | -s ]
bptestnetconn -6 [-u]
```

UNIX システムでは、このコマンドのディレクトリパスは `/usr/opensv/netbackup/bin/` です。

Windows システムでは、このコマンドのディレクトリパスは `<install_path>%NetBackup%bin%` です。

機能説明

bptestnetconn は、ホストの任意の指定のリスト (NetBackup 構成のサーバーリストを含む) での DNS と接続の問題の分析に役立つ複数のタスクを実行します。指定したサービスへの CORBA 接続に対して bptestnetconn を実行すると、その接続について報告が行われ、CORBA 通信を使うサービス間の接続の問題のトラブルシューティングに役立てることができます。簡単な精査のために VxUL ログメッセージが OID396 に送信されます。vxlogcfg コマンドはログの詳細度を制御します。

オプション

- 6 または `--afcheck`
IP_ADDRESS_FAMILY 要件の構成を確認します。
- a または `--all`
常時報告します。このオプションは `-fr` と同じ結果が得られます。この条件はデフォルトです。
- b または `--confchecker`
bp.conf (UNIX) または NetBackup レジストリエントリ (Windows) が存在することを検証します。
- c または `--connect service_name`
サービスへの connectToObject の回数を報告します。一部の CORBA サービスには EMM/EMMServer、NBFSMCLIENT/FSM.ClientClusterMgr、nbrmms/DiskPollingService.DPS、nbrmms/STSEventService と

nbsvcmon/NBSvcMon (デフォルト) が含まれます。-c と *service_name* の間に空白文字を入れずにこのオプションを入力してください。

- f または --flkup
指定したホストのすべての DNS 前方参照時間をレポートします。
- h または --help
このヘルプメッセージを表示します。
- H *hostname*
システムの単一のホスト名、IPv4 アドレス、またはそのような名前前のリストが含まれるファイルの名前を 1 行に 1 つずつ指定します。
- i または --ipservers
NetBackup 構成内のすべてのサーバーの IP アドレスをリストします。
- l または --listservers
NetBackup 構成内のすべてのサーバーを表示します。
- o または --objconntimeout *time_value*
CORBA エラーが発生した場合の NetBackup レベルの再試行のタイムアウトを秒単位で指定します。
- p または --prefnet
指定したホストまたはサーバーへの接続に PREFERRED_NETWORK がどのように影響するかを出力表示に示します。
- r または --rlookup
指定したホストのすべての DNS 逆引き参照時間をレポートします。
- s または --servers
構成内のすべての NetBackup サーバーを検索します。
- t または --orbconntimeout *time_value*
TCP タイムアウト (TCP/IP の接続を確立するためのソケットレベルのタイムアウト) を指定します。TCP/IP エラーと CORBA エラーを区別するには、-o より大きい値を -t に指定します。そうしないと、すべての障害は *retries_timeout* 秒後にタイムアウトします (-o *time_value*)。
- u または --update
--afcheck 操作のアクションに基づいて、bp.conf (UNIX) またはホストプロパティ (Windows) を更新します。このオプションはインストールの一部としてのみ使われます。
- v または --verbose
詳細モードでレポートします。逆引き参照レポートは、どのサーバーがメディアサーバー、EMMSERVER (ローカルでない場合) であるか、そしてサーバーが PREFERRED_NETWORK または CLUSTERNAME でもあるかを示します。

例

例 1 - NetBackup 構成のすべてのサーバーをリストします。

```
# bptestnetconn -l
      knothead.min.veritas.com
      www.google.com
      r2d2.starwars.galaxy.com
      whoknows.what.com
      zebra
      lawndartsvm2
      lawndartsvm1
```

例 2 - デフォルト以外のすべての設定をリストします。

```
# bptestnetconn -b
CLIENT_PORT_WINDOW (min)           = 2024           [0]
CLIENT_PORT_WINDOW (max)           = 4048           [0]
CLIENT_CONNECT_TIMEOUT              = 30             [300]
SERVER_CONNECT_TIMEOUT              = 10             [30]
DEFAULT_CONNECT_OPTIONS (daemon port) = vnetd          [Automatic]
CONNECT_OPTIONS                     = [configured]
PREFERRED_NETWORK                   = knothead       [NULL]
FIREWALL_IN                          = [configured]
REVERSE_NAME_LOOKUP                 = PROHIBITED     [ALLOWED]
```

例 3 - 構成内のすべての NetBackup サーバーのすべての DNS 前方参照時間を報告します。

```
# bptestnetconn -f -s
-----
FL:          knothead.min.veritas.com -> 10.80.73.101      :      0 ms [local]
FL:          www.google.com -> 74.125.19.106      :      0 ms
FL:          r2d2.starwars.galaxy.com -> 0.0.0.0           :      4 ms
FL:          whoknows.what.com -> 209.139.193.224   :      0 ms [cluster/ri]
FL:          zebra -> 10.80.120.103      :      0 ms
FL:          lawndartsvm2 -> 10.80.74.153      :      0 ms
FL:          lawndartsvm1 -> 10.80.74.154      :      0 ms
-----
Slow (>5 sec) or/and failed forward lookups:
      r2d2.starwars.galaxy.com :      0 sec [FAILED]
-----
Total elapsed time: 0 sec
```

例 4 - 構成内のすべての NetBackup サーバーのすべての DNS 逆引き参照時間を報告します。

```
# bptestnetconn -r -s
-----
RL:      10.80.73.101 -> knothead.min.veritas.com      :      0 ms
RL:      74.125.19.106 -> nuq04s01-in-f106.1e100.net      :     156 ms MISMATCH
RL:      **LKUP FAIL** -> r2d2.starwars.galaxy.com      :      0 ms
RL:      209.139.193.224 -> **LKUP FAIL**              :     739 ms
RL:      10.80.120.103 -> zebra.min.veritas.com        :      0 ms
RL:      10.80.74.153 -> lawndartsvm2.min.veritas.com   :      0 ms
RL:      10.80.74.154 -> lawndartsvm1.min.veritas.com   :      0 ms
-----
Slow (>5 sec) or/and failed/mismatched reverse lookups:
      www.google.com :      0 sec [MISMATCH] -> nuq04s01-in-f106.1e100.net
      r2d2.starwars.galaxy.com :      0 sec [FAILED]
      whoknows.what.com :      0 sec [FAILED]
-----
Total elapsed time: 1 sec
```

例 5 - 構成内のすべての NetBackup サーバーのすべての DNS 逆引き参照時間を報告します。

```
# bptestnetconn -s -c -t 10 -o 5
-----
CN:      knothead.min.veritas.com :     49 ms [SUCCESS]
CN:      www.google.com :         4 sec [TRANSIENT]
CN:      r2d2.starwars.galaxy.com :     4 sec [TRANSIENT]
CN:      whoknows.what.com :        4 sec [TRANSIENT]
CN:      zebra :                   4 sec [TRANSIENT]
CN:      lawndartsvm2 :             4 sec [NO_PERMISSION]
CN:      lawndartsvm1 :            20 sec [TRANSIENT]
-----
Total elapsed time: 40 sec
```

bptpcinfo

bptpcinfo – SAN デバイスの検出および 3pc.conf ファイルの作成

概要

```
bptpcinfo [-a] [-c] [-h] [-u] [-r] [-v] [-d disk_device_directory]  
[-t tape_device_directory] [-p physical_device] [-o output_file_name]  
[-o -]
```

The directory path to this command is /usr/opensv/netbackup/bin/

機能説明

このコマンドは UNIX システムでのみ動作します。

bptpcinfo コマンドを実行すると、ファイバーチャネルおよび SCSI 接続上のすべてのディスクデバイスおよびテープデバイスが検出されます。各デバイスに関する情報が 1 行に 1 デバイスずつ出力されます。デフォルトでは、このコマンドを実行すると、次のファイルに情報が書き込まれます。

```
/usr/opensv/volmgr/database/3pc.conf
```

メモ: オフホストバックアップ ([サードパーティコピーデバイス (Third-Party Copy Device)] または [NetBackup メディアサーバー (NetBackup Media Server)] バックアップ方式) では、3pc.conf ファイルが /usr/opensv/volmgr/database に存在する必要があります。

3pc.conf ファイルが存在しない場合、[サードパーティコピーデバイス (Third-Party Copy Device)] または [NetBackup メディアサーバー (NetBackup Media Server)] を使用したバックアップを開始すると、NetBackup によってこのコマンドが自動的に実行され、3pc.conf ファイルが作成されます。このファイルは完全であり、次のいずれかに該当する場合はこのコマンドを再実行する必要はありません。

- [NetBackup メディアサーバー (NetBackup Media Server)] バックアップ方式を使用している。
- [サードパーティコピーデバイス (Third-Party Copy Device)] バックアップ方式を使用しており、必要なすべてのデバイス (ディスク、テープ、サードパーティコピーデバイスなど) で識別記述子がサポートされている。

いずれかのデバイスで識別記述子がサポートされていない場合、bptpcinfo コマンドを手動で実行して 3pc.conf ファイルを作成します。次に、[『Symantec NetBackup](#)

『Snapshot Client 管理者ガイド』の SAN 構成の章で説明されている手順に従って、ファイルを編集します。

オプション

-a

ファイバーチャネルおよび **SCSI** 接続上のすべてのディスクデバイスおよびテープデバイスを検出します。3pc.conf ファイル (または -o オプションで指定した代替出力ファイル) にエントリが追加されます。-a オプションを指定すると、/dev/rdisk および /dev/rmt のすべてのデバイスが表示されます。

-c

このオプションを指定すると、(/usr/opensv/volmgr/database 内の) 既存の 3pc.conf ファイルの構文エラーが確認されます。3pc.conf ファイルが存在しない場合、ファイルを開けないというメッセージが表示されます。この場合、他のコマンド オプションを使用して、ファイルを作成します。-c を指定すると他のオプションが無視されることに注意してください。

-c オプションによって確認される構文エラーは、エントリ間の空白の欠落、不明なキーワード ([w=]がないワールドワイドネームなど)、16 桁でないワールドワイドネームなどです。このようなエラーが存在すると、バックアップが失敗する可能性があります。

-h

このオプションを指定すると、btpcinfo の使用方法の説明が表示されます。

-u

ファイバーチャネルおよび **SCSI** 接続上のすべてのディスクデバイスおよびテープデバイスを検出します。また、3pc.conf ファイル (または -o オプションで指定した代替出力ファイル) に、検出された新しいデバイスのエントリが追加されます。3pc.conf ファイルが存在しない場合、-u オプションは失敗します (代わりに、-a オプションを指定してください)。

メモ: 古いエントリを削除するには、-u ではなく -r を指定します (-u オプションと -r オプションは、同時に指定することはできません)。

-r

3pc.conf ファイル (または -o オプションで指定した代替出力ファイル) の古いエントリを削除します。古いエントリとは、ファイバーチャネルまたは **SCSI** 接続上のいかなるデバイスにも対応しないエントリです。

メモ: `-r` オプションでは、新しいデバイスまたは再構成されたデバイスのエントリは、`3pc.conf` ファイルに追加されません。エントリを追加するには、`-u` オプションを指定します。**(`-u` オプションと `-r` オプションは、同時に指定することはできません。)**

`-v`

このオプションでは、詳細モードを指定します。このオプションを指定すると、`bptpcinfo` コマンドでは、検出の進捗状況に関する情報が表示されます。この情報は、`3pc.conf` ファイルではなく、画面に出力されます。

`-v` オプションを選択すると、デバイスの検出中に発生した問題のトラッキングを行うことができます。

`-d disk_device_directory`

指定したディレクトリ (通常、**Solaris** または **HP** では `/dev/rdisk`、**AIX** では `/dev`) のすべてのディスクが検出され、`3pc.conf` ファイルに新しいエントリが作成されます。または、`-o` オプションで指定した代替出力ファイルの現在のエントリが、新しいエントリで上書きされます。

`3pc.conf` ファイルの上書きを回避するには、`-d` オプションとともに `-u` オプションを使用します。`-d` と `-u` を組み合わせて使用すると、新しいディスクのエントリが既存のエントリに追加されます。

`-t tape_device_directory`

指定したディレクトリ (通常、**Solaris** または **HP** では `/dev/rmt`、**AIX** では `/dev`) のすべてのテープドライブが検出され、`3pc.conf` ファイルに新しいエントリが作成されます。または、`-o` オプションで指定した代替出力ファイルの現在のエントリが、新しいエントリで上書きされます。

`3pc.conf` ファイルの上書きを回避するには、`-t` オプションとともに `-u` オプションを使用します。`-t` と `-u` を組み合わせて使用すると、新しいテープのエントリが既存のエントリに追加されます。

`-p physical_device`

指定したデバイスが検出された場合、物理デバイスのエントリが `3pc.conf` ファイルに作成されます。または、`-o` オプションで指定した代替出力ファイルの現在のエントリが、新しいエントリで上書きされます。

`3pc.conf` ファイルの上書きを回避するには、`-p` オプションとともに `-u` オプションを使用します。`-p` と `-u` を組み合わせて使用すると、新しいエントリが既存のエントリに追加されます。

`-o output_file_name`

このオプションでは、`bptpcinfo` コマンド出力の代替パス (通常、一時パス) を指定します。このオプションを指定しない場合、デフォルトは `/usr/opensv/volmgr/database/3pc.conf` です。

-o -

このオプションを指定すると、出力が画面に送信されます。2 番目のハイフンの前には空白が必要です。

例

例 1 - SAN 上のすべてのソースデバイスおよび宛先デバイスを検出し、必要な 3pc.conf ファイルを /usr/opensv/volmgr/database に作成するには、次のように入力します。

```
# bptpcinfo -a
```

例 2 - SAN 上のすべてのソースデバイスおよび宛先デバイスを検出し、出力を画面に送信するには、次のように入力します。

```
# bptpcinfo -a -o -
```

次に出力例を示します。

```
devid [p=devpath] [s=sn] [n=npid] [l=lun] [w=wwpn] [i=iddesc]
1 p=/dev/rdisk/clt11d3s2 s=SEAGATE:ST19171N:LAE82305 l=3
2 p=/dev/rdisk/clt13d4s2 s=SEAGATE:ST19101W:NH022724 l=4
3 p=/dev/rdisk/clt20d0s2 s=HITACHI:OPEN-9:60159003900 l=0
4 p=/dev/rdisk/clt20d1s2 s=HITACHI:OPEN-9:60159000000 l=1
5 p=/dev/rdisk/clt20d2s2 s=HITACHI:OPEN-9:60159000100 l=2
6 p=/dev/rdisk/clt20d3s2 s=HITACHI:OPEN-9-CM:60159001C00 l=3
7 p=/dev/rdisk/clt20d4s2 s=HITACHI:OPEN-9:60159002B00 l=4
8 p=/dev/rdisk/clt20d5s2 s=HITACHI:OPEN-9:60159002C00 l=5
```

例 3 - /dev/rmt ディレクトリ (**AIX** では /dev) のデバイスを検出し、出力を画面に送信するには、次のように入力します。

Solaris または **HP** の場合:

```
# bptpcinfo -t /dev/rmt -o -
```

次に出力例を示します。

```
devid [p=devpath] [s=sn] [n=npid] [l=lun] [w=wwpn] [i=iddesc]
0 p=/dev/rmt/0cbn s=QUANTUM:DLT8000:CX949P0164 l=1 i=10200E09E6000000868
1 p=/dev/rmt/1cbn s=QUANTUM:DLT8000:CX949P1208 l=2 i=10200E09E6000001381
2 p=/dev/rmt/4cbn s=QUANTUM:DLT8000:CX940P2790 l=2 i=1031000005013E000D3
3 p=/dev/rmt/7cbn s=QUANTUM:DLT7000:TNA48S0267 l=1
4 p=/dev/rmt/19cbn s=QUANTUM:DLT8000:PKB02P0989 l=1 i=10200E09E6000030C36
5 p=/dev/rmt/20cbn s=QUANTUM:DLT8000:PKB02P0841 l=2 i=10200E09E6000030DC5
```

AIX の場合:


```
# bptpcinfo -t /dev -o -
```

次に出力例を示します。

```
devid [p=devpath]      [s=sn]   [n=npid]      [l=lun] [w=wwpn] [i=iddesc]
0 p=/dev/rmt0.1 s=STK:L20:LLC02203684          l=1
1 p=/dev/rmt5.1 s=QUANTUM:DLT8000:CXA49P1113    l=1 i=10200E09E6000034A57
2 p=/dev/rmt6.1 s=QUANTUM:DLT8000:PX13P4180     l=2 i=10200E09E600004B70B
3 p=/dev/rmt7.1 s=STK:9840:331002059900         l=4 i=103500104F0004817E5
4 p=/dev/rmt9.1 s=QUANTUM:DLT8000:PX13P0850     l=9 i=1036005013000B0526942333350
5 p=/dev/rmt10.1 s=QUANTUM:DLT8000:CX949P1208   l=10 i=1036005013000B0526939343950
```

例 4 - SAN 上のすべてのデバイスのエントリが記述された 3pc.conf ファイルを作成し、出力を代替ファイルに送信するには、次のように入力します。

```
# bptpcinfo -a -o /usr/opensv/volmgr/database/3pc_alt1.conf
```

注意事項

bptpcinfo コマンドを使うときには、次のことに注意してください。

- bptpcinfo コマンドは、実行中のバックアップが存在しないときに実行します。バックアップ操作でデバイスが使われているかまたは予約されている場合、bptpcinfo がそのデバイスの情報を取得できないことがあります。そのようなデバイスの情報は出力されません。
- 既存の 3pc.conf ファイルが上書きされないようにするには、-o オプションを使用して、出力する場所を指定します。
- ホスト上で Veritas SANPoint Control が実行されている場合は、bpSALinfo コマンドを実行して、3pc.conf ファイルの各デバイスに対してワールドワイドネームと LUN 値を追加できます。SANPoint Control を使用していない場合は、3pc.conf ファイルの新しいエントリを編集する必要があります。編集するには、各デバイスのワールドワイドネーム (WWPN) および LUN を手動で追加します。
SAN 構成については、『Symantec NetBackup Snapshot Client 管理者ガイド』を参照してください。

ファイル

```
/usr/opensv/volmgr/database/3pc.conf
```

bpup

bpup – Windows システム上の NetBackup サービスの起動

概要

```
<install_path>%NetBackup%\bin\bpup [-S|v] [-f] [-a] [-c] [-d] [-m] [-n] [-s]
```

機能説明

このコマンドは **Windows** システムでのみ動作します。

bpup コマンドを実行すると、**NetBackup** データベース、**Media Manager**、クライアントなどの **NetBackup** サービスが起動されます。

オプション

- s このオプションを指定すると、サイレントモードが選択されます。起動状況および確認を求めるプロンプトは表示されません。
- v このオプションを指定すると、詳細モードが選択され、詳細な起動状況が表示されます。
- f このオプションを指定すると、確認を求めるプロンプトが表示されず、**NetBackup** サービスが強制的に起動されます。
- c このオプションを指定すると、クライアントが起動します。
- d このオプションを指定すると、**NetBackup** データベースが起動します。
- m このオプションを指定すると、**Media Manager** が起動します。
- n このオプションを指定すると、**NetBackup** サービスが起動します。
- s このオプションを指定するとサーバー (**NetBackup** および **Media Manager**) が起動されます。**NetBackup** クライアントは起動しません。

関連項目

p.124 の [bpdwn](#) を参照してください。

bpverify

bpverify – NetBackup によって作成されたバックアップの検証

概要

```
bpverify [-l] [-p] [-pb] [-v] [-local] [-client name] [-st sched_type]
[-sl sched_label] [-L output_file [-en]] [-policy name] [-s date]
[-e date] [-M master_server] [-Bidfile file_name] [-pt policy_type]
[-hoursago hours] [[-cn copy number] | [-primary]] [-backupid
backup_id] [[-id media_id or path] | [-stype server_type] [-dp
disk_pool_name [-dv disk_volume]]] [-priority number]
```

UNIX システムでは、このコマンドのディレクトリパスは

/usr/opensv/netbackup/bin/admincmd/ です。

Windows システムでは、このコマンドのディレクトリパスは

<install_path>%NetBackup%\bin\admincmd\ です。

機能説明

bpverify を実行すると、バックアップボリュームを読み込み、その内容を NetBackup カタログと比較することによって 1 つ以上のバックアップの内容が検証されます。この操作では、ボリュームのデータとクライアントディスクの内容は比較されません。ただし、イメージの各ブロックが読み込まれるため、ボリュームが読み込み可能であることは検証されます。NetBackup では、メディアのマウントおよび位置設定の時間を最小限に抑えるため、一度に 1 つのバックアップだけが検証されます。

-Bidfile または -backupid を指定して bpverify を実行すると、このオプションは検証されるバックアップセットを選択する唯一の条件として使用されます。コマンドラインに -Bidfile または -backupid のいずれも含まれない場合に bpverify を実行すると、すべての選択オプションを満たすバックアップが選択されます。たとえば、次のようなコマンドラインを指定します。

```
bpverify -pt Standard -hoursago 10
```

この場合、bpverify によって、過去 10 時間以内に実行されたポリシー形式 Standard のバックアップセットが検証されます。

-p または -pb を指定して bpverify を実行すると、選択条件を満たすバックアップセットがプレビューされます。このとき、バックアップ ID は表示されますが、検証は実行されません。

bpverify は stderr にエラーメッセージを送ります。これにより、現在の日付のアクティビティログが次のディレクトリの NetBackup 管理ログファイルに送信されます。

```
UNIX systems: /usr/opensv/netbackup/logs/admin
```

Windows systems: `install_path¥NetBackup¥Logs¥admin`

このコマンドは、すべての認可済みユーザーが実行できます。

NetBackup による認可について詳しくは、次を参照してください。『[NetBackup セキュリティおよび暗号化ガイド](#)』。

オプション

`-backupid backup_id`

このオプションでは、検証する 1 つのバックアップのバックアップ ID を指定します。このオプションは、`-Bidfile` 以外のすべての選択条件より優先されます。デフォルトは、すべてのバックアップです。

`-Bidfile file_name`

検証するバックアップ ID のリストを含むファイルを指定します。このファイルは、CLI (コマンドラインインターフェース) の起動時に削除されます。このファイルが削除されるのは、NetBackup GUI でこのパラメータが共通で使用されているためです。GUI では、コマンドラインインターフェースの完了時に `-Bidfile` オプションで使用された一時ファイルが削除されることを前提としています。ユーザーはコマンドラインインターフェースで直接このオプションを使用することができますが、この場合でも、ファイルは削除されます。

ファイルには、1 行に 1 つのバックアップ ID が含まれます。このオプションを指定すると、他の選択条件は無視されます。デフォルトでは、バックアップ ID のファイルが指定されず、すべてのバックアップが検証されます。

`-client name`

このオプションでは、元のバックアップを生成したクライアント名を指定します。デフォルトは、すべてのクライアントです。

`-cn copy_number|-primary`

このオプションでは、検証するバックアップ ID のコピー番号を指定します。有効な範囲は、1 から `bpconfig -max_copies` 設定で指定される値です。最大は 10 です。デフォルトは 1 です。

`-primary` は、コピーの代わりにプライマリコピーが検証されることを示します。

`-dp disk_pool_name [-dv disk_volume]`

このオプションでは、このストレージユニットのデータストレージ領域であるディスクプールの名前を指定します。必要に応じて、指定したディスクボリューム上のイメージだけが検証されます。このオプションは `-stype` オプションと組み合わせて使用する必要があります。ディスクプールがすでに存在している必要があります。

`-hoursago hours`

このオプションでは、現在の時刻より何時間前までのバックアップが検索されるかを指定します。この数は、開始時刻 (`-s`) を現在の時刻からのマイナスの時間で指定

することと同じです。このオプションと `-s` オプションは、同時に使用しないでください。

`hours` の値には、負でない整数を指定します。デフォルトの開始時刻は、**24** 時間前です。

`-id media_id | path`

このオプションを指定すると、バックアップのイメージカタログが検索され、このメディア ID またはパス名に存在することが検証されます。バックアップの一部のフラグメントがこのメディア ID と他のメディア ID に存在する場合、指定したメディア ID のメディアからバックアップが開始されていれば、またがったイメージが検証されます。

イメージがリムーバブルメディアではなくディスク上に格納されている場合、`media_id` の代わりに絶対パス名を指定します。デフォルトはすべてのメディア ID およびパス名です。**BasicDisk** ではこのオプションを使います。

`-l output_file [-en]`

このオプションでは、進捗情報を書き込むファイル名を指定します。デフォルトでは、進捗ファイルは使用されません。その場合、進捗情報は標準エラー出力 (`stderr`) に書き込まれます。詳しくは、「表示形式」を参照してください。

`-en` オプションを指定すると、ログエントリが英語で生成されます。ログ名には文字列 `[_en]` が含まれます。このオプションは、異なるロケールで様々な言語のログが作成される分散環境において有効です。

`-l`

このオプションを指定すると、表示形式が詳細になります。`bpverify` を実行すると、追加情報が進捗ログに書き込まれます。デフォルトの表示形式は簡易です。詳しくは、「表示形式」を参照してください。

`-local`

`-local` を使用せずに (デフォルト) `bpverify` をマスターサーバー以外のホストから開始すると、`bpverify` によってマスターサーバー上のコマンドのリモートコピーが開始されます。

リモートコピーでは、アクティビティモニターからコマンドを終了できます。

`-local` を使用すると、マスターサーバー上のリモートコピーの作成が回避され、`bpverify` は起動されたホストからだけ実行されます。

`-local` オプションを使用すると、`bpverify` をアクティビティモニターから取り消すことはできません。

`-M master_server`

このオプションでは、`bpverify` イメージデータを生成するマスターサーバーを指定します。マスターサーバーでは、`bpverify` コマンドを発行したシステムからのアクセスが許可されている必要があります。デフォルトは、`bpverify` が入力されるシステムのマスターサーバーです。

NetBackup Server の場合:

デフォルトは常に、コマンドが入力されるマスターサーバーです。

NetBackup Enterprise Server の場合:

コマンドがマスターサーバー上で入力される場合、そのサーバーがデフォルトです。

コマンドがリモートメディアサーバー上で入力される場合、そのメディアサーバーのマスターサーバーがデフォルトです。

-p

このオプションを指定すると、検証がプレビューされます。ただし、検証は実行されません。詳しくは、「表示形式」を参照してください。

-pb

このオプションを指定すると、検証がプレビューされます。ただし、検証は実行されません。-pb オプションは -p オプションに類似していますが、個々のバックアップについての情報は表示されません。詳しくは、「表示形式」を参照してください。

-policy name

このオプションを指定すると、指定したポリシー内で、検証するバックアップが検索されます。デフォルトは、すべてのポリシーです。

-priority number

デフォルトのジョブの優先度を上書きする検証ジョブの新しい優先度を指定します。

-pt policy_type

このオプションでは、検証するバックアップを選択するポリシー形式を指定します。デフォルトは、すべてのポリシー形式です。

次に、有効なポリシー形式を示します。

AFS
DataStore
DataTools-SQL-BackTrack
DB2
Enterprise-Vault
FlashBackup
Informix-On-BAR
Lotus-Notes
MS-Exchange-Server
MS-Hyper-V
MS-SharePoint
MS-SQL-Server
MS-Windows
NBU-Catalog
NDMP

NetWare
Oracle
OS/2
PureDisk-Export
SAP
Split-Mirror
Standard
Sybase
Vault
VMware

`-s date, -e date`

このオプションでは、検証するすべてのバックアップを含む日時の範囲の開始日時を指定します。`-e` オプションでは、範囲の終了日時を指定します。

NetBackup コマンドの日時の値に求められる形式は、使用しているロケールによって異なります。`/user/opensv/msg/.conf` ファイル (**UNIX**) と

`install_path¥VERITAS¥msg¥LC.CONF` ファイル (**Windows**) はそれぞれのサポート対象ロケールの日時形式などの情報を含んでいます。これらのファイルには、サポートされているロケールおよび書式のリストを追加および変更するための、具体的な方法が含まれています。

NetBackup インストールのロケールの指定に関する項を参照してください。
『[NetBackup 管理者ガイド Vol. 2](#)』。

有効な日付の範囲は、**01/01/1970 00:00:00** から **01/19/2038 03:14:07** です。デフォルトの開始時刻は、**24** 時間前です。デフォルトの終了日時は、現在の日時です。

`-sl sched_label`

このオプションを指定すると、指定したスケジュールによって作成されたバックアップが、検証するバックアップとして検索されます。デフォルトはすべてのスケジュールです。

`-st sched_type`

このオプションを指定すると、指定したスケジュール形式によって作成されたバックアップが、検証するバックアップとして検索されます。デフォルトはすべての形式のスケジュールです。

次に、有効な値を示します。

FULL (完全バックアップ)

INCR (差分増分バックアップ)

CINC (累積増分バックアップ)

UBAK (ユーザーバックアップ)

UARC (ユーザーアーカイブ)

NOT_ARCHIVE (ユーザーアーカイブ以外のすべてのバックアップ)

-stype server_type

このオプションでは、ストレージサーバー形式を識別する文字列を指定します。

server_type の値は次のいずれかから指定できます。

- シマンテック社が提供するストレージ。指定可能な値は、AdvancedDisk と PureDisk です。
- サードパーティのディスクアプライアンス。ベンダーから **server_type** の文字列が提供されます。
- クラウドストレージ。有効な値は amazon、att、nirvanix、rackspace などです。これらの値には `_crypt` 接尾辞 (amazon_crypt など) を含めることもできます。

ストレージサーバーの形式では大文字と小文字が区別されます。

-v

このオプションを指定すると、詳細モードが選択されます。-v を指定すると、デバッグログおよび進捗ログに、より詳細な情報が書き込まれます。デフォルトでは、詳細モードは無効です。

表示形式

プレビュー表示:

bpverify を実行すると、バックアップを検索してから次のいずれかの方法でバックアップを表示することによって、プレビューが実行されます。bpverify を実行しても、バックアップは検証されません。

- -p を指定すると、bpverify のコマンドラインオプションで設定された条件を満たすバックアップの ID のリストが表示されます。-p オプションによる情報は、ボリューム順に表示されます。選択されたバックアップを含む各ボリュームについて、メディア ID およびサーバーが表示されます。その後、そのボリュームに存在する選択されたバックアップの ID が表示されます。
- -pb オプションでは、-p の場合より表示が簡易になります。選択条件を満たすバックアップを含む各ボリュームのメディア ID およびサーバーが表示されます。

検証表示:

bpverify を実行すると、検証されたイメージが表示されます。bpverify に表示形式を設定するオプションが含まれない場合、表示形式は簡易になります。コマンドラインに -1 が含まれる場合、表示形式は詳細になります。コマンドラインに -1 と -L の両方が含まれる場合、bpverify を実行すると進捗ログを含むファイルが作成されます。

検証リストは次の形式でボリューム順に表示されます。

- 詳細形式の場合、bpverify を実行すると、選択された各バックアップ ID について次の情報が表示されます。
 - ポリシー、スケジュール、バックアップ ID、メディア ID またはパス、作成時刻
 - バックアップ済みファイル
 - イメージの検証中に bpverify によって検出されたすべての問題
 - イメージの検証が成功したかどうか
- 簡易形式の場合、bpverify を実行しても、バックアップ済みファイルは表示されません。

例

例 1 - 36 時間前から実行されたバックアップの検証を行います。

```
# bpverify -hoursago 36
  Verify started Thu Feb  3 11:30:29 2012
  INF - Verifying policy mkb_policy, schedule Full
(plim_0949536546), path /tmp/mkbunit, created 02/02/12 18:09:06.
  INF - Verify of policy mkb_policy, schedule Full
(plim_0949536546) was successful.
  INF - Status = successfully verified 1 of 1 images.
```

例 2 - 2 つのプレビュー表示 -p と -pb を比較します。

```
# bpverify -p -hoursago 2002
Media id = A00002  Server = plim
Bid = plim_0949616279  Kbytes = 32800  Filenum = 1  Fragment = 1
Bid = gava_0949681647  Kbytes = 12191  Filenum = 2  Fragment = 1
Bid = gava_0949683298  Kbytes = 161  Filenum = 3  Fragment = 1
Bid = gava_0949683671  Kbytes = 11417  Filenum = 4  Fragment = 1
Bid = gava_0949684009  Kbytes = 11611  Filenum = 5  Fragment = 1
Bid = gava_0949684276  Kbytes = 806  Filenum = 6  Fragment = 1
Bid = gava_0949688704  Kbytes = 9869  Filenum = 7  Fragment = 1
Bid = gava_0949688813  Kbytes = 9869  Filenum = 8  Fragment = 1
Bid = gava_0949949336  Kbytes = 10256  Filenum = 9  Fragment = 1
Bid = plim_0949949337  Kbytes = 6080  Filenum = 9  Fragment = 1
Bid = plim_0949949337  Kbytes = 4176  Filenum = 10  Fragment = 2
Bid = gava_0949949686  Kbytes = 10256  Filenum = 11  Fragment = 1
Bid = plim_0949949687  Kbytes = 5440  Filenum = 11  Fragment = 1
Bid = plim_0949949687  Kbytes = 4816  Filenum = 12  Fragment = 2

Media id = 400032  Server = plim
```

```
Bid = toaster2_0950199621 Kbytes = 298180 Filenum = 1 Fragment = 1
Bid = toaster2_0950199901 Kbytes = 298180 Filenum = 3 Fragment = 1

# bpverify -pb -hoursago 200
Media id = A00002 Server = plim
Media id = 400032 Server = plim
```

戻り値

終了状態が **0** (ゼロ) の場合は、コマンドが正常に実行されたことを意味します。終了状態が **0** (ゼロ) 以外の場合は、エラーが発生したことを意味します。

管理ログ機能が有効になっている場合、終了状態は、bpverify によって次のログディレクトリ内の管理日次ログに書き込まれます。

```
UNIX systems: /usr/opensv/netbackup/logs/admin
```

```
Windows systems: install_path¥NetBackup¥logs¥admin
```

次の形式が使用されます。

```
bpverify: EXIT status = exit status
```

エラーが発生した場合、このメッセージの前に診断が表示されます。

ファイル

UNIX システムの場合:

```
/usr/opensv/netbackup/logs/admin/*
/usr/opensv/netbackup/db/error/*
/usr/opensv/netbackup/db/images/*
```

Windows システムの場合:

```
install_path¥NetBackup¥logs¥admin¥*
install_path¥NetBackup¥db¥error¥*
install_path¥NetBackup¥db¥images¥*
```

cat_convert

cat_convert – NetBackup カタログの形式変換ユーティリティの実行

概要

```
cat_convert -a2b [-o] [-s] [-v] source_file_directory
[target_file_directory]
cat_convert -dump [-short] [-noheader] [-nopath] [-nodata] [-srec
num] [-erec num] [-sep char] source_file
cat_convert -check source_file
cat_convert -decompress compressed_filetarget_file_directory
UNIX システムでは、このコマンドのディレクトリパスは /usr/opensv/netbackup/bin/ です。
Windows システムでは、このコマンドのディレクトリパスは
<install_path>%NetBackup%bin% です。
```

機能説明

cat_convert を実行すると、NetBackup カタログの .f ファイルが、バージョン 3.4、4.0v または 4.5 の ASCII 形式とバージョン 4.5 以上のバイナリ形式の間で変換されます。cat_convert では、自動的に元のカタログファイルの形式が検出され、もう一方の形式に変換されます。

-dump オプションを指定すると、バイナリカタログイメージの .f ファイルの内容を表示できます。これによって、.f ファイルの内容が、読みやすい形式で標準出力 (stdout) にエコー表示されます。ファイル内の特定のレコードまたは一部の出力列のみに出力を制限するヘルパーオプションもあります。

-check オプションには、指定したバイナリ .f ファイルの一貫性チェックを行う機能があります。

-decompress オプションを使用すると、.z1 圧縮形式を使って圧縮した指定のバイナリ .f ファイルを解凍できます。UNIX プラットフォームでは、.z 形式の解凍をサポートしません。

cat_convert によって不整合が検出されると、レポートされる不整合の種類に応じて次に示す最大 4 つのレポートが生成されます。

- 無効な i ノードレポート
このレポートには、無効な i ノードが表示されます。次に例を示します。

```
Type Problem Additional Information
Dir No Data Path element name: SUNWmlib
Dir No Name Filenum: 7
```

```
File No Data Path element name: vmd.uds
File No Data Path element name: bpcompatd.uds
File No Name Filenum: 8356
Dir No Name Filenum: 8374
```

このレポートの列の情報は次のとおりです。

- **Type** は、その項目がファイルまたはディレクトリのどちらであるかを表示します。
- **Problem** は、無効な i ノードの原因がデータがないことであるか、名前がないことであるかを表示します。
- **Additional information** はその i ノードに関連付けされるパス要素名、カタログが受信したその i ノードの filenum フィールド、またはエラーメッセージのいずれかです。
- 無効なディレクトリレポート
このレポートには、不整合なディレクトリが表示されます。次に例を示します。

Index	InodeIndex	1stChild	1stDir	LastChild	NextIndex	NextDir	Name
2539	2230	5605F	-1	5605F	788763F	-1	JSP.cla
21281	2229	43380F	-1	1122108F	257809F	56110	fr.tmp
24157	3330	53103F	-1	2688747F	-1F	-1	UNKNOWN
36766	4406	98367F	-1	98367F	-1F	-1	Root
97393	5134	471040F	-1	3136322F	-1F	-1	udst.js

```
Total Directories: 150307
Total Files: 1137006
```

このレポートの列の情報は次のとおりです。

- **Index** は、カタログにレポートされるディレクトリの相対的な位置です。
- **Inode Index** は、バックアップの実行中に i ノード情報が格納される一時ファイルでのインデックスです。
- **1st Child** は、一覧表示されたディレクトリ内の最初の子 (ファイルまたはディレクトリ) のインデックスです。子がない場合、この値は -1 になります。最初の子がファイルの場合は F、ディレクトリの場合は D の文字がインデックスの後に表示されます。
- **1st Dir** は、一覧表示されたディレクトリ内の最初のディレクトリのインデックスです。サブディレクトリがない場合、この値は -1 になります。
- **Last Child** は、一覧表示されたディレクトリ内の最後の子 (ファイルまたはディレクトリ) のインデックスです。子がない場合、この値は -1 になります。最後の子がファイルの場合は F、ディレクトリの場合は D の文字がインデックスの後に表示されます。

- **Next Index** は、一覧表示されたファイルの次の兄弟 (ファイルまたはディレクトリ) のインデックスです。兄弟がない場合、この値は **-1** になります。次の兄弟がファイルの場合は **F**、ディレクトリの場合は **D** の文字がインデックスの後に表示されます。
- **Next Dir** は、一覧表示されたディレクトリの次の兄弟ディレクトリのインデックスです。兄弟ディレクトリが存在しない場合、この値は **-1** になります。
- **Name** は、表示できる場合はディレクトリの短縮名、表示できない場合は **UNKNOWN** となります。
- 無効なファイルレポート
このレポートには、不整合なファイルが表示されます。レポートの形式は次のとおりです。

```
Index      Inode  Index  Next  Index  Name
2364             12180      2368F  Report.doc
39774      16642      39776D  UNKNOWN
```

このレポートの列の情報は次のとおりです。

- **Index** は、カタログにレポートされるファイルの相対的な位置です。
- **Inode Index** は、バックアップの実行中に *i* ノード情報が格納される一時ファイルでのインデックスです。
- **Next Index** は、一覧表示されたファイルの次の兄弟 (ファイルまたはディレクトリ) のインデックスです。兄弟がない場合、この値は **-1** になります。次の兄弟がファイルの場合は **F**、ディレクトリの場合は **D** の文字がインデックスの後に表示されます。
- **Name** は、表示できる場合はディレクトリの短縮名、表示できない場合は **UNKNOWN** となります。
- 無効なディレクトリおよびファイルのレポート
このレポートには、不整合なファイルとディレクトリの両方が表示されます。レポートの形式は次のとおりです。

```
Index      Inode      Type           Name
2363      11134      Directory      /Documents/Directory 1
13679     10077      Directory      /Documents/Directory 2
Total Directories: 460724
Total Files: 3426572
```

このレポートの列の情報は次のとおりです。

- **Index** は、カタログにレポートされるファイルの相対的な位置です。
- **Inode** は、カタログにレポートされるファイルまたはディレクトリの *i* ノード番号です。

- **Type** は、その項目がファイルまたはディレクトリのどちらであるかを表示します。
- **Name** は、表示できる場合はディレクトリの短縮名、表示できない場合は **UNKNOWN** となります。

このレポートではディレクトリツリーが全検索されるため、最初の 2 つのレポートに表示されるファイルまたはディレクトリの一部が表示されない場合があります。レポートにはファイルまたはディレクトリの完全修飾名が表示されるため、問題解決に使用することができます。レポートには、ファイルおよびディレクトリの総数も表示されます。

これらのレポートはローカライズされていません。

このコマンドを実行するには、管理者権限が必要です。

オプション

-a2b

このオプションを指定すると、NetBackup 3.4、4.0v および 4.5 の ASCII 形式のカタログの .f ファイルが NetBackup 4.5 のバイナリ形式の .f ファイルに変換されます。

-check *source_file*

このオプションを指定すると、バイナリ .f ファイルの一貫性チェックが実行されます。**source_file** には、完全修飾パスを指定する必要があります。FlashBackup または NDMP 形式のバックアップの問題によって不整合が発生することがあります。不整合が検出されなかった場合、このユーティリティはメッセージを表示せずに終了し、戻りコード 0 (ゼロ) が戻されます。不整合が検出された場合、不整合の数が戻され、レポートされた不整合の種類に応じて最大 3 つのレポートが出力されます。

-decompress *compressed_file* *target_file_directory*

指定した圧縮バイナリ .f ファイルを解凍します。**compressed_file** には、完全修飾パスを指定する必要があります。-decompress は、.z1 圧縮形式を使って圧縮したカタログファイルを解凍します。UNIX では、.z 形式の解凍もサポートします。**target_directory** は、解凍操作で解凍したファイルを保存するディレクトリです。

-dump

このオプションを指定すると、カタログイメージの .f ファイルの内容を表示できます。

-errec *num*

cat_convert -dump の出力を変更するオプションです。このオプションを指定すると、このレコード番号までのレコードが表示されます。

メモ:レコード番号は、出力の最初の列のファイル番号と一致しない場合があります。

-nodata

このオプションを指定すると、**cat_convert -dump** のデータ列が出力されません。データ列には、非常に大量の出力が含まれる場合があります。

-noheader

cat_convert -dump の出力を変更するオプションです。**cat_convert -dump** の出力を変更するオプションです。このオプションを指定すると、列ヘッダーが出力されません。

-nopath

cat_convert -dump の出力を変更するオプションです。このオプションを指定すると、パス列が出力されません。パス列には、非常に大量の出力が含まれる場合があります。

-o

このオプションを指定すると、元のカatalogファイルの内容が変換された新しい形式で上書きされます。**-o** と **target_file_directory** を同時に指定することはできません。

-s

このオプションを指定すると、統計情報がコンソールウィンドウに表示されます。

-sep char

cat_convert -dump の出力を変更するオプションです。**cat_convert -dump** の出力を変更するオプションです。**char** を指定すると、デフォルトの区切り文字 (空白) の代わりに、指定した文字で列を区切ることができます。たとえば、このコマンドを使用して、カンマで区切られた出力を生成できます。

-short

cat_convert -dump の出力を変更するオプションです。このオプションを指定すると、出力が一部の一般的な列に制限されます。

-srec num

cat_convert -dump の出力を変更するオプションです。**cat_convert -dump** の出力を変更するオプションです。このオプションを指定すると、このレコード番号以降のレコードが表示されます。

メモ:レコード番号は、出力の最初の列のファイル番号と一致しない場合があります。

target_file_directory

-v

このオプションを指定すると、現在の進捗情報が表示されます。

変換する次のいずれかを指定します。

- ターゲットファイルを指定するには、変換元のファイルを指定する必要があります。

- ターゲットディレクトリを指定するには、変換元のディレクトリを指定する必要があります。
変換元がディレクトリである場合、`-a2b` を指定する必要があります。
変換によって作成される新しいファイルは、指定した形式に変換され、元のファイル名がターゲットディレクトリで使用されます。

ソースファイルを変換するときにターゲットファイルまたはディレクトリが指定されない場合、変換処理によって作成されるファイルに接尾辞が追加されます。(接尾辞には `_bin.f` または `_ascii.f` があります。)

カタログの `.f` ファイルのサイズが **4 MB** を超える場合、バイナリカタログの出力ファイルは個別に出力されます。出力ファイルは `catstore` ディレクトリに格納されます。

例

例 1

```
# cat_convert -a2b abc.f
```

`abc.f` が ASCII 形式である場合、**target_file_path** は `abc_bin.f` になります。

例 2

```
# cat_convert -a2b abc.f
```

`abc.f` の内容が、バイナリ形式に変換されます。

例 3

```
# cat_convert -dump -short abc.f
```

`abc.f` の内容が、読みやすい形式で標準出力 (stdout) に表示されます。

関連項目

p.441 の [cat_export](#) を参照してください。

p.444 の [cat_import](#) を参照してください。

cat_export

cat_export - カタログイメージメタデータを NBDB (NetBackup データベース) から 1 つ以上の ASCII イメージファイルにエクスポートします。

概要

```
cat_export -all | -client name | -backupid backupid | -mediahost  
hostname [-delete_source] [-replace_destination] [-export_dependents]  
[-staging [-source_master name]] [-base_directory_name]
```

UNIX システムでは、このコマンドのディレクトリパスは /usr/opensv/netbackup/bin/ です。

Windows システムでは、このコマンドのディレクトリパスは
<install_path>%NetBackup%bin% です。

機能説明

cat_exportユーティリティは特定のシナリオで、イメージのメタデータを NBDB または NBDB のステージングされたコピーから宛先ディレクトリの ASCII イメージヘッダーファイル(フラットファイル)にエクスポートするのに使われます。このユーティリティは NetBackup データベースで使用される階層に基づき、このデータをディレクトリ階層に編成します。

cat_export は通常、ディザスタリカバリのシナリオの一部として cat_import コマンドと共に使用されるか、またはあるリポジトリからの別のリポジトリにイメージのメタデータ情報を再配置するために使われます。NetBackup ディザスタリカバリについてより多くの情報が利用可能です。

ディザスタリカバリについて詳しくは、次を参照してください。『[NetBackup トラブルシューティングガイド](#)』。

このコマンドを実行するには、管理者権限が必要です。

オプション

- all
マスターサーバーのすべてのクライアントのカタログイメージデータをエクスポートします。
- base directory_name
カタログメタデータのターゲットディレクトリを、デフォルトディレクトリ netbackup/db.export から、指定されたディレクトリ名に変更します。
- backupid backupid
指定済みのバックアップ ID のカタログイメージデータをエクスポートします。

- `-client name`
指定済みのクライアントのカタログイメージデータをエクスポートします。
- `-delete_source`
NBDB の元のイメージメタデータを削除します。
- `-export_dependents`
指定したバックアップイメージに従属しているイメージのメタデータをエクスポートするために、`-backupid` オプションおよび `-client` オプションと共に使用されます。
- `-mediahost hostname`
指定したメディアのホストに少なくとも 1 つのフラグメントがあるカタログのイメージデータをエクスポートします。`hostname` の値は任意のメディアサーバーまたは Snapshot Client であることが可能です。
- `-replace_destination`
ターゲットディレクトリ内の既存のフラットファイルを新しいフラットファイルで上書きします。
- `-staging [-source_master name]`
NBDB そのものではなくステージングディレクトリ内の NBDB のコピーを、エクスポート操作のソースとして使用するかどうかを指定します。このオプションを使用できるのは、次の場合です。
- イメージメタデータを `db.export` (デフォルト) ディレクトリ内のレガシーフラットファイルの形式にリストアする場合。
 - イメージメタデータをエクスポートし、そのデータを `cat_import` コマンドを使用して別の NBDB のコピーにインポートできるようにする場合。

例

例 1 - alfred のすべてのイメージメタデータを `/catExport/images/alfred` のディレクトリにエクスポートします。

```
# cat_export -base /catExport -client alfred
```

例 2 - `netbackup/db.export` ディレクトリにすべての NBDB のイメージメタデータをエクスポートします。

```
# cat_export -all
```

例 3 - クライアント `hostname1` と関連しているイメージメタデータのみをステージングディレクトリにある NBDB のコピーからエクスポートします。

```
# cat_export -client hostname1 -staging
```

関連項目

p.435 の [cat_convert](#) を参照してください。

p.444 の [cat_import](#) を参照してください。

cat_import

cat_import - カタログのイメージメタデータを ASCII イメージヘッダーファイル (フラットファイル) から NetBackup データベース (NBDB) に移行する

概要

```
cat_import -all | -client name | -backupid backupid [-delete_source]
[-replace_destination] [-staging] [-base directory_name]]
```

UNIX システムでは、このコマンドのディレクトリパスは /usr/opensv/netbackup/bin/ です。

Windows システムでは、このコマンドのディレクトリパスは <install_path>%NetBackup%bin% です。

機能説明

cat_import ユーティリティは、カタログイメージメタデータを ASCII イメージヘッダーファイル (フラットファイル) から NBDB (NetBackup データベース) または NBDB のステージングされたコピーに移行します。cat_import コマンドラインを使用して、クライアント (-client) またはバックアップ ID (-backupid) に基づき、すべてのイメージメタデータまたはメタデータのサブセットを移動することができます。

cat_import ユーティリティはまた、cat_export コマンドと次のように使うことができます。ディザスタリカバリのシナリオの一部として、またはあるリポジトリからの別のリポジトリにイメージメタデータ情報を再配置するため。NetBackup ディザスタリカバリについてより多くの情報が利用可能です。

ディザスタリカバリについて詳しくは、次を参照してください。『[NetBackup トラブルシューティングガイド](#)』。

このコマンドを実行するには、管理者権限が必要です。

オプション

-all

マスターサーバーのすべてのクライアントのカタログイメージデータをインポートします。

-base directory_name

イメージメタデータのソースディレクトリを、デフォルトディレクトリ netbackup/db.export から、指定されたディレクトリ名に変更します。

-backupid backupid

指定済みのバックアップ ID のカタログイメージデータをインポートします。

`-client_name`
指定済みのクライアントのカタログイメージデータをインポートします。

`-delete_source`
元の位置から元のイメージメタデータを削除します。

`-replace_destination`
宛先の場所に既存のイメージメタデータがあった場合、強制的に上書きします。

`-staging`
NBDB そのものではなくステージングディレクトリ内の **NBDB** のコピーを、インポート操作の宛先として使用するかどうかを指定します。**NBDB** の別のコピーにイメージメタデータを挿入するには、`cat_export` コマンドと組み合わせてこの操作を使ってください。

例

例 1 - ASCII イメージヘッダーファイル (フラットファイル) からすべてのイメージメタデータをインポートします。

```
# cat_import -all
```

例 2 - 関連付けられた ASCII イメージヘッダーファイルから、クライアント `hostname1` に関連するイメージメタデータのみをインポートします。

```
# cat_import -client hostname1
```

関連項目

p.435 の [cat_convert](#) を参照してください。

p.441 の [cat_export](#) を参照してください。

configurePorts

configurePorts – マスターサーバーの Web Services Layer (WSL) アプリケーション用の Web ポートを設定します

概要

```
configurePorts -httpPort http_port | -httpsPort https_port |  
-shutdownPort shutdown_port
```

```
configurePorts -autofindports value
```

```
configurePorts -overrideCluster value
```

UNIX システムでは、このコマンドのディレクトリパスは

/usr/opensv/netbackup/wmc/bin/install/configurePorts¥ です。

Windows システムでは、このコマンドのディレクトリパスは

<install_path>¥NetBackup¥wmc¥bin¥install¥configurePorts¥ です。

機能説明

NetBackup plug-in for VMware vCenter には仮想マシンをリストアするための NetBackup リカバリウィザードが含まれています。NetBackup リカバリウィザードはマスターサーバーの Web Services Layer (WSL) アプリケーションに対する Web ポートの適切な設定を必要とします。正しいポート設定が行われないと、そのマスターサーバーによってバックアップされた仮想マシンをリストアするためのプラグインを承認できません。

Web ポート (http、https、およびシャットダウン) がマスターサーバーで正しく設定されていない場合は、configurePorts コマンドを使用して手動でポートを設定します。

configurePorts コマンドは一度に 1 つのポートのみを設定できます。

configurePorts コマンドを使用する手順については、次を参照してください。

『[NetBackup Plug-in for VMware vCenter ガイド](#)』。

このコマンドを実行するには、管理者権限が必要です。

オプション

```
-autofindports
```

有効な値は、true および false です。

```
-httpPort http_port_number
```

http のポート番号を指定します。

```
-httpsPort https_port_number
```

https のポート番号を指定します。

`-overrideCluster value`

クラスタ化されたマスターサーバー用クラスタのすべてのノードで使われるポートを上書きします。有効な値は、**true** および **false** です。

このオプションは共有ディスクの次のファイルを更新します。

Windows の場合:

```
install_path¥NetBackup¥var¥global¥wsl¥portfile
```

UNIX または **Linux** の場合:

```
/usr/opensv/netbackup/var/global/wsl/portfile
```

WSL 用の **NetBackup** インストーラは、インストール中にこのファイルをクラスタモードで使用します。

`-shutdownPort shutdown_port`

シャットダウンポート番号を指定します。

例

マスターサーバーの **http** ポートを **8443** に設定します。

```
# configurePorts -httpPort 8443
```

create_nbdb

create_nbdb – 手動による NBDB データベースの作成

概要

```
create_nbdb [-drop current_data_directory] [-sz small | medium |
large] [-dba new_password] [-data data_directory] [-index
index_directory] [-tlog log_directory] [-mlog log_mirror_directory]
[-scripts db_scripts_directory] [-out db_scripts_output_directory]
[-db_server | -server db_server_name] [-db_home pathname] [-staging
staging_directory] [-noemm] [-force]
create_nbdb -upgrade [-scripts db_scripts_directory] [-out
db_scripts_output_directory] [-db_server | -server db_server_name]
[-db_home pathname]
create_nbdb -drop_only [current_data_directory] [-db_server | -server
db_server_name] [-db_home install_path] [-force]
create_nbdb -config_only [-dba password] [-force]
```

UNIX システムでは、このコマンドのディレクトリパスは /usr/openv/netbackup/bin/ です。

Windows システムでは、このコマンドのディレクトリパスは <install_path>%NetBackup%bin% です。

機能説明

このコマンドは、NetBackup データベース (NBDB) を手動で作成する場合に使用します。このコマンドを実行すると、既存の NBDB データベースを削除し、インストール中に使用されたデフォルト以外のパラメータを使用してデータベースを再作成できます。次の操作を実行できます。

- データ、インデックス、およびトランザクションログファイルのデフォルトの場所の変更
- 事前割り当て済みデータベースファイルのサイズの変更
- サイズを増やしたデータベースを保護するためのミラー化されたトランザクションログの追加
- bp.conf ファイルの情報からカタログの設定ファイル (vxdbs.conf) を作成します。
- NBDB をアップグレードします。

オプション

アップグレード時に、オプションを指定しないで `create_nbdb` コマンドを使用すると、既存のデータベースのバージョンを確認できます。データベースが存在しない場合は、デフォルトのパラメータを使用してデータベースが作成されます。

`-config_only`

`bp.conf` ファイルで入手可能な情報から `vxdbms.conf` ファイルを作成します。

`-data data_directory`

このオプションでは、メインデータベースファイルのディレクトリを指定します。パス名 **`data_directory`** に空白が使用されている場合は、パス名全体を引用符で囲みます。次に例を示します。

```
create_nbdb -data "Program Files¥NetBackup¥bin¥data"
```

`-db_home install_path`

データベースディレクトリの場所を指定します。デフォルトのディレクトリは `/usr/opensv/db ..¥Veritas¥NetBackupDB` です。

`-dba new_password`

このオプションでは、すべての **DBA** とアプリケーションのアカウントの **NBDB** および **BMRDB** データベースに対するパスワードを設定します。インストール時に使用されるデフォルトのパスワードは `nbusql` です。既存のデータベースのパスワードを変更する場合にのみ、`nbdb_admin -dba new_password` を使用します。

`-drop`

既存の **NBDB** データベースを削除し、新しい空のデータベースを作成します。

`-drop_only`

既存の **NBDB** データベースを削除します。

`-force`

ユーザー操作なしで操作を実行します。

`-index index_directory`

このオプションでは、インデックスデータベースファイルのディレクトリを指定します。

`-mlog log_mirror_directory`

このオプションを指定すると、サイズを増やしたデータベースを保護するために、ミラー化されたログが作成されます。

`-noemm`

このサーバーが **EMM** サーバー (**BMR** サーバーのアップグレードに使用) ではないことを示します。

- out *db_scripts_output_directory*
create_nbdb がアップグレードスクリプトを実行した出力結果を送信する送信先ディレクトリを指定します。
- scripts *db_scripts_directory*
データベースのアップグレードスクリプトの場所を指定します。
- server *db_server_name*
このオプションでは、データベースサーバー名を指定します。
- staging *staging_directory*
カタログのバックアップとリカバリ時に使用するステージングディレクトリの場所を指定します。
- sz *small | medium | large*
このオプションを指定すると、事前割り当て済みデータベースファイルのサイズが変更されます。インストール時に使用されるデフォルトのサイズは「**small**」です。
- tlog *log_directory*
このオプションを指定すると、トランザクションログの場所が識別されます。
- upgrade
NetBackup データベース (NBDB) をアップグレードします。

関連項目

- p.494 の [nbdb_backup](#) を参照してください。
- p.496 の [nbdb_move](#) を参照してください。
- p.498 の [nbdb_ping](#) を参照してください。
- p.499 の [nbdb_restore](#) を参照してください。
- p.501 の [nbdb_unload](#) を参照してください。

duplicatetrace

duplicatetrace - 複製ジョブのデバッグログのトレース

概要

```
duplicatetrace [-master_server name] -job_id number [-start_time hh:mm:ss] [-end_time hh:mm:ss] mmddyy [mmddyy ...]
duplicatetrace [-master_server name] -backup_id id [-start_time hh:mm:ss] [-end_time hh:mm:ss] mmddyy [mmddyy ...]
duplicatetrace [-master_server name] [-policy_name name] [-client_name name] [-start_time hh:mm:ss] [-end_time hh:mm:ss] mmddyy [mmddyy ...]
```

UNIX システムでは、このコマンドのディレクトリパスは /usr/opensv/netbackup/bin/admincmd/ です。

Windows システムでは、このコマンドのディレクトリパスは <install_path>%NetBackup%\bin\admincmd\ です。

機能説明

duplicatetrace を実行すると、複製ジョブのデバッグログが統合され、標準出力に書き込まれます。メッセージは時間順にソートされます。リモートサーバーとクライアント間のタイムゾーンの違いおよびクロックのずれに対する補正が試行されます。

少なくとも、メディアサーバー上の bptm と bpdm およびマスターサーバー上の次のディレクトリのデバッグログを有効にする必要があります。

UNIX systems: /usr/opensv/netbackup/admin

Windows systems: install_path%NetBackup\admin

最大の出力結果を得るには、ログの詳細度を 5 に設定します。また、マスターサーバー上の bpdm およびすべてのサーバー、クライアント、前述のプロセス上の bpcd のデバッグログを有効にします。

importtrace では、トレースするインポートジョブを選択するための唯一の条件として -job_id または -backup_id オプションが使用されます。-policy_name オプションまたは -client_name オプションは、-job_id または -backup_id と組み合わせて使用することはできません。いずれのオプションも指定しない場合、選択条件と一致するすべてのインポートジョブが選択されます。**-job_id**、-backup_id、-policy_name または -client_name のいずれのオプションも指定しない場合、日付スタンプ (mmddyy) で指定した日付に実行されたすべての複製ジョブがトレースされます。-start_time および -end_time オプションを使用すると、指定した時間内のデバッグログが検証されます。

-backup_id *bid*を指定して duplicatetrace を起動すると、bpduplicate で同じバックアップ ID (*bid*) を -backup_id *bid*に指定して開始された複製ジョブが duplicatetrace によって検索されます。

duplicatetrace -policy_name *policy* では、同じポリシー名を -policy *policy* オプションに指定して開始された複製ジョブが検索されます。

duplicatetrace -client_name *client* では、同じクライアント名 (*client*) を -client オプションに指定して開始された複製ジョブが検索されます。

duplicatetrace では、エラーメッセージが標準エラーに書き込まれます。

このコマンドを実行するには、管理者権限が必要です。

オプション

-master_server

このオプションでは、マスターサーバー名を指定します。デフォルトは、ローカルのホスト名です。

-job_id

このオプションでは、分析する複製ジョブのジョブ ID 番号を指定します。デフォルトは、すべてのジョブ ID です。

-backup_id

このオプションでは、複製ジョブで複製の分析に使用されるバックアップイメージのバックアップ ID 番号を指定します。デフォルトは、すべてのバックアップ ID です。

-policy_name

このオプションでは、分析する複製ジョブのポリシー名を指定します。デフォルトは、すべてのポリシーです。

-client_name

このオプションでは、分析する複製ジョブのクライアント名を指定します。デフォルトは、すべてのクライアントです。

-start_time

ログの分析を開始する最初のタイムスタンプを指定します。デフォルトは、00:00:00 です。

-end_time

ログの分析を終了する最後のタイムスタンプを指定します。デフォルトは、23:59:59 です。

mmdyy

このオプションでは、1 つ以上の日付スタンプを指定します。このオプションによって、分析されるログファイル名 (UNIX の場合は log.mmdyy、Windows の場合は mmdyy.log) が識別されます。

出力形式

出力行の形式は `daystamp.millisecs.program.sequence machine log_line` です。

daystamp

yyyymmdd 形式で表示されるログの日付。

millisecs

ローカルコンピュータで午前 0 時から経過したミリ秒数。

program

ログが記録されるプログラム名 (ADMIN、BPTM、BPCD など)。

シーケンス

デバッグログファイル内の行番号。

machine

NetBackup サーバーまたはクライアントの名前。

log_line

デバッグログファイルに表示される行。

例

例 1 - 2010 年 5 月 1 日に実行された、ジョブ ID が 3 の複製ジョブのログを分析します。

```
# duplicatetrace -job_id 3 050110
```

例 2 - 2010 年 5 月 20 日に実行された、バックアップ ID が pride_1028666945 のバックアップイメージを複製した複製ジョブのログを分析します。-backup_id オプションに pride_1028666945 を指定して実行されたジョブだけが分析されます。

```
# duplicatetrace -backup_id pride_1028666945 052010
```

例 3 - 2010 年 5 月 1 日および 2010 年 5 月 3 日にポリシー Pride-Standard を使用してクライアント pride で実行された複製ジョブのログを分析します。-policy_name オプションに Pride-Standard、および -client_name オプションに pride を指定して実行された複製ジョブだけが分析されます。

```
# duplicatetrace -policy_name Pride-Standard -client_name pride  
050110 050310
```

例 4 - 2010 年 8 月 5 日および 2010 年 8 月 23 日に実行されたすべての複製ジョブのログを分析します。

```
duplicatetrace 080510 082310
```

関連項目

- p.22 の [backupdbtrace](#) を参照してください。
- p.25 の [backuptrace](#) を参照してください。
- p.455 の [importtrace](#) を参照してください。

importtrace

importtrace - インポートジョブのデバッグログのトレース

概要

```
importtrace [-master_server name] -job_id number [-start_time
hh:mm:ss] [-end_time hh:mm:ss] mmddyy [mmddyy]
importtrace [-master_server name] -backup_id id [-start_time hh:mm:ss]
[-end_time hh:mm:ss] mmddyy [mmddyy]
importtrace [-master_server name] [-policy_name name] [-client_name
name] [-start_time hh:mm:ss] [-end_time hh:mm:ss] mmddyy [mmddyy]
```

UNIX システムでは、このコマンドのディレクトリパスは
/usr/opensv/netbackup/bin/admincmd/ です。

Windows システムでは、このコマンドのディレクトリパスは
<install_path>%NetBackup%\bin\admincmd\ です。

機能説明

importtrace を実行すると、指定したインポートジョブのデバッグログメッセージが統合され、標準出力に書き込まれます。メッセージは時間順にソートされます。importtrace では、リモートサーバーとクライアント間のタイムゾーンの違いおよびクロックのずれに対する補正が試行されます。

少なくとも、メディアサーバー上の bpbrm、bptm、tar およびマスターサーバー上の次のディレクトリのデバッグログを有効にします。

UNIX systems: /usr/opensv/netbackup/admin

Windows systems: install_path%\NetBackup\admin

最大の出力結果を得るには、ログの詳細度を 5 に設定します。前述のプロセスに加えて、マスターサーバー上の bpdcm およびすべてのサーバーとクライアント上の bpcd のデバッグログを有効にします。

importtrace では、トレースするインポートジョブを選択するための唯一の条件として -job_id または -backup_id オプションが使用されます。-policy_name オプションまたは -client_name オプションは、-job_id または -backup_id と組み合わせて使用することはできません。いずれのオプションも指定しない場合、選択条件と一致するすべてのインポートジョブが選択されます。**-job_id**、**-backup_id**、**-policy_name** または **-client_name** のいずれのオプションも指定しない場合、日付スタンプ (mmddyy) で指定した日付に実行されたすべての複製ジョブがトレースされます。**-start_time** および **-end_time** オプションを使用すると、指定した時間内に生成されたデバッグログが importtrace によって検証されます。

-backup_id *id* を指定して importtrace を起動すると、bpimport で同じバックアップ ID (*id*) を -backup_id *id* に指定して開始されたインポートジョブが importtrace によって検索されます。

-policy_name <policy> を指定して importtrace を起動すると、bpimport で同じポリシー名 (<policy>) を -policy <policy> に指定して開始されたインポートジョブが importtrace によって検索されます。

-client_name <client> を指定して importtrace を起動すると、bpimport で同じクライアント名 (<client>) を -client <client> に指定して開始されたインポートジョブが importtrace によって検索されます。

importtrace では、エラーメッセージが標準エラーに書き込まれます。

このコマンドを実行するには、管理者権限が必要です。

オプション

-master_server

このオプションでは、マスターサーバー名を指定します。デフォルトは、ローカルのホスト名です。

-job_id

このオプションでは、分析するインポートジョブのジョブ ID 番号を指定します。デフォルトは、すべてのジョブ ID です。

-backup_id

このオプションでは、分析するインポートジョブによってインポートされたバックアップイメージのバックアップ ID 番号を指定します。デフォルトは、すべてのバックアップ ID です。

-policy_name

このオプションでは、分析するインポートジョブのポリシー名を指定します。デフォルトは、すべてのポリシーです。

-client_name

このオプションでは、分析するインポートジョブのクライアント名を指定します。デフォルトは、すべてのクライアントです。

-start_time

このオプションでは、ログの分析を開始する最初のタイムスタンプを指定します。デフォルトは、00:00:00 です。

-end_time

このオプションでは、ログの分析を終了する最後のタイムスタンプを指定します。デフォルトは、23:59:59 です。

mmddy

このオプションでは、1 つ以上の日付スタンプを指定します。このオプションによって、分析するログファイル名 (UNIX の場合は `log.mmddy`、Windows の場合は `mmddy.log`) が識別されます。

出力形式

出力行の形式は次のとおりです。

```
<daystamp>.<millisecs>.<program>.<sequence> <machine>  
<log_line>
```

daystamp

yyyyymmdd 形式で表示されるログの日付。

millisecs

ローカルコンピュータで午前 0 時から経過したミリ秒数。

program

ログが記録されるプログラム名 (ADMIN、BPBRM、BPCD など)。

sequence

デバッグログファイル内の行番号。

machine

NetBackup サーバーまたはクライアントの名前。

log_line

デバッグログファイルに表示される行。

例

例 1 - 2009 年 8 月 6 日に実行された、ジョブ ID が 4 のインポートジョブのログを分析します。

```
# importtrace -job_id 4 080609
```

例 2 - 2009 年 8 月 20 日に実行された、バックアップ ID が `pride_1028666945` のバックアップイメージをインポートしたインポートジョブのログを分析します。このコマンドを実行すると、`-backup_id` オプションに `pride_1028666945` を指定して実行されたインポートジョブだけが分析されます。

```
# importtrace -backup_id pride_1028666945 082009
```

例 3 - 2009 年 8 月 16 日および 2009 年 8 月 23 日にポリシー `Pride-Standard` を使用してクライアント `pride` で実行されたインポートジョブのログを分析します。このコマンド

を実行すると、`-policy_name` オプションに `Pride-Standard`、および `-client_name` オプションに `pride` を指定して実行されたインポートジョブだけが分析されます。

```
# importtrace -policy_name Pride-Standard -client_name pride  
081609 082309
```

例 4 - 2007 年 8 月 5 日および 2007 年 8 月 17 日に実行されたすべてのインポートジョブのログを分析します。

```
# importtrace 080507 081707
```

関連項目

- p.22 の [backupdbtrace](#) を参照してください。
- p.25 の [backuptrace](#) を参照してください。
- p.451 の [duplicatetrace](#) を参照してください。

jbpSA

jbpSA – Java 対応の UNIX マシンでクライアントの BAR インターフェースを起動

概要

```
jbpSA [ -d | -display] [-D prop_filename] [-h | -Help] [-l  
debug_filename] [-lc] [-ms nnn] [-mx xxx] [-r version]
```

The directory path to this command is /usr/opensv/netbackup/bin/

機能説明

このコマンドは UNIX システムでのみ動作します。

jbpSA コマンドを実行すると、Java 対応の UNIX マシンでクライアントのバックアップ、アーカイブおよびリストアインターフェースが起動されます。

オプション

-d | -display

このオプションを指定すると、環境変数が表示されます。たとえば、

```
-d eagle:0.0
```

-D *prop_filename*

このオプションでは、デバッグプロパティのファイル名を指定します。このファイルのデフォルトの名前は、Debug.properties です。

-h | -Help

このオプションを指定すると、jbpSA コマンドで使用可能なオプションが表示されます。

-H *host*

このオプションでは、jbpSA ログインダイアログボックスにデフォルトで表示されるホストシステムを指定します。完全修飾されたホスト名と修飾されていないホスト名のいずれでも指定できます。デフォルト値は存在しません。

-l *debug_filename*

このオプションでは、デバッグログファイル名を指定します。デフォルトでは、jbpSA を起動するたびに一意の名前で、/usr/opensv/netbackup/logs/user_ops/nbjlogs に書き込まれます。

-lc

このオプションを指定すると、アプリケーションでログファイルへのアクセスに使用されているコマンドラインが出力されます。

メモ: アプリケーションでは、常にコマンドラインを使用してデータを取得したり更新するわけではありません。アプリケーションには、**NetBackup** および **Media Manager** の **API** を使用してタスクを実行するようアプリケーションサーバーに指定するプロトコルもあります。将来、アプリケーションからのコマンドラインの使用は減る見込みです。

-ms *nnn*

このオプションを指定すると、**Java Virtual Machine (JVM)** のメモリの使用量を構成できます。*nnn* には、アプリケーションで利用可能なメモリ (**MB 単位**) を指定します。デフォルトは、**36 MB** です。

jnbSA は、**512 MB** の物理メモリおよびアプリケーションで利用可能な **128 MB** のメモリを搭載するコンピュータで実行してください。

-ms では、**JVM** の起動時にヒープに割り当てられるメモリの量を指定します。推奨のメモリ量を搭載するコンピュータでは、jnbSA の簡易初期化を行うにはデフォルト値で十分であるため、この値を変更する必要がない場合があります。

例:

```
# jbpSA -ms 36M
```

割り当てるメモリは、jbpSA コマンドを実行するか、または /usr/opensv/java/nbj.conf に INITIAL_MEMORY オプションを設定することによって指定できます。

-mx *xxx*

このオプションを指定すると、**Java Virtual Machine (JVM)** のメモリの使用量を構成できます。*xxx* には、**JVM** で動的に割り当てられたオブジェクトおよび配列に使用される最大ヒープサイズ (**MB 単位**) を指定します。デフォルト: **512 MB**。

このオプションは、データの量が多い場合に有効です (アクティビティ 모니터のジョブ数が多い場合など)。

例:

```
# jbpSA -mx 512M
```

最大ヒープサイズは、jbpSA コマンドを実行するか、または /usr/opensv/java/nbj.conf に MAX_MEMORY オプションを設定することによって指定できます。

`-r version`

このオプションでは、実行するクライアントのバックアップ、アーカイブおよびリストアインターフェースのバージョンを指定します。有効な値は **7.0**、**7.1** および **7.5** です。`-r` オプションを指定しない場合のデフォルトは、**NetBackup** の最新バージョンになります。

jnbSA

jnbSA – Java 対応の UNIX マシンで NetBackup 管理コンソールを起動

概要

```
jnbSA [ -d | -display] [-D prop_filename] [-h | -help] [-H host] [-l  
debug_filename] [-lc] [-ms nnn] [-mx xxx] [-r version]
```

The directory path to this command is /usr/opensv/netbackup/bin/

機能説明

このコマンドは UNIX システムでのみ動作します。

jnbSA を実行すると、Java 対応の UNIX マシンで NetBackup 管理コンソールが起動されます。

オプション

-d | -display

このオプションを指定すると、環境変数が表示されます。たとえば、

```
-d eagle:0.0
```

-D *prop_filename*

このオプションでは、デバッグプロパティのファイル名を指定します。このファイルのデフォルトの名前は、Debug.properties です。

-h | -help

このオプションを指定すると、jnbSA コマンドで使用可能なオプションが表示されま
す。

-H *host*

このオプションでは、jnbSA ログインダイアログボックスにデフォルトで表示されるホ
ストシステムを指定します。完全修飾されたホスト名と修飾されていないホスト名のい
ずれでも指定できます。デフォルト値は存在しません。

-l *debug_filename*

このオプションでは、デバッグログファイル名を指定します。デフォルトでは、jnbSA
を起動するたびに一意の名前
で、/usr/opensv/netbackup/logs/user_ops/nbjlogs に書き込まれます。

-lc

このオプションを指定すると、アプリケーションで使用されているコマンドラインがログファイルに出力されます。

メモ: アプリケーションでは、常にコマンドラインを使用してデータを取得したり更新するわけではありません。アプリケーションには、**NetBackup** および **Media Manager** の **API** を使用してタスクを実行するようアプリケーションサーバーに指定するプロトコルもあります。将来、アプリケーションからのコマンドラインの使用は減る見込みです。

-ms *nnn*

このオプションを指定すると、**Java Virtual Machine (JVM)** のメモリの使用量を構成できます。*nnn* には、アプリケーションで利用可能なメモリ (**MB 単位**) を指定します。デフォルトは、**36 MB** です。

jnbSA は、**512 MB** の物理メモリおよびアプリケーションで利用可能な **128 MB** のメモリを搭載するマシンで実行してください。

-ms では、**JVM** の起動時にヒープに割り当てられるメモリの量を指定します。推奨のメモリ量を搭載するマシンでは、jnbSA の簡易初期化を行うにはデフォルト値で十分であるため、この値を変更する必要がない場合があります。

例:

jnbSA -ms 36M

割り当てるメモリは、jnbSA コマンドを実行するか、または /usr/opensv/java/nbj.conf に INITIAL_MEMORY オプションを設定することによって指定できます。

-mx *xxx*

このオプションを指定すると、**Java Virtual Machine (JVM)** のメモリの使用量を構成できます。*xxx* には、**JVM** で動的に割り当てられたオブジェクトおよび配列に使用される最大ヒープサイズ (**MB 単位**) を指定します。デフォルト: **512 MB**。

このオプションは、データの量が多い場合に有効です (アクティビティ 모니터のジョブ数が多い場合など)。

例:

jnbSA -mx 512M

最大ヒープサイズは、jnbSA コマンドを実行するか、または /usr/opensv/java/nbj.conf に MAX_MEMORY オプションを設定することによって指定できます。

`-r version`

このオプションでは、実行する **NetBackup** 管理コンソールのバージョンを指定します。有効な値は **7.1**、**7.5** および **7.6** です。-r オプションを指定しない場合のデフォルトは、**NetBackup** の最新バージョンになります。

ltid

ltid – Media Manager device デーモンを起動または停止

概要

```
/usr/opensv/volmgr/bin/ltid [-v] [-logmounts minutes] [-noverify]
```

機能説明

このコマンドは UNIX システムでのみ動作します。

ltid コマンドを実行すると、**Media Manager device** デーモン (ltid) および自動ボリウム認識デーモン (avrd) が起動されます。これらのデーモンによって、**Media Manager** デバイスが管理されます。両方のデーモンが起動されると、オペレータは操作画面の開始、ドライブ状態の監視、およびスタンドアロンドライブに対する要求の割り当ての制御を行うことができます。ltid は、システムの初期化用スクリプトの中で指定できます。

Media Manager Volume デーモン vmd も ltid コマンドによって起動されます。ロボットデバイスが **Media Manager** で定義済みの場合、適切なロボットデーモンも ltid によって起動されます。

stopltid コマンドを実行すると、ltid、avrd およびロボットデーモンが停止されます。

このコマンドを実行するには、管理者権限が必要です。

オプション

-v

syslogd を使用してデバッグ情報がログに書き込まれます。このオプションは、ロボットデバイスの使用中に実行すると有効です。このオプションを指定すると、ロボットデーモンおよび vmd が詳細モードで起動されます。

-logmounts *minutes*

このオプションを指定すると、ltid を実行することによって、syslogd を使用してマウント要求がログに書き込まれます。この場合も、マウント要求は **Media Manager** の表示に転送されます。マウント要求のログは、指定した分数にわたって遅延した後だけに作成されます。

-logmounts を指定する場合、デフォルトの分数は **3** です。-logmounts に 0 を指定すると、ltid によって syslogd を介してマウント要求がすぐにログに書き込まれます。**minutes** が **0** (ゼロ) 以外で、その分数が経過する前にマウント要求が正常に処理された場合、syslogd を介してその要求がログに書き込まれることはありません。

-noverify

このオプションを指定すると、ltid によってドライブ名が検証されません。通常は、ltid によって、クローズ時非巻き戻しドライブ名に、非巻き戻し、変数、**Berkeley** 形式などに関する正しいマイナー番号ビットが含まれていることが検証されます。通常、このオプションは不要ですが、標準外のプラットフォームデバイスファイルの使用時には有効な場合があります。このオプションを指定する場合は、デバイスファイルが正しいことを確認してください。

エラー

エラーメッセージは、syslogd を使用してログに書き込まれます。

関連項目

rc(8)

p.684 の [stoptlid](#) を参照してください。

syslogd

p.720 の [tpconfig](#) を参照してください。

p.741 の [tpunmount](#) を参照してください。

p.774 の [vmadm](#) を参照してください。

nbauditreport

nbauditreport – 監査レポートの生成と表示

概要

```
nbauditreport -sdate "MM/DD/YY [HH:[MM[:SS]]]" [-edate "MM/DD/YY  
[HH:[MM[:SS]]]" -ctgy [POLICY | JOB | STU | STORAGESRV | POOL |  
AUDITCFG | AUDITSVC | BPCONF | HOLD] -user username[:domainname] -fmt  
[SUMMARY | DETAIL | PARSABLE] [-notruncate] [-pagewidth NNN] [-order  
[DTU | DUT | TDU | TUD | UDT | UTD]]
```

UNIX システムでは、このコマンドのディレクトリパスは

/usr/opensv/netbackup/bin/admincmd/ です。

Windows システムでは、このコマンドのディレクトリパスは

<install_path>%NetBackup%bin\admincmd% です。

機能説明

nbauditreport コマンドは NetBackup の監査レポートを作成し、表示することを可能にします。

NetBackup 環境で監査が構成されている場合は、NetBackup でユーザーが開始した次の操作を監査レポートに記録し、表示することができます。

- NetBackup の構成を変更する操作。たとえば、ポリシーの作成、削除と修正、監査の設定の変更などです。
- NetBackup の実行時オブジェクトを変更する操作。これらの操作は、リストアジョブの開始や、監査サービスの起動または停止を含んでいます。

このコマンドは監査レポートの作成と表示のみを行います。監査自体を有効にし、無効にするには nbemmcmd -changesetting -AUDIT ENABLED コマンドと nbemmcmd -changesetting -AUDIT DISABLED コマンドを使ってください。

監査や監査レポートについて詳しくは、次を参照してください。『NetBackup 管理者ガイド Vol. 1』。

オプション

```
-ctgy [POLICY | JOB | STU | STORAGESRV | POOL | AUDITCFG | AUDITSVC  
| BPCONF | HOLD]
```

監査レポートに表示される情報の種類を指定します。監査機能は、関連する領域（ジョブ、プールなど）に対してユーザーが開始した処理の情報を記録し、表示します。このオプションに指定できる値、および各値に対して監査される項目を次に示します。

- **POLICY** - ポリシーの属性、クライアント、スケジュール、バックアップ対象リストの追加、削除、更新。
- **JOB** - ジョブの変更
- **STU** - ストレージユニットの変更
- **STORAGESRV** - ストレージサーバーの情報
- **POOL** - ディスクストレージプールの変更
- **AUDITCFG** - 監査の構成変更
- **AUDITSVC** - NetBackup の監査サービス (nbaudit) の開始と停止
- **BPCONF** - bp.conf ファイルへの変更 (UNIX の場合のみ)。
- **HOLD** - 保留操作の作成、変更、削除
p.595 の **nbholdutil** を参照してください。

どのオプションも指定されていない場合のデフォルト条件はすべてのカテゴリの監査レポートを表示することです。

-fmt [SUMMARY | DETAIL | PARSABLE]

監査レポートの出力形式を指定します。

- **SUMMARY** はデフォルト条件です (使われるオプションなし)。監査レポートは概略のみです。DESCRIPTION、USER と TIMESTAMP の各項目を使ってカラム形式で監査レポートを表示します。
- **DETAIL** は監査情報の総合的なリストを表示します。たとえば、ポリシーが変更されると、属性の名前、古い値と新しい値が一覧表示されます。
- **PARSABLE** は **DETAIL** レポートと同じセットの情報を解析可能な形式で表示します。レポートはパイプ文字 (|) を監査データのセパレータとして使います。レポートで利用可能なキーワード (DESCRIPTION、ACTION、OLDV、NEWV など) を使って監査レコードを解析します。
解析可能なレポートは次のフィールドを含んでいます。
 - **機能説明**. 実行された処理の詳細。詳細には、修正されたオブジェクトに指定された新しい値、および新しく作成されたオブジェクトのすべての属性の新しい値が含まれています。詳細には削除済みオブジェクトも表示します。
 - **TIMESTAMP**. 操作が起きた時間。時間は秒単位の協定世界時 (UTC) で表示されます。
 - **CATEGORY**. 実行されたユーザー操作のカテゴリ。POLICY のようなカテゴリはスケジュールやバックアップ対象のようないくつかのサブカテゴリを含むことがあります。サブカテゴリの修正はプライマリカテゴリの修正としてリストされます。カテゴリは次のとおりです。

AUDITCFG - 監査の構成変更

AUDITSVC - NetBackup の監査サービス (nbaudit) の開始と停止

BPCONF - bp.conf ファイルの変更 (UNIX の場合のみ)

HOLD - 保留操作の作成、変更、削除

JOB - 取り消しや削除のようなジョブの変更

POLICY - ポリシーの属性、クライアント、スケジュール、バックアップ対象の修正

POOL - ディスクストレージプールの変更

STORAGESRV - ストレージサーバーの作成、修正、削除

STU - ストレージユニットの作成、修正、削除

- **ACTION**. 実行した活動。次の処理はすべてのカテゴリで可能です。各処理で実行する特定の活動について詳しくはコマンド出力の **DESCRIPTIONS** と **DETAILS** フィールドで見つかります。
- **REASON**. 処理を実行した理由があればここに記載されます。
- **DETAILS**. 属性(**ATTR_<num>**) に分割された活動について詳しくは、それぞれに付いている **OLDV/NEWV** (古い値/新しい値) のペアが後ろに付いたわかりやすい名前を参照してください。
ポリシー削除の例: **ATTR_1: Policy Type OLDV: Standard NEWV:**

-notruncate

レポートの詳細セクションの別々の行に、変更された属性の古い値と新しい値を表示します。このオプションは **-fmt DETAIL** オプションと組み合わせて使われます。

-order [DTU | DUT | TDU | TUD | UDT | UTD]

情報が監査レポートの解析可能な形式で表示される順序を指定します。このオプションは **-fmt PARSABLE** オプションとのみ使うことができます。D、T、U の各識別子は次の内容を表します。

- **D - DESCRIPTION**
- **T - TIMESTAMP**
- **U - USER**

-pagewidth *NNN*

監査レポートの詳細セクションのページ幅を指定します。このオプションは **-fmt DETAIL** オプションと組み合わせて使われます。

-sdate *mm/dd/yyyy-hh:mm:ss* | *mm/dd-hh:mm* **-edate** *mm/dd/yyyy-hh:mm:ss*
| *mm/dd-hh:mm*

表示する監査レポートデータの開始日時 (**-sdate**) または終了日時 (**-edate**) を設定します。時間の指定は必須ではありません。

開始日が指定済みで、終了日が指定されていない場合は、指定の開始日時から現在までの監査データが表示されます。終了日が指定済みで、開始日が指定されていない場合は、終了日までの監査データが表示されます。

```
-user username[:domainname]
```

監査情報を表示するユーザーの名前を指定します。

例

例 1 - 2013 年 4 月 1 日から現在までに報告されたすべての監査イベントを表示します。

```
# nbauditreport -sdate 04/01/13
```

```
USER          DESCRIPTION                                     TIMESTAMP
Admin@entry   Schedule 'test1' was added to Policy 'test1'   04/06/13
Admin@entry   Audit setting(s) of master server 'server1' were modified 04/06/13
Admin@entry   Audit setting(s) of master server 'server1' were modified 04/06/13
sys@server1   The nbaudit service on master server 'server1' was started 04/06/13
sys@server1   The nbaudit service on master server 'server1' was stopped 04/06/13
sys@server1   The nbaudit service on master server 'server1' was started 04/06/13
```

Audit records fetched: 7

例 2 - Joe が一連のポリシー属性を修正した場合の詳しい監査レポートを表示します。ポリシーが 6/8/13 以来 1 回のみ変更されたので、1 つの監査レコードが取り込まれます。

```
# nbauditreport -fmt DETAIL -ctgy POLICY -sdate 6/8/13
```

```
DESCRIPTION: Attributes of Policy 'pol_stugrp' were modified
USER: joe
TIMESTAMP: 06/08/2013 19:14:25
CATEGORY: POLICY
ACTION: MODIFY
DETAILS:
      ATTRIBUTE          OLD VALUE          NEW VALUE
1 Proxy Client
2 Residence              stu_grp
3 Collect TIR info      2                  0
4 Checkpoint Restart    0                  1
5 Checkpoint Interval    0                  15
6 Data Mover Type       2                  -1
7 Collect BMR Info      1                  0
8 Policy Generation     1                  2
```

Audit records fetched: 1

DETAILS エントリは Joe が変更したすべての属性の古い値と新しい値を示します。

例 3 - 2013 年 8 月 30 日以降に実行されたすべての保持操作の監査レポートを表示します。

```
# nbauditreport -ctgy HOLD -sdate "08/30/13 22:46:50" -fmt DETAIL
DESCRIPTION: Hold with hold name test hold for report1 is created
USER: root@aellora.mydomain.com
TIMESTAMP: 08/30/13 22:47:56
CATEGORY: HOLD
ACTION: CREATE
REASON:
DETAILS:
      ATTRIBUTE                OLD VALUE                NEW VALUE
1 On-hold image list          nakul2.mydomain.co

DESCRIPTION: Hold with hold name test hold for report1 is created
USER: root@aellora.mydomain.com
TIMESTAMP: 08/30/13 22:47:54
CATEGORY: HOLD
ACTION: CREATE
REASON:

Audit records fetched: 2
```

nbcatsync

nbcatsync – カタログリカバリ操作の完了後にイメージカタログのディスクメディア ID を再同期化するユーティリティを実行

概要

```
nbcatsync -backupid catalog_backup_id [-prune_catalog] [-no_sync_slp]
[-dryrun] [-keepgoing]
```

```
nbcatsync -sync_dr_file dr_file_path [-copy number] [-dryrun]
```

UNIX システムでは、このコマンドのディレクトリパスは /usr/opensv/netbackup/bin/ です。

Windows システムでは、このコマンドのディレクトリパスは <install_path>NetBackup¥bin¥ です。

機能説明

nbcatsync はカタログのリストア処理で使われる後処理ユーティリティです。

bprecover が実際のカタログファイルをリストアした後、nbcatsync ユーティリティは次を実行できます。

- フラグメントレコードのディスクメディア ID を修正します。
- すべてのリカバリされたイメージに **SS_COMPLETED** とマーク付けします。
- 無効になっている機能をリストアします。
- 現在構成されているディスクボリュームで見つけられなかったイメージをカタログから削除します。-prune_catalog オプションはローカルに存在しないイメージのカタログエントリを削除します。
- 実行されたカタログリストアに基づいて一組のイメージに操作を制約します。

指定のカタログリストアオプションで影響されるバックアップイメージのリストを簡単に作成できます。カタログバックアップイメージの .f ファイルはカタログリストアがリカバリするイメージをリストします。このファイルは nbcatsync ユーティリティの操作の制約対象となるイメージをリストします。

このユーティリティは、EMM の現在のデバイス構成を使ってディスクボリュームのリストを入手し、イメージリストにあるイメージのフラグメントをスキャンします。EMM データベース、現在構成されているストレージのイメージ、イメージカタログがすべて調整されると、nbcatsync は通常の NetBackup 処理をオンにしようとします。

メモ: ユーティリティが実際に行う前に、nbcatsync -dryrun オプションを使って nbcatsync ユーティリティの操作を検証します。nbcatsync の処理は取り消すことができないため、イメージカタログの以前の内容を取得するために bprecover -wizard を再び実行する必要があります。

オプション

-backupid *catalog_backup_id*

一組のバックアップイメージを含んでいるカタログバックアップ ID を指定します。このオプションは、nbcatsync がこのカタログバックアップイメージ ID からリストアされるイメージヘッダーのディスクメディア ID の参照を修正することを可能にします

-copy *number*

リストアされるカタログのコピーを指定します。このオプションはプライマリコピー以外のコピーからのカタログリカバリを可能にします。

-dryrun

通常は nbcatsync が実行する処理をユーザーが検証できるようにします。nbcatsync コマンドが実行された場合に行われる可能性のあるすべての修正をリストします。

-keepgoing

不適切なディスクボリュームを無視します。そうでない場合、nbcatsync はディスクボリュームのイメージの検索時に予想外のエラーが発生すると中止されます。

-no_sync_slp

EMM イメージレコードを削除してイメージカタログの **SS_COMPLETED** の状態をゼロに設定するストレージライフサイクルポリシーが無効になるのを防ぎます。通常、nbcatsync は、プライマリサイトで実行される任意のストレージライフサイクルポリシーの処理からイメージを除外します。それから nbcatsync は修正されたイメージの **DR** サイトに適切なストレージライフサイクルポリシーの設定を適用できます。ただし、-no_sync_slp が指定されているとき、nbcatsync は修正されたイメージのこれらの設定を変更しないため、このオプションは注意して使ってください。

-prune_catalog

すべての存在しないイメージを削除します。-prune_catalog は、DR サイトのどのディスクボリュームにもない場合に、ディスクボリュームのイメージのコピーを削除します。イメージのコピーが見つからなければ、イメージ自体が削除されます。

-sync_dr_filedr_file_path

リストアするカタログバックアップイメージに対応する DR サイトの DR ファイルを指定します。

例

例 1 - `bprecover` がカタログバックアップイメージを見つけることができるように、DR ファイル `test.txt` のディスクメディア ID の参照を修正します。DR サイトで、次のコマンドを実行します。

```
# nbcatsync -sync_dr_file test.txt
```

例 2 - カタログバックアップからリストアされるイメージ ID `rg9pctrain05_1254127131` のイメージヘッダーにあるディスクメディア ID の参照を修正するための検証を行います。結果に問題がなければ、`-dryrun` オプションなしでコマンドを繰り返すことができます。

```
# nbcatsync -backupid rg9pctrain05_1254127131 -dryrun
```

関連項目

p.343 の [bprecover](#) を参照してください。

p.441 の [cat_export](#) を参照してください。

p.444 の [cat_import](#) を参照してください。

NBCC

NBCC – NetBackup の一貫性チェック (NBCC) ユーティリティの実行

概要

```
NBCC [-batch] [-debug] [-gather] [-help] [-idar] [-kbfree #####]
[-locale locale_name] [-nozip] [-nocleanup] [-terse] [-upgrade]
[-use_reg_cmd [32 | 64]] [-version] [-unknown_image_servers_option]
```

UNIX システムでは、このコマンドへのディレクトリパスは
/usr/opensv/netbackup/bin/support/ です。

Windows システムでは、このコマンドへのディレクトリパスは
<install_path>%NetBackup%bin%support% です。

機能説明

NBCC コマンドは、次の要素を含む NetBackup カタログおよびデータベースの一部の整合性を確認するために使われる NBCC ユーティリティを実行します。

- テープメディアおよび関連付けられたイメージ
- NBDB イメージ、ImageCopy テーブルレコード、ImageFragment テーブルレコード、およびイメージカタログ
- Enterprise Media Manager (EMM) サーバーエントリと構成されたストレージユニットエントリ

NBCC はカタログの不整合を検出すると、一連の出力ファイルを生成します。利用可能なシステムユーティリティを使用して、これらのファイルのサポートパッケージバンドルが作成されます。

これらの不整合には、関連付けられたメディアサーバーが EMM データベースに認識されないイメージが含まれます。このような場合、-unknown_image_servers_option 機能を使って、認識されないメディアサーバーに関連付けられたイメージをコメントアウトする、期限切れにする、認識されるメディアサーバーで継承する、のいずれかのオプションを選択します。

NBCC ユーティリティについての詳細は、次を参照してください。『[NetBackup トラブルシューティングガイド](#)』。

オプション

-batch

NBCC を非対話モードで実行します。このモードでは、次の処理が実行されます。

- 出力レポートがすでに存在する場合は、NBCC によって自動的に上書きされません。
- bpimagelist 情報の処理後、EMM に認識されないメディアサーバーはフラグを付けられます。完全分析により、今後の確認のためにコメントアウトすべきすべての修復が生成されます。
- NBCC は NetBackup カタログの不整合を検出しなければ、サポートパッケージを作成しません。

-debug

追加のプログラムデバッグ情報が nbcc-info.txt ファイルに追加されるため、このファイルのサイズは大幅に増加します。

-gather

NetBackup の構成とカタログ情報のみを収集します。このオプションでは、NetBackup カタログの一貫性はチェックされません。

-help

NBCC ユーティリティについて、より詳細なヘルプ情報を出力します。

-idar

一貫性チェックに破棄されたテープメディアリソースの ID を含めます。

-kbfree *freespace*

NBCC の実行に必要なファイルシステムの空き領域の量を指定します。整数のみ割り当てることができます。デフォルト値はヘルプの出力に表示されます。

7.0 以降のバージョンの NetBackup では、NBCC のデフォルト値は次のとおりです。ファイルシステムの空き領域 (KB) = 2048000

ファイルシステムのすべての空き領域チェックをスキップするには、この値をゼロ (0) に設定し、英語以外のロケール環境で実行します。

-locale *locale_name*

NetBackup の *common_local_name* を指定します。NBCC は次のファイルでこの名前の有無を検索します。

UNIX の場合: /usr/opensv/msg/.conf

Windows の場合: %VERITAS%msg%LC_CONF

この名前は bpimagelist -d コマンドラインオプションで使用する関連付けられた日付形式を決定します。

-nocleanup

NBCC が不整合を検出せずに一貫性チェックを実行した場合、結果のサポートパッケージまたはファイルはクリーンアップされません。

メモ: `-nocleanup` オプションと `-gather` オプションを一緒に使わないでください。これらは一貫性チェック状態であるために相互に排他的です。

`-nozip`

サポートパッケージバンドルの作成をスキップします。生成された **NBCC** ファイルは出力ディレクトリに残ります。

`-terse`

各カタログレコードから個々のカタログの内容ファイルに、一貫性チェックに関連付けられたフィールドのみを抽出します。

`-unknown_image_servers_option`

一貫性の分析で、**EMM** に認識されないイメージデータベースで検出される任意のメディアサーバーに行う処理を指定します。*option* には、次のいずれかの値を指定します。

- `comment_all` - 認識されないメディアサーバーに関連付けられるイメージに関連していると分析プログラムが生成する、推奨される修復操作 (**SRA**) をコメントアウトします。したがって、**NBCCR** はこれらのコメントアウトされた修復の処理を試みません。
- `expire_all` - 分析プログラムが **NBCCR** で処理するために生成する **SRA** で、認識されないメディアサーバーに関連付けられるすべてのイメージを期限切れにします。
- `inherit_all hostname` - 認識されるメディアサーバー (*hostname*) を指定して、認識されないサーバーと置き換えます。この新しいサーバーは、任意の認識されないメディアサーバーと関連付けられるすべてのイメージを継承します。分析プログラムは、**NBCCR** で処理するため **SRA** 項目を生成します。
たとえば、次のコマンドにより、任意の認識されないメディアサーバーと関連付けられるすべてのイメージがメディアサーバー **MS1** に継承されます。

```
# NBCC -unknown_image_servers_inherit_all MS1
```

`-upgrade`

NetBackup カタログをアップグレードする機能に関連する一貫性チェックのみを含めます。

`-use_reg_cmd [32 | 64]`

Windows レジストリに問い合わせる `Reg.exe` ユーティリティの使用を有効にします。このオプションが正しく機能するように、`/reg:32` または `/reg:64` コマンドラインパラメータをサポートするバージョンの `Reg.exe` がインストールされている必要があります。

このオプションは **Windows** システムでのみ動作します。

-version

NBCC の内部バージョン番号を出力します。

前提条件

NBCC ユーティリティを使用するには、次の項目が必要です。

- NBCC は NetBackup 7.0、7.1、7.5、7.6 専用に設計されています。
- サポートパッケージを作成する NBCC の場合、次のプログラムへのパスを \$PATH 環境変数に含める必要があります。tar および gzip
tar が利用できない場合は、makecab プログラムを使い(該当する場合)、出力ファイルをバンドルし、圧縮します。
これらのプログラムが利用できず、単一のサポートパッケージファイルが必要な場合は、出力ディレクトリのファイルを手動でサポートパッケージにバンドルします。
- コマンドラインオプションの -kbfree 0 を使わない場合、NBCC はファイルシステムの使用状況の特性を検査します。次に、設定情報とカタログ情報をアンロードし、サポートパッケージを作成します。この情報には利用可能なファイルシステムの空き領域が含まれています (KB 単位)。(-kbfree オプションの説明を参照してください。)
- EMM サーバーは稼働中である必要があります。
- vmd プロセスはマスターサーバーと、NetBackup 構成内で EMM サーバーとして機能する他のすべてのサーバーで動作する必要があります。
- bpdbm プロセスはマスターサーバーで動作する必要があります。
- インストールされた NetBackup ですべてのメディアサーバーと ltid プロセスが実行しており、ネットワークサービスが構成されている必要があります。
- NetBackup 構成内のすべてのサーバーと、NBCC ユーティリティが実行するサーバーの UTC 時間は、互いに数分以内に同期する必要があります。

メモ: クロックの同期が確認できないと、NBCC が不正確な結果を報告する原因となる場合があります。

プログラムの使用方法

以下は、プログラムの使用方法の注意事項です。

- NBCC はサポートディレクトリから実行されます (使用方法を参照してください)。別のディレクトリから実行する場合、NBCC は次のデフォルトのディレクトリの場所を使います。

UNIX の場合: /usr/opensv/netbackup/bin/support/config

Windows の場合: <install_path>\NetBackup\bin\support\

- カタログの一貫性の問題を特定し、適切に修正するには、以下を確認します。データが収集されてから修正作業が完了するまでの間、**NetBackup** ジョブが実行していない、または開始されていない。ほとんどの構成でこの条件を満たすのは不可能であるため、**NBCC** はアクティブな **NetBackup** ジョブに関連付けられたテープメディアを特定しようとします。通常の処理中に発生することがある伝播遅延が原因で、すべての有効なテープメディアが識別されないことがあります。そのため、一貫性の分析の結果を慎重に見直す必要があります。
- **NBCC** は **EMM** マスターサーバーを検出します。複数のマスターサーバーが検出された場合、**NBCC** は **NBCC** が実行するシステムに関連付けられているものを特定します。**NBCC** は、識別された **EMM** マスターサーバーを使って、どの **EMM** メディアサーバーがそのマスターサーバーと関連付けられているかを判断します。

戻り値

次の終了値が戻されます。

0 = Consistency checks skipped (-gather)
No inconsistency detected

1 = Inconsistency detected

2 = Program error condition detected:

```
Invalid command line option  
.nbcc.lock file exists  
File permission problem  
File open/read/write problem  
Insufficient free disk space  
Unable to obtain the version of NetBackup  
Issue with NetBackup configuration information/detection  
Issue with NetBackup catalog information/detection
```

3 = -help information displayed
-version information displayed

関連項目

p.480 の [NBCCR](#) を参照してください。

p.486 の [nbcplogs](#) を参照してください。

p.672 の [nbsu](#) を参照してください。

NBCCR

NBCCR – NBU データベースの不整合を修復する NetBackup の一貫性チェックの修復 (NBCCR) ユーティリティの実行

概要

```
NBCCR [-sra SRAFilename] [-emmpwd EMMpassword] [-version] [-help]
[-volumedatabasehost volDB_host] [safe_pool_name safepoolname]
[-kbfree freespace] [-use_req_cmd [32 | 64]]
```

UNIX システムでは、このコマンドへのディレクトリパスは
/usr/opensv/netbackup/bin/support/ です。

Windows システムでは、このコマンドへのディレクトリパスは
<install_path>%NetBackup%bin%support% です。

機能説明

NBCCR コマンドは、テープに関連する修復操作を適用するために使われる NBCCR ユーティリティを実行します。修復操作は、推奨される修復操作 (SRA) ファイルに含まれています。このユーティリティでは、NetBackup コマンドを実行してこれらの修復が実行されます。シマンテック社テクニカルサポートは、NBCCR コマンドによって収集されたデータの分析に基づいて SRA ファイルを生成します。NBCCR コマンドは、シマンテック社テクニカルサポートの指示があった場合にのみ実行します。シマンテック社テクニカルサポートによって生成された SRA ファイルの修復を適用する場合にのみ使います。NBCCR コマンドでは、試行された各修復操作の結果を含む履歴ファイルが作成されます。

コマンドラインのコマンドの不適切な使用、破損したデータのリストアの試行、メディアサーバーの不適切な廃止などによって不整合が発生する場合があります。ファイルシステムが一杯になると、不整合が発生する場合があります。

NBCCR ユーティリティについての詳細は、次を参照してください。『[NetBackup トラブルシューティングガイド](#)』。

オプション

-emmpwd *EMMpassword*

デフォルトのパスワードと異なる場合に EMM パスワードの名前を指定します。

-help

詳細なヘルプ情報を出力して終了します。

-kbfree *freespace*

NBCCR の実行に必要なファイルシステムの空き領域の量を指定します。整数のみ割り当てることができます。デフォルト値はヘルプの出力に表示されます。

この値は **1024000 (1024*1024)** というデフォルトの空き領域の値を上書きします。
英語以外のロケール環境で実行する場合、この値をゼロ (**0**) に設定してファイルシステムのすべての空き容量チェックをスキップします。

`-sra SRAfilename`

推奨される修復操作 (**SRA**) ファイル名を指定します。デフォルト名は、**master_name.NBCCA.SRA_timestamp.txt** です。タイムスタンプの形式は **yyyymmdd_hhmmss** です。

`-safe_pool_name safefilename`

デフォルトの安全なプール名を上書きします。デフォルトは **NBCC_SafePool** です。

`-version`

NBCCR ユーティリティのバージョンを出力して終了します。

`-volumedatabasehost volDB_host`

ボリュームデータベースホスト(または **EMM** ホスト) がマスターサーバーでない場合にのみ必要です。ボリュームデータベースのホストがマスターでない場合、ボリュームデータベースのホストをここで指定する必要があります。複数のマスターが同じボリュームデータベースホストを使用する場合、ここで指定する必要があります。1 つのマスターに複数のボリュームデータベースホストがある場合、**SRA** ファイルが参照するすべてのテープが同じボリュームデータベースホストであることを確認します (コマンドラインで指定する必要があります)。

`-use_reg_cmd [32 | 64]`

Windows レジストリに問い合わせる **Reg.exe** ユーティリティの使用を有効にします。このオプションが正しく機能するように、**/reg:32** または **/reg:64** コマンドラインパラメータをサポートするバージョンの **Reg.exe** がインストールされている必要があります。

このオプションは **Windows** システムでのみ動作します。

関連項目

p.475 の [NBCC](#) を参照してください。

p.486 の [nbcplogs](#) を参照してください。

p.672 の [nbsu](#) を参照してください。

nbcertupdater

nbcertupdater - 証明書更新ユーティリティの実行

概要

```
nbcertupdater {-h | -host} host_name [{-b | -broker} broker_name]
[{-p | -port} broker_port] [-v] [-d] [-nolog]
nbcertupdater {-o | -ofile} output_file [{-i | -ifile} input_file]
[{-np | -numparallel} num_parallel_hosts] [{-na | -numattempts}
attempts_per_host] [{-b | -broker} broker_name] [{-p | -port}
broker_port] [-v] [-d] [-nolog]
nbcertupdater {-listonly | -l} {-o | -ofile} output_file [-v] [-d]
[-nolog]
nbcertupdater -help
```

UNIX システムでは、このコマンドのディレクトリパスは

/usr/opensv/netbackup/bin/admincmd/ です。

Windows システムでは、このコマンドのディレクトリパスは

<install_path>%NetBackup%\bin\admincmd\ です。

機能説明

証明書更新ユーティリティ (nbcertupdater) は、指定された認証ブローカーを使用して setuptrust 操作を実行できる一連の NetBackup ホストに接続するための自動処理を提供します。ユーティリティは、ローカル認証ブローカーの NBU_Machines プライベートドメインに問い合わせ、setuptrust 操作のために接続可能な NetBackup ホストのセットを生成することもできます。

このユーティリティは、マスターサーバーのローカル管理者としてのみ実行できます。これは次の 3 つのモードで動作します。

- 1 つのホストを処理します。コマンドラインで 1 つのホスト名を指定します。ユーティリティは、ホストに接続し、指定された認証ブローカーを使用して setuptrust を実行します。
- 複数のホストを処理します。入力ファイルでホスト名を指定します。入力ファイルが指定されていない場合は、nbcertupdater はローカル認証ブローカーの NBU_Machines プライベートドメインから、接続するホストのリストを自動的に生成します。各ホストを処理するために子が生成されます。-numparallel オプションは、並行して処理されるホストの数を制御します。
- 認証ブローカーからホストのリストを作成します。ユーティリティは、ローカル認証ブローカーの NBU_Machines プライベートドメインからリストを作成し、出力ファイルに書き込みます。ホストは処理されません。

オプション

- h | -host *host_name*
setuptrust 操作が実行される **NetBackup** ホストを指定します。
- b | -broker *broker_name*
信頼の設定に使用されるブローカー。ブローカーが指定されていない場合は、信頼は **NetBackup** マスターサーバーによって設定されます。
- p | -port *broker_port*
選択したブローカーのポート番号を指定します。このオプションが指定されていない場合は、ブローカーへの問い合わせに、デフォルトのブローカーポートが使われます。
- i | -ifile *input_file*
処理対象の **NetBackup** ホストの名前を含んでいる入力ファイルの名前を指定します。入力ファイルの各行がホスト名にマッピングされます (コメント行を除く)。
- o | -ofile *output_file*
出力ファイル名を指定します。
- np | -numparallel *num_parallel_hosts*
並行して処理されるホストの数を指定します。デフォルトは **3** です。
- na | -numattempts *attempts_per_host*
ユーティリティがエラーを宣言する前にホストの処理を試行する回数を指定します。デフォルトは **1** です。
- l | -listonly
ローカル認証ブローカーから **NetBackup** ホストのリストを生成しますが、**NetBackup** ホストは処理しません。
- v
このオプションを指定すると、詳細モードが有効になります。ユーティリティは、コンソールに追加の情報メッセージを出力します。
- d
このオプションを指定すると、デバッグモードが有効になります。ユーティリティは、コンソールにデバッグメッセージを出力します。
- nolog
ユーティリティ操作のすべてのログ記録を停止します。
- help
コマンドの使用方法の情報を出力します。

出力メッセージ

HOST_NOT_FOUND

ホスト名を見つけることができません。

BPCD_CONN_FAIL

ホスト上の bpcd への接続に失敗しました。ホストに NetBackup クライアントソフトウェアがインストールされていない可能性があります。

```
# bpnbat -ShowBrokerCerts
```

USER_INTERRUPT

ユーザーによって操作の終了が要求されました。このエラーは、プログラムを終了するためにユーザーが **Ctrl+C** を押した場合に戻されます。

SUCCESS

ホストが正常に処理されました。

例

例 1 - 認証クライアントライブラリがインストールされている NetBackup ホストを更新します。

```
# nbcertupdater -h huffman.abc.com
Logging to directory /openv/netbackup/logs/certupdater>
Processing host huffman.abc.com
Host processed successfully
```

例 2 - ローカル認証ブローカーの NBU_Machines プライベートドメインからコンピュータ名のリストを生成します。このリストは、bpnbat -ShowMachines コマンドを実行すると表示されるリストと同じです。

```
# nbcertupdater -listonly -o outfile.txt
Logging to directory </usr/openv/netbackup/logs/certupdater>
Generating host list from the local AB
Writing result to file <outfile.txt>
```

例 3 - 入力ファイルを使って、更新対象のホストを指定します。最初のホストは正常に更新されます。bpcd は第 2 ホストで動作していません。

```
# cat infile.txt
huffman.vxindia.com
atom.vxindia.com

# nbcertupdater -i infile.txt -o outfile.txt
Logging to directory </usr/openv/netbackup/logs/certupdater>
Reading host names from file infile.txt
Attempt 1: Processing 2 hosts
```

```
Processing host huffman.abc.com (1/2)
Processing host atom.abc.com (2/2)
Completed host huffman.abc.com (SUCCESS)
Completed host atom.abc.com (BPCD_CONN_FAIL)
Total hosts attempted: 2 (1 succeeded)
Writing result to file <outfile.txt>

# cat outfile.txt
#huffman.abc.com #SUCCESS@(02/17/10 16:58:19)
atom.abc.com #BPCD_CONN_FAIL@(02/17/10 16:58:19)
```

nbcplogs

nbcplogs - 指定した宛先にすべての NetBackup ログをコピー

概要

```
nbcplogs destination | -f ###-###-### [-s mm/dd/yyyy-hh:mm:ss |  
mm/dd-hh:mm] [-e mm/dd/yyyy-hh:mm:ss | mm/dd-hh:mm] [-d valued |  
valueh | valuem] [--tmpdir=pathname] [--list-products]  
[--list-subproducts logproducts] [--nbsu | --no-nbsu] [--help-long]  
[--write-config] [--compress-before-bundle]  
UNIX システムでは、このコマンドへのディレクトリパスは  
/usr/opensv/netbackup/bin/support/ です。  
Windows システムでは、このコマンドへのディレクトリパスは  
<install_path>%NetBackup%bin%support% です。
```

機能説明

nbcplogs コマンドを実行すると、ログが NetBackup システム内の様々な場所から共通領域にコピーされ、問題のトラブルシューティングをより簡単に行うことができます。このユーティリティではコピーするログを決定できます。コピーされるログのサイズを小さくするには、時間枠オプションを使用して、開始時間と終了時間を指定できます。

テクニカルサポートによって ###-###-### 形式の Titan ID が提供された場合、次の操作を実行できます。nbcplogs --ftp ###-###-### コマンドを使って過去 24 時間 (デフォルトの期間) のログをアップロードし、nbsu ユーティリティを実行し、テクニカルサポートにサポートパッケージをアップロードしてください。

次を参照してください。nbcplogs についての詳細は、『[NetBackup トラブルシューティングガイド](#)』。

オプション

```
--compress-before-bundle  
ログファイルを圧縮、バンドルして、tarball に追加します。ファイルがコピーされる前に、最初にファイルを圧縮すると最大ディスク使用量が減少します。  
  
destination  
収集するログの宛先を指定します。  
  
-d | --duration valued | valueh | valuem  
収集するログデータの期間を設定します。期間の時間単位は、d (日)、h (時間)、または m (分) で指定します。次に例を示します。
```

```
--duration 5h /tmp/logs
```

-f | --ftp ###-###-###
ファイル転送プロトコル (FTP) を使用して、テクニカルサポートにログを直接アップロードできます。このユーティリティはログをアップロードする前にバンドルして圧縮します。**###-###-###** (ログファイルの宛先) は、テクニカルサポートが提供する Titan ID です。

--ftp-auth=USER username;PASS password
このオプションは FTP のプロキシと同時に使われます。FTP プロキシの **ftp** コマンドを手動で認証し、挿入します。FTP サーバーへの HTTP プロキシはサポートされません。FTP プロキシに送信する必要がある特定のパラメータについては、FTP プロキシのマニュアルを参照してください。

--ftp-debug
FTP の低レベルデバッグをオンにします。これにより FTP ライブラリにデバッグ内容がダンプされ、**--ftp-auth** 問題に遭遇した場合に FTP 固有の対話をデバッグするのに役立ちます。

--help-long
nbcplogs コマンドで利用可能なすべてのオプションを表示します。

-l | --logslog_type[.sub] [, ...]
収集するログの形式を、コマンドラインで指定するものに限定します。**sub** オプションでは、ログの形式のサブカテゴリを指定できます。ログの形式を指定しないと、すべてのログの形式がコピーされます。

--list-products
報告できるすべての可能なログを表示します。

--list-subproducts log_product
指定したログ生成物のすべてのログ副生成物を表示します。

--nbsu | --no-nbsu
nbcplogs コマンド操作の一部として nbsu ユーティリティの実行を有効化 (**--nbsu**) または無効化 (**--no-nbsu**) します。nbsu コマンドユーティリティは、収集されたログデータとともに使用するとき役立つ広範囲の診断情報を収集します。
デフォルト状態では nbsu が実行され、テクニカルサポートに送信するサポートパッケージが作成されます。

-s | --start mm/dd/yyyy-hh:mm:ss | mm/dd-hh:mm -e | --end mm/dd/yyyy-hh:mm:ss | mm/dd-hh:mm
ログの収集の開始時間 (**-s**) または終了時間 (**-e**) を設定します。
-s オプションでは、ログの開始日時が指定されます。対応する **-e** オプションが使われない場合、ユーティリティによって、開始時間から現在までのすべてのログデータが収集されます。

-e オプションでは、ログの終了日時が指定されます。対応する -s オプションが使われない場合、ユーティリティによって、ログファイルに存在する終了日までのすべてのログデータが収集されます。

開始時刻か終了時間が指定済みでなければ、デフォルトの期間は過去 **24** 時間です。

--tmpdir=pathname

FTP 処理で、アップロードする圧縮バンドルを構築するための一時ディスク領域を要求します。

--write-config

nbcplogs の構成値を表示または変更できます。このオプションは編集可能な nbcplogs 構成ファイル (nbcplogs.conf) を作成します。

例

例 1 - デフォルトでは、過去 **24** 時間のログがテクニカルサポートにアップロードされません。**123-123-123** は、テクニカルサポートが提供する **Titan ID** です。

```
# nbcplogs --ftp 123-123-123
```

例 2 - 過去 **30** 分間のすべてのログデータが収集され、テクニカルサポートに送信されます。ユーティリティによって **Vault** ログのエントリが見つかりません。データ転送に利用可能なディスク領域が十分にあるかどうかを判断するように求めるプロンプトが表示されます。ユーティリティはエントリがコピーされるときにログの各形式を表示します。

```
# nbcplogs -d 30m -ftp 123-123-123
from "Fri May 29 13:19:37 2011" to "Fri May 29 13:49:37 2010"
ctrl+c to cancel
logs not found : vault
uploading to ftp.entsupport.symantec.com:/pub/support/incoming /
/123-123-123
Is there at least 429 MBs disk space available in /tmp? (y/N) y
copying ...
copying dberror : /usr/opensv/netbackup/db/error
copying nbu : /usr/opensv/netbackup/logs
copying pbx : /opt/VRTSspbx/log
copying trylogs : /usr/opensv/netbackup/db/jobs/trylogs
copying vxul : /usr/opensv/logs
copying dberror : /usr/opensv/netbackup/db/error
```

例 3 - 1時から2時の間のすべての volmgr ログがコピーされます。

```
# nbcplogs --start 01:00 --end 02:00 --logs volmgr /tmp/logs
```


例 4 - nbpem ログと bpdbm ログを過去 24 時間分コピーし、nbsu ユーティリティを実行し、テクニカルサポートに自動的にサポートパッケージを送信します。

```
# nbcplogs -l nbpem,bpdbm -f 123-123-123
```

例 5 - ログの過去 24 時間分をコピーしますが、nbsu ユーティリティを実行しません。

```
# nbcplogs --no-nbsu -f 123-123-123
```

例 6 - nbcplogs コマンドで使うことができるオプションの完全なセットを表示します。

```
# nbcplogs --help-long
```

例 7 - システムで利用可能なすべてのログディレクトリをリスト表示します。

```
# nbcplogs --list-products
* products:
* db      : /usr/opensv/db/log
* dberror : /usr/opensv/netbackup/db/error
* nbu     : /usr/opensv/netbackup/logs
* pbx     : /opt/VRTSpx/log
* puredisk:
* trylogs : /usr/opensv/netbackup/db/jobs/trylogs
* vault   : /usr/opensv/netbackup/vault/sessions
* volmgr  : /usr/opensv/volmgr/debug
* vxul    :
```

例 8 - nbcplogs コマンドで利用可能なログの副次的な生成物の完全なセットを表示します。

```
# nbcplogs --list-subproducts vxul* "vxul" subproducts:
* vxul.111 = /usr/opensv/logs/nbemmm aliases: 111, nbemmm, vxul.nbemmm
* vxul.116 = /usr/opensv/logs/nbpem aliases: 116, nbpem, vxul.nbpem
* vxul.117 = /usr/opensv/logs/nbjm aliases: 117, nbjm, vxul.nbjm
* vxul.118 = /usr/opensv/logs/nbrb aliases: 118, nbrb, vxul.nbrb
* vxul.119 = /usr/opensv/logs/bmrd aliases: 119, bmrdr, vxul.bmrd...
```

例 9 - FTP プロキシ送信する必要がある特定のパラメータに関する FTP プロキシのマニュアルを参照します。

```
# nbcplogs --ftp-auth="USER user@host proxyuser;PASS pass;ACCT /
proxypass" --ftp-host=ftp-proxy.mydomain.com --ftp 123-123-123
```

nbdb_admin

nbdb_admin - 個々のデータベースの起動または停止、およびデフォルトのパスワードの変更

概要

```
nbdb_admin -dba new_password [-backup directory]
nbdb_admin -start | stop [database_name]
nbdb_admin [-vxdbs nb_data directory] [-vxdbs nb_staging directory]
[-vxdbs nbdb_backup_owner y|n] [-vxdbs nb_server servername |
EMMSERVER] [-auto_start NONE | NBDB | BMRDB | NBAZDB]
nbdb_admin -adjust_server_settings [database_name]
nbdb_admin -enable_request_logging [-persistent] [-duration minutes]
[-logfile filename]
nbdb_admin -disable_request_logging
nbdb_admin -analyze_request_log -logfile filename
nbdb_admin -list
nbdb_admin -reorganize [database_name]
nbdb_admin -validate [database_name] [-full]
UNIX システムでは、このコマンドのディレクトリパスは /usr/opensv/db/bin/ です。
Windows システムでは、このコマンドのディレクトリパスは
<install_path>%NetBackup%bin% です。
```

機能説明

nbdb_admin コマンドは NetBackup データベース (NBDB)、NetBackup 認可データベース (NBAZDB)、Bare Metal Restore データベース (BMRDB) の開始や停止に使えます。

DBA およびアプリケーションのパスワードを変更するには、nbdb_admin コマンドラインユーティリティが必要です。DBA およびアプリケーションのパスワードは、vxdbs.conf ファイルに暗号化されて格納されます。暗号化にはセキュア SSL が使用され、鍵は他の NetBackup に適した方法で処理されます。パスワードは、NetBackup の秘密鍵を使用して、AES-128-CFB で暗号化されます。ファイルに対する権限により、UNIX の root ユーザーまたは Windows の管理者は書き込みと読み取りができるようになります。

インストール中は、すべての DBA とアプリケーションアカウントの NBDB、NBAZDB、BMRDB データベースでデフォルトのパスワード (nbusql) を使います。NBDB、NBAZDB、BMRDB の DBA とアプリケーションのアカウント (EMM_MAIN など) でもデフォルトのパスワード (nbusql) を使います。

このコマンドは NetBackup データベースのパフォーマンスの問題を SyBase データベースの最高ログレベルでトラブルシューティングするのに使う要求ログツールを有効や無効にできます。アクティブなサポートケースがある問題の要求ログを使います。

analyze_request_log オプションは NBDB が生成して基本のログ分析を実行する要求ログを読み込みます。過度のリソース使用量と全般的なオーバーヘッドのために、実稼働環境でこのツールを使うことは推奨しません。

オプション

-adjust_server_settings *directory*

Sybase ユーティリティによって、指定のデータベースの *directory* の設定を調整します。データベースが指定されていない場合、デフォルトではすべてのデータベースが調整されます。

-analyze_request_log

NetBackup のデータベースで生成される要求ログを読み込んで基本的な分析をします。この手順は過度のリソース使用率を起こすことがあるので実働環境での使用は推奨しません。NBDB のログはカスタマが NBDB のパフォーマンスの問題を経験して、アクティブなサポートケースがある場合のみに役立つことがあります。

-auto_start NONE | NBDB | BMRDB | NBAZDB

これらのオプションを指定すると、認証サーバー上でローカルに作業している管理者は、Veritas プライベートドメインデータベース内部からドメインを追加または削除できます。これらのドメインには、どのオペレーティングシステムからもアクセスできません。これらのオプションは、Symantec Product Authentication and Authorization Service 内部だけで意味を持ちます。これらは、集中化された認可システム (PDC/AD や NIS ドメインなど) を利用できない場所で使用します。

-dba_new_password [-backup *directory*]

DBA とアプリケーションのすべてのアカウントの NBDB、NBAZDB、BMRDB データベースでデフォルトのパスワード (nbu\$sql) を変更します。

-backup オプションを使った場合、新しいパスワードは指定するディレクトリにファイル名 nbdbinfo.da で保存されます。そうでない場合、同じファイル名でデフォルトの場所に保存されます。

-disable_request_logging

要求のログを無効化して server.conf ファイルから要求ログ設定を削除します。server.conf のどの変更でも NetBackup リレーショナルデータベースサービスの再起動を必要とします。

-duration *minutes*

分単位で指定済みの時間後に要求ログを無効にします。後で手動で無効にするには 0 を指定します。

`-enable_request_logging`

トラブルシューティングの最高レベルで **NBDB** の要求レベルログを有効にします。要求ログのオーバーヘッドはパフォーマンスに影響することがあるので通常使用には推奨しません。**NBDB** のログはカスタマが **NBDB** のパフォーマンスの問題を経験して、アクティブなサポートケースがある場合のみに役立つことがあります。

`-list`

このオプションを指定すると、すべてのデータベースファイルが表示されます。

`-logfile filename`

NBDB が使えるようにログファイルに絶対パスを指定します。このオプションがない場合は、絶対パスはデフォルトの場所で生成されます。

`-persistent`

NetBackup リレーショナルデータベースサービス (**NBDB**) が再起動した後に要求ログが継続するように `server.conf` ファイルに要求ログの設定を保存します。

`-reorganize database_name`

Sybase ユーティリティによって、指定のデータベースを再編成します。データベースが指定されていない場合、デフォルトではすべてのデータベースが再編成されます。

`-start | -stop database_name`

このオプションを指定すると、`database_name` フィールドで指定したデータベースが起動または停止されます。**NBDB** データベースまたは **BMRDB** データベースを指定できます。`database_name` フィールドの使用は任意です。このコマンドのデフォルトは、**NBDB** データベースです。

メモ: `-stop` オプションによってデータベースをオフラインにする前に、実行中のすべてのサービス (**SQL Anywhere** を除く) を停止します。

`-validate database_name[-full]`

指定のデータベースのすべての表でインデックスおよびキーを検証します。データベース名が指定されていない場合、このオプションはすべてのデータベースを検証します。各表をスキャンし、各行が適切なインデックスに存在することを確認します。表の行数は、インデックス内のエントリ数と一致する必要があります。

`-full` オプションはデータベースの完全検証を実行します。各インデックスで参照される行が、いずれも対応する表に存在することが確認されます。外部キーのインデックスに対しては、対応する行がプライマリ表に存在することも確認されます。

検証チェックではすべての **NetBackup** アクティビティを一時停止する必要はありません。ただし、チェックでは、実行中のトランザクションの結果である一時的なエラーがレポートされることがあります。

-vxdbms_nb_data directory

このコマンドを実行すると、UNIX システム上の **bp.conf** ファイルおよび Windows システム上のレジストリに格納されている **VXDMS_NB_DATA** パラメータが更新されます。このパラメータには、**NBDB** および **BMRDB** データベースの主な場所が含まれています。

-vxdbms_nbdb_backup_owner y|n

このコマンドを実行すると、UNIX システム上の **bp.conf** ファイルおよび Windows システム上のレジストリに格納されている **VXDMS_NBDB_BACKUP_OWNER** パラメータが更新されます。このオプションでは、カタログバックアップに含まれるデータベースのバックアップをマスターサーバーが所有するかどうかを指定できます。このパラメータのデフォルトは **yes** です。

-vxdbms_nb_server servername | EMMSERVER

データベースサーバーの名前を指定の **servername** か **bp.conf** ファイルからの **EMMSERVER** に変更します。

-vxdbms_nb_staging directory

ステージングディレクトリをデフォルトから、指定する **directory** に変更します。このオプションは **vxdbs.conf** ファイルに情報を保存します。

関連項目

p.494 の [nbdb_backup](#) を参照してください。

p.496 の [nbdb_move](#) を参照してください。

p.498 の [nbdb_ping](#) を参照してください。

p.499 の [nbdb_restore](#) を参照してください。

p.501 の [nbdb_unload](#) を参照してください。

nbdb_backup

nbdb_backup - ディレクトリへのデータベースのバックアップ作成に使用するプログラムの実行

概要

```
nbdb_backup [-dbn database_name] [-offline | -online]
destination_directory [-tlog_only] [-truncate_tlog]
UNIX システムでは、このコマンドのディレクトリパスは /usr/opensv/db/bin/ です。
Windows システムでは、このコマンドのディレクトリパスは
<install_path>%NetBackup%bin% です。
```

機能説明

nbdb_backup コマンドを実行すると、SQL Anywhere ファイルのオンラインバックアップまたはオフラインバックアップのいずれかを、ファイルシステムディレクトリに作成できます。このコマンドは、保守作業の実行およびデータベースのコピーの作成に使用します。

オプション

-dbn database_name

database_name がバックアップのために識別するデータベースを設定します。指定できるデータベースは、NBDB および BMRDB です。両方のデータベースがサーバーにインストールされている場合、デフォルトでは、その両方がバックアップ対象となります。

-offline | -online

このオプションを指定すると、SQL Anywhere データベースファイルのオフラインバックアップまたはオンラインバックアップのいずれかが有効になります。

- オンラインバックアップでは、データベースがバックアップ中に起動および実行されます。
- オフラインバックアップでは、データベースが停止されます。

destination_directory

このオプションでは、バックアップを格納するディレクトリを指定します。

-tlog_only

オンラインバックアップの構成ファイルと共にデータベーストランザクションログバックアップのみ生成します。

-truncate_tlog

バックアップがオンラインバックアップで完了した後、データベースランザクションログを切り捨てます。

関連項目

- p.496 の [nbdb_move](#) を参照してください。
- p.498 の [nbdb_ping](#) を参照してください。
- p.499 の [nbdb_restore](#) を参照してください。
- p.501 の [nbdb_unload](#) を参照してください。

nbdb_move

nbdb_move – インストール後の NBDB データベースファイルの場所の移動

概要

```
nbdb_move -data data_directory [-index index_directory] [-tlog  
log_directory] [-mlog log_directory] [-config_only] [-owner EMM |  
DBM | DARS]
```

UNIX システムでは、このコマンドのディレクトリパスは /usr/opensv/db/bin/ です。

Windows システムでは、このコマンドのディレクトリパスは

<install_path>%NetBackup%bin% です。

機能説明

nbdb_move を実行すると、NBDB および BMRDB データベースファイルをデフォルトのディレクトリの場所からユーザー指定のディレクトリに移動できます。この処理によって、インデックスとトランザクションログからデータが分離され、パフォーマンスが向上します。また、このコマンドを使用して、データベースのデータファイルとトランザクションファイルを次のデフォルトの場所に移動することもできます。

UNIX システムの場合: /usr/opensv/db/data

Windows システムの場合: install_path%NetBackup%DB\data

オプション

-config_only

ディレクトリの場所が指定された構成ファイルを更新します。データベースファイルは移動されません。データベースファイルが手作業で再配置されていて、その構成設定をそのまま活かしたい場合、このオプションをリカバリ操作に使用します。

-data data_directory

このオプションを指定すると、メインデータベースファイルが、**data_directory** で指定したユーザー指定のディレクトリに移動されます。

-index index_directory

このオプションでは、インデックスデータベースファイルのディレクトリを変更します。

-mlog log_directory

ミラー化されたトランザクションログを作成して、指定したディレクトリの場所に格納します。ミラー化されたログがすでに存在する場合は、このコマンドを使用して別の場所に移動できます。

-owner EMM | DBM | DARS]

指定のデータ領域のデータベースのデータ、インデックス、またはログファイルを移動します。

-tlog *log_directory*

トランザクションログのディレクトリを変更します。

関連項目

p.494 の [nbdb_backup](#) を参照してください。

p.498 の [nbdb_ping](#) を参照してください。

p.499 の [nbdb_restore](#) を参照してください。

p.501 の [nbdb_unload](#) を参照してください。

nbdb_ping

nbdb_ping – NetBackup データベース (NBDB) または BMR データベース (BMRDB) の状態の表示

概要

```
nbdb_ping [-q] [-dbn database_name]
```

UNIX システムでは、このコマンドのディレクトリパスは /usr/opensv/db/bin/ です。
Windows システムでは、このコマンドのディレクトリパスは <install_path>%NetBackup%bin% です。

機能説明

nbdb_ping コマンドを実行すると、NetBackup データベース (NBDB) または BMR データベース (BMRDB) の状態を確認および表示できます。オプションを指定せずにこのコマンドを入力すると、NBDB の状態が表示されます。

オプション

-dbn *database_name*
このオプションを指定すると、指定した BMR データベースの状態が表示されます。

-q
コマンドを抑止モードに設定します。標準出力を作成しません。

関連項目

- p.494 の [nbdb_backup](#) を参照してください。
- p.496 の [nbdb_move](#) を参照してください。
- p.499 の [nbdb_restore](#) を参照してください。
- p.501 の [nbdb_unload](#) を参照してください。

nbdb_restore

nbdb_restore -- nbdb_backup によってディレクトリにバックアップされたデータベースのリカバリ

概要

```
nbdb_restore -recover source_directory [-dbn database_name]
[-ignore_tlog]
nbdb_restore -recover -staging [-dbn database_name]
```

UNIX システムでは、このコマンドのディレクトリパスは /usr/opensv/db/bin/ です。
Windows システムでは、このコマンドのディレクトリパスは
<install_path>%NetBackup%bin% です。

機能説明

nbdb_restore コマンドを実行すると、nbdb_backup によってディレクトリに作成されたバックアップからのリストアおよびリカバリを実行できます。SQL Anywhere の NBDB および BMRDB データベースの保護には、カタログバックアップインターフェースを使用することをお勧めします。

nbdb_restore は、ステージングディレクトリからリストアし、NBDB のみをリカバリします。デフォルトは現在のオンライントランザクションログを適用することです。デフォルトでは、現在のオンライントランザクションログが適用され、データベースが、現在の db/images ディレクトリと可能なかぎり整合性を維持するようにします。

オプション

```
-dbn database_name
    リカバリする NBDB のデータベース名を指定します。
-ignore_tlog
    NBDB リカバリ操作に現在のオンライントランザクションログを適用しません。
-recover source_directory
    このオプションでは、バックアップの場所を指定します。
-staging
    ステージングディレクトリから NBDB をリストアします。
```

例

例 1 - デフォルトのステージングディレクトリのコピーから NBDB をリストアし、リカバリします。

```
# nbdb_restore -dbn NBDB -ignore_tlog -recover -staging
```

関連項目

- p.494 の [nbdb_backup](#) を参照してください。
- p.496 の [nbdb_move](#) を参照してください。
- p.498 の [nbdb_ping](#) を参照してください。
- p.501 の [nbdb_unload](#) を参照してください。

nbdb_unload

nbdb_unload – NetBackup データベース (NBDB) または BMR データベース (BMRDB) のアンロード

概要

```
nbdb_unload [-dbn database_name] [-t tablelist] [-s] [-staging]
destination directory
```

```
nbdb_unload [-dbn database_name] -rebuild [-verbose]
```

UNIX システムでは、このコマンドのディレクトリパスは /usr/opensv/db/bin/ です。

Windows システムでは、このコマンドのディレクトリパスは

<install_path>%NetBackup%bin% です。

機能説明

nbdb_unload コマンドを実行すると、指定したデータベースがアンロードされます。デフォルトでは、NBDB データベースがアンロードされます。-dbn には、BMRDB (Bare Metal Restore データベース) も指定できます。

メモ: Enterprise Media Manager (EMM) データベースは、NBDB データベースのコンポーネントです。

nbdb_unload コマンドを実行すると、データベースまたは表リストの表ごとに .dat ファイルが作成されます。各 .dat ファイルには、表の各行に対応するデータがカンマ区切り形式で含まれています。さらに、データベースの再ロードに必要な SQL 文を含む reload.sql ファイルも作成されます。次に例を示します。

```
LOAD TABLE "BmrDbas.BMR_Configuration" FROM
```

```
UNIX systems: /temp/data/345.dat
```

```
Windows systems: c:%temp%data%345.dat
```

reload.sql ファイルを実行して、宛先ディレクトリの内容をサポートコンピュータに転送し、この内容を使用してユーザーのデータベースのコピーを作成します。

オプション

```
-dbn database_name
```

このオプションでは、アンロードするデータベースを指定します。

`-rebuild`
デフォルトの NetBackup データベース (NBDB) を再構築します。

`-s`
このオプションを指定すると、スキーマだけがアンロードされ、データはアンロードされません。

`-staging`
一連のフラットファイルにメディア表と関連の表をアンロードします。SQL ツールを使って、NBDB の別のコピーに、必要なデータのサブセットを挿入することができます。

`-t tablelist`
このオプションでは、データベース内のすべての表ではなく、カンマで区切られたアンロード対象の表のリストを指定します。

`-verbose`
出力用のより詳しい情報を生成します。

destination directory
ユーザーがデータとスキーマのダンプを必要とするディレクトリを指定します。

例

例 1 - NBDB データベース (すべての EMM を含む) のデータおよびスキーマをアンロードします。

```
UNIX systems: # nbdb_unload /tmp/nbdb_dump
```

```
Windows systems: # nbdb_unload C:%temp%\nbdb_dump
```

例 2 - NBDB スキーマだけをアンロードします。

```
UNIX systems: # nbdb_unload -s /tmp/nbdb_dump
```

```
Windows systems: # nbdb_unload -s C:%temp%\nbdb_dump
```

例 3 - (完全修飾された表名を使用して) EMM_STU 表だけをアンロードします。

```
UNIX systems: # nbdb_unload -t EMM_MAIN.EMM_STU /tmp/stu
```

```
Windows systems: # nbdb_unload -t EMM_MAIN.EMM_STU C:%temp%\stu
```

例 4 - BMR データベースをアンロードします。

```
UNIX systems: # nbdb_unload -dbn BMRDB /tmp/bmr_dump
```

```
Windows systems: # nbdb_unload -dbn BMRDB C:%temp%\bmr_dump
```

関連項目

- p.494 の [nbdb_backup](#) を参照してください。
- p.496 の [nbdb_move](#) を参照してください。
- p.498 の [nbdb_ping](#) を参照してください。
- p.499 の [nbdb_restore](#) を参照してください。

nbdbms_start_server

nbdbms_start_server - データベースサーバーの起動および停止

概要

```
nbdbms_start_server  
nbdbms_start_server -stop [-f]  
nbdbms_start_server -stat
```

The directory path to this command is /usr/opensv/netbackup/bin/

機能説明

このコマンドは UNIX システムでのみ動作します。

Sybase ASA は、UNIX 上のデーモンとして動作し、スクリプトを使用して起動または停止を行います。引数を指定せずにプログラムを開始すると、サーバーが起動されます。

オプション

-stop

このオプションを指定すると、サーバーが停止します。

-stat

このオプションを指定すると、サーバーが動作中または停止中であることを示す状態が戻されます。0 (ゼロ) は、サーバーがアクティブ (動作中) であることを示します。

-f

このオプションを指定すると、接続が確立されているかどうかにかかわらず、サーバーが強制的に停止されます。このオプションは、-stop オプションと使用した場合にだけ適用されます。

nbdbms_start_stop

nbdbms_start_stop - サーバー上の NetBackup データベースの起動および停止

概要

```
nbdbms_start_stop [start | stop]
```

The directory path to this command is /usr/opensv/netbackup/bin/

機能説明

このコマンドは UNIX システムでのみ動作します。

nbdbms_start_stop コマンドを実行すると、Sybase ASA デーモンを起動および停止できます。

オプション

stop

このオプションを指定すると、サーバーが停止します。

start

このオプションを指定すると、サーバーが起動します。

nbdc

nbdc – NetBackup データの分類の追加、変更または表示

概要

```
nbdc -add -n name -r rank [-v] [-M master_server] [-d description]
nbdc -L | -l [-v] [-M master_server]
nbdc -modify -dc class [-v] [-M master_server] [-n name] [-d
description] [-r rank]
UNIX システムでは、このコマンドのディレクトリパスは /usr/opensv/netbackup/bin/ です。
Windows システムでは、このコマンドのディレクトリパスは
<install_path>%NetBackup%bin% です。
```

機能説明

nbdc コマンドを実行すると、データ分類名の指定とランクの設定を行うことができます。データ分類は、ユーザーがバックアップイメージに付けることができるラベルです。この分類により、NetBackup は異なる種類のデータを異なる方法で処理できます。データ分類は、ストレージライフサイクルポリシーでのみ使用できます。

nbdc を実行すると、次のいずれかの操作を実行できます。

- -add を指定して、新しいデータ分類を追加します。新しいレベルには名前とランクが必要です。複数のマスターサーバーが存在する場合は、必要に応じて説明とマスターサーバー名を指定します。
- -L または -l を指定して、データ分類を一覧表示します。
- -modify を指定して、指定されたデータ分類の名前、ランクまたは説明を変更します。

オプション

-d *description*
このオプションでは、指定したデータ分類の新しい説明を指定します。この説明は単なるコメントです。

-dc *class*
このオプションでは、変更するデータ分類 ID (GUID) を指定します。

- l
このオプションを指定すると、データ分類が一覧表示されます。出力には情報のみが含まれます。フィールドには名前がありません。フィールドは空白で区切れ、レベルごとに1行で表示されます。
- L
このオプションを指定すると、データ分類が一覧表示されます。フィールド名によって出力フィールドが識別されます。レベルごとに1行で出力され、フィールドヘッダー内に出力されるように形式化されます。
- M *master_server*
このオプションでは、マスターサーバーを指定します。デフォルトは、ローカルサーバーです。
- n *name*
このオプションでは、指定したデータ分類の新しい名前を指定します。デフォルト名は、**Platinum**、**Gold**、**Silver**、**Bronze** です。
- r *rank*
このオプションでは、指定したデータ分類 ID の新しいランクを指定します。ランクとは、データ分類の重要性を他のデータ分類との関連によって判断するための方式です。
- v
このオプションを指定すると、ログの詳細モードが選択されます。

例

例 1 - すべてのデータ分類を表示します。2 つのレベル (ランク) のみが表示されています。

```
# nbdc -L
      Rank: 4
      Name: Bronze
      Description: "lowest rank"
Classification ID: B1F664D41DD111B2ACFB99708C0940D1

      Rank: 1
      Name: Platinum
      Description: "highest rank"
Classification ID: B4C999D41DD111B2FFFB99704C6660D4
```

例 2 - ランク 4 の説明を "really the lowest rank" に変更します。

```
# nbdc -modify -sl B1F664D41DD111B2ACFB99708C0940D1 -d "really the
lowest rank"
```

関連項目

- p.655 の [nbstl](#) を参照してください。
- p.663 の [nbstlutil](#) を参照してください。

nbdecommission

nbdecommission - 古いサーバーの廃止

概要

```
nbdecommission -list_ref -oldserver hostname [-reason "string"]
nbdecommission -oldserver hostname [-newserver hostname] [-file
decom_ops.txt] [-reason "string"]
```

UNIX システムでは、このコマンドのディレクトリパスは

/usr/opensv/netbackup/bin/admincmd/ です。

Windows システムでは、このコマンドのディレクトリパスは

<install_path>NetBackup¥bin¥admincmd¥ です。

機能説明

nbdecommission ユーティリティを使うと、ユーザーは古いサーバーのすべての参照を表示できるため、廃止処理に役立ちます。-list_ref -oldserver hostname オプションは古いサーバーに関連付けられているものすべてを表示するため、ユーザーは自分でその関連付けを破棄することができます。このオプションを選択してもサーバーは廃止されません。

-oldserver hostname [-newserver hostname] オプションは古いサーバーを廃止するための詳細なガイダンスを提供します。マスターサーバーまたは廃止されていないサーバーでコマンドを実行できます。廃止処理ではクリーニングが行われ、バックアップ操作を減速する可能性のある EMM DB と bp.conf ファイルの古いメディアサーバーエントリが削除されます。コマンドは古いサーバーが起動されていて応答可能であることを想定していません。省略可能な -newserver を使うと、古いサーバーに置換サーバーを指定できます。

警告:nbdecommission コマンドを使うときは注意してください。コマンドによってイメージが期限切れになることがあるのでデータ損失が起きることがあります。したがって、コマンドを使う前に、コマンドが実行することを完全に理解する必要があります。シマンテック社はメディアサーバーへの参照を廃止する前に最初にそれをすべてプレビューすることを推奨します。

nbcplogs について詳しくは、次を参照してください。『[NetBackup 管理者ガイド Vol. 1](#)』。

オプション

- `-file decom_ops.txt`

指定ファイルにコマンド操作を書き込みます。目的または内容を示す名前で **decom_ops.txt** を置換します。`-file` オプションを使うと、コマンド操作の記録を保持できます。
- `-list_ref -oldserver hostname`

古いサーバーに関連付けられている項目を表示します。自分で関連付けを破棄するには、このオプションを使用します。
- `-newserver hostname`

廃止する古いサーバーを置換する新しいサーバーを指定します。新しいサーバーを指定すれば、新しいサーバーは置換操作のデフォルトのメディアサーバーになります。
- `-oldserver hostname`

古いサーバーを廃止するための詳細なガイダンスを開始します。マスターサーバーまたは廃止されていないサーバーでコマンドを実行できます。古いサーバーが起動されていて応答可能であることを想定していません。
- `-reason "string"`

このコマンド処理を実行するための理由を示します。入力する理由の文字列は取得され、監査レポートに表示されます。文字列は二重引用符 ("...") で囲みます。また、文字列は 512 文字を超えることができません。それはハイフンの文字 (-) から始まり単一の引用符 (!) を含む場合がありません。

nbdelete

nbdelete – ディスクボリュームからの削除済みフラグメントの削除

概要

```
nbdelete -allvolumes [-snapshots | tar] [-priority number]
nbdelete -list [-snapshots | tar]
nbdelete -dt disk_type -media_id name [-bpdm_media_server name]
[-media_server name] [-storage_server name] [-priority number]
nbdelete -deletion_stats [-U] [-snapshots] -stype server_type [-dp
disk_pool_name [-dv disk_volume_name ]]
nbdelete -deletion_stats [-U] -media_id name
nbdelete -purge_snap_deletion_list -stype server_type -media_id name
-dp disk_pool_name -dv disk_volume_name [-force]
nbdelete -purge_deletion_list -media_id name [-force]
nbdelete -list
```

UNIX システムでは、このコマンドのディレクトリパスは

/usr/opensv/netbackup/bin/admincmd/ です。

Windows システムでは、このコマンドのディレクトリパスは

<install_path>%NetBackup%bin\admincmd% です。

機能説明

nbdelete コマンドを実行すると、コマンドラインで指定されたディスクボリュームからすべての削除済みフラグメントが削除されます。-allvolumes オプションを指定すると、削除済みフラグメントが含まれているすべてのボリュームからそのフラグメントが削除されます。-dt オプション、-media_id オプション、-media_server オプションおよび -storage_server オプションでは、削除済みフラグメントを削除する個々のボリュームを指定します。

オプション

-allvolumes

このオプションを指定すると、EMM データベース内のイメージリストの問い合わせが実行され、削除済みフラグメントが含まれているボリュームのリストが取得されます。それらのボリュームからフラグメントが削除され、その順序で対象のインポート済みのスナップ、インポートされていないスナップ、tar イメージが削除されます。

-allvolumes は、マスターサーバー上で bpdm をコールしてインポート済みスナップショットを削除します。さらに、インポートされていないスナップショットについても

ストレージサーバーを問い合わせますが、bpdm にそれらを削除するように指示しません。

-backup_id *bid*

削除可能なイメージの削除または表示を、指定したバックアップ ID に制限します。

-bpdm_media_server *name*

指定のメディアサーバー上の bpdm を起動します。削除操作で、メディアサーバーによるディスクボリュームのストレージサーバーへのネットワーク接続が大幅に速い場合に使用します。

-bpdm_media_server *name*

指定のメディアサーバー上の bpdm を起動します。削除操作で、メディアサーバーによるディスクボリュームのストレージサーバーへのネットワーク接続が大幅に速い場合に使用します。

-copy_number *cnum*

削除するか、削除可能として表示するイメージを、指定したスナップショットコピー番号に制限します。

-deletion_stats

削除の準備が整った DeletedImageFragment テーブルのディスクフラグメントや、DBM_DeletedSnapReplica テーブルのスナップショットについての情報を表示します。

フラグメントやスナップショットのレコードは、対応するコピーが **NetBackup** イメージカタログで期限切れになると、これらのテーブルに保存されます。このオプションは、nbemm に対する問い合わせを行い、削除待機中の削除可能フラグメント数とその合計 **KB** 数を取得します。

-dp *disk_pool_name*

ディスクプール名を指定します。-dp を -dv ではなく -stype とともに使うと、-bprecover はディスクプールのイメージすべての統計を返します。

-dt *disk_type*

削除済みフラグメントを削除する必要があるディスク形式を指定します。*disk_type* の有効な値を次に示します。

0: すべて

1: BasicDisk

3: SnapVault

6: DiskPool

-dv *disk_volume_name*

ディスクボリューム名を指定します。

- `-force`
ユーザーの検証を要求せずに続行します。
- `-list`
削除対象のインポート済みおよびインポートされていないスナップショットまたは tar イメージを表示します。リストは指定したバックアップ ID と指定したコピー番号を持つイメージに制限することができます。
- `-listname`
このオプションでは、削除済みフラグメントを削除するボリュームのメディア ID を表す名前を指定します。
- `-media_server name`
このオプションでは、削除済みフラグメントを削除するボリュームのメディアサーバーを表す名前を指定します。
- `-media_id`
6 文字のメディア ID (@aaaa0) を指定します。
- `-priority number`
デフォルトのジョブの優先度を上書きするジョブの新しい優先度を指定します。
- `-purge_deletion_list`
ストレージに接続せず、ストレージから何も削除せずにディスクボリュームの削除リストからすべてのエントリを削除します。この関数は、ストレージサーバーが使用停止になったけれども、削除可能なイメージレコードが NetBackup カタログに残っている場合に有用です。
- `-purge_snap_deletion_list`
ストレージに接続せず、ストレージから何も削除せずにディスクボリュームのスナップショット削除リストからすべてのエントリを削除します。この関数は、ストレージサーバーが使用停止になったけれども、削除可能なイメージレコードが NetBackup カタログに残っている場合に有用です。
- `-snapshots`
すべてのボリューム上のすべての対象のインポート済みおよびインポートされていないイメージのスナップショットを削除します。コマンドラインで `-snapshots` を `-deletion_stats` とともに使うと、nbdelete は削除可能なインポートされていないスナップショットを表示します。
- `-storage_server name`
このオプションでは、削除済みフラグメントを削除するボリュームのストレージサーバーを表す名前を指定します。

`-stype server_type`

ディスクストレージサーバーの形式を指定します。`-stype`とともに `-dp` オプションを使用しない場合、コマンドはストレージサーバー形式のイメージすべての統計を返します。

`-tar name`

すべてのボリューム上のすべての **tar** イメージを削除します。

`-U`

各結果のテキストヘッダーを含むユーザーモードのクエリー。デフォルトはカンマ区切り値です。

例

例 1

```
# nbdelete -deletion_stats -U -stype AdvancedDisk -dp ad_dp -dv /dv1
Fragments : 6
KB       : 2134
```

例 2

```
# nbdelete -deletion_stats -U -media_id "@aaaa0"
Fragments : 2
KB       : 64
```

nbdeployutil

nbdeployutil - クライアントと容量に関するマスターサーバー情報を収集して分析する
配置ユーティリティ

概要

```
nbdeployutil --gather [--bpimagelist=options] [--capacity |
--traditional] [--client hostname1, [hostname2, ...] |
--clientlist=filename] [--hoursago=number] [--log=filename]
[--master=hostname] [--nolog] [--output=directory] [--runtimestats]
[-start date [-end date]]
nbdeployutil --report [--capacity | --traditional]
[--day-boundary=time] [dir1 dir2 dir# | --dirsfile=filename |
--parentdir=directory] [--log=filename] [--nolog] [--runtimestats]
nbdeployutil --version
nbdeployutil --debug-inputs dir1 [dir2 dir3]
nbdeployutil --retry dir1 [dir2 dir#]
UNIX システムでは、このコマンドのディレクトリパスは
/usr/opensv/netbackup/bin/admincmd/ です。
Windows システムでは、このコマンドのディレクトリパスは
<install_path>%NetBackup%\bin\admincmd\ です。
```

機能説明

nbdeployutil ユーティリティはマスターサーバーから配置情報を収集し、分析します。このユーティリティは、従来のライセンスとキャパシティライセンスの 2 つの NetBackup ライセンスモデルのうちのいずれかに従って配置分析を実行します。従来のライセンスの配置分析は、クライアントとサーバーの数を数えてライセンス取得済みオプションの数に対してこの情報を比較します。キャパシティライセンスの配置分析は、保護されるソースデータの量を計算します。

コマンドは 2 段階で動作します。nbdeployutil は第 1 段階でデータを集め、第 2 段階でデータを分析します。

ユーティリティは収集操作の間に nbdeployutil-gather-timestamp.log という名前のログファイルを生成します。ユーティリティは分析操作およびレポート生成操作の間に nbdeployutil-report-timestamp.log という名前のログファイルを生成します。デフォルトでは、ログファイルは収集されたデータが存在するディレクトリに作成されます。

操作

- `--debug-inputs`
レポート生成に使用されるファイルを人が判読できるフォーマットに変換します。このように変換されたファイルは、未加工の出力文書より読みやすくなっています。基本 **ASCII** 文字を含んでいるディレクトリのみを指定できます。拡張 **ASCII** 文字が付いているディレクトリは指定できません。
- `--gather`
`report` オプションを指定して分析用のデータを収集します。`capacity` か `traditional` パラメータが使われている場合、その特定のライセンスモデルのデータのみが収集されます。`capacity` も `traditional` も指定されていない場合、`gather` は両方のライセンスモデルのデータを収集します。
- `--report`
`gather` オプションで収集されるデータに基づいてライセンスのレポートを生成します。ユーティリティがレポートに使うことができるディレクトリかディレクトリのリストを指定します。`--report` 操作を使う場合は、`capacity` または `traditional` パラメータを使う必要があります。
- `--retry`
ギャザー操作を再実行し、ギャザー処理中に失敗したホストをギャザーディレクトリの情報から判断し、これらのホストへの再接続を試みます。この操作は、従来のライセンスモデルで、複数のホストについて接続不可能との報告があった場合に役立ちます。
- `--version`
コマンドのバージョンを戻します。このオプションは、コマンドが動作するように設計されている **NetBackup** 製品の最新バージョンを識別するために使われます。バージョン文字列はエンジニアリングバイナリのような特別なバージョンのユーティリティも示します。このオプションはユーティリティが 7.1 より前のマスターサーバーに手動でコピーされた場合に役立ちます。

オプション

- `--bpimagelist`
処理の `gather` 部分の実行中に `bpimagelist` コマンドに特定のオプションを渡すために使います。
- `--capacity`
`gather` または `report` と一緒に使用された場合に、ライセンスモデルを指定します。`capacity` は、**NetBackup** の TB ごとのキャパシティライセンスモデルに従って配置について報告するために使います。

--client または --clientlist

指定済みのクライアントまたはクライアントリストに対してのみ、データやデータレポートを収集します。client を使用する場合は、カンマで複数のクライアントを区切りません。clientlist パラメータを使うためには、filename で別々の行にクライアントをリストします。--client または --clientlist オプションを使うと、ユーティリティでは接続できるにもかかわらず一部のメディアサーバーは接続不可能であるとレポートに表示される場合があります。この問題が概略情報に影響を及ぼすことはありません。

--day-boundary

レポートを作成するためのレポートの時間帯の開始を移動します。デフォルトのレポート時間帯は、午前 0 時から午後 11 時 59 分 59 秒までです。time 値は、hh:mm の形式で 24 時間表記で指定します。たとえば、午前 6 時は 06:00、午後 6 時は 18:00 と指定します。

--dirsfile

レポートを生成するために report パラメータが使うディレクトリのリストを含んでいるファイルです。このパラメータは report パラメータの後にすべてのファイルをリストする場合の代替方法です。report パラメータで使う親ディレクトリをリストするために parentdir パラメータを使うこともできます。

--end

制限された収集期間の日付範囲の終了日を指定します。このオプションは start オプションを指定する場合にのみ使われます。このパラメータの形式は "MM/DD/YYYY hh:mm:ss" です。時間値 hh:mm:ss は 24 時間表記で指定します。すなわち、6:00 AM は 06:00:00、6:00 P.M. は 18:00:00 です。二重引用符によって日付時刻値を囲む必要があります。

--hoursago

イメージの収集時間間隔のデフォルト値を変更するために使われます。値は時間単位で指定されます。--capacity のデフォルト値は 720 時間 (30 日) です。--traditional のデフォルト値は 2160 時間 (90 日) です。

--log

このオプションは、ログ出力を特定のログファイルに強制的に出力するために使います。デフォルトでは、ログ出力は収集されたデータとレポートが保存されるディレクトリ内のログファイルに書き込まれます。

--master

指定したマスターサーバーのキャパシティライセンスデータを収集します。このオプションは --gather を指定した場合にのみ使われます。ローカルホストでリモートサーバーからのデータを収集するには、ホスト名がリモートサーバーのサーバーリストに表示されている必要があります。

このオプションは、リモートで収集されるキャパシティライセンス情報のみをサポートします。リモートで収集される従来のライセンスデータはサポートされません。

--nolog

デバッグログファイルの作成を無効にします。

--output

指定した出力ディレクトリに結果を保存します。基本 ASCII 文字を含んでいるディレクトリのみを指定できます。拡張 ASCII 文字が付いているディレクトリは指定できません。操作が gather の場合、出力ディレクトリは収集されたデータを保持します。report 操作では、レポートとログファイルは、指定済みの入力ディレクトリに収集されたデータと同じ場所に配置される代わりに、出力ディレクトリに置かれます。output オプションが指定されていない場合、出力は次のディレクトリに配置されます。

- UNIX の場合: /usr/opensv/var/global/reports/
YYYYMMDD_hhmmss_masterserver
- Windows の場合: install_path¥
VERITAS¥netbackup¥var¥global¥reports¥YYYYMMDD_hhmmss_masterserver

--parentdir

report パラメータがレポート生成に使用する収集済みライセンスデータが格納された多数のディレクトリが含まれるディレクトリツリーの最上位を指定します。ディレクトリのリストを含んでいるファイルを指定するために dirsfile パラメータを使うこともできます。

--runtimestats

ユーティリティの実行時統計を表示します。この統計はメモリの使用量と CPU の使用率を含んでいます。

UNIX の出力例:

```
stats mem 40.1 M, cpu 27.0% after splitting t/fixture/  
nbdeployutil_sidon/bpimagelist_sidon.out  
stats mem 40.1 M, cpu 28.0% after parsing records from t/fixture/  
nbdeployutil_sidon/tmp/policy_db_arc_tab_2gig_nt_client_totem7.out  
stats mem 40.6 M, cpu 50.0% after calculating for UNKNOWN-1 in  
t/fixture/nbdeployutil_sidon/ stats mem 40.6 M, cpu 51.0% after  
main report loop took 1 sec
```

--start

制限された収集期間の日付範囲の開始日を指定します。このパラメータの形式は "MM/DD/YYYY hh:mm:ss" です。時間値 **hh:mm:ss** は 24 時間表記で指定します。すなわち、**6:00 AM** は 06:00:00、**6:00 P.M.** は 18:00:00 です。日時値には二重引用符が必要なので注意してください。

```
--traditional
gather か report と併用して、ライセンスモデルを指定します。traditional は、
NetBackup の従来のサーバーごとのライセンスモデルに従って配置について報告
するために使います。

--verbose
画面にユーティリティの詳しい進捗情報を出力します。これにより、デバッグログファ
イル内の情報に影響が及ぶことはありません。ログファイルの内容は常に詳細です。
```

前提条件

次に、nbdeployutil ユーティリティの前提条件を示します。

- データを収集するためには、マスターサーバーのデーモンまたはサービスが環境で動作している必要があります。
- **gather** コマンドを実行するマスターサーバーに十分なディスク容量があることを確認します。キャパシティライセンスデータの収集とは、過去 **30 日間**の bpimagelist 出力情報の収集をいいます。出力のサイズは、その期間のカatalog内のイメージ数の関数となります。デフォルトの期間は、移動または短縮できます。分析の時間範囲を短くすると、数値が不正確になったり不完全になります。
- レポートを表示するには **Microsoft Excel** が必要です。このソフトウェアはマスターサーバーにインストールされている必要はありません。

例

例 1 - NetBackup のキャパシティライセンスモデルと従来のライセンスモデルの両方の配置分析レポートを作成します。ディレクトリパスは **Windows** システム用ですが、この例は **UNIX** システムにも適用されます。

```
# nbdeployutil --gather
NetBackup Deployment Utility, version 7.1.0000.0000
Gathering license deployment information...
  Discovered master server marybl2g1
  Output for marybl2g1 at: D:¥Program Files¥VERITAS¥netbackup¥
  var¥global¥reports¥20101029_170534_marybl2g1
Gather DONE
Execution time: 1 min
To create a report for this master server, run the following:
  nbdeployutil.exe --report "D:¥Program Files¥VERITAS¥netbackup¥
  var¥global¥reports¥20101029_170534_marybl2g1"

D:¥>nbdeployutil.exe --report --traditional "D:¥Program Files¥
VERITAS¥netbackup¥var¥global¥reports¥
```

```
20101029_170534_marybl2g1"
NetBackup Deployment Utility, version 7.1.0000.0000
Analyzing license deployment for master marybl2g1 ...
  Report created at: D:\Program Files\VERITAS\netbackup\var\global\
  reports\20101029_170534_marybl2g1\report-20101029_170705.xls
Analysis DONE
Execution time: 27 secs
```

例 2 - 対象を絞った配置容量分析を実行します。このコマンドはデフォルトと異なる時間枠でクライアントのサブセットのデータを収集します。ディレクトリパスは **Windows** システム用ですが、この例は **UNIX** システムにも適用されます。

```
# nbdeployutil.exe --gather --output pickedclient --start "11/01/10
06:00:00" --end "11/02/10 01:00:00" --clients marybl2g1,marybl7g1 /
--verbose NetBackup Deployment Utility, version 7.1.0000.0000
Gathering license deployment information...
run: bpgetconfig
  Discovered master server marybl2g1
run: bpimagelist -M marybl2g1 -d "11/01/10 06:00:00" -e "11/02/10
01:00:00" -l -client marybl2g1
run: bpimagelist -M marybl2g1 -d "11/01/10 06:00:00" -e "11/02/10
01:00:00" -l -client marybl7g1
  Output for marybl2g1 at: pickedclient\20101102_155246_marybl2g1
Gather DONE
Execution time: 4 secs
To create a report for this master server, run the following:
  nbdeployutil.exe --report "pickedclient\20101102_155246_marybl2g1"
```

```
D:\># nbdeployutil.exe --report --capacity pickedclient\
20101102_154010_marybl2g1 --start "11/01/10 06:00:00"
--end "11/02/10 01:00:00" --clients marybl2g1,
marybl7g1 --verbose
NetBackup Deployment Utility, version 7.1.0000.0000
Analyzing license deployment ...
  Master marybl2g1
  Report created at: pickedclient\20101102_154010_marybl2g1\
  report-20101102_155414.xls
Analysis DONE
Execution time: 2 secs
```

関連項目

p.163 の [bpimagelist](#) を参照してください。

nbdevconfig

nbdevconfig - ディスクプールのプレビュー、インポート、作成またはインベントリ

概要

```
nbdevconfig -adddv -stypе server_type [-dp disk_pool_name [-dv
disk_volume_name]] [-M master_server]
nbdevconfig -changedp [-noverbose] -stypе server_lifecycle_type -dp
disk_pool_name [-add_storage_servers storage_server... |
[-del_storage_servers storage_server...] [-hwm high_watermark_percent]
[-lwm low_watermark_percent] [-max_io_streams n][comment comment]
[-setattribute attribute] [-clearattribute attribute] [-M
master_server] [-reason "string"]
nbdevconfig -changestate [-noverbose] -stypе server_type -dp
disk_pool_name [-dv disk_volume_name] -state [UP | DOWN | RESET] [-M
master_server] [-reason "string"]
nbdevconfig -changests [-noverbose] -storage_server storage_server
-stypе server_type [-setattribute attribute] [-clearattribute
attribute] [-reason "string"]
nbdevconfig -createdp [-noverbose] -dp disk_pool_name -stypе
server_type -storage_servers storage_server... [-hwm
high_watermark_percent] [-lwm low_watermark_percent] [-max_io_streams
n] [-comment comment] [-dvlist filename] [-M master_server] [-reason
"string"]
nbdevconfig -createdv -stypе server_type -dv disk_volume_name [-dp
disk_pool_name] [-storage_server storage_server_name] [-M
master_server]
nbdevconfig -creatests [-noverbose] -storage_server
storage_server_name -stypе server_type -media_server media_server
[-st storage_type] [-setattribute attribute] [-reason "string"]
nbdevconfig -deletedp [-noverbose] stypе service_type -dp
disk_pool_name [-M master_server] [-reason "string"]
nbdevconfig -deletedv [-noverbose] -dp disk_pool_name -stypе
server_type -dv disk_volume_name [-M master_server] [-reason "string"]
nbdevconfig -deletests [-noverbose] -storage_server storage_server
-stypе server_type [-reason "string"]
nbdevconfig -getconfig [-l | -U] stypе service_type -storage_server
storage_server [-configlist filename]
```

```
nbdevconfig -getreplicationconfig [-l | -U] stype service_type
-storage_server storage_server [-dv disk_volume_name] [-configlist
filename]
nbdevconfig -help operation
nbdevconfig -importenclr [-noverbose] -enclosure enclosure_name
-storage_servers storage_server... [-hwm high_watermark_percent]
[-lwm low_watermark_percent] [-comment comment] [-M master_server]
nbdevconfig -inventorydp [-preview | -noverbose] -stype server_type
-dp disk_pool_name [-media_server media_server] [-M master_server]
nbdevconfig -mergedps [-noverbose] -stype service_type -primarydp
disk_pool_name_1 -secondarydp disk_pool_name_2 [-M master_server]
[-reason "string"]
nbdevconfig -previewdv -storage_server storage_server -stype
server_type [-media_server media_server] [-dv disk_volume_name] [-dp
disk_pool_name] [-dvlist file_name] [-M master_server] [-replication
source | target | both] [[-include Primary | ReplicationSource |
ReplicationTarget | Snapshot | Independent | Mirror]...] [[-exclude
Primary | ReplicationSource | ReplicationTarget | Snapshot |
Independent | Mirror]...]
nbdevconfig -previewenclr [-l|-U] -enclosure enclosure_name |
-storage_server storage_server... [-M master_server]
nbdevconfig -setconfig -stype service_type -storage_server
storage_server [-configlist ] [-reason "string"]
nbdevconfig -setreplicationconfig [-l | -U] stype server_type
-storage_server storage_server [-configlist filename] [-reason
"string"]
nbdevconfig -updatedp [-noverbose] -stype server_type -dp
disk_pool_name [-M master_server] [-reason "string"]
nbdevconfig -updatedv [-noverbose] -stype server_type [-dp
disk_pool_name] -dv disk_volume_name [-media_server media_server]
[-M master_server]
nbdevconfig -updatests [-noverbose] -storage_server storage_server
-stype server_type -media_server media_server [-reason "string"]
UNIX システムでは、このコマンドのディレクトリパスは
/usr/opensv/netbackup/bin/admincmd/ です。
Windows システムでは、このコマンドのディレクトリパスは
<install_path>%NetBackup%bin¥admincmd¥ です。
```

機能説明

nbdevconfig コマンドは次の操作を実行します。

- `-adddv` は既存のディスクプールに新しいディスクボリュームを追加します。ディスクボリュームは、その属性とフラグが、ディスクプールと同じである必要があります。たとえば、非ミラーディスクプールにミラーボリュームを追加できません。 `nbdevquery -preview` オプションを使用して、複数のボリュームを追加し、ディスクプールに追加されるファイル (`-dvlist`) 上のボリュームと同様に収集できます。
- `-changedp` を指定すると、指定されたディスクプールのプロパティが変更されます。ディスクプールを一意に識別するには、ディスクプール名オプション (`-dp`) およびストレージサーバー形式オプション (`-stype`) を指定します。
- `-changestate` を指定すると、ディスクプールまたはディスクボリュームの状態が変更されます。`-dv` を指定した場合、指定されたディスクプールのディスクボリュームが `-changestate` によって変更されます。指定しない場合は、ディスクプール自体の状態が変更されます。状態の値には、**UP**、**DOWN**、**RESET** を指定できます。
- `-changests` を指定すると、ストレージサーバーが変更されます。
- `-createdp` を指定すると、指定されたディスクボリュームのリストからディスクプールが作成されます。高水準点やコメントなどの追加プロパティを指定できます。256 文字を超えるディスクプール名を使用することはできません。
- `-createdv` を指定すると、検出できないディスクボリュームが **AdvancedDisk** ディスクプールに追加されます。この操作は **AdvancedDisk** ディスクプールにのみ適用されます。256 文字を超えるディスクプール名を使用することはできません。
- `-creatests` を指定すると、ストレージサーバーが作成されます。128 文字を超えるストレージサーバー名を使用することはできません。
- `-deletedp` を指定すると、**NetBackup** デバイスデータベースから、指定されたディスクプールが削除されます。このオプションを実行する前に、すべてのイメージを期限切れにして削除してください。
- `-deletedv` を指定すると、指定したディスクプールから指定したディスクボリュームが削除されます。バックアップのイメージフラグメントはボリュームに残りません。バックアップジョブはボリュームで実行できません。ディスクボリュームおよびディスクプールは停止する必要があります。
- `-deletests` を指定すると、指定したストレージサーバーが削除されます。
- `-getconfig` を指定すると、ディスクプール属性のデフォルトの構成パラメータが取得されます。
- `-getreplicationconfig` を指定すると、ストレージサーバーのレプリケーション構成の詳細が表示されます。
- `-help operation` は使用状況情報が必要な操作 (`-changestate`、`-deletedp` など) を指定します。

- `-importencldr` を指定すると、指定したエンクロージャからディスクプールが作成されます。高水準点やコメントなどの追加プロパティを指定することもできます。
- `-inventorydp` を指定すると、ディスクプール内の新しいストレージまたは変更されたストレージが検出されて、その変更が受け入れられます。ストレージの変更には、新しいボリューム、ボリュームサイズの変更、および新しい LUN が含まれます。ディスクプールへの変更を受け入れずにその詳細を単に表示する場合は、`-preview オプション` を使用します。
- `-mergedps` を指定すると、指定されたプライマリディスクプールとセカンダリディスクプールが結合されます。`disk_pool_name_2` は `disk_pool_name_1` に結合され、`disk_pool_name_1` のみとなります。このオプションを指定すると、指定されたプライマリディスクプールとセカンダリディスクプールが結合されます。
- `-previewdv` を指定すると、インベントリの変更がプレビューされますが、インベントリの更新は実行されません。
- `-previewencldr` を指定すると、ディスクプールで使用中または使用可能なすべてのエンクロージャ (ディスクアレイ) の詳細が表示されます。
- `-getconfig` を指定すると、ディスクプールの構成パラメータが設定されます。
- `-setreplicationconfig` を指定すると、ストレージサーバーのレプリケーション構成の詳細が更新されます。
- `-updatedp` を指定すると、ストレージサーバーからの新しい値で、ディスクプールのレプリケーションのプロパティが更新されます。ストレージ管理者がストレージサーバーのディスクボリュームのレプリケーションのプロパティを変更した場合、このコマンドによって、ストレージの構成を反映するためにディスクプールのプロパティが強制的に更新されます。
- `-updatedv` を指定すると、プール内の 1 つ以上のディスクボリュームのプロパティが更新されます。
- `-updatests` を指定すると、指定したストレージサーバーのプロパティが更新されます。

`vmupdate` コマンドを実行すると、新しいテープがロボットライブラリに追加されているかどうか、またはテープがロボットライブラリから削除されているかどうかを検出されます。同じように、`nbdevconfig` のインベントリおよびプレビューオプションでは、ストレージ管理者がディスクプールの構成を変更したかどうかを検出されます。インベントリでは、新しいボリュームが追加されたかどうか、既存のボリュームのサイズが変更された (領域が追加された) かどうか、またはボリュームが削除されたかどうかを検出されます。インベントリ操作では、新しい領域も受け入れられます。(たとえば、新しいディスクボリュームが存在する NetBackup データベースの更新、または新しい領域からの新しいボリュームの構成が可能です。)

オプション

次に、nbdevconfig の各オプションについて説明します。

`-clearattribute attribute`

リストア操作または複製操作用の指定したストレージサーバーまたはディスクプールから属性を削除します。`-changests` および `-changedp` オプションとのみ併用できます。コマンドラインでは、複数の `-clearattribute` 属性を指定できます。`-changests` と `-changedp` で使う属性の一覧については、`-setattribute` の説明を参照してください。

`-comment comment`

このオプションでは、ディスクプールのコメントを追加します。コメントに空白が含まれる場合、二重引用符 (" ") で囲む必要があります。

`-configlist filename`

構成パラメータの情報をキャプチャし、指定したファイルまたは適切なディスクプールに送信します。

`-del_storage_servers storage_server...`

指定したストレージサーバーが削除されます。

`-dp disk_pool_name`

nbdevconfig でプレビュー、インベントリまたは作成を行うディスクプールの名前を指定します。256 文字を超えるディスクプール名を使用することはできません。

`-dv disk_volume_name`

ディスクボリュームの名前。

`-dvlist filename`

ディスクボリュームのリストを含むファイル名。クラウドのディスクプールとメディアサーバーの重複排除プールにボリュームを 1 つだけ指定します。

`-enclosure enclosure_name`

エンクロージャの一意の名前。`previewenclr` オプションと組み合わせて使用すると、エンクロージャに関する詳細が表示されます。このオプションが正常に実行されるのは、マスターサーバーにベンダーの CLI がインストールされていて、その名前がディスクアレイのホストマップに含まれている場合だけです。

`importenclr` オプションと組み合わせて使用すると、指定されたエンクロージャからディスクプールが作成されます。

`-exclude [Snapshot | Primary | Independent | ReplicationSource | ReplicationTarget | Mirror]`

指定したターゲットの保持の形式 (スナップショット、プライマリ、独立、ミラー、レプリケーションソース、またはレプリケーションターゲット) に対応できないディスクボリュームへのコマンド出力を制限します。

複数のフラグを除外するためには、`-exclude` オプションを複数回 (たとえば、`-exclude primary -exclude ReplicationTarget`) 表示します。

`-hwm high_watermark_percent`

ストレージ (ディスクボリューム) が空きなしと見なされる使用済み容量の割合。新しいジョブをボリュームに割り当てることはできません。ステージングの期限切れ操作が実行されます。

`-include [Snapshot | Primary | Independent | ReplicationSource | ReplicationTarget | Mirror]`

指定したターゲットの保持の形式 (スナップショット、プライマリ、独立、ミラー、レプリケーションソース、またはレプリケーションターゲット) に対応できるディスクボリュームへのコマンド出力を制限します。

複数のフラグを含めるには、修飾子を複数回表示します (たとえば、`-include Snapshot -include ReplicationTarget`)。

`-l`

このオプションを指定すると、簡易出力に設定されます。解析可能な出力が生成され、すべてのフィールドがヘッダーなしで 1 行に表示されます。最初のフィールドには、スクリプト操作に役立つように出力のバージョンが示されます。

`-lwm low_watermark_percent`

使用済み容量の割合。高水準点に到達すると、ステージングおよび期限切れ操作によってディスクプール内の各ボリュームがここで指定した値になるまで解放されます。

`-M master_server`

このオプションでは、マスターサーバー名を指定します。

`-max_io_streams n`

ディスクプール内の各ボリュームで実行可能なジョブ数を、指定した数 *n* に制限します。この数は、バックアップイメージを読み込むジョブとバックアップイメージを書き込むジョブの合計です。制限に達すると、NetBackup は書き込み操作に利用可能な別のボリュームを選択します。利用可能なボリュームがない場合、利用可能になるまで NetBackup はジョブをキューに登録します。最適なストリーム数に影響する要因としては、ディスク速度、CPU の速度、メモリ容量などがあります。

このパラメータは BasicDisk ではサポートされていません。NetBackup は、BasicDisk のストレージユニットのストリーム数は制限しません。

`-media_server media_server`

操作を実行するメディアサーバー。

-noverbose

このオプションを指定すると、「Disk pool **disk_pool_name** was successfully inventoried」などの**成功確認出力を含む、すべての標準出力 (stdout)**メッセージが抑制されます。

-reason "string"

このコマンド処理を実行するための理由を示します。入力する理由の文字列は取得され、監査レポートに表示されます。文字列は二重引用符 ("...") で囲みます。また、文字列は **512** 文字を超えることができません。それはハイフンの文字 (-) から始まり単一の引用符 (!) を含む場合がありません。

-setattribute attribute

リストア操作または複製操作の読み込み側でストレージサーバーまたはデータプールに属性を適用します。-changests および -changedp オプションとのみ併用できます。この属性は、リストアの通信および複製の通信の管理に役立ちます。コマンドラインでは、複数の **-setattribute attribute** を指定できます。

ストレージサーバーで使う属性は次のとおりです。

OpenStorage	: managed as OpenStorage storage server
DiskGroups	: aware of disk pools / enclosures
ActiveDiskGroups	: allow active management of disk groups
ActiveServers	: allow active management of storage svrs
RovingVolumes	: active mount/unmounts for disk volumes
CopyExtents	: allow optimized duplication
AdminUp/Down	: administrative state is UP/DOWN
InternalUp/Down	: internal state is UP/DOWN
SpanImages	: allow images to span disk volumes
BasicStaging	: allow basic image staging
LifeCycle	: allow image life cycle management
CapacityMgmt	: allow capacity management
FragmentImages	: allow image fragmentation
CatalogBackup	: allow catalog backups
Cpr	: allow checkpoint / restart
RandomWrites	: allow random write access
FT-Transfer	: allow access through FT channel
PrefRestore	: preferred use for restores
ReqRestore	: required use for restores
ReqDuplicate	: required use for duplications
CapacityManagedRetention	: allow capacity managed retention
CapacityManagedJobQueuing	: allow capacity managed job queuing
OptimizedImage	: allow virtual image construction
MetaData	: describe client data during backup
QueueOnDown	: queue jobs when server status is down

データプールで使う属性は次のとおりです。

Patchwork	: associated with enclosure
Visible	: visible and managed through UI
OpenStorage	: managed as OpenStorage disk pool
RovingVolumes	: active mount/unmounts for disk volumes
SingleStorageServer	: limited to single storage server
CopyExtents	: allow optimized duplication
AdminUp/Down	: administrative state is UP/DOWN
InternalUp/Down	: internal state is UP/DOWN
SpanImages	: allow images to span disk volumes
BasicStaging	: allow basic image staging
LifeCycle	: allow image life cycle management
CapacityMgmt	: allow capacity management
FragmentImages	: allow image fragmentation
CatalogBackup	: allow catalog backups
Cpr	: allow checkpoint / restart
RandomWrites	: allow random write access
FT-Transfer	: allow access through FT channel
CapacityManagedRetention	: allow capacity managed retention
CapacityManagedJobQueuing	: allow capacity managed job queuing
OptimizedImage	: allow virtual image construction
MetaData	: describe client data during backup
Snapshot	: disk pool holds Snapshots
Primary	: disk pool is capable of Snapshots from sources mounted on a client
ReplicationSource	: disk pool can be a source for Image or Snapshot replication
ReplicationTarget	: disk pool can be a target for Image or Snapshot replication
Mirror	: this replication target disk pool can use a mirrored replication method
Independent	: this replication target can use a non-mirrored replication method

リストア操作と複製操作に関連するその他の属性の説明を次に示します。

- **PrefRestore**. ストレージサーバーはリストア操作の読み込み側で優先されます。複数のストレージサーバーに **PrefRestore** 属性を含めることができます。**PrefRestore** とマーク付けされたストレージサーバーとデータプールは、最初に使用の対象となります。どのサーバーも使用できない場合、マーク付けされていないストレージサーバーが使用の対象となります。
通常の **NetBackup** の負荷分散は、**PrefRestore** とマーク付けされたすべてのストレージサーバー間で実行されます。

- **ReqRestore.** ストレージサーバーはリストア操作の読み込み側で必須です。複数のストレージサーバーに **ReqRestore** 属性を含めることができます。
ReqRestore サーバーが使用できない場合、**NetBackup** は **PrefRestore** サーバーを使用の対象とします。どのサーバーも使用できない場合、ジョブは、**ReqRestore** または **PrefRestore** が利用可能になるまでキューに投入されません。
ReqRestore サーバーを構成し、**PrefRestore** サーバーを構成していない場合、マーク付けされていないストレージサーバーは、リストアジョブの対象になることはありません。ジョブは、**ReqRestore** ストレージサーバーがジョブを実行できるようになるまでキューに投入されます。通常の **NetBackup** のジョブの再試行の規則が適用されます。
通常の **NetBackup** の負荷分散は、**ReqRestore** とマーク付けされたすべてのストレージサーバーに対して実行されます。負荷分散は **ReqRestore** ストレージサーバーと **PrefRestore** ストレージサーバー間では実行されません。
- **ReqDuplicate.** ストレージサーバーは複製操作の読み込み側で必須です。複数のストレージサーバーに **ReqDuplicate** 属性を含めることができます。
ReqDuplicate とマーク付けされたストレージサーバーが存在する場合は、**ReqDuplicate** とマーク付けされたストレージサーバーのみが使用の対象となります。**ReqRestore** サーバーが利用不能な場合、ジョブは **ReqRestore** サーバーがジョブを実行できるまでキューに投入されます。通常の **NetBackup** のジョブの再試行の規則が適用されます。
ReqDuplicate は、合成バックアップ操作のストレージサーバー割り当てにも適用されます。

-st *storage_type*

使用されるストレージ形式。

1: フォーマット済みディスク (デフォルト) または 2: raw ディスク

4: ダイレクト接続 または 8: ネットワーク接続 (デフォルト)

2 つの値を足して指定します。たとえば、**storage_type** に 10 を指定した場合は、ネットワーク接続 (8) された raw ディスク (2) が設定されます。

-state UP | DOWN | RESET

このオプションでは、ディスクプールまたはディスクボリュームの状態を選択します。ディスクプールまたはディスクボリュームを起動するには **UP**、停止するには **DOWN** を指定します。

RESET オプションでは次の処理が実行されます。

- 内部状態を **UP** に設定します (ディスクボリュームとディスクプールの両方)
- **committed_space** を 0 (ゼロ) に設定します (ディスクボリュームのみ)
- 事前コミットされた領域を 0 (ゼロ) に設定します (ディスクボリュームのみ)

`-storage_server storage_server`

単一のストレージサーバー。解釈は、組み合わせる次のオプションによって異なります。

- `previewdv`: `-storage_server` は、指定されたサーバーに接続されているアレイに出力を制限します。すべてのホストが、ディスクボリューム内のすべてのストレージ (LUN) に接続されている必要があります。
- `creatests`: `-storage_server` は、ストレージサーバーのホスト名を示します。128 文字を超えるストレージサーバー名を使用することはできません。
- `setconfig`: `-storage_server` は、構成パラメータを設定したディスクプールを含んでいるストレージサーバーを示します。128 文字を超えるストレージサーバー名を使用することはできません。

`-storage_servers storage_servers...`

ディスクプールを作成するためのストレージサーバー名のリスト。このリストの項目を区切るには、カンマではなく、スペースを使用します。

`-stype server_type`

このオプションでは、ストレージサーバー形式を識別する文字列を指定します。**server_type** の値は次のいずれかから指定できます。

- シマンテック社が提供するストレージ。指定可能な値は、AdvancedDisk と PureDisk です。
- サードパーティのディスクアプライアンス。ベンダーから **server_type** の文字列が提供されます。
- クラウドストレージ。有効な値は `amazon`、`att`、`nirvanix`、`rackspace` などです。これらの値には `_crypt` 接尾辞 (`amazon_crypt` など) を含めることもできます。

ストレージサーバーの形式では大文字と小文字が区別されます。

`-U`

1 行に属性を 1 つずつ、**raw** 出力モード (`-l`) でのリストよりも多くの構成属性を含む、わかりやすい書式付きのリストで構成属性を表示します。「例 1」を参照してください。

例

例 1 - ストレージサーバーが認識するすべてのエンクロージャをプレビューし、読みやすい形式で表示します。

```
# nbdevconfig -previewencldr -U -storage_servers daloa -M daloa
Preview of Enclosure imported_dp as Disk pool
Disk Pool Name      : imported_dp
```

```
Disk Pool Id      : imported_dp
Disk Type         : AdvancedDisk
Availability      : Free
Raw Size (GB)    : 1.20
Usable Size (GB) : 1.20
Num Volumes      : 3
Storage Server   : daloa.min.veritas.com
```

例 2 - ディスクプールを削除します。最初にディスクグループのすべてのイメージを期限切れにします。

```
# nbdevconfig -deletedp -dp Disk-Pool-2
Disk pool Disk-Pool-2 has been deleted successfully
```

例 3 - ディスクプールを **DOWN** とマークします。

```
# nbdevconfig -changestate -stype PureDisk -dp diskpool_alpha
-state DOWN
```

例 4 - ディスクボリュームを **UP** とマークします。

```
# nbdevconfig -changestate -stype AdvancedDisk -dp diskpool_alpha -dv
alpha_voll -state UP
```

例 5 - ディスクグループのインベントリを実行します。

```
# nbdevconfig -inventorydp -preview -stype AdvancedDisk -dp
Disk-Pool-2
Old Raw Size (GB): 97.85
New Raw Size (GB): 103.45

Old Formatted Size (GB): 97.80
New Formatted Size (GB): 103.40

Old Host List: willow,Apple,dunamo
New Host List: Dellco,carrot,Apple,dynamo

Affected Storage Units
-----
SSO-STU-7 - willow [...] would be removed from media server list
SSO-STU-9 - willow [...] would be removed from media server list, ¥
switched to "any available" media server list.

Affected Storage Units
-----
SSO-STU-7 -willow [...] was removed from media server list
```

```
SSO-STU-9 -willow [...] was removed from media server list,      ¥  
switched to "any available" media server list.
```

関連項目

p.533 の [nbdevquery](#) を参照してください。

p.810 の [vmupdate](#) を参照してください。

nbdevquery

nbdevquery – NetBackup ディスクメディアの状態の表示

概要

```
nbdevquery -listconfig [-l | -U] -stype server_type -storage_server
storage_server [-EMM emm_server]
nbdevquery -listdp | -listmounts [-l | -U | -D] [-stype server_type]
[-dp disk_pool_name] [-M master_server] [-EMM emm_server]
nbdevquery -listdv [-l | -U | -D] -stype server_type [-dp
disk_pool_name [-dvlist file]] [-M master_server] [-EMM emm_server]
nbdevquery -listglobals
nbdevquery -listmediaid id [id...] [ [-l | -U] [-EMM emm_server]
nbdevquery -listmounts [-l | -U] [-stype server_type] [-dp
disk_pool_name] [-M master_server] [-EMM emm_server]
nbdevquery -listreptargets -stunit label[-U] [[-include Primary |
ReplicationSource | Mirror]...] [[-exclude Primary | ReplicationSource
| Mirror]...]
nbdevquery -liststs [-l | -U] [-stype server_type] [-storage_server
storage_server] [-EMM emm_server]
UNIX システムでは、このコマンドのディレクトリパスは
/usr/opensv/netbackup/bin/admincmd/ です。
Windows システムでは、このコマンドのディレクトリパスは
<install_path>%NetBackup%\bin\admincmd\ です。
```

機能説明

nbdevquery コマンドラインユーティリティは、テープ用の bpmedialist のディスク版です。次に、nbdevquery によって実行される操作を示します。

- -listdp を指定すると、システム内のすべてのディスクプールが表示されます。
- -liststs を指定すると、システム内のすべてのストレージサーバーが表示されます。
- -listdv を指定すると、インポートされたディスクプールのディスクボリュームの状態が表示されます。ボリュームがオンラインまたはオフラインのどちらであるか、およびボリュームに対する現在のリーダー（またはライター）の数などが表示されます。
-D オプションを指定して -listdv コマンドを使用したとき、nbdevquery は大きい一連のデータを戻します。これには NetBackup がディスクプール内の利用可能な空き領域を判断するために使う次の値が含まれます。
total_capacity : xxxxxxxx -- ファイルシステムから導出されるディスクの合計サイズ。

`free_space : xxxxxxxx` -- ファイルシステムから導出されるディスクの空き領域の量。

`potential_free_space : xxxxxxxx` -- ストレージライフサイクルポリシーの一部として複製され、期限切れの対象であるディスク上のすべてのフラグメントの合計サイズ。`potential_free_space` の値は複製および有効期限セッションの後で計算されます。この情報は、管理対象容量の保持期間がストレージの宛先に使われるときにのみ適用できます。

`committed_space : xxxxxxxx` -- 進行中のすべてのバックアップに基づいて、ディスクに書き込まれると **NetBackup** が推定するデータの量。

`precommitted_space : xxxxxxxx` -- `committed_space` のヘルパー値。この値はバックアップジョブが続行し、`total_capacity` と `free_space` の情報が更新されると減ります。

NetBackup は `free_space`、`potential_free_space` と `committed_space` を使って、どの位の領域がディスクで利用可能であるかを判断します。次の式を使用します。

利用可能な領域 = `free_space` + `potential_free_space` - `committed_space`

- `-listmediaid` を指定すると、ディスクメディア ID が指定されているすべてのディスクボリュームが表示されます。
- `-listmounts` を指定すると、ディスクプールのディスクのマウントポイントが表示されます。
- `-listconfig` を指定すると、ストレージサーバーの構成の詳細が表示されます。
- `-listglobals` を指定すると、グローバルディスク属性が表示されます。
- `-listreptargets` を指定すると、ソースとして指定したストレージユニットまたはストレージユニットグループの有効なレプリケーションターゲットとなるストレージユニットまたはグループが表示されます。ストレージライフサイクルポリシーのレプリケーション操作のターゲットとして設定するストレージユニットのセットを表示できます。

オプション

-D

このオプションを指定すると、デバッグデータをダンプする表示形式が設定されます。このオプションでは、情報がダンプされ、後続処理は実行されません。出力形式と、表示されるフィールドは通知なしに変更されることがあります。

-dp *disk_pool_name*

このオプションでは、問い合わせるディスクプールの名前を指定します。このプールは、このストレージユニットのデータストレージ領域です。

-dv *disk_volume*

このオプションを指定すると、指定されたディスクボリュームの状態だけが表示されます。**BasicDisk** の場合、入力値はパスです。その他すべての場合、入力値はボリューム名です。

- dvlist *filename*
ボリューム情報が含まれているファイルを指定します。
- include | -exclude [Primary | ReplicationSource | Mirror]...
複数の選択肢がある場合はターゲットを指定するかフィルタで除外します。
- l
このオプションを指定すると、表示形式が簡易出力に設定されます。このオプションでは、解析可能な出力が生成され、すべてのフィールドがヘッダーなしで 1 行に表示されます。最初のフィールドには、スクリプト操作に役立つように出力のバージョンが示されます。日時は UNIX の詳細形式で表示され、状態値は整数形式で表示されます。
- listconfig
ストレージサーバーの構成の詳細が表示されます。
- listdp
このオプションを指定すると、NetBackup データベースにインポートされたすべてのディスクプールが表示されます。OpenStorage ディスクの場合、-listdp を指定すると、構成済みのすべてのディスクプールが表示されます。
- listdv
インポートされたディスクプールのすべてのディスクボリュームの状態を表示し、NetBackup データベース内のすべてのディスクボリュームのリストを返します。「例 3」を参照してください。
- listglobals
NetBackup Disk Service Manager のグローバルディスク属性が表示されます。SPR が有効である場合は、SCSI Persistent RESERVE は 1 に設定されます。LUN マスキングが有効になっている場合は、1 ではなくゼロ (0) が出力されます。
- listmediaid *id*...
このオプションを指定すると、ディスクメディア ID が指定されているすべてのディスクボリュームが表示されます。
- listmounts
ディスクプールのディスクマウントポイントが表示されます。
- listreptargets
ソースのストレージユニットまたはストレージユニットグループに対して有効なレプリケーションターゲットのストレージユニットまたはグループが表示されます。
- liststs
このオプションを指定すると、ストレージをホストするすべてのサーバーが表示されます。これには、シマンテック社が提供する PureDisk などのストレージ、サードパーティのアプライアンス、クラウドのストレージ (amazon や nirvanix など) が含まれません。

`-storage_server storage_server`

このオプションでは、ストレージサーバーのホスト名を指定します。ストレージサーバーの作成時に割り当てられた名前です。

`-stype server_type`

このオプションでは、ストレージサーバー形式を識別する文字列を指定します。**server_type** の値は次のいずれかから指定できます。

- シマンテック社が提供するストレージ。指定可能な値は、AdvancedDisk と PureDisk です。
- サードパーティのディスクアプライアンス。ベンダーから **server_type** の文字列が提供されます。
- クラウドストレージ。有効な値は amazon、att、nirvanix、rackspace などです。これらの値には `_crypt` 接尾辞 (amazon_crypt など) を含むこともできます。

ストレージサーバーの形式では大文字と小文字が区別されます。

`-U`

このオプションを指定すると、指定されたディスクプール、ストレージサーバーまたはディスクストレージに関する構成情報が表示されます (例 1 を参照)。変更できない項目もあります。

例

例 1 - システムのストレージをホストするすべてのサーバーについての構成情報がユーザー形式で表示されます。

```
# nbdevquery -liststgs -stype Network_NTAP -U
Storage Server      : plinko
Storage Server Type : Network_NTAP
Storage Type       : Formatted Disk, Direct Attached
State              : UP
Flag               : OpenStorage
Flag               : AdminUp
Flag               : InternalUp
Flag               : LifeCycle
Flag               : CapacityMgmt
Flag               : FragmentImages
Flag               : Cpr
Flag               : RandomWrites
Flag               : FT-Transfer
Flag               : PrimaryEnabled
```



```
Flag : SnapshotEnabled
Flag : MirrorEnabled
```

例 2 - システム内のすべてのディスクプールが表示されます。

```
# nbdevquery -stype PureDisk -dp disk-pool-1
V7.5 Disk-Pool-1 0 97456 97480 10 80 90 server1,server2,server3
```

例 3 - djs_bp のすべてのディスクプール情報が表示されます。ボリューム SnapVaultB はレプリケーションソースであり、ターゲットのパラメータ ntapdfm:SnapMirrorA1 が指定されているため、レプリケーションの有効なソースボリュームです。

```
nbdevquery -listdp -stype DjsArray -U
Disk Pool Name : djs_bp
Disk Type : DjsArray
Disk Volume Name : SnapVaultB
Disk Media ID : @aaaa
Total Capacity (GB) : 68.21
Free Space (GB) : 55.93
Use% : 88
Status : UP
Flag : ReadOnWrite
Flag : AdminUp
Flag : InternalUp
Flag : ReplicationSource
Flag : ReplicationTarget
Flag : Primary
Flag : Snapshot
Num Repl Sources : 1
Num Repl Targets : 1
Replication Source : ntapdfm:@aaaa@:PrimarySnapshot
Replication Target : ntapdfm:SnapMirrorA1
```

例 4 - PureDisk が使うディスクプール sim_dp1 のディスクドライブのダンプを実行します。

```
# nbdevquery -listdp -dp sim_dp1 -stype PureDisk -D
Disk Drive Dump
name : <sim_dg1>
id : <sim_dg1>
server_type : <PureDisk>
master_server : <daloa.min.veritas.com>
access_media_server : <>
disk_storage_type : 6
total_capacity : 1286602752
```

```
used_space          : 0
sts_state           : 0
availability        : 2
connectivity        : 0
high_watermark      : 98
low_watermark       : 80
num_diskvolumes     : 3
num_disks           : 0

num_stservers       : 2
system_tag          : <Imported from STS>
user_tag            : <>
Storage Server [0]
name : <daloa.min.veritas.com>
id   : <>
server_type : <PureDisk>
storage_type : 6
access_media_serv.: <>
Storage Server [1]
name : <blackjack.min.veritas.com>
id   : <>
server_type : <PureDisk>
storage_type : 6
access_media_serv.: <>
```

関連項目

p.548 の [nbemmcmd](#) を参照してください。

p.521 の [nbdevconfig](#) を参照してください。

nbdiscover

nbdiscover - バックアップ用 VMware 仮想マシンを自動選択するための問い合わせ規則をテストします

概要

```
nbdiscover -noxmloutput path | -policy policy_name [-sched  
policy_schedule_type] [-includedonly | -excludedonly] [-noreason]  
[-escapechar x] [-quotechar x]
```

```
nbdiscover -noxmloutput query [-includedonly | -excludedonly]  
[-noreason] [-escapechar x] [-quotechar x]
```

UNIX システムでは、このコマンドのディレクトリパスは /usr/opensv/netbackup/bin/ です。

Windows システムでは、このコマンドのディレクトリパスは
<install_path>%NetBackup%bin% です。

機能説明

nbdiscover コマンドは VMware のポリシーのテストクエリーボタンに類似しています。指定された問い合わせ規則に基づいて NetBackup が選択する仮想マシンを返します。問い合わせを含んでいるポリシーの名前、または問い合わせ自体を指定できます。
-noxmloutput オプションは、ユーザーフレンドリな出力に必要です (デフォルトの XML 出力は一般使用ではサポートされていません)。

nbdiscover コマンドは、検出ホストまたはバックアップホストのいずれかで実行する必要があります。

ポリシーのクエリービルダーから規則を作成し、テストする方法については、『Symantec NetBackup for VMware 管理者ガイド』を参照してください。

オプション

-escapechar x

-noxmloutput オプションを使うときに nbdiscover 出力で使用される代替エスケープ文字の ASCII 10 進値を指定します。デフォルトのエスケープ文字は円記号 (¥) または -escapechar 92 です。

-excludedonly x

問い合わせの規則と一致しない、除外された仮想マシンのみを返します。

-includedonly x

問い合わせの規則に一致する、含まれる仮想マシンのみを返します。

-noreason

問い合わせにより仮想マシンが除外された理由または問い合わせに失敗した理由の説明を、結果から省略します。問い合わせが仮想マシンを除外できず、かつ、仮想マシンがバックアップのために選択できない場合、仮想マシンは問い合わせに失敗します。

-noxmloutput

1 行に 1 台の仮想マシンを表示します。出力で、最初の列のプラス記号 (+) は仮想マシンが問い合わせの規則に一致することを示します。マイナス記号 (-) は仮想マシンが問い合わせの規則に一致しないことを示します。

-policy *policy_name*

問い合わせを含んでいるポリシーを指定します。nbdiscover はその問い合わせ、およびプライマリ VM 識別子 (VM ホスト名または VM 表示名) のような他のポリシー属性に基づいて仮想マシンをフィルタ処理します。

query

ポリシーなしで問い合わせを指定します。問い合わせは手動で作成し、二重引用符で囲む必要があります。たとえば、

```
"vmware:/?filter=Displayname Contains `vm1`"
```

-quotechar *x*

-noxmloutput オプションを使うときに nbdiscover 出力で使用される代替引用文字の ASCII 10 進値を指定します。デフォルトの引用文字は二重引用符 (") または -quotechar 34 です。

-sched *policy_schedule_type*

-policy *policy_name* オプションを使うときのポリシーのスケジュール形式を指定します。

例

例 1 - ポリシー `pol1` の問い合わせと一致する仮想マシン、または一致しない仮想マシンをリスト表示します。問い合わせに失敗するか、または問い合わせが除外した仮想マシンの説明をリスト表示しないでください。

```
# nbdiscover -noxmloutput -policy pol1 -noreason
+ "grayvm3"
+ "grayvm5"
+ "grayvm7"
- "vladvml"
- "vladvm2"
- "bodvm23"
- "bittle4"
```

例 2 - 「vm」を含んでいる表示名がある仮想マシンをリスト表示します。表示名に「vm」がない仮想マシンはリスト表示しません:

```
# nbdiscover -noxmloutput -includedonly "vmware:/?filter=Displayname /  
Contains `vm`"  
grayvm3  
grayvm5  
grayvm7  
vladvml  
vladvm2  
bodvm23
```

例 3 - 電源が入っているかどうかで仮想マシンをリスト表示します。

```
# nbdiscover -noxmloutput "vmware:/?filter=Powerstate Equal poweredOn"  
+ "grayvm3"  
+ "grayvm5"  
+ "grayvm7"  
- "vladvml" "VM excluded by discovery filter, display name=[vladvml],  
server=esx1.acme.com]."  
+ "vladvm2"  
+ "bodvm23"  
+ "bittle4"
```

例 4 - 電源が入っているかどうか、かつ、表示名に「7」が含まれるかどうかで仮想マシンをリスト表示します。問い合わせに失敗するか、または問い合わせが除外した仮想マシンの説明をリスト表示しないでください。

```
# nbdiscover -noxmloutput "vmware:/?filter=Powerstate Equal poweredOn /  
AND Displayname Contains '7'" -noreason  
- "grayvm3"  
- "grayvm5"  
+ "grayvm7"  
- "vladvml"  
- "vladvm2"  
- "bodvm23"  
- "bittle4"
```

例 5 - vCloud vApp の名前に「test」を含むすべての VM バックアップを検索します。この例では vCloud ディレクタの仮想マシンを検索するために問い合わせを使います。nbdiscover はマスターサーバーで実行する必要があります。

```
# nbdiscover -noxmloutput "vmsearch://;reqType=search?filter= vCDvApp  
Contains 'test'"  
+ "demovm%20(8c879791-2917-4428-8213-bea7ec727717)"
```

```
+ "small_vm%20(61e85579-7246-411f-b2f9-9fb570546755) "  
+ "small_vm_percent_%25%20(61e85579-7246-411f-b2f9-9fb570546755) "
```

例6 -バックアップされた vCloud 環境の階層を表示します。このコマンドは XML で出力されます。この例では vCloud ディレクタの仮想マシンを検索するために問い合わせを使います。nbdiscover はマスターサーバーで実行する必要があります。

```
# nbdiscover "vmsearch:/:reqType=browse;viewType=vcloud"  
<?xml version="1.0" encoding="utf-8"?>  
<Start Iteration="vmsearch:/:reqType=browse;viewType=vcloud">  
<VCDSERVER>  
  <NBU>  
    <NAME>hypervml.acme.com</NAME>  
  </NBU>  
<VCDORG>  
  <NBU>  
    <NAME>Test_vCloud</NAME>  
  </NBU>  
<VCDORGVDC>  
  <NBU>  
    <NAME>TestOrg</NAME>  
  </NBU>  
<VCDVAPP>  
  <NBU>  
    <NAME>TestvApp</NAME>  
  </NBU>  
</VCDVAPP>  
</VCDORGVDC>  
</VCDORG>  
</VCDSERVER>  
<StatusMsg NBUStatus="0" Severity="0"></StatusMsg>  
</Start>
```

nbdna

nbdna – NetBackup ドメインとその構成を分析するユーティリティの実行

概要

```
nbdna [-phase=<0|1|2>] [-verbose] [-sfo] [-server | -lookup]
[-odir=override_output_directory] [-tmp=override_tmp_directory]
[-dump] [-f=hostfile [-listonly [-discover]]] [-version]
[-imfile=bpimmagelist.out]
```

UNIX システムでは、このコマンドのディレクトリパスは
/usr/opensv/netbackup/bin/support です。

Windows システムでは、このコマンドへのディレクトリパスは
<install_path>%NetBackup%bin%support です。

機能説明

NetBackup Domain Network Analyzer (nbdna) コマンドユーティリティはネットワーク上の問題、パフォーマンス、動作に対して NetBackup ドメインとその構成を分析します。ホスト名の参照と、NetBackup ホストと NetBackup ドメイン内のその役割の関連を解決します。

nbdna によって、次の処理が実行されます。

- NetBackup ドメインを検出し、マップします
- 構成を問い合わせることによってホスト名のメンバーシップを抽出します
- ホスト名の参照とそれらのホスト名とのソケット接続を評価して、ドメインの構成に従ってネットワーク関係の状態を検証します

nbdna は NetBackup マスターサーバー、メディアサーバー、またはクライアントで実行できます。それは生成されたレポートをすべて含む圧縮アーカイブを作成し、識別します。必要に応じてシマンテック社に圧縮アーカイブを戻すことができます。

このコマンドを実行するには、管理者権限が必要です。

メモ: NBAC 環境では、nbdna コマンドを実行する前に認証します。

オプション

-discover

-f オプションが指定するホストリストのホストに対して NetBackup 環境のホスト検出を実行します。

メモ: このオプションは、`-f` で指定するホストリストのホストのみを検出し、NetBackup 環境のその他のホストは検出しません

`-discover` は、`-f` オプションと `-listonly` オプションと組み合わせて使う必要があります。

`-dump`

テストを実行しませんが、指定ファイルに対して、サーバー、クライアント、参照のテストリストをダンプします。

`-f=hostlist`

指定した ASCII テキストファイルからホスト名を読み込み、テストリストに追加します。テキストファイルの形式は次のとおりです。

```
SERVER hostname
CLIENT hostname-b
LOOKUP hostname-c
```

SERVER で始まる行がサーバーのテストリストにインポートされます。

CLIENT で始まる行はクライアントのテストリストにインポートされます。

LOOKUP で始まる行は参照のみのテストリストにインポートされます。

`-imfile=bpimage.out`

`bpimagelist -l` コマンドまたは `bpimmedia -l` コマンドからの出力を含んでいるファイルからホスト名を読み込みます。

`-listonly`

`-f` オプションが指定するホストリストのホストに対してのみネットワークテストを実行します。他のホスト名の NetBackup 環境は検索されません。

メモ: このオプションはこれらのホストの場所を検出せず、他のホストの NetBackup 構成も分析しません。リストにあるホストを検出するには、`-discover` オプションを含めます。

`-lookup`

名前の参照のテストのみを実行します。このオプションを `-server` オプションと同時に実行することはできません。

`-odir=override_output_directory`

指定されたディレクトリで出力ディレクトリを上書きします。

デフォルトのディレクトリは次のとおりです。

■ UNIX の場合:

```
/usr/opensv/netbackup/bin/support/output/nbdna/YYYYMMDD.HHMMSS/
```


- **Windows** の場合:

```
<install_path>%NetBackup%\bin%\support%\output%\nbdna%YYYYMMDD.HHMMSS
```

NetBackup のパスを見つけることができなければ、デフォルトは `nbdna` バイナリと同じディレクトリに変更されます。

`-phase=pn`

実行するテストフェーズの番号 (*pn*) を指定します。

pn で指定可能な値は、次のとおりです。

- **0** - フェーズ **0** は名前の参照のテストとソケット接続テストを実行します。フェーズ **0** がデフォルトモードです。
- **1** - フェーズ **1** のテストには、フェーズ **0** のテストに加えてサーバーリストに対する基本的な **NetBackup** サービステストが含まれています。
- **2** - フェーズ **2** のテストには、フェーズ **0** のテストに加えてサーバーリストとクライアントリストに対する基本的な **NetBackup** サービステストが含まれています。

`-server`

サーバーテストのみを実行します。このオプションを `-lookup` オプションと同時に実行することはできません。

`-sfo`

スクリプトの簡易なレポートを生成します。

`-tmp=override_tmp_directory`

一時ディレクトリを上書きします。デフォルトの状態はシステムの一時ディレクトリです。

`-verbose`

標準出力の進捗を表示します (画面上)。このスイッチに関係なく同じ情報が進捗トレースログにキャプチャされます。詳細な出力をファイルにキャプチャする必要はありません。

`-version`

バージョン情報を表示してからユーティリティを終了します。

ファイル

`nbdna` は最大 **5** つのファイルを作成します。

```
ANONYMOUS.NBDNA.YYYYMMDD.HHMMSS.dna
hostname.NBDNA.YYYYMMDD.HHMMSS.zip archive file
hostname.NBDNA.failure-report.YYYYMMDD.HHMMSS.txt
hostname.NBDNA.failure-report.YYYYMMDD.HHMMSS.html
hostname.NBDNA.failure-errorlog.YYYYMMDD.HHMMSS.log.
```

リストの最後の **3** つのファイルはエラーがあるときのみ生成されます。

例

例 1 - UNIX のこの例では、nbdna は代替ディレクトリに書き込まれるレポートファイルで実行されます。

```
# nbdna -odir=/user/home/winter/
```

例 2 - 詳細な出力で nbdna を実行します。ホスト名のリストファイル (hostnames.txt) がインポートされ、それらのホストのみが評価されます。

```
# nbdna -verbose -f=hostnames.txt -listonly
```

ホスト名ファイルの形式は次のとおりです:

```
SERVER dellpe2400  
CLIENT 10.12.249.20  
LOOKUP 10.82.108.136
```

関連項目

p.672 の [nbsu](#) を参照してください。

p.486 の [nbcplogs](#) を参照してください。

nbemm

nbemm – NetBackup EMM デーモンの実行によるボリューム、ボリュームプール、バーコード規則およびデバイスの管理

概要

nbemm [-console] [-terminate]

UNIX システムでは、このコマンドのディレクトリパスは /usr/opensv/netbackup/bin/ です。

Windows システムでは、このコマンドのディレクトリパスは <install_path>%NetBackup%bin% です。

機能説明

Enterprise Media Manager デーモンまたはサービスは、ボリューム、ボリュームプール、バーコード規則およびデバイスを管理します。このデーモンは、メディア、ドライブ、ドライブパスおよびストレージユニットの選択を実行します。

メモ: ボリュームの構成、デバイスの構成、ストレージユニットの構成およびテープのマウント動作に関する変更を行うには、nbemm デーモンまたはサービスが動作中である必要があります。

nbemm を起動するには、nbemm と入力します。

nbemm を停止するには、nbemm -terminate と入力します。

オプション

-console

このオプションを指定すると、コンソールモードで NetBackup を起動できます。

-terminate

このオプションを指定すると、nbemm バイナリを停止できます。

関連項目

p.548 の [nbemmcmd](#) を参照してください。

nbemmcmd

nbemmcmd – EMM データベースの情報の更新および表示

概要

```
nbemmcmd [-addhost] [-changesetting] [-deletehost] [-errorsdb]
[-getemmserver] [-help] [-listhosts] [-listmedia] [-listsettings]
[-machinealias] [-renamehost] [-servercontrol] [-setemmserver]
[-updatehost]
nbemmcmd -addhost [-activenodename string] [-brief] [-clustername
string] [-displayname string] [-machinedescription string]
-machinename string -machinetype api | app_cluster | cluster | master
| media | ndmp [-masterserver string] [-netbackupversion
level [major_level [minor_level]]] [-operatingsystem hpux | linux |
rs6000 | solaris | windows] [-scanability unsigned_integer]
nbemmcmd -changesetting -machinename string
[-ALLOW_MULTIPLE_RETENTIONS_PER_MEDIA 0|1|no|yes] [-AUDIT DISABLED
| ENABLED] [-AUDIT_RETENTION_PERIOD number_of_days]
[-COMMON_SERVER_FOR_DUP default | preferred | required]
[-DISABLE_AUTOMATIC_HOST_NAME_ADD 0|1|no|yes]
[-DISABLE_BACKUPS_SPANNING_DISK 0|1|no|yes]
[-DISABLE_DISK_STU_JOB_THROTTLING 0|1|no|yes]
[-DISABLE_STANDALONE_DRIVE_EXTENSIONS 0|1|no|yes]
[-DISALLOW_NONNDMP_ON_NDMP_DRIVE 0|1|no|yes] [-DO_NOT_EJECT_STANDALONE
0|1|no|yes] [-DONT_USE_SLAVE 0|1|no|yes] [-DRIVE_ERROR_THRESHOLD
unsigned_integer] [-DRIVE_NAME_SEED 0|1|no|yes] [-emmsname string]
[-emmsport unsigned_integer] [-MAX_REALLOC_TRIES unsigned_integer]
[-MEDIA_ERROR_THRESHOLD unsigned_integer] [-MEDIA_REQUEST_DELAY
unsigned_integer] [-MPMS_DISABLE_EVENTS 0|1|no|yes]
[-MPMS_DISABLE_RANK unsigned_integer] [-MUST_USE_LOCAL_DRIVE
0|1|no|yes] [-NBUFS_DESTINATION_DSU string] [-NBUFS_DUP_TSU_TO_DSU
0|1|no|yes] [-NBUFS_RETENTION_LEVEL unsigned_integer]
[-NON_ROBOTIC_MEDIA_ID_PREFIX string] [-PREFER_NDMP_PATH_FOR_RESTORE
0|1|no|yes] [-RETURN_UNASSIGNED_MEDIA_TO_SCRATCH_POOL 0|1|no|yes]
[-SCSI_PROTECTION NONE | SPR | SR] [-SHAREDISK_MOUNT_POINT string]
[-TIME_WINDOW unsigned_integer] [-UNRESTRICTED_SHARING 0|1|no|yes]
[-USE_POTENTIAL_FREESPACE_FOR_ALLOCATION 0|1|no|yes]
[-VALIDATE_HOST_NAME 0|1|no|yes] [-VAULT_CLEAR_MEDIA_DESC 0|1|no|yes]
```

```
nbemmcmd -deletehost [-brief] -machinename string -machinetype api
| app_cluster | cluster | master | media | ndmp | master | media |
ndmp-mediaid string
nbemmcmd -errorsdb [-brief] [-prune [-days no_of_days] [-hours
no_of_hours] [-minutes no_of_minutes]]
nbemmcmd -getemmserver [-masterserver string] [-timeout
unsigned_integer]
nbemmcmd -listhosts [-brief] [-verbose] [-parsable]
[-list_snap_vault_filers -machinename string]
[-list_snap_vault_media_servers -masterserver string] [-list_sts_hosts
-machinename string] [-list_sts_media_servers -masterserver string]
[-list_app_clusters -masterserver string] [-servers_in_emm_cluster
-clustername string] [-servers_in_app_cluster -clustername string]
[-nbservers [-masterserver string]] [-display_server -machinename
string -machinetype string] [-netbackupversion
level[.major_level[minor_level]]]
nbemmcmd -listmedia [-allrecords] [-mediaid string] [-mediatype
unsigned_integer] [-poolname string] [-robotnumber unsigned integer]
[-vaultcontainer string]
nbemmcmd -listsettings -machinename string [-brief] [-emmname string]
[-emmport unsigned_integer]
nbemmcmd -machinealias [-addalias -alias string -machinename string]
[-deletealias -alias string] [-deleteallaliases -machinename string]
[-getaliases -machinename string] -machinetype api | app_cluster |
cluster | master | media | ndmp
nbemmcmd -releasecache -machinename string [-brief] [-emmname string]
[-emmport unsigned_integer]
nbemmcmd -renamehost [-brief] -machinename string -machinetype api
| app_cluster | cluster | master | media | ndmp -newmachinename string
nbemmcmd -servercontrol [-brief] [-resume] [-suspend]
nbemmcmd -setemmserver [-brief] -emmservername string [-masterserver
string] -newemmservername string [-timeout unsigned_integer]
nbemmcmd -updatehost [-activenodename string]
[-add_server_to_app_cluster] [-brief] [-clustername string]
[-delete_server_from_app_cluster] [-displayname string]
[-machinedescription string] -machinename string [-machinestateop
clr_admin_pause | clr_admin_pause_and_set_active | clr_disk_active
| clr_ltid_restart | clr_master_server_connectivity | clr_tape_active
| reset_all | set_admin_pause | set_disk_active |
set_master_server_connectivity | set_tape_active] [-machinetype pi
| app_cluster | cluster | master | media | ndmp] [-masterserver
```

```
string] [-netbackupversion level[.major_level[minor_level]]]  
[-operatingsystem hpux | linux | rs6000 | solaris | windows]
```

UNIX システムでは、このコマンドのディレクトリパスは

/usr/opensv/netbackup/bin/admincmd/ です。

Windows システムでは、このコマンドのディレクトリパスは

<install_path>%NetBackup%\bin\admincmd\ です。

機能説明

nbemmcmd コマンドを実行すると、特定の EMM データベース情報を更新できます。また、ホストエントリ、構成オプションなど、EMM データベースの様々な項目を管理することもできます。

オプション

次に示すコマンドには、EMM データベースを管理できる様々なオプションが存在します。オプションの使用方法をより良く理解できるようにするため、オプション名は意図的に長く記述しています。オプション名の簡略化のために、オプションを一意に識別できるコマンドの最初の 1 文字または数文字だけを入力する必要があります。たとえば、`-changesetting` オプションを使用する場合は、`-c` と入力します。これは、`c` という文字で始まるコマンドオプションがこれ以外に存在しないためです。

`-addhost`

このオプションを指定すると、指定したホストが EMM データベースに追加されます。このコマンドオプションでは、次のエントリを調整できます。

`-activenodename string`

クラスタ内のアクティブノードを指定します。

`-brief`

コマンドの出力を詳細ではない形式に設定します。

`-clustername string`

このマシンが属するクラスタを指定します。

`-displayname string`

マシンの表示名を設定します。

`-machinedescription string`

使用するマシンまたはシステムについて説明します。

`-machinename string`

更新するマシンの名前を指定します。

`-machinetype api | app_cluster | cluster | master | media | ndmp`

マシンをどのように使用するかを定義します。

`-masterserver string`

特定のドメイン内のホストマスターサーバーを定義します。

`-netbackupversion level[.major_level[minor_level]]`

追加したホストで実行するバージョンを指定します。**level** 変数の範囲は **0** から **99** です。**major_level** および **minor_level** 変数は、任意の 1 桁のフィールドです。**major_level** 変数と **minor_level** 変数の間には空白を挿入しないでください。

たとえば、**NetBackup 7.0** を指定するには、次の情報を入力します。

`-netbackupversion 7.0 or -netbackupversion 7`

`-operatingsystem hpux | linux | rs6000 | solaris | windows`

指定したオペレーティングシステムでホストが追加されます。

`-scanability unsigned_integer`

このオプションは、**Shared Storage Option (SSO)** 機能を使用する **NetBackup Enterprise Server** だけに適用されます。

スキャンアビリティ係数に指定可能な範囲は **0** から **9** で、デフォルトは **5** です。この係数を指定すると、ドライブのスキャンホストが変更された場合、そのスキャンホストに優先度を割り当てることができます。スキャンアビリティ係数がより大きいスキャンホストが、先に選択されます。

注意: ドライブへのスキャンホストの割り当てが可能になるまでは、そのドライブを使用することはできません。特定のドライブに対して登録されたすべてのホストで **scan_factor = 0** が使用されている場合、そのドライブは **0 (ゼロ)** 以外の **scan_factor** を持つホストが登録されるまで使用できません。**0 (ゼロ)** 以外の **scan_factor** を持つすべてのホストでドライブが停止状態である場合、ドライブは利用できなくなります。

サーバーに **scan_factor = 0** を使用すると、**SSO** 構成で障害に対して柔軟に対応できなくなります。ドライブのスキャンホストになる可能性のあるサーバーには注意してください。ドライブのスキャンホストが存在しない場合、そのドライブはすべてのサーバーで利用できなくなります。

`-changesetting -machinename string`

指定したホストの構成設定を変更し、以前に存在しなかった設定を追加します。

これらの構成オプションは、オプション名と有効化識別子 (**1** または **yes**) あるいは無効化識別子 (**0** または **no**) を指定して `-changesetting` を実行することによって変更します。たとえば、次のコマンドでは、ホスト名を自動的に追加する **EMM** の機能が無効になります。

```
# nbemmcmd -changesetting -DISABLE_AUTOMATIC_HOST_NAME_ADD no
```

- ALLOW_MULTIPLE_RETENTIONS_PER_MEDIA 0 | 1 | no | yes
メディア上での保持レベルの混在を許可します。デフォルト条件では、各ボリュームに単一の保持レベルのバックアップだけを含めることができます。
- AUDIT [DISABLED | ENABLED]
NetBackup の監査を有効または無効にします。監査記録は NetBackup 環境でユーザーが開始した操作の記録です。監査はだれが何をいつ変更したか答えるのに役立つ情報を集めて記録します。デフォルト条件では、監査が有効です。
- AUDIT_RETENTION_PERIOD *number_of_days*
ユーザー操作が監査レポートのために保持される日数を指定します。保持期間が示されていない場合、デフォルトの監査保持期間は 90 日です。0 (ゼロ) という値はレコードがページされないことを示します。
- COMMON_SERVER_FOR_DUP default | preferred | required
データを複製するために NetBackup が必要なメディアサーバーをどのように見つけるかを決定します。
イメージを読み込むために使われるメディアサーバーは「読み込みメディアサーバー」です。イメージを書き込むために使われるメディアサーバーは「書き込みメディアサーバー」です。コピー元イメージがテープデバイスにあるときデフォルトでは、読み込みメディアサーバーはバックアップイメージを書き込むメディアサーバーです。また、コピー元イメージが複数のメディアサーバーに接続されたディスクプールにあるとき、それらのメディアサーバーのうちのいずれかが読み込みメディアサーバーとして使われることがあります。書き込みメディアサーバーの選択肢は、複製操作の宛先として指定されたストレージユニットまたはストレージユニットグループにアクセスできるメディアサーバーに制限されます。
このオプションの可能な設定は次のとおりです。
- **default**。NetBackup は、使用可能な共通サーバー (同じ読み込みメディアサーバーと書き込みメディアサーバー) の徹底的な検索を実行しません。共通メディアサーバーがビジー状態または利用不能なら、NetBackup は読み込みメディアサーバーとは異なる書き込みメディアサーバーを使います。Resource Broker のパフォーマンスに影響する徹底的な探索を行わないときにこのオプションを使用します。これは、複製ジョブに関する大きいジョブキューが、リソースが利用可能になるのを待機しているときなどです。
 - **preferred**。使用する共通メディアサーバーを検索します。1 つ以上の共通メディアサーバーが検出されても、リソース (DSU やテープドライブなど) がビジー状態の場合は、次の操作を行います。2 つの別々のメディアサーバーを使用することによって (ネットワークを介してイメージを送信して) 複製ジョブを実行します。
 - **required**。NetBackup は共通サーバーを見つけるために徹底的な探索を行います。共通メディアサーバーがビジー状態なら、NetBackup はリソ

ス要求をキューに投入し、リソースが利用可能になるのを待機します。次の場合、**NetBackup**は2つの別々のメディアサーバーでジョブを実行し、ネットワークを介してイメージを送信します。共通サーバーが**NetBackup**ドメインにない場合、または共通サーバーが存在するけれども停止している場合。

-DISABLE_AUTOMATIC_HOST_NAME_ADD 0|1|no|yes

ホスト名が有効な場合に、ホスト名を自動的に追加できる **EMM** の機能を無効にします。無効なホスト名の例には、別のホストと重複する名前があります。

-DISABLE_BACKUPS_SPANNING_DISK 0|1|no|yes

ディスクストレージユニットのボリューム上でファイルシステムが空きなしの状態になったときに、ディスクに対するバックアップ操作機能を無効にします。この機能は、複数のストレージユニットボリューム上でイメージフラグメントを使用することによって無効になります。

-DISABLE_DISK_STU_JOB_THROTTLING 0|1|no|yes

ディスクストレージユニットがその高水準点に近づいたときに、ディスクストレージユニットのジョブスロットル操作を無効にします。ディスクストレージユニットのスロットル操作では、高水準点により正確に近づくために、同時に開始されるジョブ数が制限されます。デフォルトでは、その高水準点に近づくディスクストレージユニットのスロットル操作が実行されます。

-DISABLE_STANDALONE_DRIVE_EXTENSIONS 0|1|no|yes

非ロボットのドライブ操作が無効になります。バックアップ中、非ロボットのドライブ内で検出された任意のラベル付きメディアおよびラベルなしメディアが **NetBackup** によって自動的に使用されることはありません。デフォルトの状態では、スタンドアロンドライブ拡張機能が有効です。

-DISALLOW_NONNDMP_ON_NDMP_DRIVE 0|1|no|yes

EMM サーバーの **MDS** ロジックによってこのオプションが読み込まれます。**NetBackup** では、要求の形式に基づいて、次のとおり利用可能なドライブの使用が試行されます。

非 **NDMP** のすべての要求では、**NetBackup** によって、非 **NDMP** の利用可能なドライブの検索が最初に試行されます。非 **NDMP** の利用可能なドライブが存在せず、**NDMP** ドライブが利用可能である場合、低速な **NDMP** ドライブが使用されます。非 **NDMP** の要求には、ストレージユニットに関する要求 (バックアップおよび書き込み側の複製) 以外のあらゆる形式の要求と、**NDMP** イメージのリストアが含まれます。

-DO_NOT_EJECT_STANDALONE 0|1|no|yes

このエントリを有効にした場合、スタンドアロンドライブのテープは、そのホストでバックアップが完了しても取り出されません。(バックアップ中にメディアの終わりに達した場合は、テープは取り出されます。)バックアップが正常に完了した後、スタンドアロンドライブを準備完了状態に保つ必要がある場合に使用します。

-DONT_USE_SLAVE 0|1|no|yes

自動的にドライブに名前を割り当てるドライブ名規則の使用の選択を解除します。

-DRIVE_ERROR_THRESHOLD *unsigned_integer*

NetBackup でドライブの状態が **DOWN** に変更される前に発生する可能性のあるドライブエラーのしきい値または数を変更します。デフォルトは **2** です。

-DRIVE_NAME_SEED 0|1|no|yes

自動的にドライブに名前を割り当てるドライブ名規則の使用を選択します。

-emmname *string*

このオプションでは、**EMM** データベースサーバー名を指定します。このサーバーには、メディア情報およびデバイス構成情報を格納するデータベースが含まれます。

-emmport *unsigned_integer*

このオプションでは、**EMM** ポートを指定します。

-machinename *string*

設定を変更するマシンの名前を指定します。

-MAX_REALLOC_TRIES *unsigned_integer*

今後のバックアップ用にメディアを再割り当てするための **NetBackup** による最大再試行回数を指定します。

-MEDIA_ERROR_THRESHOLD *unsigned_integer*

メディアの凍結前に発生する可能性のあるメディアエラーのしきい値または数を変更します。デフォルトは **2** です。

-MEDIA_REQUEST_DELAY *unsigned_integer*

NetBackup がドライブの準備が完了するまでに待機する時間 (秒数) を指定します。非ロボットのドライブだけに適用されます。デフォルトは **0** 秒です。たとえば、遅延が **150** 秒であると想定します。

MEDIA_REQUEST_DELAY = 150

この情報を **NetBackup** サーバー上の `bp.conf` ファイルに追加するか、またはメディアホストプロパティの [メディア要求の遅延 (**Media Request Delay**)] に値を入力します。

-MPMS_DISABLE_EVENTS 0|1|no|yes, -MPMS_DISABLE_RANK 0|1|no|yes,

-MUST_USE_LOCAL_DRIVE 0|1|no|yes

クライアントがマスターサーバーでもあるときにこのオプションが有効な場合は、このクライアントのバックアップは常にローカルドライブで実行されます。クライアントがマスターサーバーでない場合、このエントリは無効です。

このオプションをマスターサーバー上の `bp.conf` ファイルに追加します。または、ホストプロパティの[一般的なサーバー (General Server)]ダイアログボックスで[必ずローカルドライブを使用する (Must Use Local Drive)]設定にチェックマークを付けます。

-NBUFS_DESTINATION_DSU *string*, -NBUFS_DUP_TSU_TO_DSU 0|1|no|yes,
-NBUFS_RETENTION_LEVEL *unsigned_integer*,
-NON_ROBOTIC_MEDIA_ID_PREFIX *string*

非ロボットメディアを作成するために使用するメディア ID 接頭辞を指定します。
-machinename オプションで指定されるホストに適用されます。メディア ID 接頭辞は、1 から 3 個までの英数字の文字列です。

-PREFER_NDMP_PATH_FOR_RESTORE 0|1|no|yes,
-RETURN_UNASSIGNED_MEDIA_TO_SCRATCH_POOL 0|1|no|yes

この EMM グローバルオプションは、EMM サーバーを使用しているすべてのホストに適用されます。ホストオプションではありません。

オプションが **YES** に設定されている場合: 割り当てられていない期限切れのメディア (同じスクラッチプールに含まれていたメディア) は、Media Manager によって、スクラッチボリュームプールに自動的に戻されます。

オプションが **NO** に設定されている場合: メディアをスクラッチプールに自動的に戻す動作は無効になります。いずれかの Media Manager 管理インターフェースを使用してメディアを移動します。

-SCSI_PROTECTION NONE | SPR | SR

テープドライブの排他アクセス保護を有効にします。アクセス保護が設定されていると、予約されている間は他のホストバスアダプタでコマンドを発行してドライブを制御することはできません。このオプションでは、次の 3 つの設定を指定できます。

NONE: 保護なし

SPR: SCSI Persistent RESERVE

SR: SPC-2 SCSI RESERVE (デフォルト条件)

-TIME_WINDOW *unsigned_integer*

エラーのトラッキングが可能な時間の値を設定できます。この値をエラーのしきい値 (`media_error_threshold` など) と組み合わせて使用することで、この時間内に発生したメディアエラー数を監視できます。デフォルト設定は 12 時間です。

-UNRESTRICTED_SHARING 0|1|no|yes

すべてのメディアサーバーでメディアを無制限に共有できるようにします。

```
USE_POTENTIAL_FREESPACE_FOR_ALLOCATION 0|1|no|yes
```

利用可能な空き容量のメモリ割り当てを許可します。高水準点は通常、**BasicDisk** ストレージユニットおよびディスクプールのイメージクリーンアップのトリガになります。ストレージライフサイクルポリシーの高水準点に達すると、それ以上のメモリ空間の使用を防ぐことができます。

たとえば、高水準点は **90%** ですが、潜在的な空き容量は **50%** です。ディスクに残っている空き容量を、高水準点を過ぎてからしか利用できない場合、バックアップは失敗します。潜在的な空き容量と高水準点の間の **40%** の空き容量の使用を許可するには、このパラメータをオン (**1**) にします。

デフォルト設定は「許可しない」(**0**) です。

```
-VALIDATE_HOST_NAME 0|1|no|yes
```

NetBackup 標準に準拠するホスト名の文字検証を有効にします。このオプションを無効にした場合は、標準に準拠しない「_host1」などの名前を使用できません。

```
-VAULT_CLEAR_MEDIA_DESC 0|1|no|yes
```

このオプションは、**EMM** サーバーを使用しているすべてのホストに適用される **EMM** のグローバルオプションです。ホストオプションではありません。一般的なテープローテーションでは、オフサイト **Vault** から **NetBackup** メディアが返却された場合、そのメディアの期限は切れており、新しいバックアップですぐに再利用できます。混乱を避けるために、期限切れのテープがロボットから返却されたときは説明も消去したほうが便利です。このエントリを指定した場合、他の **Vault** 情報が **Media Manager** ボリュームデータベースから消去されるときに、メディアの説明フィールドも消去されます。

```
-deletehost
```

このオプションを指定すると、必須のマシン名とマシン形式を使用して **EMM** マシンレコードが削除されます。

```
-brief
```

詳細ではないコマンドの出力を生成します。

```
-machinename string
```

指定したホストを **EMM** データベースから削除します。

```
-Machinetype api | app_cluster | cluster | master | media | ndmp
```

削除するマシンの形式を指定します。

```
-errorsdb
```

```
-brief
```

詳細ではないコマンドの出力を生成します。

- `-prune [-days no_of_days] [-hours no_of_hours] [-minutes no_of_minutes]`
エラーデータベースからエンTRIESを削除します。オプションの日付、時間、分の引数によって、どのデータベースエンTRIESを削除するかが決定されます。指定された時刻より前のエンTRIESが削除されます。
- `-getemmserver`
このコマンドを実行すると、特定の EMM ドメイン内のすべてのホストに関する情報が表示されます。このコマンドを使用して、新しくインストールまたは変更したドメインの一貫性のレベルを確認します。
- `-brief`
詳細ではないコマンドの出力を生成します。
- `-masterserver string`
EMM ドメインのマスターサーバー名を指定します。コマンドの使用時にこのオプションを省略すると、現在のマシンが想定されます。
- `-timeout unsigned integer`
このコマンドの実行中に使用される一時的なタイムアウト値 (秒単位) を指定します。
- `-help`
次の入力によって、指定のコマンドの使用法の情報を表示します。
`nbemmcmd -help command`
- `-listhosts`
このオプションを指定すると、認識されている各ホストの表構造がダンプされます。
- `-display_server -machinename string -machinetype string`
マシン名とマシン形式によって指定されたマシンだけを表示します。
- `-list_app_clusters -masterserver string`
指定されたマスターサーバーのすべてのアプリケーションクラスタを表示します。
- `-list_snap_vault_filers -machinename string`
指定されたマシン名のすべての SnapVault ファイラを表示します。次の `-machinename` オプションの説明を参照してください。
- `-list_snap_vault_media_servers -masterserver string`
指定されたマスターサーバーのすべての SnapVault メディアサーバーを表示します。
- `-list_sts_hosts -machinename string`
指定されたマシン名に接続されたすべての OpenStorage ホストを表示します。

`-list_sts_media_servers -masterserver string`
指定されたマスターサーバーに接続されたすべての OpenStorage メディアサーバーを表示します。

`-machinename api | app_cluster | cluster | master | media | ndmp`
表示するマシンの形式を定義します。

`-nbservers -masterserver string`
メディアサーバーおよびマスターサーバーだけを表示します。`-listhosts` のデフォルトでは、すべてのサーバーが表示されます。

`-netbackupversion level[.major_level[minor_level]]`
マシンのバージョンを指定します。`level` 変数の範囲は 0 から 99 です。`major_level` および `minor_level` 変数は、任意の 1 桁のフィールドです。`major_level` と `minor_level` の間には空白を挿入しないでください。
たとえば、NetBackup 7.0 を指定するには、次の情報を入力します。

`-netbackupversion 7.0` or `-netbackupversion 7`

`-servers_in_emm_cluster -clustername string`
指定されたクラスタ内のすべてのサーバーを表示します。

`-server_in_app_cluster -clustername string`
指定されたクラスタのすべてのアプリケーションクラスタサーバーを表示します。

`-brief`
コマンドの出力を詳細ではない形式に設定します。

`-parsable`
コマンドの出力を解析可能な形式に設定します。

`-verbose`
ホスト情報の表示方法を制御します。ホストのパラメータごとに 1 行ずつ、複数の行が出力されます。

`-listmedia`

`-allrecords`
このオプションを指定すると、すべてのメディアレコードが表示されます。

`-mediaid string`
EMM メディアレコードのメディア ID を指定します。

`-mediatype unsigned integer`
メディア形式によってボリュームを問い合わせます。
NetBackup Enterprise Server で有効なメディア形式は、次のとおりです。

4mm、8mm、8mm2、8mm3、dlt、dlt2、dlt3、dtf、hcart、hcart2、hcart3、
qcart、4mm_clean、8mm_clean、8mm2_clean、8mm3_clean、dlt_clean、
dlt2_clean、dlt3_clean、dtf_clean、hcart_clean、hcart2_clean、
hcart3_clean。

NetBackup サーバーで有効なメディア形式は、次のとおりです。

4mm、8mm、dlt、hcart、qcart、4mm_clean、8mm_clean、dlt_clean、
hcart_clean

-poolname *string*

プール番号 (ボリュームプールに挿入されたインデックス) によってボリュームを
問い合わせます。vmpool -listall を実行して、特定のプール名のインデッ
クスを確認します。

-robotnumber *unsigned_integer*

このオプションを指定すると、ロボット番号によってボリュームが問い合わせられ
ます。ロボット番号とは、ボリュームが位置するロボットの一意の論理識別番号で
す。

-vaultcontainer *string*

このオプションを指定すると、コンテナに格納されているボリュームが一覧表示
されます。変数 *string* は *vault_container_id* で、29 文字以内の英数字の文
字列です。

-listsettings

-machinename *string*

設定を表示するマシンを指定します。

-brief

詳細ではないコマンドの出力を生成します。

-emname *string*

このオプションでは、関連する EMM サーバーのホスト名を指定します。

-emname が指定されていないければ、デフォルト名は bp.conf ファイルにあり
ます。

-emmpport *unsigned_integer*

呼び出しがなされる EMM サーバーのポート番号を指定します。-emmpport が
指定されていないければ、デフォルトポートは bp.conf ファイルで指定されます。

-machinealias

次に示すパラメータは、特定のマシンのエイリアスリストのメンテナンスに使用します。
これらを使用して、現在のエイリアスの表示、新しいエイリアスの追加、または指定し
たマシンの現在のエイリアスの削除を行うことができます。

- `-addalias -alias alias -machinename name -machinetype type`
マシンにエイリアス名を追加します。エイリアスを追加するマシン名およびマシン形式を指定します。
- たとえば、**blue** というエイリアス名を持つメディアサーバーを作成するには、次のコマンドを実行します。
- ```
machinealias -machinename 10.80.91.83 -machinetype media
-addalias -alias blue
```
- `-deletealias -alias name -machinetype type`  
データベースからエイリアス名を削除します。この操作を行うには、このオプションとともに `-alias string` コマンドおよびマシン形式を使用して、削除するエイリアスを指定する必要があります。
- `-deleteallaliases -alias name -machinetype type`  
特定のマシンのすべてのエイリアスを削除します。この操作を行うには、マシン名およびマシン形式を指定する必要があります。
- `-getaliases`  
特定のマシンのすべてのエイリアスを取得します。この操作を行うには、マシン名およびマシン形式を指定する必要があります。
- `-alias string`  
マシンのエイリアス名を識別する文字列を指定します。
- `-machinename string`  
マシン名を指定します。
- `-Machinetype api | app_cluster | cluster | master | media | ndmp`  
マシンをどのように使用するかを定義します。
- `-releasecache`  
**EMM** サーバーが使ったキャッシュメモリを解放します。
- `-brief`  
詳細ではないコマンドの出力を生成します。
- `-emmname string`  
このオプションでは、関連する **EMM** サーバーのホスト名を指定します。  
`-emmname` が指定されていないければ、デフォルト名は `bp.conf` ファイルにあります。
- `-emmport unsigned_integer`  
呼び出しがなされる **EMM** サーバーのポート番号を指定します。`-emmport` が指定されていないければ、デフォルトポートは `bp.conf` ファイルで指定されます。



**-renamehost**

必要なマシン名と新しいマシン名のオプションを指定してこのコマンドを実行すると、現在のマシン名を新しいマシン名に変更できます。

**-machinename** *string*

現在のマシン名を定義します。

**-newmachinename** *string*

新しいマシン名を定義します。

**-servercontrol**

このコマンドによって、指定したサーバーの制御の一時停止および再開が行われます。ジョブはこの時間内に実行されるため、既存のデータを破損させることなくデータベースのメンテナンスを実行できます。

**-resume**

指定されたサーバーの制御を再開します。

**-suspend**

指定されたサーバーの制御を一時停止します。

**-setemmserver**

このコマンドによって、古い EMM サーバー名と名前が一致する、ドメイン内の特定のホストの EMM サーバー名が変更されます。このコマンドでは次のオプションを使用できます。

**-emmservername** *string*

変更する EMM サーバー名を指定します。

**-newemmservername** *string*

EMM サーバーの新しい値 (置換する値) を指定します。

**-masterserver** *string*

EMM ドメインのマスターサーバー名を指定します。コマンドの使用時にこのオプションを省略すると、現在のマシンが想定されます。

**-timeout** *unsigned integer*

このコマンドの実行中に使用される一時的なタイムアウト値 (秒単位) を指定します。

**-updatehost** **-machinename** *string*

次に示すオプションを指定してこのコマンドを実行すると、必要な **-machinename** オプションを使用して、指定したマシンレコードを変更できます。

**-add\_server\_to\_app\_cluster**

**-clustername** オプションで指定したアプリケーションクラスタにマシンを追加します。

`-activenodename string`  
クラスタ内のアクティブノードを指定します。

`-clustername string`  
このマシンが属するクラスタを指定します。

`-delete_server_from_app_cluster`  
`-clustername` オプションで指定したアプリケーションクラスタからマシンを削除します。

`-displayname string`  
マシンに割り当てられた名前 (そのマシンの番号識別子) を指定します。

`-machinename string`  
更新するマシン名を指定します。

`-machinestateop clr_admin_pause | clr_admin_pause_and_set_active | clr_disk_active | clr_ltid_restart | clr_master_server_connectivity | clr_tape_active | reset_all | set_admin_pause | set_disk_active | set_master_server_connectivity | set_tape_active`  
指定されたマシンの状態を設定またはクリアします。

`-Machinetype api | app_cluster | cluster | master | media | ndmp`  
マシンをどのように使用するかを定義します。

`-masterserver string`  
ドメイン内のホストのマスターサーバーを定義します。

`-netbackupversion level[.major_level[minor_level]]`  
ホストを追加して、そのホストで実行するバージョンを指定します。**level** 変数の範囲は 0 から 99 です。**major\_level** および **minor\_level** 変数は、任意の 1 桁のフィールドです。**major\_level** 変数と **minor\_level** 変数の間には空白を挿入しないでください。

たとえば、**NetBackup 7.0** を指定するには、次のように入力します。  
`-netbackupversion 7.0`

`-operatingsystem hpux | linux | rs6000 | solaris | windows`  
マシンのオペレーティングシステムを更新します。

## 例

例 1 - 特定の EMM ドメイン内のすべてのホストに関する情報を表示します。

```
nbemmcmd -getemmserver
These hosts were found in this domain: throttle, upwords
```

```

Checking with host: throttle...
Checking with host: upwords...
Server Type Host Version Host Name EMM Server
MEDIA UNKNOWN RELEASE (0) throttle throttle
MASTER 7.6 upwords upwords

```

One or more hosts had mismatched EMM Servers.  
Run-time failure: The consistency check either failed or was incomplete. Command did not complete successfully.

**例 2** - 古い EMM サーバー名と名前が一致する、ドメイン内の特定のホストの EMM サーバー名を変更します。

```

nbemmcmd -setemmserver -emmservername throttle -newemms upwords
These hosts were found in this domain: throttle, upwords
Checking with host: throttle...
Checking with host: upwords...
Server Type Host Version Host Name EMM Server
MEDIA UNKNOWN RELEASE (0) throttle throttle
EMM server name was changed.
MASTER 7.6 upwords upwords
One media hosts had EMM Server name changed. Command was completed
successfully.

```

**例 3** - マシン名 orbitvml の設定を表示します。

```

nbemmcmd -listsettings -machinename orbitvml
NBEMMCMD, Version:7.1
The following configuration settings were found:
ALLOW_MULTIPLE_RETENTIONS_PER_MEDIA="no"
DISABLE_DISK_STU_JOB_THROTTLING="no"
DISABLE_STANDALONE_DRIVE_EXTENSIONS="no"
MEDIA_REQUEST_DELAY="0"
MUST_USE_LOCAL_DRIVE="no"
NON_ROBOTIC_MEDIA_ID_PREFIX="A"
MAX_REALLOC_TRIES="1000"
DISABLE_BACKUPS_SPANNING_DISK="no"
DISALLOW_NONNDMP_ON_NDMP_DRIVE="no"
DO_NOT_EJECT_STANDALONE="no"
PREFER_NDMP_PATH_FOR_RESTORE="yes"
DONT_USE_SLAVE="no"
DRIVE_ERROR_THRESHOLD="2"
MEDIA_ERROR_THRESHOLD="2"
TIME_WINDOW="12"

```

```
SCSI_PROTECTION="SR"
NBUFS_DUP_TSU_TO_DSU="no"
NBUFS_DESTINATION_DSU="NONE"
NBUFS_RETENTION_LEVEL="0"
MPMS_DISABLE_RANK="0"
MPMS_DISABLE_EVENTS="no"
UNRESTRICTED_SHARING="no"
FATPIPE_USAGE_PREFERENCE="Preferred"
FATPIPE_WAIT_PERIOD="15"
FATPIPE_RESTORE_WAIT_PERIOD="5"
FT_MAX_CLIENT_PORTS_PER_SERVER="2"
FT_MAX_CLIENTS_PER_PORT="2"
SHAREDDISK_MOUNT_POINT="/nbushareddisk"
AUDIT="ENABLED"
AUDIT_RETENTION_PERIOD="90"
RETURN_UNASSIGNED_MEDIA_TO_SCRATCH_POOL="yes"
VAULT_CLEAR_MEDIA_DESC="no"
SCSI_PERSISTENT_RESERVE="0"
Command completed successfully.
```

# nbevingest

nbevingest – Enterprise Vault に NetBackup によってリストアされたデータをプッシュする

## 概要

```
nbevingest -V VaultstoreName -f MetaDataFilePath -stage
StagingDirectory -hold HoldName -retentionpolicy RetentionCategory
-report ReportFileName [-restoreinfo FilePath] [-a ArchiveName]
[-prefix ArchiveNamePrefix] [-directoryserver HostName] [-NOSIS] [-h]
```

このコマンドのディレクトリパスは <install\_path>%NetBackup%\bin% です。  
AMD64 システムでは、このコマンドのディレクトリパスは  
<install\_path>%NetBackup%\bin%\x86% です。

## 機能説明

このコマンドは Windows システムでのみ動作します。

nbevingest は、NetBackup データの e 検出のために NetBackup から Enterprise Vault にリストアされるファイルシステムデータを取り込むためのユーティリティです。NetBackup、Enterprise Vault、および Discovery Accelerator 製品を統合し、NetBackup データの e 検出用にエンドツーエンドのソリューションを提供します。

nbevingest は NetBackup および Enterprise Vault 固有のさまざまな構成詳細により構成される、NetBackup クライアントから実行します。取り込みマシンの Enterprise Vault に Enterprise Vault ECM SDK が必要です。ECM SDK は Enterprise Vault のインストーラ CD と共に出荷される、独立したインストーラが付いた独立した製品です。NBU クライアントと Enterprise Vault サーバーは同じドメインで実行されている必要があります。

Enterprise Vault サーバーへの書き込みアクセスを許可するユーザークレデンシャルを使用して、nbevingest を実行します。Enterprise Vault で nbevingest を使用する前に、Enterprise Vault サーバーにデータを取り込むためにストレージの管理者役割を構成し、実行します。

nbevingest では、リストアされるデータが次の階層のステージング位置で検索されると想定しています。

```
<Staging Directory>%<Master Server>%<Client Name>%<Backup id>% /
<Restored data>
```

たとえば、

```
E:\%bprestore_staging_area%\{C166E380-2857-4ADF-B877-C49D173023CD}%
abc.symantec.com%NBUS_VM3%NBUS_VM3_1317825717\F%abc.txt
```

ここで示された文字列については、次のとおりです。

- E:¥bprestore\_staging\_area¥{C166E380-2857-4ADF-B877-C49D173023CD} は、ステージングディレクトリ (**StagingDirectory**) です。
- abc.symantec.com はマスターサーバーです。
- NBUS\_VM3 はクライアント名です。
- NBUS\_VM3\_1317825717 はバックアップ ID です
- ¥F¥abc.txt はリストアされたデータです。

データがこの階層でリストアされる時、nbevingest -stage オプションは入力値として次のパスを想定しています。

```
E:¥bprestore_staging_area¥{C166E380-2857-4ADF-B877-C49D173023CD}
```

nbevingest は、リストアされたデータに関する情報を指定する、特定形式の XML ファイルが、**Enterprise Vault** に取り込まれると想定します。

nbevingest は入力 XML ファイルを処理し、指定された **Vault** ストアのアークाइブの **Enterprise Vault** に、リストアされたデータを取り込みます。ユーザーがまだアークाइブの名前を指定していない場合は、アークाइブが作成されます。データが取り込まれるアークाइブの名前は次の形式になります。

```
<Prefix>_<backup_client>_<Year_of_modification_of_file>_<hold_name>
```

デフォルトの接頭辞は **FS** です。

nbevingest ユーティリティは、同じファイルが繰り返し取り込まれることのないように、アークाइブ内の単一インスタンス作成 (**SIS**) を検査します。必要ならば、ユーザーはこの **SIS** の検査をオフにするために **-NOSIS** オプションを実行できます。このユーティリティにより、コンソール上で操作の進捗が報告されます。さらに、項目が正常に取り込まれるかどうか、または項目がすでに存在しており、再取り込みの必要がないかどうかが表示されます。取り込み処理の終了時に、取り込みの概略に次の情報がリスト表示されます。

- マスターサーバーおよびクライアントのような、**NetBackup** 固有の入力の詳細
- **Vault** ストアおよび保持カテゴリのような、**Enterprise Vault** 固有の入力の詳細
- 取り込み中に使用される、新規アークाइブおよび既存のアークाइブ
- 取り込まれたファイル (項目) 数、取り込みに失敗したファイル (項目) 数、および既存のファイル数
- 処理される総項目数および取り込み期間

ユーティリティはまた、入力 XML からの取り込みに失敗した項目のリストに関する詳細情報と、以前の取り込みの概略が含まれている XML 形式のレポートを作成します。詳しいトラブルシューティングについては、nbevingest の **VxUL** のログ (**OID398**) が次のディレクトリに保存されています。

```
install_path¥NetBackup¥logs¥nbevingest
```

## オプション

- a *ArchiveName*  
すべての項目が取り込まれる、作成されるアーカイブに名前を付けます。
- directoryserver *HostName*  
**Enterprise Vault** ディレクトリサービスを実行する **Enterprise Vault** サーバーに名前を付けます。
- f *MetaDataFilePath*  
検索のエクスポート結果が含まれる **XML** メタデータファイルのパスを指定します。
- h  
使用方法の説明にコマンドヘルプを表示します。
- hold *HoldName*  
保留名を指定します。
- NOSIS  
単一インスタンス作成 (**SIS**) 検査なしで取り込みます。
- prefix *ArchiveNamePrefix*  
アーカイブの名前に付ける接頭辞を指定します。
- report *ReportFileName*  
**XML** レポートファイルに名前を付けます。
- restoreinfo *FilePath*  
データがステージング領域でリストアされるクライアントについての情報を指定する、**XML** ファイルのディレクトリパスを指定します。このオプションは、入力メタデータファイルに複数のクライアントが含まれており、それらの小さなサブセットからのみ、選択的にファイルを取り込む場合に使用します。
- retentionpolicy *RetentionCategory*  
**Enterprise Vault** の **Vault** 管理コンソールから作成される保持カテゴリに名前を付けます。
- stage *StagingDirectory*  
**NetBackup** データが **Enterprise Vault** に取り込まれるためにリストアされるステージングディレクトリを指定します。このディレクトリには前出の階層でリストアされたデータが含まれています。
- V *VaultstoreName*  
データがそのアーカイブに取り込まれる **Vault** ストアに名前を付けます。

## 形式

NetBackup のリストア操作を使用しないで Enterprise Vault の nbevingest コマンドを直接使うには、自分で XML ファイルを作成する必要があります。入力 XML メタデータファイルの形式を、次に示します。

```
<?xml version="1.0" encoding="UTF-8" ?>
- <FederatedSearchResult searchID="{C166E380-2857-4ADF-B877-C49D173023CD}">
- <Master name="abc.symantec.com">
- <Client name="NBUS_VM3" PolicyType="MS-Windows">
- <File filename="/E/Shared/test data/3rd Feb 2011 backup - 2.zip"
 userName="Administrators@BUILTIN" groupName="None@NBUS_VM3" mtime=
 "1296735534" ctime="1308901836"><BackupInfo backupId=
 "NBUS_VM3_1317829065" />
 </File>
- <File filename="/E/Shared/test data/AMD64.depends.mk~"
 userName="Administrators@BUILTIN" groupName="None@NBUS_VM3" mtime=
 "1308755974" ctime="1317819679"><BackupInfo backupId=
 "NBUS_VM3_1317829065" />
 </File>
- <File filename="/E/Shared/test data/idl/.#BinningInfo.idl.1.1.2.3"
 userName="Administrators@BUILTIN" groupName="None@NBUS_VM3"
 mtime="1303305401" ctime="1308899868"><BackupInfo backupId=
 "NBUS_VM3_1317829065" />
 </File>
- <File filename="/E/Shared/test data/idl/AMD64/d-libnbsearchbrokeridlC/
 BinningInfoC.dep" userName="Administrators@BUILTIN" groupName=
 "None@NBUS_VM3" mtime="1308828251" ctime="1308900036"><BackupInfo
 backupId="NBUS_VM3_1317829065" />
 </File>
- <File filename="/E/Shared/test data/idl/AMD64/d-libnbsearchbrokeridlC/
 BinningInfoC.obj" userName="Administrators@BUILTIN" groupName=
 "None@NBUS_VM3" mtime="1308821239" ctime="1308900036"><BackupInfo
 backupId="NBUS_VM3_1317829065" />
 </File>
 </Client>
- <Client name="NBUS_VM3" PolicyType="Standard">
- <File filename="/E/Shared/test data/data.txt" userName=
 "Administrators@BUILTIN" groupName="None@NBUS_VM3" mtime="1296735534"
 ctime="1308901836"><BackupInfo backupId="NBUS_VM3_1317829068" />
 </File>
 </Client>
- <Client name="NBUS_VM4" PolicyType="Standard">
- <File filename="/E/Shared/test data/data3.txt" userName=
```



```
"Administrators@BUILTIN" groupName="None@NBUS_VM4" mtime="1296735534"
ctime="1308901836"><BackupInfo backupId="NBUS_VM4_1317829068" />
 </File>
</Client>
</Master>
</FederatedSearchResult>
```

リストア操作のために作成する 2 番目の XML ファイルは、次の形式でなければなりません。

```
<?xml version="1.0" encoding="UTF-8" ?>
- <Restore>
- <Client name="NBUS_VM3">
 <BackupInfo backupId="NBUS_VM3_1305557011" />
</Client>
- <Client name="NBUS_VM4">
 <BackupInfo backupId="NBUS_VM4_1305557012" />
</Client>
</Restore>
```

## 例

**例 1 - クライアント LitigationClient のリストア済みデータを、保持カテゴリ NBUSearchRetention を使用して Vault ストア NBUSearchVS に取り込みます。**

```
nbevingest.exe -V NBUSearchVS -f C:¥EVIngestInputFiles¥ /
{C166E380-2857-4ADF-B877-C023CD}¥Searched_Collection_0.xml -stage /
C:¥StagingArea¥{C166E380-2857-4ADF-B877-C023CD} -retentionpolicy /
NBUSearchRetention -hold LitigationData -report C:¥EVIngestReports /
¥LitigationReport.xml

Processing File: ¥¥?¥C:¥StagingArea¥{C166E380-2857-4ADF-B877-C023CD} /
¥abc.symantec.com¥
LitigationClient¥LitigationClient_1317829065¥E¥Shared¥Demo Data¥data.txt
Item 1 ingested successfully
Processing File: ¥¥?¥C:¥StagingArea¥{C166E380-2857-4ADF-B877-C023CD} /
¥abc.symantec.com¥
LitigationClient¥LitigationClient_1317829065¥E¥Shared¥Demo Data¥idl /
¥BinningInfo.txt
Item 2 ingested successfully
Processing File: ¥¥?¥C:¥StagingArea¥{C166E380-2857-4ADF-B877-C023CD}¥ /
abc.symantec.com¥
LitigationClient¥LitigationClient_1317829065¥E¥Shared¥Demo Data¥idl¥ /
BinningInfoIterator.txt
```

Item 3 ingested successfully

-----  
 Report of EV Ingestion Process  
 -----

NBU specific details :

NBU Master Server : abc.symantec.com

Backup Clients :

1. LitigationClient

Hold Name : LitigationData

Metadata File Input : C:\%EVIgestInputFiles%\{C166E380-2857-4ADF-B877-C023CD}\%Searched\_Collection\_0.xml

Staging Area : C:\%StagingArea%\{C166E380-2857-4ADF-B877-C023CD}

EV specific details :

Vaultstore : NBUSearchVS

Retention Category : NBUSearchRetention

Archives newly created :

1. FS\_LitigationClient\_2011\_LitigationData

Summary of Items Ingestion :

Number of Items ingested = 3

Number of Items Already Exist = 0

Number of Items Failed to Ingest = 0

Total number of Items processed = 3

Start Time = Mon Nov 14 16:48:10 2011

End Time = Mon Nov 14 16:48:31 2011

Total Time Elapsed = 21 seconds

# nbexecute

nbexecute – LiveUpdate ポリシーの実行

## 概要

```
nbexecute -LiveUpdate cmd path ["arguments..."] -policy policy_name
-client client_name | All [-schedule schedule_name] [-retryable]
[-noretries]
```

UNIX システムでは、このコマンドのディレクトリパスは  
/usr/opensv/netbackup/bin/admincmd/ です。

Windows システムでは、このコマンドのディレクトリパスは  
<install\_path>%NetBackup%bin\admincmd% です。

## 機能説明

NetBackup マスターサーバーによって、NetBackup LiveUpdate ポリシーが開始されます。nbexecute コマンドによって、要求が PEM へ送信されます。

## オプション

-client client\_name | All

このオプションでは、NetBackup で LiveUpdate ジョブのポリシーを実行するクライアントを指定します。クライアントを指定しない場合、または All を指定する場合は、NetBackup によってリスト内のクライアントごとにジョブが開始されます。

cmd path ["arguments..."]

コマンドとパス、およびそれら引数を指定します。

-LiveUpdate

LiveUpdate ジョブを起動するには nbpem を指定します。

-noretries

このオプションを指定すると、ジョブに失敗した場合に NetBackup によってジョブの送信が再試行されません。

-policy policy\_name

このオプションでは、実行するジョブのポリシーを指定します。

-retryable

このオプションを指定すると、失敗したジョブが NetBackup によって再送信されません。

`-schedule schedule_name`

指定したスケジュール名のバックアップ開始時間帯を調べます。コマンドに `-schedule` を指定しない場合は、すべてのスケジュールの開始時間帯を調べます。バックアップ時間帯が開始している場合には、新しい汎用ジョブの要求でコマンドを `nbjm` に送信します。

## 例

次の Windows の例では、`foo3` クライアントで `LiveUpdate_policy` を実行しています。

```
nbexecute.exe -LiveUpdate nbmtrans.exe "C:\Program Files\VERITAS\NetBackup\bin\nbmtrans.exe" -policy LiveUpdate_policy -client foo3
```

# nbfindfile

nbfindfile - 単純な検索基準に基づいてファイルまたはフォルダを検索します

## 概要

```
nbfindfile -c client_name[,...] -p search_pattern [-s mm/dd/yyyy
[HH:MM:SS] | -s_ut unix_time] [-e mm/dd/yyyy [HH:MM:SS] | -e_ut
unix_time] [-backupid backup_id] [-policy policy_name] [-keyword
"keyword_phrase"] [-extn file_extn[,...]] [-st sched_type] [-pt
policy_type] [-kb_min min_size_kb] [-kb_max max_size_kb] [-mtime_min
mm/dd/yyyy [HH:MM:SS]] [-mtime_max mm/dd/yyyy [HH:MM:SS]] [-atime_min
mm/dd/yyyy [HH:MM:SS]] [-atime_max mm/dd/yyyy [HH:MM:SS]] [-ctime_min
mm/dd/yyyy [HH:MM:SS]] [-ctime_max mm/dd/yyyy [HH:MM:SS]] [-only_dirs
| -only_files] [-max_results number] [-case_sen] [-l [-ctime | -atime]
| -raw] [-help | -h]
```

UNIX システムでは、このコマンドのディレクトリパスは

/usr/opensv/netbackup/bin/admincmd/ です。

Windows システムでは、このコマンドのディレクトリパスは

<install\_path>%NetBackup%bin¥admincmd¥ です。

## 機能説明

nbfindfile コマンドでは、ワイルドカードとバックアップ日付範囲を含むファイル名やパスのような単純な検索基準に基づいてファイルまたはフォルダを検索できます。ユーザーはバックアップを検索するクライアントセットを指定できます。このセットは別のマスターサーバーにあってもかまいません。ポリシー形式、スケジュール形式、ポリシー名、ポリシーによって関連付けられるキーワード、ファイル拡張子、ファイル修正日の範囲、ファイルサイズを含む詳細な検索基準を指定できます。

## オプション

-atime

-l オプションと同時に使用すると、-atime は最後の変更時間の代わりに前回のアクセス時刻を表示します。

-atime\_max mm/dd/yyyy [HH:MM:SS]

戻されるオブジェクトの、前回のアクセス時刻の最大値を指定します。デフォルトは無制限です。

-atime\_min mm/dd/yyyy [HH:MM:SS]

戻されるオブジェクトの、前回のアクセス時刻の最小値を指定します。デフォルトは 01/01/1970 00:00:00.

- backupid *backup\_id*  
検索する必要があるバックアップイメージのバックアップ ID。
- c *client\_name*[,...]  
バックアップを検索する必要がある **NetBackup** クライアントの名前を指定します。クライアント名は、**NetBackup** の構成に表示される通りに指定する必要があります。複数のクライアントはカンマ区切りリストとして指定できます。
- case\_sen  
大文字と小文字を区別する一致を実行します。
- ctime  
-I オプションと同時に使用すると、-ctime は最後のアクセス時間の代わりに最後の変更時間を表示します。
- ctime\_max *mm/dd/yyyy* [*HH:MM:SS*]  
戻されるオブジェクトの、最後のアクセス時間の最大値を指定します。デフォルトは無制限です。
- ctime\_min *mm/dd/yyyy* [*HH:MM:SS*]  
戻されるオブジェクトの、最後のアクセス時間の最小値を指定します。デフォルトは **01/01/1970 00:00:00**。
- e *mm/dd/yyyy* [*HH:MM:SS*] | -e\_ut *unix\_time*  
検索の終了日を指定します。指定日時またはその前に起きたバックアップが検索されます。デフォルトは、現在の日時です。
- extn *file\_extn*[,...]  
指定した拡張子が付いたファイルのみ戻します。たとえば、-extn txt,do\*,jp?。
- h | -help  
使用量情報を表示します。
- kb\_max *max\_size\_kb*  
戻されるファイルの最大サイズを **KB (1024 バイト)** で指定します。デフォルトは無制限です。
- kb\_min *min\_size\_kb*  
戻されるオブジェクトの、最後の変更時間の最小値を指定します。デフォルトは **01/01/1970 00:00:00**。
- keyword "*keyword\_phrase*"  
一致するキーワード句が含まれているバックアップイメージのみ検索します。キーワード句には、ワイルドカード (**\***、**?**) と角カッコの式を含めることができます。例: [Kk]ey\*、[a-z]e?、[!K]ey。

- l  
長いリストの形式で出力を表示します。デフォルト条件はオブジェクトの最後の変更時間です。
- max\_results *number*  
表示する結果の最大数を指定します。デフォルトは無制限です。
- mtime\_max *mm/dd/yyyy [HH:MM:SS]*  
戻されるオブジェクトの、最後の変更時間の最大値を指定します。デフォルトは無制限です。
- mtime\_min *mm/dd/yyyy [HH:MM:SS]*  
戻されるオブジェクトの、最後の変更時間の最小値を指定します。デフォルトは 01/01/1970 00:00:00.
- only\_dirs | -only\_files  
戻されるオブジェクトの形式を指定します。
- p *search\_pattern*  
検索パターンを指定します。このパターンと一致するファイルとディレクトリエントリが表示されます。
- policy *policy\_name*  
指定したポリシーを使って作成されるバックアップイメージのみ検索します。
- pt *policy\_type*  
指定のポリシー形式のバックアップのみ検索します。*policy\_type* の有効な値は次のとおりです: **Any**、**Standard**、**FlashBackup**、**MS-Windows**、**NDMP**、**FlashBackup-Windows**
- r  
未加工の出力を表示します。
- s *mm/dd/yyyy [HH:MM:SS]* | -s\_ut *unix\_time*  
検索の開始日を指定します。指定日時またはその後起きたバックアップが検索されます。デフォルトでは終了日の 30 日前です。
- st *sched\_type*  
このオプションでは、イメージを選択するためのスケジュール形式を指定します。デフォルトはすべての形式のスケジュールです。有効な値を次に示します。大文字でも小文字でも指定できます。
  - ANY
  - FULL (完全バックアップ)
  - INCR (差分増分バックアップ)
  - CINC (累積増分バックアップ)

- UBAK (ユーザーバックアップ)
- UARC (ユーザーアーカイブ)
- SCHED (スケジュール)
- USER (ユーザーバックアップとユーザーアーカイブ)
- NOT\_ARCHIVE (ユーザーアーカイブ以外のすべてのバックアップ)



# nbfireshcan

nbfireshcan – SCSI ディスクデバイスのスキャンおよびレポート出力

## 概要

nbfireshcan

UNIX システムでは、このコマンドのディレクトリパスは /usr/opencv/netbackup/bin/ です。

Windows システムでは、このコマンドのディレクトリパスは <install\_path>%NetBackup%bin% です。

## 機能説明

Frozen Image Rescan (nbfireshcan) ユーティリティによって、SCSI ディスクデバイスがスキャンされ、その検出内容が出力されます。このコマンドは、すべてのメディアサーバーで利用することができ、インポートの問題の優先度を決定する場合に使用されます。このコマンドは、認可済みユーザーだけが実行できます。

NetBackup による認可については、『Symantec NetBackup セキュリティおよび暗号化ガイド UNIX、Windows および Linux』を参照してください。

## 例

次のコマンドは Windows システムのみに適用できます。これはローカルホストの SCSI バススキャンでの出力例です。

```
C:%Program Files%Common Files%Symantec%Vx%FI%4%Bin>nbfireshcan.exe
```

```
nbfireshcan v4.4.1 - Copyright (c) 2005-2010 Symantec Corp.
```

```
Rescanning
```

```
devices.....Complete.
```

```
Device count: 48
```

```
DevicePath Vendor Product ID EnclosureId
DeviceId [Ctl,Bus,Tgt,Lun]
```

```

%%. %PHYSICALDRIVE0 SEAGATE ST336607LW -
%%. %PHYSICALDRIVE1 SEAGATE ST336607LW -
%%. %PHYSICALDRIVE2 COMPAQ HSV111 (C)COMPAQ 5000-1FE1-5004-5660
6005-08B4-0010-120F-0000-7000-0956-0000 [00,04,00,01]
%%. %PHYSICALDRIVE3 COMPAQ HSV111 (C)COMPAQ 5000-1FE1-5004-5660
6005-08B4-0010-4E39-0000-4000-0010-0000 [00,04,00,02]
```

# nbftadm

nbftadm – ファイバートランスポート (FT) を管理するスタートメニューインターフェース

## 概要

/usr/opensv/netbackup/bin/nbftadm

## 機能説明

このコマンドは UNIX システムでのみ動作します。

nbftadm には、管理者が NetBackup メディアサーバーと SAN クライアントの間でファイバートランスポートを構成したり、管理することが可能なメニューインターフェースが含まれます。nbftadm を実行するには、管理者権限が必要です。このインターフェースは、管理者によって termcap または terminfo が定義されたすべての文字ベースの端末 (または端末エミュレーションウィンドウ) から使用できます。

操作方法について詳しくは、『Symantec NetBackup 管理者ガイド』および nbftadm のオンラインヘルプを参照してください。

## ファイル

/usr/opensv/netbackup/help/nbftadm/\*  
/usr/opensv/netbackup/logs/admin/\*  
/usr/opensv/netbackup/bin/initbprd  
/usr/opensv/netbackup/bp.conf

## 関連項目

p.341 の [bprd](#) を参照してください。

# nbftconfig

nbftconfig - ファイバートランспорт (FT) サーバーと SAN クライアントに関連付けられた属性の構成

## 概要

```
nbftconfig [-addclient] [-deleteclient] [-changeclient]
[-rescanclient] [rescanallclients] [-listclients] [-addserver]
[-deleteserver] [-changeserver] [-listservers] [-listactive]
[-setconfig] [-getconfig] [-verbose] [-help]
nbftconfig -[ac]addclient -C client_name [-M master_server] [-ftpref
preferred | always | never] [-ftwait minutes] [-ftrwait minutes]
nbftconfig -[dc]deleteclient -C client_name
nbftconfig -[cc]changeclient -C client_name {-ftpref preferred |
always | never} [-ftwait minutes] [-ftrwait minutes] | -np
number_of_ports}
nbftconfig -[rc]rescanclient client_name
nbftconfig -[ra]rescanallclients
nbftconfig -[lc]listclients [-verbose] [-C client_name | -Me
media_server | -M master_server]
nbftconfig -[ds]deleteserver -Me media_server
nbftconfig -[cs]changeserver -Me media_server [-l connection_limit]
[-state active | disabled]
nbftconfig -[ls]listservers [-Me media_server | -M master_server]
[-verbose]
nbftconfig -[la]listactive [-C client_name | -Me media_server]
[-verbose]
nbftconfig -[lt]listtargets [-Me media_server] [-verbose]
nbftconfig -setconfig [-M master_server] {-ftpref preferred | always
| never [-ftwait minutes] [-ftrwait minutes] | -np number_of_ports
[-ncp number_of_clients_per_target_port]}
nbftconfig -getconfig [-M master_server] [-verbose]
nbftconfig -option -help
UNIX システムでは、このコマンドのディレクトリパスは
/usr/opensv/netbackup/bin/admincmd/ です。
Windows システムでは、このコマンドのディレクトリパスは
<install_path>%NetBackup%bin¥admincmd¥ です。
```

## 機能説明

nbftconfig は、ファイバートランスポート (FT) サーバーに関連付けられた属性を変更する NetBackup ユーティリティです。また、EMM データベース内に SAN クライアントエンティティを作成します。

nbftconfig は次の操作を実行します。

- 新しい SAN クライアントとその属性を EMM データベースに追加する。
- 既存の SAN クライアントレコードを変更する。
- SAN クライアントを削除する。
- 新しい FT サーバーを追加する。
- 既存の FT サーバーレコードの属性を変更する。
- データベース内で定義されている SAN クライアントを表示する。
- データベース内で定義されている FT サーバーを表示する。
- すべての有効なファイバーチャネル接続ごとに表示する。
- FT メディアサーバーのターゲットポートの構成情報を表示する。

## オプション

-addclient

このオプションを指定すると、指定した SAN クライアントが EMM データベースに追加されます。通常、SAN クライアントは、クライアントに SAN クライアントコードをインストールすると自動的に検出されます。ただし、クライアントから EMM サーバーへの通知が失われた場合は、このコマンドを使用して手動でクライアントに追加する必要があります。このコマンドオプションでは、次の属性を設定できます。

-C *client\_name*

データベースに追加する SAN クライアントの名前を指定します。

-M *master\_server*

このオプションでは、指定したクライアントに関連付けられたマスターサーバーを指定します。このオプションを省略すると、ローカルクライアントのマスターサーバーが使用されます。

-ftpref preferred | always | fail | never

メディアサーバーへのファイバーチャネル接続を、優先 (preferred) (デフォルト条件)、必須 (always)、不可 (never) のいずれかに設定します。指定しない場合は、マスターサーバーのデフォルトが使用されます。この値は、EMM サーバーのグローバル定義に従って、デフォルトで設定されます。次に、指定可能な -ftpref 値について説明します。

- **preferred**。構成済みの待機時間 (分単位) 内に FT デバイスが利用可能な場合は、FT デバイスを使います。待機期間の経過後に FT デバイスが利用できない場合、NetBackup は LAN 接続を使用して操作を行います。また、このオプションを選択する場合は、バックアップおよびリストアの待機期間も指定します。
- **常時 (Always)**。NetBackup は、SAN クライアントのバックアップとリストア用 FT デバイスを常に使い、FT デバイスが利用可能になるまで操作の開始を待機します。
- **失敗 (Fail)**。NetBackup は、FT デバイスが起動していない場合やオンラインでない場合はジョブに失敗します。FT デバイスがオンラインであってもビジーの場合には、NetBackup はデバイスが利用可能になり、デバイスに次のジョブを割り当てるまで待機します。すべての FT デバイスが実行されていない、設定されていない、または SAN クライアントのライセンスが期限切れであるなどの理由で、FT デバイスが存在しない場合があります。
- **使用しない (Never)**。NetBackup は、SAN クライアントのバックアップとリストアに FT パイプを使わず、バックアップとリストアに LAN 接続を使います。マスターサーバーに[使用しない (Never)]を指定した場合にはファイバートランスポートは NetBackup 環境で無効になり、クライアントごとに FT 使用を設定できます。メディアサーバーに[使用しない (Never)]を指定すれば、ファイバートランスポートはメディアサーバーで無効になります。SAN クライアントに[使用しない (Never)]を指定すれば、ファイバートランスポートはクライアントで無効になります。

`-ftrwait minutes`

リストアジョブが、標準ネットワーク接続を使用する前に、ファイバーチャネル接続の利用を待機する分数を定義します。このオプションは、ftpref が推奨 (preferred) に設定されている場合にのみ有効です。

`-ftwait minutes`

バックアップジョブが、標準ネットワーク接続を使用する前に、ファイバーチャネル接続の利用を待機する分数を定義します。このオプションは、ftpref が推奨 (preferred) に設定されている場合にのみ有効です。

`-np number_of_ports`

このオプションでは、1 つのメディアサーバーで同時に使用可能なクライアントポートの最大数を指定します。クライアントポートの最大数がゼロ (0) に設定されている場合は、すべてのポートが使用されます。デフォルトのクライアントポート数は 2 です。

`-deleteclient`

このオプションを指定すると、指定したクライアントが EMM データベースから削除されます。このオプションでは、次の属性を指定することができます。

- C *client\_name*  
このオプションでは、データベースから削除する **SAN** クライアントの名前を指定します。
- changeclient  
このオプションを指定すると、特定の **SAN** に関連付けられたオプションが変更されます。このコマンドオプションでは、次の属性を設定できます。
- C *client\_name*  
データベースに追加する **SAN** クライアントの名前を指定します。
- ftpref preferred | always | never  
メディアサーバーへのファイバーチャネル接続が、推奨 (**preferred**)、必須 (**always**) または不可 (**never**) のいずれかに設定されます。指定しない場合は、マスターサーバーのデフォルトが使用されます。この値は、EMM サーバーのグローバル定義に従って、デフォルトで設定されます。
- ftwait *minutes*  
バックアップジョブが、標準ネットワーク接続を使用する前に、ファイバーチャネル接続の利用を待機する分数を定義します。このオプションは、ftpref が推奨 (**preferred**) に設定されている場合にのみ有効です。
- ftrwait *minutes*  
リストアジョブが、標準ネットワーク接続を使用する前に、ファイバーチャネル接続の利用を待機する分数を定義します。このオプションは、ftpref が推奨 (**preferred**) に設定されている場合にのみ有効です。
- rescanallclients  
すべてのクライアント (一度に 5 つまで) で新しい **FT** デバイスをスキャンします。
- rescanclient  
指定したクライアントで新しい **FT** デバイスをスキャンします。このコマンドオプションでは、次の属性を設定できます。
- client\_name*  
スキャンする **SAN** クライアントの名前を指定します。
- listclients  
**SAN** クライアントのリストとそのクライアントに関連付けられた属性を表示します。デフォルトでは、すべての **SAN** クライアントが一部の属性とともに表示されます。listclients によって出力される情報は、すべてのクライアントが表示されるか、または指定した **SAN** クライアントに関連付けられた属性が表示されるかによって異なります。
- このコマンドオプションでは、次の属性を設定できます。

**-C client\_name**

このオプションでは、情報を表示する **SAN** クライアントの名前を指定します。この属性を省略すると、listclients によって、指定したメディアサーバーまたはマスターサーバーに接続されているすべてのクライアントに関する情報が表示されます。

**-Me media\_server**

このオプションでは、情報を表示するクライアントが接続されている **FT** サーバーの名前を指定します。

**-M master\_server**

このオプションでは、**FT** サーバーに関連付けられたマスターサーバーを指定します。このオプションを省略すると、すべての **FT** サーバーが戻されます。

**-verbose**

出力は、詳細モードおよび非詳細モード (デフォルト) で表示できます。マスターサーバーまたはメディアサーバーに接続されているすべてのクライアントを表示する場合、複数クライアントの詳細モード出力の情報が含まれます。

クライアントレコードに関する次の情報が詳細モードで表示されます。

**SAN** クライアント名

バージョン (クライアントの **NBU** ソフトウェアのバージョン)

状態 (**SAN** クライアントの状態)

マスターサーバー名

**SAN** クライアントが接続できる **FT** サーバーの台数

使用設定 (addclient を参照)

使用設定の待機時間 (addclient を参照)

listclients コマンドに特定の **SAN** クライアントが含まれている場合、そのクライアントに関する次の情報が表示されます (1 つのクライアントの出力)。

クライアントのデバイスレコードに関する次の情報が詳細モードで表示されません。

**SAN** クライアントのデバイスの状態

メディアサーバー名

メディアサーバーの状態

デバイスが検出されたメディアサーバーの **HBA** ポート番号

メディアサーバーの **HBA** ポートモード

**LUN** (**HBA** ポートに関連付けられた **LUN**)

デフォルトの状態は非詳細モードの出力です。情報は、詳細モードと同様、空白で区切られたテキスト形式で出力されます。クライアントのレコードは「c」、デバイスのレコードは「d」の文字で始まります。

**-deleteserver**

このオプションを指定すると、指定したクライアントが EMM データベースから削除されます。このコマンドオプションでは、次の属性を設定できます。

**-Me media\_server**

削除する FT サーバー名を指定します。

**-changeserver**

FT サーバーに関連付けられた属性が変更されます。このコマンドオプションでは、次の属性を設定できます。

**-Me media\_server**

変更する FT サーバー名を指定します。

**-M master\_server**

このオプションでは、指定したメディアサーバーに関連付けられたマスターサーバーを指定します。

**-l connection\_limit**

FT サーバーがサポートする最大接続数を指定します。この数には、LUN または HBA ごとの数ではなく、サーバーの合計を指定します。このオプションを省略すると、FT サーバーのデフォルトの接続最大数が使用されます。

**-state [active | disabled]**

このオプションでは、FT サーバーの割り当て状態を指定します。指定できる値は、有効 (**active**) および無効 (**disabled**) です。

**-listservers**

このオプションを指定すると、FT サーバーのリストとサーバーに関連付けられた属性が表示されます。デフォルトでは、すべての FT サーバーが表示されます。

listservers コマンドには、次のオプションが関連付けられています。

**-Me media\_server**

このオプションでは、接続されている FT サーバーを表示するメディアサーバーの名前を指定します。

**-M master\_server**

このオプションでは、接続されている FT サーバーを表示するマスターサーバーの名前を指定します。

**-verbose**

このオプションを指定すると、詳細なサーバー情報が出力されます。



出力は、詳細モードおよび非詳細モード(デフォルト)で表示できます。マスターサーバーまたはメディアサーバーに接続されているすべてのクライアントを表示する場合、複数クライアントの詳細モード出力の情報が含まれます。

サーバーレコードに関する次の出力情報が詳細モードで表示されます。

#### **SAN** クライアント名

#### **FT** サーバー名

バージョン (サーバーの **NBU** ソフトウェアのバージョン)

状態 (**FT** サーバーの状態)

接続最大数

`listclients` コマンドに特定の **SAN** クライアントが含まれている場合、そのクライアントに関する次の情報が表示されます (1 つのクライアントの出力)。

クライアントのデバイスレコードに関する次の出力情報が詳細モードで表示されます。

**FT** サーバーの **HBA** ポート

**FT** サーバーの **HBA** ポートモード

**FT** サーバーのデバイスの状態

関連付けられている **LUN**

**FT** 接続 (指定した **HBA** または **LUN** 上の有効な **FT** 接続数)

デフォルトの状態は非詳細モードの出力です。情報は、詳細モードと同様、空白で区切られたテキスト形式で出力されます。メディアサーバーのレコードは「**m**」、デバイスのレコードは「**d**」の文字で始まります。各サーバー上の **HBA** ポート番号は、1 行の個別のエントリとして出力されます。

#### **-listtargets**

この操作は **FT** メディアサーバーのすべてのターゲットポートの仕様のリストを表示するために使われます。デフォルトでは、すべての **FT** サーバーが表示されます。

`listtargets` コマンドには、次のオプションが関連付けられています。

#### **-Me** *media\_server*

このオプションでは、ターゲットポートの構成を表示するメディアサーバーの名前を指定します。メディアサーバーを指定しない場合、すべての **FT** メディアサーバーのターゲットポートの情報が表示されます。

#### **-verbose**

このオプションを指定すると、詳細なサーバー情報が出力されます。

出力は、詳細モードおよび非詳細モード(デフォルト)で表示できます。すべてのクライアントを表示する場合、複数クライアントの詳細モード出力の情報が含

まれます。デフォルトの状態は非詳細モードの出力です。情報は、詳細モードと同様、空白で区切られたテキスト形式で出力されます。

例 2 に、`nbftconfig -listtargets -verbose` コマンドの使用方法和出力データのカテゴリを示します。

#### `-getconfig`

このオプションを指定すると、FT サーバーと SAN クライアントの属性に関するデフォルトの構成パラメータが取得されます。

`-getconfig` コマンドには、次のオプションが関連付けられています。

#### `-M master_server`

このオプションでは、FT サーバーに関連付けられたマスターサーバーを指定します。このオプションの指定を省略すると、ローカルマシンのマスターサーバーが使用されます。

#### `-verbose`

このオプションを指定すると、詳細な構成情報が出力されます。

#### `-setconfig`

このオプションを指定すると、FT サーバーと SAN クライアントの属性に関する構成パラメータが設定されます。このコマンドオプションでは、次の属性を設定できます。

#### `-ftpref preferred | always | never`

メディアサーバーへのファイバーチャネル接続が、推奨 (**preferred**)、必須 (**always**) または不可 (**never**) のいずれかに設定されます。この値は、EMM サーバーのグローバル定義に従って、デフォルトで設定されます。

`-ftpref` と `-np` または `-ncp` の使用は相互に排他的です。

#### `-ftwait minutes`

バックアップジョブが、標準ネットワーク接続を使用する前に、ファイバーチャネル接続の利用を待機する分数を定義します。このオプションは、`ftpref` が推奨 (**preferred**) に設定されている場合にのみ必要です。

#### `-ftrwait minutes`

リストアジョブが、標準ネットワーク接続を使用する前に、ファイバーチャネル接続の利用を待機する分数を定義します。このオプションは、`ftpref` が推奨 (**preferred**) に設定されている場合にのみ必要です。

#### `-ncp number_of_clients_per_target_port`

任意の FT メディアサーバーで許可されるクライアントのターゲットポートごとの最大数を指定します。

#### `-np number_of_ports`

1 つの FT メディアサーバーで使うことができるクライアントのイーサネットポートの数を指定します。

**-listactive**

このオプションを指定すると、有効な FT 接続が表示されます。このコマンドでは、各 FT 接続について少なくとも次の情報が取得可能です。

**SAN クライアント名**

クライアントの HBA 番号

FT サーバー名

サーバーの HBA 番号

FT チャネル (FT チャネルの数)

LUN

接続の方向

ジョブ番号

listactive コマンドには、次のオプションが関連付けられています。

**-C *client\_name***

このオプションでは、有効な FT 接続を表示する SAN クライアントの名前を指定します。この属性およびメディアサーバー属性を省略すると、-listactive によって、ローカルマシンのマスターサーバーに関する情報が表示されます。

**-Me *media\_server***

このオプションでは、FT 接続を表示するクライアントが接続されている FT サーバーの名前を指定します。

**-verbose**

このオプションを指定すると、詳細な FT 接続情報が出力されます。

## 例

例 1 - マスターサーバー wendigo の FT 構成の値を詳細モードで表示しています。これらの値は nbftconfig -getconfig コマンドで設定されます。

```
nbftconfig -getconfig -verbose
Master Server : wendigo.min.veritas.com
Client Ports/Server: 2
Clients/Target port: 2
FT Preference : preferred
Backup Wait Time : 15
Restore Wait Time : 5
```

例 2 - どのように -listtargets オプションが FT メディアサーバー wendigo のすべてのターゲットポートの構成の仕様を詳細モードで表示するかを示しています。

```
nbftconfig -listtargets -verbose
FT Server Name : wendigo.min.veritas.com
FT Server HBA Port : 1
FT Server Port WWN : 21:00:00:E0:8B:8F:CC:79
FT Server Port Mode : PTP
FT Server Port Model : QLA234x Series FC Hba
FT Server Port Vendor: Qlogic
FT Server Device State : active
Associated LUN : 0
Active Connections on LUN: 0
FT Server Device State : active
Associated LUN : 1
Active Connections on LUN: 0
FT Server HBA Port : 0
FT Server Port WWN : 21:01:00:E0:8B:AF:CC:79
FT Server Port Mode : DISCONNECTED
FT Server Port Model : QLA234x Series FC Hba
FT Server Port Vendor: Qlogic
FT Server Device State : active
Associated LUN : 0
Active Connections on LUN: 0
FT Server Device State : active
Associated LUN : 1
Active Connections on LUN: 0
```

# nbgetconfig

nbgetconfig - 構成情報を取得するためのヘルパープログラム

## 概要

```
nbgetconfig -M host [-x | -X | -d | -D] [config_item ...]
```

```
nbgetconfig [-u | -h] [-x | -X | -d | -D] [config_item ...]
```

UNIX システムでは、このコマンドのディレクトリパスは /usr/opensv/netbackup/bin/ です。

Windows システムでは、このコマンドのディレクトリパスは <install\_path>%NetBackup%bin% です。

## 機能説明

nbgetconfig コマンドは、すべての NetBackup ホストプラットフォームに使用できます。このコマンドを使用すると、指定したホストの構成情報を様々な形式で表示できます。

このコマンドを実行するには、管理者権限が必要です。

## オプション

-D | -d

-D オプションは、構成のエントリ名、角カッコで囲んだ既存の構成値、およびカッコで囲んだデフォルトの構成値のリストを戻します。この操作はローカルまたはリモートで実行できます。netbackup が同一のバージョンのリモートマシンがインストールされます。-D オプションと -d オプションは、-M、-h、-u の各オプションと組み合わせることができます。

次は、-D オプションが戻す一覧の一部です。

```
...
REQUEST_DELIVERY_TIMEOUT [300] (300)
DISABLE_SCSI_RESERVE [NO] (NO)
Time_Overlap [60] (60)
Buffer_Size [16] (16)
Use_Archive_Bit [YES] (YES)
Perform_Default_Search [YES] (YES)
Accumulate_Files [NO] (NO)
...
```

-d オプションは、-d が構成のデフォルトから変更されたエントリのみを表示することを除き、-D のように機能します。次に表示例を示します。

```

..
PEM_VERBOSE [-1] (0)
JM_VERBOSE [-1] (0)
RB_VERBOSE [-1] (0)
CONNECT_OPTIONS [**configured**] ()
Exclude [**configured**] ()
Browser [teburi.min.vrts.com] ()
AUTHENTICATION_DOMAIN [**not configured**] ()
VXSS_NETWORK [**not configured**] ()
PREFERRED_NETWORK [**not configured**] ()
...

```

多数の構成項目に関する詳細は、次に記載されています。『[NetBackup 管理者ガイド Vol. 1](#)』。

- H *config\_item*  
このオプションを指定すると、有効な構成項目が表示されます。
- h  
このオプションを指定すると、デフォルトのローカルホスト構成が表示されます。
- M *host*  
その構成を表示する **NetBackup** ホストまたはクライアントを指定します。
- u  
このオプションを指定すると、現在のユーザー構成が表示されます。
- X  
このオプションを指定すると、デフォルトですべての構成項目が表示されます。-x オプションと -X オプションは、-M、-h、-u の各オプションと組み合わせることができません。コマンドラインに 1 つ以上の構成項目を指定した場合、-x オプションおよび -X オプションは無効になります。  
**config\_item** を指定すると、指定した構成項目に表示されます。
- x  
このオプションを指定すると、構成内に明示的に表示されていない項目が除外されます。

## 例

例 1 - **bp.conf** ファイルから **VERSIONINFO** オプションの設定を取り込みます。

```

nbgetconfig VERSIONINFO
VERSIONINFO = "Windows2008" "6" "win_x64" "NetBackup" "7.6" 760000

```

## 関連項目

- p.649 の [nbsetconfig](#) を参照してください。
- p.152 の [bpgetconfig](#) を参照してください。
- p.376 の [bpsetconfig](#) を参照してください。

# nbhba

nbhba – HBA カードデバイス ID を変更するユーティリティの実行

## 概要

```
nbhba -modify -wwn string [-wwn <wwn string> ...] -mode target |
initiator
nbhba -l | -L
```

The directory path to this command is /usr/opensv/netbackup/bin/

## 機能説明

このコマンドは UNIX システムでのみ動作します。

nbhba コマンドを実行すると、管理者はシステムの HBA カードのモードを設定することができます。HBA カードは、ターゲットモードまたはイニシエータモードのデバイスとして応答できます。SAN クライアントで使用するように HBA カードのモードを変更するには、QLogic カードのデバイス ID を変更します。デバイス ID を、標準の指定から、ターゲットモードドライバのみをロードできる特別な設定に変更します。

## オプション

-l, -L

-l は、システムにインストールされているすべての HBA カードのドライバをリストします。また、-L はカードについての情報をリストします。各 HBA ポートについて次の情報が表示されます。

- Linux システムの場合のみ: データの 1 行目は、認識されるポートの数、ターゲットモードポートの数、ドライバのモード (たとえば、nbhba がインストールされているなど) をリストします。
- HBA Index: システム内の HBA カードの相対番号。この番号はシステムが再ブートされるまで有効です。
- Device ID: カードから読み込まれたデバイス ID。
- World Wide Name: カードから読み込まれたワールドワイドネーム。
- Model Name: カードがインストールされているシステム内の物理スロット。
- Port - HBA カードのポート。値は 0 または 1 です。
- Mode: カードのモード (ターゲット (target) またはイニシエータ (initiator))



**-modify**

このオプションを指定すると、HBA カードのモードが変更されます。ワールドワイドネーム (wwn) を使用して変更する HBA カードを指定します。

カードのモードには、ターゲットまたはイニシエータを指定できます。ターゲットモードは、SAN クライアントの終端として使用されます。イニシエータモードは、メディアサーバーのディスクリソースを接続します。必要に応じて、管理者は、ターゲットモードまたはイニシエータモードのいずれかのドライバに対して、特定の QLogic デバイス ID を入力できます。

**-wn string**

このオプションでは、HBA カードのワールドワイドネームを指定します。この必須の選択条件によって、マークするカードおよびポートが指定されます。

**-mode target | initiator**

このオプションでは、指定した HBA カードのモードを設定します。ターゲットモードでは、SAN クライアントのターゲットとして HBA が使用されます。ターゲットモードとして設定されたことのない既存のカードは、イニシエータモードに設定しないでください。

## 例

例 1 - ワールドワイドネームが「123456789ABCDEF0」である HBA ポートをターゲットモードに設定します。

```
nbhba -modify -wn 123456789ABCDEF0 -mode target
```

例 2 - Linux システムにインストールされているすべての HBA カードの情報がリストされます (出力の 1 行目を参照してください)。Card #2 が両方のポートを使うことに注意してください。

```
nbhba -L
```

```
4 ports recognized; 3 target mode ports; mode : driver in nbhba mode
```

```
Card #1
```

```
HBA Index #1
```

```
Device ID = 2312
```

```
World Wide Name = 21:00:00:E0:8B:8F:E6:45
```

```
Model Name = "QLA2340 "
```

```
Port = 0
```

```
Mode = initiator (designated for other use) (100)
```

```
Card #2
```

```
HBA Index #2
```

```
Device ID = 2312
```

```
World Wide Name = 21:00:00:E0:8B:9A:22:3D
Model Name = "QLA2342 "
Port = 0
Mode = target (designated for FT Server) (8101) HBA Index #3
Device ID = 2312
World Wide Name = 21:01:00:E0:8B:BA:22:3D
Model Name = "QLA2342 "
Port = 1
Mode = target (designated for FT Server) (8101)
```

#### Card #3

```
HBA Index #4
Device ID = 2422
World Wide Name = 21:00:00:E0:8B:9B:28:89
Model Name = "QLA2460 "
Port = 0
Mode = target (designated for FT Server) (8133)
```

例 3 - この例は、例 2 の詳細な表示形式 `-L` に対し、簡易な表示形式 `(-l)` です。システムにインストールされているすべての HBA カードのドライバのみをリストします。出力の 1 行目 (4 ports recognized...) が Linux システムでのみ表示されることに注意してください。

```
nbhba -l
4 ports recognized; 3 target mode ports; mode : driver in nbhba mode

1 2312 21:00:00:E0:8B:8F:E6:45 "QLA2340 " 0 0 100
2 2312 21:00:00:E0:8B:9A:22:3D "QLA2342 " 0 1 8101
3 2312 21:01:00:E0:8B:BA:22:3D "QLA2342 " 1 1 8101
4 2422 21:00:00:E0:8B:9B:28:89 "QLA2460 " 0 1 8133
```

# nbholdutil

nbholdutil - バックアップイメージに保留を付加または削除するユーティリティを実行します。

## 概要

```
nbholdutil -create -holdname hold_name [-reason "string"] -filepath
filepath | -backupid backup_ID -primarycopy | -allcopy
nbholdutil -add -holdid hold_id | -holdname hold_name [-reason
"string"] -filepath filepath | -backupid backup_ID -primarycopy |
-allcopy
nbholdutil -list [-holdid hold_id] | [-holdname hold_name] |
[-backupid backup_ID -primarycopy | -allcopy] [-U
[-include_extended_info]]
nbholdutil -list -holdname hold_name -U -include_extended_info >
bid.txt
nbholdutil -delete -holdid hold_id | -holdname hold_name [-force]
[-reason "string"]
```

UNIX システムでは、このコマンドへのディレクトリパスは

/usr/opensv/netbackup/bin/goodies です。

Windows システムでは、このコマンドへのディレクトリパスは

<install\_path>%NetBackup%bin%goodies です。

## 機能説明

nbholdutil ユーティリティはバックアップイメージにリーガルホールドを付加します。リーガルホールドは、既存の保持レベルを上書きするための機構を提供します。これらの保留によって、適正な進行が完了するまでバックアップイメージおよび関連付けられたメディアが保持されるようにします。

nbkmsutil コマンドは次の操作を実行します。

- -create はバックアップイメージに対し、1つ以上のローカル保留上に保留を作成します。
- -add は既存の保留に1つ以上のイメージを追加します。
- -list はすべての保留のリストを出力します。この操作によってもバックアップ ID (BID) ファイルが作成されます。
- -delete は1つ以上の保留を削除します。

このコマンドは、認可済みユーザーだけが実行できます。

## オプション

- allcopy  
指定したバックアップイメージのすべてのコピーを含めます。
- backupidbackup\_ID  
バックアップイメージのバックアップ ID を指定します。
- filepath *filepath* | -primarycopy | -allcopy  
バックアップイメージにファイルパスを指定します。
- force  
ローカルホールドの解除を確認するためのプロンプトを回避します。このオプションは、プロンプトへの応答を待たずに解除操作を続行できるので、スクリプトに有用です。
- holdname *hold\_name*  
一意の保留名を指定します。
- include\_extended\_info > *bid.txt*  
保留中のイメージに関する詳細情報を提供し、その情報を格納するバックアップ (BID) を作成します。
- primarycopy  
指定したバックアップイメージのプライマリコピーのみを含めます。
- reason "*string*"  
このコマンド処理を実行するための理由を示します。入力する理由の文字列は取得され、監査レポートに表示されます。文字列は二重引用符 ("...") で囲みます。また、文字列は 512 文字を超えることができません。それはハイフンの文字 (-) から始まり単一の引用符 (!) を含む場合があります。
- U  
追加のユーザー情報が含まれるユーザー形式でレポートします。

## 例

例 1 - `legal_case1` という名前のローカル保留を作成します。バックアップイメージ ID は `win81.sky.com_1307425938` です。-allcopy オプションは、選択したバックアップイメージのすべてのコピーを保留に含めることを示します。このオプションが含まれていない場合、検索操作では選択したバックアップイメージのプライマリコピーのみを保留します。

```
nbholdutil -create -holdname legal_case1 -backupid
win81.sky.com_1307425938 -allcopy
```

## 関連項目

p.598 の [nbindexutil](#) を参照してください。

# nbindexutil

nbindexutil – 既存のバックアップイメージに対してインデックス要求を追加、リスト、削除するユーティリティを実行します

## 概要

```
nbindexutil -add -bid backup_ID | -bid_file filename -indexserver
index_server_name [-force] [-operation 1 | 2] [-priority priority]
nbindexutil -invalidateindices -indexserver index_server_name -index
index_name | -index_file filepath
nbindexutil -list -inprogress | -waiting | -indexed | -failed
-indexserver index_server_name [-out filepath] [-date_from mm/dd/yyyy
HH:MM:SS] [-date_to mm/dd/yyyy HH:MM:SS] [-hoursago hours]
nbindexutil -listindexservers
nbindexutil -listindices -indexserver index_server_name [-invalid]
[-indexed_after mm/dd/yyyy [hh:mm:ss]] [-out filepath]
nbindexutil -listpolicies -indexserver index_server_name [-out
filepath]
nbindexutil -migrateindexserver -old_indexserver index_server_name
-new_indexserver index_server_name [-policyonly]
nbindexutil -reindex -indexserver index_server_name -invalid |
-indexed_after mm/dd/yyyy [hh:mm:ss]
nbindexutil -remove -bid backup_ID | -bid_file filename
nbindexutil -removeindexserver | -suspend | -resume -indexserver
index_server_name
nbindexutil -resume index_server_name
nbindexutil -suspend index_server_name
nbindexutil -upgrade
nbindexutil -help operation
```

UNIX システムでは、このコマンドのディレクトリパスは

/usr/opensv/netbackup/bin/admincmd です。

Windows システムでは、このコマンドへのディレクトリパスは

<install\_path>%NetBackup%\bin\admincmd% です。

## 機能説明

nbindexutil ユーティリティはバックアップイメージをインデックス付けします。次の操作が実行されます。

- -add はバックアップイメージのインデックス要求または削除要求を送信します。  
-operation オプションを指定すると、追加操作または削除操作を選択できます。操作

の優先度を高低に設定できます。**-force** を指定すると、すでにインデックス付けされているバックアップ ID のインデックスを作成し直すことができます。

- **-invalidateindices** は指定されたインデックスを無効にします。
- **-list** はイメージの現在のインデックス付け状態 (待機中、進行中、インデックス済み、失敗) をリスト表示します。
- **-listindexservers** はすべての構成されたインデックスサーバーとその状態をリスト表示します。
- **-listindices** は特定の条件のインデックスをリスト表示します。
- **-listpolicies** は指定のインデックスサーバーに関連するすべてのポリシーをリスト表示します。
- **-migrateindexserver** は現在のインデックスサーバーから新しいインデックスサーバーに移行します。
- **-reindex** は無効なイメージのインデックスを作成し直します。
- **-remove** はバックアップ ID のインデックス付けの要求を削除します。
- **-removeindexserver** は指定のインデックスサーバーを削除 (廃止) します。
- **-removeindexserver** は指定のインデックスサーバーを削除 (廃止) します。
- **-resume** は一時停止中のインデックスサーバーを再開します。これにより、新しいインデックス付けジョブをこのインデックスサーバーで実行できるようになります。
- **-suspend** はインデックスサーバーのインデックス処理を一時停止します。
- **-upgrade** はすべての構成されたインデックスサーバーを **NetBackup 7.5** から **NetBackup 7.6** 以上にアップグレードします。
- **-help** は指定された操作の構文を表示します。

このユーティリティは **NetBackup** の検索機能の一部です。

『**NetBackup Search 管理者ガイド**』を参照してください。

このコマンドは、認可済みユーザーだけが実行できます。

## オプション

`-bid backup_ID | -bid_file filename`

- **-bid** は **backup\_ID** を使用してバックアップ ID を明示的に指定します。または
- **-bid\_file** を使用して 1 つ以上のバックアップ ID を含むファイルのパスを指定します。

```
-date_from mm/dd/yyyy HH:MM:SS -date_to mm/dd/yyyy HH:MM:SS |
-hoursago hours
```

指定した日時範囲内に検索を制限します。-indexed オプションまたは -failed オプションとともに、-date\_from オプション、-date\_to オプションのいずれかまたは両方を入力してください。-date\_from のみ入力すれば、検索は指定日から現在になります。-date\_to のみ入力すれば、検索は指定日までのすべてのファイルで実行されます。日付は 1970 年 1 月 1 日より後の日付でなければなりません。

---

**メモ:** 時間の指定 (HH:MM:SS) には秒 (SS) を含める必要があります。

---

-hoursago hours) オプションは、インデックス付けされた、またはインデックス付けが失敗したイメージをリスト表示するための過去の時間数を指定します。たとえば、最新の 5 時間にインデックス付けが成功または失敗したイメージをリスト表示するには -hoursago 5 を入力してください。hours の有効な値は、整数 (1、2、3、...) です。

```
-force
```

すでにインデックス付けされているバックアップ ID を再インデックス付けします。このオプションは待機または進行中の状態にあるバックアップ ID のインデックスを再インデックス付けしません。このオプションは -operation オプションが 1 (新しいイメージを追加する) に設定されるときのみ有効です。

1 つのインデックスサーバーでイメージを正常にインデックス付けした場合は、-force を使用して別のインデックスサーバーでインデックス付けを強制的に試行しないでください。代わりに、nbindexutil -add -operation 2 コマンドを実行して、最初のインデックスサーバーのそのイメージのインデックススクリーンアップを実行します。その後、別のインデックスサーバーでイメージを再送信します。

-force オプションは、ディザスタリカバリの後でインデックスサーバーのイメージを再インデックス付けするために使用します。たとえば、時刻 t1 にインデックスサーバーをバックアップします。後で、時刻 t2 にそのインデックスサーバーのイメージ B1 をインデックス付けします。障害がそのインデックスサーバーで発生したとき、時刻 t1 にとったバックアップからインデックスサーバーをリストアします。nbindexutil は、マスターサーバーでインデックス付けされたが、インデックスサーバーにそのインデックス情報がないために検索結果の一部にはない B1 をリスト表示します。その後、-force オプションを使用してイメージのインデックスを変更できます。

```
-help operation
```

指定済みの操作に関する、特定の使用状況のヘルプを取得します。たとえば、-list コマンドオプションを使用する構文を表示するには、次のように入力します。

```
#nbindexutil -help -list
```



- `-index index_name`  
`-invalidateindices` とともに使用し、単一の指定されたインデックスを無効化します。
- `-index_file filepath`  
インデックス名のリストを含むファイルのディレクトリパスを指定します。
- `-indexed_after mm/dd/yyyy [hh:mm:ss]`  
指定した日付と時間 (任意) 以降にインデックス付けされたイメージで、指定された操作を実行します。
- `-indexserver index_server_name`  
インデックスサーバー名を指定します。
- `-inprogress | -waiting | -indexed | -failed`  
表示したい次のイメージのカテゴリを 1 つ選択します。
- `-inprogress` はインデックス付けが進行中であるすべてのイメージをリストします。
  - `-waiting` はインデックス付けを待機しているすべてのイメージをリストします。
  - `-indexed` は現在の日付または指定された日時範囲のすべてのインデックス付きのイメージをリスト表示します。
  - `-failed` は現在の日付または指定された日時範囲にインデックス付けに失敗したすべてのイメージをリスト表示します。
- `-indexed` と `-failed` では、次の日付オプションのいずれかまたは両方を入力して、指定した日付範囲にリストを絞り込むことができます。
- `-invalid`  
無効なインデックスでのみ操作 (`-listindices` または `-reindex`) を実行します。
- `-invalidateindices`  
無効なインデックスでのみ操作 (`-listindices` または `-reindex`) を実行します。
- `-new_indexserver`  
このオプションは、`-migrateindexserver` 操作と組み合わせて使って移行元の古いインデックスサーバーを指定します。
- `-old_indexserver`  
このオプションは、`-migrateindexserver` 操作と組み合わせて使って移行先の新しいインデックスサーバーを指定します。
- `-operation 1 | 2`  
選択したイメージに実行する操作を決定します。指定可能な値は、次のとおりです。
- 1 - 新しいイメージを追加します。この値がデフォルト条件です。

- 2 - 指定されたイメージのインデックス情報を削除します。

-indexserver オプションは削除操作には適用されません。

-out *filepath*

操作の出力を指定ファイルにリダイレクトします。

-policyonly

このオプションは、-migrateindexserver 操作と組み合わせて使ってポリシー専用情報を更新していることを指定します。

-priority *priority*

優先度を高または低に設定します。デフォルト条件は低です。

## 例

過去 48 時間にインデックス付けされたイメージをリストします。

```
nbindexutil -list -indexed -hoursago 48
```

## 関連項目

p.595 の [nbholdutil](#) を参照してください。

# nbjm

nbjm – NetBackup Job Manager によるジョブの発行およびジョブの開始に必要なリソースの取得

## 概要

nbjm [-console] [-terminate]

UNIX システムでは、このコマンドのディレクトリパスは /usr/opensv/netbackup/bin/ です。

Windows システムでは、このコマンドのディレクトリパスは <install\_path>%NetBackup%bin% です。

## 機能説明

NetBackup Job Manager バイナリ (nbjm) は、NetBackup の起動時に起動されるサービスで、実行状態で常駐します。このバイナリの主要な機能は、nbpem によって発行されたジョブを受け入れ、そのジョブの実行に必要なリソースを取得してから、ジョブを開始することです。このサービスはジョブの完了を待機して、ジョブが完了すると nbpem にシグナルを送信します。また、アクティビティモニター情報の bpjobd に対するすべての IRM 通信および外部リソース要求を処理し、進捗ログに書き込みます。

## オプション

-console

このオプションを指定すると、コンソールモードで NetBackup を起動できます。

-terminate

このオプションでは、終了する前にジョブが完了するまで待機する時間 (秒数) のオプションパラメータを受け入れます。デフォルトは 60 秒です。0 の値を入力した場合、nbjm は、すべてのジョブが完了するまで待機してから終了します。終了に対して制限値を設定した場合、その制限値に達すると、nbjm はジョブの完了を待機せずに終了します。

## 関連項目

p.612 の nbpem を参照してください。

p.625 の nbrb を参照してください。

# nbkmsutil

nbkmsutil – NetBackup キーマネジメントサービスユーティリティの実行

## 概要

```
nbkmsutil [-createkey] [-createkg] [-deletekey] [-deletekg]
[-gethmkid] [-getkpkid] [-ksstats] [-listkeys] [-listkgs] [-modifyhmk]
[-modifykey] [-modifykg] [-modifykpk] [-quiescedb] [-recoverkey]
[-unquiescedb]
nbkmsutil -createkey [-nopphrase] -kgname key_group_name -keyname
key_name [-activate] [-desc description]
nbkmsutil -createkg -kgname key_group_name [-cipher type] [-desc
description]
nbkmsutil -deletekey -keyname key_name -kgname key_group_name
nbkmsutil -deletekg -kgname key_group_name
nbkmsutil -gethmkid
nbkmsutil -getkpkid
nbkmsutil -ksstats [-noverbose]
nbkmsutil -listkeys -kgname key_group_name [-keyname key_name |
-activatekey] [-verbose]
nbkmsutil -listkgs [-kgname key_group_name | -cipher type | -emptykgs
| -noactive] [-verbose]
nbkmsutil -modifyhmk [-nopphrase]
nbkmsutil -modifykey -keyname key_name -kgname key_group_name [-state
new_state | -activate] [-name new_keyname] [-desc new_description
]
nbkmsutil -modifykg -kgname key_group_name [-name new_key_group_name
] [-desc new_description]
nbkmsutil -modifykpk [-nopphrase]
nbkmsutil -quiescedb
nbkmsutil -recoverkey -keyname key_name -kgname key_group_name -tag
key_tag [-desc description]
nbkmsutil -unquiescedb
```

UNIX システムでは、このコマンドのディレクトリパスは

/usr/opensv/netbackup/bin/admincmd/ です。

Windows システムでは、このコマンドのディレクトリパスは

<install\_path>%NetBackup%\bin\admincmd\ です。

## 機能説明

nbkmsutil コマンドは次の操作を実行します。

-createkey	新しいキーを作成します。新しいキーのデフォルトの状態は <b>prelive</b> です。
-createkg	新しいキーグループを作成します。新しいキーグループのデフォルトの暗号は <b>AES_256</b> です。
-deletekey	キーを削除します。 <b>prelive</b> および <b>terminated</b> 状態のキーのみを削除できます。
-deletekg	キーグループを削除します。空のキーグループのみを削除できます。
-gethmkid	現在の <b>HMK ID</b> を返します。
-getkpkid	現在の <b>KPK ID</b> を返します。
-ksstats	キースタの統計を返します。統計には、キーグループの数、キーの合計数および未処理の静止要求が含まれます。
-listkeys	キーの詳細を取得します。
-listkgs	キーグループの詳細を取得します。オプションが指定されない場合は、すべてのキーグループの詳細を取得します。
-modifyhmk	ホストマスターキー ( <b>HMK</b> ) を変更します。 <b>HMK</b> は、キースタの暗号化に使用します。 <b>HMK</b> を変更するには、任意のシード (パスワード) およびその指定されたパスワードをユーザーが連想できるような <b>HMK ID</b> を指定します。パスワードおよび <b>HMK ID</b> は、どちらも対話形式で読み込まれます。
-modifykey	キーの属性を変更します。
-modifykg	キーグループの属性を変更します。
-modifykpk	キーの保護キー ( <b>KPK</b> ) を変更します。 <b>KPK</b> は、 <b>KMS</b> キーの暗号化に使用します。 <b>KPK</b> は、キースタごとに存在します。 <b>KPK</b> を変更するには、任意のシード (パスワード) およびその指定されたパスワードをユーザーが連想できるような <b>KPK ID</b> を指定します。パスワードおよび <b>KPK ID</b> は、どちらも対話形式で読み込まれます。
-quiescedb	<b>KMS</b> へ静止要求を送信します。コマンドが正常に実行されると、現在の未処理の静止数が返されます (複数のバックアップジョブで <b>KMS</b> データベースが静止されてバックアップが行われる場合があるためです。)

-recoverkey	バックアップデータの暗号化に使用したキーが失われた場合、リストアは失敗することがあります。このようなキーは、元のキーの属性 (タグおよびパスフレーズ) がわかれば、リカバリ (再作成) できます。
-unquiescedb	KMS へ静止解除要求を送信します。コマンドが正常に実行されると、現在の未処理の静止数が返されます。カウントが 0 (ゼロ) の場合は、KMS データベースが完全に静止解除されていることを意味します。

## オプション

nbkmsutil コマンドは次のオプションを使用します。

-activate	指定したキーの状態を <b>active</b> に設定します。デフォルトの状態は、 <b>prelive</b> です。
-activekey	特定のキーグループの有効なキーの詳細を取得します。
-cipher	キーグループがサポートする暗号の種類。1 つのキーグループに属するすべてのキーは、同じ暗号形式をサポートします。サポートされる暗号形式は、 <b>BLOW</b> 、 <b>AES_128</b> 、 <b>AES_192</b> および <b>AES_256</b> (デフォルトの暗号) です。
-emptykgs	キーのないすべてのキーグループの詳細を取得します。
-keyname	<b>key_name</b> にはキーの名前を指定します。この名前は、1 つのキーグループ内で一意である必要があります。キーグループの名前およびキーの名前により、キースタアのキーが一意に識別されます。
-kgname	<b>key_group_name</b> はキーグループの名前を指定します。1 つのキースタア内で、キーグループの名前はキーグループを一意に識別します。
-name	<b>-modifykg</b> を指定して使用する場合のキーグループの新しい名前または <b>-modifykey</b> を指定して使用する場合のキーの新しい名前を指定します。新しいキーグループの名前は、キースタア内の他の名前と競合しないようにします。
-noactive	有効なキーが存在しないすべてのキーグループの詳細を取得します。
-nopphrase	パスフレーズを求めるプロンプトを表示するユーティリティの機能を無効にします。代わりに、ユーティリティによってキーが作成されます。デフォルトの状態では、パスフレーズを入力して、シードを使用してキーを作成します。長くて強力なシードを使用すると、堅固なキーが作成できます。

<code>-noverbose</code>	詳細出力を無効にします。デフォルトの状態では詳細出力は有効で、読み取り可能な形式で詳細を出力します。
<code>-state</code>	<p><b>new_state</b> にはキーの新しい状態を指定します。指定可能な状態は、<b>prelive</b>、<b>active</b>、<b>inactive</b>、<b>deprecated</b> および <b>terminated</b> です。</p> <p>キーの状態は、次に示す状態間でのみ変更できます。</p> <ul style="list-style-type: none"><li>■ <b>prelive</b> から <b>active</b></li><li>■ <b>active</b> および <b>inactive</b> 間の移行</li><li>■ <b>inactive</b> および <b>deprecated</b> 間の移行</li><li>■ <b>deprecated</b> および <b>terminated</b> 間の移行</li></ul>
<code>-tag</code>	<p><b>key_tag</b> には、ユーティリティが作成するキーレコードのために作成されるランダムな一意識別子を指定します。<code>listkey</code> オプションはこのタグを表示できます。キーレコードをリカバリ(再作成)する必要がある場合は、これらのリカバリオプションについて、元のタグの値である <b>-tag</b> オプションを使用する必要があります。</p>

# nboraadm

nboraadm – Oracle バックアップポリシーの一部としてのインスタンスおよびインスタンスのグループの設定

## 概要

```
nboraadm [-S master_server] -list_instances [instance_name]
[-instance_group group_name] [-host name] [-os Unix | Windows]
[-active | -inactive] [-registered | -unregistered]
nboraadm [-S master_server] -add_instance instance_name -host name
-oracle_home oracle_home [-instance_group group_name | -os_user name
[-os_domain name] [-oracle_auth user [-oracle_TNS tns]]
[-rman_catalog_user name [-rman_catalog_TNS tns]]] [-force]
nboraadm [-S master_server] -register_instance instance_name [-host
name] [-oracle_home oracle_home] [-new_oracle_home oracle_home]
[-instance_group name | -os_user name [-os_domain name] [-oracle_auth
user [-oracle_TNS tns]] [-rman_catalog_user name [-rman_catalog_TNS
tns]]] [-force]
nboraadm nboraadm -delete_instance instance_name [-S master_server]
[-host name] [-oracle_home oracle_home]
nboraadm [-S master_server] -modify_instance instance_name
[-new_instance instance_name] [-host name] [-new_host name]
[-oracle_home oracle_home] [-new_oracle_home oracle_home]
[-instance_group name | -os_user name [-os_domain name] [-oracle_auth
user [-oracle_TNS tns] | -disable_oracle_auth] [-rman_catalog_user
name [-rman_catalog_TNS tns] | -disable_rman_catalog] [-active |
-inactive] [-force]
nboraadm [-S master_server] -list_instance_groups
[instance_group_name]
nboraadm [-S master_server] -add_instance_group instance_group_name
[-unix_os_user name] [-windows_os_user name] [-os_domain name]
[-oracle_auth user [-oracle_TNS tns]] [-rman_catalog_user name
[-rman_catalog_TNS tns]]
nboraadm [-S master_server] -delete_instance_group name
nboraadm [-S master_server] -modify_instance_group name
[-new_instance_group name] [-unix_os_user name] [-windows_os_user
name -os_domain name] [-oracle_auth user [-oracle_TNS tns] |
-disable_oracle_auth] [-rman_catalog_user name [-rman_catalog_TNS
tns] | -disable_rman_catalog] [-validate]
nboraadm [-S master_server] -auto_registration instance_group_name
```



```
nboradm [-S master_server] -disable_auto_registration
nboradm [-S master_server] -list_dbas
nboradm [-S master_server] -add_dba client_nameuser_name
nboradm [-S master_server] -delete_dba client_nameuser_name
```

UNIX システムでは、このコマンドのディレクトリパスは /usr/opensv/netbackup/bin/ です。

Windows システムでは、このコマンドのディレクトリパスは <install\_path>%NetBackup%bin% です。

## 機能説明

nboradm コマンドは次の操作を実行します。

-list_instances	すべての <b>Oracle</b> インスタンスをレポジトリにリストします。
-add_instance	インスタンスをレポジトリに追加します。
-register_instance	インスタンスまたはインスタンスグループのクレデンシャルを登録します。
-delete_instance	インスタンスを削除します。
-modify_instance	指定されたインスタンスの属性を変更します。
-list_instance_groups	作成されたすべての <b>Oracle</b> インスタンスグループをリストします
-add_instance_group	インスタンスグループをレポジトリに追加します。
-delete_instance_group	インスタンスグループをレポジトリから削除します。
-modify_instance_group	指定されたインスタンスグループの属性を変更します。
-auto_registration	新たに検出されたインスタンスを指定されたインスタンスグループ名に自動的に登録します。
-disable_auto_registration	新しく検出されたインスタンスの自動登録を無効にします。
-list_dbas	指定されたクライアントで nboradm を使えるようにすべての <b>DBA</b> リストを表示します。
-add_dba	<b>NetBackup</b> 管理者がデータベース管理者 ( <b>DBA</b> ) に特定のクライアントで nboradm コマンドを使う機能を付与できるようにします。
-delete_dba	指定されたクライアントで nboradm を使うための指定された <b>DBA</b> の機能を削除します。

## オプション

- active | -inactive
  - list\_instances 操作と使われたとき、アクティブまたは非アクティブなインスタンスだけにリストを絞り込むことができます。デフォルトの条件ではすべてのインスタンスをリストします。
  - modify\_instance 操作と使われたとき、インスタンスの状態をアクティブから非アクティブ、または非アクティブからアクティブに変更できます。
- client\_name user\_name
  - データベース管理者 (DBA) のクライアント名とユーザー名を指定して、nboradm コマンドを有効または無効にします。これらのオプションは -add\_dba 操作と -delete\_dba 操作のみで使われます。
- disable\_oracle\_auth
  - Oracle** 認証の使用を無効にします。
- disable\_rman\_catalog
  - Oracle RMAN** リカバリカタログクレデンシャルの使用を無効にします。
- force
  - 検証エラーにかかわらず、インスタンスをレポジトリに強制的に追加します。**Oracle** ポリシーに **NetBackup** を使って未登録インスタンスを保護することはできません。
- host name
  - Oracle** データベースが存在するホストの名前を指定します
- instance\_group name
  - 新しい、または変更されたインスタンスが、指定された名前のインスタンスグループの一部となることを指定します。
- instance\_name
  - 作成または変更されたインスタンスに名前を付けます。
- oracle\_auth user [-oracle\_TNS tns]
  - Oracle** 認証クレデンシャルのユーザー名およびネットサービス名 (TNS エイリアス) を指定します。
- oracle\_home oracle\_home
  - インスタンスが存在する **Oracle** ホームディレクトリのファイルパスを指定します。
- os Unix | Windows
  - インスタンスのオペレーティングシステムの形式が **UNIX** か **Windows** かを指定します。

`-os_user_name [-os_domain_name]`  
オペレーティングシステムのクレデンシャルのユーザー名およびドメインを指定します。

`-registered | -unregistered`  
.

`-rman_catalog_user_name [-rman_catalog_TNS tns]`  
**Oracle RMAN** リカバリカタログのクレデンシャルのユーザー名およびネットサービス名 (**TNS** エイリアス) を指定します。

`-S master_server`  
追加または変更するインスタンスを含んでいるマスターサーバーを指定します。

`-unix_os_user_name -windows_os_user_name`  
インスタンスのグループの **UNIX OS** や **Windows OS** のクレデンシャルのユーザー名を指定します。

# nbpem

nbpem – NetBackup Policy Execution Manager による、ポリシーの作業リストに基づいたジョブのスケジュールおよび発行

## 概要

nbpem [-console] [-terminate]

UNIX システムでは、このコマンドのディレクトリパスは /usr/opensv/netbackup/bin/ です。

Windows システムでは、このコマンドのディレクトリパスは <install\_path>%NetBackup%bin% です。

## 機能説明

NetBackup Policy Execution Manager (nbpem) は、NetBackup の起動時に起動されるサービスで、NetBackup が停止するまで実行状態で存在します。

nbpem コマンドは、以下を実行します。

- 定義済みのポリシーと以前のバックアップイメージに基づき、どのジョブが必要であるか判断します。
- ポリシーまたはクライアントタスクを作成し、ジョブの実行予定時間を決定します。
- ポリシーが変更されていたり、イメージの期限が切れていた場合は、通知され、適切なポリシーまたはクライアントタスクが更新されます。
- ジョブの遅延の程度に応じて、ポリシーの優先度を決定します。
- ポリシーのスケジュールが実行予定の時間帯内であるかどうかを確認します。
- ポリシーがキューに投入されている場合、遅れている場合、またはスケジュールされた時間帯のパラメータ外である場合、そのポリシーを取り消します。
- ポリシーのすべての変更を処理し、実行する予定のポリシーを更新します。
- バックアップの途中で特定のジョブが停止した場合、再実行します。

## オプション

-console

このオプションを指定すると、コンソールモードで NetBackup を起動できます。

-terminate

このオプションを指定すると、NetBackup Policy Execution Manager を停止できます。

## 関連項目

- p.603 の [nbjm](#) を参照してください。
- p.625 の [nbrb](#) を参照してください。
- p.614 の [nbpemreq](#) を参照してください。

# nbpemreq

nbpemreq – NetBackup Policy Execution Manager (PEM) Requisition による、実行ジョブのスケジュール設定と PEM 情報の取得

## 概要

```
nbpemreq -due -date mm/dd/yyyy HH:MM:SS [-unixtime] [-legacy]
[-client_filter client...] [-policy_filter policy...]
nbpemreq -due -dateu unixtime [-unixtime] [-legacy] [-client_filter
client...] [-policy_filter policy...]
nbpemreq -jobs [screen] [-depth value] [all | job_id...]
nbpemreq -M servername...
nbpemreq -persisted [screen] [-depth value]
nbpemreq -policies [screen] [-depth value] [policy...]
nbpemreq -predict -date mm/dd/yyyy HH:MM:SS [-unixtime] [-legacy]
[-client_filter client...] [-policy_filter policy...]
nbpemreq -predict -dateu unixtime [-unixtime] [-legacy]
[-client_filter client...] [-policy_filter policy...]
nbpemreq -predict_all -date mm/dd/yyyy HH:MM:SS [-legacy]
[-client_filter client...] [-policy_filter policy...]
nbpemreq -predict_all -dateu unixtime [-legacy] [-client_filter
client...] [-policy_filter policy...]
nbpemreq -resume_scheduling
nbpemreq -subsystems [screen] [list | all | subsystem_id...]
nbpemreq -suspend_scheduling
nbpemreq -updatepolicies
```

UNIX システムでは、このコマンドのディレクトリパスは

/usr/opensv/netbackup/bin/admincmd/ です。

Windows システムでは、このコマンドのディレクトリパスは

<install\_path>%NetBackup%\bin\admincmd\ です。

## 機能説明

NetBackup Policy Execution Manager Requisition (nbpemreq) を使用すると、近い時期に実行するジョブを決定できます。また、入力が行われて保留状態になっているすべてのポリシーの更新内容を読み込むことができます。nbpemreq を使用すると、nbpem ログファイルにある関連する nbpem 情報が収集され、オプションで stdout に表示されます。

このコマンドは nbpem に指示してポリシーの更新をすぐに処理することもできます。

nbpemreq コマンドを実行すると、nbpem が影響を受け、ポリシーの処理速度が低下します。nbpemreq の出力はリリースによって異なる場合があるため、nbpemreq をスクリプトで使用することはお勧めしません。

## 操作

### -due

指定した時刻までに実行するようにスケジュールされているクライアントまたはポリシーに関するデータが提供されます。表示されるデータは、現在の日時および現在以降の日時に基づいています。時間は **mm/dd/yyyy HH:MM:SS** または **UNIX** のタイムスタンプで示されます。

### -jobs

現在のジョブおよび **30** 分以内に実行されたジョブの状態に関する nbpem 情報を提供します。nbpem はすべての実行中のジョブを管理し、ジョブの完了後 **30** 分間各ジョブの履歴を保持します。

### -M servername...

**1** つ以上のマスターサーバーで nbpemreq を実行できるようにします。コマンドは、各マスターサーバーで、コマンドラインに示される順序で順次実行されます。-M を指定しない場合、ローカルホストがデフォルト値になります。

### -persisted

nbpem 永続性データベースファイルの内容に関する内部情報を提供します。これには、現在実行中のジョブに関する情報が含まれています。nbpem が中断された場合、nbpem が再開するときに実行されるジョブが、**NetBackup** によって認識されません。

### -policies

ポリシー定義の静的なデータとジョブのスケジュールに関する動的な情報を含む、指定されたポリシーに関する nbpem の内部データが提供されます。

### -predict | -predict\_all

ポリシーを実行するタイミングを決定するのに役立ちます。表示される情報は、現在の日時および現在以降の日時に基づいています。時間は **mm/dd/yyyy HH:MM:SS** または **UNIX** のタイムスタンプで示されます。

このオプションは、ポリシーが実行されていない理由を判断することにも役立ちます。これらのオプションの違いは、出力形式および表示データ量です。実行可能なバックアップが示されますが、特定の日に実行されるジョブを示すものではありません。このオプションは、バックアップの処理時間帯かどうかを確認しますが、スケジュールに設定される除外日を反映しません。

### -resume\_scheduling

-suspend\_scheduling オプションによって中断された nbpemreq スケジュールアクティビティを再開します。

**-subsystems**

内部サブシステムの操作に関する nbpem 内部情報を提供します。表示される各サブシステムの情報量は、指定する深さによって異なります。各サブシステムには様々な層の情報が含まれています。

**-suspend\_scheduling**

nbpemreq スケジュールアクティビティを一時停止します。このオプションを使用して、スケジュールバックアップを一時停止することができます。

**-updatepolicies**

nbpem に指示して既存のポリシー構成を再度読み込みます。通常、nbpem は、[グローバル属性 (Global Attributes)] ホストプロパティに存在する、ポリシーの更新間隔に基づく変更を確認します。デフォルトは 10 分です。このコマンドを実行した後、プロンプトが単に返されます。

## オプション

**all | job\_id...**

すべてのジョブまたは **job\_id** で指定したジョブを表示します。

**-client\_filter client...**

特定のクライアントの名前 (単数または複数) でフィルタリングします。

**depth [ list | all | subsystem\_id... ]**

様々な出力オプションで生成される詳細レベルを指定します。詳細度は 0 (出力の最小値) またはそれ以上 (より多い出力) の整数値で指定します。詳細度の最大値とそれぞれの詳細レベルの内容は、出力オプションによって異なります。この情報は、**-subsystems** オプションによって表示される情報とは異なります。

**-depth value**

36 のサブシステムすべて、または指定したサブシステムが表示されます。サブシステムはカンマではなく空白で区切ります。次に例を示します。

```
nbpemreq depth 3 8 12
```

**-policy\_filter policy...**

特定のポリシーの名前 (単数または複数) でフィルタリングします。

**screen**

出力が stdout に送信されます。screen オプションを使用しない場合でも、コマンド出力は常にログファイルに送信されます。stdout には、最大 1 MB のデータを書き込むことができます。

**-unixtime**

協定世界時 (UTC) の 1970 年 1 月 1 日の午前 0 時から経過した秒数を指定します。閏秒は含まれません。



## 関連項目

p.612 の [nbpem](#) を参照してください。

# nbperfchk

nbperfchk - ディスクアレイの読み込みおよび書き込みの速度を測定します。

## 概要

```
nbperfchk -i inputpath -o outputpath [-s filesize] [-syncend] [-bs buffersize]
```

UNIX システムでは、このコマンドへのディレクトリパスは /usr/opensv/netbackup/bin/support/ です。

Windows システムでは、このコマンドへのディレクトリパスは <install\_path>%NetBackup%bin¥support¥ です。

## 機能説明

nbperfchk コマンドはディスクアレイの読み込み速度と書き込み速度を測定します。重複排除データをホストするディスクの読み込み速度と書き込み速度をテストするために、このコマンドを使うことができます。たとえば、次のように重複排除データをホストするディスクの速度を測定できます。

- **PureDisk** ストレージプールでは、コンテンツルーターに接続されたディスクの速度を測定するためにこのコマンドを使います。
- **NetBackup** メディアサーバーの重複排除プール (MSDP) では、メディアサーバーに接続されたディスクの速度を測定するためにこのコマンドを使います。メディアサーバーは、メディアサーバーと MSDP に対してシマンテック社がサポートしているすべてのオペレーティングシステムを実行できます。

---

**メモ:** このコマンドを実行して結果を解釈する際は、シマンテック社のテクニカルサポートのスタッフメンバーと連携して作業されることを推奨します。重複排除の読み書き操作では、ディスクのパフォーマンスレベルを 130 MB/sec 以上にすることを推奨します。

---

nbperfchk ユーティリティではディスクにテストファイルを書き込み、そのテストファイルを再度読み込み、読み込操作の間に得られた読み込み速度を監視できます。nbperfchk の結果を使って、ReadBufferSize パラメータがバックアップ環境内で適切に設定されていることを確認できます。ReadBufferSize パラメータは、contentrouter.cfg ファイルの [CRDataStore] セクションに存在します。このコマンドは次のように使用できます。

- 次のコマンドを使ってデータをディスクに書き込みます。

```
nbperfchk -i inputpath -o outputpath -s filesize -syncend
```
- 次のコマンドを使ってディスクからデータを読み取ります。

```
nbperfchk -i inputpath -o outputpath -bs buffersize
```

## オプション

-i *inputpath*

**inputpath** には入力ファイルのフルパスを指定します。nbperfchk コマンドはこのファイルを読み込み、このファイルがディスクに読み込まれるときの読み込み速度に関する情報を生成します。

たとえば、次のように指定して、/dev/zero からすべてがゼロ文字 (0x00) を含むファイルを読み込むことができます。

-o *outputpath*

**outputpath** には、出力ファイルのフルパスを指定します。nbperfchk コマンドはこのファイルを作成します。

たとえば、書き込みの際に、作成する出力ファイルのパスを指定します。読み込み時に -o NUL を指定すると、生成されるすべての出力が破棄されます。

-s *filesize*

**filesize** には、ご使用のコンピュータのメモリサイズとディスクアレイのボリュームの合計以上のファイルサイズを指定します。このサイズのファイルであれば、データがバッファではなく、ディスクに書き込まれることが保証されます。

-syncend

syncend パラメータはバッファをフラッシュし、すべてのデータをディスクに書き込みます。

-bs *buffersize*

**buffersize** には、nbperfchk の実行時に使われる読み込みバッファサイズを指定します。たとえば、64 k または 128 k を指定します。

## 手順

nbperfchk の結果を分析し、ReadBufferSize パラメータ設定を調整するには

- 1 root ユーザー (UNIX の場合) または管理者 (Windows の場合) として、コンテンツルーターをホストするコンピュータにログインします。  
  
PureDisk 環境では、ストレージプールの権限ノードまたはストレージプールの権限アプライアンスにログインします。  
  
NetBackup 環境では、メディアサーバーにログインします。
- 2 テストディレクトリに変更します。

- 3 次の形式で nbperfchk コマンドを入力し、コンテンツルーターに大きいテストファイルを書き込みます。

```
nbperfchk -i inputpath -o outputpath -s filesize -syncend
```

たとえば、次のコマンドはすべてがゼロを含む **64 GB** のデータファイルを e ドライブに書き込みます。

```
nbperfchk -i zero: -o e:¥data1 -s 64g -syncend
```

- 4 次の形式で nbperfchk コマンドを入力してテストファイルを読み込み、nbperfchk 出力で速度を監視します。

```
nbperfchk -i inputpath -o NUL -bs buffersize
```

例 1 - 複数のバッファサイズを使用して複数の読み込み速度を監視するには、次の一連のコマンドを入力します。

```
nbperfchk -i e:¥data1 -bs 64k -o NUL
nbperfchk -i e:¥data1 -bs 128k -o NUL
nbperfchk -i e:¥data1 -bs 256k -o NUL
```

例 2 - 次の nbperfchk コマンドはファイル data1 のデータを読み込み、**1024 K** のバッファサイズを使います。

```
C:¥Users¥administrator.mymediaserver¥Desktop>nbperfchk -i e:¥data1 -bs 1024k -o NUL
195 MB @ 65.3 MB/sec, 194 MB @ 64.9 MB/sec
295 MB @ 49.4 MB/sec, 100 MB @ 33.5 MB/sec
403 MB @ 44.8 MB/sec, 108 MB @ 35.8 MB/sec
505 MB @ 42.1 MB/sec, 102 MB @ 34.1 MB/sec
599 MB @ 40.0 MB/sec, 94 MB @ 31.3 MB/sec
705 MB @ 39.2 MB/sec, 106 MB @ 35.5 MB/sec
821 MB @ 39.2 MB/sec, 116 MB @ 38.8 MB/sec
943 MB @ 39.4 MB/sec, 122 MB @ 40.8 MB/sec
1024 MB @ 40.1 MB/sec
```

データを分析するときには以下を監視します。

- 左の 2 つの列は読み取られたデータの量と平均読み込み速度を示します。
- 最後の行は全体的な読み込み速度を示します。これは、指定したバッファサイズで行われる合計の読み込み速度を示すので、この出力の最も重要な行です。

- 右の 2 つの列は、それぞれの読み込みの最後の 3 秒間の平均読み込み速度を示します。これらの数が毎回劇的に変わらない限り、右の 2 つの列は無視できます。
- 5 読み込み速度を分析し、必要に応じて ReadBufferSize パラメータを調整します。

オペレーティングシステム、ディスク速度、および ReadBufferSize パラメータ設定はすべて、リストアおよび復元のパフォーマンスに影響します。

複数の nbperfchk コマンドを入力し、毎回 -bs パラメータの引数サイズを増加することを推奨します。手順 4 の例 1 は、この方法を示したものです。-bs パラメータに常に増加する引数を入力できれば、おそらく contentrouter.cfg ファイルの [CRDataStore] セクションの ReadBufferSize パラメータのサイズを増加できます。

デフォルトでは、ReadBufferSize=65536、すなわち 64 K です。シマンテック社のテストでは、ReadBufferSize=1048576、すなわち 1024 x 1024 (1 M) にすると、ほとんどの Windows システムで良好なパフォーマンスが得られることが示されています。また多くの UNIX システムでは、デフォルトの ReadBufferSize=65536 にすると、良好なパフォーマンスが得られることがシマンテック社のテストにより示されています。

NetBackup 設定ファイルの編集方法について詳しくは、NetBackup のマニュアルを参照してください。

PureDisk 構成ファイルの編集方法について詳しくは、『Symantec NetBackup PureDisk 管理者ガイド』を参照してください。

# nbplupgrade

nbplupgrade – FlashBackup-Windows から VMware または Hyper-V にポリシー形式をアップグレード

## 概要

```
nbplupgrade [policy_name | -allpolicies] [-vm_force] [-vm_report]
[-verbose] [-help]
```

UNIX システムでは、このコマンドのディレクトリパスは  
/usr/opensv/netbackup/bin/admincmd/ です。

Windows システムでは、このコマンドのディレクトリパスは  
<install\_path>%NetBackup%bin\admincmd% です。

## 機能説明

nbplupgrade ユーティリティ (CLI) は VMware または Hyper-V のバックアップのために作成された FlashBackup-Windows ポリシーをアップグレードします。正常にポリシーを変換するには、次の要件に注意してください。

- 現行ポリシーでは NetBackup の 7.5 以前のメディアサーバーまたは 7.5 以前の VMware バックアップホストを指定してはなりません。
- 現行ポリシーでは VMware VCB を必要とするオプションを指定してはなりません。

上記要件が満たされない場合でもポリシーを変換するためには、-vm\_force オプションを使用します。このオプションでは、変換されたポリシーに対して更に編集が必要な場合があります。変換中に、nbplupgrade ユーティリティはポリシー形式を必要に応じて FlashBackup-Windows から VMware または Hyper-V 形式に変換します。また、スナップショット方式を新しいポリシーが必要とする、新しい VMware または Hyper-V 形式に変換します。元のポリシーの他のすべての属性を保有し、必要に応じてそれらを新しい 7.5 ポリシーレイアウトに変換します。

このアップグレードは NetBackup 7.5 で、このポリシーにより新しい VMware または Hyper-V 機能を使う場合にのみ必要です。

## オプション

-allpolicies

VMware または Hyper-V バックアップのために作成されたすべての FlashBackup-Windows ポリシーをアップグレードします。

-help

nbplupgrade コマンドの使用量の情報をリストします。

*policy\_name*

指定したポリシーのみアップグレードを実行します。

`-verbose`

ユーティリティスクリプトの進捗の追跡に役立ちます。

`-vm_force`

このユーティリティでは変換の前に、古いメディアサーバーやクライアントに結び付けられたポリシーなどといった非互換性を調べます。非互換性がある場合、ユーティリティは警告を発行し、終了するか、`-allpolicies` を選択している場合は次のポリシーに移動します。ただし、`-vm_force` オプションを指定している場合、互換性確認が失敗しているにもかかわらずポリシーは変換されます。このオプションは、移行されたポリシーのバックアップの失敗を引き起こす可能性がありますので注意して使ってください。

`-vm_report`

互換性確認を実行し、結果を報告します。ここでは実際のポリシー変換が実行されないことに注意してください。このオプションは、実際の変換を試みる前のマイグレーションドライランのみに使用するよう設計されています。

`-vm_force` と `-vm_report` は同じコマンドで一緒に使うことができません。

## 例

**例 1** - `mypolicy` ポリシーに互換性確認を実行し、結果を報告します。この処理は、後で実行する予定の変換のドライランです。

```
nbplupgrade mypolicy -vm_report
```

**例 2** - すべての **FlashBackup-Windows** ポリシーに互換性確認を実行し、結果を報告します。この処理は、後で実行する予定の変換のドライランです。

```
nbplupgrade -allpolicies -vm_report
```

**例 3** - `mypolicy` という名前のポリシーをアップグレードします。

```
nbplupgrade mypolicy
```

**例 4** - **VMware** または **Hyper-V** バックアップのために作成されたすべての **FlashBackup-Windows** ポリシーをアップグレードします。

```
nbplupgrade -allpolicies
```

**例 5** - 互換性確認が失敗しても `mypolicy` という名前のポリシーをアップグレードします。

```
nbplupgrade mypolicy -vm_force
```

例 6 - 互換性検査が失敗しても VMware または Hyper-V バックアップのために作成されたすべての FlashBackup-Windows ポリシーをアップグレードします。

```
nbplupgrade -allpolicies -vm_force
```



# nbrb

nbrb – NetBackup Resource Broker の実行

## 概要

```
nbrb [-console] [-terminate]
```

UNIX システムでは、このコマンドのディレクトリパスは `/usr/opensv/netbackup/bin/` です。

Windows システムでは、このコマンドのディレクトリパスは `<install_path>\NetBackup\bin\` です。

## 機能説明

NetBackup Resource Broker バイナリ (nbrb) は、NetBackup の起動時に起動されるサービスで、実行状態で存在します。このサービスによって、ストレージユニット、テープドライブ、クライアント予約などの割り当てが行われます。このサービスは、EMMと密接に連動して、ジョブが実行する必要がある物理リソースおよび論理リソースを取得します。物理リソースには、ストレージユニット、テープドライブおよびメディア ID があります。論理リソースには、nbjm が使用するリソースとして、名前付きリソース、クライアントごとの最大ジョブ数、ポリシーごとの最大ジョブ数および多重化グループがあります。

## オプション

`-console`

このオプションを指定すると、コンソールモードで NetBackup を起動できます。

`-terminate`

このオプションを指定すると、nbrb を停止できます。

## 関連項目

p.603 の [nbjm](#) を参照してください。

p.612 の [nbpem](#) を参照してください。

# nbrbutil

nbrbutil – NetBackup Resource Broker (nbrb) の構成

## 概要

```
nbrbutil [-cancel GUID] [-changePriority requestID]
[-changePriorityClass requestID] [-changesettings name=value
[,name=value],...] [-deleteSetting settingname] [-disablePerfMon]
[-dump] [-dumptables -f filename] [-enablePerfMon] [-listActiveJobs]
[-listActiveDriveJobs] [-listActiveMediaJobs] [-listActivePoolJobs]
[-listActiveStuJobs] [-listOrphanedDrives] [-listOrphanedMedia]
[-listOrphanedPipes] [-listOrphanedStus] [-listSettings] [-release
GUID] [-resetAll] [-releaseAllocHolds] [-releaseDrive drive]
[-releaseMDS ID] [-releaseMedia mediaID] [-releaseOrphanedDrive
drivekey] [-releaseOrphanedMedia mediakey] [-releaseOrphanedPipes]
[-releaseOrphanedStu name] [-resetMediaServer mediaserver]
[-reportInconsistentAllocations] [-resume] [-setDriveGroupUnjoinable]
[-setMediaGroupUnjoinable] [-suspend] [-syncAllocations]
UNIX システムでは、このコマンドのディレクトリパスは
/usr/opensv/netbackup/bin/admincmd/ です。
Windows システムでは、このコマンドのディレクトリパスは
<install_path>%NetBackup%\bin\admincmd% です。
```

## 機能説明

NetBackup Resource Broker ユーティリティは次の Resource Broker の機能を設定します。

- Resource Broker が分配した割り当てをリストします。
- 割り当てを解放します。
- 孤立したリソースのリストを表示します。
- 特定のリソース (ドライブ、メディア、ストレージユニット) を使うジョブを表示します。
- 割り当てられていない要求をキャンセルします。
- Resource Broker のチューニングパラメータを設定します。
- 処理の一時停止および再開を行います。

## オプション

`-cancel GUID`

指定の識別子内の割り当て要求を取り消します。

`-changePriority requestID -priority priority`

要求の優先度を変更します。

`-changePriorityClass requestID -priorityClass priorityClass`

要求の優先度のクラスを変更します。

`-changesettings name=value [,name=value]...`

nbrb 構成設定を追加または変更します。

次に、すべての `-changesettings` パラメータを示します。

- **RB\_DO\_INTERMITTENT\_UNLOADS** - このパラメータが **true** (デフォルト) に設定されている場合、nbrb は、メディアアンロードの遅延を超えたドライブのアンロードを開始します。ドライブは、最後にドライブを使用したジョブより、異なるメディアサーバーか異なるメディアが必要であるジョブでよりすばやく利用可能になります。ただし、ロードされたメディアまたはドライブのペアは、アンロードなしでドライブかメディアを使う可能性がある優先度付けされた評価キュー内の優先度の低いジョブでは使用できないことがあります。
- **RB\_ENABLE\_OPTIMIZATION** - このパラメータは、**true** に設定されている場合 **Intelligent Resource Manager** のパフォーマンスチューニングパラメータとして機能します。このエントリはリソースの要求の状態をキャッシュに保存するように **NBRB** に指示します。
- **RB\_RESPECT\_REQUEST\_PRIORITY** - このパラメータの指定可能な値は **true** または **false** です。  
**RB\_RESPECT\_REQUEST\_PRIORITY** が **false** (デフォルト) に設定されている場合、nbrb は、優先度付けされたジョブキュー内のジョブの評価を続行します。その結果、ドライブが解放された後によりすばやくジョブでドライブが再利用される可能性が高くなります。ただし、優先度が低いジョブが、優先度が高いジョブよりも前にドライブを使用する場合があります。  
このパラメータが **true** に設定されている場合、nbrb は優先度付けされたジョブキューの先頭にある評価キューをリソースの解放後に再起動します。
- **RB\_BREAK\_EVAL\_ON\_DEMAND** - 優先度が高い要求 (合成ジョブや複製ジョブの要求など) が表示されると、nbrb はすぐに評価サイクルを中断します。nbrb は、必要であれば評価サイクルが再開される前にドライブを解放しアンロードします。  
**RB\_BREAK\_EVAL\_ON\_DEMAND** パラメータが **true** (デフォルト) に設定されている場合、優先度が高いジョブの中断は許可されず、評価サイクルが続行されます。

- **RB\_MAX\_HIGH\_PRIORITY\_QUEUE\_SIZE** - 実行中の複製ジョブのスパン要求と追加のリソースは、優先度の高い処理のための特別なキューに配置されます。**RB\_MAX\_HIGH\_PRIORITY\_QUEUE\_SIZE** パラメータは、NetBackup がそのキューで許可する最大の要求数を設定します。(デフォルトは 100 です。)
- **RB\_RELEASE\_PERIOD** - このパラメータは、NetBackup がリソースを解放するまでの待機期間を示します。(デフォルトは 180 秒です。)
- **RB\_CLEANUP\_OBSOLETE\_DBINFO** - このパラメータは、nbrb データベースの古い情報のクリーンアップ間隔の秒数を示します。(デフォルトは 60 秒です。)
- **RB\_MPX\_GROUP\_UNLOAD\_DELAY** - このパラメータは、テープをアンロードする前に、nbrb が新しいジョブが表示されるのを待機する秒数を示します。(デフォルトは 10 秒です。)  
この設定によってテープの不要な再ロードを回避できます。また、この設定はすべてのバックアップジョブに適用されます。ユーザーバックアップの実行時、nbrb でテープをマウント解除する場合、nbrb では **RB\_MPX\_GROUP\_UNLOAD\_DELAY** の最大値および[メディアのマウントタイムアウトを設定する (Media mount timeout)]ホストプロパティの設定が使用されます。
- **RB\_RETRY\_DELAY\_AFTER\_EMM\_ERR** - このパラメータは、EMM エラーの発生後に NetBackup が再試行するまでに待機する時間を示します。エラーは、再試行が可能なエラーである必要があります。たとえば、メディアサーバーが停止している場合などです。(デフォルトは 60 秒です。)
- **RB\_REEVAL\_PENDING** - このパラメータは、保留中の要求のキューを評価する間隔の秒数を示します。保留中の要求のキューには、リソースを待機しているジョブなどが含まれます。(デフォルトは 60 秒です。)
- **RB\_REEVAL\_PERIOD** - このパラメータは、未処理の要求が存在し、他の要求が行われていない場合またはリソースが解放されていない場合の評価間隔を示します。(デフォルトでは、最初の要求が再評価されるまでに 5 分が経過している必要があります。)

`-deleteSetting settingname`

settingname で指定された **nbrb** 構成設定を削除します。

`-disablePerfMon`

パフォーマンスの監視を無効にします。

`-dump`

すべての **nbrb** の割り当てと要求のリストをダンプします。

`-dumptables -f filename`

**Resource Broker (nbrb)** が、指定のファイル名に内部状態のログを記録することを可能にします。

- enablePerfMon  
パフォーマンスの監視を有効にします。
- listActiveJobs  
実行中のすべてのジョブをリストします。
- listActiveDriveJobs  
ドライブの実行中のすべてのジョブをリストします。
- listActiveMediaJobs  
メディア ID (ディスクかテープ) の実行中のすべてのジョブをリストします。
- listActivePoolJobs  
ボリュームプールの実行中のすべてのジョブをリストします。
- listActiveStuJobs  
ストレージユニットまたはストレージユニットグループの実行中のすべてのジョブをリストします。
- listOrphanedDrives  
EMM で予約されているが、Resource Broker で対応する割り当てを持っていないドライブをリストします。
- listOrphanedMedia  
EMM で予約されているが、Resource Broker で対応する割り当てを持っていないメディアをリストします。
- listOrphanedPipes  
孤立したファイバートランスポートパイプをリストします。
- listOrphanedStus  
EMM で予約されているが、Resource Broker で対応する割り当てを持っていないストレージユニットをリストします。
- listSettings  
NBRB 構成設定をリストします。
- release GUID  
指定の識別子を持つ割り当てを解放します。
- resetAll  
nbrb のすべての割り当て、要求、持続した状態をリセットします。
- releaseAllocHolds  
ドライブとメディアの割り当てエラーによって引き起こされた割り当ての予約を解除します。
- releaseDrive drive  
指定のドライブのすべての割り当てを解放します。

- releaseMDS *ID*  
指定の識別子を持つ MDS によって割り当てられた EMM と MDS の割り当てを解放します。
- releaseMedia *mediaID*  
指定のボリュームのすべての割り当てを解放します。
- releaseOrphanedDrive *drivekey*  
EMM で予約されているが、Resource Broker で対応する割り当てを持っていないドライブを解放します。
- releaseOrphanedMedia *mediakey*  
EMM で予約されているが、Resource Broker で対応する割り当てを持っていないメディアを解放します。
- releaseOrphanedPipes  
孤立したファイバートランスポートパイプを解放します。
- releaseOrphanedStu *name*  
EMM で予約されているが、Resource Broker で対応する割り当てを持っていないストレージユニットを解放します。
- resetMediaServer *mediaserver*  
メディアサーバーの *ltid* と関連している、nbrb の EMM と MDS のすべての割り当てをリセットします。
- reportInconsistentAllocations  
Resource Broker と MDS 間の一貫しない割り当てをレポートします。
- resume  
Resource Broker (nbrb) の処理を再開します。
- setDriveGroupUnjoinable  
今後のジョブがこのドライブのグループに追加されないようにします。
- setMediaGroupUnjoinable  
今後のジョブがこのメディアのグループに追加されないようにします。
- suspend  
Resource Broker (nbrb) の処理を一時停止します。
- syncAllocations  
Resource Broker と MDS 間の割り当ての違いを同期化します。

## 関連項目

- p.603 の [nbjm](#) を参照してください。
- p.612 の [nbpem](#) を参照してください。

# nbregopsc

nbregopsc – OpsCenter の登録

## 概要

```
nbregopsc -add | -addopscenter | -addnb OpsCenter_server_name
```

```
nbregopsc -preferred_network OpsCenter_server_IPAddress
```

UNIX システムでは、このコマンドのディレクトリパスは

/usr/opensv/netbackup/bin/admincmd/ です。

Windows システムでは、このコマンドのディレクトリパスは

<install\_path>%NetBackup%\bin\admincmd\ です。

## 機能説明

NetBackup のインストール手順では NetBackup に既存の OpsCenter を登録したいかどうかを尋ねられます。OpsCenter のサーバー名をコマンドラインオプションとして実行するには、フルパス名を入力する必要があります。nbregopsc -add コマンドを実行すると、新しいエントリ OPS\_CENTER\_SERVER\_NAME = *Opscenter\_server\_name* によって、最初に OpsCenter のサーバー名が bp.conf (Windows の CONFIG レジストリエントリ) に追加されます。その後、NetBackup マスターサーバー名が OpsCenter サーバーに登録されます。このコマンドを NetBackup のインストール後に実行することで、OpsCenter サーバーと NetBackup サーバーを相互に登録することができます。

OpsCenter に NetBackup を登録しないで NetBackup に OpsCenter を登録するために -addopscenter オプションを使うことができます。また、NetBackup に OpsCenter を登録しないで OpsCenter に NetBackup を登録するために -addnb オプションを使うこともできます。

NetBackup では複数の OpsCenter サーバーを監視する機能に制限があるため、このコマンドでは、bp.conf (またはレジストリ) に複数の OPS\_CENTER\_SERVER\_NAME エントリを含めることはできません。このコマンドを別の名前で行うと、OPS\_CENTER\_SERVER\_NAME の既存のエントリが新しい名前の上書きされます。

OpsCenter クラスタの設定では、仮想サーバー名が bp.conf (またはレジストリ) に追加されます。

## オプション

```
-add OpsCenter_server_name
```

指定した OpsCenter サーバーに NetBackup を登録し、NetBackup に OpsCenter サーバーを登録します。

- addopscenter *OpsCenter\_server\_name*  
OpsCenter サーバーを NetBackup に登録します。
- addnb *OpsCenter\_server\_name*  
指定した OpsCenter サーバーに NetBackup を登録します。
- preferred\_network *OpsCenter\_server\_IPAddress*  
省略可能な OpsCenter サーバー IP を指定します。-preferrednetwork は -add と -addnb のみに適用されます。OpsCenter ホストの複数のネットワークインターフェースカード (NIC) に主に適用されます。このオプションのデフォルト値は localhost/127.0.0.1 です。



# nbreplicate

nbreplicate – ストレージサーバーでのレプリケーションの開始

## 概要

```
nbreplicate -backupid backup_id -Bidfile file_name -cn copy_number
-rcn replicate_copy_number -slp_name policy_type [-altreadhost
hostname] [-priority number] [-v]
```

UNIX システムでは、このコマンドのディレクトリパスは

/usr/opensv/netbackup/bin/admincmd/ です。

Windows システムでは、このコマンドのディレクトリパスは

<install\_path>%NetBackup%bin\admincmd% です。

## 機能説明

nbreplicate コマンドは、別のドメインの NetBackup ストレージサーバーに複製されるべきバックアップの複製を可能にします。NetBackup の同じドメインのイメージを複製するには、bpduplicate を参照してください。

このコマンドはマスターサーバーでのみ実行できます。

nbreplicate を使用して、期限が切れていないバックアップのコピーを最大 10 個作成できます。

## オプション

-altreadhost hostname

このオプションでは、メディアを読み込む代替ホストを指定します。デフォルトの状態では、nbreplicate を実行すると、バックアップを行ったホストからソースメディアが読み込まれます。

-backupid backup\_id

このオプションでは、レプリケートする 1 つのバックアップのバックアップ ID、またはプライマリコピーを変更するバックアップ ID を指定します。

-Bidfile file\_name

このオプションの **file\_name** では、複製するバックアップ ID のリストを含むファイル名を指定します。ファイル内で 1 行に 1 つのバックアップ ID が指定されます。このパラメータを指定すると、他の選択条件は無視されます。

また、NetBackup GUI がこのパラメータを共通で使うため、**file\_name** は CLI (コマンドラインインターフェース) の実行中に削除されます。GUI では、コマンドラインインターフェースの完了時に -Bidfile オプションで使用された一時ファイルが削除

されることを前提としています。ユーザーはコマンドラインインターフェースで直接このオプションを使用することができますが、この場合でも、ファイルは削除されます。

`-cn copy_number`

このオプションでは、複製のコピー番号を指定します。有効な値は、1 から 10 です。デフォルトは 1 です。

`-primary` はプライマリコピーを検索するか、または複製することを意味します。

`-priority number`

このオプションを指定すると、ディスクスレーディングの複製よりも低いまたは高い優先度で実行するようにバックアップポリシーが設定されます。

`-rcn replicate_copy_number`

複製コピーのコピー番号を指定します。有効な値は、1 から 100 です。

`-primary` はプライマリコピーを検索するか、または複製することを意味します。

`-slp_name policy_name`

複製されるファイルのストレージライフサイクルポリシー名を指定します。

`-v`

このオプションを指定すると、詳細モードが選択されます。このオプションを指定すると、デバッグログまたは進捗ログに、より詳細な情報が書き込まれます。

## 例

**例 1** - コピー番号 1 のバックアップを一覧表示します。表示されるバックアップは、2013 年 7 月 1 日から 2013 年 8 月 1 日の間に作成され、stdpol というポリシーによって実行されたバックアップです。

```
nbreplicate -Bidfile /path/to/bidlist.out -cn 1 -rcn 102 -target_sts
source_msdp_server -slp_name reverse-air -target_user user -target_pwd pword
```

**例 2** - ファイル名 plum のバックアップ ID の複製コピーを作成します。プール NBU のストレージユニット Tape\_stu にコピー番号 1 からコピー番号 5 を複製します。

```
nbreplicate -Bidfile plum dstunit Tape_stu -dp NBU -cn 1 -rcn 5
```

## ファイル

UNIX システムの場合:

```
/usr/opensv/netbackup/logs/admin/*
/usr/opensv/netbackup/db/images/*
```

Windows システムの場合:

```
install_path%NetBackup%db%images%*
install_path%NetBackup%logs%admin%*
```

## 関連項目

p.125 の [bpduplicate](#) を参照してください。

# nbrestorevm

nbrestorevm – VMware または Hyper-V 仮想マシンをリストアする

## 概要

vSphere をリストアする場合:

```
nbrestorevm -vmw -C vm_client [-S master_server] [-O] [-R rename_file]
[-L progress_log [-en]] [-k "keyword phrase"] [-s mm/dd/yyyy
[hh:mm:ss]] [-e mm/dd/yyyy [hh:mm:ss]] [-w [hh:mm:ss]] [-vmtm
vm_transport_mode] [-vmserver vm_server] [-vmproxy vm_proxy] [-vmpo]
[-vmtid] [-vmfd] [-vmbz] [-vmvmsxd] [-vmkeephv] [-vmid] [-vmsn] [-vmrb]
[-vcd] [-vcdred] [-vcdovw] [-vcdрте] [-vcdtemplate] [-vcdlfree]
[-vcdremv]
```

Hyper-V の VM をリストアする場合:

```
nbrestorevm {-vmhv | -vmhvnew | -vmhvstage | -vmncf} -C vm_client
[-S master_server] [-O] [-R rename_file] [-L progress_log [-en]] [-k
"keyword phrase"] [-s mm/dd/yyyy [hh:mm:ss]] [-e mm/dd/yyyy
[hh:mm:ss]] [-w [hh:mm:ss]] [-vmtm vm_transport_mode] [-vmserver
vm_server]
```

BMR の VM を変換する場合:

```
nbrestorevm -bmr -vmw -C vm_client [-S master_server] [-O] -vmserver
vm_server -vmproxy vm_proxy -veconfig config_filepath [-config
bmr_config_name] [-vmpo] [-vmsn] [-systemOnly]
```

VM インスタントリカバリの場合:

```
nbrestorevm -vmw -ir_activate -C vm_client -temp_location
temp_location_for_writes [-S master_server] [-vmpo] [-vmsn] [-vmserver
vm_server] [-vmproxy vm_proxy] [-s mm/dd/yyyy [HH:MM:SS]] [-e
mm/dd/yyyy [HH:MM:SS]] [-R rename_file] [-disk_media_server
media_server]
```

```
nbrestorevm -ir_listvm
```

```
nbrestorevm -ir_deactivate ir_identifier [-force]
```

```
nbrestorevm -ir_done ir_identifier
```

```
nbrestorevm -ir_reactivate ir_identifier [-force]
```

```
nbrestorevm -ir_reactivate_all ir_identifier -vmhost vm_host
-media_server media_server_activate_vm [-force]
```

UNIX システムでは、このコマンドのディレクトリパスは /usr/openv/netbackup/bin/ です。

Windows システムでは、このコマンドのディレクトリパスは

<install\_path>%NetBackup%bin% です。

## 機能説明

nbrestorevm コマンドは **VMware** 仮想マシン (-vmw オプション) または **Hyper-V** 仮想マシン (-vmhv オプション) をリストアします。特定の VM をリストアするためにマスターサーバーのピアとしてクライアントを指定している場合のみ、クライアントで nbrestorevm を実行して VM をリストアできます。この制限はまた、メディアサーバーがマスターサーバーとは異なるコンピュータにインストールされている場合にも適用されます。

このコマンドはさまざまな機能をカバーします:

- -vmw オプションは、**VMware** 仮想マシンをリストアします。
- -vmhv、-vmhvnew、-vmhvnstage、-vmnconf の各オプションは、**Hyper-V** 仮想マシンをリストアします。
- -bmr -vmw オプションは、クライアントバックアップから **VMware** 仮想マシンを作成します。
- -ir\_activate オプションは、指定した仮想マシンのインスタントリカバリを開始します。関連する一連のリカバリオプション (-ir\_listvm、-ir\_deactivate、-ir\_done、-ir\_reactivate、-ir\_reactivate\_all) は、仮想マシンのインスタントリカバリでその他の機能を実行します。

マスターサーバーとすべてのクライアントでこのコマンドを実行できます。

## オプション

これらのオプションの中には、すべてのリストア (vSphere、Hyper-V、BMR VM の変換、IR) に共通しているものと、これらのリストアのサブセットに固有のものがあります。「-ir」で始まるすべてのオプション (たとえば、-ir\_list) はインスタントリカバリです。「-vcd」で始まるオプション (たとえば、-vcdred) は vSphere 固有です。機能のサブセットにだけ適用されるその他のオプションは、オプションの説明に記載されています。

-bmr

**BMR** サーバーに接続し、クライアントバックアップから仮想マシン関連のタスクを実行します。

-C *vm\_client*

バックアップで識別される仮想マシンの名前。たとえば、ホスト名によってポリシーで仮想マシンをバックアップした場合は、そのホスト名を指定します。

別の場所にリストアするには、-vmserver オプションと -R オプションを使います。

-config *bmr\_config\_name*

**BMR** 構成名を指定します。デフォルト名は `current` です。**BMR** の VM 変換にのみ適用されます。

-disk\_media\_server *media\_server*

どのメディアサーバーがインスタントリカバリを実行するか指定します。

このオプションは負荷分散など、**NetBackup** のストレージが複数のメディアサーバーにまたがって構成されている場合に役立ちます。-disk\_media\_server オプションを指定しないと、インスタントリカバリジョブは利用可能な任意のメディアサーバーを選択してリストアする可能性があります。インスタントリカバリのために構成されているメディアサーバーが 1 つだけの場合、-disk\_media\_server オプションでそのサーバーを指定します。

-force

確認のプロンプトを抑制します。

-ir\_activate

**NFS** データストアとして仮想マシンのバックアップイメージをマウントすることで、指定した仮想マシンのインスタントリカバリを開始します。仮想マシンがリストアされる **ESX** ホストにデータストアがアクセスできるようになります。

-ir\_deactivate ir\_identifier [-force]

指定したリストア済みの仮想マシンを **ESX** のホストから削除し、**NetBackup** メディアサーバーのリソースを解除します。-force オプションは確認のプロンプトを抑制します。

-ir\_done ir\_identifier

データが移行された後、仮想マシンのインスタントリカバリジョブを完了します。**NetBackup** ストレージが削除され、メディアサーバーのリソースが解除されます。**NetBackup** ストレージは **ESX** ホストにマウントされているデータストアです。

-ir\_listvm

インスタントリカバリによって有効にされた仮想マシンの詳細をリストします。

-ir\_reactivate ir\_identifier [-force]

**NetBackup NFS** データストアをマウントし直すことによってリストアされた仮想マシンを再アクティブ化します。この操作によって、**ESX** ホストの一時データストアから **ESX** ホストのリストアされた仮想マシンを登録します。

ir\_identifier は -ir\_listvm 出力から取得した仮想マシンの数値識別子です。

-force オプションは確認のプロンプトを抑制します。

-ir\_reactivate\_all

**ESX** ホスト上および **NetBackup** メディアサーバー上のすべての仮想マシンで中断しているインスタントリカバリジョブを再起動します。

-L progress\_log

このオプションでは、進捗情報を書き込む既存のファイル名を指定します。このオプションは **VSphere** のリストアと **Hyper-V** のリストアに適用されます。

-media\_server media\_server\_activate\_vm

仮想マシンを再アクティブ化するとき、バックアップイメージを含んでいる NFS データストアがマウントされたメディアサーバーを指定します。このオプションは

-ir\_reactivate\_all 関数とのみ使われます。

-o

VM が同じ名前ですでに存在する場合はそれらの VM を上書きします。これらのリソースは、既存の VM に明示的に属している仮想マシンディスク形式ファイル (VMDK) のようなエンティティです。-o が指定された場合、VM をリストアする前に VMware サーバーは VM を削除するように要求されます。指定されない場合、リストアが失敗する可能性があります。このオプションは vClient のリストア、Hyper-V のリストア、BMR の VM の変換で使われます。

-R rename\_file

VMware 仮想マシンをリストアするのに使われる、名前変更ファイルへの絶対ディレクトリパスを指定します。名前変更ファイルは、リストアが代替の場所にリダイレクトされることを示し、別のクライアントの場所についての詳細を指定します。VMware の場合、次のエントリを含めることができます。

```
change /first_vmdk_path to /new_first_vmdk_path
change /second_vmdk_path to /new_second_vmdk_path
...
change /n'th_vmdk_path to /new_nth_vmdk_path
change vmname to NEW_VM_NAME
change esxhost to NEW_ESX_HOST
change datacenter to NEW_DATACENTER
change folder to NEW_FOLDER
change resourcepool to NEW_RESOURCEPOOL
change datastore to NEW_DATASTORE
change network to NEW_NETWORK
change organization to NEW_ORGANIZATION
change orgvdc to NEW_ORGVDC
change vcdserver to NEW_VCDSERVER
change vcdvapp to NEW_VCDVAPP
change vcdvapptemplate to NEW_VCDVAPPTEMPLATE
change vcdvmname to NEW_VCDVMNAME
change vcdcatalog to NEW_VCDCATALOG
```

インスタントリカバリはこのリストの次のサブセットを使います:

```
change vmname to NEW_VM_NAME
change esxhost to NEW_ESX_HOST
change resourcepool to NEW_RESOURCEPOOL
change network to NEW_NETWORK
```

次に、これらのエントリに関する注意点を示します。

- 変更行は、末尾の変数 (すべて大文字の変数) を除いてこの一覧に示されているとおりに入力する必要があります。
- 各 `change` 行は改行で終了する必要があります。 `rename_file` に含まれているエントリが 1 つのみの場合は、行末に改行が含まれていることを確認します。
- 名前変更ファイルに内容がなければ、リストアはバックアップイメージからのデフォルト値を使います。
- レプリケーションディレクトリで作成されていないバックアップからリストアする場合は、 `change datastore to NEW_DATASTORE` を使ってターゲットデータストアを識別します。

`-S master_server`

マスターサーバーを指定して、そのマスターによって作成されたバックアップから仮想マシンをリストアします。

`-s mm/dd/yyyy [hh:mm:ss] -e mm/dd/yyyy [hh:mm:ss]`

選択可能なバックアップイメージを、指定された期間内のタイムスタンプがあるものに制限します。 **NetBackup** は範囲内で最新の適切なバックアップイメージを選択します。表示の対象とする開始日時 (`-s`) と終了日時 (`-e`) を指定します。開始日および終了日は有効なバックアップイメージを検索する時間範囲を示します。指定された時間範囲内の最新の有効なバックアップイメージを使ってリストアを実行します。これらのオプションは、 **BMR** の **VM** 変換を除くすべての関数と使われます。

`-temp_location temp_location`

仮想マシンがリストアされるまでにすべての書き込みが行われる **ESX** サーバー上の一時データストアを指定します。ストレージ **vMotion** が完了するか、仮想マシンでのトラブルシューティングのためなどの作業が終了するまで、すべての書き込みがこのデータストアで発生します。このデータストアは `nbrestorevm` を実行する前に存在する必要があります。このオプションは `-ir_activate` とのみ使うことができます。このオプションはインスタントリカバリとのみ使われます。

`-vcd`

**vCloud** 仮想マシンをリストアします。このオプションは **vCloud** の元の場所または代替の場所にリストアするときが必要になります。

`-vcdfree`

使用可能な最も大きい領域があるデータストアを使って **vCloud** 仮想マシンをリストアします。このオプションは元の場所にダイレクトされないリストア操作にだけ適用されます。

`-vcdovw`

既存の **vCloud vApp** を上書きします。



-vcdred

**vCloud** のリストアをリダイレクトします。

-vcdremv

**-vcdtemplate** オプションを使用して **vApp** をテンプレートとして保存する場合は **vApp** を削除します。

-vcdрте

既存の **vCloud vApp** に **vCloud** 仮想マシンをリストアします。このオプションは、元の場所のリストアを含む既存の **vApp** にリストアする場合に必要になります。

-vcdtemplate

テンプレートとして **vCloud** 仮想マシンをリストアします。

-veconfig *ve\_config\_filepath*

param=value 形式で仮想環境の詳細を含んでいるフル (絶対) ファイルパス。  
 veconfig ファイルは通常次のエントリを含んでいます:

```
esxhost="bmresx.xyz.com"
name="Test_NBRestoreVM"
network="VM Network"
nbrestorediskformat="ThinVdisk"
toolsIsoPath="C:\B2V\windows_esx5.iso"
datacenter="/Test/XYZDatacenter"
folder="/Test/XYZDatacenter/vm"
resourcepool="/Test/XYZDatacenter/host/bmresx.xyz.com/Resources/<resourcepool>"
harddisk=0:"B2V_4TB"
harddisk=1:"storage1 (2)"
harddisk=2:"storage2 (1)"
```

次に、これらのエントリに関する注意点を示します。

- folder、resourcepool、diskformat の各フィールドは必要に応じて指定します。
- スタンドアロン esx サーバーでの **VM** 変換は、次の値を使います:

```
datacenter="ha-datacenter"
resourcepool="/ha-datacenter/host/<esx_host_name>/Resources"
```

- 同じデータストアのディスクに対応するすべての **VMDK** を作成するには、  
 datastore="<datastoreName>" エントリを使ってデータストアの名前を定義します。
- 異なるデータストアの **VMDK** を作成するには、veconfig ファイルを上ファイルで示すように作成します (harddisk=0...)。

- vmbz  
リストアされたディスクのディスク形式は「**eager zero**」となります。
- vmfd  
フラットディスクとして **VMDK** ファイルをリストアします。
- vmhost *vm\_host*  
仮想マシンを再アクティブ化するとき、仮想マシンがマウントされた **ESX** ホストを指定します。
- vmhv  
**Hyper-V** 仮想マシンをリストアします。
- vmhvnew  
新しい場所に **Hyper-V** 仮想マシンをリストアします。
- vmhvstage  
ステージングの場所に **Hyper-V** 仮想マシンのファイルをリストアします。
- vmid  
新しいものを作成するかわりに、仮想マシンの **UUID** をリストアします。
- vmkeephv  
リカバリ時にハードウェアバージョンを保有します。このオプションは **VMware VM** のリカバリにのみ適用されます。
- vmncf  
**Hyper-V** 仮想マシンをリストアするとき、共通ファイルをリストアしないことを指定します。
- vmppo  
リストア操作の後、自動的に仮想マシンの電源を入れます。
- vmproxy *VMware\_access\_host*  
**VMware** アクセスホストを指定します。これにより、仮想マシンのバックアップに使われるデフォルトの **VMPProxy** が上書きされます。  
  
ストレージライフサイクルポリシー (SLP) は、別の **NetBackup** ドメインに仮想マシンのバックアップイメージを複製するのに自動イメージレプリケーションを使うことができます。複製されたイメージからの仮想マシンをリストアするには、**-vmproxy** オプションを含める必要があります。仮想マシンが複製されたドメインにあるバックアップホスト (アクセスホスト) を指定するには **-vmproxy** オプションを使います。
- vmrb  
**CD-ROM** または **DVD-ROM** イメージのようなマウントされたリムーバブルデバイスを削除します。

-vmserver *VMServer*

リストア操作に別のターゲットの場所 (たとえば、ESX サーバーや vCenter) を指定します。これにより、仮想マシンのバックアップに使われるデフォルトの VM サーバーが上書きされます。仮想マシンが最初に存在していた場所と同じ vCenter にリストアするには、このオプションを省略します。

-vmsn

仮想マシンのネットワークインターフェースをストライプ化します。

-vmtid

リストアされたディスクのディスクは「シン」になります。

-vmtm *vm\_transport\_mode*

VMware トランスポートモードを指定します。 *vm\_transport\_mode* の形式の例は `san:hotadd:nbd:nbdssl` です。

-vmvmtx

VMX ファイルが指定された同じデータストアに VMware VMDK ファイルをリストアすることを許可します。別の vmdk ファイルパスを指定する名前変更ファイルは、このオプションを上書きします。

-vmw

VMware 仮想マシンをリストアします。

-w [*hh:mm:ss*]

このオプションを指定すると、NetBackup はサーバーから完了状態が送信されるまで待機し、その後、システムプロンプトに戻ります。

NetBackup コマンドの日時の値に求められる形式は、使用しているロケールによって異なります。 `/user/openv/msg/.conf` ファイル (UNIX) と

`install_path\VERITAS\msg\LC.CONF` ファイル (Windows) には、各サポート対象ロケールの日時形式などの情報が含まれています。これらのファイルには、サポートされているロケールおよび書式のリストを追加および変更するための、具体的な方法が含まれています。

『Symantec NetBackup 管理者ガイド Vol. 2』の NetBackup インストールのロケールの指定に関する項を参照してください。

必要に応じて、待機時間を時間、分、秒で指定できます。指定可能な最大の待機時間は、**23:59:59** です。リストアが完了する前に待機時間が経過すると、コマンドはタイムアウト状態で終了します。ただし、サーバー上ではリストアが完了します。

0 (ゼロ) を指定した場合または時間を指定しない場合、完了状態が無期限に待機されます。

## 例

vSphere の例

例 1 - 指定した仮想マシンを最新のバックアップイメージからリストアします。同じ名前の VM が存在する場合、このコマンドは失敗します。

```
nbrestorevm -vmw -C client1
```

最新のバックアップイメージの既存の VM を上書きするには、次のコマンドを実行します。

```
nbrestorevm -vmw -C client1 -O -S master_server
```

例 2 - `rename_file` が指定する代替場所に VM をリストアします。最新の使用可能なバックアップイメージは `start_time` と `end_time` 間の範囲から選択されます。VM はリストア操作後に電源が入り、すでに代替場所がある場合はそこで上書きされます。

```
nbrestorevm -vmw -S server1 -C client1 -R <rename_file> -s <start_time>
-e end_time -vmop -O
```

例 3 - vCloud ディレクトリの元の vApp に仮想マシンをリストアします。

```
nbrestorevm -vmw -S server1 -vcd -C vm_client -vmserver vm_server
-vmproxy vm_proxy -vcdрте
```

元の vApp に複数の仮想マシンをリストアするには、仮想マシンごとに nbrestorevm コマンドを実行します。

例 4 - vApp テンプレートに複数の仮想マシンをリストアします。

例 3 のコマンドを実行してテンプレート以外の vApp に各仮想マシンをリストアしますが、最新の仮想マシンをリストアしないようにしてください。

最新の仮想マシンをリストアし、vApp テンプレートにリストアしたすべての仮想マシンをコピーするには次のコマンドを実行します。

```
nbrestorevm -vmw -S server1 -vcd -C vm_client -vmserver vm_server
-vmproxy vm_proxy -R rename_file -vcdtemplate -vcdremv -vcldfree
```

-R `rename_file` は改行で終了する次のエントリを含んでいるテキストファイルへのフルパスです。

```
change vcdvapp to vApp_template_file
```

-vcdremv オプションは、仮想マシンをリストアしたテンプレート以外の vApp を削除します。-vcldfree オプションは最も大きい使用可能な領域があるデータストアを選択します。この例の nbrestorevm コマンドは (名前の変更ファイルを含む) vApp テンプレートを作成し、そのテンプレートにリストアした仮想マシンをコピーします。これ以上の仮想マシンはテンプレートに追加することができません。

## Hyper-V の例

例 5 - 最新のバックアップイメージで既存の VM を上書きします。

```
nbrestorevm -vmhv -C client1 -O
```

例 6 - **rename\_file** が指定する代替場所に VM をリストアします。最新の使用可能なバックアップイメージは **start\_time** と **end\_time** 間の範囲から選択されます。この操作によってリストア後に VM の電源が入り、すでに代替場所がある場合はそこで書き込まれます。

```
nbrestorevm -vmhvnew -S srvr1 -C client1 -R rename_file -s start_time
-e end_time -O
```

例 7 - 最新のバックアップからステージング場所に VM ファイルをリストアします。

```
nbrestorevm -vmhvstage -C vm_client -R rename_file
```

### BMR の例

例 8 - VM サーバーへのクライアント構成の BMR の VM 変換を実行し、変換された VM の電源を入れます:

```
nbrestorevm -bmr -vmw -C client1 -vmserver VmServer1
-vmproxy d86-12.xyz.com -veconfig C:¥B2V¥veconfig.txt -O -vmpo
```

### インスタントリカバリの例

例 9 - インスタントリカバリ操作の典型的な手順の中で、一連の nbrestorevm コマンドを実行します。

仮想マシンをアクティブ化することによってインスタントリカバリを開始します。必須パラメータは表示されています。他の省略可能なパラメータは概要で示されています。

```
nbrestorevm -vmw -ir_activate -C client1 -temp_location temploc1
```

アクティブ化された仮想マシンの詳細をリストします。

```
nbrestorevm -ir_listvm
```

ir\_identifier が 26 である仮想マシンをアクティブ解除するか削除します。

```
nbrestorevm -ir_deactivate 26
```

データが移行された後、ir\_identifier が 14 の VM のインスタントリカバリジョブを完了します。

```
nbrestorevm -ir_done 14
```

ir\_identifier が 11 の VM またはリカバリ中に中断されたすべての仮想マシンを再アクティブ化します。

```
nbrestorevm -ir_reactivate 11 -force
```

または

```
nbrestorevm -ir_reactivate_all -vmhost host1 -media_server msvm2 -force
```

## 関連項目

[bprestore](#)

# nbseccmd

nbseccmd – NetBackup セキュリティ構成サービスユーティリティの実行

## 概要

```
nbseccmd -setuptrustedmaster -add | -remove -masterserver
master_server_name -remotemasterserver remote_master_server
-mutualtrust -domainname domain_name -username name -password pwd
nbseccmd -setuptrustedmaster -add | -remove -masterserver
master_server_name-remotemasterserver remote_master_server
[-remoteonly | -localonly]
nbseccmd -command -option -help
```

UNIX システムでは、このコマンドのディレクトリパスは

/usr/opensv/netbackup/bin/admincmd/ です。

Windows システムでは、このコマンドのディレクトリパスは

<install\_path>%NetBackup%\bin\admincmd% です。

## 機能説明

nbseccmd-setuptrustedmaster コマンドを実行すると、作成するバックアップをコピーできます。

このコマンドはマスターサーバーでのみ実行できます。

## オプション

-domainname *domain\_name*

-username で指定されたユーザーが属するドメインを指定します。-password と共に資格情報の検証に使用します。

-masterserver *master\_server\_name*

ユーザーがログインしたマスターサーバーの名前を指定します。自動イメージブリークは現在のマスターサーバーまたはソースマスターサーバーでこの名前を使用します。

-mutualtrust

2つの指定されたマスターサーバー間 (-masterserver および -remotemasterserver) の双方向の信頼を確立します。

-password *pwd*

-username のユーザーのパスワードを指定します。-domainname と共に資格情報の検証に使用します。

`-remotemasterserver remote_master_server`

信頼を確立する必要のあるリモートマスターサーバーの名前を指定します。自動イメージレプリケーションはターゲットマスターサーバーでこの名前を使用します。

`-remoteonly | -localonly`

信頼を確立する方法を指定します。ローカルマスターサーバー (ソース) がリモートマスターサーバー (ターゲット) を信頼するか、その逆のどちらかです。これらのオプションのいずれも指定されない場合は、双方向の信頼が確立されます。

`-setuptrustedmaster -add | -remove`

マスターサーバーにまたがるドメイン間の信頼を追加または削除します。

`-username username`

.



# nbsetconfig

nbsetconfig – NetBackup の構成の更新

## 概要

```
bpsetconfig [-h host] [-u user] [filename,...] [-r "reason"]
```

UNIX システムでは、このコマンドのディレクトリパスは /usr/opensv/netbackup/bin/ です。

Windows システムでは、このコマンドのディレクトリパスは <install\_path>%NetBackup%bin% です。

## 機能説明

nbsetconfig コマンドは構成の更新に使用されます。このコマンドは、すべての NetBackup プラットフォームで使用できます。

このコマンドを実行するには、管理者権限が必要です。

## オプション

*filename,...*

更新内容を表示するファイルを指定します。ファイルが指定されていない場合は、標準入力を読み込まれます。

-h *host*

構成を更新するサーバーまたはクライアントのホスト名を指定します。

-r "*reason*"

このコマンド処理を選択する理由を示します。入力する理由の文字列は取得され、監査レポートに表示されます。この文字列は二重引用符 ("...") で囲んでください。文字列が 512 文字を超えないようにしてください。それはハイフンの文字 (-) から始まり単一の引用符 (!) を含む場合がありません。

-u *user*

構成を更新するユーザーを指定します。

## 例

システム上の NetBackup 構成を指定のサーバーに設定します。マスターサーバーは yellow.colors.org で、メディアサーバーは orange.colors.org です。

```
nbsetconfig
SERVER = yellow.colors.org
SERVER = orange.colors.org

<ctl-D>

<ctl-Z>
```

## 関連項目

- p.589 の [nbgetconfig](#) を参照してください。
- p.152 の [bpgetconfig](#) を参照してください。
- p.152 の [bpgetconfig](#) を参照してください。

# nbsnapimport

nbsnapimport – ストレージサーバー上のスナップショットコピーのインポート

## 概要

```
nbsnapimport -backupid backup_id -cn copy_number -fim fim_name -stunit
storage_unit [-mounthost mount_host]
```

UNIX システムでは、このコマンドのディレクトリパスは

/usr/opensv/netbackup/bin/admincmd/ です。

Windows システムでは、このコマンドのディレクトリパスは

<install\_path>%NetBackup%bin\admincmd% です。

## 機能説明

nbsnapimport コマンドは、tar コピーの参照、リストア、または作成に使用できるように、NetBackup のスナップショットのコピーをインポートします。

このコマンドはマスターサーバーでのみ実行できます。

## オプション

-backupid backup\_id

1 つのバックアップイメージのバックアップ ID を指定します。

-cn copy\_number

インポートするコピー番号を決定します。有効な値は、1 から 10 です。デフォルトは 1 です。

-fim fim\_name

このオプションでは、イメージの作成に使用するスナップショット方式を指定します。方式は、クライアントで使用されるデータおよびハードウェアの種類で選択します。

スナップショット方式について詳しくは、『Symantec NetBackup Snapshot Client 管理者ガイド』を参照してください。

利用可能なオプションは、スナップショット方式によって異なります。スナップショット方式とそのオプションのリストについては、vfm.conf ファイルに示されている各スナップショット方式 (FIM) の <opt\_params> を参照してください。

-mounthost mount\_host

スナップショットのコピーがインポートされるマウントのホストを指定します。

-stunit storage\_unit

ストレージユニットを指定します。

## ファイル

**UNIX** システムの場合:

```
/usr/opensv/netbackup/logs/admin/*
/usr/opensv/netbackup/db/images/*
```

**Windows** システムの場合:

```
install_path¥NetBackup¥db¥images¥*
install_path¥NetBackup¥logs¥admin¥*
```

# nbsnapreplicate

nbsnapreplicate – ストレージサーバーの初期スナップショットのレプリケーション

## 概要

```
nbsnapreplicate -backupid backup_id | -Bidfile filepath -cn
copy_number -rcn replicate_copy_number -slpname policy_name -stunit
storage_unit [-mediaServer media_server] [-priority number] [-v]
```

UNIX システムでは、このコマンドのディレクトリパスは  
/usr/opensv/netbackup/bin/admincmd/ です。  
Windows システムでは、このコマンドのディレクトリパスは  
<install\_path>%NetBackup%bin\admincmd% です。

## 機能説明

nbsnapreplicate コマンドを実行すると、作成するバックアップのコピーを取得できません。

このコマンドはマスターサーバーでのみ実行できます。

nbsnapreplicate コマンドを使用して、期限が切れていないバックアップのコピーを最大 10 個作成できます。

## オプション

-backupid backup\_id

このオプションでは、レプリケートする 1 つのバックアップのバックアップ ID を指定します。

-Bidfile file\_name

このオプションの **file\_name** では、レプリケートするバックアップ ID のリストを含むファイル名を指定します。ファイル内で 1 行に 1 つのバックアップ ID が指定されます。このパラメータを指定すると、他の選択条件は無視されます。

また、NetBackup GUI がこのパラメータを共通で使うため、**file\_name** は CLI (コマンドラインインターフェース) の実行中に削除されます。GUI では、CLI の完了時に -Bidfile オプションで使用された一時ファイルが削除されることを前提としています。ユーザーは CLI で直接このオプションを使用することができますが、この場合でもファイルは削除されます。

-cn copy\_number

このオプションでは、レプリケーションのコピー番号を指定します。有効な値は、1 から 10 です。デフォルトは 1 です。

`-mediaServer media_server`  
メディアサーバーを指定します。

`-priority number`  
このオプションを指定すると、ディスクステージングの複製よりも低いまたは高い優先度で実行するようにバックアップポリシーが設定されます。

`-rcn replicate_copy_number`  
スナップショットレプリケーションのコピー番号を指定します。有効な値は 1 から 100 です。通常、コピー番号はソースコピーに 101 を加算した番号です。

`-slp_name policy_name`  
複製されるファイルのストレージライフサイクルポリシー名を指定します。

`-stunit storage_unit`  
ストレージユニットを指定します。

`-v`  
このオプションを指定すると、詳細モードが選択されます。デバッグログまたは進捗ログを指定すると、より詳細な情報が出力に含まれます。

## 例

例 1 - コピー番号 1 のバックアップが一覧表示されます。表示されるバックアップは、2009 年 7 月 1 日から 2009 年 8 月 1 日の間に作成され、stdpol というポリシーによって実行されたバックアップです。

```
nbsnapreplicate -cn 1
```

例 2 - ファイル名 plum のバックアップ ID の複製コピーを作成します。プール NBU のストレージユニット Tape\_stu にコピー番号 1 からコピー番号 5 を複製します。

```
nbsnapreplicate -Bidfile plum dstunit Tape_stu -dp NBU -cn 1 -dcn 5
```

## ファイル

UNIX システムの場合:

```
/usr/opensv/netbackup/logs/admin/*
```

```
/usr/opensv/netbackup/db/images/*
```

Windows システムの場合:

```
install_path¥NetBackup¥db¥images¥*
```

```
install_path¥NetBackup¥logs¥admin¥*
```

# nbstl

nbstl – NetBackup ストレージライフサイクルポリシーの追加、削除、変更または表示

## 概要

```
nbstlstorage_lifecycle_name [-add | -modify | -modify_current |
-modify_version] [-dc class] [-dp duplication_priority] [-version
version_number]
[-uf used_for1 [,used_for2,..used_forn]]
[-source source1[,source2,..sourcen]]
[-residence storage_unit1 | __NA__[,storage_unit2 |
__NA__,..storage_unitn | __NA__]]
[-pool volume_pool1 | __NA__[,volume_pool2 | __NA__,..volume_pooln
| __NA__]]
[-server_group host1 | __NA__[,host2 | __NA__,..hostn | __NA__]]
[-managed m1[,m2,..mn]] [-rl retention_level1 | __NA__
[,retention_level2 | __NA__,..retention_leveln | __NA__]] [-as
alt_read_server1 | __NA__ [,alt_read_server2 |
__NA__,..alt_read_servern | __NA__]]
[-mpx T | F [,T | F,..T | F]] [-target_master target_master_server1
| __NA__ [,target_master_server2 | __NA__,..target_master_servern |
__NA__]] [-target_importslp target_importslp1 | __NA__
[,target_importslp2 | __NA__,..target_importslpn | __NA__]] [-defop
T | F [,T | F,..T | F]] [-v] [-M master_server] [-destpri priority1
[,priority2,..priorityn]] [-window window_1 [,window_2,..window_n]]
[-wcopt option_set1 [,option_set2,..option_setn]
nbstlstorage_lifecycle_name -delete [-v] [-M master_server]
nbstl [storage_lifecycle_name] -L | -l | -b | U | -json |
-json_compact | -conflicts [-v] [-M master_server] [-all_versions]
[-version version_number]
```

UNIX システムでは、このコマンドのディレクトリパスは

/usr/opensv/netbackup/bin/admincmd/ です。

Windows システムでは、このコマンドのディレクトリパスは

<install\_path>%NetBackup%\bin\admincmd\ です。

## 機能説明

nbstl コマンドで次のことができます。

- -add は新しいストレージライフサイクルを追加します。

- `-delete` は既存のストレージライフサイクルを削除します。
- `-modify` は既存のストレージライフサイクルを変更します。
- `-L` と `-l` は 1 つまたはすべてのストレージライフサイクルに関する情報を詳細形式または簡易形式で表示します。`-b` はストレージライフサイクルポリシーの名前だけを表示します。

`nbstl` コマンドは、すべての宛先の作成、変更、削除を同時に行い、単一の宛先の追加または変更はサポートしていません。1 つの宛先のプロパティを変更するには、更新する宛先と同様に、すべての既存の宛先を考慮する必要があります。

宛先に入力する必要がある多くのオプションは、適用されない (NA) 場合があります。その場合、値を `__NA__` (NA の前後に下線文字を 2 つ) として入力します。次のオプションでは `__NA__` が値として受け入れられます。

- `-residence`
- `-pool`
- `-server_group`
- `-as` (代替読み込みサーバー)
- `-target_master`
- `-target_importslp`

## オプション

### `-all_versions`

指定したストレージライフサイクルポリシーのすべてのバージョンを表示するか、**`storage_lifecycle_name`** を指定しなければすべてのストレージライフサイクルポリシーのすべてのバージョンを表示します。

### `-b`

指定したストレージライフサイクルポリシーの名前を表示するか、**`storage_lifecycle_name`** を指定しなければすべてのストレージライフサイクルポリシーの名前を表示します。すべてのストレージライフサイクルポリシーの名前とバージョンを表示する場合は、このオプションを `-all_versions` オプションとともに使います。

### `-conflicts`

他の `nbstl` オプションによって記述されるこの SLP への変更が、この SLP と関連付けられているポリシーにどのように影響するかを示します。`nbstl` は検証を実行するために SLP の変更を送信します。これにより、提案された SLP の内容と、SLP を使用するすべてのポリシーを比較し、エラーがある場合は `stdout` に表示します。この時点では変更はコミットされません。エラーがなければ、ユーザーは `-conflicts` オプションなしで変更を再送信し、変更をコミットすることができます。



- `-dc class`  
このサービスと関連付けられた数字のデータ分類を指定します。
- `-delete`  
指定したストレージライフサイクルポリシーを削除します。
- `-defop T | F [,T | F,...,T | F]`  
複製コピーの遅延操作フラグを設定します。
- **F** または **f** - 追加のイメージコピーの作成を遅延せずに行います。
  - **T** または **t** - 追加のイメージコピーの作成をソースコピーの期限切れが近づくまで行いません。複製ジョブはソースが期限切れになる約 **4** 時間前に開始されます。このデフォルトの時間を変更するには、**SLP** パラメータのホストプロパティの [遅延した複製オフセット (**Deferred duplication offset**)] パラメータを変更します。
- `-dp duplication_priority`  
このストレージサービスと関連付けられた複製ジョブの優先度を指定します。
- `storage_lifecycle_name`  
作成、変更、削除、または表示されるストレージライフサイクルポリシーの名前を識別します。
- `-json`  
`json` 形式で複数行にわたってデータを生成します。
- `-json_compact`  
`json` 形式で **1** 行にデータを生成します。
- `-l`  
指定したストレージライフサイクルポリシーの簡略出力を表示するか、**storage\_lifecycle\_name** を指定しなければすべてのストレージライフサイクルポリシーの簡略出力を表示します。出力はストレージライフサイクルのデータのみを含みます。名前を識別しません。
- `-L`  
指定したストレージライフサイクルの詳細出力を表示するか、**storage\_lifecycle\_name** を指定しなければすべてのストレージライフサイクルの詳細出力を表示します。出力を名前で識別します。
- `-M master_server`  
**NBU** マスターサーバーを指定します。デフォルトは、ローカルサーバーです。
- `-modify`  
指定したストレージライフサイクルポリシーを変更します。このオプションはストレージライフサイクルポリシーの新しいバージョンを作成します。ボリュームブールまたは保持レベルなどの情報を変更できます。

**-modify\_current**

新しいポリシーを作成する代わりに現在のストレージライフサイクルポリシーを変更します。このオプションは **-dc**、**-uf**、**-source**、**-managed** オプションとともに使うことができません。

**-modify\_version**

新しいポリシーを作成する代わりに選択したバージョン (*nn*) のストレージライフサイクルポリシーを変更します。このオプションは **-dc**、**-uf**、**-source**、**-managed** オプションとともに使うことができません。

**-v**

このオプションを指定すると、ログの詳細モードが選択されます。

**-version nn**

ストレージライフサイクルポリシーの指定のバージョン番号 (*nn*) のみ出力するか、**storage\_lifecycle\_name** が指定されなければすべてのストレージライフサイクルポリシーの指定のバージョン番号 (*nn*) のみ表示します。

次のすべての宛先オプションでは、ストレージサービスのそれぞれの宛先に対して 1 つずつ、同じ数のパラメータを指定する必要があります。その結果、宛先の数はパラメータの数と同じになります。パラメータは間に余白なしでカンマで分かれています。

**-destpri priority1 [,priority2,...priorityn]]**

ストレージライフサイクルポリシーの各宛先インデックスのジョブ優先度を指定します。このオプションはインポート先にものみ使うことができます。他の宛先はすべて **0** に設定する必要があります。

**-managed m,...**

それぞれの宛先について、保持形式を指定します。可能な値は次のとおりです。

- **0** - 固定
- **1** - 管理対象の容量
- **2** - コピー後に期限切れにします。コピー元としてこのコピーを使うすべての操作が完了した後、コピーは期限切れになります。これらの操作には、複製、レプリケーション、スナップショットからのバックアップ、スナップショットからのインデックス作成が含まれます。
- **3** - リモート (インポート済み) の有効期限。
- **4** - 最大のスナップショットローテーション。
- **5** - ミラーコピー

たとえば、**-managed 4** は保持形式が最大のスナップショットローテーションであることを意味します。

`-mpx T | F [,T | F, ...,T | F]`

複製コピーの多重化維持フラグを設定します。このオプションはバックアップコピーまたはスナップショットコピーの場合には許可されません。ポリシーホストとストレージユニットのプロパティの設定によって、バックアップコピーの多重化の状態が判断されます。フラグはテープコピーにのみ関係します。オプションは、`-mpx` の後ろに次の値で区切る一組のカンマが続きます。

- **F** または **f** - コピーの多重化を保存しない。
- **T** または **t** - コピーの多重化を (可能であれば) 維持します
- **\_\_NA\_\_** - 適用不能

`-pool volume_pool1 | __NA__ [,volume_pool2 | __NA__, ..volume_pooln | __NA__]`

各宛先のボリュームプールを指定します。ボリュームプールはディスクコピーに適用されません。

`-residence storage_unit1 | __NA__ [,storage_unit2 | __NA__, ..storage_unitn | __NA__]`

各宛先に使われるストレージユニット。ストレージユニットはスナップショット先 (`-uf` オプションの設定が **2**) またはリモートマスターへの複製 (`-uf` オプションの設定が **3**) には適用されません。

`-rl retention_level1 [,retention_level, ...retention_level]`

各宛先に適用される保持レベル (**0-24**)。

`-servergroup host1 | __NA__ [,host2 | __NA__, ..hostn | __NA__]`

サーバーグループを指定します。

`-as alt_read_server1 | __NA__ [,alt_read_server2 | __NA__, ..alt_read_servern | __NA__]`

各宛先の代替読み込みみサーバー。代替読み込みみサーバーは複製先にのみ適用されます。

`-source source1 [,source2, ...sourceN]`

ストレージライフサイクルの `-add` および `-modify` 操作のために複製の階層を構成します。

`-source` には次の値を指定できます。

- バックアップとスナップショットの宛先 - 値は **0** である必要があります。バックアップとスナップショットのコピーにソースは不要です。
- 複製先 - ソースコピーとして使われる宛先のリストにある宛先のシリアル番号。(スナップショットコピーは複製元として使うことができません。) 特定のソースを使わない (つまり、プライマリコピーをソースとして使う) 複製先は **0** に設定する必要があります。

-U

ユーザー表示形式で指定済みのストレージライフサイクルに関するデータを出力します。

-uf *used\_for1* [*used\_for2*,...*used\_forn*]

各宛先をいつ使うかを指定します。次の値のいずれかを使います。

- 0 - バックアップ
- 1 - 複製
- 2 - スナップショット
- 3 - リモートマスターへのレプリケーション (-residence の値が `__NA__` であることが必要です)
- 4 - インポート
- 5 - スナップショットからのバックアップ
- 6 - スナップショットからのインデックス
- 7 - レプリケーション

たとえば、`-uf 2` はスナップショット操作の場合です。

-wcopt *option1* [*option2*,...*optionn*]

中断できないイメージの処理方法を指定します。時間帯が終了して SLP のジョブが完了しなかった場合、NetBackup は処理中のイメージを中断します。次の時間帯になると、NetBackup は中断したところからそれらのジョブを再開します。

イメージを中断できない場合は、*option* でイメージの処理方法が決まります。

- SFN - 有効なイメージの処理を完了。時間帯は終了しますが、NetBackup は実行中のイメージの処理が完了するまで継続して処理します。NetBackup では、次の時間帯になるまで他のイメージの処理は開始されません。
- SFN - 有効なイメージの処理をキャンセルする。時間帯が終了し、NetBackup は実行中のイメージの処理をすぐに停止します。次の時間帯になると、NetBackup は中断したところからイメージの処理を再開します。

-window *window\_1* [*window\_2*,...*window\_n*]

特定の宛先の時間帯を指定します。bpschedule コマンドを実行して複製の新しい時間帯を作成すると、その後の nbstl コマンドでバックアップ先と複製先を指定してライフサイクルを作成できます。このポリシーによる複製は午前 6 時から 4 時間しか実行されません (つまり、すべてのジョブが午前 10 時までに完了するようにしてください)。

## 例

例 1 - lifecycle1 の情報の詳細な出力を表示します。

```
nbstl lifecycle1 -L
 Name: lifecycle1
 Data Classification: Gold
 Duplication job priority: 0
 State: active
Destination 1 Use for: backup
 Storage Unit: adv_dsu1
 Volume Pool: (none specified)
 Server Group: (none specified)
 Retention Type: Fixed
 Retention Period: 1 (2 hours)
 Alternate Read Server: (none specified)
 Preserve Multiplexing: false
 State: inactive
 Source: (client)
```

**adv\_dsu1** という名前のストレージユニットは無効です。-L で表示される状態の値は [active] または [inactive] です。

**例 2 - HDLifecycle1** という名前のライフサイクルを作成します。このライフサイクルのデータ分類は **Gold** です。次の 4 つの宛先を含みます。

- ソースが必要ない (-source の値は 0) ストレージユニット **AdvDisk1** と組み合わせたバックアップ先 (-uf の値は 0)。
- ストレージユニット **DataDomain1** を使ったバックアップ先。
- シリアル番号 1 の宛先をソース (-source の値は 1) として使ったストレージユニット **DataDomain2** (つまり、ストレージユニット **DataDomain1** と組み合わせたバックアップ先) と組み合わせた複製先 (-uf の値は 1)。
- シリアル番号 2 の宛先をソース (-source の値は 2) として使ったストレージユニット **cooperstown-tape1** と組み合わせた複製先 (つまり、ストレージユニット **DataDomain2** と組み合わせた複製先) です。

```
nbstl HDLifecycle1 -add -dc Gold -uf 0,0,1,1,1 -residence AdvDisk1,
DadaDomain1,DataDomain2,cooperstown-tape1 -source 0,0,1,2
```

**例 3 - バックアップを使用してスナップショットをディスクに作成してからテープに複製するライフサイクル**を作成します。ディスクストレージユニットは **DskSTU**、テープストレージユニットは **TpSTU** です。

```
nbstl LCPolicy -dc Gold -uf 0,1,2 -residence DskStU,TpSTU,__NA__
-pool NetBackup,DLP_Pool1,__NA__ -managed 0,0,0 -rel 6,12,1
```

データ保持期間は次のように定義されます。

- スナップショットイメージは 1 週間保持されます。

- ディスク上のバックアップイメージは 6 か月保持されます。
- テープイメージは 5 年間保持されます。
- 5 年間にするために、保持レベルは 12 に定義されています。

例 4 - ライフサイクルの既存のバージョン 4 の保持レベルを変更します。

```
nbstl LCPolicy -modify_version -version 4 -rl 4,6,7,7
```

ストレージライフサイクルポリシーに、以前に定義された 4 つの宛先がなければなりません。

例 5 - LCPolicy のバージョン 2 の簡略な内容をリストします。

```
nbstl LCPolicy -l -version 2
```

例 6 - ストレージライフサイクルポリシー SLP8 の現在のバージョンのフィールドを変更します。

```
nbstl SLP8 -modify_current -pool Pool1,Pool2,Pool3 -as __NA__,
AltReadServer2,__NA__ -mpx F,F,T
```

例 7 - 複製の新しい時間帯を作成します。その後の nbstl コマンドで、バックアップ先と複製先 (0,1) を指定してライフサイクルを作成できます。このポリシーの複製の時間帯は、前の bpplsched コマンドで午前 6 時から午前 10 時までの 4 時間に設定されています。

```
nbstl morning_dup_slp -add -dc Gold -dp 999 -uf 0,1 -source 0,1
-residence DISK1,TAPE1
```

## 関連項目

- p.506 の [nbdc](#) を参照してください。
- p.663 の [nbstlutil](#) を参照してください。

# nbstlutil

nbstlutil – NetBackup ストレージライフサイクルポリシーユーティリティの実行

## 概要

```
nbstlutil active [-lifecycle name] [-destination name] [-before mm/dd/yyyy HH:MM:SS | -after mm/dd/yyyy HH:MM:SS]
nbstlutil inactive -lifecycle name | -destination name
[-reactivation_time mm/dd/yyyy HH:MM:SS | -duration hours] [-before mm/dd/yyyy HH:MM:SS | -after mm/dd/yyyy HH:MM:SS]
nbstlutil inactive -lifecycle name -destination name
[-reactivation_time mm/dd/yyyy HH:MM:SS | -duration hours] [-before mm/dd/yyyy HH:MM:SS | -after mm/dd/yyyy HH:MM:SS]
nbstlutil cancel [-lifecycle name | -destination name] [-version number] [-before mm/dd/yyyy HH:MM:SS | -after mm/dd/yyyy HH:MM:SS]
[-nowarn]
nbstlutil active | inactive | cancel -backupid id_value
nbstlutil diskpaceinfo [-stype server_type]
nbstlutil list [-l | -U | -b] [-rt I | IC | ICF | ICFS] [-lifecycle name [-version number] [-destination name] | -lifecycle_only | -backupid value | -jobid value] [-client name] [-mediaid value] [-mediaserver name] [-storageserver name] [-image_state value] | -copy_state value | -frag_state value | -image_incomplete | -image_inactive | -copy_incomplete | -copy_inactive] [-copy_type value] [-policy name] [-before mm/dd/yyyy HH:MM:SS | -after mm/dd/yyyy HH:MM:SS]
nbstlutil pendimplist
nbstlutil redo -backupid value -slpindex value
nbstlutil repllist [-l] [-U] [-sincetime timeval]
nbstlutil report [-lifecycle name [-version number]] [-client name] [-mediaid value] [-mediaserver name] [-storageserver name]
nbstlutil stlilist [-l] [-U] [[[-lifecycle name] [-destination name]] | -backupid value] [-client name] [-mediaid value] [-mediaserver name] [-image_state value | -image_incomplete | -image_inactive] [-copy_type value]
UNIX システムでは、このコマンドのディレクトリパスは /usr/opensv/netbackup/bin/admincmd/ です。
Windows システムでは、このコマンドのディレクトリパスは <install_path>%NetBackup%\bin\admincmd\ です。
```

## 機能説明

nbstlutil コマンドを使うと、ユーザーはストレージライフサイクルポリシー (SLP) 操作に介入できます。次に、ユーティリティの機能を示します。

### active

ストレージライフサイクルポリシー内で中断された二次操作の処理をアクティブにします。二次操作としての条件を満たす操作は、複製、レプリケーション、スナップショットからのインポートです。既存のイメージと新しく作成されたイメージがアクティブになります。**The -lifecycle, -version, -destination, -before, -after, and -backupid options identify the secondary operations.**

- -lifecycle オプションも -destination オプションも指定しないと、nbstlutil はストレージライフサイクルポリシーすべての二次操作すべての処理を再開します。
- ストレージライフサイクルポリシー (-lifecycle) のみを指定すると、nbstlutil はそのストレージライフサイクルポリシーのみの二次操作すべての処理を再開します。
- 宛先のみを指定すると、nbstlutil により、すべてのストレージライフサイクルポリシーの指定した宛先を使用しているすべての二次操作の処理が再開されます。

nbstlutil inactive コマンドを実行すると、二次操作の再開を一時停止します。

### cancel

-lifecycle、-before、-after、-destination の各オプションの使用方法に従ってストレージライフサイクルポリシーの処理を永続的に取り消します。

- -lifecycle オプションと -destination オプションの両方を指定すると、nbstlutil はオプションが識別する既存のイメージの処理を永続的に取り消します。
- どのオプションも指定しない場合には、nbstlutil はストレージライフサイクルポリシーで管理する既存のイメージすべてについて、保留中のコピーをすべて永続的に取り消します。
- ストレージライフサイクルポリシー (-lifecycle) のみを指定すると、nbstlutil は、そのポリシーで管理する既存イメージの保留中のコピーをすべて永続的に取り消します。
- 宛先のみを指定すると、nbstlutil により、すべてのストレージライフサイクルポリシーについて、その宛先に対してバインドされている保留中のコピーがすべて永続的に取り消されます。

このコマンドの後に作成された新しいイメージは正常に処理されます。イメージの保留中のコピーがすべて取り消された場合、そのイメージは完全としてマーク付けされ



ます。宛先の名前は、ストレージライフサイクルポリシーで使用されているストレージユニットまたはストレージユニットグループの名前です。

#### diskspaceinfo

すべてのディスクボリュームによって使用される領域または指定された形式で使用されるディスクボリュームについてのみレポートします。

#### inactive

ストレージライフサイクルポリシー内の二次操作の処理を中断しますが、後で処理を再開できるようにイメージ情報を保持します。二次操作は、スナップショットから複製、レプリケーション、インポートする操作です。既存のイメージと新しく作成されたイメージが中断されます。-lifecycle、-before、-after、-destination の各オプションで二次操作を識別します。

- -lifecycle オプションと -destination オプションの両方を使うと、nbstlutil はストレージライフサイクルポリシーと二次操作先のオプションが識別する既存のイメージの処理を一時停止します。
- ストレージライフサイクルポリシー (-lifecycle) のみを指定すると、nbstlutil はそのストレージライフサイクルポリシーのすべての二次操作を一時停止します。
- 宛先のみを指定すると、nbstlutil により、すべてのストレージライフサイクルポリシーの指定した宛先を使用しているすべての二次操作が中断されます。

inactive オプションは、無効な二次操作が処理を再開するタイミングを選択できる reactivation オプションとともに使います。

#### list

イメージリストの内容 (EMM データベース) を表示します。SLP を参照するイメージを表示します。イメージリストをフィルタ処理する SLP の名前を指定できます。このオプションは主にデバッグツールとして使用されますが、その情報を問題のトラブルシューティングに使用することもできます。

#### pendimplist

インポート保留中の状態のすべてのイメージを表示します。これらは、受信したレプリケーションイベントのうち、インポートが正常に完了していないイベントです。イメージのインポート機能では将来のバックアップ時間が設定されたイメージはインポートされないため、これらのイメージはバックアップ時間が経過するまで保留中のままになります。

#### redo

イメージに対して SLP 操作を繰り返します。NetBackup 以外の処理でイメージのコピーを消失、損傷、破壊した場合は、-redo を使うとコピーを再作成できます。元のソースのコピーがもう利用できない場合、再実行は失敗します。

#### レポート

ライフサイクルによって管理されているイメージの不完全なコピーのロールアップを示します。

repllist

完了したレプリケーションのコピーの状態を示します。

stlilist

ライフサイクルによって管理されるイメージの不完全なコピーの状態を示します。

## オプション

-after *mm/dd/yyyy HH:MM:SS*

指定した日時に開始したバックアップのみに SLP 二次操作を制限します。

-b

バックアップ ID のみを表示します。

-backupid *value*

イメージが処理されるバックアップ ID を指定します。

-before *mm/dd/yyyy HH:MM:SS*

指定した日時前に開始したバックアップのみに SLP 二次操作を制限します。

-client *name*

このオプションを指定すると、ストレージライフサイクル操作のイメージの表示が、**name** によって指定されたクライアント上のイメージに限定されます。

-copy\_inactive *value*

NetBackup データベース内で 1 つ以上のコピーが非アクティブとしてマーク付けされているイメージを選択します。このオプションは、主にデバッグで使用されます。

-copy\_incomplete *value*

NetBackup データベース内で 1 つ以上のコピーが複製完了としてマーク付けされていないイメージを選択します。このオプションは、デバッグで使用されます。

-copy\_state *value*

NetBackup データベース内でコピーの状態が指定した状態であるイメージを選択します。このオプションは、主にデバッグで使用されます。コピーの状態の有効な値は次のとおりです。

- 1 (NOT\_STARTED)
- 2 (IN\_PROCESS)
- 3 (COMPLETE)
- 9 (NOT\_STARTED | INACTIVE)
- 10 (IN\_PROCESS | INACTIVE)

**-copy\_type value**

リストのコマンド (`list` と `stlilist`) のコピー形式フィルタを選択します。次に、有効な値を示します。

- 0 - バックアップ
- 1 - 複製
- 2 - スナップショット
- 3 - リモートマスターへの複製 (レプリカ)
- 4 - インポート

**-destination name**

このオプションを指定すると、**name** によって指定されたストレージユニットまたはストレージユニットグループに複製されるようにスケジューリングされたイメージが選択されます。

**-duration hours**

ライフサイクルイメージを無効にした後に再有効化を開始するまでの時間 (時間単位)を設定します。時間数は、整数 (1、2、...) にする必要があります。このオプションは `inactive` オプションを指定する場合にのみ使います。

**-frag\_state value**

**NetBackup** データベース内でフラグメントの状態が指定した状態であるイメージを選択します。このオプションは、デバッグで使用されます。frag 状態の有効な値は次のとおりです。

- 1 - ACTIVE
- 2 - TO\_BE\_DELETED
- 3 - ELIGIBLE\_FOR\_EXPIRATION

**-image\_inactive value**

**NetBackup** データベース内で非アクティブとしてマーク付けされているイメージを選択します。このオプションは、デバッグで使用されます。

**-image\_incomplete value**

**NetBackup** データベース内でライフサイクル完了としてマーク付けされていないイメージを選択します。このオプションは、デバッグで使用されます。

**-image\_state value**

**NetBackup** データベース内でイメージの状態が指定した状態であるイメージを選択します。このオプションは、主にデバッグで使用されます。イメージの状態の有効な値は次のとおりです。

- 1 (NOT\_STARTED)
- 2 (IN\_PROCESS)

- 3 (COMPLETE)
- 9 (NOT\_STARTED | INACTIVE)
- 10 (IN\_PROCESS | INACTIVE)

-jobid *value*

ストレージライフサイクル操作のイメージの出力リストを、指定したジョブ ID の *value* が作成された操作のみに制限します。-jobid は list オプションとのみ使うことができます。

-l

このオプションを指定すると、簡略化されたリストの解析可能な出力が生成されます。

-lifecycle *name*

ライフサイクルの管理対象イメージリストのみを選択します。

-mediaid *value*

このオプションを指定すると、ストレージライフサイクル操作のイメージの表示が、*value* によって指定されたメディア ID 上のイメージに限定されます。

-mediaserver *name*

このオプションを指定すると、ストレージライフサイクル操作のイメージの表示が、*name* によって指定されたメディア上のイメージに限定されます。

-nowarn

対話型の警告メッセージをスキップします。

-policy *name*

イメージの処理を、指定したバックアップポリシー (*name*) が作成された処理に制限します。-policy は list オプションとのみ使うことができます。

-reactivation\_time *mm/dd/yyyy HH:MM:SS*

無効にしているコピーまたは SLP を再有効化する必要がある場合は、その時間を *mm/dd/yyyy HH:MM:SS* 形式で設定します。inactive オプションには、無効なコピーや SLP を再有効化するこのオプションまたは -duration オプションを使うことができます。

-rt I | IC | ICF | ICFS

リストするレコードの種類を選択します。指定可能な値は、次のとおりです。

- I - イメージレコードのみをリストします。
- IC - イメージレコードとコピーレコードをリストします。
- ICF - イメージレコード、コピーレコード、フラグメントレコードをリストします。
- ICFS - イメージレコード、コピーレコード、フラグメントレコード、スナップショットレコードをリストします。

- `-sincetime timeval`  
指定した **timeval** からの現在までに完了したレプリケーションのコピーの状態を示します。このオプションは `repllist` 機能と組み合わせて使われます。
- `-slpindex value`  
繰り返す SLP 操作を指定します。-slpindex は redo 操作とのみ使うことができます。
- `-state value`  
NetBackup データベース内で **value** で指定する状態フィールドを選択します。このオプションは、主にデバッグで使用されます。
- `-storageserver name`  
このオプションを指定すると、ストレージライフサイクル操作のイメージの表示が、**name** によって指定されたストレージサーバー上のイメージに限定されます。
- `-stype server_type`  
このオプションでは、ストレージサーバー形式を識別する文字列を指定します。**server\_type** の値は次のいずれかから指定できます。
- シマンテック社が提供するストレージ。指定可能な値は、AdvancedDisk と PureDisk です。
  - サードパーティのディスクアプライアンス。ベンダーから **server\_type** の文字列が提供されます。
  - クラウドストレージ。有効な値は amazon、att、nirvanix、rackspace などです。これらの値には `_crypt` 接尾辞 (amazon\_crypt など) を含めることもできます。
- ストレージサーバーの形式では大文字と小文字が区別されます。
- `-U`  
このオプションを指定すると、ユーザー用のリストの出力が生成されます。
- `-version number`  
リストの出力を、指定した SLP バージョンによって制御されるイメージのみに制限します。これは、`-lifecycle` オプションと使う必要があります。

## 例

例 1 - ライフサイクルで処理中のイメージに関する情報を表示します。

```
nbstlutil -list -backupid dollhouse_1287744229 -U
Image:
Master Server : dollhouse
Backup ID : dollhouse_1287744229
Client : dollhouse
```

```

Backup Time : 1287744229 (Fri Aug 24 16:13:49 2012)
Policy : pol-slp-2bkup-70-level
Client Type : 13
Schedule Type : 0
Storage Lifecycle Policy : slp-pol-2backup-70-level
Storage Lifecycle State : 2 (IN-PROCESS)
Time In Process : 1287744327 (Fri Aug 24 16:15:27 2012)
Data Classification ID : 85AA96DF9781453289A41745DD240A48 (Platinum)
Version Number : 0
OriginMasterServer : (none specified)
OriginMasterServerID : 00000000-0000-0000-0000-000000000000
Import From Replica Time : 0 (Thu Jan 01 05:30:00 1970)
Required Expiration Date : 0 (Thu Jan 01 05:30:00 1970)
Created Date Time : 1287744297 (Fri Aug 24 16:14:57 2012)

```

Copy:

```

Master Server : dollhouse
Backup ID : dollhouse_1287744229
Copy Number : 1
Copy Type : 0
Expire Time : 1288953829 (Fri Nov 02 16:13:49 2012)
Expire LC Time : 1288953829 (Fri Nov 02 16:13:49 2012)
Try To Keep Time : 1288953829 (Fri Nov 02 16:13:49 2012)
Residence : PDDE-Stu
Copy State : 2 (IN-PROCESS)
Job ID : 0
Retention Type : 0 (FIXED)
MPX State : 0 (FALSE)
Source : 0
Destination ID : *NONE*
Last Retry Time : 0

```

Fragment:

```

Master Server : dollhouse
Backup ID : dollhouse_1287744229
Copy Number : 1
Fragment Number : 1
Resume Count : 0
Media ID : @aaaad
Media Server : dollhouse
Storage Server : (none specified)
Media Type : 0 (DISK)
Media Sub-Type : 6 (STSDYNAMIC)

```

```
Fragment State : 1 (ACTIVE)
Fragment Size : 5120
Delete Header : 1
Fragment ID : @aaaaad
```

The output displays "(none specified)" for blank fields.

例 2 - イメージリストの内容を、簡略な解析可能な形式で表示します。

```
nbstlutil list -l
V7.0 I abc.min.veritas.com abc_1225727 abc 1225727 Pol_SLPTest1 0 0 SLP_Test1 2 ¥
1225727 *NULL*
V7.0 C abc.min.veritas.com abc_1225727 1 2147483 1225735 AdvDisk1 3 0 0 0 0
V7.0 F abc.min.veritas.com abc_1225727 1 1 0 @ab abc.min.veritas.com *NULL* 0 6 1 ¥
32768 1 @ab
V7.0 C abc.min.veritas.com abc_1225727 2 2147483 1225735 AdvDisk2 3 0 0 0 0
```

例 3 - 不完全なライフサイクルのイメージの情報を、ユーザーが読み取れる出力形式で表示します。

```
nbstlutil stlilist -U
Image abc_1225727928 for Lifecycle SLP_Test1 is IN_PROCESS
Copy to abc-tape1 is IN_PROCESS
Copy to AdvDisk3 is NOT_STARTED
```

例 4 - 不完全なライフサイクルのイメージの情報を表示します。

```
nbstlutil stlilist -l
V7.5 I abc_1225727928 SLP_Test1 2
V7.5 C abc-tape1 2
V7.5 C AdvDisk3 1
```

# nbsu

nbsu – NetBackup サポートユーティリティの実行

## 概要

```
nbsu [-c] [-d diag] [-debug] [-ftp ###-###-###] [-ftp_host host]
[-ftp_incoming destination] [-ftp_pass password] [-ftp_user user]
[-g diag_group] [-h] [-H] [-i] [-l] [-L] [-mm_e ###] [-nbsu_down]
[-nbsu_e ###] [-no_nbsu] [-nozip] [-odir destination_directory] [-r
NBU_host_role] [-s diag_group] [-t] [-use_reg_cmd [32 | 64]] [-v]
[-xml]
```

UNIX システムでは、このコマンドへのディレクトリパスは

/usr/opensv/netbackup/bin/support/ です。

Windows システムでは、このコマンドへのディレクトリパスは

<install\_path>%NetBackup%bin%support% です。

## 機能説明

nbsu コマンドは、広範囲な診断情報を収集するシマンテック社のユーティリティです。デフォルトでは、nbsu を実行すると、オペレーティングシステムと NetBackup の環境に基づいて適切な診断情報が収集されます。様々なコマンドラインオプションを指定することで、必要に合わせてカスタマイズした診断情報を収集することができます。

必要ならば、バンドルされたサポートパッケージを作成します。nbsu を実行すると、次の nbsu および出力ディレクトリが作成されます。

- /usr/opensv/netbackup/bin/support/nbsu
- /usr/opensv/netbackup/bin/support/output/nbsu

## 前提条件

nbsu コマンドを使用するには、次の項目が必要です。

- nbsu は、NetBackup バージョン 3.4 以上で使用するように設計されています。
- -no\_nbsu コマンドラインオプションを使うと、NetBackup がインストールされていなくても nbsu を実行できます。
- nbsu でサポートパッケージを作成する必要がある場合は、\$PATH (UNIX) 環境変数に tar および gzip プログラムへのパスを含める必要があります。gzip が利用可能でない場合、ユーティリティは圧縮プログラムが利用可能であれば使います。



- **NetBackup** またはメディアマネージャの診断を実行するには、適切なサービスまたはデーモンがマスターサーバーとメディアサーバーの環境で実行されている必要があります。
- `-nbsu_down` オプションを使って、**NetBackup** または **Media Manager** コマンドを使わない診断のみを選択します。

## プログラムの使用方法

nbsu コマンドを使用してプログラミングを行う場合には、次の項目を考慮します。

- コマンドラインオプションを指定せずに nbsu を実行すると、実行および情報収集に必要な診断がすべて選択されます。
- nbsu によって選択された診断コマンドのリストを表示するには、nbsu に `-l` コマンドラインオプションを指定して実行します。
- 適切なコマンドラインオプションを次の条件に合わせて使用します。
  - 個々の診断コマンド
  - 関連する診断コマンドのグループ
  - 関連する診断コマンドの構成またはトラブルシューティング
  - **NetBackup** または **Media Manager** の終了状態に関連する診断コマンド
- 個別の診断コマンドまたは関連する診断コマンドのグループを省略するには、`-s` コマンドラインオプションを使用します。

## オプション

`-c`

このオプションを指定すると、**NetBackup** 構成に関連するコマンドまたはプロシージャのみが実行されます。このオプションは、デフォルトの条件です。

`-d diag`

このオプションを指定すると、指定した診断コマンドまたはプロシージャのみが実行されます。診断コマンドまたはプロシージャのリストを表示するには、nbsu に `-l` コマンドラインオプションを指定して実行します。複数の `-d` オプションを指定できます。たとえば、

```
UNIX systems: -d OS_general -d OS_env
```

```
Windows systems: -d OS_general -d OS_set
```

`-debug`

このオプションを指定すると、nbsu がデバッグモードで実行されます。デバッグモードでは、追加のプログラム情報がファイルに出力されます。

-FTP ###-###-###

分析を行うためにテクニカルサポートにバンドルされているサポートパッケージで FTP を実行します。指定された形式にサポート案件番号を組み込んで識別します。

このオプションは `-ftp_host`、`-ftp_incoming`、または `-nozip` コマンドラインオプションとともに使うことができません。

-ftp\_host *host*

FTP 操作で使うホストを指定します。このオプションは FTP サポートバンドルの送信先ホストを指定する `-ftp_incoming`、`-ftp_pass`、および `-ftp_user` コマンドラインオプションと一緒に使う必要があります。このオプションは、`-ftp` または `-nozip` オプションと併用できません。

-ftp\_incoming *destination*

FTP 操作で使う着信先を指定します。このオプションは、FTP サポートの指定場所に対する `-ftp_host`、`-ftp_pass`、および `-ftp_user` コマンドラインオプションと一緒に使う必要があります。このオプションは、`-ftp` または `-nozip` オプションと併用できません。

-ftp\_pass *password*

FTP 操作で使うパスワードを指定します。このオプションは `-ftp` または `-ftp_host` オプションとともに使う必要があります。`-nozip` オプションとともに使うことはできません。

-ftp\_user *user*

FTP 操作に使うユーザー名を指定します。このオプションは `-ftp` または `-ftp_host` オプションとともに使う必要があります。`-nozip` オプションとともに使うことはできません。

このオプションは `-ftp_host`、`-ftp_incoming`、または `-nozip` コマンドラインオプションとともに使うことができません。

-g *group\_name*

このオプションを指定すると、指定したグループ名に関連する診断コマンドまたはプロシージャのみが実行されます。診断グループには、OS、DEV、NET、NBU、MM があります。複数の `-g` オプションを指定できます。たとえば、

```
-g OS -g DEV
```

-h

このオプションを指定すると、nbsu コマンドラインの簡易なヘルプ情報が表示されます。

-H

このオプションを指定すると、nbsu コマンドラインの詳細なヘルプ情報が表示されます。

- i  
このオプションを指定すると、対話モードが選択されます。このオプションは、**NetBackup** セキュリティ管理者としてログオンする場合に指定します。
- l  
このオプションを指定すると、実行するように選択された診断コマンドが一覧表示されます。該当する診断コマンドまたはプロシージャを表示するには、その他のコマンドラインオプションとともに指定します。
- L  
このオプションを指定すると、nbsu 1.0 の診断およびコマンドがすべて表示されます。このオプションは、各診断の詳細レポートを標準出力 (STDOUT) に出力する場合に使用できます。選択条件および実行するコマンドが表示されます。
- mm\_e ###  
このオプションを指定すると、**Media Manager** の終了状態に関連する診断コマンドまたはプロシージャのみが実行されます。複数の **-mm\_e** オプションを指定できません。たとえば、  
  
-mm\_e 12 -mm\_e 20
- nbu\_down  
**NetBackup** または **Media Manager** コマンドを使用しない診断コマンドまたはプロシージャのみが実行されます。このコマンドラインオプションでは、**DEV**、**NET**、**OS** 診断と、**NBU** および **MM** 診断のサブセットが選択されます。
- nbu\_e ###  
このオプションを指定すると、**NetBackup** の終了状態に関連する診断コマンドまたはプロシージャのみが実行されます。複数の **-nbu\_e** オプションを指定できます。たとえば、  
  
-nbu\_e 25 -nbu\_e 41
- no\_nbu  
**DEV**、**NET**、**OS** 関連の診断のみを実行します。
- nozip  
このオプションを指定すると、出力ファイルが圧縮されません。
- odir *destination\_directory*  
指定されたディレクトリに nbsu 診断出力をリダイレクトします。ディレクトリが存在しない場合は、nbsu がディレクトリの作成を試みます。ディレクトリパスに空白文字が含まれる場合、パスを識別するため先頭と末尾に二重引用符を使います。nbsu で、宛先ディレクトリのパス名にある無効な文字が簡単に確認されます。

**-r host\_role**

このオプションを指定すると、NetBackup ホストの役割に関連する診断コマンドまたはプロシージャのみが実行されます。ホストの役割パラメータには、次の略語を使用できます。

ma = マスターサーバー

me = メディアサーバー

d\_me = ディスクメディアサーバー

t\_me = テープメディアサーバー

cl = クライアント

emm = EMM サーバー

gdm = グローバルドメインマネージャ

rah = リモート管理ホスト

複数の **-r** オプションを指定できます。次に例を示します。

```
-r ma -r cl
```

**-s name**

このオプションを指定すると、指定した診断コマンド、プロシージャまたはグループがスキップされます。診断コマンドまたはプロシージャのリストを表示するには、nbsu に **-l** コマンドラインオプションを指定して実行します。診断グループには **OS**、**DEV**、**NET**、**NBU**、**MM** があります。複数の **-s** オプションを指定できます。たとえば、

```
-s OS_general -s DEV
```

**-t**

このオプションを指定すると、NetBackup のトラブルシューティングに関連する診断コマンドまたはプロシージャのみが実行されます。

**-use\_reg\_cmd [32 | 64]**

このオプションは **Windows** システムでのみ動作します。

このオプションは、**Reg.exe** ユーティリティを使って **Windows** レジストリの問い合わせを実行できるようにします。このオプションが正しく機能するように、**/reg:32** または **/reg:64** コマンドラインパラメータをサポートするバージョンの **Reg.exe** がインストールされている必要があります。

**-v**

このオプションを指定すると、nbsu の内部バージョンが出力されます。

-xml

このオプションを指定すると、すべての nbsu 出力が 1 つの XML 形式ファイルに出力されます。

## 例

**例 1 - NetBackup** ノードで実行するために選択すべき診断を一覧表示します。

```
nbsu -l
```

**例 2 -** 実行する個々の診断コマンドを選択します。結果のサポートバンドルは圧縮しないでください。

```
nbsu -d NBU_version -nozip
```

**例 3 -** 実行する診断のネットワークグループを選択します。ただし、NET\_etc\_hosts 診断はスキップします。

```
nbsu -g NET -s NET_etc_hosts
```

**例 4 - NetBackup** 終了状態コード 41 に関連付けられた診断を選択します。

```
nbsu -nbu_e 41
```

**例 5 - NetBackup** ノード上のネットワーク診断グループおよびオペレーティングシステム診断グループに対して実行するために選択される診断を一覧表示します。

```
nbsu -l -g NET -g OS
```

**例 6 -** 実行する個々の診断コマンドを選択します。結果のサポートバンドルは圧縮しません。

```
nbsu -d NBU_version -nozip
```

**例 7 -** 実行する診断のネットワークおよびオペレーティングシステムグループを選択します。ただし、NET\_dd 診断をスキップします。

```
nbsu -g NET -s NET_dd -g OS
```

**例 8 - NetBackup** 終了状態コード 21、25 および 41 に関連付けられた診断を選択します。

```
nbsu -nbu_e 21 -nbu_e 25 -nbu_e 41
```

# nbsvrgrp

nbsvrgrp - サーバークループの管理

## 概要

```
nbsvrgrp -add -grpname name [-M master_name] -server
s1:t1:s2:t2:s3:t3...sN:tN -grptype MediaSharing | NOM |
AltServerRestore [-grpstate ACTIVE | INACTIVE] -description text
nbsvrgrp -update -grpname name [-M master_name] [-addsvr
s1:t1:s2:t2:s3:t3...sN:tN] [-remsvr s1:t1:s2:t2:s3:t3...sN:tN]
[-grptype MediaSharing | NOM | AltServerRestore] [-grpstate ACTIVE
| INACTIVE] [-description text]
nbsvrgrp -delete -grpname name [-M master_name]
nbsvrgrp -list [-M master_name] [-grptype MediaSharing | NOM |
AltServerRestore] [-grpname name] [-grpstate ACTIVE | INACTIVE]
[-summary | -verbose | -noverbose]
nbsvrgrp -list_machine_membership [-M master_name] -m machine_name
[-t machine_type] [-summary | -verbose | -noverbose]
```

UNIX システムでは、このコマンドのディレクトリパスは  
/usr/opensv/netbackup/bin/admincmd/ です。

Windows システムでは、このコマンドのディレクトリパスは  
<install\_path>%NetBackup%\bin\admincmd\ です。

## 機能説明

nbsvrgrp コマンドを実行すると、サーバークループが追加、変更、削除または一覧表示されます。

nbsvrgrp は、すべての認可済みユーザーが実行できます。

NetBackup による認可については、『Symantec NetBackup セキュリティおよび暗号化ガイド UNIX、Windows および Linux』を参照してください。

## オプション

-add

このオプションを指定すると、新しいサーバークループが追加されます。

-addsvr s1:t1:s2:t2:s3:t3...sN:tN

このオプションでは、サーバークループに追加するサーバーのリストまたはサーバー形式の対を指定します。サーバー形式には、*master*、*media*、*ndmp* などがあります。

**-change**

このオプションを指定すると、既存のサーバーグループが変更されます。

**-delete**

このオプションを指定すると、サーバーグループが削除されます。メディアが割り当てられているメディア共有グループを指定した場合、この操作は失敗します。

**-description text**

このオプションでは、サーバーグループの説明を指定します。説明に空白が含まれる場合は、二重引用符で囲みます。

**-grpname name**

このオプションでは、サーバーグループに対して読みやすい名前を指定します。この名前では、大文字と小文字が区別されます。名前には、文字 (**a** から **z**、**A** から **Z**、**0** から **9**)、プラス (+)、マイナス (-)、アンダースコア (**\_**) およびピリオド (**.**) のみを使用できます。

**-grptype type**

このオプションでは、サーバーグループの使用目的を指定するためのグループ形式を指定します。現在使用できるグループ形式は、**MediaSharing**、**NOM** および **AltServerRead** です。

**-grpstate ACTIVE | INACTIVE**

このオプションを指定すると、サーバーグループの状態が設定または変更されます。指定可能な状態は、**ACTIVE** と **INACTIVE** です。

**-list [-summary | -verbose | -noverbose]**

このオプションを指定すると、すべてのサーバーグループに関する情報が表示されます。**-summary** オプションを指定すると、サーバーグループの情報が簡易形式で表示されます。**-verbose** オプションを指定すると、サーバーグループの情報が詳細な形式で表示されます。**-noverbose** オプションを指定すると、サーバーグループの情報が解析可能な形式で表示されます。

**-list\_machine\_membership [-summary | -verbose | -noverbose]**

このオプションを指定すると、指定したマシンが属するサーバーグループが表示されます。**-summary** オプションを指定すると、サーバーグループの情報が簡易形式で表示されます。**-verbose** オプションを指定すると、サーバーグループの情報が詳細な形式で表示されます。**-noverbose** オプションを指定すると、サーバーグループの情報が解析可能な形式で表示されます。

**-m machine\_name**

このオプションでは、**-list\_machine\_membership** オプションで使用するマシン名を指定します。

```
-remsvr s1:t1:s2:t2:s3:t3...sN:tN
```

このオプションでは、サーバーグループから削除するサーバーのリストまたはサーバー形式の対を指定します。サーバー形式には、*master*、*media*、*ndmp* があります。

```
-server s1:t1:s2:t2:s3:t3...sN:tN
```

このオプションでは、サーバーグループ内に構成するサーバーのリスト (*s1*, *s2*,...) またはサーバー形式 (*t1*, *t2*,...) の対を指定します。サーバー形式には、*master*、*media*、*ndmp* があります。

```
-t machine_type
```

このオプションでは、*-m* オプションで指定したマシンに対応するマシン形式を指定します。マシン形式には、*master*、*media server*、*ndmp* があります。

## 注意事項

nbsvrgrp では、オプションパラメータで指定された検証だけが行われます。

## 例

例 1 - *MyServerGroup* という新しいメディア共有サーバーグループが、メディアサーバー (*larry* および *moe*)、*ndmp* ファイラ (*myfiler*) とともに追加されます。

```
nbsvrgrp -add -grpname MyServerGroup -server
larry:media:moe:media:myfiler:ndmp -grptype MediaSharing -grpstate
ACTIVE -description "my description with spaces"
```

例 2 - 構成されているすべてのサーバーグループを表示します。

```
nbsvrgrp -list -summary
```



# resilient\_clients

`resilient_clients` - 通信エラーを引き起こす WAN 遅延および割り込みに対するクライアントの耐性を有効にする実行ユーティリティ

## 概要

```
resilient_clients on | off client1 [client2 ...]
```

```
resilient_clients status [client1 ...]
```

UNIX システムでは、このコマンドのディレクトリパスは

`/usr/opensv/netbackup/bin/admincmd/` です。

Windows システムでは、このコマンドのディレクトリパスは

`<install_path>%NetBackup%bin\admincmd%` です。

## 機能説明

`resilient_clients` ユーティリティはリモートオフィスのクライアントとセントラルオフィスの **NetBackup** サーバー間の通信を拡張します。操作の失敗を引き起こす可能性がある WAN (ワイドエリアネットワーク) の大きい遅延と割り込みに対する耐性をクライアントに持たせます。`resilient_clients` は 3 つの接続レベルで耐性を強化します。レガシー **NetBackup**、**ClientDirect**、**PureDisk** の 3 つです。

このコマンドを実行するには、管理者権限が必要です。

## オプション

```
on | off client1 [client2 ...]
```

指定したクライアントの耐性のオンとオフを切り替えます。

```
status [client1 ...]
```

指定したクライアントの耐性の設定 (オンまたはオフ) が表示されます。クライアントを指定しない場合は、このマスターサーバーのすべてのクライアントの状態が表示されます。

# restoretrace

restoretrace – リストアジョブのデバッグログの統合

## 概要

```
restoretrace [-master_server name] [-job_id number] [-client_name name] [-start_time hh:mm:ss] [-end_time hh:mm:ss] mmdyy [mmdyy...]
```

On UNIX systems, the directory path to this command is  
/usr/opensv/netbackup/bin/admincmd/

Windows システムでは、このコマンドへのディレクトリパスは  
<install\_path>%NetBackup%bin\admincmd% です。

## 機能説明

restoretrace ユーティリティを実行すると、指定したリストアジョブのデバッグログが統合されます。このユーティリティでは、指定したリストアジョブに関連するデバッグログの行が標準出力にコピーされます。メッセージは時間順にソートされます。**restoretrace** ユーティリティでは、リモートサーバーとクライアント間のタイムゾーンの違いおよびクロックのずれに対する補正が試行されます。出力は、タイムスタンプ、プログラム名、サーバー、または機能 (マスターサーバー上の bprd、メディアサーバー上の bpbrm と bptm-bpdm、クライアント上の tar) によるソートやグループ化の実行が容易な形式で生成されます。最大の出力結果を得るには、ログの詳細度を **5** に設定します。また、前述のプロセスに加えて、マスターサーバー上の bpdcm およびすべてのサーバーとクライアント上の bpcd のデバッグログを有効にします。

このコマンドを実行するには、管理者権限が必要です。

## オプション

- master\_server name  
このオプションでは、マスターサーバー名を指定します。デフォルトは、ローカルのホスト名です。
- job\_id number  
このオプションでは、分析するリストアジョブのジョブ ID 番号を指定します。
- client\_name name  
このオプションでは、分析するジョブのクライアント名を指定します。
- start\_time hh:mm:ss  
このオプションでは、ログの分析を開始する最初のタイムスタンプを指定します。

`-end_time hh:mm:ss`

このオプションでは、ログの分析を終了する最後のタイムスタンプを指定します。

`mmdyy [mmdyy...]`

restoretrace で分析されるログファイル名 (UNIX の場合は `log.mmdyy`、Windows の場合は `mmdyy.log`) を識別する 1 つ以上の日付スタンプ。

## 注意事項

Media Manager ログは分析されません。

## 例

例 1 - 2002 年 7 月 15 日に実行された、クライアント *peony* のすべてのリストアジョブのデバッグログが統合されます。評価するジョブの時間帯を制限するには、`start_time` および `end_time` パラメータを使用します。

UNIX システムの場合:

```
/usr/opensv/netbackup/bin/admincmd/restoretrace -job_id 234
081302 log.234
```

Windows システムの場合:

```
C:\Program Files\VERITAS\NetBackup\bin\admincmd\restoretrace
client peony install_path C:\Program Files\VERITAS 071502
log.peony
```

# stoptid

stoptid – Media Manager device デーモンを停止

## 概要

stoptid

The directory path to this command is /usr/opensv/volmgr/bin/

## 機能説明

このコマンドは UNIX システムでのみ動作します。

stoptid コマンドを実行すると、ltid、avrd およびロボットデーモンが停止されます。

ltid コマンドを実行すると、Media Manager device デーモン (ltid) および自動ボリューム認識デーモン (avrd) が起動されます。これらのデーモンによって、Media Manager デバイスが管理されます。両方のデーモンが起動されると、オペレータは操作画面の開始、ドライブ状態の監視、およびスタンドアロンドライブに対する要求の割り当ての制御を行うことができます。ltid は、システムの初期化用スクリプトの中で指定できます。

Media Manager Volume デーモン vmd も ltid コマンドによって起動されます。ロボットデバイスが Media Manager で定義済みの場合、適切なロボットデーモンも ltid によって起動されます。

このコマンドを実行するには、管理者権限が必要です。

## エラー

エラーメッセージは、syslogd を使用してログに書き込まれます。

## 関連項目

rc(8)、syslogd (UNIX コマンド)

p.465 の [ltid](#) を参照してください。

p.720 の [tpconfig](#) を参照してください。

p.741 の [tpunmount](#) を参照してください。

p.774 の [vmadm](#) を参照してください。

# tl4d

tl4d – テープライブラリ 4MM (TL4) デーモン (UNIX) またはプロセス (Windows)

## 概要

tl4d [-v]

UNIX システムでは、このコマンドのディレクトリパスは /usr/opensv/volmgr/bin/ です。

Windows システムでは、このコマンドのディレクトリパスは <install\_path>%Volmgr%bin% です。

## 機能説明

tl4d は Media Manager と通信し、これによって、4MM テープライブラリ (TL4) ロボットのテープのマウントおよびマウント解除が実行されます。

ltid は、UNIX システムの Media Manager device デーモン、または Windows システムの NetBackup Device Manager サービスです。管理コンソールの [メディアおよびデバイスの管理 (Media and Device Management)] にロボット内のドライブが表示されている場合、ltid が tl4d を開始します。ltid を停止すると、tl4d が停止されます。

UNIX システムの場合: /usr/opensv/volmgr/bin/vmps コマンドまたはサーバーの ps コマンドを実行して tl4d のプロセス ID を識別すると、ltid とは関係なく tl4d を停止または起動できます。その後、次のコマンドを入力します。

```
kill tl4d_pid
/usr/opensv/volmgr/bin/tl4d [-v] &
```

tl4d は、SCSI インターフェースを介してロボットと通信します。接続が確立される (ロボットへのパスを開くことができる) と、tl4d によって TL4 ロボットが稼働状態になります。その後、テープのマウントおよびマウント解除が実行可能になります。ロボットにアクセスできない場合、tl4d によってロボットが停止状態になります。ロボットが停止している間も、tl4d は継続して実行されます。接続が確立されると、ロボットは稼働状態に戻ります。

すべてのテープにアクセスするには、ロボット内の 4MM テープのメディア ID およびスロット番号情報を Enterprise Media Manager データベースに定義する必要があります。

クリーニングボリュームを使用する場合、そのボリュームをボリューム構成に定義する必要があります。自動的にドライブをクリーニングする間隔の設定については、「tpclean」を参照してください。

UNIX システムでは、tl4d のインターネットサービスポート番号が /etc/services に含まれている必要があります。NIS (ネットワーク情報サービス) を使用する場合、そのホストの /etc/services ファイル内のエントリを、サービス用のマスター NIS サーバーデータベース内に挿入します。この services ファイルで使用するサービスポート番号を上書き

するには、`/usr/opensv/volmgr/database/ports/tl4d` ファイルの内容を `tl4d` のサービスポート番号を示す 1 行にして作成します。

Windows システムでは、`tl4d` のインターネットサービスポート番号は `%SystemRoot%\system32\drivers\etc\services` にあります。この `services` ファイルで使用するサービスポート番号を上書きするには、`install_path\Volmgr\database\ports\tl4d` ファイルの内容を `tl4d` のサービスポート番号を示す 1 行にして作成します。

デフォルトのサービスポート番号は **13713** です。

このコマンドを実行するには、管理者権限が必要です。

## オプション

- v このオプションは、UNIX システムだけに適用されます。`syslogd` を使用してデバッグ情報がログに書き込まれます。`ltid` に `-v` を指定して起動すると、`tl4d` に `-v` が指定されて起動されます。

## エラー

UNIX システムの場合:

`tl4d` のコピーが実行中の場合、`tl4d` によってエラーメッセージが戻されます。

4MM テープライブラリエラーおよびロボットエラーは、**Media Manager** によって `syslogd` を介してログに書き込まれます。また、稼働状態から停止状態、または停止状態から稼働状態に状態が変化した場合も、ログエントリが追加されます。

Windows システムの場合:

4MM テープライブラリエラーおよびロボットエラーは、**Media Manager** によって Windows アプリケーションのイベントログに書き込まれます。また、稼働状態から停止状態、または停止状態から稼働状態に状態が変化した場合も、ログエントリが追加されます。

## 関連項目

- p.717 の [tpclean](#) を参照してください。
- p.720 の [tpconfig](#) を参照してください。
- p.465 の [ltid](#) を参照してください。
- `syslogd` (UNIX コマンド)
- p.774 の [vmadm](#) を参照してください。

# t18d

t18d – 8MM テープライブラリ (TL8) デーモン (プロセス)

## 概要

t18d [-v]

UNIX システムでは、このコマンドのディレクトリパスは /usr/opensv/volmgr/bin/ です。

Windows システムでは、このコマンドのディレクトリパスは <install\_path>%Volmgr%bin% です。

## 機能説明

t18d は Media Manager と通信し、これによって、8MM テープライブラリロボットのボリュームのマウントおよびマウント解除が実行されます。

ltid は、UNIX システムの Media Manager device デーモン、または Windows システムの NetBackup Device Manager サービスです。t18d は、ドライブ接続が確立された各ホスト上で実行され、マウント要求およびマウント解除要求が制御デーモンに送信されます。

UNIX システムでは、ltid が起動され停止されると、t18d が自動的に起動されて停止されます。ltid とは関係なく t18d を停止または起動するには、/usr/opensv/volmgr/bin/vmps またはサーバーの ps コマンドを実行して、t18d のプロセス ID を識別します。その後、次のコマンドを入力します。

```
kill t18d_pid
```

```
/usr/opensv/volmgr/bin/t18d [-v] &
```

制御デーモン t18cd は、ロボット制御が構成されているホスト上で実行されます。このコマンドは、そのホスト上の t18d によって起動されます (「例」を参照)。

Windows システムでは、t18d は NetBackup Device Manager サービスの起動時に起動されます。これらのコマンドは、このサービスの停止時に停止します。制御プロセス t18cd は、ロボット制御が構成されているホスト上で実行されます。このコマンドは、そのホスト上の t18d によって自動的に起動されます (「例」を参照)。t18cd は、NetBackup Device Manager サービスを停止すると停止します。

NetBackup Device Manager サービス (Windows システム)、ltid、t18d、t18cd を介してすべてのボリュームにアクセスするには、ロボット内のボリュームのメディア ID およびスロット番号情報を EMM データベースに定義する必要があります。

クリーニングボリュームを使用する場合、そのボリュームをボリューム構成に定義する必要があります。自動的にドライブをクリーニングする間隔の設定については、「tpclean」を参照してください。

t18cd の動作中に `vm.conf` 構成のオプション `PREVENT_MEDIA_REMOVAL` が有効になると、t18cd によってボリュームおよびメディアアクセスポートへのアクセスが無効になります。アクセスを無効にするため、TL8 ロボットにコマンドが発行されます。キャビネットのドアを開く必要がある場合、まず t18cd を停止する必要があります。デフォルトでは、ライブラリへのアクセスが許可されています。

ドライブには、論理的に 1 から  $n$  の番号が付けられます。ここで、 $n$  はロボットライブラリ内のドライブの数です。次のものを使用して、正しいロボットドライブ番号を確認します。

- デバイスの構成ウィザード (ロボットライブラリおよびドライブによってシリアル化がサポートされている場合)
- ロボットライブラリベンダーが提供する、ドライブのインデックス付けについてのマニュアル
- ロボットテストユーティリティまたはメディアのマウントや操作画面の監視による試験

UNIX システムでは、t18cd のインターネットサービスポート番号が `/etc/services` に含まれている必要があります。NIS (ネットワーク情報サービス) を使用する場合、そのホストの `/etc/services` ファイル内のエントリを、サービス用のマスター NIS サーバーデータベース内に挿入します。この `services` ファイルで使用するサービスポート番号を上書きするには、`/usr/opensv/volmgr/database/ports/t18cd` ファイルの内容を t18cd のサービスポート番号を示す 1 行にして作成します。

Windows システムでは、t18cd のインターネットサービスポート番号は

`%SystemRoot%\system32\drivers\etc\services` にあります。この `services` ファイルで使用するサービスポート番号を上書きするには、

`install_path\Volmgr\database\ports\t18cd` ファイルの内容を t18cd のサービスポート番号を示す 1 行にして作成します。

デフォルトのサービスポート番号は 13705 です。

次の項目は、NetBackup Enterprise Server だけに適用されます。

- 8MM テープライブラリロボット制御ソフトウェアによって、同じロボット内のドライブを異なるホスト上に構成できます。SCSI 接続が存在する場所によっては、t18cd が t18d とは異なるホスト上で実行される場合があります (「例」を参照)。接続が確立される (ロボットへのパスを開くことができる) と、t18d によって TL8 ロボットが稼働状態になります。その後、ボリュームのマウントおよびマウント解除が実行可能になります。ロボットにアクセスできない場合、t18d によってロボットが停止状態になります。ロボットが停止している間も、t18d は継続して実行されます。t18cd による接続が確立されると、ロボットは稼働状態に戻ります。



- ドライブが異なる NetBackup ホスト上に存在する場合は、すべてのマシンの **Media Manager** 構成にロボット情報を入力します。すべてのマシン上で同じロボット番号を使用する必要があります。

このコマンドを実行するには、管理者権限が必要です。

## オプション

次のオプションは、UNIX システムでのみ動作します。

-v syslogd を使ってデバッグ情報をログに記録します。ltid に -v を指定して起動すると、tl8d と tl8cd にも -v が指定されて起動されます。

## エラー

UNIX システムの場合:

デーモンのコピーが実行中の場合、tl8d によってエラーメッセージがログに書き込まれます。

8MM テープライブラリエラーおよびロボットエラーは、Media Manager によって syslogd を介してログに書き込まれます。また、稼働状態から停止状態、または停止状態から稼働状態に状態が変化した場合も、ログエントリが追加されます。

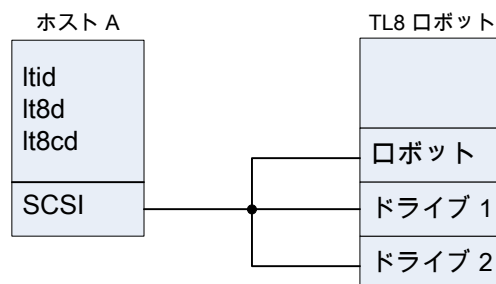
Windows システムの場合:

8MM テープライブラリエラーおよびロボットエラーは、Media Manager によって Windows アプリケーションのイベントログに書き込まれます。また、稼働状態から停止状態、または停止状態から稼働状態に状態が変化した場合も、ログエントリが追加されます。

## 例

例 1 - 次の図では、ドライブおよびロボットが 1 台のホストに接続されます。また、ltid によって tl8d が起動され、それによって tl8cd が起動されます。

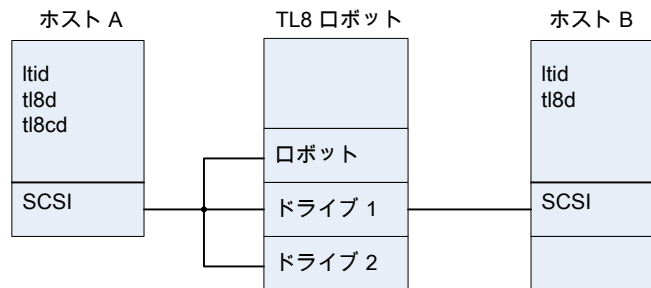
図 A-1 TL8 ロボットに接続した 1 台のホストでの tl8d の使用



例 2 - 次の例は、NetBackup Enterprise Server だけに適用されます。

次の図では、各ホストがロボット内の 1 台のドライブに接続され、ロボットはホスト A に接続されます。各ホスト上の `ltid` によって `tl8d` が起動されます。また、ロボット制御がホスト A 上に定義されているため、ホスト A 上の `tl8d` によって `tl8cd` も起動されます。ホスト B からのテープのマウント要求は、ホスト B 上の `tl8d` に送信されます。その後、そのロボットコマンドは、ホスト A 上の `tl8cd` に送信されます。

図 A-2 TL8 ロボットに接続した 2 台のホストでの `tl8d` の使用



- p.691 の [tl8cd](#) を参照してください。
- p.717 の [tpclean](#) を参照してください。
- p.720 の [tpconfig](#) を参照してください。
- p.465 の [ltid](#) を参照してください。
- [syslogd \(UNIX コマンド\)](#) を参照してください
- p.774 の [vmadm](#) を参照してください。

# t18cd

t18cd – テープライブラリ 8MM (TL8) 制御デーモン (プロセス)

## 概要

```
t18cd [-v] [-t] [-n]
```

UNIX システムでは、このコマンドのディレクトリパスは `/usr/opensv/volmgr/bin/` です。

Windows システムでは、このコマンドのディレクトリパスは `<install_path>%Volmgr%bin%` です。

## 機能説明

t18d および t18cd は Media Manager と通信し、これによって、8MM テープライブラリ ロボットのボリュームのマウントおよびマウント解除が実行されます。

ltid は、UNIX システムの Media Manager device デーモン、または Windows システムの NetBackup Device Manager サービスです。t18d は、ドライブ接続が確立された各ホスト上で実行され、マウント要求およびマウント解除要求が制御デーモン (t18cd) に送信されます。t18cd は、SCSI インターフェースを介してロボットと通信します。

UNIX システムでは、ltid が起動され停止されると、t18d と t18cd が自動的に起動されて停止されます。ltid とは関係なく t18d を停止または起動するには、`/usr/opensv/volmgr/bin/vmps` またはサーバーの `ps` コマンドを実行して、t18d のプロセス ID を識別します。その後、次のコマンドを入力します。

```
kill t18d_pid
```

```
/usr/opensv/volmgr/bin/t18d [-v] &
```

制御デーモン t18cd は、ロボット制御が構成されているホスト上で実行されます。このコマンドは、そのホスト上の t18d によって起動されます (「例」を参照)。

Windows システムでは、t18d および t18cd は、NetBackup Device Manager サービスの起動時に起動されます。これらのコマンドは、このサービスの停止時に停止します。制御プロセス t18cd は、ロボット制御が構成されているホスト上で実行されます。このコマンドは、そのホスト上の t18d によって自動的に起動されます (「例」を参照)。t18cd は、NetBackup Device Manager サービスを停止すると停止します。

NetBackup Device Manager サービス (Windows システム)、ltid、t18d、t18cd を介してすべてのボリュームにアクセスするには、ロボット内のボリュームのメディア ID およびスロット番号情報を EMM データベースに定義する必要があります。

クリーニングボリュームを使用する場合、そのボリュームをボリューム構成に定義する必要があります。自動的にドライブをクリーニングする間隔の設定については、「tpclean」を参照してください。

t18cd の動作中に `vm.conf` 構成のオプション `PREVENT_MEDIA_REMOVAL` が有効になると、t18cd によってボリュームおよびメディアアクセスポートへのアクセスが無効になります。アクセスを無効にするため、TL8 ロボットにコマンドが発行されます。キャビネットのドアを開く必要がある場合、まず t18cd を停止する必要があります。デフォルトでは、ライブラリへのアクセスが許可されています。

ドライブには、論理的に 1 から  $n$  の番号が付けられます。ここで、 $n$  はロボットライブラリ内のドライブの数です。次のものを使用して、正しいロボットドライブ番号を確認します。

- デバイスの構成ウィザード (ロボットライブラリおよびドライブによってシリアル化がサポートされている場合)
- ロボットライブラリベンダーが提供する、ドライブのインデックス付けについてのマニュアル
- ロボットテストユーティリティまたはメディアのマウントや操作画面の監視による試験

UNIX システムでは、t18cd のインターネットサービスポート番号が `/etc/services` に含まれている必要があります。NIS (ネットワーク情報サービス) を使用する場合、そのホストの `/etc/services` ファイル内のエントリを、サービス用のマスター NIS サーバーデータベース内に挿入します。この `services` ファイルで使用するサービスポート番号を上書きするには、`/usr/opensv/volmgr/database/ports/t18cd` ファイルの内容を t18cd のサービスポート番号を示す 1 行にして作成します。

Windows システムでは、t18cd のインターネットサービスポート番号は

`%SystemRoot%\system32\drivers\etc\services` にあります。この `services` ファイルで使用するサービスポート番号を上書きするには、

`install_path\Volmgr\database\ports\t18cd` ファイルの内容を t18cd のサービスポート番号を示す 1 行にして作成します。

デフォルトのサービスポート番号は 13705 です。

次の項目は、NetBackup Enterprise Server だけに適用されます。

- 8MM テープライブラリロボット制御ソフトウェアによって、同じロボット内のドライブを異なるホスト上に構成できます。SCSI 接続が存在する場所によっては、t18cd が t18d とは異なるホスト上で実行される場合があります (「例」を参照)。接続が確立される (ロボットへのパスを開くことができる) と、t18d によって TL8 ロボットが稼働状態になります。その後、ボリュームのマウントおよびマウント解除が実行可能になります。ロボットにアクセスできない場合、t18d によってロボットが停止状態になります。ロボットが停止している間も、t18d は継続して実行されます。t18cd による接続が確立されると、ロボットは稼働状態に戻ります。

- ドライブが異なる NetBackup ホストに存在する場合、すべてのコンピュータの Media Manager 構成にロボット情報を入力します。すべてのコンピュータ上で同じロボット番号を使用する必要があります。

このコマンドを実行するには、管理者権限が必要です。

## オプション

次のオプションは、UNIX システムでのみ動作します。

- v syslogd を使ってデバッグ情報をログに記録します。ltid に -v を指定して起動すると、t18d と t18cd にも -v が指定されて起動されます。
- t このオプションを指定すると、t18cd が停止されます。
- n このオプションを指定すると、バーコード確認機能が無効にされた状態で t18cd が実行されます。このオプションはライブラリのすべてまたはほとんどのボリュームにバーコードが含まれていない場合に有用です。バーコードが含まれていない場合、ロボットがボリュームをスキャンする時間が短縮されます。

ボリュームにバーコードが含まれる場合に -n オプションを指定すると、それらのバーコードが無視されることに注意してください。

## エラー

UNIX システムの場合:

デーモンのコピーが実行中の場合、t18d および t18cd の両方によってエラーメッセージがログに書き込まれます。

8MM テープライブラリエラーおよびロボットエラーは、Media Manager によって syslogd を介してログに書き込まれます。また、稼働状態から停止状態、または停止状態から稼働状態に状態が変化した場合も、ログエントリが追加されます。

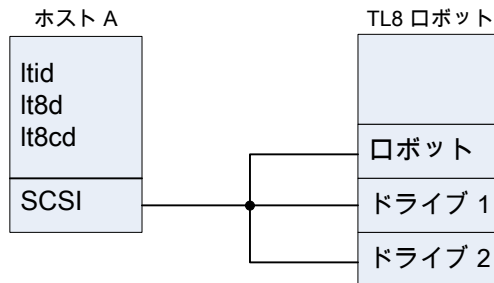
Windows システムの場合:

8MM テープライブラリエラーおよびロボットエラーは、Media Manager によって Windows アプリケーションのイベントログに書き込まれます。また、稼働状態から停止状態、または停止状態から稼働状態に状態が変化した場合も、ログエントリが追加されます。

## 例

例 1 - 次の図では、ドライブおよびロボットが 1 台のホストに接続されます。また、ltid によって t18d が起動され、それによって t18cd が起動されます。

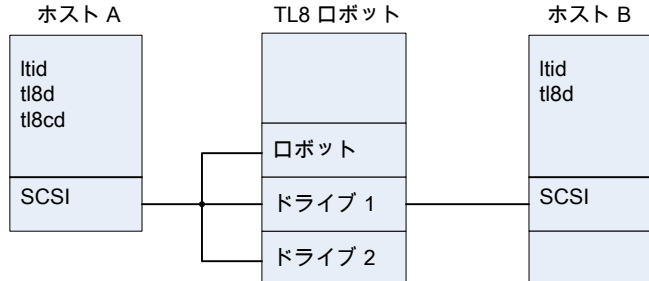
図 A-3 TL8 ロボットに接続した 1 台のホストでの t18cd の使用



例 2 - 次の例は、NetBackup Enterprise Server だけに適用されます。

次の図では、各ホストがロボット内の 1 台のドライブに接続され、ロボットはホスト A に接続されます。各ホスト上の ltid によって t18d が起動されます。また、ロボット制御がホスト A 上に定義されているため、ホスト A 上の t18d によって t18cd も起動されます。ホスト B からのテープのマウント要求は、ホスト B 上の t18d に送信されます。その後、そのロボットコマンドは、ホスト A 上の t18cd に送信されます。

図 A-4 TL8 ロボットに接続した 2 台のホストでの t18cd の使用



## 関連項目

- p.717 の [tpclean](#) を参照してください。
- p.717 の [tpclean](#) を参照してください。
- p.720 の [tpconfig](#) を参照してください。
- p.465 の [ltid](#) を参照してください。
- p.774 の [vmadm](#) を参照してください。
- syslogd (UNIX コマンド)

# tldd

tldd - テープライブラリ DLT (TLD) デーモン (プロセス) または制御デーモン (プロセス)

## 概要

tldd [-v]  
UNIX システムでは、このコマンドのディレクトリパスは /usr/opensv/volmgr/bin/ です。  
Windows システムでは、このコマンドのディレクトリパスは <install\_path>%Volmgr%bin% です。

## 機能説明

tldd および tldcd は Media Manager と通信し、これによって、DLT テープライブラリ (TLD) ロボットのボリュームのマウントおよびマウント解除が実行されます。

ltid は、UNIX システムの Media Manager device デーモン、または Windows システムの NetBackup Device Manager サービスです。tldd は ltid と直接通信します。  
tldd は、ドライブ接続が確立された各ホスト上で実行され、マウント要求およびマウント解除要求が制御デーモン (tldcd) に送信されます。tldcd は、SCSI インターフェースを介してロボットと直接通信します。

次の項目は、NetBackup Enterprise Server だけに適用されます。

- TLD ロボット制御ソフトウェアによって、同じロボット内のドライブを異なるホスト上に構成できます。インターフェース接続が存在する場所によっては、tldcd が tldd とは異なるホスト上で実行される場合があります (「例」を参照)。接続が確立される (ロボットへのパスを開くことができる) と、tldd によって TLD ロボットが稼働状態になります。その後、ボリュームのマウントおよびマウント解除が実行可能になります。ロボットにアクセスできない場合、tldd によってロボットが停止状態になります。ロボットが停止している間も、tldd は継続して実行されます。tldcd による接続が確立されると、ロボットは稼働状態に戻ります。
- ドライブが異なる NetBackup ホスト上に存在する場合は、すべてのコンピュータの管理コンソールの [メディアおよびデバイスの管理 (Media and Device Management)] にロボット情報を入力します。すべてのコンピュータ上で同じロボット番号を使用する必要があります。

UNIX システムでは、ltid が起動され停止されると、tldd と tldcd が自動的に起動されて停止されます。ltid とは関係なく tldd を停止または起動するには、/usr/opensv/volmgr/bin/vmps またはサーバーの ps コマンドを実行して、tldd のプロセス ID を識別します。その後、次のコマンドを入力します。

```
kill tldd_pid
/usr/opensv/volmgr/bin/tldd [-v] &
```

制御デーモン `tldcd` は、ロボット制御が構成されているホスト上で実行されます。このコマンドは、そのホスト上の `tldd` によって自動的に起動されます（「例」を参照）。

Windows システムでは、`tldd` および `tldcd` は、**NetBackup Device Manager** サービスの起動時に起動されます。これらのコマンドは、このサービスの停止時に停止します。制御プロセス `tldcd` は、ロボット制御が構成されているホスト上で実行されます。このコマンドは、そのホスト上の `tldd` によって自動的に起動されます（「例」を参照）。`tldcd` は、**NetBackup Device Manager** サービスを停止すると停止します。

**NetBackup Device Manager** サービス (Windows システム)、`ltid`、`t18d`、`t18cd` を介してすべてのボリュームにアクセスするには、ロボット内のボリュームのメディア ID およびスロット番号情報を EMM データベースに定義する必要があります。

クリーニングボリュームを使用する場合、そのボリュームをボリューム構成に定義する必要があります。自動的にドライブをクリーニングする間隔の設定については、「`tpclean`」を参照してください。

ドライブには、論理的に 1 から  $n$  の番号が付けられます。ここで、 $n$  はロボットライブラリ内のドライブの数です。次のものを使用して、正しいロボットドライブ番号を確認します。

- デバイスの構成ウィザード (ロボットライブラリおよびドライブによってシリアル化がサポートされている場合)
- ロボットライブラリベンダーが提供する、ドライブのインデックス付けについてのマニュアル
- ロボットテストユーティリティまたはメディアのマウントや操作画面の監視による試験

UNIX システムでは、`tldcd` のインターネットサービスポート番号が `/etc/services` に含まれている必要があります。**NIS** (ネットワーク情報サービス) を使用する場合、そのホストの `/etc/services` ファイル内のエントリを、サービス用のマスター **NIS** サーバーデータベース内に挿入します。この `services` ファイルで使用するサービスポート番号を上書きするには、`/usr/opensv/volmgr/database/ports/tldcd` ファイルの内容を `tldcd` のサービスポート番号を示す 1 行にして作成します。

Windows システムでは、`tldcd` のインターネットサービスポート番号が `%SystemRoot%\system32\drivers\etc\services` に含まれている必要があります。この `services` ファイルで使用するサービスポート番号を上書きするには、`install_path\Volmgr\database\ports\tldcd` ファイルの内容を `tldcd` のサービスポート番号を示す 1 行にして作成します。

デフォルトのサービスポート番号は **13711** です。

このコマンドを実行するには、管理者権限が必要です。



## オプション

次のオプションは、UNIX システムでのみ動作します。

`-v` `syslogd` を使ってデバッグ情報をログに記録します。tldd に `-v` を指定して起動すると、tldd および tldcd にも `-v` が指定されて起動されます。

## エラー

DLT テープライブラリエラーおよびロボットエラーは、Media Manager によって Windows アプリケーションのイベントログに書き込まれます。また、稼働状態から停止状態、または停止状態から稼働状態に状態が変化した場合も、ログエントリが追加されます。

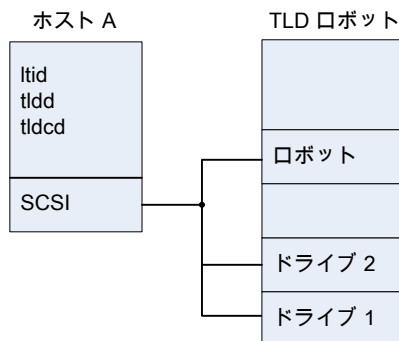
デーモンのコピーが実行中の場合、tldd および tldcd によってエラーメッセージがログに書き込まれます。

DLT テープライブラリエラーおよびロボットエラーは、Media Manager によって `syslogd` を介してログに書き込まれます。また、稼働状態から停止状態、または停止状態から稼働状態に状態が変化した場合も、ログエントリが追加されます。

## 例

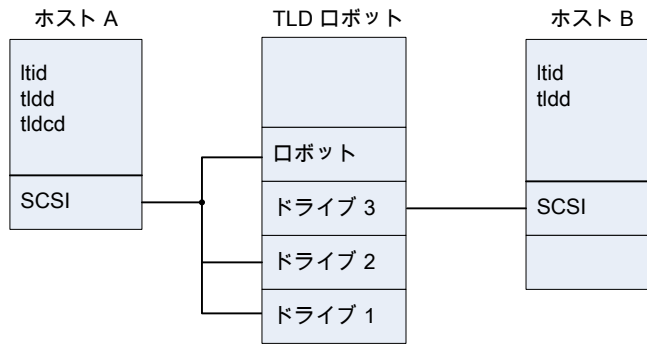
例 1 - 次の図では、ロボットおよび 2 台のドライブがホスト A に接続されます。また、tldd によって tldd が起動され、それによって tldcd が起動されます。

図 A-5 1 台のホストおよび TLD ロボットでの tldd の使用



例 2 - この例は、NetBackup Enterprise Server だけに適用されます。次の図では、各ホストを 1 台のドライブに接続し、ロボットをホスト A に接続しています。各コンピュータ上の tldd は tldd を開始します。また、ロボット制御がホスト A 上に定義されているため、ホスト A 上の tldd によって tldcd も起動されます。ホスト B からのテープのマウント要求は、ホスト B 上の tldd に送信されます。その後、そのロボットコマンドは、ホスト A 上の tldcd に送信されます。

図 A-6 TLD ロボットに接続した 2 台のホストでの tldd の使用



## 関連項目

- p.699 の [tldcd](#) を参照してください。
- p.717 の [tpclean](#) を参照してください。
- p.720 の [tpconfig](#) を参照してください。
- p.465 の [ltid](#) を参照してください。
- syslogd
- p.774 の [vmadm](#) を参照してください。

# tldcd

tldcd – テープライブラリ DLT (TLD) 制御デーモン (プロセス)

## 概要

tldcd [-v] [-t]

UNIX システムでは、このコマンドのディレクトリパスは /usr/opensv/volmgr/bin/ です。

Windows システムでは、このコマンドのディレクトリパスは <install\_path>%Volmgr%bin% です。

## 機能説明

tldcd および tldcd は Media Manager と通信し、これによって、DLT テープライブラリ (TLD) ロボットのボリュームのマウントおよびマウント解除が実行されます。

ltid は、UNIX システムの Media Manager device デーモン、または Windows システムの NetBackup Device Manager サービスです。tldcd は ltid と直接通信します。

tldcd は、ドライブ接続が確立された各ホスト上で実行され、マウント要求およびマウント解除要求が制御デーモン (tldcd) に送信されます。tldcd は、SCSI インターフェースを介してロボットと直接通信します。

次の項目は、NetBackup Enterprise Server だけに適用されます。

- TLD ロボット制御ソフトウェアによって、同じロボット内のドライブを異なるホスト上に構成できます。インターフェース接続が存在する場所によっては、tldcd が tldcd とは異なるホスト上で実行される場合があります (「例」を参照)。接続が確立される (ロボットへのパスを開くことができる) と、tldcd によって TLD ロボットが稼働状態になります。その後、ボリュームのマウントおよびマウント解除が実行可能になります。ロボットにアクセスできない場合、tldcd によってロボットが停止状態になります。ロボットが停止している間も、tldcd は継続して実行されます。tldcd による接続が確立されると、ロボットは稼働状態に戻ります。
- ドライブが異なる NetBackup ホスト上に存在する場合は、すべてのコンピュータの管理コンソールの [メディアおよびデバイスの管理 (Media and Device Management)] にロボット情報を入力します。すべてのコンピュータ上で同じロボット番号を使用する必要があります。

UNIX システムでは、ltid が起動され停止されると、tldcd と tldcd が自動的に起動されて停止されます。ltid とは関係なく tldcd を停止または起動するに

は、/usr/opensv/volmgr/bin/vmps またはサーバーの ps コマンドを実行して、tldcd のプロセス ID を識別します。その後、次のコマンドを入力します。

```
kill tldcd_pid
/usr/opensv/volmgr/bin/tldcd [-v] &
```

制御デーモン `tldcd` は、ロボット制御が構成されているホスト上で実行されます。このコマンドは、そのホスト上の `tldd` によって自動的に起動されます（「例」を参照）。

Windows システムでは、`tldd` および `tldcd` は、**NetBackup Device Manager** サービスの起動時に起動されます。これらのコマンドは、このサービスの停止時に停止します。制御プロセス `tldcd` は、ロボット制御が構成されているホスト上で実行されます。このコマンドは、そのホスト上の `tldd` によって自動的に起動されます（「例」を参照）。`tldcd` は、**NetBackup Device Manager** サービスを停止すると停止します。

**NetBackup Device Manager** サービス (Windows システム)、`ltid`、`t18d`、`t18cd` を介してすべてのボリュームにアクセスするには、ロボット内のボリュームのメディア ID およびスロット番号情報を **EMM** データベースに定義する必要があります。

クリーニングボリュームを使用する場合、そのボリュームをボリューム構成に定義する必要があります。自動的にドライブをクリーニングする間隔の設定については、「`tpclean`」を参照してください。

ドライブには、論理的に 1 から  $n$  の番号が付けられます。ここで、 $n$  はロボットライブラリ内のドライブの数です。次のものを使用して、正しいロボットドライブ番号を確認します。

- デバイスの構成ウィザード (ロボットライブラリおよびドライブによってシリアル化がサポートされている場合)
- ロボットライブラリベンダーが提供する、ドライブのインデックス付けについてのマニュアル
- ロボットテストユーティリティまたはメディアのマウントや操作画面の監視による試験

UNIX システムでは、`tldcd` のインターネットサービスポート番号が `/etc/services` に含まれている必要があります。**NIS** (ネットワーク情報サービス) を使用する場合、そのホストの `/etc/services` ファイル内のエントリを、サービス用のマスター **NIS** サーバーデータベース内に挿入します。この **services** ファイルで使用するサービスポート番号を上書きするには、`/usr/opensv/volmgr/database/ports/tldcd` ファイルの内容を `tldcd` のサービスポート番号を示す 1 行にして作成します。

Windows システムでは、`tldcd` のインターネットサービスポート番号が `%SystemRoot%\system32\drivers\etc\services` に含まれている必要があります。この **services** ファイルで使用するサービスポート番号を上書きするには、`install_path\Volmgr\database\ports\tldcd` ファイルの内容を `tldcd` のサービスポート番号を示す 1 行にして作成します。

デフォルトのサービスポート番号は **13711** です。

このコマンドを実行するには、管理者権限が必要です。

## オプション

次のオプションは、UNIX システムでのみ動作します。

- v syslogd を使ってデバッグ情報をログに記録します。ltid に -v を指定して起動すると、tldd および tldcd にも -v が指定されて起動されます。
- t このオプションを指定すると、tldcd が停止されます。

## エラー

DLT テープライブラリエラーおよびロボットエラーは、Media Manager によって Windows アプリケーションのイベントログに書き込まれます。また、稼働状態から停止状態、または停止状態から稼働状態に状態が変化した場合も、ログエントリが追加されます。

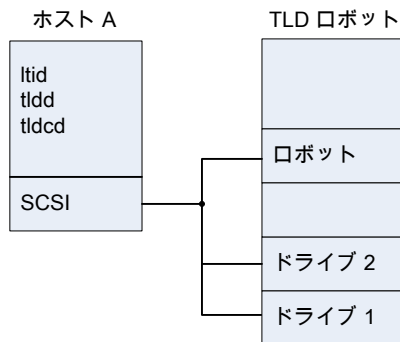
デーモンのコピーが実行中の場合、tldd および tldcd によってエラーメッセージがログに書き込まれます。

DLT テープライブラリエラーおよびロボットエラーは、Media Manager によって syslogd を介してログに書き込まれます。また、稼働状態から停止状態、または停止状態から稼働状態に状態が変化した場合も、ログエントリが追加されます。

## 例

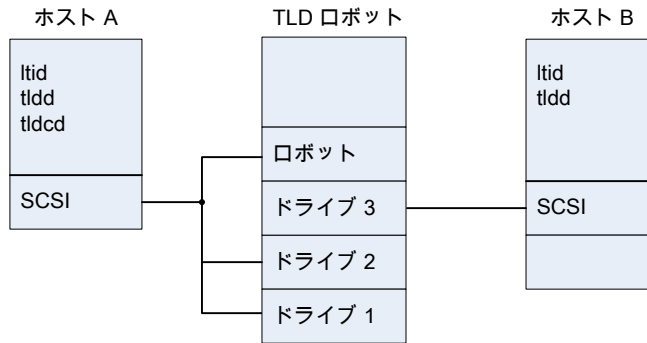
例 1 - 次の図では、ロボットおよび 2 台のドライブがホスト A に接続されます。また、ltid によって tldd が起動され、それによって tldcd が起動されます。

図 A-7 1 台のホストと TLD ロボットでの tldcd の使用



例 2 - この例は、NetBackup Enterprise Server だけに適用されます。次の図では、各ホストを 1 台のドライブに接続し、ロボットをホスト A に接続しています。各コンピュータ上の ltid は tldd を開始します。また、ロボット制御がホスト A 上に定義されているため、ホスト A 上の tldd によって tldcd も起動されます。ホスト B からのテープのマウント要求は、ホスト B 上の tldd に送信されます。その後、そのロボットコマンドは、ホスト A 上の tldcd に送信されます。

図 A-8 TLD ロボットに接続した 2 台のホストでの tldcd の使用



## 関連項目

- p.695 の [tldd](#) を参照してください。
- p.717 の [tpclean](#) を参照してください。
- p.720 の [tpconfig](#) を参照してください。
- p.465 の [ltid](#) を参照してください。
- `syslogd` (UNIX コマンド)
- p.774 の [vmadm](#) を参照してください。

# tlhd

tlhd - 1/2 インチテープライブラリ (TLH) デーモン (Windows システムのプロセス)

## 概要

tlhd [-v]

UNIX システムでは、このコマンドのディレクトリパスは /usr/opensv/volmgr/bin/ です。

Windows システムでは、このコマンドのディレクトリパスは <install\_path>%Volmgr%\bin\ です。

## 機能説明

---

**メモ:** このコマンドは、NetBackup Enterprise Server だけに適用されます。

---

tlhd および tlhdcd は Media Manager と通信し、これによって、1/2 インチテープライブラリ (TLH) ロボットのテープボリュームのマウントおよびマウント解除が実行されます。

ltid は、UNIX システムの Media Manager device デーモン、または Windows システムの NetBackup Device Manager サービスです。tlhd は ltid と直接通信します。

tlhd は、ドライブ接続が確立された各ホスト上で実行され、マウント要求およびマウント解除要求が制御デーモンプロセス tlhdcd に送信されます。

tlhdcd は、IBM Automated Tape Library (ATL) の Library Manager と通信します。この Library Manager によって、ロボットライブラリに対する要求および制御機能がすべて処理されます。TLH ロボット制御ソフトウェアによって、同じロボット内のドライブを異なるホスト上に構成できます。IBM ライブラリ制御を構成する場所によっては、tlhdcd が tlhd とは異なるホスト上で実行される場合があります (「例」を参照)。ライブラリとの通信が確立されると、tlhd によって TLH ロボットが稼働状態になり、ボリュームのマウントおよびマウント解除が要求可能になります。ライブラリまたは制御デーモンにアクセスできない場合、tlhd によってロボットが停止状態になります。ロボットが停止している間も、tlhd は継続して実行されます。tlhdcd による接続が確立されると、ロボットは稼働状態に戻ります。

---

**メモ:** ドライブが異なるホスト上に存在する場合は、すべてのコンピュータの管理コンソールの [メディアおよびデバイスの管理 (Media and Device Management)] にロボット情報を入力します。すべてのコンピュータ上で同じロボット番号を使用する必要があります。

---

UNIX システムでは、ltid が起動され停止されると、tlhd と tlhdcd が自動的に起動されて停止されます。ltid とは関係なく tlhd を停止または起動するに

は、/usr/opensv/volmgr/bin/vmps またはサーバーの ps コマンドを実行して、tlhd のプロセス ID を識別します。その後、次のコマンドを入力します。

```
kill tlhd_pid
/usr/opensv/volmgr/bin/tlhd [-v] &
```

制御デーモン `tlhcd` は、ロボット制御が構成されているホスト上で実行されます。このコマンドは、そのホスト上の `tlhd` によって自動的に起動されます（「例」を参照）。

Windows システムでは、`tlhd` および `tlhcd` は、**NetBackup Device Manager** サービスの起動時に起動されます。これらのコマンドは、このサービスの停止時に停止します。制御プロセス `tlhcd` は、ロボット制御が構成されているホスト上で実行されます。このコマンドは、そのホスト上の `tlhd` によって自動的に起動されます（「例」を参照）。`tlhcd` は、**NetBackup Device Manager** サービスを停止すると停止します。

**NetBackup Device Manager** サービス (Windows システム)、`ltid`、`tlhd`、`tlhcd` を介してすべてのボリュームにアクセスするには、ロボット内のボリュームのメディア ID およびスロット番号情報を **EMM** データベースに定義する必要があります。**Media Manager** ロボットインベントリオプションを使用すると、初期 **EMM** データベースの移行と将来の更新の両方を実行できます。

クリーニングボリュームを使用する場合、そのボリュームをボリューム構成に定義する必要があります。自動的にドライブをクリーニングする間隔の設定については、「`tpclean`」を参照してください。

ドライブは、**IBM** デバイス名を使用して構成されます。ロボットテストユーティリティ `tlhtest` (ロボットが構成されている場合は `robtest`) を使用すると、ロボットに関連付けられたデバイス名を確認できます。また、このユーティリティを **IBM** の `mtlib` コマンドラインインターフェースとともに使用すると、ライブラリの通信、状態および機能を検証することもできます。

1/2 インチテープライブラリロボット制御に対するドライブクリーニング操作は、**IBM Library Manager** コンソールを介して構成します。**IBM Library Manager** を使用するアプリケーションでは、クリーニング操作は使用できません。そのため、クリーニングするボリュームは、**Media Manager** を介して定義できません。また、**Media Manager** ユーティリティまたは `tpclean` コマンドを実行して、**TLH** ロボットに制御されているドライブに対するクリーニング操作を行うこともできません。

**UNIX** システムでは、`tlhcd` のインターネットサービスポート番号が `/etc/services` に含まれている必要があります。**NIS** を使用する場合、`/etc/services` ファイル内のエントリを、サービス用のマスター **NIS** サーバーデータベース内に挿入します。この `services` ファイルを上書きするには、`tlhcd/usr/opensv/volmgr/database/ports/tlhcd` のサービスポート番号を示す 1 行を含む、次のファイルを作成します。

Windows システムでは、`tlhcd` のインターネットサービスポート番号が `%SystemRoot%\system32\drivers\etc\services` に含まれている必要があります。この `services` ファイルで使用するサービスポート番号を上書きするには、`install_path\Volmgr\database\ports\tlhcd` ファイルの内容を `tlhcd` のサービスポート番号を示す 1 行にして作成します。



デフォルトのサービスポート番号は **13717** です。

このコマンドを実行するには、管理者権限が必要です。

## オプション

次のオプションは、**UNIX** システムでのみ動作します。

-v syslogd を使ってデバッグ情報をログに記録します。ltid に -v を指定して起動すると、tlhd および tlhcd にも -v が指定されて起動されます。

## エラー

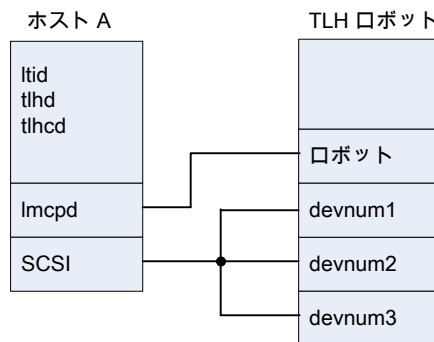
デーモンまたはプロセスのコピーが実行中の場合、tlhd および tlhcd によってエラーメッセージがログに書き込まれます。1/2 インチテープライブラリエラーおよびロボットエラーは、**Media Manager** によって syslogd (**UNIX** システム) またはアプリケーションイベントログ (**Windows**) に書き込まれます。また、稼働状態から停止状態、または停止状態から稼働状態に状態が変化した場合も、ログエントリが追加されます。

## 例

次の例では、デバイスホストとしてサポートされているすべての **Windows** サーバーまたは **UNIX** サーバー (**AIX**、**HP-UX**、**Solaris (SPARC)** および **Linux**) を使用できます。

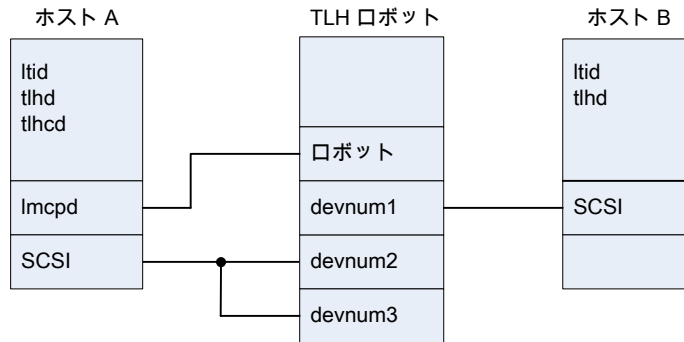
例 1 - 次の図では、ドライブが 1 台のホストに接続され、ロボットがそのホストから制御されます。ltid によって tlhd が起動され、それによって tlhcd が起動されます。lmcpd はホスト A で実行する必要があります。lmcpd は、**UNIX** システムの **IBM Library Manager Control Point** デーモンであり、**Windows** システムの **IBM Automated Tape Library** サービスです。

図 A-9 TLH ロボットに接続した 1 台のホストでの tlhd の使用



例 2 - 次の図では、各ホストを少なくとも 1 台のドライブに接続し、ロボットはホスト A で制御します。各コンピュータ上の ltid は tlhd を開始します。また、ロボット制御がホスト A 上に定義されているため、ホスト A 上の tlhd によって tlhcd も起動されます。ホスト B からのテープのマウント要求は、ホスト B 上の tlhd に送信されます。その後、そのロボットコマンドは、ホスト A 上の tlhcd に送信されます。

図 A-10 TLH ロボットに接続した 2 台のホストでの tlhd の使用



## 関連項目

- p.707 の [tlhcd](#) を参照してください。
- p.717 の [tpclean](#) を参照してください。
- p.720 の [tpconfig](#) を参照してください。
- p.465 の [ltid](#) を参照してください。
- syslogd (UNIX コマンド)
- p.774 の [vmadm](#) を参照してください。

# tlhcd

tlhcd - 1/2 インチテープライブラリ (TLH) 制御デーモン (Windows システムのプロセス)

## 概要

tlhcd [-v] [-t]

UNIX システムでは、このコマンドのディレクトリパスは /usr/opensv/volmgr/bin/ です。

Windows システムでは、このコマンドのディレクトリパスは <install\_path>%Volmgr%bin% です。

## 機能説明

---

**メモ:** このコマンドは、NetBackup Enterprise Server だけに適用されます。

---

tlhd および tlhcd は Media Manager と通信し、これによって、1/2 インチテープライブラリ (TLH) ロボットのテープボリュームのマウントおよびマウント解除が実行されます。

ltid は、UNIX システムの Media Manager device デーモン、または Windows システムの NetBackup Device Manager サービスです。tlhd は ltid と直接通信します。

tlhd は、ドライブ接続が確立された各ホスト上で実行され、マウント要求およびマウント解除要求が制御デーモンプロセス tlhcd に送信されます。

tlhcd は、IBM Automated Tape Library (ATL) の Library Manager と通信します。この Library Manager によって、ロボットライブラリに対する要求および制御機能がすべて処理されます。TLH ロボット制御ソフトウェアによって、同じロボット内のドライブを異なるホスト上に構成できます。IBM ライブラリ制御を構成する場所によっては、tlhcd が tlhd とは異なるホスト上で実行される場合があります (「例」を参照)。ライブラリとの通信が確立されると、tlhd によって TLH ロボットが稼働状態になり、ボリュームのマウントおよびマウント解除が要求可能になります。ライブラリまたは制御デーモンにアクセスできない場合、tlhd によってロボットが停止状態になります。ロボットが停止している間も、tlhd は継続して実行されます。tlhcd による接続が確立されると、ロボットは稼働状態に戻ります。

---

**メモ:** ドライブが異なるホスト上に存在する場合は、すべてのコンピュータの管理コンソールの [メディアおよびデバイスの管理 (Media and Device Management)] にロボット情報を入力します。すべてのコンピュータ上で同じロボット番号を使用する必要があります。

---

UNIX システムでは、ltid が起動され停止されると、tlhd と tlhcd が自動的に起動されて停止されます。ltid とは関係なく tlhd を停止または起動するに

は、`/usr/opensv/volmgr/bin/vmps` またはサーバーの `ps` コマンドを実行して、`tlhd` のプロセス ID を識別します。その後、次のコマンドを入力します。

```
kill tlhd_pid
/usr/opensv/volmgr/bin/tlhd [-v] &
```

制御デーモン `tlhcd` は、ロボット制御が構成されているホスト上で実行されます。このコマンドは、そのホスト上の `tlhd` によって自動的に起動されます（「例」を参照）。

Windows システムでは、`tlhd` および `tlhcd` は、**NetBackup Device Manager** サービスの起動時に起動されます。これらのコマンドは、このサービスの停止時に停止します。制御プロセス `tlhcd` は、ロボット制御が構成されているホスト上で実行されます。このコマンドは、そのホスト上の `tlhd` によって自動的に起動されます（「例」を参照）。`tlhcd` は、**NetBackup Device Manager** サービスを停止すると停止します。

**NetBackup Device Manager** サービス (Windows システム)、`ltid`、`tlhd`、`tlhcd` を介してすべてのボリュームにアクセスするには、ロボット内のボリュームのメディア ID およびスロット番号情報を **EMM** データベースに定義する必要があります。**Media Manager** ロボットインベントリオプションを使用すると、初期 **EMM** データベースの移行と将来の更新の両方を実行できます。

クリーニングボリュームを使用する場合、そのボリュームをボリューム構成に定義する必要があります。自動的にドライブをクリーニングする間隔の設定については、「`tpclean`」を参照してください。

ドライブは、**IBM** デバイス名を使用して構成されます。ロボットテストユーティリティ `tlhtest` (ロボットが構成されている場合は `robtest`) を使用すると、ロボットに関連付けられたデバイス名を確認できます。また、このユーティリティを **IBM** の `mtlib` コマンドラインインターフェースとともに使用すると、ライブラリの通信、状態および機能を検証することもできます。

1/2 インチテープライブラリロボット制御に対するドライブクリーニング操作は、**IBM Library Manager** コンソールを介して構成します。**IBM Library Manager** を使用するアプリケーションでは、クリーニング操作は使用できません。そのため、クリーニングするボリュームは、**Media Manager** を介して定義できません。また、**Media Manager** ユーティリティまたは `tpclean` コマンドを実行して、**TLH** ロボットに制御されているドライブに対するクリーニング操作を行うこともできません。

UNIX システムでは、`tlhcd` のインターネットサービスポート番号が `/etc/services` に含まれている必要があります。**NIS** を使用する場合、`/etc/services` ファイル内のエントリを、サービス用のマスター **NIS** サーバーデータベース内に挿入します。この `services` ファイルを上書きするには、`tlhcd/usr/opensv/volmgr/database/ports/tlhcd` のサービスポート番号を示す 1 行を含む、次のファイルを作成します。

Windows システムでは、`tlhcd` のインターネットサービスポート番号が `%SystemRoot%\system32\drivers\etc\services` に含まれている必要があります。この `services` ファイルで使用するサービスポート番号を上書きするには、

`install_path¥Volmgr¥database¥ports¥t1dcd` ファイルの内容を `t1dcd` のサービスポート番号を示す 1 行にして作成します。

デフォルトのサービスポート番号は **13717** です。

このコマンドを実行するには、管理者権限が必要です。

## オプション

次のオプションは、**UNIX** システムでのみ動作します。

`-v` `syslogd` を使ってデバッグ情報をログに記録します。`ltid` に `-v` を指定して起動すると、`t1hd` および `t1hcd` にも `-v` が指定されて起動されます。

`-t` このオプションを指定すると、`t1hcd` が停止されます。

## エラー

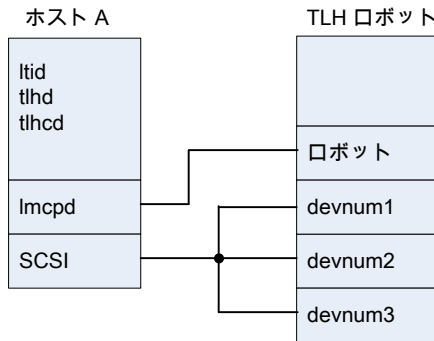
デーモンまたはプロセスのコピーが実行中の場合、`t1hd` および `t1hcd` によってエラーメッセージがログに書き込まれます。1/2 インチテープライブラリエラーおよびロボットエラーは、**Media Manager** によって `syslogd` (**UNIX** システム) またはアプリケーションイベントログ (**Windows**) に書き込まれます。また、稼働状態から停止状態、または停止状態から稼働状態に状態が変化した場合も、ログエントリが追加されます。

## 例

次の例では、デバイスホストとしてサポートされているすべての **Windows** サーバーまたは **UNIX** サーバー (**AIX**、**HP-UX**、**Solaris (SPARC)** および **Linux**) を使用できます。

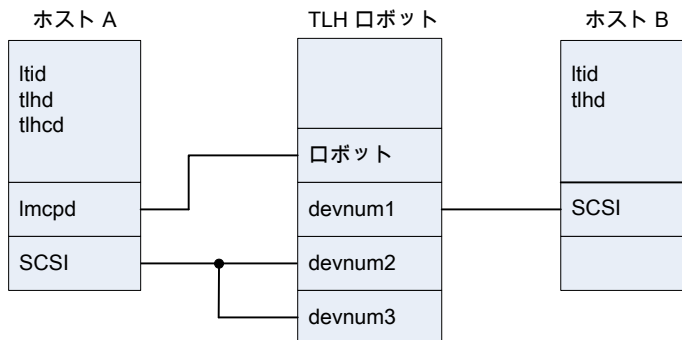
例 1 - 次の図では、ドライブが 1 台のホストに接続され、ロボットがそのホストから制御されます。`ltid` によって `t1hd` が起動され、それによって `t1hcd` が起動されます。`lmcpd` はホスト A で実行する必要があります。`lmcpd` は、**UNIX** システムの **IBM Library Manager Control Point** デーモンであり、**Windows** システムの **IBM Automated Tape Library** サービスです。

図 A-11 TLH ロボットに接続した 1 台のホストでの t1hd の使用



例 2 - 次の図では、各ホストを少なくとも 1 台のドライブに接続し、ロボットはホスト A で制御します。各コンピュータ上の ltid は t1hd を開始します。また、ロボット制御がホスト A 上に定義されているため、ホスト A 上の t1hd によって t1hcd も起動されます。ホスト B からのテープのマウント要求は、ホスト B 上の t1hd に送信されます。その後、そのロボットコマンドは、ホスト A 上の t1hcd に送信されます。

図 A-12 TLH ロボットに接続した 2 台のホストでの t1hd の使用



## 関連項目

- p.703 の [tlhd](#) を参照してください。
- p.717 の [tpclean](#) を参照してください。
- p.720 の [tpconfig](#) を参照してください。
- p.465 の [ltid](#) を参照してください。
- syslogd (UNIX コマンド)
- p.774 の [vmadm](#) を参照してください。

# tcmd

tcmd - マルチメディアテープライブラリ (TLM) のデーモンプロセス

## 概要

tcmd [-v]  
UNIX システムでは、このコマンドのディレクトリパスは /usr/opensv/volmgr/bin/ です。  
Windows システムでは、このコマンドのディレクトリパスは <install\_path>%Volmgr%bin% です。

## 機能説明

tcmd は Media Manager と通信し、これによって、マルチメディアテープライブラリ (TLM) ロボットのテープのマウントおよびマウント解除が自動的に実行されます。ltid は、UNIX システムの Media Manager device デーモン、または Windows システムの NetBackup Device Manager サービスです。ドライブがマルチメディアテープライブラリロボットに存在するように定義済みの場合、ltid によって tcmd が起動されます。

tcmd は、ロボットを制御する ADIC Distributed AML Server (DAS) と通信します。このクライアントおよびサーバーソフトウェア製品は、ADIC 自動メディアライブラリ (AML) ファミリーへの共有アクセスを提供するように設計されています。接続が確立されると、tcmd によって TLM ロボットが稼働状態になり、インベントリの要求に加えて、メディアのマウントおよびマウント解除が要求可能になります。接続が確立できないか、または DAS エラーが発生した場合、tcmd によってロボットが停止状態になりますが、このコマンドは実行されたままです。ロボットが停止している間も、tcmd は継続して実行されます。問題が解消されると、ロボットは稼働状態に戻ります。

DAS サーバー属性によって、管理コンソールの [メディアおよびデバイスの管理 (Media and Device Management)] で、TLM ロボットエントリの DAS サーバーが定義されます。tcmd を実行すると、定義済みの各 TLM ロボットがこの DAS サーバーに接続されます。DAS 側では、tcmd は DAS クライアントとして接続されます。tcmd が実行されているホストは、Media Manager 構成ファイル /usr/opensv/volmgr/vm.conf 内の DAS\_CLIENT エントリによって指定された DAS クライアントとして通信が確立されます。DAS\_CLIENT エントリが存在しない場合、DAS クライアント名は、tcmd が実行されているホストの標準ホスト名になります。

ドライブは、DAS サーバーから取得される情報に基づいて、DAS ドライブ名を使用して構成されます。ロボットテストユーティリティ tcmdtest (ロボットが構成されている場合は robtest) を使用すると、ロボットに関連付けられたドライブ名を確認できます。また、ADIC の DASADMIN を使用すると、ライブラリの通信、状態および機能を検証することもできます。

UNIX システムの場合: `ltid` とは関係なく `tlmd` を停止または起動するには、`/usr/opensv/volmgr/bin/vmps` またはサーバーの `ps` コマンドを実行して、`tldd` のプロセス ID を識別します。その後、次のコマンドを入力します。

```
kill tlmd_pid
/usr/opensv/volmgr/bin/tlmd [-v] &
```

制御デーモン `tlbcd` は、ロボット制御が構成されているホスト上で実行されます。このコマンドは、そのホスト上の `tldd` によって自動的に起動されます。

UNIX システムでは、`tlmd` のインターネットサービスポート番号が `/etc/services` に含まれている必要があります。**NIS** (ネットワーク情報サービス) を使用する場合、そのホストの `/etc/services` ファイル内のエントリを、サービス用のマスター **NIS** サーバーデータベース内に挿入します。この **services** ファイルで使用するサービスポート番号を上書きするには、`/usr/opensv/volmgr/database/ports/tlmd` ファイルの内容を `tlmd` のサービスポート番号を示す 1 行にして作成します。

Windows システムでは、`tlmd` のインターネットサービスポート番号は `%SystemRoot%\system32\drivers\etc\services` にあります。この **services** ファイルで使用するサービスポート番号を上書きするには、`install_path\Volmgr\database\ports\tlmd` ファイルの内容を `tlmd` のサービスポート番号を示す 1 行にして作成します。

デフォルトのサービスポート番号は **13716** です。

このコマンドを実行するには、管理者権限が必要です。

## オプション

次のオプションは、UNIX システムでのみ動作します。

`-v` `syslogd` を使ってデバッグ情報をログに記録します。`ltid` に `-v` を指定して起動すると、`tlmd` にも `-v` が指定されて起動されます。

## エラー

`tlmd` のコピーが実行中の場合、`tlmd` によってエラーメッセージが戻されます。

TLM エラーとネットワークエラーは、**Media Manager** によって `syslogd` (UNIX) または Windows アプリケーションイベントログに書き込まれます。また、稼働状態から停止状態、または停止状態から稼働状態に状態が変化した場合も、ログエントリが追加されます。

## 関連項目

p.720 の **tpconfig** を参照してください。

p.465 の **ltid** を参照してください。



p.774 の [vmadm](#) を参照してください。

syslogd (UNIX コマンド)

# tpautoconf

tpautoconf – デバイスの検出および構成

## 概要

```
tpautoconf -get_gdbhost
tpautoconf -set_gdbhost host_name
tpautoconf -verify ndmp_host_name
tpautoconf -probe ndmp_host_name
tpautoconf -report_disc
tpautoconf -replace_drive drive_name -path drive_path
tpautoconf -replace_robot robot_number -path robot_path
```

UNIX システムでは、このコマンドのディレクトリパスは /usr/opensv/volmgr/bin/ です。  
Windows システムでは、このコマンドのディレクトリパスは <install\_path>%Volmgr%bin/ です。

## 機能説明

tpautoconf は、通常、デバイスの構成ウィザードによって、デバイスを検出するために実行されます。このウィザードでは、tpautoconf は様々な一連のオプションとともに呼び出されます。

get および set オプションは、特別な状況で有効です。たとえば、異なるホストを Enterprise Media Manager (EMM) サーバーとして指定する場合に使用されます。EMM サーバー名は、NetBackup をインストールすると自動的に定義されます。

EMM サーバーの管理方法について詳しくは、次の「Enterprise Media Manager について」を参照してください。『NetBackup 管理者ガイド Vol. 1』。

EMM データベース内のデバイスを再構成して、構成済みデバイスの交換によって発生したシリアル番号の変更を反映させるには、-report\_disc、-replace\_drive、-replace\_robot を使用します。ハードウェアを交換した後、修正処理を実行するには、オペレーティングシステムを介して 1 つ以上のシステムを使用できるようにする必要があります。この場合、システムの再マッピング、再検出および再起動を実行する必要があります。

サーバーを構成した後、-report\_disc オプションを指定して現在のハードウェアをスキャンし、構成済みハードウェアと比較します。不一致のリストが表示され、交換したハードウェアと新しいハードウェアが表示されます。

---

**メモ:** すべてのサーバーにロボットハードウェアへのアクセス権があるわけではありません。アクセス権がない場合、これらのロボットは存在しないものと見なされ、リストには表示されません。

---

交換ハードウェアを追加する場合、最後の手順として、オペレーティングシステムを介してすべてのサーバーにハードウェアを構成します。次に、デバイスの構成ウィザードを実行して新しいパスの情報を構成します。

このコマンドを実行するには、管理者権限が必要です。

## オプション

---

**メモ:** オプションパラメータで指定された検証だけが行われます。

---

`-get_gdbhost`

このオプションを指定すると、EMM サーバーのホスト名が戻されます。

`-set_gdbhost host_name`

このオプションを指定すると、`bp.conf` に `EMMSERVER` エントリの名前が設定されます。

`-probe ndmp_host_name`

このオプションを指定すると、NDMP ホストに接続されているすべてのデバイスのリストを表示できます。

`-report_disc`

このオプションを指定すると、EMM サーバーからデバイスデータを問い合わせ、スキャンしたデータレコードに対して、データレコード上で「diff」を実行できるようになります。再構成されたサーバーでこのコマンドを実行して、新しいハードウェアおよび不足しているハードウェアのリストを生成できます。このコマンドを実行すると、新しいハードウェアがスキャンされ、新しいハードウェアおよび交換したハードウェアを示すレポートが生成されます。

`-replace_drive drive_name -path drive_path, -replace_robot  
robot_number -path robot_path`

このオプションを指定すると、EMM データベースを使用して、ロボットドライブおよびロボットレコードの問い合わせまたは更新が実行されます。

---

**メモ:** Windows システムでは、`drive_path` には、ドライブの非 NDMP の Windows デバイスパスを指定し、`robot_path` には、ロボットの非 NDMP の Windows デバイスパスを指定します。{p,b,t,l} 形式でパスを指定します (p はポート、b はバス、t はターゲット、l は LUN)。この情報はレジストリに表示されます。

---

```
-verify ndmp_host_name
```

このオプションを指定すると、NDMP ホストのサーバー名を確認できます。

## 例

**例 1 - Enterprise Media Manager** データベースが格納されているホスト名が戻されません。

```
tpautoconf -get_gdbhost
```

**例 2 - Enterprise Media Manager** サーバーがホスト server2 に設定されます。

```
tpautoconf -set_gdbhost server2
```

**例 3** --report\_disc コマンドが、検出されたデバイスと EMM データベース間の不一致をどのようにレポートするかを示しています。また、-replace\_drive drive\_name -path drive\_path コマンドを使用する方法も示します。

```
tpautoconf -report_disc
===== New Device (Tape) =====
Inquiry = "QUANTUM DLT8000 0250"
Serial Number = PXB08P3242
Drive Path = /dev/rmt/119cbn
Found as TLD(6), Drive = 1
===== Missing Device (Drive) =====
Drive Name = QUANTUMDLT800014
Drive Path = /dev/rmt/9cbn
Inquiry = "QUANTUM DLT8000 0250"
Serial Number = PXB08P1345
TLD(6) definition Drive = 1
Hosts configured for this device:
 Host = plum
 Host = avocado
tpautoconf -replace_drive QUANTUMDLT800014 -path /dev/rmt/119cbn
Found a matching device in EMM DB, QUANTUMDLT800014 on host plum
update on host plum completed
Found a matching device in EMM DB, QUANTUMDLT800014 on host avocado
update on host avocado completed
```

## 関連項目

p.720 の [tpconfig](#) を参照してください。

# tpclean

tpclean – テープドライブのクリーニングの管理

## 概要

```
tpclean -L | -C drive_name [-priority number] | -M drive_name | -F
drive_name cleaning_frequency
```

UNIX システムでは、このコマンドのディレクトリパスは /usr/opensv/volmgr/bin/ です。

Windows システムでは、このコマンドのディレクトリパスは <install\_path>%Volmgr%bin% です。

## 機能説明

tpclean を実行すると、Media Manager のテープドライブの使用状況を監視し、必要に応じてテープドライブが自動的にクリーニングされるように構成できます。(この機能は、ACS または TLH ロボット内のドライブ、あるいは QIC ドライブには適用されません。)

Media Manager によって、ボリュームがドライブにマウントされている合計時間のトラッキングが行われます。tpclean を使用すると、ドライブに対するクリーニングの間隔 (時間) を指定できます。

次の条件に該当する場合、ドライブがクリーニングされます。

- マウント時間がクリーニング間隔を超過している。
- TapeAlert により「CLEAN NOW」または「CLEAN PERIODIC」フラグがマークされている。
- ロボット内にドライブが存在している。
- Media Manager ボリューム構成にロボット内のクリーニングテープが示されている。

次の場合、tpclean -L による出力の[コメント (Comment)]フィールドにクリーニングが必要なことを示すメッセージが表示されます。

- マウント時間がクリーニング間隔を超過している。
- ドライブがスタンドアロンドライブであるか、またはドライブにクリーニングテープを定義していない。

ドライブを手動でクリーニングし、-M オプションを使用してマウント時間をリセットします。

-C、-M、-F オプションが機能するには、ltid が UNIX システムで実行されているか、NetBackup Device Manager サービスが Windows システムで実行されている必要があります。

TapeAlert と他のドライブクリーニングについて詳しくは、次を参照してください。

『NetBackup 管理者ガイド Vol. 2』。

NetBackup Enterprise Server では、共有ドライブで間隔に基づくクリーニングはサポートされていません。

このコマンドを実行するには、管理者権限が必要です。

## オプション

`-C drive_name`

このオプションを指定すると、ロボット内のドライブのクリーニングが開始されます。ロボットにドライブが定義済みで、クリーニングテープが **Media Manager** ボリューム構成に定義済みである必要があります。マウント時間は **0** (ゼロ) にリセットされます。ドライブ名は、そのドライブが構成に追加されたときに割り当てられた名前です。

`-L`

このオプションを指定すると、クリーニング統計が出力されます。(UNIX システムでは、`stdout` に出力されます。)

`-priority number`

`tpclean` がリソースのメディアドライブの組み合わせを取得する、ジョブの新しい優先度を指定します。新しい優先度はデフォルトのジョブ優先度を上書きします。

`-M drive_name`

ドライブが手動でクリーニングされたことを示します。マウント時間は **0** (ゼロ) にリセットされます。ドライブ名は、そのドライブがデバイスの構成に追加されたときに割り当てられた名前です。

`-F drive_name cleaning_frequency`

このオプションでは、指定したドライブのクリーニング間隔の時間を **cleaning\_frequency** に設定します。ドライブ名は、そのドライブが追加されたときにそのドライブに割り当てられた名前です。**cleaning\_frequency** には、**0** (ゼロ) 時間から **10,000** 時間の間の値を指定する必要があります。

## 注意事項

`tpconfig -d`、`tpconfig -l`、`vmopr cmd` では、長いドライブ名が切り捨てられる場合があります。完全なドライブ名を取得するには、`tpconfig -dl` を使用します。

`tpclean` では、ドライブ名が **22** 文字で切り捨てられます。

## 例

**例 1** - クリーニング統計を表示します。ドライブ形式の横にあるアスタリスクは、そのデバイスがロボットとして定義されていることを示します。

```
tpclean -L
Drive Name Type Mount Time Frequency Last Cleaned Comment
```

```
***** **** ***** ***** ***** *****
rob_A_drv1 8mm* 11.4 30 14:33 05/29/92
4mm_drv5 4mm 5.6 10 13:01 06/02/92
dlt_drv6 dlt 3.0 0 N/A
```

例 2 - dlt\_drv6 というドライブのクリーニング間隔を 25 時間に設定します。マウント時間が 25 時間を超えると、ドライブが要クリーニングとしてフラグ付けされます。

```
tpclean -F dlt_drv6 25
```

例 3 - rob\_A\_drv1 というドライブのマウント時間を 0 (ゼロ) にリセットします。通常、このコマンドは、ドライブを手動でクリーニングした後に使用します。

```
tpclean -M rob_A_drv1
```

例 4 - ドライブ rob\_A\_drv1 のクリーニングを開始します。この例では、ドライブがロボットドライブで、クリーニングテープが定義済みであると想定します。マウント時間は 0 (ゼロ) にリセットされます。

-c オプションを指定すると、*cleaning\_frequency* に達する前にドライブのクリーニングを強制実行できます。通常、ロボットドライブは、そのマウント時間がクリーニング間隔に指定した時間を超えると、自動的にクリーニングされます。

```
tpclean -C rob_A_drv1
```

---

**メモ:** クリーニングテープを使用するには、そのテープの[有効クリーニング数 (Cleanings Remaining)]が 1 以上である必要があります。(この値は、NetBackup 管理コンソールの [メディア (Media)] ノードのボリュームリストまたは vmquery コマンドで表示されます。) このクリーニング数は、そのクリーニングテープを使用可能な残りの回数を示します。[メディア (Media)] ノードを使用して、または vmchange コマンドを実行してこの回数を変更できます。

---

## 関連項目

- p.465 の [ltid](#) を参照してください。
- p.720 の [tpconfig](#) を参照してください。
- p.774 の [vmadm](#) を参照してください。

# tpconfig

tpconfig - テープ構成ユーティリティの実行

## 概要

UNIX システムの場合: `tpconfig [-noverify]`  
`tpconfig -d | -dl | -l`

UNIX システムの場合: `tpconfig -add -drive -type drvtype -path drivepath`  
`[-nh ndmp_hostname] [-asciiname asciidrivename] [-index drvindex]`  
`[-shared [yes|no]] [-cleanfreq hours] [-comment comment] [-drstatus`  
`UP | DOWN | DISABLED] [-scsi_protection [SPR | SR | NONE] [-robot`  
`robnum -roctype roctype] [-noverify] [-robdrnum robdrvnum |`  
`-VendorDrvName venddrvname | -ACS acsnum -LSM lsmnum -PANEL panelnum`  
`-DRIVE drivenum] [000-preview]`

Windows システムの場合: `tpconfig -add -drive -type drvtype -port port`  
`-bus bus -target target -lun lun [-asciiname asciidrivename] [-index`  
`drvindex]] [-shared [yes|no]] [-cleanfreq hours] [-comment comment]`  
`[-drstatus [UP | DOWN | DISABLED]] [-scsi_protection [SPR | SR |`  
`NONE]] [-robot robnum -roctype roctype] [-noverify] [-robdrnum`  
`robdrvnum | -VendorDrvName vendor_drive_name] [-ACS acsnum -LSM lsmnum`  
`-PANEL panelnum -DRIVE drivenum] [preview]`

UNIX システムの場合: `tpconfig -update -drive drvindex [-type drvtype]`  
`[-path drivepath] [-nh ndmp_hostname] [-noverify] [-newasciiinane`  
`asciidrivename]] [-shared [yes|no]] [-cleanfreq hours] [-comment`  
`comment] [-drstatus [UP|DOWN|DISABLED]] [-robot robnum -roctype`  
`roctype] [-robdrnum robdrvnum | -VendorDrvName venddrvname | -ACS`  
`acsnum -LSM lsmnum -PANEL panelnum -DRIVE drivenum]`

Windows システムの場合: `tpconfig -update -drive drvindex [-type drvtype]`  
`[-port port -bus bus -target target -lun lun ] [-nh ndmp_hostname`  
`-path drivepath] [-noverify] [-newasciiinane asciidrivename]] [-shared`  
`[yes|no]] [-cleanfreq hours] [-comment comment] [-drstatus`  
`[UP|DOWN|DISABLED]] [-robot robnum -roctype roctype] [-robdrnum`  
`robdrvnum | -VendorDrvName vendor_drive_name] [-ACS acsnum -LSM lsmnum`  
`-PANEL panelnum -DRIVE drivenum]`

`tpconfig -delete -drive drvindex`

`tpconfig -multiple_delete -drive drvindex1:...:drvindexN`

`tpconfig -add -disk_array array_hostname -disk_user_id user_ID`  
`-arraytype_name "name:displayname" -requiredport IP_port_number`  
`[-password password [-key encryption_key]]`



```
tpconfig -update -disk_array array_hostname -disk_user_id user_ID
-requiredport IP_port_number [-arraytype_name "name:displayname"]
[-password password [-key encryption_key]]
tpconfig -delete -disk_array array_hostname -disk_user_id user_ID
[-arraytype_name "name:displayname"]
tpconfig -ddiskarrays
tpconfig -list_array_types [media_server]
UNIX システムの場合: tpconfig -add -robot robnum -rodtype rodtype
-robpath devfile [-nh ndmp_hostname]
Windows システムの場合: tpconfig -add -robot robnum -rodtype rodtype
-port port -bus bus -target target -lun lun
Windows システムの場合: tpconfig -add -robot robnum -rodtype rodtype
[-nh ndmp_hostname] -robpath changename [-bus bus -target target
-lun lun]
tpconfig -add -robot robnum -rodtype rodtype -cntlhost cntlhost
UNIX システムの場合: tpconfig -update -robot robnum [-rodtype rodtype]
[-robpath devfile] [-cntlhost cntlhost]
Windows システムの場合: tpconfig -update -robot robnum [-rodtype rodtype]
[-port port -bus bus -target target -lun lun | -cntlhost cntlhost |
-tlh_library_name|tlh_library_name]
tpconfig -update -robot robnum [-rodtype rodtype] [-robpath devfile]
[-nh ndmp_hostname] [-bus bus] [-target target] [-lun lun]
tpconfig -update -robot robnum [-rodtype rodtype] [-pird [yes|no]]
tpconfig -delete -robot robnum
tpconfig -multiple_delete -robot robnum1:...:robnumN
tpconfig -add -drpath -path drivepath [-nh ndmp_hostname] [-asciiname
asciidrivename] [-drstatus [UP|DOWN|DISABLED]] [-noverify]
UNIX システムの場合: tpconfig -update -drpath -old_path drivepath -path
drivepath [-nh ndmp_hostname] [-asciiname asciidrivename] [-drstatus
[UP|DOWN|DISABLED]] [-scsi_protection SPR|SR|DEFAULT] [-noverify]
Windows システムの場合: tpconfig -update -drpath -old_port port -old_bus
bus -old_target target -old_lun lun -port port -bus bus -target target
-lun lun -asciiname asciidrvname [-drstatus [UP|DOWN|DISABLED]]
[-noverify]
UNIX システムの場合: tpconfig -delete -drpath -path drivepath -asciiname
asciidrivename [-nh ndmp_hostname]
Windows システムの場合: tpconfig -delete -drpath -port port -bus bus
-target target -lun lun | -path drivepath [-nh ndmp_hostname]
-asciiname asciidrvname
tpconfig -dnh
tpconfig -dnh -all_hosts
```

```
tpconfig -ddnh
tpconfig -add -nh ndmp_hostname
tpconfig -add -nh ndmp_hostname -user_id | -filer_user_id user ID
[-password password [-key encryption_key]] -snap_vault_filer
tpconfig -update -nh ndmp_hostname -user_id | -filer_user_id user ID
[[-password password [-key encryption_key]]]
tpconfig -delete -nh ndmp_hostname -user_id | -filer_user_id user ID
tpconfig -multiple_delete -nh ndmp_hostname_1:... :ndmp_hostname_N
tpconfig -add -default_user_id user ID [-password password [-key
encryption_key]]
tpconfig -update -default_user_id user ID [-password password [-key
encryption_key]]
tpconfig -delete -default_user_id
tpconfig -add | -update -disk_array disk_array_host_name -disk_user_id
user_ID -arraytype disk_array_type -requiredport IP_port_number
[-password password [-key encryption_key]]
tpconfig -delete -disk_array disk_array_host_name -disk_user_id
user_ID [-arraytype disk_array_type]
tpconfig -ddiskarrays
tpconfig -add | -update -virtual_machine virtual_machine_name
-vm_user_id user_id -vm_type virtual_machine_type -requiredport
IP_port_number [-password password [-key encryption_key]]
tpconfig -delete -virtual_machine virtual_machine_name -vm_user_id
user_id [-vm_type virtual_machine_type]
tpconfig -dvirtualmachines
tpconfig -add -storage_server server_name -stype server_type
-sts_user_id user_ID [-password password] [-st storage_type]
tpconfig -update -storage_server server_name -stype server_type
-sts_user_id user_ID [-password password]
tpconfig -delete -storage_server server_name -stype server_type
-sts_user_id user_ID
tpconfig -dsh [-stype server_type]
tpconfig -dsh -all_hosts
tpconfig -dev_ping [-drive -path drivepath | -robpath robotpath] [-nh
ndmp_hostname]
Windows システムの場合: tpconfig -dev_ping [-drive] -port port -bus bus
-target target -lun lun
tpconfig -emm_dev_list [-noverbose]
UNIX システムでは、このコマンドのディレクトリパスは /usr/openv/volmgr/bin/ です。
Windows システムでは、このコマンドのディレクトリパスは <install_path>%Volmgr%bin%
です。
```

## 機能説明

tpconfig を実行すると、NetBackup で使用するロボット、ドライブ、ドライブアレイ、ドライブパス、ホストが構成されます。

UNIX システムでは、tpconfig [-noverify] はメディア管理とデバイス管理のユーティリティを開始します。このメニューベースのユーティリティを使用して、EMM データベース内にデバイスの作成および変更をすることができます。この EMM データベースによって、ltid (Media Manager device デーモン) に制御されているロボットおよびドライブが識別されます。ltid は、/dev ディレクトリ内のデバイスファイルにオペレータのドライブ状態でのドライブとの関連を表示させるためにこのデータベースを使用します。

たとえば、システムによって 8MM 形式のドライブとして認識されるドライブを構成すると想定します。/dev ディレクトリ内を検索し、クローズ時非巻き戻しデバイスパスを 8MM 形式のドライブに配置します。次に、このデバイスパスをドライブに指定します。その後、tpconfig によって、そのデバイスパスが適切なデバイスデータベースに記録されます。

tpconfig を実行してデバイスの構成を変更した後、stopltid を実行して ltid デーモンおよび (自動ボリューム認識) デーモン (実行中である場合) を停止します。その後、ltid コマンドを実行して、デーモンを再起動します。詳しくは、ltid を参照してください。

Windows システムでは、デバイス構成の変更が完了すると、NetBackup Device Manager サービスが停止し、再起動されます。

このユーティリティを実行するには、管理者権限が必要です。

## オプション

次の 4 つのオプションは、NetBackup Enterprise Server だけに適用されます。これらのオプションでは、ACS (自動カートリッジシステム) ロボットの構成を指定します。

-ACS *acsnum*, -LSM *lsmnum*, -PANEL *panelnum*, -DRIVE *drivenum*

*acsnum* には、ACS ライブラリソフトウェアホスト上で構成されたロボットライブラリ数を指定します。

*lsmnum* には、そのドライブが存在するライブラリストレージモジュールを指定します。

*panelnum* には、そのドライブが位置するロボットパネルを指定します。

*drivenum* には、そのドライブの番号を指定します。

-add

このオプションを指定すると、同時に指定するオプションに応じて、ドライブまたはロボットが追加されます。

-all\_hosts

このオプションを指定すると、メディアサーバー上にクレデンシャルを持つすべてのホストが表示されます。

```
-arraytype_name "name:displayname"
```

クレデンシャルを追加、更新、または削除するディスクアレイの形式を指定します。

二重引用符 (") は、**name** または **displayname** に 1 つ以上の空白が含まれる場合にのみ必要です。

**name:displayname** の値は、ディスクアレイベンダーから提供されます。**name** 部分は、NetBackup で内部的に使用される一意の文字列です。**displayname** 部分は、NetBackup 管理コンソールの表示とメニューで使用される、さらに読みやすい文字列です。

値は、次に示すように、アレイに使用するディスクアレイベンダーおよびプロバイダ形式によって異なります。

- アレイ固有のプロバイダの場合、形式は次のとおりです。

```
vendorID_productID:displayname
```

デフォルトでは、NetBackup には次のような複数のアレイ固有のプロバイダがあります (ただし、限定されるわけではありません)。

- HP\_HSV:HP EVA
- EMC\_CLARIION:EMC CLARiION
- EMC\_SYMMETRIX:EMC Symmetrix
- IBM\_TOTALSTORAGE:IBM System Storage
- NETAPP\_LUN:NetApp

- 汎用アレイプロバイダの場合、形式は次のとおりです。

```
OPENARRAY::vendorID_productID:displayname
```

たとえば、OPENARRAY::HITACHI\_HDS:Hitachi HDS DF Series

有効なディスクアレイの形式の名前を確認するには、`-list_array_types` オプションを使用します。

**Flexible Disk** または **Snapshot Client** ライセンスキーが必要です。

```
-asciiname asciidrivename
```

このオプションでは、ドライブ名を指定します。この名前によって、Media Manager でドライブが識別されます。ドライブ名を指定しない場合、Media Manager によって名前が生成されます。共有ドライブを追加または更新する場合 (**Shared Storage Option**) には、できるかぎりドライブの性質を表す名前を指定します。

```
-bus bus
```

このオプションでは、ロボットまたはドライブが接続される SCSI バス番号を指定します。

次を参照してください。『NetBackup デバイス構成ガイド』。

**-cleanfreq hours**

このオプションでは、ドライブクリーニングの間隔(時間)を指定します。ドライブを追加すると、そのドライブへのボリュームのマウント時間の記録が **NetBackup** によって開始されます。

ドライブがロボット内にあり、そのロボットにクリーニングボリュームが定義されている場合、累積マウント時間がクリーニング間隔に指定した時間を超えると、クリーニングが実行されます。ドライブがクリーニングされると、**NetBackup** によってマウント時間がリセットされます。

ドライブがスタンドアロンドライブである場合またはクリーニングテープを定義していない場合には、`tpclean -L` が出力する[コメント(Comment)]フィールドにクリーニングが必要なことを示すメッセージが表示されます。ドライブをクリーニングするには、`tpclean` コマンドを実行します。

**TapeAlert** を使用する場合、間隔に基づくクリーニングは不要です。

**-cntlhost cntlhost**

このオプションは、**NetBackup Enterprise Server** だけに適用されます。

ロボット制御が他のホスト上に存在するロボットの場合、このオプションでは、そのロボットライブラリを制御するホストを指定します。

このオプションは、別のホスト上に存在するロボット制御が可能な **TL8**、**TLD**、および **TLH** ロボットにのみ適用されます。**ACS** ロボットと **TLM** ロボットにも適用されます。

**ACS** ロボットの場合、**ACS** ライブラリソフトウェアがインストールされているホスト名を指定します。**TLM** ロボットの場合、**DAS** サーバーソフトウェアがインストールされているホスト名を指定します。

**-comment comment**

このオプションでは、ドライブについてのコメントを追加します。このフィールドは、**SCSI** 照会データを格納する場合に有効で、ドライブ形式およびファームウェアのレベルを簡単に確認できます。

**-d**

このオプションを指定すると、現在の構成情報が表示されます。**UNIX** システムでは、リストは **stdout** に出力されます。このオプションでは、ドライブ名が **22** 文字で切り捨てられる場合があります。このオプションによって、ロボットが **PIRD** 状態(ロボットが停止した場合に保留(Pend If Robot Down))かどうかを判断できます。**PIRD = yes** は、ロボットが **PIRD** 状態であることを示します。

**-ddiskarrays**

このオプションを指定すると、構成済みのディスクアレイがすべて表示されます。

**-ddnh**

このオプションを指定すると、メディアサーバー上のデフォルトのクレデンシャルが表示されます。

- `-default_user_id user_ID`  
このオプションを指定すると、特定のマスターサーバーのすべてのメディアサーバーおよび NDMP ホストの組み合わせに対して、ユーザー名およびパスワードを設定します。ファイラごとに一度だけユーザー名とパスワードを追加します。このオプションを `-add`、`-update` または `-delete` コマンドと組み合わせて使用して、ユーザー名およびパスワードを指定します。
- `-delete`  
このオプションを指定すると、同時に指定するオプションに応じて、ドライブ、ロボットまたはホストクレデンシャルが削除されます。
- `-dev_ping`  
このオプションを指定すると、デバイスからデバイス情報が取得されます。
- `-disk_array array_hostname`  
ディスクアレイのホスト名を指定します。このオプションは、**NetBackup Snapshot Client** のライセンスキーがインストールされている場合だけに使用できます。
- `-disk_user_id user_ID`  
このオプションでは、ディスクアレイとの通信で **NetBackup** が使用するユーザー名を指定します。このオプションは、**NetBackup Snapshot Client** のライセンスキーがインストールされている場合だけに使用できます。
- `-dl`  
このオプションを指定すると、完全なドライブ名が表示されます。
- `-dnh`  
このオプションを指定すると、メディアサーバー上にある NDMP ホストのクレデンシャルが表示されます。
- `-drive`  
このオプションを `-add` オプションとともに指定すると、操作の対象がドライブになります。
- `-drive drvindex`  
このオプションでは、ドライブインデックスを指定します。このオプションを `-update`、`-delete`、または `-multiple_delete` コマンドとともに指定すると、ドライブに対する操作が指定されます。
- `-drpath`  
このオプションを指定すると、追加、更新または削除の実行をドライブパスに対して行います。
- `-drstatus UP|DOWN|DISABLED`  
このオプションを指定すると、テープドライブの初期状態が **UP** (起動状態)、**DOWN** (停止状態) または **DISABLED** (無効状態) に設定されます。検出されたドライブパスは、デフォルトで起動状態 (**UP**) になります。管理者またはオペレータは、ドライブ

パスの起動または停止を無効にしたり、構成することができます。この操作は、[デバイス管理 (Device Management)] ウィンドウのオプションによっても実行できます。

ドライブの状態が **DISABLED** (無効状態) である場合、パスは格納されますが使用されません。また、このドライブパスがそれ以降に検出されても、使用するようには構成されません。

-dsh

指定したサーバーの種類 (`-stype server_type`) またはすべてのメディアサーバー (`-all_hosts`) の **OpenStorage** クレデンシヤルを表示します。

-dvirtualmachines

構成済みの仮想コンピュータがすべて表示されます。

-emm\_dev\_list [-noverbose]

このオプションを指定すると、EMM データベースの完全なテープデバイス構成が表示されます。この情報には、すべてのメディアサーバー、マスターサーバー、NDMP ホストおよびそのクレデンシヤルが含まれます。

-filer\_user\_id user ID

このオプションを指定すると、ファイラに接続されているすべてのメディアサーバーに対して、ユーザー名およびパスワードを設定できます。ファイラごとに一度だけユーザー名とパスワードを追加します。このオプションを `-add`、`-update` または `-delete` コマンドと組み合わせて使用して、ユーザー名およびパスワードを指定します。

-index drvindex

このオプションでは、ドライブインデックス (ドライブを識別するために使用される一意の番号) を指定します。ドライブを追加する場合、**Media Manager** によって次に利用可能なドライブインデックスが使用されるため、ドライブインデックスを指定する必要はありません。特定のホスト上の各ドライブには、一意のインデックス番号が付けられている必要があります。

-key encryption\_key

このオプションを指定すると、暗号化された鍵を作成することができるため、暗号化されたクレデンシヤルをネットワークを介して安全に送信することができます。`-key` オプションを指定した場合、tpconfig では、指定されるパスワードは **MD5** 暗号化形式として見なされます。

-l

このオプションを指定すると、現行のデバイス構成が `stdout` に表示されます。**Windows** システムでは、`-l` によって **Windows** デバイスパスが `{p,b,t,l}` のエンコード形式で表示されます。`p` はポート、`b` はバス、`t` はターゲット、`l` は LUN です。

-list\_array\_types [media\_server]

クレデンシヤルを追加および管理できるディスクアレイの形式が表示されます。

特定のメディアサーバーに対して有効なディスクアレイの形式に出力を制限するには、そのメディアサーバーを指定します。

コマンド出力は、アレイの形式ごとに **name:displayname** 形式になります。

**name:displayname** の値は、ディスクアレイベンダーから提供されます。**name** 部分は、NetBackup で内部的に使用される一意の文字列です。**displayname** 部分は、NetBackup 管理コンソールの表示とメニューで使用される、さらに読みやすい文字列です。

値は、次に示すように、アレイに使用するディスクアレイベンダーおよびプロバイダ形式によって異なります。

- アレイ固有のプロバイダの場合、形式は次のとおりです。

```
vendorID_productID:displayname
```

デフォルトでは、NetBackup には次のような複数のアレイ固有のプロバイダがあります (ただし、限定されるわけではありません)。

- HP\_HSV:HP EVA
- EMC\_CLARIION:EMC CLARiion
- EMC\_SYMMETRIX:EMC Symmetrix
- IBM\_TOTALSTORAGE:IBM System Storage
- NETAPP\_LUN:NetApp

- 汎用アレイプロバイダの場合、形式は次のとおりです。

```
OPENARRAY::vendorID_productID:displayname
```

たとえば、OPENARRAY::HITACHI\_HDS:Hitachi HDS DF Series

-lun lun

このオプションでは、ロボットまたはドライブが接続される論理ユニット番号 (または SCSI ID) を指定します。

デバイスのパスについては詳しくは、次を参照してください。『[NetBackup デバイス構成ガイド](#)』。

-multiple\_delete

このオプションを指定すると、同時に指定するオプションに応じて、複数のドライブまたはロボットが削除されます。

-newasciiname asciidrivename

このオプションでは、新しいドライブ名を指定します。

-nh ndmp\_hostname | puredisk\_hostname

NDMP サーバーまたは PureDisk サーバーのホスト名を指定します。



**-noverify**

ドライブパスは検証されません。通常、tpconfig は、クローズ時非巻き戻しドライブパスに、非巻き戻し、変数、**Berkeley** 形式などに関する正しいマイナー番号のビット数が含まれていることを検証します。このオプションは、標準外のプラットフォームデバイスファイルの使用時には有効な場合があるため、デバイスファイルが正しいことを確認してください。

**-old\_bus bus**

このオプションは **Windows** システムでのみ使用します。このオプションでは、追加、更新または削除する **SCSI** バス番号を指定します。

**-old\_lun lun**

このオプションは **Windows** システムでのみ使用します。このオプションでは、ロボットまたはドライブが接続される論理ユニット番号 (または **SCSI ID**) を指定します。レジストリにこの情報が表示されます。このコマンドを実行すると、既存の論理ユニット番号を追加、更新または削除できます。

**-old\_path drivepath**

このオプションを **-update** コマンドとともに使用すると、パスを、データベース内にすでに存在するパスに変更できます。パスが存在しない場合は、エラーが発生します。

**-old\_port port**

このオプションは **Windows** システムでのみ使用します。このオプションでは、追加、更新または削除する既存の **SCSI** ポート番号を指定します。

**-old\_target target**

このオプションは **Windows** システムでのみ使用します。このオプションでは、ロボットまたはドライブが接続される既存のターゲット番号 (または **SCSI ID**) を指定します。このコマンドを実行すると、既存のターゲットを追加、更新または削除できます。

**-password password**

このオプションを指定すると、**NDMP** ホスト、**PureDisk** ホスト、**OpenStorage** ホストまたは仮想マシンホストにログインするためのパスワードを設定できます。

**-path drivepath**

このオプションでは、**NDMP** ファイラ上のドライブのデバイスパスを指定します。

**Windows** システムでは、**drive\_path** 変数に非 **NDMP** のドライブの **Windows** デバイスパスを指定します。パスは **{p,b,t,l}** 形式で指定します。**p** はポート、**b** はバス、**t** はターゲット、**l** は **LUN** です。この情報はレジストリに表示されます。

**-pird yes|no**

このオプションでは、ロボットの **PIRD** 状態 (ロボットが停止した場合に保留) を設定または解除します。**PIRD** 状態のロボットでは、ロボット制御が停止した場合に、このロボットのストレージユニットに関するすべてのマウント要求が保留になります。

-port *port*

このオプションでは、ロボットまたはドライブが接続される **SCSI** ポート番号を指定します。レジストリにこの情報が表示されます。

-requiredport *IP\_port\_number*

このオプションでは、**NetBackup** からの接続を受け入れるディスクアレイの **IP** ポート番号を指定します。

-robdrnum *robdrnum*

このオプションでは、ドライブの物理的な場所 (ロボット内) を指定します。不適切な番号を割り当てると、**NetBackup** によってドライブが検出されません。ロボット制御によってその不適切なドライブへのメディアのマウントが試行されるため、結果的にエラーが発生します。

通常、物理的な場所は、ドライブへのコネクタまたはベンダーが提供するマニュアルを確認することによって判断できます。

-robot *robnum*

このオプションでは、**NetBackup** に対する一意のロボット識別番号を指定します。**add** オプションによってロボット番号を割り当てます。

すべてのロボットのロボット番号は、ロボット形式やロボットを制御するホストに関係なく一意である必要があります。

**NetBackup Enterprise Server** では、ロボット番号は、同じ **EMM** サーバーを共有する (同じ **EMM** データベースを使用する) すべてのロボットで一意である必要があります。この要件は、ロボット形式またはロボットを制御するホストにかかわらず適用されます。たとえば、ホストが異なる同じ **EMM** サーバーが 2 つの **TLD** ロボットを制御します。その場合、ロボット番号は異なる必要があります。

-robpath *devfile*

このオプションでは、**NDMP** ファイラ上のロボットのデバイスパスを指定します。

**Windows** システムでは、**drive\_path** 変数に非 **NDMP** のドライブの **Windows** デバイスパスを指定します。パスは {**p,b,t,l**} 形式で指定します。**p** はポート、**b** はバス、**t** はターゲット、**l** は **LUN** です。この情報はレジストリに表示されます。

-robtype *robtype*

このオプションでは、構成するロボット形式を指定します。このオプションでは、**NetBackup** によってサポートされているすべてのロボット形式を指定できます。特定のロボットライブラリモデルに対して指定するロボット形式を判断するには、サポート **Web** サイトを参照してください。

**NetBackup Enterprise Server** では、次のロボット形式のいずれかを指定できます。

**acs** (自動カートリッジシステム)、**tl4** (4MM テープライブラリ)、**tl8** (8MM テープライブラリ)、**tl1d** (**DLT** テープライブラリ)、**tl1h** (1/2 インチテープライブラリ)、**tl1m** (マルチメディアテープライブラリ)

NetBackup サーバーでは、次のロボット形式のいずれかを指定できます。

tl4 (4MM テープライブラリ)

tl8 (8MM テープライブラリ)

tlid (DLT テープライブラリ)

-scsi\_protection SPR | SR | NONE

このオプションでは、NetBackup で使用される SCSI テープドライブのアクセス保護を指定できます。

SPR: SCSI Persistent RESERVE IN または Persistent RESERVE OUT

SR: SCSI RESERVE/RELEASE

NONE - SCSI アクセス保護なし

デフォルトは、SCSI RESERVE/RELEASE (SR) です。

-shared yes|no

このオプションでは、共有ドライブを追加または更新するかどうかを指定します。

-snap\_vault\_filer

-snap\_vault\_filer フラグは、NetApp P3 機能とともに使用します。ファイラのユーザー名およびパスワードが格納されている場合、このフラグを設定します。このフラグを設定しないと、ユーザーインターフェースを使用してそのファイラにボリュームを追加することができません。このフラグを設定せずにユーザー名およびパスワードを無効にし、その機能を使用することにした場合は、tpconfig -delete を実行してから、フラグを使用して機能を再度追加する必要があります。このフラグは、次のコンテキストで、NetApp P3 機能とともに使用されます。

```
tpconfig -add -user_id root -nh mmnetapp2-target target
-snap_vault_filer
```

-st storage\_type

このオプションでは、ストレージサーバープロパティを識別する数値を指定します。この値は、ストレージベンダーによって提供されます。ディスクのフォーマットの状態を示す数値とディスクの接続方法を示す数値をそれぞれから 1 つ選択し、これらの数値を組み合わせて値を指定します。

storage\_type で指定可能な値は、次のとおりです。

- フォーマット済みディスク = 1
- RAW ディスク = 2
- ダイレクト接続 = 4
- ネットワーク接続 = 8

**storage\_type** の値は、ディスクがフォーマットされているかどうかを示す数値 (1 または 2) と、ディスクの接続方法を示す数値 (4 または 8) の合計です。デフォルトの値は、9 (ネットワーク接続されたフォーマット済みディスク) です。

-storage\_server server\_name

このオプションでは、ストレージサーバーのホスト名を指定します。

-sts\_user\_id user\_id

このオプションでは、ストレージサーバーにログインするために必要なユーザー名を指定します。ストレージサーバーでログオンクレデンシャルが不要な場合は、仮のクレデンシャルを入力します。

-stype server\_type

このオプションでは、ストレージサーバー形式を識別する文字列を指定します。

**server\_type** の値は次のいずれかから指定できます。

- シマンテック社が提供するストレージ。指定可能な値は、AdvancedDisk と PureDisk です。
- サードパーティのディスクアプライアンス。ベンダーから **server\_type** の文字列が提供されます。
- クラウドストレージ。有効な値は amazon、att、nirvanix、rackspace などです。これらの値には **\_crypt** 接尾辞 (amazon\_crypt など) を含めることもできます。

ストレージサーバー形式は大文字と小文字を区別します。

-target target

このオプションでは、ロボットまたはドライブが接続されるターゲット番号 (または SCSI ID) を指定します。

この情報は、レジストリ (Windows システム) または次を参照してください。  
『[NetBackup デバイス構成ガイド](#)』。

-tlh\_library\_name tlh\_library\_name

このオプションでは、TLH のロボットライブラリ名を指定します。

-type drvtype

このオプションでは、構成するドライブ形式を指定します。

NetBackup Enterprise Server では、次のドライブ形式のいずれかを指定できます。

4mm (4MM テープドライブ)、8mm (8MM テープドライブ)、8mm2 (8MM テープドライブ 2)、8mm3 (8MM テープドライブ 3)、d1t (DLT テープドライブ)、d1t2 (DLT テープドライブ 2)、d1t3 (DLT テープドライブ 3)、dtf (DTF テープドライブ)、qscsi (QIC テープドライブ)、hcart (1/2 インチカートリッジドライブ)、hcart2 (1/2 インチカートリッジドライブ 2)、hcart3 (1/2 インチカートリッジドライブ 3)。NetBackup

**Server** では、4mm (4MM テープドライブ)、8mm (8MM テープドライブ)、dlt (DLT テープドライブ)、hcart (1/2 インチカートリッジドライブ)、qscsi (QIC テープドライブ) のドライブ形式のいずれかを指定できます。

**-update**

このオプションを指定すると、ドライブまたはロボットの構成情報が変更されます。たとえば、ドライブをロボットに追加できます。

**-user\_id user\_ID**

このオプションでは、クレデンシャルを追加するメディアサーバーの特定の NDMP ホストのユーザー ID を指定します。

---

**メモ:** メディアサーバーには、NDMP ホスト名ごとにユーザー ID を 1 つだけ設定できます。1 つの NDMP ホスト名に対して 2 つ目のユーザー ID を追加することはできません。

---

**-VendorDrvName venddrvname**

このオプションは、**NetBackup Enterprise Server** だけに適用されます。このオプションでは、TLH ロボットドライブの IBM デバイス名、または TLM ロボットドライブの DAS ドライブ名を指定します。

**-virtual\_machine virtual\_machine\_name**

このオプションでは、クレデンシャルの追加、更新または削除の対象となる仮想マシンのホスト名を指定します。このオプションは、**NetBackup Snapshot Client** のライセンスキーがインストールされている場合だけに使用できます。

**-vm\_type virtual\_machine\_type**

このオプションでは、仮想マシンの形式を指定します。指定可能な値は、次のとおりです。

1 - VMware VirtualCenter サーバー

2 - VMware ESX Server

3 - VMware Converter サーバー

このオプションは、**NetBackup Snapshot Client** のライセンスキーがインストールされている場合だけに使用できます。

**-vm\_user\_id user\_id**

このオプションでは、仮想マシンのディスクアレイとの通信で **NetBackup** が使用するユーザー名を指定します。このオプションは、**NetBackup Snapshot Client** のライセンスキーがインストールされている場合だけに使用できます。

このコマンドを実行するには、管理者権限が必要です。

## 注意事項

tpconfig -d では、ドライブ名が 22 文字で切り捨てられる場合があります、tpconfig -l ではドライブ名が 32 文字で切り捨てられる場合があります。完全なドライブ名を表示するには、tpconfig -dl を指定します。

複数の NDMP ホストクレデンシャルの削除は、このホストと指定のファイラに固有のクレデンシャルにのみ適用されます。デフォルトのクレデンシャルまたはファイラのクレデンシャルには適用されません。

## 例

次の例では、ページ制限のため、入力するコマンドを複数の行で示します。実際のコマンドは 1 行で入力します。

### 例 1 - Windows ローカルサーバーでのロボット制御

次の例では、直接 Windows ホストに接続されるロボットを追加し、そのロボットにドライブを追加します。

次の手順は、NetBackup Server だけに適用されます。

- 次のコマンドを実行して、ロボットを追加します。

```
tpconfig -add -robot 7 -robtype tld -port 0 -bus 0 -target 2 lun 0
```

- 構成されていないロボットにドライブが存在する場合、ドライブを追加します。  
次のコマンドを実行すると、手順 1 で構成したロボットに制御されている Tape0 というシステム名を持つドライブが構成されます。(Tape0 はサーバーによって接続および認識されています。)

```
tpconfig -add -drive -type dlt -port 1 -bus 2 -target 3 /
-lun 4 -comment "DEC DLT2000 8414" -index 0 -drstatus up /
-robot 7 -robtype tld -robdrnum 1 -asciiname DLT2000_D1
```

この例のコマンドでは、[コメント (Comment)] フィールドを使用します。このフィールドは、ドライブの SCSI 照会データを格納する場合に有効で、ドライブ形式およびファームウェアのレベルを簡単に確認できます。

- 現在、ロボットにスタンドアロンドライブとして構成されているドライブが存在する場合には、ドライブ構成を更新して、これらのドライブをロボットで制御します。  
次のコマンドを実行すると、ドライブ 1 および 2 の構成が更新されます。

```
tpconfig -update -drive 1 -type dlt -robot 7 -robtype tld
-robdrnum 1
tpconfig -update -drive 2 -type dlt -robot 7 -robtype tld
-robdrnum 2
```

---

**メモ:**ドライブに適切なロボットドライブ番号を割り当てます。ロボットドライブ番号が不適切な場合、テープのマウントまたはバックアップが実行されない場合があります。

---

## 例 2 - リモートホストでのロボット制御

この例は、NetBackup Enterprise Server だけに適用されます。

現在デバイスを管理している Windows ホストに、ロボットに存在する 1 台以上のテープドライブを接続すると想定します。

別のホストに接続されるロボットを追加する、tpconfig 操作のシーケンスを次に示します。

- 次のコマンドを実行して、ロボットを追加します。

```
tpconfig -add -robot 9 -robtype tld -cntlhost perch
```

ロボット番号が制御ホスト上のロボット番号と一致することを確認します。

- 現在、ロボットにスタンドアロンとして構成されているドライブが存在する場合には、ドライブ構成を更新して、これらのドライブをロボットで制御します。  
次のコマンドを実行すると、ドライブ 1 および 2 の構成が更新されます。

```
tpconfig -update -drive 1 -type dlt -robot 9 -robtype tld
-robdrnum 1
```

```
tpconfig -update -drive 2 -type dlt -robot 9 -robtype tld
-robdrnum 2
```

---

**メモ:** 適切なロボットドライブ番号を割り当てます。ロボットドライブ番号が不適切な場合、テープのマウントまたはバックアップが実行されない場合があります。

---

- 構成されていないドライブがロボットに存在する場合、ドライブを追加します。  
次のコマンドを実行すると、手順 1 で構成したロボットに制御されている Tape0 というシステム名を持つドライブが構成されます。(Tape0 は Windows サーバーによって接続および認識されています。)

```
tpconfig -add -drive -type dlt -port 1 -bus 2 -target 3 -lun 4
-comment 'DEC DLT2000 8414' -index 3 -drstatus up -robot 9
-robtype tld -robdrnum 3 -asciiname DLT2000_D3
```

## 例 3 - 新しいスタンドアロンドライブの構成

次の例では、ドライブをインストールした後にスタンドアロンドライブを追加する方法を示します。

```
tpconfig -add -drive -type dlt -port 1 -bus 2 -target 3 -lun 4
-comment 'DEC DLT2000 8414' -index 6 -asciiName DLT2000_standalone
```

#### 例 4 - Windows デバイスパスの表示

次に、-l オプションによって {p,b,t,l} 形式で表示される Windows デバイスパスの例を示します。

```
C:\Program Files\VERITAS\Volmgr\bin>tpconfig -l
```

Device Type	Robot Num	Drive Index	Robot Type	DrNum	Status	Comment	Drive Name	Device Path
robot	0	-	TLD	-	-	-	-	{3,1,0,1}
robot	1	-	TLD	-	-	-	-	{3,1,0,3}
robot	2	-	TLD	-	-	-	-	{3,1,2,0}
drive	-	0	pcd	-	DISABL	-	SONY.SDX-400V.000	{1,0,0,0}
drive	-	1	hcart2	2	UP	-	IBM.ULTRIUM-TD2.001	{3,1,0,2}
drive	-	1	hcart2	2	UP	-	IBM.ULTRIUM-TD2.001	{3,1,1,2}
drive	-	2	hcart2	1	UP	-	IBM.ULTRIUM-TD2.002	{3,1,0,5}
drive	-	2	hcart2	1	UP	-	IBM.ULTRIUM-TD2.002	{3,1,1,5}
drive	-	3	hcart	1	DOWN	-	IBM.ULTRIUM-TD1.003	{3,1,0,6}
drive	-	3	hcart	1	UP	-	IBM.ULTRIUM-TD1.003	{3,1,1,6}
drive	-	4	hcart	2	UP	-	IBM.ULTRIUM-TD1.004	{3,1,0,7}
drive	-	4	hcart	2	UP	-	IBM.ULTRIUM-TD1.004	{3,1,1,7}
drive	-	5	hcart2	2	UP	-	IBM.ULTRIUM-TD2.005	{3,1,2,1}
drive	-	6	hcart2	1	UP	-	IBM.ULTRIUM-TD2.006	{3,1,2,2}

## 関連項目

p.465 の [ltid](#) を参照してください。



# tpext

tpext – EMM データベースのデバイスマッピングおよび外部属性ファイルの更新

## 概要

```
tpext -loadEMM
```

UNIX システムでは、このコマンドのディレクトリパスは `/usr/opensv/netbackup/bin/` です。

Windows システムでは、このコマンドのディレクトリパスは `<install_path>%NetBackup%bin%` です。

## 機能説明

tpext コマンドを実行すると、新しいデバイスマッピングおよび外部属性ファイルを使用して EMM データベースを更新できます。

## 例

このデータを再移行する前に、最新のサポートが適用されている新しいデバイスを使用していることを確認します。新しいデバイスは、約 2 か月ごとに追加されます。

- テクニカルサポート Web サイト (<http://entsupport.symantec.com>) から `external_types.txt` マッピングファイルを入手します。
- EMM サーバーまたはマスターサーバーで、`external_types.txt` を次のディレクトリに配置して、現在の `external_types.txt` ファイルを置き換えます。

```
UNIX systems: /usr/opensv/var/global
```

```
Windows systems: install_path%var%global
```

- 次の tpext ユーティリティを実行して、EMM データを再移行します。

```
UNIX systems: /usr/opensv/volmgr/bin/tpext -loadEMM
```

```
Windows systems: install_path%Volmgr%bin%tpext -loadEMM
```

通常のインストールでは、tpext は自動的に実行されます。

---

**注意:** `create_nbdb` コマンドを使用してデータベースを手動で作成する場合、tpext ユーティリティも実行する必要があります。tpext によって、データベースに EMM データがロードされます。

---

# tpreq

tpreq - テープボリュームのマウントの要求およびドライブへのファイル名の割り当て

## 概要

```
tpreq -m media_id [-a accessmode] [-d density] [-p poolname]
[-priority number] [-f] filename
```

UNIX システムでは、このコマンドのディレクトリパスは /usr/opensv/volmgr/bin/ です。

Windows システムでは、このコマンドのディレクトリパスは <install\_path>%Volmgr%bin\ です。

## 機能説明

このコマンドを実行すると、リムーバブルメディアデバイスへのテープボリュームのマウント要求が開始されます。このコマンドで指定した情報に基づいて、指定したファイルが識別され、そのファイルがマウント要求の論理識別子として **Media Manager** に登録されます。また、この情報によりボリュームへのアクセスが管理されます。

メディアがロボットドライブ内に存在する場合、**Media Manager** によって自動的にそのメディアがマウントされます。自動的にマウントされない場合、オペレータからのマウント要求はデバイスモニターウィンドウに表示されます。オペレータの介入が必要な場合、ロボットドライブに対するマウント要求に対しては、通常、tpreq が完了されません。これらの要求も、デバイスモニターウィンドウに表示されます。

操作が完了したら、tpunmount を実行して、ボリュームのマウントを解除し、ファイルが作成されたディレクトリからそのファイル名を削除します。

UNIX システムでは、メディアが事前選択したドライブに正常に配置された直後に tpreq はスクリプト drive\_mount\_notify を呼び出します。このスクリプトを実行すると、その時点でユーザーが特定の処理を実行できるようになります。その後、tpreq に制御が戻され、処理が再開されます。このスクリプトは、ロボット内に存在するドライブの tpreq コマンドからのみ呼び出すことができ、スタンドアロンドライブには無効です。このスクリプトは、/usr/opensv/volmgr/bin/goodies ディレクトリに存在します。このスクリプトを使用するには、スクリプトを有効にして /usr/opensv/volmgr/bin ディレクトリにコピーします。使用方法はスクリプト内に記載されています。

このコマンドを実行するには、管理者権限が必要です。

## オプション

-m *media\_id*

このオプションでは、マウントするボリュームのメディア ID を指定します。この ID は、大文字でも小文字でも入力でき、**Media Manager** によって大文字に変換されます。

-a *accessmode*

このオプションでは、ボリュームのアクセスモードを指定します。有効なアクセスモードは、*w* および *r* です。アクセスモードを *w* (書き込み) に指定する場合、メディアは書き込み可能な状態でマウントされる必要があります。デフォルトは *r* (読み込み) です。これは、メディアが書き込み禁止状態であることを意味します。

-d *density*

このオプションでは、ドライブの密度を指定します。このオプションによって、テープボリュームがマウントされるドライブ形式が決定されます。デフォルトの密度は *d1t* です。

NetBackup Enterprise Server で有効な密度は次のとおりです。

4mm (4MM カートリッジ)、8mm (8MM カートリッジ)、8mm2 (8MM カートリッジ 2)、8mm3 (8MM カートリッジ 3)、dlt (DLT カートリッジ)、dlt2 (DLT カートリッジ 2)、dlt3 (DLT カートリッジ 3)、dtf (DTF カートリッジ)、hcart (1/2 インチカートリッジ)、hcart2 (1/2 インチカートリッジ 2)、hcart3 (1/2 インチカートリッジ 3)、qscsi (1/4 インチカートリッジ)

次の説明は、NetBackup Enterprise Server だけに適用されます。

1/2 インチカートリッジ密度 (*hcart*、*hcart2*、*hcart3*) を使って、サポートされるすべての 1/2 インチドライブ形式を区別できます。ただし、テープ要求は、関連付けられたメディア形式のドライブだけに割り当てることができます。たとえば、メディア形式 **HCART2** を含むメディア ID を指定する、密度が *hcart2* のテープ要求は、*hcart2* ドライブに割り当てられます。同様に、メディア形式 **HCART** を含むメディア ID を指定する、密度が *hcart* のテープ要求は、*hcart* ドライブに割り当てられます。同じ規則が **DLT** 密度 (*dlt*、*dlt2* および *dlt3*) および **8MM** 密度 (*8mm*、*8mm2* および *8mm3*) に適用されます。

NetBackup Server で有効な密度は次のとおりです。

4mm (4MM カートリッジ)、8mm (8MM カートリッジ)、dlt (DLT カートリッジ)、hcart (1/2 インチカートリッジ)、qscsi (1/4 インチカートリッジ)

マウント要求は、その密度を満たすドライブ形式上で実行される必要があります。

-p *poolname*

ボリュームが存在するボリュームプールを指定します。*poolname* は大文字と小文字を区別します。デフォルトは **None** です。

-priority *number*

デフォルトのジョブの優先度を上書きするジョブの新しい優先度を指定します。

-f *filename*

このオプションでは、ボリュームに関連付けられるファイルを指定します。このファイル名は、ボリュームがマウントされているドライブへのシンボリックリンクを表します。

ファイル名には、**1**つの名前またはフルパスを指定できます。ファイル名だけを指定した場合、現在の作業ディレクトリ内にファイルが作成されます。パスを指定した場合、そのパスで指定したディレクトリ内にファイルが作成されます。**filename** には、既存のファイルを指定できません。

tpreq コマンドが正常に実行された場合、指定した名前のファイルが **Media Manager** によって作成されます。このファイルには、メディアがマウントされているテープデバイスの名前が表示されます。このファイルは削除しないでください。tpunmount コマンドを実行して、このファイルを削除します。

必要に応じて、filename の前に **-f** を指定することもできます。

## 例

メディア ID が **JLR01** のボリュームを含むドライブにファイルをリンクする、現在の作業ディレクトリに **tape1** という名前のファイルを作成します。テープファイルのアクセスモードは書き込み用に設定され、**1/4** インチカートリッジドライブが割り当てられます。

```
tpreq -f tape1 -m jlr01 -a w -d qscsi
```

## 関連項目

p.741 の [tpunmount](#) を参照してください。

# tpunmount

tpunmount - ドライブからのテープボリュームの取り外しおよびディレクトリからのテープファイルの削除

## 概要

```
tpunmount [-f] filename [-force]
```

UNIX システムでは、このコマンドのディレクトリパスは `/usr/opensv/volmgr/bin/` です。

Windows システムでは、このコマンドのディレクトリパスは `<install_path>%Volmgr%bin%` です。

## 機能説明

tpunmount を実行すると、ディレクトリからテープファイルが削除され、ドライブからテープボリュームが物理的に取り外されます (メディアがマウントされている場合)。

UNIX システムでは、ドライブに tpunmount コマンドを実行すると、`drive_unmount_notify` スクリプトが呼び出されます。このスクリプトを実行すると、ユーザーが特定の処理を実行できるようになります。その後、tpunmount に制御が戻され、処理が再開されます。このスクリプトは、`/usr/opensv/volmgr/bin/goodies` ディレクトリに存在します。このスクリプトを使用するには、スクリプトを有効にして `/usr/opensv/volmgr/bin` ディレクトリにコピーします。このスクリプトは、ロボット内に存在するドライブに対する `tpreq` コマンドからだけ呼び出すことができます。スタンドアロンドライブまたは NDMP ドライブには無効です。

`DO_NOT_EJECT_STANDALONE` オプションを指定している場合 (`-force` オプションは指定していない場合)には、スタンドアロンドライブはアンロードされません。このオプションは EMM に格納されています。

tpunmount を使用する前に、テープファイルおよびデバイスをクローズする必要があります。

このコマンドを実行するには、管理者権限が必要です。

## オプション

```
-f filename
```

このオプションでは、メディアに関連付けられるファイルを指定します。ファイル名を指定する必要があります。必要に応じて、filename の前に `-f` を指定することもできます。

-force

EMM データベースに DO\_NOT\_EJECT\_STANDALONE を指定している場合でも、スタンドアロンドライブからボリュームを取り出します。

## 例

次のコマンドを実行すると、ファイル `tape1` に関連付けられたテープボリュームのマウントが解除され、現在のディレクトリからそのファイルが削除されます。

```
tpunmount tape1
```

## 関連項目

p.738 の [tpreq](#) を参照してください。

# verifytrace

verifytrace – 検証ジョブのデバッグログのトレース

## 概要

```
verifytrace [-master_server name] -job_id number [-start_time
hh:mm:ss] [-end_time hh:mm:ss] mmdyy [mmdyy _]
verifytrace [-master_server name] -backup_id id [-start_time hh:mm:ss]
[-end_time hh:mm:ss] mmdyy [mmdyy _]
verifytrace [-master_server name] [-policy_name name] [-client_name
name] [-start_time hh:mm:ss] [-end_time hh:mm:ss] mmdyy [mmdyy _]
UNIX システムでは、このコマンドのディレクトリパスは
/usr/opensv/netbackup/bin/admincmd/ です。
Windows システムでは、このコマンドのディレクトリパスは
<install_path>%NetBackup%\bin\admincmd\ です。
```

## 機能説明

verifytrace コマンドを実行すると、指定した検証ジョブのデバッグログメッセージが統合され、標準出力に書き込まれます。メッセージは時間順にソートされます。verifytrace では、リモートサーバーとクライアント間のタイムゾーンの違いおよびクロックのずれに対する補正が試行されます。

少なくとも、次のデバッグログを有効にする必要があります。

- UNIX システムの場合: マスターサーバー上の /usr/opensv/netbackup/admin ディレクトリ
- Windows システムの場合: マスターサーバー上の `install_path\NetBackup\bin\admin` ディレクトリ
- メディアサーバー上の `bpbrm`、`bptm/bpdm`、および `tar` コマンド

最大の出力結果を得るには、ログの詳細度を 5 に設定します。また、前述のプロセスに加えて、マスターサーバー上の `bpdbm` およびすべてのサーバーとクライアント上の `bpcd` のデバッグログを有効にします。

-job\_id または -backup\_id のいずれかを指定した場合には、verifytrace はトレースする検証ジョブを選択するための唯一の条件としてこのオプションを使います。-policy\_name または -client\_name オプションは、-job\_id または -backup\_id と組み合わせて使用することはできません。-job\_id または -backup\_id を指定しない場合、指定した選択条件を満たすすべての検証ジョブが verifytrace によって選択されます。-job\_id、-backup\_id、-policy\_name、-client\_name のどのオプションも指定しない場合には、**verifytrace** は日付スタンプ (mmdyy) で指定した日付に実行したす

すべての検証ジョブをトレースします。-start\_time および -end\_time オプションを使用すると、指定した時間内のデバッグログが検証されます。

-backup\_id id オプションを指定して verifytrace を起動すると、bpverify で同じバックアップ ID (id) を -backup\_id id オプションに指定して開始された検証ジョブが検索されます。

-policy\_name name オプションを指定して verifytrace を起動すると、bpverify で同じポリシー名 (name) を -policy\_name name オプションに指定して開始された検証ジョブが検索されます。

-client\_name name オプションを指定して verifytrace を起動すると、bpverify で同じクライアント名 (name) を -client\_name name オプションに指定して開始された検証ジョブが検索されます。

verifytrace では、エラーメッセージが標準エラーに書き込まれます。

このコマンドを実行するには、管理者権限が必要です。

## オプション

-master\_server

このオプションでは、マスターサーバー名を指定します。デフォルトは、ローカルのホスト名です。

-job\_id

このオプションでは、分析する検証ジョブのジョブ ID 番号を指定します。デフォルトは、すべてのジョブ ID です。

-backup\_id

このオプションでは、分析する検証ジョブによって検証されたバックアップイメージのバックアップ ID 番号を指定します。デフォルトは、すべてのバックアップ ID です。

-policy\_name

このオプションでは、分析する検証ジョブのポリシー名を指定します。デフォルトは、すべてのポリシーです。

-client\_name

このオプションでは、分析する検証ジョブのクライアント名を指定します。デフォルトは、すべてのクライアントです。

-start\_time

このオプションでは、ログの分析を開始する最初のタイムスタンプを指定します。デフォルトは、00:00:00 です。

-end\_time

このオプションでは、ログの分析を終了する最後のタイムスタンプを指定します。デフォルトは、23:59:59 です。



mmddy

このオプションでは、1 つ以上の日付スタンプを指定します。このオプションによって、分析されるログファイル名 (UNIX の場合は `log.mmddy`、Windows の場合は `mmddy.log`) が識別されます。

## 出力形式

出力行の形式は `daystamp.millisecs.program.sequence machine log_line` です。

daystamp

`yyyymmdd` 形式で作成されるログの日付。

millisecs

ローカルコンピュータで午前 0 時から経過したミリ秒数。

program

ログが記録されるプログラム名 (ADMIN、BPBRM、BPCD など)。

sequence

デバッグログファイル内の行番号。

machine

NetBackup サーバーまたはクライアントの名前。

log\_line

デバッグログファイルに表示される行。

## 例

例 1 - 2011 年 8 月 6 日に実行された、ジョブ ID が 2 の検証ジョブのログを分析します。

```
verifytrace -job_id 2 080611
```

例 2 - 2011 年 8 月 20 日に実行された、バックアップ ID が `pride_1028666945` のバックアップイメージを検証した検証ジョブのログを分析します。このコマンドを実行すると、`-backupid` オプションに `pride_1028666945` を指定して実行した検証ジョブのみを分析します。

```
verifytrace -backup_id pride_1028666945 082011
```

例 3 - ポリシー `Pride-Std`、クライアント `pride` で 2011 年 8 月 16 日および 2011 年 8 月 23 日に実行した検証ジョブのログを分析します。このコマンドを実行すると、`-policy` オプション `Pride-Std`、`-client` オプション `pride` で実行した検証ジョブのみを分析します。

```
verifytrace -policy_name Pride-Std -client_name pride 081611 082311
```

例 4 - 2011 年 8 月 5 日および 2011 年 8 月 17 日に実行された検証ジョブのログを分析します。

```
verifytrace 080511 081711
```

# vltadm

vltadm – 管理者用の NetBackup Vault メニューインターフェースの起動

## 概要

```
vltadm [-version]
```

The directory path to this command is /usr/opensv/netbackup/bin/

## 機能説明

このコマンドは UNIX システムでのみ動作します。

vltadm は、管理者が NetBackup Vault を構成するために使用可能なメニューインターフェースユーティリティです。管理者権限が必要です。このコマンドは、管理者によって termcap または terminfo が定義されたすべての文字ベースの端末 (または端末エミュレーションウィンドウ) から使用できます。

操作方法について詳しくは、『Symantec NetBackup Vault 管理者ガイド UNIX、Windows および Linux』および vltadm のオンラインヘルプを参照してください。

## オプション

```
-version
```

このオプションを指定すると、vltadm のバージョンが表示されます。

## 戻り値

Vault は、255 より大きい状態コードで終了する場合があります。このような状態コードは、拡張終了状態コードと呼ばれます。この場合、システムに戻される終了状態は 252 です。実際の終了状態は標準エラー出力 (stderr) に [EXIT status = *exit status*] という形式で書き込まれます。

拡張終了状態の値については、『Symantec NetBackup トラブルシューティングガイド UNIX、Windows および Linux』と NetBackup トラブルシューティングウィザードを参照してください。

## ファイル

```
/usr/opensv/netbackup/help/vltadm/*
/usr/opensv/netbackup/db/vault/vault.xml
/tmp/bp_robots
/tmp/bp_vaults
```

```
/tmp/bp_profiles
/tmp/bp_duplicates
/tmp/_tmp
```

# vltcontainers

vltcontainers - コンテナへのボリュームの論理的な移動

## 概要

```
vltcontainers -run [-rn robot_number]
vltcontainers -run -usingbarcodes [-rn robot_number]
vltcontainers -run -vltcid container_id -vault vault_name -sessionid
session_id
vltcontainers -run -vltcid container_id -f file_name [-rn
robot_number] [-usingbarcodes]
vltcontainers -view [-vltcid container_id]
vltcontainers -change -vltcid container_id -rd return_date
vltcontainers -delete -vltcid container_id
vltcontainers -version
```

UNIX システムでは、このコマンドのディレクトリパスは /usr/opensv/netbackup/bin/ です。

Windows システムでは、このコマンドのディレクトリパスは <install\_path>%NetBackup%bin% です。

## 機能説明

vltcontainers を実行すると、1 つ以上の Vault セッションから取り出されたメディアがコンテナに論理的に追加されます。オフサイト(保管先)に移動されるコンテナ、またはすでにオフサイト Vault に存在するコンテナの返却日を表示、設定または変更することもできます。また、vltcontainers では、NetBackup カタログおよび Media Manager カタログからコンテナを削除できます。

次のようにしてメディア ID をコンテナに追加できます。

- キーボードを使用してコンテナ ID とメディア ID を入力します。
- キーボードインターフェースバーコードリーダーを使用してコンテナ ID とメディア ID をスキャンします。キーボードインターフェースリーダーは、キーボードとコンピュータのキーボードポートの間に接続され、キーボードウェッジリーダーとも呼ばれます。
- 1 つのコンテナに追加するすべてのメディアのメディア ID またはそれに相当するバーコードの数値が指定された入力ファイルを使用します。複数のコンテナにメディアを追加するには、キーボードまたはキーボードインターフェースバーコードリーダーを使用して ID を入力します。または、vltcontainers コマンドを再度実行して、別のコンテナオプションとファイル名オプションを指定します。

- 特定のセッションによって取り出されたすべてのメディアを 1 つのコンテナに追加します。1 つの取り出しセッションから複数のコンテナにメディアを追加するには、キーボードまたはキーボードインターフェースバーコードリーダーを使用して ID を入力します。

NetBackup コマンドの日時の値に求められる形式は、使用しているロケールによって異なります。/user/opensv/msg/.conf ファイル (UNIX) と

install\_path¥VERITAS¥msg¥LC.CONF ファイル (Windows) はそれぞれのサポート対象ロケールの日時形式などの情報を含んでいます。これらのファイルには、サポートされているロケールおよび書式のリストを追加および変更するための、具体的な方法が含まれています。

詳しくは、『Symantec NetBackup 管理者ガイド Vol. 2』の NetBackup インストールのロケールの指定に関する項を参照してください。

vltcontainers コマンドは、Vault のライセンスを取得している NetBackup マスターサーバーから実行します。

すべてのユーザーによる書き込みを許可して、次のディレクトリを作成した場合、vltcontainers を実行すると、log.DDMMYY という名前 (DDMMYY は現在の日付) の日次デバッグログファイルの書き込みが行われます。

UNIX システムの場合: usr/opensv/netbackup/logs/vault

Windows システムの場合: install\_path¥netbackup¥logs¥vault

このファイルに書き込みを行うすべての実行可能ファイルが管理者 (Administrator) または root ユーザーによって実行されるわけではないため、すべてのユーザーによる書き込みを許可する必要があります。

## オプション

-change

このオプションを指定すると、コンテナのデフォルトの返却日が変更されます。コンテナのデフォルトの返却日は、最後に返却されるコンテナ内のボリュームの日付です。

-vltcid container\_id オプションが必要です。

-delete

このオプションを指定すると、NetBackup カタログおよび Media Manager カタログからコンテナレコードが削除されます。コンテナを削除できるのは、コンテナ内にメディアが存在しない場合だけです。

-f file\_name

このオプションでは、メディア ID を読み込むファイルを指定します。ファイルに一覧表示されたすべてのメディアが、-vltcid オプションで指定したコンテナに追加されます。ファイルには、メディア ID (1 行に 1 つ) を直接入力することができます。またはそれに相当するバーコードの数値 (1 行に 1 つ) をバーコードリーダーでスキャンして指定することができます。

- `-rd return_date`  
このオプションでは、コンテナの返却日を指定します。  
返却日の形式は、ロケール設定によって異なります。
- `-rn robot_number`  
このオプションでは、vltcontainers コマンドによってメディア情報を取得する必要がある **EMM** サーバーを判別するために使用するロボットを指定します。`-rn robot_number` を使用しない場合、マスターサーバーが **EMM** サーバーと見なされます。コンテナに追加できるのは、**EMM** サーバー上のデータベース内にあるメディアだけです。
- `-run`  
このオプションを指定すると、コンテナにメディアが論理的に追加されます。他のオプションを指定しない場合は、キーボードを使用してコンテナ ID とメディア ID を入力する必要があります。コンテナ ID およびメディア ID のスキャンにバーコードリーダーを使用するには、`-usingbarcodes` オプションを指定します。特定のセッションによって取り出されたメディアを追加するには、`-vault vault_name` および `-sessionid session_id` オプションを指定します。ファイルで指定されているメディアを追加するには、`-f file_name` オプションを指定します。マスターサーバー以外の **EMM** サーバーを指定するには、`-rn robot_number` オプションを指定します。
- `-sessionid session_id`  
このオプションでは、**vault** セッションの ID を指定します。指定したセッションによって取り出されたすべてのメディアが、`-vltcid` オプションで指定したコンテナに追加されます。
- `-usingbarcodes`  
キーボードインターフェースのバーコードリーダーを使ってコンテナ ID とメディア ID をスキャンするか、または `-f file_name` で指定したファイル内のバーコードの数値を使うことを指定します。キーボードインターフェースバーコードリーダー (キーボードウェッジバーコードリーダーとも呼ばれる) は、キーボードとコンピュータのキーボードポートの間に接続されます。
- `-vault vault_name`  
このオプションでは、メディアを取り出したプロファイルが属する **Vault** 名を指定します。また、コンテナに追加するメディアを取り出したセッションの ID (`-sessionid`) も指定する必要があります。
- `-version`  
このオプションを指定すると、vltcontainers のバージョンが表示されます。

`-view [-vltcid container_id]`  
このオプションを指定すると、すべてのコンテナに割り当てられた返却日が表示されます。特定のコンテナの返却日を表示するには、`-vltcid container_id` オプションおよび引数を使用します。

`-vltcid container_id`  
このオプションでは、コンテナ ID を指定します。コンテナ ID には、29 文字以内の英数字 (空白なし) の文字列を指定します。コンテナの返却日を変更するには、`-rd return_date` オプションおよび引数が必要です。

## 例

例 1 - 次のコマンドを使って以下を実行します。

- ロボット番号 0 から取り出されたボリュームをコンテナに追加する。
- バーコードリーダーを使用してコンテナ ID とメディア ID をスキャンする。

```
vltcontainers -run -usingbarcodes -rn 0
```

例 2 - コンテナ ABC123 の返却日を表示します。

```
vltcontainers -view -vltcid ABC123
```

例 3 - コンテナ ABC123 の返却日を 2012 年 12 月 7 日に変更します。

```
vltcontainers -change -vltcid ABC123 -rd 12/07/2012
```

例 4 - 次のコマンドを実行して、NetBackup カタログおよび Media Manager カタログからコンテナ ABC123 を削除します。

```
vltcontainers -delete -vltcid ABC123
```

例 5 - 次のコマンドを実行して、Vault の名前が MyVault\_Cntr のセッション 4 によって取り出されたすべてのメディアをコンテナ ABC123 に追加します。

```
vltcontainers -run -vltcid ABC123 -vault MyVault_Cntr -sessionid 4
```

例 6 - ロボット番号 0 から取りだされた medialist ファイルにリストされたメディアを、コンテナ ABC123 に追加します。

```
UNIX systems: # vltcontainers -run -vltcid ABC123 -f
/home/jack/medialist -rn 0
```

```
Windows systems: # vltcontainers -run -vltcid ABC123 -f
C:¥home¥jack¥medialist -rn 0
```

例 7 - 次のコマンドを使って以下を実行します。



- マスターサーバーに接続されているロボットから取り出されたメディアをコンテナ **ABC123** に追加する
- そのメディアのバーコードを `medialist` ファイルから読み込む

```
UNIX systems: # vltcontainers -run -vltcid ABC123 -f
/home/jack/medialist -usingbarcodes
```

```
Windows systems: # vltcontainers -run -vltcid ABC123 -f
C:¥home¥jack¥medialist -usingbarcodes
```

## 戻り値

**Vault** は、**255** より大きい状態コードで終了する場合があります。このような状態コードは、拡張終了状態コードと呼ばれます。この場合、システムに戻される終了状態は **252** です。実際の終了状態は標準エラー出力 (`stderr`) に `[EXIT status = exit status]` という形式で書き込まれます。

拡張終了状態の値については、『Symantec NetBackup トラブルシューティングガイド UNIX、Windows および Linux』および『Symantec NetBackup トラブルシューティング ユーザーズド』を参照してください。

## ファイル

UNIX システムの場合:

```
/usr/opensv/netbackup/vault/sessions/cntrDB
/usr/opensv/netbackup/db/vault/vault.xml
/usr/opensv/netbackup/logs/vault
```

Windows システムの場合:

```
install_path¥NetBackup¥vault¥sessions¥cntrDB
install_path¥NetBackup¥db¥vault¥vault.xml
install_path¥netbackup¥logs¥vault
```

## 関連項目

p.760 の [vltffsitemedia](#) を参照してください。

p.764 の [vltopmenu](#) を参照してください。

# vlteject

vlteject - 以前に実行したセッションに対するメディアの取り出しおよびレポートの生成

## 概要

```
vlteject
vlteject -eject [-profile profile_name] [-robot robot_name] [-vault vault_name [-sessionid id]] [-auto y|n] [-eject_delay seconds]
vlteject -report [-profile profile_name] [-robot robot_name] [-vault vault_name [-sessionid id]] [-legacy]
vlteject -eject -report [-profile profile_name] [-robot robot_name] [-vault vault_name [-sessionid id]] [-auto y|n] [-eject_delay seconds] [-version] [-legacy]
vlteject -preview [-vault vault_name [-profile profile_name]] [-profile robot_no / vault_name / profile_name] [-robot robot_name] [-sessionid id]
UNIX システムでは、このコマンドのディレクトリパスは /usr/opensv/netbackup/bin/ です。
Windows システムでは、このコマンドのディレクトリパスは <install_path>%NetBackup%bin% です。
```

## 機能説明

vlteject を実行すると、メディアがまだ取り出されていない **Vault** セッションに対して、メディアの取り出しおよび (プロファイルで構成されている) 対応するレポートの生成が行われます。vlteject によって、すべてのセッション、特定のロボット、特定の **Vault** または特定のプロファイルに関する保留中の取り出しおよびレポートが処理されます。保留中のすべての取り出しおよびレポートを処理する場合、-profile、-robot または -vault オプションを指定しないでください。

vlteject は、セッションディレクトリが存在しているセッションに対してだけ動作します。ディレクトリが **NetBackup** によって削除されると、そのセッションに対しては、vlteject によるメディアの取り出しまたはレポートの生成は実行できません。

vlteject は、呼び出しの方法に応じて、対話形式または非対話形式で実行されます。メディアアクセスポートに配置できない数のメディアを取り出す場合は、対話形式で実行してください。

vlteject の実行中は、**Vault** の構成を変更しないでください。

vlteject は、次のいずれかの方法で実行できます。

- コマンドラインから直接実行する。

- **NetBackup** ポリシースケジュールを使用する。この場合、ポリシー形式が **Vault** で、ポリシーのファイルリストに `vlteject` コマンドが含まれている必要があります。
- `vltopmenu` を使用して、取り出し操作、取り出しの統合操作またはレポートの統合操作として実行する。

次のディレクトリが存在し、そのディレクトリにすべてのユーザーによる書き込みが許可されている場合は、`vlteject` を実行すると日次デバッグログファイルの書き込みが行われます。

UNIX システムの場合: `usr/opensv/netbackup/logs/vault`

Windows システムの場合: `install_path¥netbackup¥logs¥vault`

日次デバッグログファイルの名前は `log.DDMMYY` (`DDMMYY` は現在の日付) です。

このファイルに書き込みを行うすべての実行可能ファイルが管理者 (**Administrator**) または **root** ユーザーによって実行されるわけではないため、すべてのユーザーによる書き込みを許可する必要があります。ホストプロパティの [**Vault ログの保持 (Keep vault logs)**] で、**Vault** セッションディレクトリの保持期間が決定されます。

このコマンドは、すべての認可済みユーザーが実行できます。

**NetBackup** による認可について詳しくは、『**Symantec NetBackup セキュリティおよび暗号化ガイド UNIX、Windows および Linux**』を参照してください。

## オプション

`-auto y|n`

このオプションでは、自動モード (`y`) または対話モード (`n`) を指定します。自動モード (`y`) では、`vlteject` はユーザーによる入力なしで実行され、出力は表示されません。対話モード (デフォルト) では、`vlteject` は対話形式で実行されます。このモードでは、入力が可能で、出力が表示されます。

`-eject`

指定したセッションからメディアを取り出します。取り出しがすでに完了しており、レポートの生成だけを行う場合、`-eject` を指定する必要はありません。

`-eject_delay seconds`

このオプションでは、メディアの取り出しまでの遅延を秒数で指定します。このオプションは、目的のメディアにバックアップや複製などの操作が行われてからあまり時間が経過していない場合に有効です。デフォルトは **0** (ゼロ) です。最大値は **3600** (1 時間) です。

`-legacy`

古い形式で統合レポートを生成します。このオプションは、`-report` オプションを指定した場合だけ有効です。

**-preview**

このオプションを指定すると、セッションとそのセッションで取り出されるメディアが一覧表示されます。メディアの取り出しは行われません。

**-profile robot\_no / vault\_name / profile\_name**

メディアの取り出しおよびレポートの生成を行うロボット番号、Vault 名、プロファイル名を指定します。3 つのオプションはすべて **-profile** とともに指定する必要があります。保留中のすべての取り出しおよびレポートを処理するには、**-profile** は **profile\_name** のみと指定します。

**-report**

指定したセッションのレポートを生成します。対応する取り出し処理が完了している場合、選択したセッションの保留中のレポートが生成され、配布されます。vlteject コマンドを再実行しても、これらのレポートは再生成されません。取り出しが完了していない場合には、取り出しの完了に依存しないレポートのサブセットを生成します。これらのレポートは、取り出しの完了後に vlteject **-report** を再実行すると再生成されます。

**-robot robot\_no**

メディアを取り出してレポートを生成するロボットを識別するロボット番号を指定します。ロボット内のすべての Vault では、同じオフサイトボリュームグループが使用される必要があります。保留中のすべての取り出しおよびレポートを処理する場合、**-profile**、**-robot** または **-vault** オプションを指定しないでください。

**-sessionid id**

このオプションでは、セッション ID を数字で指定します。**-profile**、**-robot** または **-vault** 指定して **-session id** を指定しない場合、vlteject は、指定したプロファイル、ロボットまたは Vault のすべてのセッションに対して動作します。

**-vault vault\_name**

このオプションでは、メディアの取り出しおよびレポートの生成の対象となる Vault を指定します。保留中のすべての取り出しおよびレポートを処理する場合、**-profile**、**-robot** または **-vault** オプションを指定しないでください。

**-version**

このオプションを指定すると、vlteject のバージョンが表示されます。

## 例

**例 1** - メディアが取り出されていないセッションが存在するすべてのロボットでメディアを取り出し、レポートを生成します。

```
vlteject -eject -report
```

**例 2** - CustomerDB 用 Vault のすべてのセッションで、取り出されていないすべてのメディアを取り出し、該当するレポートを生成します。

```
vlt eject -vault CustomerDB -eject -report
```

## 戻り値

Vault は、255 より大きい状態コードで終了する場合があります。このような状態コードは、拡張終了状態コードと呼ばれます。この場合、システムに戻される終了状態は 252 です。実際の終了状態は標準エラー出力 (stderr) に [EXIT status = *exit status*] という形式で書き込まれます。

拡張終了状態の値については、『Symantec NetBackup トラブルシューティングガイド UNIX、Windows および Linux』および『Symantec NetBackup トラブルシューティング ウィザード』を参照してください。

## ファイル

UNIX システムの場合:

```
/usr/opensv/netbackup/db/vault/vault.xml
/usr/opensv/netbackup/logs/vault/log.mmdyy
/usr/opensv/netbackup/vault/sessions/vlt_name/sidxxx/detail.log
/usr/opensv/netbackup/vault/sessions/vlt_name/sidxxx/summary.log
/usr/opensv/netbackup/vault/sessions/vlt_name/sidxxx/vlt eject_status
/usr/opensv/netbackup/vault/sessions/vlt eject.mstr
/usr/opensv/netbackup/bp.conf
```

Windows システムの場合:

```
install_path¥NetBackup¥db¥vault¥vault.xml
install_path¥NetBackup¥logs¥bpbrmvlt¥mmdyy.log
install_path¥NetBackup¥logs¥vault¥mmdyy.log
install_path¥NetBackup¥vault¥sessions¥vlt_name¥sidxxx¥detail.log
install_path¥NetBackup¥vault¥sessions¥vlt_name¥sidxxx¥summary.log
install_path¥NetBackup¥vault¥sessions¥vlt_name¥sidxxx¥vlt eject.status
install_path¥NetBackup¥vault¥sessions¥vlt eject.mstr
install_path¥NetBackup¥bp.conf
```

## 関連項目

p.764 の [vltopmenu](#) を参照してください。

# vltinject

vltinject - 指定された Vault 構成用のロボットへのボリュームの取り込み

## 概要

```
vltinject profile|robot/vault/profile [-version]
```

UNIX システムでは、このコマンドのディレクトリパスは /usr/opensv/netbackup/bin/ です。

Windows システムでは、このコマンドのディレクトリパスは <install\_path>%NetBackup%\bin% です。

## 機能説明

vltinject を実行すると、ボリュームをロボットに取り込み、Enterprise Media Manager データベースを更新できます。このコマンドでは、vmupdate が実行され、指定したプロファイルと一致する Vault 構成から取得されたロボット番号、ロボット形式およびロボットボリュームグループが割り当てられます。

次のディレクトリが存在し、そのディレクトリにすべてのユーザーによる書き込みが許可されている場合は、vltinject を実行すると日次デバッグログファイルの書き込みが行われます。

UNIX システムの場合: usr/opensv/netbackup/logs/vault

Windows システムの場合: install\_path%\netbackup%\logs%\vault

日次デバッグログファイルの名前は log.DDMMYY (DDMMYY は現在の日付) です。

このファイルをトラブルシューティングに使用できます。このファイルに書き込みを行うすべての実行可能ファイルが管理者または root ユーザーによって実行されるわけではないため、すべてのユーザーによる書き込みを許可する必要があります。

このコマンドは、すべての認可済みユーザーが実行できます。

NetBackup による認可について詳しくは、『Symantec NetBackup セキュリティおよび暗号化ガイド UNIX、Windows および Linux』を参照してください。

## オプション

```
profile|robot/vault/profile
```

このオプションでは、プロファイル名、または Vault 構成ファイル内でネストしたロボット番号、Vault およびプロファイルの名前を指定します。robot および vault を指定しないで profile を指定する場合、そのプロファイルは一意である必要があります。

vltinject を実行すると、このプロファイルの構成から取得されたロボット番号、ロボット形式およびロボットボリュームグループが vmupdate に渡され、実行されます。

```
-version
```

このオプションを指定すると、vltinject のバージョンが表示されます。

## 例

例 1 - Payroll プロファイルによって Vault 処理が行われ、オフサイト Vault から返却されたボリュームを取り込みます。

```
vltinject Payroll
```

例 2 - Finance Vault の Weekly プロファイルによって Vault 処理が行われ、オフサイト Vault から返却されたボリュームを取り込みます。ユーザーは次のように入力します。

```
vltinject 8/Finance/Weekly
```

## 戻り値

0 - EMM データベースは正常に更新されました。

ゼロ以外 - EMM データベースの更新中に問題が発生しました。

Vault は、255 より大きい状態コードで終了する場合があります。このような状態コードは、拡張終了状態コードと呼ばれます。この場合、システムに戻される終了状態は 252 です。実際の終了状態は標準エラー出力 (stderr) に [EXIT status = exit status] という形式で書き込まれます。

## ファイル

UNIX システムの場合:

```
/usr/opensv/netbackup/logs/vault/log.mmddyy
```

Windows システムの場合:

```
install_path¥NetBackup¥logs¥vault¥mmddyy.log
```

# vloffsitemedia

vloffsitemedia - メディアグループのオフサイトパラメータ値の表示、または 1 つのメディアのオフサイトパラメータ値の変更

## 概要

```
vloffsitemedia -list [-W] [-vault vault_name] [-voldbhost host_name]
vloffsitemedia -change -m media_id [-voldbhost host_name] [-d
media_description] [-vltname vault_name] [-vltsent date][-vlreturn
date] [-vltslot slot_no] [-vltnid container_id] [-vltsession
session_id]
vloffsitemedia -version
```

UNIX システムでは、このコマンドのディレクトリパスは /usr/opensv/netbackup/bin/ です。

Windows システムでは、このコマンドのディレクトリパスは  
<install\_path>%NetBackup%bin% です。

## 機能説明

vloffsitemedia を実行すると、指定されたメディアの Vault 固有のパラメータを変更できます。1 つのコマンドで、1 つ以上のパラメータを変更できます。特定の EMM サーバーまたは Vault 用のすべてのメディアの様々な Vault パラメータを表示することもできます。

すべてのユーザーによる書き込みを許可して、次のディレクトリを作成した場合、vloffsitemedia を実行すると、そのディレクトリに日次デバッグログファイルが作成されます。

UNIX の場合: /usr/opensv/netbackup/logs/vault

Windows の場合: install\_path%netbackup%logs%vault

ログの名前は log.DDMMYY (DDMMYY は現在の日付) です。このファイルをトラブルシューティングに使用できます。

このファイルに書き込みを行うすべての実行可能ファイルが root ユーザーによって実行されるわけではないため、すべてのユーザーによる書き込みを許可する必要があります。

## オプション

-change

このオプションを指定すると、指定したボリュームの属性が変更されます。



`-d media_description`

このオプションでは、ボリュームの説明を指定します。

ボリュームがロボットに戻されたときにメディアの説明フィールドが自動的に消去されるように構成するには、EMM に `VAULT_CLEAR_MEDIA_DESC` パラメータを設定します。

`-list`

このオプションを指定すると、ローカル EMM データベース内のメディアのオフサイトパラメータが表示されます。リストをローカル EMM データベースの特定の Vault に制限するには、このコマンドで `-vault` オプションを指定します。特定の EMM データベースのメディアのオフサイトパラメータを表示するには、このコマンドで `-voldbhost` オプションを指定します。

`-m media_id`

このオプションでは、Vault パラメータを変更するボリュームのメディア ID を指定します。

`-vault vault_name`

このオプションでは、すべてのメディア ID とそれらの Vault 固有のパラメータを表示する Vault の名前を指定します。

`-version`

このオプションを指定すると、vlttoffsitemedia のバージョンが表示されます。

`-vltcid container_id`

このオプションでは、ボリュームを格納するコンテナを指定します。`container_id` (29 文字以内の空白文字を含まない英数字の文字列) では、ボリュームを格納する新しいコンテナを指定します。指定するコンテナ ID は既存のものに限ります。異なる EMM サーバー内のメディアは割り当てることができません。`-m` オプションでは、ボリュームのメディア ID を指定します。

`-vltname vault_name`

このオプションでは、ボリュームを取り出したロボットに構成される論理 Vault 名を指定します。

`-vltreturn date`

このオプションでは、Vault ベンダーからメディアの返却が要求された日時を指定します。カタログバックアップボリュームの場合、日付は Vault ベンダーからメディアの返却が要求される予定の日付になります。

NetBackup コマンドの日時の値に求められる形式は、使用しているロケールによって異なります。`/user/openv/msg/.conf` ファイル (UNIX) と

`install_path¥VERITAS¥msg¥LC.CONF` ファイル (Windows) はそれぞれのサポート対象ロケールの日時形式などの情報を含んでいます。これらのファイルには、サポートされているロケールおよび書式のリストを追加および変更するための、具体的な方法が含まれています。

詳しくは、『Symantec NetBackup 管理者ガイド Vol. 2』の NetBackup インストールのロケールの指定に関する項を参照してください。

**-vltsent date**

メディアがオフサイト Vault に発送された日時を指定します。

NetBackup コマンドの日時の値に求められる形式は、使用しているロケールによって異なります。/user/openv/msg/.conf ファイル (UNIX) と

install\_path¥VERITAS¥msg¥LC.CONF ファイル (Windows) はそれぞれのサポート対象ロケールの日時形式などの情報を含んでいます。これらのファイルには、サポートされているロケールおよび書式のリストを追加および変更するための、具体的な方法が含まれています。

詳しくは、『Symantec NetBackup 管理者ガイド Vol. 2』の NetBackup インストールのロケールの指定に関する項を参照してください。

mm/dd/yyyy [hh[:mm[:ss]]]

**-vltsession session\_id**

このオプションでは、このメディアが取り出された Vault セッションの識別子を指定します。

**-vltslot slot\_no**

このオプションでは、目的のボリュームが占有している Vault ベンダーのスロット番号を指定します。

**-voldbhost host\_name**

このオプションでは、EMM サーバーの名前を指定します。

**-W**

このオプションを指定すると、メディアのオフサイトパラメータの出力が解析可能な形式になります。コンテナの場合、出力には、コンテナの説明の長さ、コンテナの説明およびコンテナ ID が示されます。出力ヘッダー行は空白で区切られたフィールド名の行で、出力データ行は空白で区切られたデータフィールドです。

## 例

例 1 - メディア ID が BYQ のメディアの Vault 名および Vault へ発送された日時を変更します。

```
vltoffsitemedia -change -m BYQ -vltname THISTLE -vltsent 08/01/2012
12:22:00
```

例 2 - メディア ID が 000012 のメディアの Vault スロット番号を 100 に変更します。

```
vltoffsitemedia -change -m 000012 -vltslot 100
```

例 3 - メディアの Vault 固有フィールドの内容を消去します。

```
vltffsitemedia -change -m 000012 -vltname "" -vltsession 0 -vltslot
0 -vltsent 0 -vltreturn 0
```

または

```
vltffsitemedia -change -m 000012 -vltname - -vltsession 0 -vltslot
0 -vltsent 00/00/00 -vltreturn 00/00/00
```

例 4 - ボリューム **ABC123** のコンテナ ID とメディアの説明を消去します。

```
vltffsitemedia -change -m ABC123 -vltcid - -d ""
```

または

```
vltffsitemedia -change -m ABC123 -vltcid "" -d ""
```

vltffsitemedia コマンドは、EMM データベースへの問い合わせまたは EMM データベースの更新に、Media Manager コマンドを使用します。

vltffsitemedia コマンドが失敗した場合、次のディレクトリのデバッグログで、失敗した Media Manager コマンドの詳細を調べます。

UNIX システムの場合: `usr/openv/netbackup/logs/vault`

Windows システムの場合: `install_path¥netbackup¥logs¥vault`

Media Manager コマンドに戻される状態コードについては、『Symantec NetBackup 状態コードリファレンスガイド』を参照してください。

## 戻り値

Vault は、255 より大きい状態コードで終了する場合があります。このような状態コードは、拡張終了状態コードと呼ばれます。この場合、システムに戻される終了状態は 252 です。実際の終了状態は標準エラー出力 (`stderr`) に `[EXIT status = exit status]` という形式で書き込まれます。

拡張終了状態の値については、『Symantec NetBackup 状態コードリファレンスガイド』と NetBackup トラブルシューティングウィザードを参照してください。

# vltopmenu

vltopmenu - オペレータ用の NetBackup Vault メニューインターフェースの起動

## 概要

vltopmenu [-version]

UNIX システムでは、このコマンドのディレクトリパスは /usr/opensv/netbackup/bin/ です。

Windows システムでは、このコマンドのディレクトリパスは <install\_path>%NetBackup%bin% です。

## 機能説明

NetBackup Vault 機能のオペレータが使用可能な様々なオプションが表示されたメニュー画面を起動します。このコマンドでは、メディアの取り出しや取り込み、様々なレポートの個別または一括出力を実行できます。また、メディアがまだ取り出されていないすべてのセッションに対するすべてのレポートの統合および取り出しの統合が可能です。このインターフェースは、ユーザーによって termcap または terminfo が定義されたすべての文字ベースの端末 (または端末エミュレーションウィンドウ) から使用できます。

操作手順について詳しくは、『Symantec NetBackup Vault 操作ガイド UNIX、Windows および Linux』を参照してください。

このコマンドは、すべての認可済みユーザーが実行できます。

NetBackup による認可について詳しくは、『Symantec NetBackup セキュリティおよび暗号化ガイド UNIX、Windows および Linux』を参照してください。

## オプション

-version

このオプションを指定すると、vltopmenu のバージョンが表示されます。

## 戻り値

Vault は、255 より大きい拡張終了状態コードで終了する場合があります。この場合、システムに戻される終了状態は 252 です。実際の終了状態は標準エラー出力 (stderr) に [EXIT status = exit status] という形式で書き込まれます。

拡張終了状態の値については、『Symantec NetBackup トラブルシューティングガイド UNIX、Windows および Linux』および『Symantec NetBackup トラブルシューティングウィザード』を参照してください。

## ファイル

UNIX システムの場合:

```
/usr/opensv/netbackup/vault/sessions/vlteject.mstr
/usr/opensv/netbackup/vault/sessions/vlteject_status.log.timestamp
/usr/opensv/netbackup/vault/sessions/*/sid*/detail.log
```

Windows システムの場合:

```
install_path¥NetBackup¥vault¥sessions¥vlteject.mstr
install_path¥NetBackup¥vault¥sessions¥vlteject_status.log.ti
mestamp
install_path¥NetBackup¥vault¥sessions¥*¥sid*¥detail.log
```

# vltrun

vltrun – NetBackup Vault セッションの実行

## 概要

```
vltrun -halttdups -vjobs vault_jobid [profile | robot/vault/profile]
[-preview] [-verbose | -v] [-version]
```

UNIX システムでは、このコマンドのディレクトリパスは /usr/opensv/netbackup/bin/ です。

Windows システムでは、このコマンドのディレクトリパスは <install\_path>%NetBackup%bin% です。

## 機能説明

vltrun では、Vault エンジンに一連の呼び出しを発行することによって NetBackup Vault セッションが実行されます。必要に応じて、このセッションにユーザー指定の通知スクリプトへの呼び出しを含めることができます。

## オプション

*profile* | *robot/vault/profile*

このオプションでは、プロファイル名、または Vault パラメータファイル内でネストしたロボット番号、Vault およびプロファイルの名前を指定します。*robot* および *vault* を指定しないで *profile* を指定する場合、そのプロファイルは Vault パラメータファイル内で一意である必要があります。このオプションは必須です。

-vjob *vault\_jobid*

このオプションでは、現在複製が実行されている Vault ジョブのジョブ ID を指定します。

-halttdups

このオプションを指定すると、関連付けられているすべての実行中の Vault 複製ジョブが終了します。

-preview

このオプションを指定すると、Vault セッションで Vault 処理が行われるイメージのプレビューのリストが生成されます。結果は、セッションディレクトリ内の preview.list ファイルに記録されます。

-verbose | -v

このオプションを指定すると、セッションについての詳細なレポートが Vault デバッグログに出力されます。

-version

このオプションを指定すると、vltrun のバージョンが表示されます。

## 使用例

vltrun セッションは、次の順序で実行されます。

- vlt\_start\_notify スクリプトを実行する。
- メディアのインベントリを実行する。
- ロボットに返却された Vault メディアの Media Manager データベースを初期化する。
- Vault 処理を行うイメージのプレビューのリストを生成する。
- イメージを複製する。
- Media Manager データベースのインベントリを実行する (1 回目)。
- NetBackup カタログバックアップ用のメディアを割り当てる。
- Media Manager データベースのインベントリを実行する (2 回目)。
- イメージのインベントリを実行する。
- メディアを一時停止状態にする。
- vlt\_end\_notify スクリプトを実行する。
- イメージのインベントリを再実行する。
- スロット ID を割り当てる。
- NetBackup カタログをバックアップする。
- Media Manager データベースのインベントリを実行する (3 回目で最終回)。
- vlt\_ejectlist\_notify スクリプトを実行する。
- 取り出しリストを生成する。
- vlt\_starteject\_notify スクリプトを実行する。
- 取り出しおよびレポートを実行する。
- vlt\_end\_notify スクリプトを実行する。

vltrun は、次のいずれかの方法で実行できます。

- コマンドラインから直接実行する。
- NetBackup ポリシースケジュールを使用する。この場合、ポリシー形式が Vault で、ポリシーのファイルリストに vltrun コマンドが含まれている必要があります。
- Vault の GUI の [セッションの開始 (Start Session)] コマンド (プロファイルの場合) または vltadm を実行する。

**Vault** セッションを実行するには、`profile | robot/vault/profile` オプションを指定して `vltrun` を実行します。**Vault** の構成内に同じ名前を持つプロファイルが他に存在しない場合は、オプションに **profile** の形式を指定できます。この場合、プロファイル名だけで構成情報を一意に識別できます。

同じ名前を持つプロファイルが複数存在する場合は、構成を一意に識別するために `robot/vault/profile` の形式を使用します。

**Vault** セッションの実行中は、**Vault** の構成を変更しないでください。

セッションが開始されると、セッション中に `vltrun` および **Vault** エンジンによって作成されるファイルを保持するためのディレクトリが作成されます。

**Vault** セッションでは次のディレクトリを使用します。

UNIX systems:

```
/usr/openv/netbackup/vault/sessions/vault_name/sidxxx
```

Windows systems:

```
install_path¥NetBackup¥vault¥sessions¥vault_name¥sidxxx
```

**xxx** 変数は、このセッションに一意に割り当てられる整数です。**Vault** 名ごとにセッション識別子が 1 から順番に割り当てられます。

**Vault** プロパティに電子メールアドレスを構成している場合は、セッションの終了時にこのアドレスに電子メールが送信されます。電子メールによって結果が報告されます。デフォルトでは、電子メールは **root** ユーザーに送信されます。

`vltrun` を実行すると、セッションディレクトリ内にセッションの概略 (`summary.log`) が作成されます。

**NetBackup** バイナリ用のディレクトリ `/usr/openv/netbackup/bin` に通知スクリプトをインストールして、**Vault** の処理をセッション中のいくつかの時点で制御します。通知スクリプトについて詳しくは、『**Symantec NetBackup Vault 管理者ガイド UNIX、Windows および Linux**』を参照してください。

`vltrun` セッションの進捗状況は、**NetBackup** アクティビティモニターで監視できます。

アクティビティモニターのメインウィンドウ内の [操作 (Operation)] フィールドに、次の状態を使用して **Vault** セッションの進捗状況が表示されます。

- イメージを選択しています (Choosing Images)
- イメージを複製しています (Duplicating Images)
- メディアを選択しています (Choosing Media)
- カタログバックアップ (Catalog Backup)
- 取り出しおよびレポート (Eject and Report)
- 完了 (Done)



すべてのユーザーによる書き込みを許可して、次のディレクトリを作成した場合、vltrun を実行すると、そのディレクトリに日次デバッグログファイルが作成されます。

UNIX システムの場合: `usr/openv/netbackup/logs/vault`

Windows システムの場合: `install_path¥netbackup¥logs¥vault`

ログの名前は `log.DDMMYY` (`DDMMYY` は現在の日付) です。このファイルをトラブルシューティングに使うことができます。

このファイルに書き込みを行うすべての実行可能ファイルが管理者または `root` ユーザーによって実行されるわけではないため、すべてのユーザーによる書き込みを許可する必要があります。

ログファイルに記録されるログ情報の量を調整するには、NetBackup 管理コンソールの [ホストプロパティ (Host Properties)] からマスターサーバーのプロパティの [ログ (Logging)] ページでログレベルのパラメータを調整します。

実行中の Vault 複製ジョブを終了するには、`vltrun -halttdups` コマンドを使用します。`-halttdups` スクリプトを開始すると、現在複製中のメイン Vault ジョブに SIGUSR2 シグナルが送信されます。その後、現在の複製ジョブインスタンスの終了を待機することなく、すべての Vault 複製インスタンスにシグナルが自動的に伝達されます。この処理が完了すると、メイン Vault ジョブで残りの処理が続行されます。

SIGUSR2 シグナルが受信されると、終了した Vault 複製ジョブのジョブの詳細が次のメッセージで表示されます: 管理者から終了が要求されました (150)。

このコマンドを実行するには、管理者権限が必要です。

## 例

例 1 - プロファイル `my_profile` を Vault 処理します。

```
vltrun my_profile
```

例 2 - ロボット 0 のイメージを Vault 処理し、会計報告およびプロファイル `Weekly` を Vault 処理します。

```
vltrun 0/Financials/Weekly
```

例 3 - ID が 1 のアクティブな Vault 複製ジョブを終了します。

```
vltrun -halttdups -vjob 1
```

## 戻り値

UNIX システムでは、Vault は 255 より大きい状態コードで終了する場合があります。これらの拡張終了状態コードでは、システムに戻される状態は 252 です。実際の終了状態

は標準エラー出力 (stderr) に、[EXIT status = *exit status*]という形式で書き込まれます。

## ファイル

UNIX システムの場合:

```
/usr/opensv/netbackup/vault
/usr/opensv/netbackup/bp.conf
/usr/opensv/netbackup/logs/bpcd/log.mmddyy
/usr/opensv/netbackup/logs/vault/log.mmddyy
/usr/opensv/netbackup/db/vault/vault.xml
/usr/opensv/netbackup/vault/sessions/vault_name/sidxxx
/usr/opensv/netbackup/vault/sessions/vault_name/sidxxx/summary.log
/usr/opensv/netbackup/vault/sessions/vault_name/sidxxx/detail.log
```

Windows システムの場合:

```
install_path¥NetBackup¥vault
install_path¥NetBackup¥bp.conf
install_path¥NetBackup¥logs¥bpbbrmvt¥mmddyy.log
install_path¥NetBackup¥logs¥bpcd¥mmddyy.log
install_path¥NetBackup¥logs¥vault¥mmddyy.log
install_path¥NetBackup¥db¥vault¥vault.xml
install_path¥NetBackup¥vault¥sessions¥vault_name¥sidxxxinstall_path¥NetBackup
ary.log
install_path¥NetBackup¥vault¥sessions¥vault_name¥sidxxx¥detail.log
```

## 関連項目

- p.747 の [vltadm](#) を参照してください。
- p.754 の [vlteject](#) を参照してください。
- p.758 の [vltinject](#) を参照してください。
- p.760 の [vltoffsitemedia](#) を参照してください。
- p.764 の [vltopmenu](#) を参照してください。

# vmadd

vmadd – EMM データベースへのボリュームの追加

## 概要

```
vmadd -m media_id -mt media_type [-h EMM_server |
volume_database_host] [-verbose] [-b barcode] [-rt robot_type] [-rn
robot_number] [-rh robot_host] [-rc1 rob_slot] [-rc2 rob_side] [-p
pool_number] [-mm max_mounts | -n cleanings] [-d "media_description"]
```

UNIX システムでは、このコマンドのディレクトリパスは /usr/openv/volmgr/bin/ です。  
Windows システムでは、このコマンドのディレクトリパスは <install\_path>%Volmgr%bin% です。

## 機能説明

このコマンドを実行すると、ボリュームが Enterprise Media Manager (EMM) データベースに追加されます。

このコマンドは、すべての認可済みユーザーが実行できます。

NetBackup による認可については、『Symantec NetBackup セキュリティおよび暗号化ガイド UNIX、Windows および Linux』を参照してください。

## オプション

-m *media\_id*

このオプションでは、追加するボリュームのメディア ID を指定します。このメディア ID には、最大 6 文字の ASCII 文字を指定できます。実際の文字入力は、英数字と、[.]、[+]、[\_] および [-] (先頭の文字ではない場合) に制限されます。

次の説明は、NetBackup Enterprise Server だけに適用されます。

-mt *media\_type*

このオプションでは、追加するボリュームのメディア形式を指定します。

NetBackup Enterprise Server で有効なメディア形式は、次のとおりです。

4mm、8mm、8mm2、8mm3、dlt、dlt2、dlt3、dtf、hcart、hcart2、hcart3、qcart、4mm\_clean、8mm\_clean、8mm2\_clean、8mm3\_clean、dlt\_clean、dlt2\_clean、dlt3\_clean、dtf\_clean、hcart\_clean、hcart2\_clean、hcart3\_clean

NetBackup Server で有効なメディア形式は、次のとおりです。

4mm、8mm、dlt、hcart、qcart、4mm\_clean、8mm\_clean、dlt\_clean、hcart\_clean

- h *EMM\_server* | *volume\_database\_host*  
このオプションは、**NetBackup Enterprise Server** だけに適用されます。  
このオプションでは、ボリュームについての情報を格納する **Enterprise Media Manager** データベースホストの名前を指定します。ホストを指定しない場合、デフォルトで構成済み **EMM** サーバーが使用されます。
- verbose  
このオプションを指定すると、詳細モードが選択されます。
- b *barcode*  
このオプションでは、ボリュームに付けるバーコードを指定します。
- rt *robot\_type*  
このオプションでは、ボリュームが位置するロボットのロボット形式を指定します。  
**NetBackup Enterprise Server** で有効なロボット形式は、次のとおりです。  
**none、acs、tl4、tl8、tld、tlh、tln**  
**NetBackup Server** で有効なロボット形式は、次のとおりです。  
**none、tl4、tl8、tld**
- rn *robot\_number*  
このオプションでは、ボリュームが位置する robot の一意の論理識別番号を指定します。
- rh *robot\_host*  
このオプションでは、ボリュームが位置するロボットを制御するホスト名を指定します。
- rcl *rob\_slot*  
このオプションでは、ボリュームが位置するロボット内のスロット番号を指定します。  
次の説明は、**NetBackup Enterprise Server** だけに適用されます。  
**Media Manager** の API ロボット形式のスロット情報を入力しないでください。これらのロボットのスロット場所は、ロボットソフトウェアによってトラッキングが行われます。
- p *pool\_number*  
このオプションでは、ボリュームが存在するボリュームプールのインデックスを指定します。vmpool -listall を実行して、特定のプール名のインデックスを確認できます。
- mm *max\_mounts*  
このオプションでは、ボリュームに対して実行可能なマウントの最大数を指定します。このオプションは、クリーニングメディア以外のメディアだけに使用されます。この制限を超えると、そのボリュームは読み込み操作の場合だけにマウントできます。

-n *cleanings*

このオプションでは、ボリュームの残りのクリーニング数を指定します。このオプションは、クリーニングメディアだけに使用されます。

-d "*media\_description*"

このオプションでは、ボリュームのメディアの説明を指定します。説明に空白が含まれる場合、二重引用符で囲む必要があります。

## 例

例 1 - NetBackup ボリュームプール内のボリューム **AJU244** を **llama** というホスト上の **EMM** データベースに追加します。**AJU244** のバーコードが付けられたこのボリュームは、**TLD** ロボット 1 のスロット 2 に存在します。書き込み操作の場合、このボリュームは最大で **1000** 回マウントされます。

次の説明は、NetBackup サーバーにのみ適用されます。

マスターサーバーだけが存在するため、**-h** オプションは必要ありません。

---

**メモ:** このコマンドは通常、1 行で入力します。

---

```
vmadd -m AJU244 -mt dlt -h llama -b AJU244 -rt tld -rn 1 -rh llama
-rc1 2 -p 1 -mm 1000 -d "vmadd example"
```

## 注意事項

オプションパラメータで指定された検証だけが行われます。

## 関連項目

p.776 の [vmchange](#) を参照してください。

p.788 の [vmdelete](#) を参照してください。

p.799 の [vmpool](#) を参照してください。

p.802 の [vmquery](#) を参照してください。

# vmadm

vmadm – 文字ベースのメディア管理ユーティリティの実行

## 概要

```
vmadm [-t]
```

The directory path to this command is /usr/opensv/volmgr/bin/

## 機能説明

このコマンドは UNIX システムでのみ動作します。

vmadm を使用すると、ボリューム、ボリュームプールおよびバーコード規則を管理したり、**Media Manager Volume** デーモン (vmd) によって制御されるロボットのインベントリを実行することができます。このユーティリティを実行するには、スーパーユーザー権限が必要です。

このユーティリティには文字ベースのユーザーインターフェースが含まれ、すべての端末から使用できます。このユーティリティを実行すると、管理者に対して、実行可能な操作のメニューが表示されます。

また、vmadm からは tpconfig ユーティリティも起動できます。

## オプション

-t このオプションを指定すると、**Media Manager Volume** デーモンが停止されます。

## エラー

vmd が実行されていない場合、ほぼすべての vmadm 操作は正常に実行されず、次のメッセージが表示されます。

```
unable to validate server: cannot connect to vmd (70)
```

問題が解消されない場合、デバッグについて説明する「vmd」を参照してください。

## ファイル

/usr/opensv/volmgr/help/vmADM\* (ヘルプファイル)

## 関連項目

p.465 の [ltid](#) を参照してください。

p.720 の [tpconfig](#) を参照してください。

p.785 の [vmd](#) を参照してください。

# vmchange

vmchange – EMM データベース内のメディア情報の変更

## 概要

```
vmchange [-h EMM_server | volume_database_host] -vg_res -rt robot_type
-rn robot_number -rh robot_control_host -v volume_group
vmchange [-h EMM_server | volume_database_host] -res -m media_id -mt
media_type -rt robot_type -rn robot_number -rh robot_control_host -v
volume_group -rc1 rob_slot
vmchange [-h EMM_server | volume_database_host] -exp date -m media_id
vmchange [-h EMM_server | volume_database_host] -barcode barcode -m
media_id [-rt robot_type]
vmchange [-h EMM_server | volume_database_host] -m media_id -vltcid
vault_container_id
vmchange [-h EMM_server | volume_database_host] -barcode barcode
-vltcid vault_container_id
vmchange [-h EMM_server | volume_database_host] -d "media_description"
-m media_id
vmchange [-h EMM_server | volume_database_host] -p pool_number -m
media_id
vmchange [-h EMM_server | volume_database_host] -maxmounts max_mounts
-m media_id
vmchange [-h EMM_server | volume_database_host] -clean cleanings left
-m media_id
vmchange [-h EMM_server | volume_database_host] -n num_mounts -m
media_id
vmchange [-h EMM_server | volume_database_host] -new_mt media_type
-m media_id
vmchange [-h EMM_server | volume_database_host] -new_rt robot_type
-m media_id -rn robot_number
vmchange [-h EMM_server | volume_database_host] -new_v volume_group
[-m media_id |{-b barcode -mt media_type -rt robot_type}]
vmchange [-h EMM_server | volume_database_host] -vltname vault_name
-m media_id
vmchange [-h EMM_server | volume_database_host] -vltsent date -m
media_id
vmchange [-h EMM_server | volume_database_host] -vltreturn date -m
media_id
```



```
vmchange [-h EMM_server | volume_database_host] -vltslot vault_slot
-m media_id
vmchange [-h EMM_server | volume_database_host] -vltsession
vault_session_id -m media_id
vmchange -api_eject -map map_id:mapid:...:mapid | any -w [-h
EMM_server | volume_database_host] -res -ml media_id:media_id:
...:media_id -rt robot_type -rn robot_number -rh robot_control_host
[-v volume_group]
vmchange -multi_eject -w [-h EMM_server | volume_database_host] -res
-ml media_id:media_id: ...:media_id -rt robot_type -verbose -rn
robot_number -rh robot_control_host
vmchange -multi_inject -w [-h EMM_server | volume_database_host] -res
-rt robot_type -verbose -rn robot_number -rh robot_control_host
vmchange [-h EMM_server | volume_database_host] -res -robot_info
-verbose -rn robot_number -rt robot_type -rh robot_control_host
UNIX システムでは、このコマンドのディレクトリパスは /usr/opensv/volmgr/bin/ です。
Windows システムでは、このコマンドのディレクトリパスは <install_path>%Volmgr%bin%
です。
```

## 機能説明

このコマンドを実行すると、Enterprise Media Manager データベース内のボリューム情報が変更されます。

このコマンドは、すべての認可済みユーザーが実行できます。

NetBackup による認可について詳しくは、『Symantec NetBackup セキュリティおよび暗号化ガイド UNIX、Windows および Linux』を参照してください。

## オプション

-h EMM\_server | volume\_database\_host

このオプションは、NetBackup Enterprise Server だけに適用されます。

このオプションでは、ボリュームについての情報を格納する Enterprise Media Manager データベースホストの名前を指定します。ホストを指定しない場合、デフォルトで構成済み EMM サーバーが使用されます。

-vg\_res

このオプションを指定すると、ボリュームグループの位置情報が変更されます。

-rt robot\_type

このオプションでは、ボリュームが位置するロボットのロボット形式を指定します。

NetBackup Enterprise Server で有効なロボット形式は、次のとおりです。

none、acs、tl4、tl8、tld、tlh、tln

NetBackup Server で有効なロボット形式は、次のとおりです。

none、tl4、tl8、tld

-rn *robot\_number*

このオプションでは、ボリウムが位置するロボットの一意の論理識別番号を指定します。

-rh *robot\_control\_host*

このオプションでは、ボリウムが位置するロボットを制御するホスト名を指定します。

-v *volume\_group*

ボリウムグループは、物理的に同じ場所に存在するボリウムセットを識別する論理グループです。

-res

このオプションを指定すると、ボリウムの位置情報が変更されます。

-m *media\_id*

このオプションでは、変更するボリウムのメディア ID を指定します。

-mt *media\_type*

このオプションでは、変更するボリウムのメディア形式を指定します。

NetBackup Enterprise Server で有効なメディア形式は、次のとおりです。

4mm、8mm、8mm2、8mm3、dlt、dlt2、dlt3、dtf、hcart、hcart2、hcart3、qcart、  
4mm\_clean、8mm\_clean、8mm2\_clean、8mm3\_clean、dlt\_clean、dlt2\_clean、  
dlt3\_clean、dtf\_clean、hcart\_clean、hcart2\_clean、hcart3\_clean

NetBackup Server で有効なメディア形式は、次のとおりです。

4mm、8mm、dlt、hcart、qcart、4mm\_clean、8mm\_clean、dlt\_clean、hcart\_clean

-rcl *rob\_slot*

このオプションでは、ボリウムが位置するロボットのスロット番号を指定します。

次の説明は、NetBackup Enterprise Server だけに適用されます。

API ロボット形式のスロット情報を入力しないでください。これらのロボットのスロット場所は、ロボットソフトウェアによってトラッキングが行われます。

-exp *date*

このオプションでは、ボリウムの有効期限を指定します。

NetBackup コマンドの日時の値に求められる形式は、使用しているロケールによって異なります。/user/opensv/msg/.conf ファイル (UNIX) と

install\_path\VERITAS\msg\LC.CONF ファイル (Windows) はそれぞれのサポート対象ロケールの日時形式などの情報を含んでいます。これらのファイルには、サ

ポートされているロケールおよび書式のリストを追加および変更するための、具体的な方法が含まれています。

詳しくは、『Symantec NetBackup 管理者ガイド Vol. 2』の NetBackup インストールのロケールの指定に関する項を参照してください。

`-barcode barcode`

このオプションでは、ボリュームに付けるバーコードを指定します。

`-d "media_description"`

このオプションでは、ボリュームのメディアの説明を指定します。説明に空白が含まれる場合、二重引用符で囲む必要があります。

`-p pool_number`

このオプションでは、ボリュームが存在するボリュームプールのインデックスを指定します。このプールインデックスは、`vmpool -listall` を実行して取得できます。

`-maxmounts max_mounts`

このオプションでは、ボリュームに対して実行可能なマウントの最大数を指定します。このオプションは、クリーニングメディア以外のメディアだけに使用されます。

`-n num_mounts`

クリーニングメディア以外の場合、`num_mounts` に、そのボリュームがマウントされた回数を指定します。

`-clean cleanings_left`

クリーニングメディアの場合、`cleanings_left` に、そのクリーニングテープの残りのクリーニング数を指定します。

`-new_mt media_type`

このオプションでは、変更するボリュームのメディア形式を指定します。メディア形式のリストについては、`-mt` オプションを参照してください。

`-new_rt robot_type`

このオプションでは、ロボット形式を指定します。ロボット形式のリストについては、`-rt` オプションを参照してください。

`-new_v volume_group`

ボリュームグループは、物理的に同じ場所に存在するボリュームセットを識別する論理グループです。

`-b barcode`

このオプションでは、ボリュームに付けるバーコードを指定します。

`-vltcid vault_container_id`

このオプションでは、ボリュームを格納するコンテナを変更します。`vault_container_id` (29 文字以内の英数字の文字列) では、ボリュームを格納する新しいコンテナを指定します。`-m` または `-barcode` オプションを使用して、ボリュームを指定します。

`-vltname vault_name`

このオプションでは、ボリュームを取り出したロボットに構成される論理 **Vault** 名を指定します。

`-vltsent date`

このオプションでは、ボリュームが保管場所に送信された日付を指定します。

**date** の形式は、ユーザーのロケール設定によって異なります。**C** のロケールの場合、**date** の形式は次のとおりです。

**mm/dd/yyyy [hh[:mm[:ss]]]**

`-vltreturn date`

このオプションでは、**Vault** 担当者からボリュームの返却が要求された日時を指定します。カタログバックアップボリュームの場合、日付は **Vault** ベンダーからボリュームの返却が要求される予定の日付になります。

**NetBackup** コマンドの日時の値に求められる形式は、使用しているロケールによって異なります。/user/openv/msg/.conf ファイル (**UNIX**) と

install\_path\VERITAS\msg\LC.CONF ファイル (**Windows**) はそれぞれのサポート対象ロケールの日時形式などの情報を含んでいます。これらのファイルには、サポートされているロケールおよび書式のリストを追加および変更するための、具体的な方法が含まれています。

詳しくは、『**Symantec NetBackup 管理者ガイド Vol. 2**』の **NetBackup** インストールのロケールの指定に関する項を参照してください。

`-vltslot vault_slot`

このオプションでは、目的のボリュームが占有している **Vault** ベンダーのスロット番号を指定します。

`-vltsession vault_session_id`

このオプションでは、メディアが取り出された **Vault** セッションの **ID** を指定します。

`-api_eject`

このオプションを指定すると、指定したロボットから **ACS**、**TLH** または **TLM** ボリュームが取り出されます。**ACS** および **TLM** ロボットの場合、取り出しのタイムアウト期間は **1** 週間です。**TLH** ロボットの場合、ロボットからメディアを取り外す期間に制限はありません。

`-map map_id:mapid: ...:mapid | any`

**ACS** ロボットの場合、このオプションでは、取り出し操作に使用する複数のメディアアクセスポート (**MAP**) を指定できます。**map\_id** (**CAP ID** と呼ばれる) は、ロボット内のすべての **MAP** を指定する **all** または **ALL** とすることができます。また、**ACS,LSM,CAP** 形式のコロンで区切られた **MAP ID** のリストとすることもできます。**-map** オプションを指定すると、最も近い **MAP** アルゴリズムを使用して、指定した **MAP** にメディアが取り出されます。アルゴリズムでは、**LSM** が一直線に接続されていることが前提となります。

TLM ロボットの場合、DAS または SDLC サーバー上の各メディア形式用に構成された MAP に取り出すには、`map_id` に [ANY] を指定します。

TLH ロボットの場合、ライブラリのハードウェア構成に応じて、[standard] MAP または [BULK] MAP を選択します。

-w

このオプションを指定すると、待機フラグが設定されます。このフラグは、取り出しコマンド、複数取り出しコマンドおよび複数取り込みコマンドとともに使用する必要があります。

-verbose

このオプションを指定すると、詳細モードが選択されます。

-ml *media\_id:media\_id: ...:media\_id*

このオプションでは、ロボットから取り出されるメディアのリストを指定します。

-multi\_eject

このオプションを指定すると、ロボットライブラリのメディアアクセスポートを使用して複数のボリュームが取り出されます。このオプションは TLD ロボット形式および TL8 ロボット形式だけ有効です。取り出しのタイムアウト期間は 30 分です。

-multi\_inject

このオプションを指定すると、ロボットライブラリのメディアアクセスポートを使用して複数のボリュームが取り込まれます。このオプションは TLD ロボット形式および TL8 ロボット形式だけ有効です。この操作の後、`vmupdate` コマンドを実行して、EMM データベースを更新する必要があります。

-robot\_info

ロボットライブラリについての情報を取り込みます。このオプションは TLD ロボット形式および TL8 ロボット形式だけ有効です。

- フィールド 1 = スロット数
- フィールド 2 = メールスロット数
- フィールド 3 = ドライブ数
- フィールド 4 = ロボットの形式とサブ形式 (`tld -> 0` など)
- フィールド 5 = バーコードリーダー。バーコードリーダーがロボットデバイスに存在する場合には、ロボットがバーコードリーダーを備えていることを示すメッセージがこのフィールドに表示される
- フィールド 6 = 開始スロット
- フィールド 7 = 終了スロット
- フィールド 8 = 一次照会文字列 (HP~~~~~C6240-8000~~~~~2912 など)

## 警告

いくつかのロボットライブラリでは、メディアアクセスポートに異なる機能が実装されています。たとえば、一部のライブラリに実装されているフロントパネルからの取り込みおよび取り出し機能は、**NetBackup**でのメディアアクセスポートの使用と競合します(たとえば、範囲のロジックのウシガエル)。また、メディアアクセスポートの使用時に、フロントパネルでの対話的な操作を必要とするライブラリもあります(**Spectra Logic Gator**など)。

取り出しオプションを使用しているときに、メディアが取り外されず、タイムアウト状態が発生した場合、メディアはロボットに戻されます(取り込まれます)。この場合、ロボットのインベントリを実行し、ロボットに戻されたメディアを取り出します。

ロボットライブラリの操作マニュアルを参照して、メディアアクセスポートの機能について理解してください。前述のようなライブラリは、適切に処理されない場合、**NetBackup**の取り込み機能や取り出し機能との完全な互換性が得られない場合があります。また、互換性がないライブラリが存在する場合があります。また、**NetBackup**では、これらのオプションパラメータで指定された検証が行われます。

## 例

例 1 - ボリューム **AJS100** の有効期限日を変更します。

```
vmchange -exp 12/31/12 23:59:59 -m AJS100
```

例 2 - ボリューム **AJS999** を含むプールをプール 1 (**NetBackup** プール) に変更します。

```
vmchange -p 1 -m AJS999
```

例 3 - ボリューム abc123 およびボリューム abc124 を **ACS** ロボット番号 **700** から取り出します。これらの 2 つのボリュームの位置情報は、スタンドアロンに変更されます。

```
vmchange -res -api_eject -w -ml abc123:abc124 -rt acs -rn 700 -rh
verbena -map 0,0,0
```

例 4 - ボリューム **ABC123** のコンテナ ID を変更します。

```
vmchange -vltcid Container001 -m ABC123
```

## 関連項目

- p.771 の [vmadd](#) を参照してください。
- p.788 の [vmdelete](#) を参照してください。
- p.799 の [vmpool](#) を参照してください。
- p.802 の [vmquery](#) を参照してください。

# vmcheckxxx

vmcheckxxx – ロボットライブラリのメディアの内容のレポート

## 概要

```
vmcheckxxx -rt robot_type -rn robot_number [-rh robot_host] [-h
EMM_server | volume_database_host] [[-if inventory_filter_value] [-if
inventory_filter_value] ...] [-full] [-list]
```

UNIX システムでは、このコマンドのディレクトリパスは /usr/openv/volmgr/bin/ です。

Windows システムでは、このコマンドのディレクトリパスは <install\_path>%Volmgr%bin% です。

## 機能説明

ロボットライブラリのメディアの内容がレポートされ、必要に応じてその内容がボリューム構成と比較されます。

オプションを指定しない場合、ロボットのメディアの内容およびボリューム構成が、検出されたすべての不一致のリストとともに表示されます。

このコマンドは、すべての認可済みユーザーが実行できます。

NetBackup による認可については、『Symantec NetBackup セキュリティおよび暗号化ガイド UNIX、Windows および Linux』を参照してください。

## オプション

-rt robot\_type

このオプションでは、インベントリを実行するロボットのロボット形式を指定します。

NetBackup Enterprise Server で有効なロボット形式は、次のとおりです。

none、acs、tl4、tl8、tld、tlh、tln

NetBackup サーバーで有効なロボット形式は、次のとおりです。

none、tl4、tl8、tld

-rn robot\_number

このオプションでは、インベントリを実行する一意の、ロボットの論理識別番号を指定します。

-rh robot\_host

このオプションでは、ロボットを制御するホスト名を指定します。ホストを指定しない場合、このコマンドが実行されたホストが想定されます。

`-h EMM_server | volume_database_host`

このオプションは、**NetBackup Enterprise Server** だけに適用されます。

このオプションでは、ロボット内のボリュームについての情報を格納する **Enterprise Media Manager** データベースホストの名前を指定します。ホストを指定しない場合、デフォルトで構成済み EMM サーバーが使用されます。

`-if inventory_filter_value`

このオプションは、**NetBackup Enterprise Server** だけに適用されます。

このオプションでは、インベントリフィルタ値を指定します。`-if` オプションは、複数指定できます。インベントリフィルタ値は、**ACS** スクラッチプール ID または **TLH** ボリュームカテゴリです。

`-if` オプションと `-full` オプションは、同時に指定することはできません。

`-full`

このオプションを指定すると、完全なインベントリが実行されます。`-full` オプションと `-if` オプションは、同時に指定することはできません。

`-list`

このオプションを指定すると、ロボットの内容が表示されます。

## 注意事項

オプションパラメータで指定された検証だけが行われます。

## 例

**例 1 - server2** というホスト上の **TLD** ロボット **1** のメディアの内容およびそのロボットのボリューム構成をリスト表示します。また、検出されたすべての不一致のリストも表示されます。

```
vmcheckxxx -rt tld -rn 1 -rh server2
```

**例 2 - vmcheckxxx** コマンドが実行されたホストに接続されている **TLH** ロボット **2** の内容をリスト表示します。

```
vmcheckxxx -rt tlh -rn 2 -list
```

## 関連項目

p.810 の [vmupdate](#) を参照してください。



# vmd

vmd – EMM デーモンの実行

## 概要

vmd [-v]

The directory path to this command is /usr/opensv/volmgr/bin/

## 機能説明

このコマンドは UNIX システムでのみ動作します。

ltid を実行するには、ボリュームを使用する前にそのボリュームを EMM データベースに定義する必要はありません。

次の説明は、NetBackup Enterprise Server だけに適用されます。

ボリュームが定義され、そのスロット情報 (非 API ロボットの場合) が EMM データベースに入力されるまで、ロボットデバイスへのボリュームのマウントは自動的に行われません。

このデーモンでは、EMM データベースとの直接インターフェースが提供され、EMM データベースの管理操作が簡単になります。また、Media Manager のグラフィカルユーティリティ、メニュー方式ユーティリティおよびコマンドラインユーティリティも提供されます。

また、vmd は、Media Manager デバイスのリモート管理、およびボリュームプール、バーコード規則およびデバイスデータベースの管理にも使用できます。

vmd のインターネットサービスポート番号が /etc/services に含まれている必要があります。NIS (ネットワーク情報サービス) を使用する場合、そのホストの /etc/services ファイル内のエントリを、サービス用のマスター NIS サーバーデータベース内に挿入します。この services ファイルで使用するサービスポート番号を上書きするに

は、/usr/opensv/volmgr/database/ports/vmd ファイルの内容を vmd のサービスポート番号を示す 1 行にして作成します。デフォルトのサービスポート番号は 13701 です。

次の説明は、NetBackup Enterprise Server だけに適用されます。

## オプション

-v このオプションを指定すると、debug/daemon ディレクトリを作成した場合、詳細なデバッグ情報がログに書き込まれます (「エラー」を参照)。このオプションは、問題が発生した場合またはシマンテック社のサポートによって要求された場合だけに指定します。

## エラー

実行中の vmd のコピーが存在する場合、vmd によって syslogd を使用してエラーメッセージがログに書き込まれます。

vmd がバインドされているポートが使用中である場合、このコマンドによって syslogd を使用してエラーメッセージがログに書き込まれます。このメッセージが表示された場合、「機能説明」に記載されている方法を使用して **services** ファイルを無視させることが必要な場合があります。

vmd をデバッグモードで実行するには、次の手順を実行します。

- vmd を起動する前に、次のディレクトリを作成します。

```
/usr/opensv/volmgr/debug/daemon
```

vmd が実行中である場合、それを停止し、前述のディレクトリの作成後に再起動します。

- 次のとおり vmd を詳細モードで起動するか、または VERBOSE エントリを `vm.conf` に挿入します。

```
/usr/opensv/volmgr/bin/vmd -v
```

- `/usr/opensv/volmgr/debug/daemon` 内のログメッセージを確認します。

問題が解消されない場合、ディレクトリ `/usr/opensv/volmgr/debug/reqlib` を作成すると、要求元についての詳細なデバッグ情報を取得できます。

1 日につき 1 つのログが各デバッグディレクトリに作成されます。これらのログは、`vm.conf` で `DAYS_TO_KEEP_LOGS` エントリを指定しないかぎり、そのデバッグディレクトリが移動または削除されるまで継続して作成されます。vmd の実行中は、デバッグディレクトリを削除しないでください。vmd のデバッグモードでの実行は、必要な場合にだけ行ってください。

## ファイル

```
/usr/opensv/volmgr/debug/daemon/*
/usr/opensv/volmgr/debug/reqlib/*
```

EMM データベース

## 関連項目

p.465 の [ltid](#) を参照してください。

p.771 の [vmadd](#) を参照してください。

p.774 の [vmadm](#) を参照してください。

p.776 の [vmchange](#) を参照してください。

p.788 の [vmdelete](#) を参照してください。

p.802 の [vmquery](#) を参照してください。

# vmdelete

vmdelete – EMM データベースからのボリュームの削除

## 概要

```
vmdelete [-h EMM_server | volume_database_host] [-m media_id | -v volume_group]
```

UNIX システムでは、このコマンドのディレクトリパスは /usr/openv/volmgr/bin/ です。

Windows システムでは、このコマンドのディレクトリパスは <install\_path>%Volmgr%bin% です。

## 機能説明

このコマンドを実行すると、ボリュームが Enterprise Media Manager データベースから削除されます。

このコマンドは、すべての認可済みユーザーが実行できます。

NetBackup による認可については、『Symantec NetBackup セキュリティおよび暗号化ガイド UNIX、Windows および Linux』を参照してください。

## オプション

```
-h EMM_server | volume_database_host
```

このオプションは、NetBackup Enterprise Server だけに適用されます。

このオプションでは、ボリュームについての情報を格納する Enterprise Media Manager データベースホストの名前を指定します。ホストを指定しない場合、デフォルトで構成済み EMM サーバーが使用されます。

```
-m media_id
```

このオプションでは、ボリュームデータベースから削除するボリュームのメディア ID を指定します。

```
-v volume_group
```

このオプションでは、削除するボリュームグループを指定します。そのグループ内のすべてのボリュームがボリュームデータベースから削除されます。

## 注意事項

オプションパラメータで指定された検証だけが行われます。

## 例

例 1 - 単一ボリュームを削除します。

```
vmdelete -m AJS144
```

例 2 - DELETE\_ME というボリュームグループのすべてのボリュームを削除します。

```
vmdelete -v DELETE_ME
```

## 関連項目

p.771 の [vmadd](#) を参照してください。

p.776 の [vmchange](#) を参照してください。

p.802 の [vmquery](#) を参照してください。

# vmopr cmd

vmopr cmd - ドライブに対するオペレータ機能の実行

## 概要

```
vmopr cmd -devmon [pr | ds | hs] [-h device_host] default_operation
vmopr cmd -dp [pr | ds | ad] [-h device_host]
vmopr cmd -down | -up | -upopr | -reset drive_index [-h device_host]
vmopr cmd -downbyname | -upbyname | -upoprbyname | -path drive_path
[-nh ndmp_hostname] [-h device_host]
vmopr cmd -resetbyname drive_name [-h device_host]
vmopr cmd -assign drive_index mount_request_id [-h device_host]
vmopr cmd -assignbyname drive_name mount_request_id [-h device_host]
vmopr cmd -deny | -resubmit mount_request_index [-h device_host]
vmopr cmd -comment drive_index ["comment"] [-h device_host]
vmopr cmd -commentbyname drive_name ["comment"] [-h device_host]
vmopr cmd -crawlreleasebyname drive_name [-h EMM_Server]
vmopr cmd [-activate_host | -deactivate_host] [-h device_host]
vmopr cmd -hoststatus [-h device_host]
```

UNIX システムでは、このコマンドのディレクトリパスは /usr/opensv/volmgr/bin/ です。  
Windows システムでは、このコマンドのディレクトリパスは <install\_path>%Volmgr%bin% です。

## 機能説明

このコマンドを実行すると、ドライブに対してオペレータ機能を実行できます。-h オプションは必須ではありませんが、他のオプションのいずれか 1 つと合わせて選択する必要があります。

NDMP 以外の Windows デバイスパスは、{p,b,t,l} として表示されます。p はポート、b はバス、t はターゲット、l は LUN を示します。-path 引数を指定して vmopr cmd を実行する場合は、パスを {p,b,t,l} 形式で指定します。

このコマンドは、すべての認可済みユーザーが実行できます。

NetBackup による認可について詳しくは、『Symantec NetBackup セキュリティおよび暗号化ガイド UNIX、Windows および Linux』を参照してください。

## オプション

```
-assign drive_index mount_request_id
```

このオプションを指定すると、ドライブがマウント要求に割り当てられます。

`-assignbyname drive_name mount_request_id`

このオプションは、ドライブがドライブインデックスではなくドライブ名で指定される点を除き、`-assign` オプションと同様です。

次の説明は、**NetBackup** サーバーにのみ適用されます。

デバイスホストは、**Media Manager** がインストールされているホストです。

`-comment drive_index ["comment"]`

このオプションでは、ドライブについてのコメントを指定します。コメントに空白が含まれる場合、二重引用符で囲む必要があります。**comment** を指定しない場合、ドライブについてのすべての既存のコメントが削除されます。

`-commentbyname drive_name ["comment"]`

このオプションは、ドライブがドライブインデックスではなくドライブ名で指定される点を除き、`-comment` オプションと同様です。

`-crawlreleasebyname drive_name`

このオプションは、**NetBackup Enterprise Server** だけに適用されます。

このオプションを指定すると、このドライブを使用するように登録されているすべてのホストから強制的に **SCSI** 解放コマンドがドライブに発行されます。**SSO** デバイスアロケータ (**DA** ホスト) であるホスト上でこのオプションを発行するか、または `-h` オプションを使用して **DA** ホストを指定します。

---

**注意:** このオプションは、デバイスモニターに **PEND** 状態が表示された後に使用してください。また、このオプションはバックアップ中には使用しないでください。

---

`-down | -up | -upopr | -reset drive_index`

`-down` を指定すると、ドライブが割り当てられていない場合、そのドライブが停止状態に設定されます。

`-up` を指定すると、ドライブが自動ボリューム認識 (**AVR**) モードで起動 (**UP**) 位置に設定されます。これは、すべてのドライブで通常使用されるモードです。

`-upopr` を指定すると、ドライブがオペレータ (**OPR**) モードで起動 (**UP**) 位置に設定されます。このモードは通常、機密保護の目的だけに使用されます。ロボット内のドライブの場合、このロボットデーモンまたはロボットプロセスの実行中は、**OPR** および **AVR** が同様に処理されます。

`-reset` を指定すると、指定したドライブがリセットされます。また、ドライブがアンロードされます (**EMM** データベース内で割り当てられていない場合)。アンロード機能を使用して、ドライブ内で停止しているメディアをアンロードすることができます。

`-downbyname | -upbyname | -upoprbyname | -resetbyname drive_name`

これらのオプションは、ドライブがドライブインデックスではなくドライブ名で指定される点を除き、それぞれ `-down`、`-up`、`-upopr` および `-reset` と同様です。

- `-deny | -resubmit mount_request_id`  
-deny を指定すると、マウント要求の結果としてエラーメッセージがユーザーに戻されません。  
-resubmit を指定すると、マウント要求が再送信されます。保留中の操作メッセージがロボットに関係している場合、その問題を解消し、そのメッセージの原因となった要求を再送信する必要があります。
- `-dp [pr | ds | ad]`  
次の任意の表示パラメータのどれも指定しない場合、すべての情報が表示されます。  
pr を指定すると、保留中のすべての要求が表示されます。  
ds を指定すると、Media Manager に制御されているドライブの状態が表示されます。  
ad を指定すると、Media Manager に制御されているドライブ状態の追加情報が表示されます。
- `- devmon [pr | ds | hs] default_operation`  
-dp コマンドを指定すると、特定のドライブ名に構成されているすべてのドライブパスが表示されます。次の任意の表示パラメータのどれも指定しない場合、すべての情報が表示されます。  
pr を指定すると、保留中のすべての要求が表示されます。  
ds を指定すると、Media Manager に制御されているドライブの状態が表示されます。  
hs を指定すると、Media Manager に制御されているドライブ状態の追加情報が表示されます。
- `-h EMM_Server | device host`  
このオプションでは、ドライブが接続および構成される Enterprise Media Manager データベースのホスト名を指定します。ホストオプションを指定しない場合、このコマンドが実行されたデバイスホストがデフォルトで設定されます。  
**device host** は、デバイスが接続および構成されるホストです。
- `-hoststatus`  
このオプションを指定すると、ホストの現在の状態が表示されます。表示される状態は次のとおりです。  
[無効 (DEACTIVATED)] - このホスト上では、新しいジョブを開始できません。  
[利用可 (ACTIVE)] - このメディアサーバーは、任意のジョブで使用できます。  
[ディスク利用可 (ACTIVE-DISK)] - このメディアサーバーは、ディスクストレージユニットのジョブにだけ使用できます。



[テープ利用可 (ACTIVE-TAPE)] - このメディアサーバーは、テープストレージユニットのジョブにだけ使用できます。

[オフライン (OFFLINE)] - このメディアサーバーは、テープストレージユニットまたはディスクストレージユニットのいずれのジョブにも利用できません。メディアサーバーがテープまたはディスクに対して有効ではない場合、またはマスターサーバーがメディアサーバーと通信できない場合に、この状態が発生します。

-nh *ndmp\_hostname*

**NDMP** サーバーのホスト名を指定します。

-activate\_host

このオプションを指定すると、ホストはジョブを実行できます。

-deactivate\_host

このオプションを指定すると、ホストはジョブを実行できません。

-path *drivepath*

このオプションでは、ドライブのシステム名を指定します。たとえば、`/dev/rmt/0cbn` と指定します。

-setpath *drivepath drive\_name ndmp\_hostname*

このオプションでは、**NDMP** ホストのシステム名およびドライブ名を指定します。

## 注意事項

オプションパラメータで指定された検証だけが行われます。

`tpconfig -d`、`tpconfig -l`、`vmopr cmd` では、長いドライブ名が切り捨てられる場合があります。完全なドライブ名を取得するには、`tpconfig -dl` を使用します。

`vmopr cmd` では、ドライブ名が 20 文字で切り捨てられる場合があります。

## 例

例 1 - ドライブインデックスが 0 (ゼロ) のドライブを起動状態に設定します。

```
vmopr cmd -up 0
```

例 2 - すべてのドライブのドライブの状態を表示します。

```
vmopr cmd -d ds
```

例 3 - 保留中の要求および **crab** というデバイスホスト上のすべてのドライブの状態を表示します。

```
vmopr cmd -h crab
```

例 4 - **NDMP** 以外の **Windows** デバイスパスの表示方法を示します。

# vmopr cmd

HOST STATUS

Host Name	Version	Host Status
hamex	600000	ACTIVE

PENDING REQUESTS

<NONE>

DRIVE STATUS

Drive Name	Label	Ready	RecMID	ExtMID	Wr.Enbl.	Type
Host						Status
IBM.ULTRIUM-TD2.001	No	No			No	hcart2
hamex			{3,1,0,2}			TLD
hamex			{3,1,1,2}			TLD
IBM.ULTRIUM-TD1.004	No	No			No	hcart
hamex			{3,1,0,7}			TLD
hamex			{3,1,1,7}			TLD
IBM.ULTRIUM-TD2.005	Yes	Yes	J945L2		Yes	hcart2
hamex			{3,1,2,1}			TLD
IBM.ULTRIUM-TD2.006	No	No			No	hcart2
hamex			{3,1,2,2}			TLD

# vmopr cmd -downbyname IBM.ULTRIUM-TD1.004 -path {3,1,0,7}

# vmphyinv

vmphyinv - ロボットライブラリまたはスタンドアロンドライブのメディアの内容に対するインベントリの実行とボリュームデータベースの更新

## 概要

```
vmphyinv [-rn robot_number] [-rh robot_control_host] [-h
device_host] [-pn pool_name] [-v volume_group] [-rc1 robot_coord1
-number number] [-drv_cnt count] [-non_interactive] [-mount_timeout
timeout] [-priority number] [-verbose]
vmphyinv [-rn robot_number] [-rh robot_control_host] [-h device_host]
-ml media_id:media_id:...:media_id [-drv_cnt count] [-non_interactive]
[-mount_timeout timeout] [-priority number] [-verbose]
vmphyinv [-rn robot_number] [-rh robot_control_host] [-h device_host]
[{ { [-slot_range from to] [-slot_list s1:s2:...:sN] } -d density
} { { [-slot_range from to] [-slot_list s1:s2:...:sN] } -d density
}] [-drv_cnt count] [-non_interactive] [-mount_timeout timeout]
[-priority number] [-verbose]
vmphyinv {-u drive_number | -n drive_name} [-h device_host]
[-non_interactive] [-mount_timeout timeout] [-verbose]
UNIX システムでは、このコマンドのディレクトリパスは /usr/opensv/volmgr/bin/ です。
Windows システムでは、このコマンドのディレクトリパスは <install_path>%Volmgr%bin/
です。
```

## 機能説明

ロボットライブラリまたはスタンドアロンドライブのメディアの内容に対して物理インベントリを実行し、EMM データベースを更新します。vmphyinv では、テープヘッダー内の情報に基づいて、検索条件で指定された各メディアのマウント、テープヘッダーの読み込み、EMM データベースの更新が行われます。

このコマンドについて詳しくは、『Symantec NetBackup 管理者ガイド Vol. 1』を参照してください。

このコマンドは、すべての認可済みユーザーが実行できます。

NetBackup による認可について詳しくは、『Symantec NetBackup セキュリティおよび暗号化ガイド UNIX、Windows および Linux』を参照してください。

## オプション

- `-rn robot_number`  
このオプションでは、インベントリを実行するメディアの **Media Manager** ロボット番号を指定します。`robot_number` は、構成済みのドライブが存在するロボットに対応している必要があります。`vmpthyinv` により、各メディアのインベントリを実行します。`robot_number` のボリュームデータベースに、`robot_number` があります。
- `-rh robot_host`  
このオプションでは、ロボットを制御するホスト名を指定します。ホストを指定しない場合、このコマンドが実行されたホストが想定されます。
- `-h device_host`  
このオプションでは、デバイスホスト名を指定します。このオプションは、**Enterprise Media Manager** サーバー名を取得するために使用します。このオプションを指定しない場合、現在のホストを使用して **EMM** サーバー名が取得されます。
- `-pn pool_name`  
このオプションでは、**-rn** オプションで指定したロボットに対応する、インベントリを実行する必要があるボリュームのプール名を (大文字と小文字を区別して) 指定します。このオプションは、**-rn** オプションを指定した場合だけ有効です。
- `-priority number`  
デフォルトのジョブの優先度を上書きするインベントリジョブの新しい優先度を指定します。
- `-v volume_group`  
このオプションでは、**-rn** オプションで指定したロボットに対応する、インベントリを実行する必要があるボリュームのボリュームグループを指定します。このオプションは、**-rn** オプションを指定した場合だけ有効です。
- `-rc1 robot_coord1`  
このオプションでは、インベントリを実行する必要があるメディアの開始スロットを指定します。このオプションは、**-rn** オプションを指定した場合だけ有効です。
- `-number number`  
このオプションでは、インベントリを実行する必要があるスロット数 (`robot_coord1` から開始) を指定します。このオプションは、**-rn** および **-rc1** オプションを指定した場合だけ有効です。
- `-ml media_id1:media_id2: ... :media_id`  
このオプションでは、インベントリを実行する必要があるメディアのリストを指定します。このオプションは、**-rn** オプションを指定した場合だけ有効です。指定したメディア ID が、指定したロボットに属していない場合、そのメディアはスキップされます。

- `-slot_range from to`  
このオプションでは、インベントリを実行する必要があるスロットの範囲を指定します。空のスロットはスキップされます。
- `-slot_list s1:s2:...sN`  
このオプションでは、インベントリを実行する必要があるスロットのリストを指定します。空のスロットはスキップされます。
- `-d density`  
このオプションでは、メディアの密度を指定します。メディアの密度を指定し、スロットの範囲またはスロットのリストを指定してメディアのインベントリを実行する必要があります。
- `-u drive_number`  
このオプションでは、インベントリを実行する必要があるドライブのインデックスを指定します。ドライブにはメディアが含まれ、準備ができている必要があります。ドライブの番号は、管理コンソールの[メディアおよびデバイスの管理 (Media and Device Management)]から取得できます。
- `-n drive_name`  
このオプションでは、インベントリを実行する必要があるドライブ名を指定します。ドライブにはメディアが含まれ、準備ができている必要があります。ドライブの名前は、管理コンソールの[メディアおよびデバイスの管理 (Media and Device Management)]から取得できます。
- `-non_interactive`  
vmphyinvを実行すると、デフォルトでは、ボリュームデータベースおよびEMMデータベースの変更(必要な場合)前に推奨事項のリストが表示され、確認を求められます。このオプションを指定すると、確認を行わずに変更が適用されます。
- `-mount_timeout timeout`  
このオプションでは、マウントタイムアウト(秒単位)を指定します。指定した時間内にメディアがマウントされない場合、マウント要求は取り消されます。デフォルト値は15分です。
- `-drv_cnt count`  
このオプションでは、vmphyinvで同時に使用可能な最大ドライブ数を指定します。構成されているドライブの合計数およびこの値によって、vmphyinvで使用される実際のドライブ数が決定されます。vmphyinvで使用されるドライブ数は、指定したドライブ数と構成されているドライブの合計数のうちの小さい方です。デフォルトでは、すべてのドライブが使用されます。
- `-verbose`  
このオプションを指定すると、詳細モードが選択されます。このオプションを指定すると、より詳細な情報が表示されます。たとえば、この情報は、利用可能なドライブの

数、各テープの内容、メディアがカタログである場合のカタログの識別番号などで構成されます。

## 例

例 1 - ホスト **shark** に接続されているロボット 1 の EMM データベースを更新します。

```
vmphyinv -rn 1 -rh shark
```

例 2 - ホスト **whale** に接続されているロボット 7 の EMM データベースを更新します。プール名「**some\_pool**」に属しているメディアだけのインベントリが実行されます。

```
vmphyinv -rn 7 -rh whale -pn some_pool
```

例 3 - ホスト **dolphin** に接続されているロボット 3 の EMM データベースを更新します。メディア **A00001**、**A00002** および **A00003** だけのインベントリが実行されます。

```
vmphyinv -rn 3 -rh dolphin -ml A00001:A00002:A00003
```

例 4 - ホスト **phantom** に接続されている TLD 形式のロボット 2 の EMM データベースを更新します。スロット 3 からスロット 8 のメディアだけのインベントリが実行されます。

```
vmphyinv -rn 2 -rh phantom -slot_range 3 8 -d dlt
```

例 5 - ホスト **tigerfish** に接続しているスタンドアロンドライブ (ドライブインデックス 3) の EMM データベースを更新します。

```
vmphyinv -u 0 -h tigerfish
```

## 関連項目

p.810 の [vmupdate](#) を参照してください。

p.783 の [vmcheckxxx](#) を参照してください。

p.790 の [vmoprcmd](#) を参照してください。

# vmpool

vmpool – ボリュームプールの管理

## 概要

```
vmpool [-h EMM_server | volume_database_host] -list_all [-b|-bx] |
-list_scratch | -list_catalog_backup | -create -pn pool_name
-description description [-mpf mpf_max] | -update -pn pool_name
[-description description] [-reason "string"] [-mpf mpf_max] | -delete
pool_name | -set_scratch pool_name | -unset_scratch pool_name |
-set_catalog_backup pool_name | -unset_catalog_backup pool_name
```

UNIX システムでは、このコマンドのディレクトリパスは /usr/opensv/volmgr/bin/ です。  
Windows システムでは、このコマンドのディレクトリパスは <install\_path>%Volmgr%bin% です。

## 機能説明

このコマンドを実行すると、ボリュームプールを追加、変更、削除または表示できます。

-h オプションは必須ではありませんが、他の 7 つのオプション (-list\_scratch など) のいずれか 1 つと合わせて選択する必要があります。

このコマンドは、すべての認可済みユーザーが実行できます。

NetBackup による認可については、『Symantec NetBackup セキュリティおよび暗号化ガイド UNIX、Windows および Linux』を参照してください。

## オプション

-h *EMM\_server* | *volume\_database\_host*

このオプションは、NetBackup Enterprise Server だけに適用されます。

このオプションでは、ボリュームについての情報を格納する Enterprise Media Manager データベースホストの名前を指定します。ホストを指定しない場合、デフォルトで構成済み EMM サーバーが使用されます。

-list\_all [-b | -bx]

このオプションを指定すると、すべてのボリュームプールについての情報が表示されます。-b または -bx オプションを指定すると、ボリュームプール情報が簡易形式で出力されます。

-list\_scratch

このオプションを指定すると、すべての構成済みスクラッチプールおよびプールインデックス番号が表示されます。

`-list_catalog_backup`

このオプションを指定すると、カタログバックアップで使用されるボリュームプールが表示されます。

`-create -pn pool_name -description description -mpf mpf_max`

このオプションを指定すると、新しいボリュームプールが追加されます。必要に応じて、`-mpf`を実行して、このプール内で使用される、部分的に空きがない状態のメディアの数を制限できます。デフォルト値は **0** (ゼロ) です。これは部分的に空きがない状態のメディアの数が制限されないことを示します。

`-description` オプションでは、ボリュームプールの説明を指定します。説明に空白が含まれる場合、二重引用符で囲む必要があります。

`-update -pn pool_name [-description description] [-mpf mpf_max]`

このオプションを指定すると、既存のボリュームプールが変更されます。必要に応じて、`-mpf`を実行して、このプール内で使用される、部分的に空きがない状態のメディアの数を制限できます。デフォルト値は **0** (ゼロ) です。これは部分的に空きがない状態のメディアの数が制限されないことを示します。

`-description` オプションでは、ボリュームプールの説明を指定します。説明に空白が含まれる場合、二重引用符で囲む必要があります。

`-delete pool_name`

このオプションを指定すると、ボリュームプールが削除されます。

`-reason "string"`

このコマンド処理を実行する理由を示します。入力する理由の文字列は取得され、監査レポートに表示されます。この文字列は二重引用符 ("...") で囲み、また、**512**文字を超えないでください。最初の文字がハイフン文字 (-) であってはならず、また、文字列に単一引用符 (!) を含めることはできません。

`-set_scratch pool_name`

**pool\_name** が定義済みのボリュームプールである場合、**pool\_name** はスクラッチプールとなり、その説明は変更されません。NetBackup、DataStore、カタログバックアップおよび **None** ボリュームプールは、スクラッチプールに変更できません。

**pool\_name** が新しいボリュームプールである場合、スクラッチプールを説明として使用して新しいプールが作成されます。

一度に **1** つのスクラッチプールだけを定義できます。

`-unset_scratch pool_name`

このオプションを指定すると、スクラッチプールとしての **pool\_name** の定義が解除され、通常のボリュームプールとして定義されます。プールは、`vmpool -delete pool_name` を実行して削除できます。



```
-set_catalog_backup_pool pool_name
```

このオプションでは、**NetBackup** カタログをバックアップするボリュームプールを指定します。また、カタログポリシーに使用する専用カタログバックアッププールを作成することもできます。専用カタログボリュームプールを使用すると、カタログバックアップメディアと他のバックアップメディアが混在しないため、カタログのリストア中に必要なテープ数を減らすことができます。

```
-unset_catalog_backup_pool pool_name
```

このオプションを指定すると、**NetBackup** カタログのバックアップに使用しないボリュームプールが定義されます。

## 注意事項

オプションパラメータで指定された検証だけが行われます。

スクラッチプールとカタログバックアッププールの両方をプールに定義することはできません。

**-add** オプションと **-change** オプションは廃止されました。これらのオプションは引き続き使用可能ですが、`mpf` 値は設定できません。

## 例

**例 1 - llama** というホスト上に `MyPool` という新しいプールを追加します。このプールには、デフォルトホスト権限、ユーザー ID 権限およびグループ ID 権限があります。

```
vmpool -create -pn MyPool -description "description with spaces"
-mpf 17
```

**例 2 -** このコマンドが実行されたホスト上で構成済みのすべてのプールをリスト表示します。

```
vmpool -list_all -b
```

# vmquery

vmquery - EMM データベースの問い合わせ、またはボリュームの割り当ておよび割り当ての解除

## 概要

```
vmquery [-h EMM_server | volume_database_host, ... -h EMM_server |
-h volume_database_host, ... -h volume_database_host] [-vltcid
vault_container_id] [-b | -w | -W | l] -a | -m media_id | -v
volume_group | -rn robot_number | -rt robot_type | -mt media_type |
-p pool_number | -pn pool_name | -res robot_type robot_number
robot_control_host robot_coord1 robot_coord2 | -assignbyid media_id
media_type pool_number stat asg_time | -deassignbyid media_id
pool_number stat
```

UNIX システムでは、このコマンドのディレクトリパスは /usr/opensv/volmgr/bin/ です。

Windows システムでは、このコマンドのディレクトリパスは <install\_path>%Volmgr%bin% です。

## 機能説明

このコマンドを実行すると、EMM データベースへのボリューム情報の問い合わせが実行されます。-h、-b、-w、-W オプションは必須ではありませんが、他の 12 のオプションのいずれかと組み合わせて選択する必要があります。

-b または -w オプションは、その他 11 のオプションのいずれかと組み合わせて使用できますが、-b または -w オプションを同時に指定することはできません。

このコマンドは、すべての認可済みユーザーが実行できます。

NetBackup による認可については、『Symantec NetBackup セキュリティおよび暗号化ガイド UNIX、Windows および Linux』を参照してください。

## オプション

-h EMM\_Server | volume\_database\_host

このオプションは、NetBackup Enterprise Server だけに適用されます。

このオプションでは、ボリュームについての情報を格納する Enterprise Media Manager データベースホストの名前を指定します。ホストを指定しない場合、デフォルトで構成済み EMM サーバーが使用されます。

-b

このオプションを指定すると、ボリューム情報が簡易形式で出力されます。このオプションは他の 11 のオプションのいずれかと組み合わせて使用できます。

- w**  
このオプションを指定すると、ボリューム情報が詳細な形式で出力されます。このオプションでは、**-b** オプションでは表示されない追加情報が出力され、他の **11** のオプションのいずれかと組み合わせて使用できます。
- a**  
このオプションを指定すると、すべてのボリュームが表示されます。
- m media\_id**  
このオプションを指定すると、メディア ID によってボリュームが問い合わせられます。このメディア ID には、最大 **6** 文字の **ASCII** 文字を指定できます。
- v volume\_group**  
このオプションを指定すると、ボリュームグループによってボリュームが問い合わせられます。ボリュームグループは、物理的に同じ場所に存在するボリュームセットを識別する論理グループです。
- rn robot\_number**  
このオプションを指定すると、ロボット番号によってボリュームが問い合わせられます。ロボット番号とは、ボリュームが位置するロボットの一意の論理識別番号です。
- rt robot\_type**  
このオプションを指定すると、ボリュームが位置するロボット形式によって、そのボリュームを問い合わせることができます。
- NetBackup Enterprise Server** で有効なロボット形式は、次のとおりです。
- none、acs、tl4、tl8、tld、tlh、tlm**
- NetBackup Server** で有効なロボット形式は、次のとおりです。
- none、tl4、tl8、tld**
- mt media\_type**  
メディア形式によってボリュームを問い合わせます。
- NetBackup Enterprise Server** で有効なメディア形式は、次のとおりです。
- 4mm、8mm、8mm2、8mm3、dlt、dlt2、dlt3、dtf、hcart、hcart2、hcart3、qcart、4mm\_clean、8mm\_clean、8mm2\_clean、8mm3\_clean、dlt\_clean、dlt2\_clean、dlt3\_clean、dtf\_clean、hcart\_clean、hcart2\_clean、hcart3\_clean**
- NetBackup Server** で有効なメディア形式は、次のとおりです。
- 4mm、8mm、dlt、hcart、qcart、4mm\_clean、8mm\_clean、dlt\_clean、hcart\_clean**
- p pool\_number**  
このオプションを指定すると、プール番号によってボリュームが問い合わせられます。プール番号とは、ボリュームプールに挿入されたインデックスです。vmpool -listall を実行して、特定のプール名のインデックスを確認できます。

`-pn pool_name`

このオプションを指定すると、プール名によってボリュームが問い合わせられます。

`-res robot_type robot_number robot_host rob_slot`

このオプションを使用すると、位置情報によってボリュームが問い合わせられます。

`robot_host`

このオプションでは、ボリュームが位置するロボットを制御するホストを指定します。

`rob_slot`

このオプションでは、ボリュームが存在するロボット内のスロット番号 (ロボット座標 1) を指定します。

`-assignbyid media_id media_type pool_number stat asg_time`

このオプションを指定すると、メディア ID、プールおよび状態によってボリュームが割り当てられます。このオプションで割り当てることができるのは、**NetBackup** 以外のメディアだけです。**NetBackup** 以外のメディアには、**Veritas Storage Migrator**、**Veritas Data Lifecycle Manager** または **NetBackup** ポリシーフレームワーク外で作業しているユーザー (tpreq を直接使用しているユーザーなど) によって使用されるメディアが含まれます。

`-assignbyid` オプションは、状態 (*stat*) が 0 (通常の **NetBackup** テープ) または 1 (**NetBackup** カタログテープ) であるメディアと組み合わせて使用することはできません。

`stat`

状態は、**NetBackup** または **Storage Migrator** に割り当てられたボリュームだけに適用されます。指定可能な *stat* の値は、次のとおりです。

0 (ゼロ): ボリュームが **NetBackup** の通常のバックアップに割り当てられます。

1: ボリュームが **NetBackup** のカタログバックアップに割り当てられます。

2: ボリュームが **Storage Migrator** に割り当てられます。

3: ボリュームが **Storage Migrator for Microsoft Exchange** または **Storage Migrator for Windows 2000** に割り当てられます。

`asg_time`

このオプションは、**NetBackup** または **Storage Migrator** に割り当てられたボリュームだけに適用されます。

このオプションでは、ボリュームが割り当てられた時間を指定します。このオプションは、1970 年 1 月 1 日 00:00:00 UTC からの秒数です。*asg\_time* は、最初に `time()` 呼び出しを使用して作成された変数です。

`-deassignbyid media_id pool_number stat`

このオプションを指定すると、メディア ID、プールおよび状態によってボリュームの割り当てが解除されます。このオプションで割り当て解除できるのは、**NetBackup** 以外

のメディアだけです。NetBackup 以外のメディアには、Veritas Storage Migrator、Veritas Data Lifecycle Manager または NetBackup ポリシーフレームワーク外で作業しているユーザー (tpreq を直接使用しているユーザーなど) によって使用されるメディアが含まれます。NetBackup テープを割り当て解除するには、bpexpdate コマンドを実行します。

-deassignbyid オプションは、状態 (*stat*) が 0 (通常の NetBackup テープ) または 1 (NetBackup カタログテープ) であるメディアと組み合わせて使用することはできません。

-vltcid *vault\_container\_id*

このオプションを指定すると、コンテナに格納されているボリュームが一覧表示されます。変数 *vault\_container\_id* には、29 文字以内の英数字の文字列を指定できます。

-W

このオプションでは、ボリューム情報を解析可能な出力形式を指定します。

出力データ行は、次の状況の場合を除き、空白で区切られたフィールドです。

- ただし、[メディア ID (MediaID)]フィールドでは、6 文字になるまで文字列の末尾に空白が追加されます。
- [メディア形式 (MediaType)]フィールドでは、8 文字になるまで文字列の末尾に空白が追加されます。
- [説明 (Description)]フィールドでは、フィールド内に空白が含まれることがあります。
- Vault コンテナの場合、出力には、コンテナの説明の長さ ([説明長 (DescriptionLength)])、コンテナの説明およびコンテナ ID が示されます。出力ヘッダー行は、空白で区切られたフィールド名の行です。

## 注意事項

オプションパラメータで指定された検証だけが行われます。

## 例

例 1 - llama という名前のホスト上の EMM データベースにあるすべてのボリューム情報を、簡易形式でリスト表示します。

```
vmquery -h llama -b -a
```

例 2 - プール 1 (NetBackup) 内のボリューム A23456 を割り当てます。状態は 0 (ゼロ) に設定され、割り当て日時は 12/31/98 15:50:22 に設定されます。

```
vmquery -assignbyid A23456 8mm 1 0 915141022
```

例 3 - 状態が 0 (ゼロ) に設定された、プール 2 (Storage Migrator) 内のボリューム A23456 の割り当てを解除します。

```
vmquery -deassignbyid A23456 0
```

## 関連項目

- p.771 の [vmadd](#) を参照してください。
- p.776 の [vmchange](#) を参照してください。
- p.788 の [vmdelete](#) を参照してください。
- p.799 の [vmpool](#) を参照してください。

# vmrule

vmrule - バーコード規則の管理

## 概要

```
vmrule [-h EMM_server | volume_database_host] -listall [-b] | -add
barcode_tag media_type pool_name max_mounts "description" | -change
barcode_tag media_type pool_name max_mounts "description" | -delete
barcode_tag
```

UNIX システムでは、このコマンドのディレクトリパスは /usr/openv/volmgr/bin/ です。  
Windows システムでは、このコマンドのディレクトリパスは <install\_path>%Volmgr%bin% です。

## 機能説明

vmrule を実行すると、バーコード規則が追加、変更、削除または表示されます。-h オプションは必須ではありませんが、他のオプションのいずれかと合わせて選択する必要があります。

このコマンドは、すべての認可済みユーザーが実行できます。

NetBackup による認可については、『Symantec NetBackup セキュリティおよび暗号化ガイド UNIX、Windows および Linux』を参照してください。

## オプション

-h EMM\_server | volume\_database\_host

このオプションは、NetBackup Enterprise Server だけに適用されます。

このオプションでは、ロボット内のボリュームについての情報を格納する Enterprise Media Manager データベースホストの名前を指定します。ホストを指定しない場合、デフォルトで構成済み EMM サーバーが使用されます。

-listall [-b]

すべてのバーコード規則についての情報を表示します。-b オプションを指定すると、バーコード規則情報が簡易形式で表示されます。

次に、vmrule -list\_all [-b] コマンドの出力に含まれるフィールドについて説明します。

- フィールド 1 = メディアのバーコードタグ
- フィールド 2 = メディア形式
- フィールド 3 = メディアのボリュームプール

- フィールド 4 = 最大マウント数/クリーニング数。メディアのマウント最大数またはクリーニング数
- フィールド 5 = 規則の説明

`-add barcode_tag media_type pool_name max_mounts "description"`

このオプションを指定すると、新しいバーコード規則が追加されます。

`-change barcode_tag media_type pool_name max_mounts "description"`

このオプションを指定すると、バーコード規則が変更されます。

`-delete barcode_tag`

このオプションを指定すると、バーコード規則が削除されます。

`barcode_tag`

このオプションでは、バーコード規則を有効にするバーコード接頭辞を指定します。

`media_type`

このオプションでは、バーコード規則の属性であるボリュームのメディア形式を指定します。このオプションは、バーコード規則が使用されるかどうかに影響します。また、ロボットインベントリの更新を使用して追加されるボリュームのメディア形式にも影響します。

NetBackup Enterprise Server で有効なメディア形式は、次のとおりです。

4mm、8mm、8mm2、8mm3、dlt、dlt2、dlt3、dtf、hcart、hcart2、hcart3、qcart、4mm\_clean、8mm\_clean、8mm2\_clean、8mm3\_clean、dlt\_clean、dlt2\_clean、dlt3\_clean、dtf\_clean、hcart\_clean、hcart2\_clean、hcart3\_clean

NetBackup Server で有効なメディア形式は、次のとおりです。

4mm、8mm、dlt、hcart、qcart、4mm\_clean、8mm\_clean、dlt\_clean、hcart\_clean

`pool_name`

このオプションでは、ボリュームの追加先のプールを指定します。

`max_mounts`

ボリュームを追加するときに、そのボリュームで実行可能な最大マウント数を指定します。このオプションは、クリーニングメディア以外のメディアだけに使用されます。この制限を超えると、そのボリュームは読み込み操作の場合だけにマウントできます。

---

**メモ:** データベースには 99999 を超える数を格納できますが、vmrule では、値が 99999 を超える場合、`max_mounts` には 0 と表示されます。0 は、マウント数が無制限であることを示します。

---

`"description"`

このオプションでは、バーコード規則の説明を指定します。説明に空白が含まれる場合、二重引用符で囲む必要があります。



## 注意事項

オプションパラメータで指定された検証だけが行われます。

## 例

例 1 - ABC で始まるバーコードが付けられたすべてのテープは **NetBackup** プール内の **DLT** テープであると定義する規則を作成します。このテープは、書き込みのために最大 **100** 回マウントすることができます。また、このテープには説明が追加されます。

```
vmrule -add ABC dlt NetBackup 100 "DLT cleaning tape"
```

例 2 - すべてのバーコード規則の情報を表示します。

```
vmrule -list_all [-b]
ABC,DLT,NetBackup,100,DataStore DLT Rule
EFG,DLT,DataStore,0,DataStore DLT Rule
```

バーコードタグは **ABC** と **EFG** です。メディア形式は **DLT** です。ボリュームプールは **NetBackup** と **DataStore** です。最大マウント数またはクリーニング数は **100** と **0** です。規則の説明は **DataStore DLT** 規則です。

## 関連項目

p.810 の [vmupdate](#) を参照してください。

# vmupdate

vmupdate – ロボットライブラリのメディアの内容に対するインベントリの実行および EMM データベースの更新

## 概要

```
vmupdate -rt robot_type -rn robot_number [-rh robot_host] [-h
EMM_Server | volume_database_host] [[-if inventory_filter_value] [-if
inventory_filter_value] ...] [-full] [-recommend] [-interactive]
[-involgrp volume_group] [-outvolgrp volume_group] [-mt media_type]
[-p pool_name] [-use_barcode_rules] [-use_seed] [-mp media_id_prefix]
[-empty_map]
```

UNIX システムでは、このコマンドのディレクトリパスは /usr/opensv/volmgr/bin/ です。  
Windows システムでは、このコマンドのディレクトリパスは <install\_path>%Volmgr%bin% です。

## 機能説明

ロボットライブラリのメディアの内容のインベントリが実行され、Enterprise Media Manager データベースが更新されます。オプションを指定しない場合、ボリューム構成はロボットの内容と一致するように更新されます。

このコマンドは、すべての認可済みユーザーが実行できます。

NetBackup による認可について詳しくは、『Symantec NetBackup セキュリティおよび暗号化ガイド UNIX、Windows および Linux』を参照してください。

## オプション

-empty\_map

このオプションを指定すると、ロボットインベントリが開始される前にメディアアクセスポート (MAP) 内のボリュームがロボット内に移動されます。このオプションは、TL8、TLD または TLM ロボット形式だけ有効です。

-full

このオプションを指定すると、完全なインベントリが実行されます。-full オプションと -if オプションは、同時に指定することはできません。

-h EMM\_server | volume\_database\_host

このオプションは、NetBackup Enterprise Server だけに適用されます。

このオプションでは、ロボット内のボリュームについての情報を格納する Enterprise Media Manager データベースホストの名前を指定します。ホストを指定しない場合、デフォルトで構成済み EMM サーバーが使用されます。

- `-if inventory_filter_value`  
このオプションは、**NetBackup Enterprise Server** だけに適用されます。  
このオプションでは、インベントリフィルタ値を指定します。`-if` オプションは、複数指定できます。インベントリフィルタ値は、**ACS** スクラッチプール ID または **TLH** ボリュームカテゴリです。  
`-if` オプションと `-full` オプションは、同時に指定することはできません。
- `-interactive`  
このオプションを指定すると、ボリューム構成を更新する前にプロンプトが表示されません。
- `-involgrp volume_group`  
このオプションでは、ロボット内に移動されるメディアのボリュームグループを指定します。
- `-mp media_id_prefix`  
このオプションでは、バーコードを含まないメディア用に新しいメディア ID を生成するためのシードとして使用される接頭辞を指定します。有効なメディア ID 文字 (英数字、`[+]`、`[_]`、`[.]` および `[-]` (先頭の文字ではない場合)) のみを含み、1 から 5 文字の接頭辞を指定する必要があります。
- `-mt media_type`  
このオプションでは、ボリュームのメディア形式を指定します。  
**NetBackup Enterprise Server** で有効なメディア形式は、次のとおりです。  
4mm、8mm、8mm2、8mm3、dlt、dlt2、dlt3、dtf、hcart、hcart2、hcart3、qcart、4mm\_clean、8mm\_clean、8mm2\_clean、8mm3\_clean、dlt\_clean、dlt2\_clean、dlt3\_clean、dtf\_clean、hcart\_clean、hcart2\_clean、hcart3\_clean  
**NetBackup Server** で有効なメディア形式は、次のとおりです。  
4mm、8mm、dlt、hcart、qcart、4mm\_clean、8mm\_clean、dlt\_clean、hcart\_clean
- `-outvolgrp volume_group`  
このオプションでは、ロボット内から移動されるメディアのボリュームグループを指定します。
- `-p pool_name`  
このオプションでは、新しいメディアが割り当てられるボリュームプール名を指定します。
- `-recommend`  
このオプションを指定すると、ボリューム構成を更新するために必要な変更が表示されます。

- `-rh robot_host`  
このオプションでは、ロボットを制御するホスト名を指定します。ホストを指定しない場合、このコマンドが実行されたホストが想定されます。
- `-rn robot_number`  
このオプションでは、インベントリを実行する一意の、ロボットの論理識別番号を指定します。
- `-rt robot_type`  
このオプションでは、インベントリを実行するロボットのロボット形式を指定します。  
**NetBackup Enterprise Server** で有効なロボット形式は、次のとおりです。  
**none、acs、tl4、tl8、tld、tlh、tln**  
**NetBackup** サーバーで有効なロボット形式は、次のとおりです。  
**none、tl4、tl8、tld**
- `-use_barcode_rules`  
このオプションを指定すると、属性を新しいメディアに割り当てるためにバーコード規則が使用されます。
- `-use_seed`  
このオプションを指定すると、バーコードを含まないメディアのメディア ID が自動生成されます。

## 注意事項

オプションパラメータで指定された検証だけが行われます。

## 例

例 1 - *mymaster* という EMM サーバー上のボリューム構成を、ホスト *macris* に接続されている TLD ロボット 7 の内容と一致するように更新します。

```
vmupdate -rt tld -rn 7 -rh macris -h mymaster
```

## 関連項目

p.783 の [vmcheckxxx](#) を参照してください。

# vnetd

vnetd – NetBackup 通信デーモン

## 概要

vnetd -standalone | -terminate

UNIX システムでは、このコマンドのディレクトリパスは /usr/opensv/netbackup/bin/ です。

Windows システムでは、このコマンドのディレクトリパスは <install\_path>%NetBackup%bin% です。

## 機能説明

vnetd はファイアウォールに適するソケット接続の作成に使われる、NetBackup ネットワーク通信サービス (デーモン) です。このデーモンは、シングルポートへの接続時に実行されるすべてのソケット通信を可能にします。連続的に実行中のサービス (デーモン) として vnetd を開始します。inetd はもはや vnetd を起動しないことに注意してください。

クライアントに NetBackup をインストールするとき、通常、インストール処理では次の場所に vnetd のエントリが追加されます。

- UNIX クライアント: /etc/services
- Windows クライアントの場合: %SystemRoot%\system32\drivers\etc\services

## オプション

vnetd で利用できるオプションは次のとおりです。

-standalone

vnetd に連続的に動作するように指示します。-standalone は NetBackup を起動するデフォルト条件です。

-terminate

実行中の vnetd サービスを停止します。

## 関連項目

p.71 の [bpcd](#) を参照してください。

# vxlogcfg

vxlogcfg – 統合ログ機能の構成設定の変更

## 概要

```
vxlogcfg -a -p ProductID -c ConfigPath -n Names [-q]
vxlogcfg -a -p ProductID -o OriginatorID -s keyname=value [-q]
vxlogcfg -a -p ProductID -g LogSet -s keyname=value [-q]
vxlogcfg -d -p ProductID
vxlogcfg -l [-p ProductID [-o OriginatorID]] [-q]
vxlogcfg -l [-p ProductID [-g LogSet]] [-q]
vxlogcfg -r -p ProductID [-o OriginatorID] [-s keyname] [-q]
vxlogcfg -r -p ProductID [-g LogSet] [-s keyname] [-q]
vxlogcfg -v
```

UNIX システムでは、このコマンドのディレクトリパスは /usr/opensv/netbackup/bin/ です。

Windows システムでは、このコマンドのディレクトリパスは <install\_path>%NetBackup%bin% です。

## 機能説明

vxlogcfg コマンドは NetBackup の統合ログ機能のログの設定の変更を使用します。このコマンドによって、インストールおよびアンインストール時に製品のログ構成の登録または登録解除が行われます。

統合ログ機能では、ログファイルに次の共通の命名形式が使用されます。

```
productID-originatorID-hostID-date-rotation.log
```

統合ログ機能の命名形式およびオリジネータ ID については、『Symantec NetBackup トラブルシューティングガイド UNIX、Windows および Linux』を参照してください。

## オプション

このオプションは、製品のログ構成の登録または登録解除を指定します。すべてのディレクトリパスには、フルパス名を使用します。ディレクトリ名に空白が含まれる場合は、そのディレクトリのパス名を二重引用符で囲みます ("Program Files" ディレクトリなど)。

-a, --add

このオプションを指定すると、製品のログ構成の設定が登録または作成されます。既存のログ設定は上書きされます。このオプションを使用して、統合ログ機能を使用する製品をリストに追加しないでください。代わりに、このオプションは、統合ログ機能

の既存の設定を変更するただけに使用してください。詳しくは、例を参照してください。

-c, --config *ConfigPath*

このオプションでは、製品のログ構成設定の読み込み元の絶対パスを指定します。

**UNIX** システムでは、製品のログ構成ファイルへの絶対パスを使います (たとえば、`/opt/vrts/ProductA/log.conf`)。

**Windows** システムでは、製品のログ設定レジストリへのパスを使用します (たとえば、`¥¥SOFTWARE¥VERITAS¥PRODUCTA¥`)。

-d, --delete

このオプションを指定すると、製品用に構成されたオリジネータ ID がない場合に、メインログ構成ファイルから製品のログ構成設定が登録解除され、削除されます。対応する製品のログ構成ファイルも削除されます。

-g, --logset *LogSet*

指定した *LogSet* のログ構成設定を作成または修正します。*LogSet* はテキスト文字列 `Default` または `ALL` として指定されます。*LogSet* に `Default` を指定すると、`-s` の構成設定がデフォルト設定になります。*LogSet* に `ALL` を指定すると、`-s` の構成設定は、指定したプロダクト ID のすべてのオリジネータに適用されます。

-l, --list

次のいずれかが表示されます。

- 構成されたすべての製品。
- すべてのオリジネータ ID と *LogSet*
- プロダクト ID とオリジネータ ID のペアまたはプロダクト ID と *LogSet* のペアに定義されているすべての設定

-n, --names *Name*

製品の略称または短縮名が指定されます。複数の名前はカンマで区切ります。

-o, --orgid *OrgID*

指定したオリジネータ ID のログ構成設定が作成または修正されます。オリジネータ ID には有効なオリジネータ ID (番号)、テキスト文字列「`Default`」またはテキスト文字列「`ALL`」を指定できます。オリジネータ ID に `Default` を指定すると、`-s` の構成設定がデフォルト設定になります。オリジネータ ID に `ALL` を指定すると、`-s` の構成設定は、指定したプロダクト ID のすべてのオリジネータに適用されます。

-p, --prodid *ProductID*

このオプションを指定すると、*productID* のログ構成設定を作成または変更できます。

- q, --quiet**  
このオプションを指定すると、エラーメッセージまたは情報メッセージが表示されなくなります (抑止モード)。
- r, --remove**  
製品のログ構成ファイルから、指定された **OID** および製品用のログ構成設定が登録解除され、削除されます。個々の設定は "**-s, --setting keyname=value**" オプションを使用して削除できます。

---

**注意:** **-r** オプションは常に **-o** オプションと組み合わせて使用します。そのようにしないと、既存のすべての **NetBackup** ログ設定が削除され、その後 **NetBackup** のすべてのログが実行されなくなります。

---

- s, --setting keyname=value**  
**-a** (add オプション) を使って、個々の構成を設定できます。**keyname** は設定名、**value** はその設定の値です。コマンドラインで、複数の **-s keyname=value** 引数を使用できます。
- s, --setting keyname**  
このオプションを **-r** オプションと組み合わせて使用すると、構成設定が削除されます。**-r** オプションでは 1 つのキー名のみを使用します。複数の設定を削除するには、複数の **-s** オプションを指定します。特定のキーの名前については、「キーの名前および値」の項を参照してください。
- v, --version**  
このオプションを指定すると、このコマンドのバージョン情報が表示されます。

## キーの名前および値

次に、**-s** オプションで指定できるキーの名前および値を示します。**NetBackup** の場合は、**vxlogcfg** コマンドを実行すると、**UNIX** の `/usr/opensv/netbackup/nblog.conf` ファイルおよび **Windows** の `install_path¥NetBackup¥nblog.conf` にキーの名前および値が格納されます。**PBX** の場合は、**UNIX** の `/etc/vx/VxICS/icsul.conf` および **Windows** のレジストリエントリ `SOFTWARE¥VERITAS¥VxICS¥logcfg` にキーの名前および値が格納されます。

### UNIX および Windows のキーの名前および値

#### LogDirectory

ディレクトリへの絶対パスまたは相対パスを指定します。デフォルト値は存在しません。オリジネータ ID に相対パスを指定する場合は、ログ構成ファイルの **Default.LogDirectory** に指定されているプロダクト ID のログディレクトリの相対パスを指定します。



---

**注意:** LogDirectory キー名を使って統合ログを代替ディレクトリにリダイレクトする場合は、NetBackup サービスを停止してから再起動します。この操作によってリダイレクトが有効になります。

---

#### DebugLevel

デバッグログメッセージの詳細レベルを設定します。(デバッグログは、シマンテック社の技術者が使用します)。有効な値は、0 から 6 です。

#### DiagnosticLevel

診断ログメッセージの詳細レベルを設定します。(診断ログは、NetBackup の管理者およびユーザーが使用します)。有効な値は 0 から 6 です。0 (ゼロ) はデバッグメッセージがないことを意味します。

#### DynaReloadInSec

デバッグおよび診断設定が動的に再ロードされます。0 から 60 までの整数を指定した場合は、60 秒後に再ロードされます。60 を超える整数を指定した場合は、指定した秒数で再ロードされます。

#### LogToStdout

すべてのログメッセージが、標準出力 (デフォルトでは端末) とログファイルに送信されます。有効な値は、true および false (デフォルト値) です。

#### LogToStderr

アプリケーションログメッセージが、Stderr (デフォルトでは端末) とログファイルに送信されます。有効な値は、true および false (デフォルト値) です。

#### LogToOslog

アプリケーションログメッセージをオペレーティングシステムのログ (UNIX の場合は syslog、Windows の場合はイベントログ) に送信します。有効な値は、true および false (デフォルト値) です。

#### RolloverMode

ログファイルをロールオーバータイミングを指定します。ログファイルを切り替えると、現在のログファイルが閉じて、新しいログファイルが開きます。これによって、保持するログファイルのサイズを小さくして、古いログファイルを削除またはアーカイブすることができます。有効な値は、FileSize、LocalTime、Periodic、FileSize | LocalTime、FileSize | Periodic、None です。

FileSize を指定すると、MaxLogFileSizeKB で設定したサイズに達したときにログファイルが切り替えられます。デフォルト値は、FileSize です。

LocalTime を指定すると、日に 1 回、RolloverAtLocalTime で指定した時間にログファイルをロールオーバーします。

Periodic を指定すると、RolloverAtLocalTim で指定した秒数が経過したときにログファイルをロールオーバーします。

`FileSize` | `LocalTime` を指定すると、`FileSize` または `LocalTime` のいずれかの値に達したときにログファイルが切り替えられます。

`FileSize` | `Periodic` を指定すると、`FileSize` または `Periodic` のいずれかの値に達したときにログファイルが切り替えられます。

`None` を指定すると、ログファイルはロールオーバーされません。

#### MaxLogFileSizeKB

`RolloverMode` に `FileSize` を設定した場合に、ログファイルが切り替えられる時刻を指定します。有効な値は 1 から 4294967295 です。デフォルト値は 51200 (51.2 MB) です。

#### RolloverPeriodInSeconds

`RolloverMode` に `Periodic` を設定した場合に、ログファイルがロールオーバーされるまでの時間を秒数で指定します。有効な値は 1 から 2147483648 です。デフォルト値は 43200 (12 時間) です。

#### RolloverAtLocalTime

`RolloverMode` に `LocalTime` を設定した場合に、ログファイルがロールオーバーされる時刻を指定します。有効な値は 00:00 から 23:59 です。デフォルト値は 00:00 (ローカル時間の午前 0 時) です。

#### NumberOfLogFiles

統合ログ機能の各オリジネータのログディレクトリ内に保持するファイルの最大数を指定します。有効な値は、1 から 4294967295 です。

`vxlogmgr --auto` コマンドでは、`NumberOfLogFiles` を使用して、削除または移動するログファイルの数を決定します。最も古いファイルから削除または移動されます。たとえば、ログディレクトリに、特定のオリジネータによって作成されたログファイルが 7 個含まれているとします。`NumberOfLogFiles` は 5 に設定されています。この場合、`vxlogmgr --auto --del` コマンドを実行すると、そのオリジネータによって作成されたファイルのうち、最も古いファイルが 2 個削除されます。

#### LogRecycle

有効な値は、`true` および `false` です。デフォルト値は `false` です。`true` を設定した場合には、ログファイルの数は `NumberOfLogFiles` を超えません。

#### OIDNames

`-o` オプションで指定した統合ログ機能のオリジネータの代替名を 1 つ以上指定します。これらの名前は、`vxlogview` コマンドを使用した検索の実行時に、オリジネータ ID の代わりとして使用できます。各名前は、最大 80 文字で指定できます。複数の名前を、空白で区切って指定できます。

#### L10nLib

外部ローカライゼーションライブラリの絶対パスおよびファイル名を指定します。このオプションはシマンテック社内でのみ使用されます。このオプションを使用すると、統合ログ機能が無効になる場合があります。

#### L10nResource

統合ログ機能を使用する製品またはオリジネータに関連付けるローカライゼーションリソースの名前を指定します。このオプションは内部でのみ使用されます。このオプションを使用すると、統合ログ機能が無効になる場合があります。

#### L10nResourceDir

統合ログ機能を使用する製品またはオリジネータに関連付けるローカライゼーションリソースディレクトリの名前を指定します。このオプションは内部でのみ使用されます。このオプションを使用すると、統合ログ機能が無効になる場合があります。

次の 4 つのキー名は UNIX システムでのみ動作します。

#### LogFilePermissions

UNIX ファイルの権限を 8 進数で指定します。この権限は、**-o** オプションで指定したオリジネータによって作成されたログファイルに割り当てられます。多くの場合、このオプションを使用する必要はありません。

#### SyslogIdent

LogToOslog を **true** に設定した場合に、各 **syslog** メッセージの最初に付加する文字列を指定します。SyslogIdent には最大 80 文字の文字列を指定できます。多くの場合、このオプションを使用する必要はありません。

#### SyslogOpt

**syslog openlog** 関数に渡される **syslog** オプションの値を指定します。LogToOslog が有効な場合には、ログメッセージを UNIX の **syslog** に送信します。有効な値は 0 から 4294967295 です。多くの場合、このオプションを使用する必要はありません。

#### SyslogFacility

**syslog** に送信されたログメッセージに関連付ける **syslog** 機能値を指定します。LogToSyslog が有効な場合には、ログメッセージを **syslog** に送信します。多くの場合、このオプションを使用する必要はありません。

次に、有効な値を示します。LOG\_KERN、LOG\_USER、LOG\_MAIL、LOG\_DAEMON、LOG\_AUTH、LOG\_LPR、LOG\_NEWS、LOG\_UUCP、LOG\_CRON、LOG\_LOCAL0、LOG\_LOCAL1、LOG\_LOCAL2、LOG\_LOCAL3、LOG\_LOCAL4、LOG\_LOCAL5、LOG\_LOCAL6、LOG\_LOCAL7。デフォルトは LOG\_USER です。

次の 3 つのキー名は Windows システムでのみ動作します。

**NtEventLogCategory**

LogToOslog が有効な場合に、**Windows** のイベントログに送信するログメッセージに関連付けるカテゴリ番号を指定します。多くの場合、このオプションを使用する必要はありません。

**LogFileSDDL**

**Windows** セキュリティ記述子定義言語 (SDDL) 文字列を指定します。この文字列は、**-o** オプションで指定したオリジネータによって作成されたログファイルのアクセス制御リスト (ACL) を設定します。多くの場合、このオプションを使用する必要はありません。

**NtEventLogSourceName**

**Windows** で LogToOslog オプションが有効な場合に、ログメッセージを送信する **Windows** イベントログを指定します。このオプションは、内部だけで使用されます。このオプションを使用すると、統合ログ機能が無効になる場合があります。

## 例

**例 1 - UNIX で NetBackup の LogDirectory およびオリジネータ ID 111 を設定します。**

```
vxlogcfg -a --prodid 51216 --orgid 111 -s
LogDirectory=/usr/opensv/logs
```

**例 2 - NetBackup 内の統合ログ機能を使用しているすべてのオリジネータに DebugLevel および DiagnosticLevel を設定します。**

```
vxlogcfg -a --prodid 51216 -o ALL -s DebugLevel=3 -s
DiagnosticLevel=3
```

**例 3 - プロダクト ID 1 にデフォルトの RolloverMode を設定します。**

```
vxlogcfg -a --prodid 1 -o Default -s RolloverMode=FileSize
```

**例 4 - プロダクト ID 1 のオリジネータ 2 の構成設定を表示します。**

```
vxlogcfg -l --prodid 1 --orgid 2
```

**例 5 - プロダクト ID 1 に構成されたすべてのオリジネータをリスト表示します。**

```
vxlogcfg -l --prodid 1
```

**例 6 - すべての構成された製品をリスト表示します。**

```
vxlogcfg -l
```

## ファイル

UNIX システムの場合:

```
/usr/opensv/netbackup/nblog.conf
/etc/vx/VxICS/icsul.conf
```

## 関連項目

p.822 の [vxlogmgr](#) を参照してください。

p.827 の [vxlogview](#) を参照してください。

# vxlogmgr

vxlogmgr – 統合ログ機能をサポートする製品によって生成されたログファイルの管理

## 概要

```
vxlogmgr { -c | -m } -f AbsoluteDir [-a]
vxlogmgr { -d | -F } [-a]
vxlogmgr {-c | -m | -A filename} -f AbsoluteDir [-p ProductID] [-o
OriginatorID] [-n Days] [-t Time] [-b StartDate] [-g LogSet] [-e
EndDate] [-q] [-z]
vxlogmgr {-c | -m | -A filename} -f AbsoluteDir -w QueryString [-q]
[-z]
vxlogmgr {-d | -F | -s} [-p ProductID] [-o OriginatorID] [-n Days]
[-t Time] [-b StartDate] [-g LogSet] [-e EndDate] [-q] [-z]
vxlogmgr {-d | -F | -s} -w QueryString [-q] [-z]
vxlogmgr -v
```

UNIX システムでは、このコマンドのディレクトリパスは /usr/opensv/netbackup/bin/ です。

Windows システムでは、このコマンドのディレクトリパスは <install\_path>%NetBackup%bin% です。

## 機能説明

vxlogmgr ユーティリティを実行すると、統合ログ機能に対応するアプリケーションによって生成されたログファイルを管理できます。ログファイルの管理には、ログ管理構成設定に基づいたログファイルの削除、移動などの操作が含まれます。

統合ログ機能では、ログファイルに次の共通の命名形式が使用されます。

```
productID-originatorID-hostID-date-rotation.log
```

統合ログ機能の命名形式およびオリジネータ ID については、『Symantec NetBackup トラブルシューティングガイド UNIX、Windows および Linux』を参照してください。

## オプション

このオプションでは、実行するログ管理操作を指定します。

-A, --arch FileName

このオプションを指定すると、指定された一連の条件で **FileName** という名前のアーカイブが作成されます。Windows での zip ファイルの圧縮では、WinZip および

**wzzip** を使用して **zip** ファイルを生成する必要があります。UNIX では、**tar** コーティライオおよび **GnuZip** を使用して、**tar.gzip** ファイルを生成する必要があります。

-a, --auto

このオプションを指定すると、**NumberOfLogFiles** の個々の構成設定に基づいてログファイルを取得できます。指定した操作の種類 (移動、コピー、削除など) に基づいて、処理が行われます。-a オプションを指定する場合、他のオプションは使用できません。

-b, --startdate '*StartDate*'

このオプションを指定すると、指定した開始日付に作成されたログファイルを管理できます。

**NetBackup** コマンドの日付の値に求められる形式は、使用しているロケールによって異なります。/user/openv/msg/.conf ファイル (UNIX) と *install\_path*\%VERITAS%\msg\%LC.CONF ファイル (Windows) はそれぞれのサポート対象ロケールの日時形式などの情報を含んでいます。これらのファイルには、サポートされているロケールおよび書式のリストを追加および変更するための、具体的な方法が含まれています。

詳しくは、『**Symantec NetBackup 管理者ガイド Vol. 2**』の **NetBackup** インストールのロケールの指定に関する項を参照してください。

UNIX の場合は一重引用符で、Windows の場合は二重引用符で囲みます。次に例を示します。

UNIX の場合: --startdate '1/1/2013 12:00:00 AM'

Windows の場合: --startdate "1/1/2013 12:00:00 AM"

-c, --cp

このオプションを指定すると、製品によって構成されたフォルダから指定フォルダにログファイルがコピーされます。

-d, --del

このオプションを指定すると、製品によって構成されたフォルダからログファイルが削除されます。

-e, --enddate '*EndDate*'

指定した **EndDate** までに作成されたログファイルが管理されます。

**NetBackup** コマンドの日時の値に求められる形式は、使用しているロケールによって異なります。/user/openv/msg/.conf ファイル (UNIX) と *install\_path*\%VERITAS%\msg\%LC.CONF ファイル (Windows) はそれぞれのサポート対象ロケールの日時形式などの情報を含んでいます。これらのファイルには、サポートされているロケールおよび書式のリストを追加および変更するための、具体的な方法が含まれています。

詳しくは、『Symantec NetBackup 管理者ガイド Vol. 2』の NetBackup インストールのロケールの指定に関する項を参照してください。

このオプションは、UNIX の場合は一重引用符で、Windows の場合は二重引用符で囲む必要があります。

UNIX の場合: `--enddate '1/1/2013 12:00:00 PM'`

Windows の場合: `--startdate "1/1/2013 12:00:00 AM"`

`-f, --dir AbsoluteDir`

このオプションを指定すると、ログファイルのコピー先となるディレクトリの絶対パス名を指定できます。

UNIX システムの場合、ログはコピーではなくハードリンクで作成されるため、このディレクトリは `/opt/opensv/netbackup/logs` ディレクトリと同じデバイスに存在する必要があります。

このオプションは、`-c` オプションと組み合わせた場合にだけ有効です。

`-F, --flush`

このオプションを指定すると、このコマンドが実行されているホストのログファイルが、最新のログファイルを除いてすべて削除されます。このコマンドが実行されているホストで共有ディレクトリを使用している場合は、同じディレクトリを使用するすべてのホストのログファイルがすべて削除されます。`flush` コマンドが実行されているホストの最新のファイルのみが保存されます。

`-m, --mv`

このオプションを指定すると、製品によって構成されたフォルダから指定フォルダにログファイルが移動されます。

`-n --days NumberOfDays`

このオプションを指定すると、指定した操作について `NumberOfDays` で指定された過去の日数内に作成されたログファイルを管理できます。

`-o, --origid OriginatorID`

このオプションを指定すると、指定したオリジネータ ID (`OriginatorID`) によって識別されるログファイルを管理できます。

`-p, --prodid ProductID`

このオプションを指定すると、指定した操作について、指定したプロダクト ID (`ProductID`) によって識別されるログファイルを管理できます。識別子の代わりに、製品名を指定することもできます。

`-q, --quiet`

メッセージが表示されないようにします (クワイエットモード)。

`-s, --vw`

このオプションを指定すると、指定された問い合わせのログファイルが表示されます。



- t, --tail *hh:mm:ss*  
このオプションを指定すると、**hh:mm:ss** で指定された過去の時間内のログファイルを管理できます。
- v, --version  
このオプションを指定すると、このコマンドのバージョン情報が表示されます。
- w, --where *QueryString*  
このオプションを指定すると、問い合わせ文字列または条件 (**QueryString**) に基づいてログの一部が検索されます。
- z, --displaytimezone  
このオプションを指定すると、ログファイルの表示とともにタイムゾーン情報が表示されます。

## 終了状態

次の終了値が戻されます。

0 正常に完了しました。

-1 エラーが発生しました。

## 問い合わせ文字列

問い合わせ文字列は、データベースの **WHERE** 句と同様のテキスト表現です。この文字列を使用して、統合ログ機能を使用するシステムからログエントリを検索します。式は、関係演算子、整数型定数、文字列型定数と、単一の値に評価される複数のログフィールド名の組み合わせです。グループ式には、**AND** や **OR** などの論理演算子を使用しません。

サポートされる関係演算子は、次のとおりです。

< より小さい

> より大きい

<= 以下

>= 以上

= 等しい

!= 等しくない

サポートされる論理演算子には、**&&** (論理 **AND**)、**||** (論理 **OR**) などがあります。

定義済みのログフィールドは、次のとおりです。

**PRODIG** プロダクト ID (整数または文字列)

**ORGID** オリジネータ ID (整数または文字列)

STDATE ロケール固有の開始日付 (LONG 型整数または文字列 ('mm/dd/yy'))

ENDATE ロケール固有の終了日付 (LONG 型整数または文字列 ('mm/dd/yy'))

PREVTIME 前回の時間 (文字列 (hh:mm:ss))

## 例

例 1 - NetBackup によって作成された古いログファイルを /tmp/nblogs フォルダに自動的に移動します。--auto オプションは、NumberOfLogFiles 構成設定によって異なります。

```
vxlogmgr -m --auto --dir /tmp/nblogs
```

例 2 - NetBackup によって作成された過去 15 日間のログファイルを削除します。

```
vxlogmgr -d --prodid NB -n 15
```

例 3 - NetBackup によって 2012 年 1 月 22 日以降に作成されたログファイルをコピーします。

```
vxlogmgr -c --where "(prodid = NB) && (stddate >= '01/22/12')"
```

```
UNIX systems: --dir /usr/opensv/logs
```

```
Windows systems: --dir c:¥temp¥logfiles
```

例 4 - 2011 年 10 月 10 日以降 2011 年 10 月 28 日以前にプロダクト ID 100 により作成されたログファイルをコピーします。

```
vxlogmgr -c --where "(PRODID == 100) && ((STDATE >= '10/10/11'))"
```

```
UNIX systems: && (ENDATE <= '10/28/11'))" --dir
/usr/opensv/logs
```

```
Windows systems: && (ENDATE <= '10/28/11'))" --dir c:¥temp¥logfiles
```

## 関連項目

p.814 の [vxlogcfg](#) を参照してください。

p.827 の [vxlogview](#) を参照してください。

# vxlogview

vxlogview - 統合ログ機能を使用するコンポーネントによって生成されたログの表示

## 概要

```
vxlogview[-A] [-b StartDate] [-e EndDate] [-D] [-G Directory] [-g
LogSet] [-I] [-i FileID] [-K HostName] [-L SeverityLevel] [-m Entity]
[-N LevelMsgTypes] [-n NumberofDays] [-o OriginatorID] [-P ProcessID]
[-p ProductID] [-r Result] [-s Subject] [-T ThreadID] [-t hh:mm:ss]
[-X ContextToken] [-y]
vxlogview -a [-p ProductID] {[-d DisplayOption,...]} [-R
ResourceDirectory] [-z TimeZone] [-l Locale]}
vxlogview -q QueryName -f FileName {[-d DisplayOption,...]} [-R
ResourceDirectory] [-z TimeZone] [-l Locale]}
vxlogview -p ProductID -g LogSet | -i FileID {[-d DisplayOption,...]}
[-R ResourceDirectory] [-z TimeZone] [-l Locale]}
vxlogview -p ProductID -w queryString {[-d DisplayOption,...]} [-R
ResourceDirectory] [-z TimeZone] [-l Locale]}
vxlogview -v
UNIX システムでは、このコマンドのディレクトリパスは /usr/opensv/netbackup/bin/ です。
Windows システムでは、このコマンドのディレクトリパスは
<install_path>%NetBackup%bin% です。
```

## 機能説明

vxlogview ユーティリティでは、統合ログ機能によって生成されたログを参照できます。コマンドラインオプションに検索条件を指定して、特定のログを表示できます。

統合ログ機能では、ログファイルに次の共通の命名形式が使用されます。

```
productID-originatorID-hostID-date-rotation.log
```

統合ログ機能の命名形式およびオリジネータ ID については、『Symantec NetBackup トラブルシューティングガイド UNIX、Windows および Linux』を参照してください。

## オプション

このオプションでは、表示するログを指定します。

- A, --audit  
監査メッセージを表示します。
- a, --all  
このオプションを指定すると、複数のシマンテック製品によって生成されたログファイルのすべてのログメッセージが表示されます。
- b, --startdate *StartDate*  
指定した開始日時に記録されたメッセージを表示します。
- NetBackup** コマンドの日付の値に求められる形式は、使用しているロケールによって異なります。/user/openv/msg/.conf ファイル (**UNIX**) と *install\_path*\%VERITAS%\msg\LC.CONF ファイル (**Windows**) はそれぞれのサポート対象ロケールの日時形式などの情報を含んでいます。これらのファイルには、サポートされているロケールおよび書式のリストを追加および変更するための、具体的な方法が含まれています。
- 詳しくは、『**Symantec NetBackup 管理者ガイド Vol. 2**』の **NetBackup** インストールのロケールの指定に関する項を参照してください。
- 日付は、**UNIX** の場合は一重引用符で、**Windows** の場合は二重引用符で囲みます。次に例を示します。
- ```
-b '1/1/2013 12:00:00 AM'
```
- b オプションを指定しない場合は、ログファイルの最初から指定した終了時刻までに記録されたメッセージが表示されます (-e オプションを参照)。
- D, --debug
このオプションを指定すると、デバッグログメッセージが表示されます。
- d, --display *DisplayOption*, ...
指定したメッセージフィールドを表示します。複数の *DisplayOptions* はカンマで区切ります。
- DisplayOption* には、次の 1 つ以上を指定できます。
- D - 日付を表示します。
 - T - タイムスタンプを表示します。
 - m - メッセージタイプを表示します。
 - p - プロセス ID を表示します。
 - t - スレッド ID を表示します。
 - P - プロダクト ID を表示します。
 - O - オリジネータ ID を表示します。
 - c - コンテキストトークンを表示します。

- s - アプリケーションログエントリの重大度を表示します。
- u - アプリケーションメッセージまたは診断メッセージの一意の ID を表示します。
- x - 実際のログメッセージテキストを表示します。
- w - 診断メッセージまたはデバッグメッセージのログの記録元を表示します。
- i - 製品の短縮名を表示します。
- o - オリジネータの短縮名を表示します。
- all - ログレコードのすべてのフィールドを表示します。

-d を指定しない場合は、デフォルトで次のフィールドが表示されます。

- 日付
- タイムスタンプ
- ログの記録元 (診断メッセージおよびデバッグメッセージの場合のみ)
- 重大度 (アプリケーションメッセージの場合のみ)
- UMI (アプリケーションメッセージおよび診断メッセージの場合のみ)
- メッセージテキスト

-e, --enddate *EndDate*

このオプションを指定すると、指定した終了日時までに記録されたメッセージが表示されます。

NetBackup コマンドの日付の値に求められる形式は、使用しているロケールによって異なります。/user/opensv/msg/.conf ファイル (**UNIX**) と

install_path\VERITAS\msg\LC.CONF ファイル (**Windows**) はそれぞれのサポート対象ロケールの日時形式などの情報を含んでいます。これらのファイルには、サポートされているロケールおよび書式のリストを追加および変更するための、具体的な方法が含まれています。

詳しくは、『Symantec NetBackup 管理者ガイド Vol. 2』の **NetBackup** インストールのロケールの指定に関する項を参照してください。

日付は、**UNIX** の場合は一重引用符で、**Windows** の場合は二重引用符で囲みます。次に例を示します。

```
--enddate '1/1/2013 12:00:00 PM'
```

-e オプションを指定しない場合には、vxlogview は指定した開始日時 (-b オプションを参照) からログファイルの最後までに記録されたメッセージを表示します。

-f, --filename *FileName*

1 つ以上のクエリーを含んでいるファイルのパスとファイル名を指定します。-q オプションとともに使用します。

- G, --logdir *Directory*
このオプションを指定すると、構成済みのログディレクトリの代わりに指定したディレクトリのログが表示されます。このディレクトリには絶対パスを指定する必要があります。
- g, --logset *LogSet*
指定した **LogSet** のログ構成設定が表示されます。
- I, --diag
このオプションを指定すると、診断ログメッセージが表示されます。
- i, --fileid *FileID*
指定したファイル ID または共有オリジネータ ID で記録されたメッセージを表示します。指定したプロセスによって作成されたログファイルだけが検索されます。検索するログファイルを制限することで、vxlogview の結果が速く戻されます。これに対して、vxlogview -o オプションは、指定したプロセスによって記録されたメッセージのすべての統合ログファイルを検索します。
- K, --hostname *HostName*
指定したホスト名で記録されたメッセージを表示します。
- L, --app -C | -E | -F | -M | -W
アプリケーションログメッセージを表示します。次のパラメータを -L とともに使うと、重大度を指定することができます。
 - C, --crit : アプリケーションの可用性に影響する可能性がある致命的エラーが発生しました。
アプリケーション全体には影響しないエラーが発生しました。
 - F, --info : 情報メッセージ。
 - M, --emerg : オペレーティングシステムのエラーまたは停止につながる可能性がある緊急事態が発生しています。
検出された問題に対する警告が出されています。
- l, --locale *Locale*
指定したロケールのメッセージを表示します。デフォルトは英語です。このオプションを指定しない場合、メッセージは現行のシステムロケールで表示されます。
- m, --who *Entity*
指定したエンティティメソッド名または機能名によって記録されたメッセージを表示します。
- N, --level *Level* -D | -I
指定したレベル (**Level**) のデバッグメッセージ (-D) または診断ログメッセージ (-I) が表示されます。

- n, --days *NumberOfDays*
このオプションを指定すると、**NumberOfDays**で指定された過去の日数内に記録されたメッセージが表示されます。
- o, --orgid *OriginatorID*
指定したオリジネータ ID によって記録されたメッセージが表示されます。オリジネータには、ID 番号または短縮名を使用できます。たとえば、**Policy Execution Manager** は nbpem またはオリジネータ ID 番号の **116** で指定できます。
- P, --pid *ProcessID*
指定したプロセス ID によって記録されたメッセージを表示します。
- p, --prodid *ProductID*
このオプションを指定すると、指定したプロダクト ID で識別される製品によって記録されたメッセージが表示されます。識別子の代わりに、製品の略称を指定することもできます。**NetBackup** のプロダクト ID は **51216** であり、**PBX** のプロダクト ID は **50936** です。
- R, --resdir *ResourceDirectory*
構成済みのローカライゼーションリソースディレクトリの代わりに指定したディレクトリのリソースを使います。
- r, --result *Result*
指定した結果に対応する監査メッセージを表示します。**Result** には、**0** または **1** のいずれかを指定します。
- S, --tailloop
指定したプロダクト ID とファイル ID の組み合わせで記録された新しいメッセージを連続的に表示します。コマンドラインの tailloop オプション (-S) では、プロダクト ID (-p *ProductID*) とファイル ID (-i *FileID*) を使用する必要があります。ファイル ID は、共有オリジネータ ID にすることも、他の ID とは共有されないオリジネータ ID にすることもできます。tailloop は、記録された最新の **10** のメッセージをコンソールに表示することによって開始されます。その後は新しいログメッセージが表示されます。ループは、Ctrl-C を使用していつでも停止できます。
- s, --subject *Subject*
このオプションを指定すると、指定した **Subject** を持つ監査メッセージが表示されます。
- T, --tid *ThreadID*
指定したスレッド ID によって記録されたメッセージが表示されます。
- t, --tail *hh:mm:ss*
最後の **hh:mm:ss** 期間のメッセージが表示されます。
- v, --version
このオプションを指定すると、このコマンドのバージョン情報が表示されます。

- w, --where *QueryString*
このオプションでは、WHERE 句を使用して、一部のメッセージのみ表示されるようにログメッセージを問い合わせます。*QueryString* について詳しくは、『Symantec NetBackup トラブルシューティングガイド』を参照してください。
- X, --ctx *ContextToken*
指定したコンテキストインスタンスに属するメッセージを表示します。コンテキストインスタンスは、コンテキストトークンによって識別されます。指定されたコンテキストトークンが「all」である場合は、すべてのコンテキスト名および関連するすべてのトークンが表示されます。
- y, --displayhost
ホスト名を、表示されたそれぞれのログメッセージと一緒に表示します。異なるホストから取得されたログファイルについて、各メッセージの取得元ホストを表示する必要がある場合は、このオプションを使用します。
- z, --timezone *GMT+hh:ss | GMT-hh:ss*
指定したタイムゾーンに合わせて調整された時刻でメッセージを表示します。

終了状態

次の終了値が戻されます。

- 0 -- 正常に完了しました。
- 1 -- エラーが発生しました。

問い合わせ文字列

問い合わせ文字列は、データベースの WHERE 句と同様のテキスト表現です。この文字列を使用して、統合ログ機能を使用するシステムからログエントリを検索します。式は、関係演算子、整数型定数、文字列型定数と、単一の値に評価される複数のログフィールド名の組み合わせです。グループ式には、AND や OR などの論理演算子を使用します。

サポートされる関係演算子は、次のとおりです。< (より小さい)、> (より大きい) <= (以下)、>= (以上)、= (等しい)、!= (等しくない)。

サポートされる論理演算子には、&& (論理 AND)、|| (論理 OR) などがあります。

定義済みのログフィールドは、すべて大文字またはすべて小文字にすることができます (例: PID | pid)。これらのフィールドは次の要素で構成されています。

CTXTOK -- コンテキストトークン (文字列)

ENDDATE -- ロケール固有の終了日付 (LONG 型整数または文字列)

FILEID -- 共有オリジネータ ID (整数)

HOSTNAME -- ソースホスト名 (引用符付き文字列)

LEVEL -- デバッグレベルと診断レベルデフォルトではすべて表示 (整数 0-6)

MSGTYPE -- 次の種類のメッセージがサポートされています。

DEBUG | debug

DIAG | diag

APP | app

AUDIT | audit

ORGID -- オリジネータ ID (整数または文字列)

PID -- プロセス識別子 (整数)

PREVTIME -- 前回の時間 (文字列 *hh:mm:ss*)

PRODID -- プロダクト ID (整数または文字列)

RETURNVAL -- 監査メッセージの結果フィールド (0 または 1)

SEV -- 重大度。次の種類の重大度がサポートされています。

INFO | info

WARNING | warning

ERR | err

CRIT | crit

EMERG | emerg

STDATE -- ロケール固有の開始日付 (LONG 型整数または文字列)

SUBJECT -- 監査メッセージの件名フィールド (文字列)

TID -- スレッド ID (整数)

WHO -- メッセージの記録元 (文字列)

例

次の例はUNIXの場合の例で、オプションの引数を一重引用符で囲んでいます。Windowsの場合は、二重引用符を使用して囲みます。

例 1 - インストールされているすべての製品のログメッセージを表示します。

```
# vxlogview -a
```

例 2 - PBX (プロダクト ID 50936) のログメッセージを表示します。管理者 (root) 権限を持つ認可済みユーザーである必要があります。日付、時刻、メッセージタイプおよびメッセージテキストのみが表示されます。

```
# vxlogview --prodid 50936 --display D,T,m,x
```

例 3 - 2010 年 11 月 18 日から 2010 年 11 月 21 日の間に記録された NetBackup のログメッセージを表示します。

```
# vxlogview --where "(prodid = 'NB') && (stddate >= '11/18/10 0:0:0 AM' && endate <= '11/21/10 10:12:00 AM')"
```

例 4 - 2013 年 1 月 3 日午前 11:00:00 以降に作成されたログメッセージを表示します。

```
# vxlogview -b '1/03/13 11:00:00 AM'
```

例 5 - 過去 1 時間以内に記録されたログメッセージを表示します。

```
# vxlogview --tail 1:00:00
```

例 6 - 結果が 0 である監査ログメッセージを表示します。

```
# vxlogview --audit -r 0
```

例 7 - 「job_context」インスタンスのコンテキストログメッセージを表示します。

```
# vxlogview --ctx 'jobid=4'
```

関連項目

p.814 の [vxlogcfg](#) を参照してください。

p.822 の [vxlogmgr](#) を参照してください。

W2KOption

W2KOption – Windows システムの通常のバックアップとリストア動作を変更するユーティリティプログラムを実行します

概要

```
W2KOption -backup -display [-server server_name] -system_state value  
| -kms_activated_server value | -snapshotprovidertype value |  
-ignore_unresolved_volumes volume[:volume...]  
W2KOption -display  
W2KOption -restore -display [-server server_name] same_hardware value  
| -mounted_devices value | -sysvol value | -hard_links value |  
-active_directory value | -system_state value  
このコマンドのディレクトリパスは <install_path>%NetBackup%bin% です。
```

機能説明

このコマンドは Windows システムでのみ動作します。

W2KOption ユーティリティでは通常のバックアップとリストア動作を変更できます。

オプション

-ad, active_directory value

Active Directory のリストアの仕方を制御します。デフォルトでは、**Active Directory** は正式な方法でリストアされます。**Active Directory** のリストアをキャッチアップ方式で実行する場合は、このユーティリティを使って動作を正式なリストアからキャッチアップリストアに変更します。

- 1 - 正式なリストアを実行します。これにより、既存の **Active Directory** オブジェクトがすべて置き換えられます。
- 4 - 正式でない(キャッチアップ)リストアを実行します。リストアは、ドメインの他のコントローラの変更とマージされます。

-b, -backup

バックアップオプションの 1 つ以上の値を変更できます。バックアップオプションは、**system_state**、**kms_activated_server**、**snapshotprovidertype**、**ignore_unresolved_volumes**。です。

-d, -display

プログラムの使用量を表示し、オプションがどのように動作するかを示します。

`-hl, -hard_links 0 | 1`

ハードリンクのリストアの仕方を制御します。デフォルトでは、ファイルがシステムに存在しない場合、**NetBackup** は現在のリストアの完了後にファイルのリストアを試みます。この処理をセカンダリリストアと呼びます。動作を変更してセカンダリリストアを停止することができます。

- 0 - セカンダリリストアを実行しません。
- 1 - セカンダリリストアを実行します。

`-iuv, -ignore_unresolved_volumes volume[:volume...]`

このオプションを指定すると、製品によって構成されたフォルダからログファイルが削除されます。

`-kas, -kms_activated_server 0 | 1`

NetBackup がバックアップ時にこのコンピュータを **Key Management Service (KMS)** が有効化されたホストとして扱うかどうかを指定します。

- 0 - ホストを **KMS** が有効化されたサーバーとして扱いません。
- 1 - ホストを **KMS** が有効化されたサーバーとして扱います。

`-md, -mounted_devices 0 | 1`

マウント済みのデバイスのレジストリキーをリストアするかどうかを決定します。

- 0 - マウント済みのデバイス構成をリストアします。
- 1 - マウント済みのデバイス構成をリストアしません。

`-r, -restore_options`

リストアオプションの 1 つ以上の値を変更できます。リストアオプションは `-same_hardware`、`-mounted_devices`、`-sysvol`、`-hard_links`、`-active_directory`、`-system_state` です。

`-sh, -same_hardware 0 | 1`

レジストリシステムハイクをリストアする方法を判断します。通常のリストア操作はすべてのレジストリ項目をリストアしません。ただし、同じハードウェアにリストアするときには、これらの項目をすべて安全にリストアできます。

- 0 - 異なるハードウェアを使用しているとみなします。レジストリ項目をすべてリストアしません。
- 1 - 同じハードウェアを使用しているとみなします。すべてのレジストリ項目をリストアします。

`-s, -server server_name`

ローカルコンピュータ以外のコンピュータのオプションを表示または設定します。デフォルトはローカルコンピュータです。

-sv, -sysvol 2 | 4

Active Directory SYSVOL のリストアの仕方を決定します。デフォルトでは、NetBackup はリストア対象の SYSVOL をプライマリバージョンとしてリストアします。この設定を、正式なバージョンから正式でないバージョンに変更できます。

- 2 - 正式でないバージョン。
- 4 - プライマリバージョン。

-spt, -snapshotprovidertype 0 | 1 | 2 | 3

スナップショットプロバイダの形式を選択します。

- 0 - 自動プロバイダ選択
- 1 - システムプロバイダを使う
- 2 - ソフトウェアプロバイダを使う
- 3 - ハードウェアプロバイダを使う

-ss, -system_state 0 | 1

通常の VSS システム状態方式を上書きし、レガシーシステム状態方式を使います。このオプションは Windows Server 2003 またはそれ以降を実行するサーバーにのみ適用されます。

- 0 - レガシーシステム状態のリストアを許可しません。
- 1 - レガシーシステム状態のリストアを許可します。

例

例 1 - バックアップ時にボリューム H、K、I を無視します。

```
W2KOption -backup -ignore_unresolved_volumes H:K:I:
```

例 2 - ホストを KMS が有効化されたサーバーとして扱います。

```
W2KOption -backup -kms_activated_server 1
```

A

acsd コマンド 19
ACS ライブラリ
 自動カートリッジシステム 20
add_media_server_on_clients コマンド 21
ASA データベースファイル 494

B

backupdbtrace コマンド 22
backuptrace コマンド 25
Bare Metal Restore (BMR)
 bmr 27
 bmrconfig 30
 bmrpadm 36
 bmrprep 39
 bmrs 42
 bmrsrtadm 45
bmrconfig コマンド 30
bmr 27
bmrpadm コマンド 36
bmrprep コマンド 39
bmrsrtadm コマンド 45
bmrs コマンド 42
BMR クライアントプログラム 27
BMR データベース 498
bp コマンド 46
bpadm コマンド 49
bparchive コマンド 50
bpbackupdb コマンド 64
bpbackup コマンド 56
bpctarc コマンド 65
bpclist コマンド 66
bpctres コマンド 69
bpctrm コマンド 70
bpcd コマンド 71
bpchangeprimary コマンド 73
bpclient コマンド 77
bpclimagelist コマンド 84
bpclntcmd コマンド 87
bpclusterutil コマンド 90
bpcompatd コマンド 94

bpconfig コマンド 97
bpdbjobs コマンド 107
bpdbm コマンド 119
bpdclone コマンド 122
bpdown 124
bpduplicate コマンド 125
bperror コマンド 134
bpexptime コマンド 143
bpfis 150
bpgetconfig コマンド 152
bpgetdebuglog コマンド 157
bpimagelist コマンド 163
bpimage コマンド 158
bpimedia コマンド 172
bpimport コマンド 184
bpinst コマンド
 鍵ファイルの再作成 195
 マニュアルページ 192
bpkeyfile コマンド 199
bpkeyutil コマンド 201
bplabel コマンド 203
bpplist コマンド 206
bpmedialist コマンド 218
bpmedia コマンド 214
bpminlicense コマンド 231
bpnbat コマンド 234
bpnbaz コマンド 242
bpficorr コマンド 257
bpplcatdrinfo コマンド 260
bpplclients コマンド 264
bppldelete コマンド 272
bpplinclude コマンド 274
bpplinfo コマンド 281
bppllist コマンド 296
bpplschedrep コマンド 318
bpplsched コマンド 301
bppolicynew 327
bpps 336, 340
bprd コマンド 341
bprecover コマンド 343
bprestore コマンド 346
bpschedulerep コマンド 369

bpschedule コマンド 361
 bpsetconfig コマンド 376
 bpstinfo コマンド 378
 bpstuadd コマンド 384
 bpstudel コマンド 394
 bpstulist コマンド 397
 bpsturep コマンド 404
 bptestbpcd コマンド 413
 bptestnetconn コマンド 417
 bptpcinfo コマンド 421
 bpup 426
 bpverify コマンド 427

C

cat_convert ユーティリティ 435
 cat_export ユーティリティ 441
 cat_import ユーティリティ 444
 configurePorts 446
 create_nbdb コマンド 448
 crypt_option オプション 193
 crypt_strength オプション 193

D

DES
 鍵
 bpkeyfile からの生成 199
 DES 暗号化鍵の生成 199
 duplicatetrace コマンド 451

E

Enterprise Media Manager 547

I

importtrace コマンド 455

J

jbpSA 459
 jnbSA 462

L

LEGACY_CRYPT オプション 192
 ltid コマンド 684
 ltid コマンド 465

M

Media Manager のコマンド
 acsd 19

N

nbauditreport コマンド 467
 nbcatsync コマンド 472
 NBCC 475
 NBCCR 480
 nbcertupdater コマンド 482
 nbcplogs コマンド 486
 nbdb_admin コマンド 490
 nbdb_backup コマンド 494
 nbdb_move コマンド 496
 nbdb_ping コマンド 498
 nbdb_restore コマンド 499
 nbdb_unload コマンド 501
 nbdc コマンド 506
 nbdecommission コマンド 509
 nbdelete コマンド 511
 nbdeployutil コマンド 515
 nbdevconfig コマンド 521
 nbdevquery コマンド 533
 nbdiscover コマンド 539
 nbdms_start_server コマンド 504
 nbdms_start_stop コマンド 505
 nbdna コマンド 543
 nbemmcmd コマンド 548
 nbemm コマンド 547
 nbevingest コマンド 565
 nbexecute コマンド 571
 nbfindfile コマンド 573
 nbfirescan コマンド 577
 nbftadm コマンド 578
 nbftconfig コマンド 579
 nbgetconfig コマンド 589
 nbhba コマンド 592
 nbholdutil コマンド 595
 nbindexutil コマンド 598
 nbjm コマンド 603
 nbkmsutil コマンド 604
 nboraadm コマンド 608
 nbpemreq コマンド 614
 nbpem コマンド 612
 nbplupgrade コマンド 622
 nbrbutil コマンド 626
 nbrb コマンド 625
 nbregopsc コマンド 631
 nbreplicate コマンド 633

nbrestorevm コマンド 636
 nbseccmd コマンド 647
 nbsetconfig コマンド 649
 nbsnapimport コマンド 651
 nbsnapreplicate コマンド 653
 nbstlutil コマンド 663
 nbstl コマンド 655
 nbsu コマンド 672
 nbsvgrp コマンド 678
 NetBackup Encryption 192
 レガシー暗号化 192
 NetBackup Policy Execution Manager 612
 NetBackup Policy Execution Manager の要求 614
 NetBackup Resource Broker 625~626
 NetBackup Vault 129
 NetBackup のアクセス管理 29、35
 NetBackup のトラブルシューティングコマンド
 backupdbtrace 22
 backuptrace 25

P

passphrase_prompt オプション 194
 passphrase_stdin オプション 194
 policy_encrypt オプション 194
 policy_names オプション 194

R

resilient_clients command 681
 restoretrace コマンド 682
 robtest 711

S

stoptid コマンド 684

T

tl4d コマンド 685
 tl8cd コマンド 687、691
 tl8d コマンド 687、691
 tldcd コマンド 699
 tidd コマンド 695、699
 tlhcd コマンド 703、707
 tlhd コマンド 703
 timd コマンド 711
 timtest 711
 tpautoconf コマンド 714
 tpclean コマンド 717
 tpconfig コマンド 720
 tpext コマンド 737

tpreq コマンド 738
 tpunmount コマンド 741

V

verifytrace コマンド 743
 vltadm コマンド 747
 vltcontainers コマンド 749
 vlteject コマンド 754
 vltinject コマンド 758
 vltoffsitemedia 760
 vltopmenu コマンド 764
 vltrun 766
 vmadd コマンド 771
 vmadm コマンド 774
 vmchange コマンド 776
 vmcheckxxx コマンド 783
 vmd コマンド 785
 vmdelete コマンド 788
 vmoprcmd コマンド 790
 vmphyinv コマンド 795
 vmpool コマンド 799
 vmquery コマンド 802
 vmrule コマンド 807
 vmupdate コマンド 810
 VMware または Hyper-V にポリシーをアップグレード 622
 vnetd コマンド 813
 vxlogcfg 814
 vxlogcfg コマンド 814
 vxlogmgr コマンド 822
 vxlogview コマンド 827

W

W2KOption コマンド 835

あ

インストール
 bpinst コマンドの使用 192
 インラインテープコピーオプション 129

か

鍵ファイル 195
 パスフレーズ 195
 構成
 暗号化
 bpinst コマンドの使用 192

さ

スクリプト

drive_mount_notify 738

た

デバイスアロケータ 547

統合ログ

vxlogmgr 822、835

vxlogview 827

統合ログ機能 814

は

パスフレーズ 195

ま

メディア件数レポート 221

メディアの概略レポート 220

メディアの内容レポート 220

メディアリストレポート 218

ら

ライセンス

bpmlicense を使用した管理 231